
IS ~ ほんとはただ寝たいだけ ~

真暇 日間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〜ほんとはただ寝たいだけ〜

【Nコード】

N2808U

【作者名】

真暇 日間

【あらすじ】

眠たがりな割に有能だった主人公が神のミスで死亡。

そのお詫びにチート付きで転生を果たすが、なぜか望んだもの以上が来た。けれどこの状況は全然望んでないんだけどな。

……まあいい、寝るか。お休みなさい。

プロローグ、あるいは希望

俺は死んだ。いきなりなんだと言われるかもしれないが一応聞いておいてほしい。話半分でも全く構わないしな。

名前は桜道なぐさみち和哉わいか。高校を卒業したばかりの新大学生だった。ついでに浅く広いオタク知識を持つてはいるが、浅いために回りのオタクたちの話にはついていけない気がしない。その程度だ。

で、簡単に死因を言うと、なぜか上空から豆腐が落ちてきて頭に直撃。高所から海に叩き付けられると人の体など簡単に粉々になってしまうことはよく知っていると思う。

つまり、本当に豆腐の角に頭をぶつけて死んだわけだな。そして死んでいるのに何故こうして考え事ができているのかと言うと、目の前にいる爺さんが原因らしい。まあ、よくあるミスで殺してしまいました、ってやつかね？

「その通りじゃ。本来ならあれで死ぬものなどおらんはずじゃった……と言うか、あれ事態が起きなかつたはずのことなんじゃ」

へー。

……で、おわびに転生させてくれるとか？

「うむ、その通りじゃ。チート能力も……まあ、儂程度ではたいした能力は与えられんが、一応用意しよう」

……へー。

たいした能力じゃないチート、ねえ……結構ムズクね？ 別に

いいけど。
幾つまでとか制限はある？

「……最大で五つまで。それいかならばいくつでも構わん」

へー。大抵三つなんだけど、太っ腹。

……じゃあ、ネギま！に出た、俺の思う千の顔を持つ英雄と、千の顔を持つ英雄を自由自在に操ることができる身体能力。後は……
そうだな。リリカルなのはに出てきた戦闘機人の五番目、チンクのISのランブルデトネイターでも貰おうか。後は………幸運Bくらいと健康で。

「……欲の無い奴じゃのお………普通は無限の剣製とか王の財宝、最近じゃと大嘘憑きなんかを頼む者が多いんじゃないが………」

へー。それってチートすぎだろどう考えても。できれば逃げ切る程度の能力とかもあればいいけど、それも使い方ではかなりチートだしなあ………。

で、これはできるのか？

「楽にの。………困ったのう。用意しておいたスロットの半分も使われてないわい」

へー。なんかそれ困るのか？

「儂はの。………なら、後は儂が適当に関連するものを詰め合わせておくわい。副作用のありそうなものは入れないでおくからの」

へー。そいつはありがたい。

「……最後に、これからお主が転生する世界を選ぶのかの。ほれ、籤を引くがよい」

へー、籤式なんだな。何でもいいけど。

……ああそつだ。悪いんだけど、俺の性別男でお願い。転生で転性なんて洒落にもならん。

「構わんよ。どうせがらがらのスロットの空きがほんの少し埋まるだけじゃしの」

へー。そんだけなんだ。ありがとさん。

……どこに行くのかね？

引いた籤を開いて、そこにかいてある文字を読む。

IS インフィニット・ストラトス

へー、ISか。……よし、原作に関わらない場所で静かに生きていこう。趣味の昼寝っつてか睡眠できるだろうし、俺はISの才能は望んでないから動かせるなんてこともないだろう。ガンダールヴとか選んでたら動かせて大変なことになんだろうけど、俺には関係ないね。

一日十五時間睡眠を目指すぜ！

「……ふむ。成程。……それでは、達者での」

爺さんがそう言つと、急に眠くなつてきたのでそれに逆らわず意識を落とした。

……おやすみんさい……。

「……約束じゃし、能力をつけてやらんどの。オンオフスイッチもサービスしてやるとしよう。……む？ ちんくと言つのはどれじゃ？ ……ええい、纏めてつけてしまえばよかる。千の顔を持つ英雄とやらは……これか。たしかあの者の思う千の顔を持つ英雄とは……こうか。で、身体能力じゃったの。……気は身体能力に入るんじゃろうか？ ……入れておけば文句はあるまい。使い手のこの男ほどあればいいじゃろ」

こうして桜道和解は、神の手によってどんどんと魔改造されて行くのだった。

転生直後、別名絶望モドキ（前書き）

なんだかネタが湧いてきたので、書き出してみました。
せめて東方を終わらせてからのほうが良かったですね。

転生直後、別名絶望モドキ

俺は転生した。転生前の名前は桜道一哉。哉の字が書きにくくて小学生の頃習字の時間に両親に文句を言いまくった。矢とか也でいいじゃん！と叫んだのも五回や十回どころではない。

まあ、そんなことは割とどうでもいい。で、俺はIS世界によく似たところに転生した訳なんだが……………。

とりあえず、俺の当初の計画を話そう。

計画といっても簡単だ。何故なら方向と目的位しか決めてないからな。

俺の計画。それは、どうせこの世界の中心は織斑一夏。そして俺はISに乗る才能を欲しいとは思っていなかったし、神にも頼んでいなかった。

よって俺がISを動かせるわけもなく、あとは適当に働いて自堕落に暮らして、最終目的は一日十五時間、惰眠を貪って生きて行くことだ！

どんどんどん、ぱぷ。

……………しかし、ここで俺の計画に狂いが生じた。

まず初めの誤算は、あの神があまりにもアバウトに能力をつっこみまくってくれたお陰で、明らかに人類の範疇を越えた身体能力と特殊能力を持ってしまっていること。インヒューレントスキル全部ならんざ頼んでねえや。

そしてもう一つは……………

「一夏？ どうしたのかしら……？」

……俺が織斑一夏だって事だ。

畜生。ハーレムもモテモテ成分もいらねえから睡眠時間をくれ。

……もういいや。諦めた。こうなったらこのまま寝てやる。目指すは変わらず一日十五時間睡眠だ。ちー姉さんが怖いが、なんとかやりとげて見せるぜ………！
何事もなくこの世界で俺の命が終わることを願って！

結論 無理っばい。

ちー姉さんがブラコン。これはまあいい。ってか、もういい、諦めた。

母さん達がなんか両親揃って裏の組織の人間っばい。失踪した理由がわかったような気もしたが、これもまあいい。ぶっちゃけ割とどうでもいい。

………何でちー姉さんはあんな人格破綻者と友人関係になれたのかがわかんない。あの人あれだよ？ 俺の事実験動物か何かを見るような目で見てたよ？ 超怖いんだけど？ これよくないよ？ 全く何もよくないよ。極めつけに、なんか俺、両親が所属していた組織に狙われているっばい。しかも人質として。これもよくない。確実に睡眠時間が減る。

………で、その追っ手から俺とちー姉さんを逃がすために、両親は『家族全員で』旅行に行つて、その先で事故にあつて来るそうだ。俺を抱きながらそういう話するのはマジやめてほしい。夢見が悪くなるから。あとなんか涙が止まなくなるから。

ついでに、決行は俺が物心がつく五歳になるくらいだそう。ちなみにこの事を知っているのは、恐らく俺と両親だけ。ちー姉さんには言えんだろお……俺にも言う気は無かったんだろうけど。

何が琴線に触れたのか、あのいかれマッドなクレイジー博士がいきなり俺に優しくなった。原作一夏と違って俺にはたいしたフラグ製造能力は無いはずなんだがなあ？

ちなみに、この人は確実にしたくない演技はしないしできないタイプなので、本当になぜか俺を気に入ったらしい。なんでかね？

まあ、何でもかまいやしないがね。俺は寝るよ。ちー姉さんに抱かれながら。

最近抱き癖がついたけれど、特に問題はないよな？

…。
桜道と哉改め、織斑一夏だ。ちなみに今年で三歳になったんだが…

が や り や

つ
た
。

いや、俺の両親が、いきなり手紙残して蒸発したんだよ。いつかはわからんが近いうちにイギリス辺りで電車事故を起こして死ににくはずだ。年単位で時間は変わるかもしれないが。確か人を雇って電車を横転させ、事故にしか見えないように多くの人間を巻き込んで云々と言っていたはずだが……巻き込まれる者に、わずかばかり黙禱を捧げよう。

……。
……。
……すかー……寝た。

小学校時代、もしくは白騎士事件前

織斑一夏……ところで、織斑一夏の織斑って『おりむら』って読み難いよな？ IS本編で織斑一夏の紹介の時、『へー、これで『おりむら』って読むのか』って感心した覚えがあるぜ俺は。

ちなみに今、俺とちー姉さんの織斑一家は、束姉さんたばねえの家に厄介になっている。ほんと、頭が上がらないよ全く。代わりに寝るけど。

まあ、そんなことは割とどうでもいい。何でこんなことを言い始めたかと言うと、小学校に入学してすぐの自己紹介タイムだからだ。

「大半の方は初めまして、数名はお久し振り、約一名にはやつほー、織斑一夏です。好きなことは寝ること、嫌いなことは騒がれること、特技は特に無し、趣味は寝るのにちょうど良い場所を探すこと、ついでにゲーム。よろしくお願いします、そしてお休みなさい」

ガタンと着席し、同時に寝る体勢に入る。三秒後には夢の世界へ……。

目が覚めると、なぜかののちゃんが腕の中に居た。騒いでいたらしく寝惚けた俺に口を塞がれている。周りでいろんな奴が騒いでいるけども、どうでも良いわな。

「なんだ、お前そいつの事好きなのかよー！」

「好きで悪いのか？ ならお前たちは親の事が好きじゃないのか？」

子供の言うことだと思つてさらりと流す。ののちゃんが腕のなかで暴れようとしているが、とりあえず黙らせて耳元で囁く。

(悪いんだけど、こいつらに調子に乗らせたくないから今だけ付き合つてくれね？ あとでいくらでもボコられるからさ)

そう言つたら、不満そうではあつたかおとなしくなつてくれた。ものわかりの良い子でよかつたよかつた。

まだなんか言つてきている餓鬼を適当にあしらいながら、ののちゃんを抱き締めるのを辞めないでいる。俺も子供だからわかりづらいつちやわかりづらいんだが、やっぱ温かい。それにやわっこくて感触が良い。

結婚しろとか言つてくる餓鬼に

「へー。好きなら結婚するんだ？ じゃあお前お母さんと結婚したら？」

とか言いまくつて、ひたすらのりくらりと避け続ける。

ちなみに授業の時はちゃんと放した。そして俺は授業の時も寝るために、教科書を丸暗記して寝ながら先生の問いに答えたり教科書を読み上げたりしている。先生が熱血じゃなくなつて助かつた。

side 篠ノ之 篇

一夏は学校でも眠っている。授業中でもお構いなしに眠っている。先生が指してどこかの問題を答えさせようとしても、一夏は眠つた

まま答えている。しかも、正解で。

一夏はいつもそうだ。簡単なことなら眠ったままやるし、難しいことでも眠そうにしたまま終わらせる。

私との試合だって、一夏は半分くらい眠ったまま私の竹刀を受け止め、叩き落とし、眠ったまま面を入れられる。

声を出さないから一本を取られたことはないけれど、私が一本を取る時はいつも試合の時間が終わりそうなきだけ。それも、明らかにわざと。

前にその事を抗議しに行ったのだが、一夏はそのときも眠ったまま答えた。

『なら、眠くならないくらい強くなってくれ。期待してる』

……これを聞いて、私は正直に言ってイラッと来た。つまり一夏は、私じゃあ弱すぎてつまらないから眠っていると知っている訳なんだから。

だから私は決めた。絶対に、一夏を越えて見せると。そして、いつかしっかりと起きたままの一夏の面に、竹刀を叩きつけてやるんだと。

……そんな決意を私にさせた本人は、昼になったから起こそうとした私を抱き締め、逃れようとする私の体を巧みに抑えている。大声をあげようとしたのだが、それを察知したのか一夏は私の口を片手で完全に塞いでしまっているため、声を出せない。

……まだまだ一夏には遠いらしい。

……って、顔が近いわ馬鹿者っ！

小学生時代、そしてちー姉さんの涙

俺は今でもちー姉さんと一緒に寝ている。ちー姉さんは織斑一夏の両親が居なくなっただけから雰囲気若干固くなったが、束姉さんのお陰で少しずつ柔らかくなってきている。

しかし、ちー姉さんはあれで意外と繊細であるらしく、少し夜に起きてみたところ、声を殺して泣いていたことがあった。

それ以来、俺は（精神年齢的には一応）年上としてちー姉さんの心のケアをしている。

そうは言っても俺にできることなど、ただ一緒にいて、一緒に眠ることくらいしかないが。

それでも少しは効果があったらしく、ちー姉さんの表情に笑顔の割合が少し増えた。嬉しいことだ。

俺は我儘は言わないようにしているし、自分でできそうなことには挑戦している。ちなみに最近では、一人で洗い物ができるようになった。

それと、気付いているとは思いが、俺は基本的に他の人間をちゃんとした名前では呼ばない。理由は簡単だ。ただ、平仮名、または片仮名に直して三文字以上の名前と名字を覚えられないというだけ。自分の名前とちー姉さんの名前はなんとかこの七年くらいで覚えただが、いまだにののちゃんしのみやと束姉さんの名前も覚えていない。……し、し……篠野宮しのみやとっつきと、篠野宮タバサだったか？

「違うわ！篠ノ之箒だ！いい加減に覚えろ！誰が実体剣とは名ばかりの高威力パイルバンカーか！」

「うーん、束さんはいつも通り束姉さんで良いよ！でも束さんの名

前は束だからね？ ゆっくりで良いから、いつかちゃんと呼んでね
？」

努力します。努力だけは。実らなくても怒らないでね？ 怒られても俺は寝るけど。

初めのあれが悪かったのか、俺には男友達がない。大抵寝ているからと言つのも十分理由になりそうだが、まあ、そのあたりは割とどうでも良い。気の合わない友人を作っても楽しくもなんともないだろうしな。

そしてその割に女友達は多い。これも織斑一夏本人のフラグ構築能力の一端かもしれないが、俺はそういう目では人をあまり見れない……良く考えてみてくれ。俺は一応転生済みで、その上毎日ちー姉さんと同じ布団で寝てるんだ。今更小学生相手に妙な感情起こすかっての。

だからと言ってちー姉さんに妙な感情を起こすわけでもない。元々そっち方向のは少ないだけだ。決してホモじゃあないからな！勘違いしたら千の顔を持つ英雄で串刺しだ。

……まあ、するやつなんざいないと思うが。居たとして誰が得をするんだ。女顔でもないし、見ててもつまらんだろ。

《……ふむ……ありじゃな！》

へー、神得か。

……ねえよ！死ねい！

まあ、無理だろうけど。

いきなりで申し訳ないんだが、現在絶体絶命だ。俺個人ではなく日本と言う国が。

何せ核ミサイルを含む二千三百四十一本のミサイルが、世界中から日本に向かつてきているのだから。

……そう言やあ、こんなのもあつたな。ちー姉さんに任せときゃ平気だとは思うんだが……バレねえように俺もやるか。幸いかどうかは知らねえが、撃ち落とすのに苦労はしねえ能力があるからな。

IS発動……シルバーカーテン。

ステルスとか超便利。

さて、行くかね。

なぜかバレた。たぶん原因は束姉さん。大天才にして大天災な束姉さんを出し抜くなんて、俺には土台無理だつたつて訳だ。

「それで、いつくんのそれはなんなの？ 束さんは知りたいなあ？」

「魔法みたいな道具です。ただし俺が武器だと思つたものしか出せない上に俺にしか使えない欠陥品です。どこからか出していたクッションもこれです」

「クッションって武器だっけ？」

使い方を変えれば、窒息させることくらいできるよな？ ほら武器だ。

「まあ、良いじゃないですか。ちなみにステルスも武器ですよね？」

「それはそうだね」

へー、納得するんだ。

……さて、寝るか。

「いつくん、束さんの腕のなかでお眠り」

「……じゃあ、お言葉に甘えて失礼します」

……すかー……。

side 織斑千冬

ミサイルを落とし、軍をのけてから帰ってくると、一夏が束に抱かれて眠っていた。

「た、束！何をしている！」

「しーっ！いつくんが起きちゃっつよ？」

「っ……」

ま、まさか束にたしなめられる時が来るとは……。そう思いながら私は眠りっぱなしの一夏に近づく。

「……すかー……」

「……本当にこいつがああ程度で起きるのか？」

「起きないと思うよ？」

そんなことを言った束には、とりあえずアイアンクローを食らわせておいた。

「……ふふふつ　ねえ、ちーちゃん。いっくんってすごいね」

急にそんなことを言ってきた東に、何となく違和感を感じる。

……こいつが、他人を凄いと誉める？

「東。悩みがあるなら言えよ？」

「ちーちゃんは私をなんだと思ってるのかな？ 私だってたまには誉めることだってあるよ？」

「妄想は夢の中だけにしておけ」

「ちーちゃんひどい！東さんのハートはガラス製なんだよ？」

強化ガラスでIS用銃器の弾丸にも耐えるのだろうか？

「……んー……喧嘩は、駄目だよお……ちー姉さん……」

一夏が寝言でそう言った。

わ、私か！？　東ではなく私に言うのか！？

見てみると、一夏は東の腹の辺りに抱きついたまま眠っている。しかも笑顔だ。

……東の勝ち誇った顔が癪にさわったので、もう一度アイアンクロ
ーで浮かしておいた。

小学生日記、実態は愚痴ノート

桜道一哉、ではなく織斑一夏。転生済みの判子が額に押ししてある…
…何て事はないが転生はした。

まあ、それは置いておこう。今となっては割とどうでもいいことだ。
学年が上がリ、二年生になったんだが、五月蠅い奴はやはりまだ五月蠅い。

それも実は割とどうでもいい。本当に愚痴りたいことは他にある。

まずは、神からもらった能力についての話だが、どうやら俺の選んだ能力の他にもいくつか追加されているらしく、今さら、本当に今さら俺の部屋の机の上に能力についての説明書が届いた。原作で織斑一夏がISの説明書を見た時の気持ち少し理解できた。

……………一番裏から見てもたら、なんとページ数八百八十七。よくあるパラパラと流し見るだけで理解できるって言う描写の真似をしたくなるページ数だろう？ まあ、それはやってみたらできたんだが。

内容としては凄まじく簡単。能力でできること、できないことの大まかな場合分けと、頑張つて鍛えればその力は上がるということ。追加した能力についての簡単な説明だった。

それでなぜここまでページ数が多いのかと言うと、神が老眼だから文字がでかくないと読みづらいつつことと文字が大きいからだ。

……………老眼つて、神にもあるんだな。別にいいけど。

で、俺に追加された能力は、俺が欲しかったとぼやいた逃げる程度の能力と、黄金率C。逃げる程度の能力はどうやらほとんどのものから逃げることができるようになるためスロットの空きにいい感じに入ったから入れたらしい。

あと黄金率だが、巨万の富が入ってくるほど出はないが、その方面に努力していればかなり裕福な生活ができる程度には金の縁が巡ってくるらしい。

……ああ、道理でよく金を拾うわけだ。五百円玉とか千円札とかばっかりだが。

そして驚いたことに、千の顔を持つ英雄は俺の想像以上にチートだったらしい。

……某人形練り師が自動人形を壊して回るサーカス漫画のゾナ八虫造れて自在に操れる上、ランブルデトネイターでいつでもどこでも遠隔爆破できるとか……想定外です。

しかもこの世界には生命の水が無く、ゾナ八病を治す方法は俺がゾナ八虫を消す以外に無いときた。

……つまり、ちー姉さんを困らせる馬鹿にはこれをやってやればいいんだよね？ ラッキー手駒増えたー！

……とても言うと思ったか？ んなことしたら余計に怪しまれるわ。なんか使えればいいんだけどね。

「じゃあ東さんがゾナ八病について広めておいてあげようか？ I S作ってから発言力も大きくなったから、『誰でも発症の可能性はある』ってことにできるよ？」

へー、流石は東姉さん。目的のために手段は選ばない、そこにちよ

つと痺れる憧れる！

「……で、どこから入っていつから聞いてました？」

「ドアと見せかけて窓から入って、千の顔を持つ英雄って名前が出たあたりから聞いてたよ？」

へー……ならいいか。

「それじゃあ、そのゾナ八病っていうのについて、束姉に教えて？」

「はいよ」

まあ、それが終わったら寝るけどな。

……ああ、白騎士事件だったらもう終わっている。けれども束姉さんもののちゃんもまだ転校していない。

原作では確か小学四年の終わりにのちゃんが転校して、小学五年始めにあのセカンド幼馴染みが転校してきたはずだ。

……まあ、原作キャラとはいえ俺が友人になりたくないと思えばならないだろうし、原作では出てきていないやつでも友人になることもあるだろう。俺は織斑一夏ではあるが、織斑一夏ではないのだから当然だが。

ちなみにちー姉さんに『白騎士かつこいいよね。会ってみたいなあ』と言ってみたら会わせてくれた。まあ、本人だが。

内緒と言われたので内緒にしているが、初めから誰にも言う気は無い。ちー姉さんがブラコンであるように、俺もまたシスコンなのだから。

それからしばらくして、東姉の発表した論文に世界が震撼した。最初のIS、白騎士による登場者の身体スキャンでわかった新事実として、人には皆とある病にかかる可能性を持っているという事がわかったらしい。

その病気の名前こそが、ゾナ八病。現在でも世界に数人ほどその患者がいる、不治の病だそうだ。

……………東姉さん、騙るの上手いなあ……………。

のちゃんの転校、あとゾナ八病発症者一人目

ののちゃんの転校は突然だった。何でも日本政府が関わっているらしく、このままこの場所で暮らしていると守り切れなくなるのだのなんだのと言っていた。今までほとんどなにもしてこなかったくせに、こういうときだけはでしゃばってくるんだよな。

ちなみに今までは俺がゾナ八虫で周囲を警戒し、実行部隊の血管の中に小さなゾナ八虫を侵入させて、心臓でドカン。もしくは某武装で錬金な漫画に出てくる蝶々二種で迷わせてからドカン。ラッキーなことに破壊男爵は使わないで済んでいる。と言うかあんな町中で使えるかつての。

けれども死体を残してやっても日本政府はそれをやって来たやつらに報復どころか抗議もしようとしないので、風船爆弾で身長を吹き飛ばして消滅させてやったこともしばしば。

それだけの事を俺にやらせておいて、今さら出てきて従えだ？ ふざけてんのか頭の中身が無いのか両方か、はたまた俺の予想以外なのか……。

とは言え、もう引越し先が決定している状態で何を言っても遅い。と言う訳で、次来たどこかの国のエージェント（仮名）と、そいつに命令をしたド腐れ上司にゾナ八病をプレゼントしたいと思えます！

わーわーパフパフドンドンドン！

ちなみに初めから強いものではなく、始めは弱いもので発作もそこまで酷くはないが、徐々に酷くなってきて最後には『ああ』なるよ

うに調節する。基本は体内の虫の量で、最後は『アポリオン』を入れてやるだけで済むのでそれなりに楽だ。

これを繰り返していれば、手を出してくる奴は減るだろう。束姉さんには悪名がついて回るようになるかもしれないが……

「別に構わないよ？ 束さんは箒ちゃんとかーちゃんといつくんが居れば満足だからね」

「へー。そうですか。それじゃあよろしくお願いします。あと今回はどちらから？」

「天井裏からだよ！」

そう言つて束姉さんはにこにこ笑いながら天井を指差した。

へー、天井裏か。また妙なところから入ってくるな？ 別にいいけど。

「ああそうだ。ののちゃんにこれ渡ししてもらえませんか？ 画面が空間投影型のテレビ電話なんですけど」

「……いつくんの番号教えてくれたらいいよ？」

……教えなくつても束姉さんなら自力で調べあげられるでしょうに。まあ、別にいいけど。

「ところでこれってどうやって作ったの？ 材料とかは？」

「情報って武器だと思っんですよね」

「うんわかった、あれだね」

理解が早くて助かりますね。

ちなみに俺は自衛と寝るためのクッションとタオルケット以外に千の顔を持つ英雄を使ったことは無い。例外が寝具と言うのは、実に

俺らしいだろう？

これは割と堂々と使っているので、ちー姉さんも知っている。殺害経験有りと言うことは秘密にしてあるが、まあ、正当防衛と言うことで一つ。

あ、来た。どっかの国の者らしいエージェント的な人間。

とりあえずバタフライな武装錬金で方向感覚と距離感を失わせ、その霧に紛れてゾナハ虫をイン・ザ・体内。ぜひぜひやってるその所の所属を束姉さんに調べてもらい、そいつに命令したのが誰かを教えてもらってその国にゾナハ虫を送る。

他の人間には最低限まで被害を押しさえようとしたけれど、そいつの周りに居たド腐れには遠慮なくかかってもらった。気前がいいと思わないか？

……さてと。目標も終わらせたし……寝るか。

ちー姉さんは最近忙しそうにしている、あまり家に帰ってこないの
で、仕方無く一人で眠る。腕の中の寂しさはクッションで埋めるが

……

……ちくせう。腕の中が寂しいぜ……。

「今日ねえ、いつくんに会ってきたよ」

ちーちゃんが暮桜に乗っている時にそう呟いてみると、ちーちゃんはすっごく動揺した。

「あ、知りたい？ 最近ちよつと会っていないいつくんのこととか知りたいたいたいたいたいよー！」

「やかましい」

ちーちゃんに照れ隠しのアイアンクローをされた。IS装備のままアイアンクロー何てされたら、東さんの脳みそがつぶれちゃうよ！？

「ふん」

「ぶぎゅー！」

ぽい、と捨てられて、地面に激突する。しかも頭から。

「ちーちゃんの愛がいたいっ！」

「何が愛だ、馬鹿者」

ちーちゃん酷い！でもそんなちーちゃんが好きだよ？

「……………で？」

ちーちゃんがそっぽを向きながら私に話しかけてくる。やっぱりちーちゃんはいつくんのことが大好きなんだ？

「……………」

そう思っていたらまたアイアンクローで持ち上げられた。すっごく痛い。ほんとにつぶれちゃったらどうするのさ！

……加減してくれてるのはわかっているけどね。

「いたたた……いつくんのことだね？　ちよっとさみしがってたかな。いつくんって抱き癖があるから、ちーちゃんと一緒に寝てるときが一番幸せそうだよ？」

「……そうか」

……ちーちゃんは気付いてないと思うけど、すっごくいやにやしてる。すっごく嬉しそう。

「まったくちーちゃんは素直じゃないたいたいたいよーつぶれちやうよー」

しばらくちーちゃんは私の頭をギリギリと締め上げてから、ぼいっと投げ捨てる。確かに叩いたり殴ったりするよりはこっちの方が調節しやすいと思うけど、それでもやっぱりいたい。

友人作り、以外と簡単かも

ののちゃんが転校してからすぐに、この学校の俺のクラスに転校生がやって来た。その名前は鳳^{ファン}……なんとか。略称がリンだったはずだから……離任？

……絶対違うな。なんだっけか？

……まあいいや。気が向いたら覚えよう。向くかどうかわからんが。

予想では友人なんざ俺にはできないと思っていた。何故なら俺は大抵寝ていて、絡みにくいやつのはずだからだ。前世でも仕事仲間にはいたが友人なんざ高校・大学の睡眠愛好会（会長は俺）の会員とバンド組んでた数人程度だ。

……だが、今回はなぜか友人がいる。質が悪い勧誘を（手を掴んで無理やり遊ぼうぜとか言ってる感じの男子に）受けていた女子達にかつあげされかけていた男子生徒数人。いじめを受けていた奴に喧嘩の場で何故か共闘することになったやつが一人。

………何で俺はこんなにも厄介事に巻き込まれるんだろうな？
そんなもんはいらないから寝かせてくれ。

「よう一夏。なんだやっぱ眠いのか？」

「………弾か。おう、超眠い………鈴居ねえ？抱き締めて寝たいから」

「………お前いつか刺されるぞ？あと鈴は居ねえ」

「………なんとかなる………居ねえのか………じゃあお前でもいいや」

仕方がないので弾を抱き締める。男も女も関係なく、抱き締められればオッケー。

「ちよつ、待て一夏！俺にはそんな趣味はねえ！」

「……やかましい、寝れねえだろつが………すか」

「寝てんじゃねむぐう!？」

……すか………。

起きたら弾が鈴に変わっていた。何を言っているのかわからないと思うが、俺にはわかる。何てことはない、俺を起こそうとして自爆つたんだろつ。顔が真っ赤だ。

ちなみに弾は自分の席に戻っていた。多少睨み付けられたが、アイコンタクトでなんか作ってやると言ったら睨むのをやめた。ちよろ。

……ちよろいと言えば、この作品の中にはちよろいと言われる金髪ツインドリル……名前は………せ、せ……ぜ？ ゼヒュロス・オウビート？ だっけ？ なんか強そうなやつだな……。

「……多分違うと思うわよ？」

「そうか？」

「私の名前、フルネームで」

「フアンゼン鳳鈴震」

「リンイン鈴音よ」

へー。そうだったか。すまん。

とりあえず撫でておく。初めの頃は名前を間違える度に怒鳴り散らされたが、それが自分だけではないと知り、そして略称を呼ぶよう

になってからは大人しくなった。
恐らく、ちー姉さんの名前を覚えるのにすら数年と言つ時間をかけたと言つ事実には呆れたか、諦めたかしたのだろう。

「諦めたのよ。私は鈴でいいわ」

へー、それじゃあ鈴でいいな。覚える努力も放棄するわ。

……か……。

side 鳳 鈴音

「……すか……」

「……はあ……」

全くこいつは……。

今私を抱き締めながら幸せそうな顔で眠っている男は織斑一夏。この学校で一番に私と友達になり、そして親友になり、私を惚れさせた男だ。

初めは何を考えているか全然わからない気持ち悪いやつ、という印象だったのだが、そいつは何故か私がかかわれているときはいつも助け船を出してくれた。

お礼を言っても自分のためだと言ってあまり受けとることもなかったのだけれど、そのうちにそれが半分くらいは嘘だということに気がついた。

一夏は寝ることが好きだ。それは見ていればすぐにわかる。授業中も大抵寝ているし、休み時間も大抵寝ている。起きているときなんて精々ご飯を食べる時と体育の授業中くらいだ。……いや、たまに体育の授業中すらも寝たまま動いている。

その時に周りで楽しく騒ぐだけならば、一夏は何も言わずに寝続ける。

しかし、何故か誰かを苛めたり、大人数で一人をからかっていたりするといったの間にか起きてきていてそいつらの邪魔をする。

その他にも、例えば喧嘩をしていて相手が多かったりすると力を貸してくれたりもするし（弾情報）、家庭科の授業で困っていると班を越えて助けてくれたりもする（女子の中では有名）。

とにかく一夏は面倒くさがりで眠たがりで、そしてとても優しい男だ。あと妙に女子に人気がある。

その証拠に、一夏に抱き締められている私には、周りの女子からの羨ましそうな視線が突き刺さっている。

「……すか……」

「……少しは気付いてあげなさいよね……」

「……鈴。そりゃ無理だろ」

「わかってるわよ、言ってみただけ！」

弾が私に呆れたように言ってくるけれど、私だってそのくらいのことはわかってる。

一夏は絶対に気付かないだろうし、万が一、億が一、兆が一気付いても積極的に動くことは無いだろう。

「……だよなあ」

「……仕方ないわよ、好きになっちゃった方の負けよ」

そんな私の言葉を全く聞かずに、一夏はすやすやと眠り続けている。

「……んー……鈴……」

そう言いながらぎゅっと私に巻き付けている腕に力をこめる。私はその腕に自分の手を乗せて、一夏に背中を預けた。

卒業、その前に誘拐

第二回モンド・グロツソ。ISの世界大会である。ちなみに第一回の優勝者は当然のことながらちー姉さん。ブレード一本でよくもまあ……。

たまに目で追えない移動とかをやっていたので、ちー姉さんが本当に人間かどうか怪しいと思うようになってきた。

神の説明書が正しいとすると、一応俺の身体能力はネギま公式バグキャラクターのラカンと同等はあるらしいんだが、それでも一瞬視界から外れてみせた。

ISに乗っているとはいえ、本当に人間なのか？

……違っていたとしてもどうこうするつもりはないが、一応知っておきたいと思う。

……あと、やっぱり俺が選んだ能力はIS世界では使い道が暗殺くらいにしかない。ディープダイバーとか確実に要人暗殺用だよな。

……正直に言っただけならラノベでも、もつと平和な僕は友がなくてとかそういうバトルなしの世界に行きたかった。そして千の顔を持つ英雄で黄金を作って換金して自堕落に死んでいきたかった！

……何が言いたいかと言うと、誘拐されかけた。流星にISを使っでは来なかったからパピヨンのアレでどっかんと吹き飛ばしたんだが、どうもそれが原因で大会は中止になってしまった。テロかと思われたらしい。ごめんねちー姉さん。

それから俺が吹き飛ばした誰かさんたちをちー姉さんが見つけて俺に聞いてきたから、とりあえず正直に誘拐犯と答えておいた。俺が爆破したとは言っていないけど、束姉さんから防犯装置をもらったことにはしておいた。よっぽどテンパっていたらしく疑うことなく信じ

た。なんか少し心が痛い。
それにまたちー姉さんを泣かせたのも精神的にきつい。そんなにごめんって言われてもちー姉さんは悪くないでしょうに。
……とりあえず、おやすみ。できれば俺が起きたときに、そばにいておくれ。
無理ならいいけど。

特に無理ではなかったようで、現在俺はちー姉さんの背中で揺られている。あまり揺らさないようにしてくれているのか、派手な揺れはなく寝心地がいい。あー、やっぱり俺ちー姉さんのこと好きだなあ……。
……じゃまされたくないんだよね。この生活。IS学園には入りたくねえ。まあ、ISに触らなければいいだけの話だし、それ自体は恐らく難しくないよな？
……難しくないといいなあ……。
……すか……。

side 織斑 千冬

私の背中で気持ち良さそうに眠っている一夏。両親が私達を捨ててからの、私のたった一人の弟^{かぞく}。私の宝物。
けれど一夏は私のせいで誘拐されかけた。束に貰っていたという防犯装置とか言うのが無かったら本当に誘拐されていたかもしれない。束には感謝しなければ。

あの馬鹿が居なければ、一夏はもしかしたら殺されていたかもしれ

ない。それどころか、もつと酷い目にあっていたかもしれない。

カメラに写っていた記録を見た。一夏が私の試合を見ているときに、何人かの黒い服を着た者達が気付かれないうように一夏を拐おうとしていた。

すると一夏の手が光り、そこから黒い蝶が数匹飛び立った。

そしてその蝶は黒服に近付くと、爆発した。爆発の跡を見てみると、一夏の方には全く衝撃は行っていないようだったが、爆音はちゃんと届いたのか耳と目を塞いでいた。

それを聞き付けてやって来た警備員が一夏に説明を求めているが、先程の爆発でカメラの集音機がいかれたのか何を話しているのか聞こえない。

だがそれでも警備員は黒服達が不審者だと考える程度の頭はあったらしく、黒服達を無力化してから連行していった。

しばらくしてから私が現れて、一夏を抱き締めていた。そこから先は見る必要が無いと感じ、見るのをやめたのだが……束め。いくらなんでも爆発物を一夏に持たせるとはなんだ。しかも会場の警備にばれないようにするとは……。

……ああ、ようやく着いたか。

救護室に入り、他国の選手達と同じように一夏を寝かせる。なぜか寂しそうにしていたので頭を撫でてやると、私の手を取って抱き締めるようにしてから嬉しそうに笑った。

……やれやれ。一夏は眠るのが好きだな。

私は苦笑しながら、一夏のさせたいようにさせていた。

食事環境、ちー姉さんはドイツ

鈴。本名は確か鳳鈴神。フアゼンジン

「鈴音よ」

……だそうだ。

俺の友人の一人であり、よき理解者であり、原作とは違って何故か異様に精神が大人である。

具体的には、俺が抱き締めたまま寝落ちしても完全スルー。そのまま授業を受けることもしばしば。

その他にも、少し前にちー姉さんがドイツに行ってから料理をするのが面倒臭くなったのでとりあえず生きていければ良いと言うレベルしか食事をしていなかったら実家の食堂に引きずり込んで食事をとらせたり、俺が気力を取り戻せるように、毎日弁当の中身の交換会を開催してくれたり……本当に色々世話になった。

「別にいいわよ。あたしだってあんたに助けられたんだし、好きでやってるんだしね」

へー、そうかい。まあそれでも礼は言うけどな。

ちなみにちー姉さんがドイツに行くことになった理由は俺のせいだ。やっぱりあの爆発は不味かったらしく、無かったことにしてやるから一年ほど教官やってくれないか？ と言う話があったらしい。ごめんねちー姉さん。

「はいはい、全く一夏はシスコンなんだから」

「そつだな」

自覚はあるよ。ぶっちゃけこの世界に来て三番目の恩人だし。ちなみに一番二番は文字通り命懸けでちー姉さんと俺を守って見せた両親。ちー姉さんは嫌っているようだけれど俺は別に嫌いじゃない。

「……か……い……か……一夏!」

「……すか……」

「もう昼なんだから起きなさい!」飯よ!弾!

「おつよ!」

俺は二人に引きずられながら屋上まで運ばれたのだった。

……すか……。

「はい一夏。あーん」

「……あむ。むぐむぐ……うまい」

半ば寝ているが、それでも料理の味くらいはわかる。鈴の弁当も弾の弁当も美味いな。

給食じゃないのかって? 俺に言われても知らんよ。

「……さて一夏。お前昨日の夜何食った?」

何故か俺は弾に詰め寄られている。まあ、とある日からはいつものことになっているのだが、この時だけは俺は弾に勝てる気がしない。

「何って……あれ、食ったっけ……?」

「……じゃあ、朝は何食った」

朝か。それは覚えているぞ。

「水と飯と塩と砂糖と刻んだキャベツ」

いきなり弾と鈴の雰囲気は怖くなった。畜生勝てねえ。別にいいけど。

ずい、と弾が俺に向かって箸を付き出ししてくる。

「食え」

そして鈴も箸を付き出ししてくる。

「食べなさい」

怖いので俺は素直に食べる。うん美味い。

結構な量を食べさせられたが、弾と鈴の弁当の中身は初めのおよそ半分にまで減っていた。こいつらは平気なのか？

「少なくとも今の一夏よりは平気よ」

「俺らのことはいいからさっさと食え」

「いやー応自分でも作ってきたからな？ 寝てたから持ってきてねえけど」

「「なら今は食え」」

……まあ、いいか。

「……すか……」

俺達の弁当を食い尽くした後、一夏はいつも通りに眠りについた。

……やれやれ。こいつは本当に自分の事を大切にしない奴だ。

一夏に膝枕をしている鈴も同じように考えているらしく、俺と鈴は揃って溜め息をついた。

「……それじゃ、俺は一夏の弁当持つてくる……食ってもいいよな？」

「良いと思うわよ？ どうせ一夏は私達の分として昼だけ豪勢にしてくてるんだから」

そう。こいつは自分のために美味しい料理を作ろうとはしない。そもそもこの眠たがりの面倒臭がりが料理を始めた理由が、姉である千冬さんの負担を減らすためであると言うのだから。

その千冬さんがいなくなってから、この姉馬鹿は料理に力を入れなくなった。

朝は水と塩と砂糖に生卵、昼は無しか水道の水、夜は生野菜とハム一パック。そんなのが普通になっていった時に俺と鈴が遊びに行つて、食事環境を知つて鈴が一夏をぶん殴ろうとしていつも通りに抱き締められ、それから家の中華料理屋に引きずり込んで事情を話して飯を食わせてからまともな弁当を俺達が食わせることになった。

俺もその事を母さん達に言つて弁当を多めに作つてもらふことにして、鈴と一緒に一夏に食わせている。

一夏は食わないでも生きて行けるみたいだったが、食うときは本当に食つらしく、俺達の分まで食つても実はまだたりていないらしい。

一夏は隠しているようだったが、簡単にわかる。

一夏も悪いと思っただのか次の日から弁当を持ってきて一緒に食べるようになったのだが、……これがまた美味い。こっただけ美味しいのが味気無く感じるとは、こいつの寂しがりもかなりのものだと言と二人で笑いあったこともある。

そんなこんなでなかなか苦勞もしているが、俺はこいつらと一緒にいるのが大好きだ。

「……か……」

「おうっ!?!? 一夏、絞まってる! いたいいたいっおあ……っ!?!?」

「……頑張っつてね弾」

「助けるよ!?!?」

……ああ、こいついっつこともあるが、好きだぞ?

ちー姉さんの帰還、それに伴うパーティー

ちー姉さんがドイツから帰ってきました。と、言うわけで今日は自宅で豪華な料理を作ろうと思う。

そのために学校で料理の献立と栄養バランス材料の有無を確認してノートに写していたら、弾と鈴にあり得ないものを見る目で見られた上に早退して病院に行くことを進められた。酷くね？

……第一、病院に行ったとして何科に掛ければ良いんだよ？

……まあ、それは割とどうでもいいな。今はとりあえず買い物だ。少しだけ贅沢するが……これくらいは別にいいよな？

……それにしても一年とちよつとぶりか。ちー姉さんの声だけは電話で聞いてたとはいえ、声は抱き締められないんだよなあ……。ちなみに抱き癖はいまだに治っていない。そして治す気もあんまり無かったりする。面倒だし。

……そう言や今さらだけど、弾って原作じゃあ中学からの付き合いのはずなんだが、俺達のとこだと小五の半ばで友人関係になっ
ているんだが……。まあ、似たような世界だと言うことで納得しておこう。悪いことじゃないし。

……お、卵が安いな。買っていいこう。豚小間肉も少し……。いや、ちー姉さんは夜はあまり食べないから、明日の朝の分も買っていいこう。となるとあれは夜のうちに仕込みを終わらせて、夜はさっぱり終わらせようか。

……鈴と弾は俺が起きている理由を聞いたら一応納得して見せたが、今の俺を見たらたぶんもう一度びっくりするんだろな。

「……………い……………」
「……………夏……………？」
「……………一夏が……………鼻歌……………？」

今みたいに。

……………確かに俺は鼻歌歌う暇があるなら寝る、飯は寝ながら食う、夢の中でも寝る夢を見て、夢の中の夢でまた眠るような奴だが……………そこまで驚かなくても良くないか？

「……………いや、驚くわよ。だってありえないもん」

「……………だよな。俺達間違ってるよな鈴」

「当然でしょ。一夏が完全に起きたまま鼻歌歌って買い物なんて、明日世界が滅びてもおかしくないわ」

「へ……………言いたい放題言ってくれやがって……………」

「……………事実だし」

鈴と弾は綺麗にユニゾンしてくれやがった。俺だってはしゃぐことくらい……………！！

「……………ど、どうしたの？」

「……………ちー姉さんがもうすぐ帰ってくるような気配……………晩飯を作り始めないと間に合わねえ！つー訳ですまん、また明日な！」

やばいやばい、つい話し込んでしまった。晩飯は軽く、腹持ち良くな
く腹に溜まるものを作らねえと……………。

風呂の準備もしておいて、ちー姉さんの部屋の掃除は……………昨日やったな。毎週やってるけど。

後は……………時間があれば明日の朝の下ごしらえもしておいて……………マジッサージも一応覚えてみたし、準備しておこう。いつでも洗面台の下に色々常備されてるし、道具の手入れもできてるけどな。

それより今は晩飯の準備だな。急いで作らねえと。失敗は許されねえし、許さねえから……気を付けるよ？

……そう言や、弾と鈴は何で一緒にいたんだろうな？ 偶然か？

……まあ、割とどうでもいいな。今は料理だ。いつも使ってる前全部を隠すタイプのひよこエプロンにかけて、ちー姉さんの満足する料理を作って見せるぜ！

……ああ、そうだ。確か前に束姉さんに、

「これをつけるとちーちゃんば喜ぶよ！きつと疲れがみんな吹き飛ばくらいね！天才の束さんが言うんだから間違いないよ？」

と言われてホイホイと貰ってしまったあれがあったはずだ……ちー姉さんも疲れているだろうし……使ってみるか。

side 織斑 千冬

一年ぶりの日本。ようやく帰ってこれたと一息ついて、それからもう一度気を引き締め直す。

私は、織斑千冬。一夏の前ではかっこいい姉でありたいと思い、そしてそれを実践してきた。

……たまに一夏に慰められたり、家事を任せきってしまったりと言う点ではだらしのない所を見せてしまっただけはいるが、私よりも一夏の作った料理の方が数段美味しいので（私の料理は料理ではないらしい。

束すら気絶させ、二日間腹痛を起こさせたと言つ事実もあるので否定できない）、こればかりは一夏に頼りきりだ。

気を張り直した私は、一夏の待つ家に向かう。荷物はすべて先に送つてあるし、後は私が手荷物を持って家につけばいい。

私は、一夏の前ではかっこいい姉でありたい。そして一夏を心配させたくない。

そう。だから……だから

「ちー姉さん、お帰りなさい！」

ピコピコと動く、とがった犬耳。

嬉しそうに振られる、上向きに振り返つた尻尾。

この世の春とばかりの、一夏の笑顔。

一夏の前では、この愛の放出を我慢しなければ……ッ！

……まあ、無理だったんだがな。食事が終わって気が付いたら布団の中に居たさ。
そして私のはまだ耳をつけたままの一夏が、私に抱きついたらまみ眠っていた。

これでもう一度昇天しそうになったが、目尻に浮かんでいる涙を見て抑えきった。

まだ夜の三時だったので、一夏を私からも抱き締めてもう一度眠りについた。

一夏が起きた後、あれをどこで手に入れたのかを聞いてみると、束が私が喜ぶと言って渡してきたらしい。

さすがに命に関わるので使用禁止にしたが、その時に落ち込んだのかとがっている耳も丸まっていた尾も、しゅんと萎れていた。

おもいつきり抱き締めて撫でてやったことは言つまでもない。

卒業式、はっちゃんをはじめたちー姉さん

卒業式。いつもは騒がしい同級生達も、今日ばかりは静かだ。お陰で……

「……すかー……」

よく寝れる。

……とは言え、しっかりと卒業証書は受け取ったし、歌も歌える。問題ない。服装も、まあ、問題ない。問題があるとすれば……

「ちーちゃんちーちゃん、いつくんがスーツ着てるよ！」

「わかって……おい東、このカメラはどうやって使うんだ？」

……このくらいか。

あとちー姉さん。そのカメラはメイド・イン・東姉さんだから思考操作式でピントもズームも光量調節もブレ補正もシャッターもみんなやってくれるから。現像は東姉さんに頼めば早いよ。

……それにしても、スーツ似合わねえなあ……ちー姉さんと東姉さんは喜んでるけど。

「いーつのーことーだかー、おもいだしてごーらんーあんなーことー、こんなーことー、あーったーでしょー」

……そうそう、色々あった。

ドイツで誘拐されかけたり、ちー姉さんがいきなり鼻血を噴き出したり、弾の家の定食屋(?)に飯食べにいたり、鈴の家の中華料

理屋に飯食いにいったり、たまに来る誘拐犯を上役と一緒にゾナハ
らせたり、家庭科の授業の自由作品で先生のプライドをへし折った
り、音楽の授業で歌ったら何故か鈴以外の女子から熱い眼差しを、
弾以外の男子からは刺すような視線を向けられたり、急にやって来
た束姉さんに抱き締められたまま微睡んでいたら帰ってきたちー姉
さんと束姉さんの喧嘩が始まったとか………本当に、色々あった。

………まあ、中々に楽しい小学生生活だった。俺に高校生以上の頭
があったというのは関係無く、友人たちと一緒に過ごせました。

「中学に行つてからもよろしくな〜」

「もちろんよ」

「わかつてるって」

よかったよかった。さて、寝るか。

起きてみたらちー姉さんと束姉さん、そして鈴が何故か睨みあつて
いた。俺は現在弾に抱きついていてる。

「一夏。起きたか？」

「………まあ、一応」

すると三人がぐるんと首だけをねじって俺を見た。何でかわからん
が少し怒っているちー姉さんと、少しムツとしている鈴と、その二
人に張り合うように気合いを込めている束姉さんは、ちよつと怖い。

「………弾。何があったんだ？」

「………あー………つまり、鈴と千冬さんとあの赤ずきんっぽい服

の人は、一夏のことが大好きだつてことだ」

へー。まあ知ってるけども、それが何でにらみ合いになる？

……あれか、嫉妬か？ 弟にたかる悪い虫か？ 友人を困らせる悪い人か？

「似たようなもんだと思うぞ」

「へー、そうかい。俺はちー姉さんも束姉さんも鈴も大好きだけど」

勿論弾のことも好きだぞ？ 筋肉ついてて違った抱き心地があつて良いし。

「……お前つて奴は本っ当に女心を理解してないな？」

「してるよ？ 理解だけは」

「余計に悪いわ」

そうかね？

……とりあえず、あの三人の喧嘩(?)を止めるか。確か鞆の中に束姉さんから貰った例のブツ四号があつたはずだ。

ちなみに一号は犬(柴犬)、二号は狼(多分日本狼)、三号は猫(黒)、そして四号は何故かまた犬だ。^{タックスラント}百八号まであるらしいが、そこまで使うことは無いだろう。

……なお、これら獣耳シリーズにはもれなく思考操作ユニットを積んであり。自動で俺の感情を外に出す仕組みであるらしい。科学力の無駄遣いここに極まれりだな。

……ああ、あつたあつた。装着、と。

何故か弾に撫でられた。気持ちいいから構わないけどな。

……あ、やばい、意識が落ちる……喧嘩止めねえと……すか
……。

side 五反田 弾

卒業式が終わってすぐ、一夏はいつも通りに寝始めた。鈴が近付いていくと、いつも通り抱き締められる。

「役得だな？」

「そうね」

一年ちよつとの付き合いで、俺達は一夏の事をよく知った。

一夏の事を見たことのあるやつらは揃って一夏をねぼすけだの面倒臭がりだのと言つが、実際は違う。

一夏は睡眠至上主義であり、重度のシスコンであり、そしてとても優しい奴だ。

何を持つてそう断ずるのかと言えば、一夏の行動と話からの推測になるんだが、それだけでもう十分とも言える。

例えば、自分の関係ないことでも揉め事が起きればさりげなく助けに行くし、喧嘩ならともかく苛めは大抵一夏に角がたたないように止められる。

基本的に寝てばかりいるが話は聞いているし、抱き締めるときも本気で嫌がればすぐに放してくれる。

作ってくる弁当も美味しいし、頭もいいし、運動神経もいい。

そんな完璧超人が何故か妬まれないのは、こうして駄目なところをよく見せているせいだろう。お陰でこつちも騒がしくなくていいとは思うんだが、あのシスコンっぷりには少し引いた。

……今も、日頃から好きだと言っている千冬さんと鈴、そして見たことのない人の喧嘩を止めるためとは言え、こんなものを即座に用意しているんだからな。

「……………わん」

駄目だ俺やめる俺鼻血はやめる俺変態にしか見えなからやめる俺つかなんだよこいつ犬耳犬尻尾とかおかしすぎるだろなに考えてんだよ何でそれだけで異様に可愛らしく見えるんだよ何で少し背が縮んだように見えるんだよ何であの顔が中性的に見えるようになるんだよ何で頬の柔らかさが増すんだよ何で睫毛が少し長くなってるんだよ何で耳がピクピク動いてんだよ何で細い尻尾がブンブン振られてんだよ何で俺の手は一夏の頭を撫でてんだよ何で一夏も嫌がらねえんだよそして何で俺はあの三人にの内二人に仇のように見られて、鈴に羨ましがな目で見られてんだよ!?

「……………えつと……………撫でますか?」

そついえた俺はきつと凄いに違いない。

入学式、早々大乱闘

中学に入り、また鈴と弾と同じクラスになる。またずいぶん嬉しい偶然もあつたものだ。

「実は偶然じゃなかったりするんじゃないの？」

「……見るよ弾、あの雲五反田食堂のCMやつてくれてるぜ？」

「どれどれ……ってマジかよ!? 何で綺麗な楷書体で『五反田食堂をよろしく!』って形してんだよ!? しかも地図付きで!」

「なに言つて……ほんとにそんな形してる!？」

やれやれ、五月蠅い奴らだな。そんな偶然があるのだからこんな偶然くらい普通にあるだろ。

……ところで、あの雲つて妙に銀色してると思わないか? 具体的には、まるで小さな機械が集まつてるみたいに。

……言わないけどな。

「……おいおい、今度は家の真上で『五反田食堂』って形になつたんだが!？」

「くう……弾! どうやったのか教えなさいよ!」

「俺に聞くなよ!？」

……若い奴は元気いいな……すか……。

帰る時間になつたんだが、何故か周りには先輩(笑)達がたむろし

ている。にやにやと笑っているが、俺達が何かしただろうか？

「なあ弾。何で囲まれてるかわかるか？」

「……あゝ、昔俺達がボコったあれじゃね？　それのお礼参り」

へー……面倒臭い。何でわざわざ入学式の日に来るんだよ。今日はちー姉さんが一月振りに帰ってくる日なのにさ。

……弾一人じゃ多勢に無勢だし、さっさと潰して終わりにするか。呼吸に合わせてニアデス八ピネス体に入れて肺で小爆発させれば気絶するだろ。

……実行〜。

「ぶべらっ!?!」

「じぼっえっ!?!」

「ふんぐるいつ!?!」

変態は倒れた、と。

「いや待て。明らかにおかしい悲鳴があつたる無視すんなよ」

「……え、なに？　もっかい聞いて確かめたいって？　弾はドSだなまったく」

「ちげえよ!?!　俺ドSじゃねえよ!?!　悲鳴なんて聞きたくもないからな!?!」

へー、そうかい。まあ、割とどうでもいい。

「んじゃ俺はちー姉さんとの晩飯の買い物をしてくるから」

「……おお、またな。……シスコンめ」

「弾？　シスコンで何が悪いんだ？」

「そっち!?!」

そりゃそうだろ。シスコンで悪いことなんざ無いしな。
第一、弾もシスコンだし。

家に帰ると何故か束姉さんが居た。何となく予想は出来ていたので材料は多めに買ったが、どうやら正解だったようだ。

「プリンでも食べて待っててくださいな。俺のですけど」
「いただきます」

スプーンを使ってぱくぱくとプリンを頬張っている束姉さんは、服装もあいまって年齢以上に若く見える。八歳年上で今は確か……二十歳？ どう見ても十四〜五だよな。行動だけ見ると四歳児。

「ん〜 美味しいよー」

「そうですか。のちゃんのお土産にも持って行ってあげてくれませう？ 俺のですけど」

ちなみにちー姉さんのはコーヒージェリー。甘すぎるのは嫌いだと言っていたのでブラックで。

プリンもちー姉さんの分はノンシュガーで素材の甘さを生かしている。なかなか好評。

やっぱりちー姉さんが美味しそうに食べてくれると、作った甲斐があったっていうことだよな。実に嬉しい。

……最近、こつして笑うとちー姉さんが顔を背けるようになって少し寂しいけど。

「……はあはあ……いっくんかわいい……はあはあ」

……そして今、割と本気で貞操の危機。多分全力で逃げても追いつかれる。ISなんて大嫌いだ。そしてギャグ補正を今ほど憎んだことも無い。

……ギャグ補正？　すると……

「いつくーん！」

束姉さんが飛びかかってきた瞬間に、思いきり息を吸って叫ぶ。

「ちー姉さーん！助けてーっ！！」

「束」

冷たい声が響いて、束姉さんの動きが完全に止まる。まるで凍りついてしまったかのようだ。

「……ち……ちーちゃん……あと二時間は帰ってこれないはずなの……」

束姉さんのその言葉に、ちー姉さんは鼻で笑うことで答えた。

「そんなもの、一夏を守るためならどうとでもなる。……さあ、束。お前はたった一つ間違いを犯した」

……似たような言葉をどこかで聞いたことがあるような気がしたけれど、気にしないことにした。

……それにしても、ちー姉さんはかっこいいな。

……あつと。晩飯作らないと。

俺は立ち上がり、炊事場の方に歩き出す。

後ろの方では色々と破壊音とか

「……貴様は私を怒らせた!」

「うひいっ!」

といった声が聞こえてくるが、それも気にしないことにした。

……よし。朝に炊き始めた炊き込みご飯は上手くできてるな。よかったよかった。

side 織斑 千冬

仕事をしていたら、急に一夏に助けを求められた気がしたので急いで帰ってみると(所要時間0.22秒)、束が一夏に襲いかかろうとしていた。

とりあえずぼこぼこにしておいたが、気が済んだ頃には周りがぼろぼろになってしまっていた。

「大丈夫だよ、ちー姉さん」

いつの間にか私の後ろにいた一夏は、新しい机と椅子をどこかから用意していた。

そして机の上を台拭きで綺麗に拭いてから、作ったばかりと見える料理を並べる。

「それじゃあ……いただきます」

「いただきます」

……やはり美味しいな。

そう思いながら食べていると、ふと一夏が目に入る。あの日から見ることはなくなったが、このときだけは何故か嬉しそうに尻尾を降っているように見えてしまう。

また気絶するわけにもいかなないので目を逸らすが、その度に一夏にくつついて見える耳と尻尾が元気をなくしてぺたりと伏せられる。今日は狐か……。

「……く……」

ぱんっ、と鼻を抑える。まずい、鉄の匂いがし始めた。

「ちー姉さん？ どうしたんだ？」

きよとん、と首をかしげて私を見つめる一夏を直視することができない。そして鼻を押さえている手から力を抜くこともできない。

私は、織斑千冬。一夏の、かつこいい姉だ。

まあ、いつものように愛の噴出は避けられなかったんだが、それでも慣れたのか気絶はしませんでした。

一夏が心配そうに私を見つめている。

……その頭の上に、恐らく束の悪戯の結果であろう狐耳。背中を見ていると、尻尾も見えた。

……とりあえず、風呂に入ってから寝よう。一夏と一緒にな。

授業中、トラブルに巻き込まれる俺。(前書き)

ちよっくら不意打ち更新してみる

授業中、トラブルに巻き込まれる俺。

……お早う。ちー姉さんはいない。なぜなら恐らくもうIS学園に教師として行っているから。

……フウの作ったゾナハ虫のような監視用機械は良いな。まずバレンないように俺に情報を与えてくれる。やっぱり千の顔を持つ英雄は汎用性が凄まじい。

とはいえそれはラカンが使っていた時に、帝国九七式破城鎚型魔導手甲なんていう明らかに造りをわかっていなさそうな物まで出てたからわかりきってたことなんだが。

……ちなみに、俺もちー姉さんも居ない時には家の中に武装で錬金なチャフを張り巡らせているため、今まで泥棒も盗聴機も仕掛けられたことがないし、仕掛けようとした相手を逃がしたこともない。

……俺が帰った時には大抵発狂してたけど。一度弾と鈴が遊びに来たときにピンポイントでこられたときには焦った。すぐさまフェイタルアトラクションで押し潰したけど。

ちなみにヴィクター化はできないが、突撃槍を旧型新型使い分けることもできるようになった。一番酷いのは破壊男爵+衛星30+銀の膜+激戦のコンボだと思っが。

……三十人に増えた超防御能力装備の男爵様に高速自動修復付きとか手に終えない。ほんとに。しかもリバーにすれば相手は動けないし。

……絶対使わねえ。相当の事が無い限り使わねえ。例えばちー姉さんを馬鹿にしたとか。

「……超個人的じゃないかな？」

「東姉さんには言われたくない。あと近寄らないで下さい変態」

……何で東姉さんは頬を赤らめて体を震わせているんだろうか？

……まあ、割とどうでもいいな。

学校行くか。そして寝よう。

流石に中学に入ってからは鈴を抱き締めたまま授業というのはして
いない。後々面倒だし、このクラスにも馬鹿な親の元で育った馬鹿
が居るようだし。

……一応言っておくと、俺は割と友達思いだ。だから、鈴が

「リンリンってパンダの名前みたいだよな。笹食べよ笹」

何て言われているところを見ると、ついやっちゃうんだ（嘲笑）

「なあなあ、ゾナ八病って知ってるか？」

「は？ なんだよいきなり？」

確かにいきなりだな。まあ気にすんなって。

……どうせこの後何も気にならなくなるんだし。

「まあ聞けつて。で、そのゾナ八病つてのは基本的に人間であれば
どんな奴でも発症する可能性があるわけだが……俺が指を鳴らし
た瞬間に発症するって可能性もあるよな？ 超低いけど」

「……まあ、そうだな」

鈴を苛めていたそいつが、訳がわからないと言つ風に答えを返す。

「じゃあもちろん、俺がお前に『今日の夜にお前はゾナ八病を発症する』って言ったとして、それが当たる可能性もあるよな？」

「……………だからなんだよ？」

そこで俺は、にっこりと笑って言ってやった。

「明日、午前六時半ごろ。発症するだろうから気を付けろよ？」

……………正確には発症するのではなく、発症させるんだが。

「……………んなわけないだろ」

「だどいいいな？」

……………さて、寝るか。

side 鳳 鈴音

一夏がそんなことを言った次の日、言われたそいつは学校を急に休んだ。

先生は何もいっていなかったけれど、クラスの全員が一夏の事を疑った。

「……………一夏。もしかしてあんた……………」

「……………やってねえよ。ちー姉さんにかけてもいい。俺は知らん。風

邪じゃないのか？」

一夏はそういったけれど、私も弾もそれを信じることはできなかった。

「あー、昨日から休んでいた　だが、昨日骨を折って入院中だそうだ」

次の日に、担任教師にそう聞かされるまでは。

……えっ……と……。
弾と顔を見合わせる。どうやら一夏は本当に何もしていなかったらしい。

一夏の方を見ると、私達にだけわかるように少し顔をあげて、口元だけでニヤリと笑っていた。

俺は、知らないと言ったはずだが？

そんな声が聞こえてきそうな表情で、一夏は笑っていた。

「……すか……」

……そして、すぐに眠った。

「……で、一夏。釈明は？」

「それでも俺はやってない……ああ、ちなみに俺今日は飯持ってきてないから」

「「はあ？」」

……そう言えば、一夏は千冬さんがいないとすっごい家事が大雑把になるんだった。それも、生きてく上では一番大切な食事が。

……で、今は千冬さんは家に居ないらしいし、よく私の家の中華料理屋に来て食事をしていつている。

……そっか。つまりまたお弁当をしっかりつくってもらわなきゃ……

「って違う！話を逸らすな！」

「お、バレた」

あぶないあぶない、また話をうやむやにされちゃうところだった。

「まあ、きっと偶然だよ、偶然」

一夏はそう言った。私の目を見ながら、いつもと全く同じように。

「……そう。じゃあいいわ。食べましょう」

「……まあ、鈴がいいって言うなら良いけどよ……」

私が引くと、弾も一緒に引き下がる。一夏はそれを確認すると、近くにいた弾を抱き枕にして寝始めた。

「だから飯だつての。……ダメだこいつ。起きる気配すらねえや」

「しょうがないわよ。一夏なんだし」

「……それもそうだな」

弾は諦めて腰に抱きついたままの一夏の頭を撫でて、それから食事
を始めた。

バンド結成、四人組

昔もやっていたので軽くバンドを組んでみることにした。ちなみに今居るのは俺と鈴と弾とカズの四人だ。

「ちなみに本名は御手洗数馬だ」

「……え？ 御手洗いどこか？」

「一夏。お前の間違い方は悪意にまみれてるよな？」

へー、悪意にまみれてんのか。そりゃ大変だ。

まあ、バンドでやる予定の音楽が全部ボカロのパクリだって所には悪意が満載かもしれないけど。

「仕方ないだろ数馬。こいつは一夏なんだから。……一夏俺の名前、フルネームで」

「だだんだん」

「俺はバイキンマンの作ったロボじゃないからな？」

へー。まあ、知ってるけど。違うだろうと思いつながら言った。後悔はしない。後悔する暇があるなら寝る。

「……これが一夏だ。お前も早めに諦めとけ」

「……そうするよ」

弾とカズは揃ってため息をついた。

……まあ、しばらくは暇だしゆっくり上達していくとするか。目標は……そうだな、『初音ミクの消失 - Dead end』を中学三

年までにマスターすること。たぶんできるだろ。

「バンド名はどうするの？」

「そんなん後回しだ。今は上手くなることだけ考えて、上手くなったらまた考えよう」

それがいいよな？ 多分。

学校の設備を借りられなかったので、千の顔を持つ英雄を使って楽器やら何やらを作った。ほら、音波って突き詰めていけば衝撃波で、アンプやスピーカーはそれを大きくするものだろ？ 武器だ武器。平和に使うと楽器だけど。

それで練習していったところ、なぜか全員妙に上達が早い。もしかこれが原作キャラ補正なのかもしれないと思ったが、困ることではないのでスルー。むしろ嬉しい。

お陰で弾はドラム系統打楽器専門、カズはどれも平均的にこなせるキーボード、鈴がギター系統弦楽器とボーカルの特化、で、俺がベースかボーカル、というか全部それなり以上にできるといって、奇妙なバンドができてしまった。

「勝算は考えない 絶対なんか有り得ない 君の言葉が聞きた
い」

鈴も弾もカズもノリノリで演奏したり歌ったりしている。ってか上達速すぎだろどう考えても。

……いや、まあ、問題はないんだが。

「そう言えば、一夏ってちゃんと起きてるときはなんか凛々しくなるわよね?」

「あ、それ俺も思った。いつもは可愛い系の顔してんのに、喧嘩とかシリアスな時とかはカッコいい系の顔になるよな。何でだ?」

……へー……そんな風になってたのか。そりゃ驚きだ。

だけど俺に言われても知らねえものは知らねえんだよな。

「あー、あれじゃね? 体質」

「「「どんな体質だ」「」」

だから知るかつての。

「もしくはあれじゃないか? 日頃の行い」

「日頃の行いでそんな変化があるわけないでしょ」

だから知らんと。

……あゝ……眠……。最近ちー姉さんが帰ってこないからちー姉さんが不足しがちなんだよなあ……。まあ、代わりに鈴とか弾に頼んでるんだが、鈴は暑くなってくると抱きつかせてくれないしなあ……。

……悲しいけどこれ、現実なのよね。

今度体を冷やす方法考えないとな。性能スペックだけならラカンと同格だし、気合いとノリと勢いでなんとかなるだろ。

ただ、気を大っぴらに使うわけにはいかないから、色々考えねえと。

……それにしても眠い。

「あ、ほら縮んだ。何で着てる服も一緒に縮むのかしら」

「知らねえよ。もう『一夏だから』でよくないか？ 一夏だったら身長が十五センチ伸び縮みしても仕方ねえって考えようぜ？」

「そうそう、あんまり気にしていると禿げるぞ？」

「禿げないわよ！」

鈴が殴ろうとしてきた。ちょっと痛そうだったので回避。腕を押さえてオンザ俺の膝。

「そう言やあ、そうやって鈴を抱いてるときも高いままだよな」

「ちっちゃいのはこうした方が抱き締めやすくて良いからな。あとは気合いだ。人生気合いと勢いとノリである程度はなんとかなる」

基本はな。

……すか……。……。

side だだんだん

「鈴、ちょっと待っていてくれるか？」

「あーはいはい。早めに終わらせなさいよ？」

「わーってるって」

……おい作者。ふざけんなっての。リテイク求む。

……よし、オツケーだな。

「それにしても一夏は色々と非常識だよな」

「今弾が言ったばかりじゃない。一夏なんだから仕方無いわよ一夏ならきつといつか生身でISを圧倒してくれるわ」

「いくらなんでもねーよ」

「さすがにそれはねーよ」

「じゃあ弾とカズはいつか俺が生身でISに勝ったら飯おごれよ」

「「「起きてた!?!?!」」」

なん……だと……? 一夏がこの時点で起きてるとは……。

「「天変地異の前触れか!?!」」

「体内から爆破するぞてめえら」

「まあまあ。一夏だつてこついつときはあるわよ」

鈴はそう言いながら自分を後ろから抱き締めている一夏の頭を撫でる。

………背と位置が逆だったらどう見ても母と息子の休日の一幕なんだけだな。

………練習すつか。

約束、対する返答

織斑一夏だ。ちなみに偽名と言うかハンドルネーム等では前世の桜道を使っていたりする。

……普通にどうでもいいな。うん。

「はい一夏。食べなさい」

「……あむ……うまい」

うん、最近鈴の料理の腕の上がり方が尋常じゃないな。父親に教えてもらっているのか？

「そうですね。……でも、まだ酢豚しか作れないのよね」

鈴は少し威張ったように胸を張り、それからなぜかしゅんと沈んだ。理由は知らんが、悲しげな顔は嫌いだ。

「まあまあ。他のも少しずつつまくなっていけばいいだろ。人に食わせて問題ないくらいうまくなったら、味見させてくれ」

「……なんなら、毎日酢豚をつくってあげようかしら？」

「栄養偏りそうだから却下。レパートリー増やしてからもう一度来い」

そう言うと少し不機嫌になったが、俺に弁当を食わせる善の動きは止まらない。

「……一夏よお……。お前はもう少し女心を理解して行動に移せよ」

「うっせ……あ〜……むぐむぐ……」

……やっぱ美味しいな。

バンドの練習を終わらせ、弾と鈴と三人で帰る。

「じゃあな、一夏。鈴。また明日」

「そうだな……ふぁ……」

「全くもう……また明日ね。弾」

「いいっていいって。どうせ一夏だし、聞きゃしねえよ」

「……それもそうね」

そう言って、弾と俺達は別れることになる。

これはいつものことなんだが、毎回毎回なんとなく妙に悲しくなってしまう。何でだろうな？

……まあ、割とどうでもいいけど。

そして鈴としばらく歩き、また分かれ道に差し掛かる。

……この場面、なんか『夕日坂』の歌詞にあったような気がするな。今度はそれでも楽譜にするか。

「ねえ、一夏」

そんなことを考えていると、急に鈴に話しかけられた。いつもよりシリアスな空気である気がするので、俺もしっかり起きる。

「……ちゃんと聞こうとしてくれてありがと。……一夏は、私の料理のレパートリーが増えたら、毎日私の作った料理を食べてくれる

「？」

鈴はいつになく真剣だ。目には冗談の色が……ほとんど無い。
……まあ、それでも俺の答えは変わらないんだが。

「俺より上手く作れるようになったらな」

……まあ、原作から考えると中々難しいとは思うが、できなくはないだろう。頑張っていれば。

「言ったわね？ 絶対一夏を越えてやるんだから！」

ビシッと俺を指差す鈴に、僅かに苦笑が漏れる。もう辺りの空気はいつもの物に戻っている。

「期待しとくよ」

それだけ言って、俺は鈴と別れて歩き出した。

side 鳳 鈴音

「父さん。私に料理を教えて！」

一夏と別れ、家に帰ってすぐ。私は父さんに思いつきり頭を下げた。この家で一番料理が上手なのは父さんだ。一番下手なのは私だ。だから私は父さんに頭を下げる。

父さんは最初、何がなんだかわからないみたいだったけれど、私の説明を聞いてすぐに頷いてくれた。

私が言ったのは、好きな相手がいること。それがよく家に来る一夏だと言っこと。一夏に告白紛いのことをして、自分よりも料理が上手くなったらと答えられたこと。だいたいその三つ。

そのうち二つは父さんと母さんに知られていたけれど、三つ目のことはさすがに知らなかったみたいだ。

……まあ、知っていたらどこの一夏か聞きたくなってくるけれど。

それから私は毎朝早くに起きて、父さんが仕込みをしているところを見たり教えて貰ったりして料理を習う。もちろん朝だけじゃなく、毎日家に帰ってから父さんが料理を作っているところを覗いた。

父さんは料理をしているときは無口であまり教えてくれなかったけれど、店が終わって時間ができると私に丁寧に教えてくれた。

酢豚もこうして教えてもらったので、包丁の使い方や料理の基本はある程度わかつている。

当然だけれど、やっぱり父さんは私よりずっとずっと上手い。私が教えてもらえることだってまだまだたくさんある。

頑張って、一夏に追い付くんだ。

いつものこと、いつものこと

今日は暇な日曜日。いつもの通りに寝続けて、十二時ごろに目を覚ます。

昨日寝たのが九時だったから、十五時間睡眠達成。よしよし。

昼を食べて風呂に入り、一応体を起こす。するとなぜか俺の体は大きくなる。

眠いときは百四十八センチで、起きると百五十七センチになるが、理由は知らない。

……まあ、特に問題はないから構わないが。

……ああ、そういえば石鹸がもう無いな。やっぱり頭も体も石鹸だと減りが早い。

ちなみに髪を何で洗っているかと言う質問に石鹸で適当にと答えたら回りの反応が怖かった。鈴木

「石鹸……石鹸でこんな……さらさら……」

とぶつぶつと繰り返していて怖かった。俺の髪を撫でている手がつつと優しいままだったのが救いと言えば救いだっただ。

そして同じように体を洗うのも顔を洗うのも同じ石鹸だと答えたら、銘柄を聞かれた。ちなみに鈴木は今度は俺の肌を撫でていた。

「……すべすべ……さらさらで……しっとりプニプニ……」

……おお怖い。

石鹼も千の顔を持つ英雄で作っている（滑らせて罠にしたり、普通に投げつけたり、後は食べさせたりすればいい。ほら武器だ）が、いくらなんでもこれをわざわざ言っただけでやれるはずもなく、仕方無く自作と答えたところ、さらに周りが騒がしくなった。

具体的にはその石鹼超欲しいといった内容だが、やらんと答えておいた。

とりあえず新しい石鹼を出しておいて、食料品の買い物に行く。うどんは自分で作った方が美味しいんだ。

と、言うことで買うものは強力粉。本来は中力粉で作るのが普通なんだが、コシは強い方が好みだからこっちで作る。食べることは寝ることの次の次に好きなことだ。作ることも同列に入るが。

……で、ここからが織斑一夏（小説の主人公）の『いつものこと』。

歩いてみれば無理矢理なナンパを見付け、それを止める。喧嘩になることもあるが、さっさと黙らせて逃げる。

逃げる途中で五月蠅い連中がたむろしていたので、ISのライターズマスクで顔を変えて粛清してから公衆電話で警察に電話。そして逃げる。

スーパーに着けば平和になるかと思いきや、何故か運良く（？）セールの放送が入った時にその棚の前に居て確保したは良いものの、子供が泣きそうになっているのを見て仕方無く手に入れたばかりのセール品を手放すはめに。

帰り道では何も無いことが多いが、たまーにお礼参りに来るやつが

いるので撃退。ニアデスハピネスは本当に便利だ。

その他にも買物袋が急に破れて落としてしまった物を拾うのを手伝ったり、お使いの途中だったらしいクラスメイト（名前は知らない。間違っていていいなら言えるが）が俺の目の前で落とした財布を届けたりと、小さいが妙に頻度の高い事件が起こる。

……あーやだやだ。俺はのんびり寝てられれば幸せだったのに。隣にちー姉さんが居れば完璧だ。

家に戻ってうどんを作る。まずは濃い塩水と小麦粉を混ぜて捏ね、一つの塊になるまで捏ねる。

それをいつもは伸ばして畳んで切って茹でるんだが、今回は時間もあるので切らずに全部手で伸ばして茹でる。

初めのうちは難しいが、慣れればどうと言うことはない。一人前程度なら五分あればできる。ちなみに切る方なら一分半だ。

そうしてできた麺を茹でて食べる。卵を落として月見うどん。とろろを入れても美味い。うどんはまず間違えないから安心できるよな。

……よし、次はピザを作ってみよう。運のいいことに窯を置けそうな場所が近くにあるし、それで焼けばいいだろう。

窯はもちろん千の顔を持つ英雄で作り、火は武装な錬金の栄光の火焰でいける。五千百度まで温度を上げる必要は無いから、楽なもんだ。

……そうだな。ちー姉さんが帰ってきた時にやろう。獣耳シリーズ九号、九尾の狐（金色に近い狐色）で！

……ちなみに、五号は普通の狐、六号が兔（白）、七号が馬（恐ら

く)、八号が羊(耳だけでなく小さな角付き)だ。十号はネズミ。
ちー姉さんは、喜んでくれるかね？

side 織斑 千冬

息を大きく吸い込んで、吐く。それを五回繰り返してから、ゆっくりとドアのノブに手を伸ばす。

最近の一夏は、私が帰るときは確実に獣耳をしていた。

時には犬、時には猫、時には羊、時には狐、時には兎と種類は様々だったが、それらは毎回私の愛の奔流を呼び起こしてきた。

故に私は深呼吸をして、今までの一夏の姿を思い浮かべる。

……よし。愛の噴出は無い。これで私はまだ戦える！

「あ！お帰りちー姉さん！」

……そう思っていた頃が、私にもあった。

窓から差し込む夕焼けの光を反射して、黄金色に輝くのがった耳。

ゆらゆらと大きく揺れながら、キラキラとした光を反射している九本の尻尾。

そしていつものことながら、実に嬉しそうな一夏の微笑み。

それに良く見てみると、今回はなんと頬には片側二本ずつの長い髭のオプション付き。

「……………ちー姉さん？」

その言葉を聞き終わった後、私は三十秒も持たずに意識を飛ばされた。

……………く……………これも禁止せねば……………っ！

その事を伝えた時、耳と九本の尻尾が一斉にしゅんとしたのを見てまた撫で回したことは、当然言うまでもない。

修行中、覗くべからず（前書き）

そろそろ本編と云うか原作開始まで行こうかなあ……

修行中、覗くべからず

修行の内容。それは、ラカンの身体能力の中に含まれている『気』の使い方に関してだ。

原作でラカンは気を使って様々な事をしてきた。例えばISのシールドバリアーを抜いて絶対防御を発動させられそうな斬魔剣式の太刀や、気を圧縮して撃ち出すラカン・インパクト。瞬動もそれに入るだろうし、何より肉体強化だ。

外見はともかく、中身のスペックは同じ俺だができないことはある。それは恐らく、今までに気を使つての修行をしてこなかったからだと思ひ、こうして修行することにしたわけだ。

……訳なんだが…… 本当に気合いとノリと勢いと根性で大体の事はできるのなこの体。びっくりだ。

しかも最低限だからどんだけ寝ててもそれ以下にはならないし。

ちなみに一番驚いたのは、気合いで心臓止めたままでも五時間くらいなら普通に行動できたこと。これなら夏場に鈴を抱いて寝れるな。鈴暑い嫌いだけどこれなら暑くないし。

……心臓止めると体が勝手に冷えてくのな。呼吸も止まるし。それも五時間くらいまでなら無理なくいける。無理すれば多分半日いける。夏場にはほんと重宝することになりそうだ。

……なんて言っても周りからはただ寝ているようにしか見えないだろうが。

「いつくん？ ……なんだまた寝てるのか」

ちようど今の束姉さん見たいに。

……一応、ドアに張り紙しといたんだけどな。入るべからずって。

……束姉さんだし、仕方無いか。

「……あれ？ いつくんなんかちっちゃくなってるない？」

ああ、なってる。基本は前に言った辺りなんだが、ある程度調節できるといい。すごいなこの体。

ちなみに現在百二十。鈴よりちょっと低いくらいだ。

束姉さんはそんな俺に嬉々として膝枕をする。見えないが多分膝枕とすりあえず近付いてきてくれたので抱き締める。

……束姉さんって運動してないわりには腰回りとか細いよなあ……今の縮んだ俺でも楽に腕が一周するぞ。

………あゝ、眠い………すか………。

side 篠ノ之 束

いつくんが寝ているところにお邪魔する。寝ているときは、起こさうとしなければ大体の事をいつくんはさせてくれる。

例えばちっちゃくなりたいいつくんのほっぺをぶにぶにしたり、さらさらの髪を撫でたり、いたずらでお化粧させてみたり（凄く似合っ

てた)、獣耳十一号の竜の角を装着してみたり、十二号の白猫(首輪と鈴と肉球付き)を装着させてみたり……おっといけない愛が溢れちゃうところだった。

ちなみに白にゃんこの時に頭を撫でてみたら、ほっぺを私の手にすりすりと擦り付けてきて、

「……うにゃ……」

……つと、思い出し愛が。まったくいっくんの可愛さは犯罪だよ犯罪。こうなったらもうお持ち帰りしちゃうしか……

「たばね？」

ぎゅーん！

side 織斑 千冬

一夏を起こさないように束を肅清したあと、私は一夏に抱きつかれたままソファに座っていた。

前に五反田相手にやっているのを見た、抱きつきながら膝枕をされている状況なんだが……これはまた威力が高い。

だが、修行に修行を重ね、耐性をつけた私はこの一夏が相手でも問題はない。

「……うにゃ……」

とりあえず私は額を殴った。落ち着け私、一夏は確かに可愛いが、まだ見ていたいだろう？ 我慢だ私。

深呼吸をする。手は勝手に一夏の頭を撫でていて、こりこりとした耳の感触があったり、頭の真ん中に乗せると左右の耳が私の手を挟み込むように動いたりするが、落ち着け。これくらいならまだ大丈夫だ。

そう、大丈夫だ。問題な

しゅるり、と頭を撫でていない方の私の手に一夏の長い尾が絡み付いてきた。

一夏の尾は私の手のひらの中を通り抜け、腕に絡み付く。

………落ち着け、このような修羅場などいくらでも潜り抜けて来ただろう。

思い出すのは白騎士を駆り、東のハッキングによって発射されたミサイルを撃ち落としたあの日の事。あれに比べればこれは

「………んう………」

一夏が私の膝に頬をすりすりと擦り付ける。

………五反田は、良くこれに耐えたものだ。

私には………無理だ。

………しかし、一夏に血をつけるわけにはいくまい。

私は近くにあった袋に穴が開いていないかを確認する。………穴はな
いか。よし。

愛が噴出した。

文化祭、ゲリラライブだ！

以外と好評でした、まる。

……駄目か？

「駄目よ。ちゃんとしなさい」

「……しかたねえなあ……」

そう言いながら鈴に抱き着いてみる。心臓止めてるから暑くはないはずだ。

……さて、それじゃあ文化祭のところから話すか。

…………眠いから夢の中だな。

……すか……。

「よし、上手くなったし文化祭でライブをやるう。たしか屋上はなにもなかったはずだから、そこで」

「いきなりね。」

「一夏だから仕方ない」

「そうね。一夏なもの」

「一夏だしな。仕方ない」

随分な言いぐさだなまったく。別に問題は無いから構わないが。

それから全員の空き時間を合わせて、放送機材をジャックする。やり方は秘密とすること。演奏する曲の楽譜を用意して、全員で一度流してみても問題がないことを確認。こういうのは準備段階がちゃんとしてないとつまらないからな。

バレないようにするには五曲程度が限界だから、その程度に。扉は向こうからは開かないようにしたし、問題ない。観客は俺達が始めた時に偶然そこにいた客と、文化祭に来ていた客。というか学校にいる全員だ。

「……うっわぁ……無茶するわねえ……」

「ふふふ……でも、その方が楽しいだろ？」

「……否定はしないわ、つてなに撫でてんのよ」

「ん？ 鈴は素直でかわいいなって思ってた。好きだよ？」

「私も一夏が好きよ？」

「……おーい、いい雰囲気なのはわかったからクラスの方の準備もしようぜー……」

弾に呼ばれて仕方無く移動する。耳はついてないがまた小さくなつて。

「……何で小さくなんだろうな？」

「……すか」

「歩きながら寝るのはあぶねえぞ……」

弾が背を貸してくれたのでありがたく乗る。

……おお、いい感じの揺れだ。眠気がさらに増して……すか……

起きたら何故か頭に十三号の狸耳、腰には尻尾がくっついていて、周囲が真っ赤に染まっていた。

とある女子生徒は壁に頭をガンガンとぶつけながらなにかを呟き続けていたし、男子生徒は二割ぐらいが姿を消し、五割ぐらいが血塗れで倒れ伏し、三割ほどが鼻を抑えてうずくまっていた。

「……………わう？」

「ぐべらっ！？」

なんとなく口をついた言葉が響いたら、何故かうずくまっていた男子生徒の殆どと女子生徒の七割が真っ赤になり、幸せそうな顔で血を噴き出した。

「……………なあ、何でこうなったんだ？」

「……………つまり、お前は可愛いつてことだよ、一夏」

へー……………あんま嬉しくねえなそれ。

そう考えていると、弾と鈴の二人に撫でられる。

「……………尻尾は……………優しくな……………？」

「お、おう、すまん」

……………はふう……………。

……………すか……………。

今日はお兄の学校の文化祭。日曜で暇だったから行ってみた。
なんの期待もしてなかったんだけど、そこで私は、運命とも思える
出会いをした。

お兄がバンドをやっていたのは知っていた。ある時お兄が楽しそう
に話していたのを聞いたから。
でも、あのお兄がこんなに上手にドラムを叩いているなんて信じら
れなかった。

けれど、何より信じられないのは……一人だけ使う楽器をこころ
変えているお兄と同じくらいの男の人を見たときに起きた。

その人を見ると、いきなり心臓が跳ね上がったような衝撃が私を貫
いた。

そしてその衝撃が薄れてくると、今度は何かがぎゅうつと胸を締め
付けてくるような感覚が私を襲う。

私は今まで、一目惚れという物を信じてこなかった。それどころか、
『そんな物があるわけ無いじゃん』と馬鹿にしていた。

……そのときの私は、今思うと凄く馬鹿だった。
なぜなら、今、私はそれを体験しているから。無いとあの時断言し
た、一目惚れを、体験しているから。

その人は、お兄の所に行ったり鈴さんの所に行ったりしながら、楽
しそうに歌い、嬉しそうにベースを弾き、そしてきれいな笑顔で私

を見つめていた。

その日は眠れぬ夜を過ごした。目を閉じるとあの人の笑顔が浮かび上がってきて、どうしても眠れないのだ。

どきどきといつもより騒がしい胸を抑え、私はこれからのことを考える。

まずは、お兄にできるだけ詳しくあの人のことを聞こう。名前や歳、好きな食べ物嫌いな食べ物、生年月日などなど、聞きたいことはたくさんある。

そして願わくば、未来であの人の隣に私が立っていますように。

……………その場面を想像しただけで、頭が沸騰しそうになった。

絶好の昼寝日和、故に寝る

獣耳第十六号、ヤマネを着けるといつも以上に眠くなる。ちなみに十四号はリス、十五号は鼯。どれも大きな尻尾に包まれ、丸くなって眠るのがいい。ヤマネの尾は少し細いが、それでも人間サイズともなれば十分に掛け布団くらいには使える。

鈴や弾にはよく尻尾を撫でられたりいつもとは逆に抱き締められたりしているが、他人の感触があると気持ちよく眠れていいよな。二人とも最近では撫で方が上手になってきて……はふう……。

「ツ……一夏？ そんな顔したら襲われちゃうわよ？」

「……んー……鈴と弾なら別にいいぞー……」

「いや俺は襲わねえぞ？」

へー……。まあ、それならそれで一向に構わないけど、鈴はなんか割と本気で考え込んでるぞ。

「……そんなこと言うと……ほんとに襲うわよ？」

「鈴、待つんだ鈴。ここ俺んちだからな？ 俺の部屋だからな？」

やらせねえからな！？」

なぜか鈴が怖くなったので、尻尾にくるまりながら転がって離れる。

「……っ！」

鈴が鼻を抑えてうずくまった。ぶつぶつと落ち着け落ち着けと唱えているように聞こえる。

「……何やってんだよ鈴……」
「……五月蠅いわね。あんたには見えてなかったからそんなことが言えるのよ……」

……何が見えてたんだろうな？ ……おっと、シャツの裾がめくれ
て臍が出てた。風邪引きたくないし、しまっところ。原因

「……ああ、なるほど。あれか」
「……わかってくれたみたいね」

ごそごそと服を弄っていたら、弾と鈴に何らかの相互理解が生まれ
たらしい。詳しくは知らないが、別にいいよな？

「いいと思うわよー。だからはい、こっちに来る」
「おい鈴ー。わかってるだろうがそこ俺のベッドだからなー？
一夏に抱かれて寝るだけだったらともかく、それ以外には貸さねえ
ぞー」

「じゃあ大丈夫よ。私は抱きついてくる一夏を撫でて悦に浸るだけ
だから。ちよつと血で汚れるかもだけど」

「汚すなよ」
「……すか……んっ……」
「……無理かも」
「使つな起きろ」

一夏の長くてふさふさな尻尾を布団がわりに私と一夏は寝ている。弾には悪いけど、最近一夏は弾に抱きついていることが多かったから我慢してもらおう。

「いや、構わねえよ。鈴が一夏のこと好きだっつてのはよく知ってるからな」

「ありがと弾。友人としてだけど、弾のことも好きよ？」

「俺もだよ、鈴」

……あれ、確かこんなの一夏ともやったわね。と言うか一夏は私や弾以外にも言ってるわね。千冬さんとかクラスの友達とか。

……なんだかちよつと胸が痛いわね。嫉妬？

そう考えていたら一夏の尻尾が私の体を引き寄せて、ぎゅっと一夏に密着させた。

もふもふとした感触と、一夏の腕に包まれると……なんだか私まで眠くなってくる。

「眠くなったなら寝ちまえ。一夏が起きたら起こしてやる」
弾がそう言ってくれたので、私は安心して意識を手放した。

side 五反田 弾

鈴が一夏と一緒に俺のベッドで寝始めてから少し。俺は寝ている二人（基本は一夏）の頭を撫でていた。

一夏曰くの十六号、ヤマネの尻尾は鈴によって抱き締められ、一夏自身はその鈴を正面から抱き締めて、幸せそうな顔をして眠っている。

……とりあえず写真を撮ろう。そして後で鈴に携帯で送ろう。千冬さんにも送っておいた方が良いか。

手に持った携帯電話のカメラを起動し、上からの全体、一夏と鈴のバストアップ（ツーショット）、一人ずつの顔のアップなど、五種類ほど撮ってから保存して携帯を閉じた。

……なんと言うか、こいつら絵になるよな。

写真を撮り終わってからまた撫でる。丸い耳が掌の中でくりにりと潰れ、その度に一夏は潰されていない方の耳をピクピクと動かす。

……ビデオ撮るか。ハンディカメラどこにやったか

ああ、あった。

中身のテープを確認。中身なし。よし、録画開始。

一夏を撫でる。ヤマネの耳がピクリと跳ねて、一夏がくすぐったそうな顔をする。

それだけでは飽きるので（とか言いつつ十五分以上それだけを続けていたんだが）、髪を撫でながらゆっくりと手を下に滑らせて行く。ヤマネの耳から一夏本来の耳へ……つかしいな……俺は耳フェチじゃあないはずなんだが……何でこんなにも一夏の耳に心引かれるんだ……？ ……とにかく移動する。指先に耳たぶの柔らかさが伝わり、一夏の喉から甘ったるい喘ぎ声に似た何かが……落ち着け俺。

……落ち着いた。深呼吸の力は偉大だな。流石深呼吸だ。

一夏を撫でるのを再開する。耳の縁をなぞり、耳たぶを優しく撫でる。気が済んだのでまた少し下へ。頬を撫で、顎先に向けて指を滑らせる。

「……………ん……………つ……………く……………ん……………」

鼻にかかったような一夏の鳴き声（合ってるのか？）の直後、一夏の顎先を撫でていた俺の指が一夏にくわえられていた。

……………おい俺。なんで別に嫌じゃねえんだよなんでアリだなとか思ってたんだよ考え直せよ俺。確かに一夏は可愛いが、男だぞ？ バンドの時のこいつを思い出せ、あんなにかっこいいじゃないか。確かに今は可愛いし、愛らしいし、守ってやりたい気分にはせられるが、ってよし待て俺、なんでいつの間にか意見が肯定の方に進んでいってるんだよ。だから一夏は男で俺も男で非生産的なこ

「……………ん……………ちゅむ……………はぶ……………」

……………ここから先の記憶は無い。ただひたすら壁に頭をぶつけ続け、蘭にまで心配されたという記憶はあるが、それ以外のことは覚えていない。

ちなみにこの日、一夏と鈴は帰るのが遅くなり、半ば事後承諾で泊めることになった。

そして鈴が帰った後、携帯で例の写真を送ってやったんだが返事がなかった。学校で会ったときに聞いたら、愛情が溢れてしまったら

し
い。

一人の夜、夢見る俺（前書き）

新キャラ登場

一人の夜、夢見る俺

ちー姉さんが帰ってこない日は基本一人寝をするんだが、やっぱり寂しいんだよな。

どのくらいかと言っと、

「やつほーいっくん！床下からプリティーチャーミーな東さんだよ」

そう言っつて床下から現れた東姉さんを

ガシッ！（東姉さんの襟首を掴む）

ズルズル。（引きずってベッドへ）

どさっ。（ベッドに放る）

ぎゅっ。（抱き締める）

……そしてこのまま寝るくらい。

いつもだったらもう少し文句なりなんなり言うんだが、俺は自分の想像以上に寂しがりらしいな。前世じゃそんなことなかったはずなんだが………まあ、どうでもいいな。おやすみ。

しかし、もちろんこうならないときもある。東姉さんはちー姉さん以上にここには来ないし、他に来るやつも居ない。鈴や弾は泊まる

ことはまず無いし、カズはカズで来ない。他のやつは呼ぼうとも思わない。

仕方無く抱き枕やクッションを抱いて寝るが、どうにも味気ない。まあ、それでも寝るんだが。

side 一夏、夢の中

俺がいる。もう慣れてしまった織斑一夏の姿の俺だ。懐かしき桜道一哉の姿の俺はいない。

……まあ、別にいいけどな。

そう思ったら、いつの間にか織斑一夏の姿が増えた。俺も不思議そうな顔をしているだろうが、向こうの織斑一夏も負けず劣らず不思議そうな顔をしている。

なんとなく手に持った三毛猫耳をつけてやったら、その一夏《俺》はニコニコと笑い始めた。

その後ろにはなぜかまた一夏《俺》。まるで順番待ちをしているかのようだ。

俺は三毛猫耳をつけた一夏の頭を三秒撫でてから、一夏へ向き直る。またもやなぜか俺の手の中にあつたのが犬（これは多分コヨーテ。なんつーマニアックな）耳を付けて、撫でてやる。

するとコヨーテ一夏はぴくぴくと耳を動かしながら俺の手に押し付けるように頭をぐりぐりと動かした。

しかし次の一夏が待っていたので俺はコヨーテ一夏の頭から手を離

す。元気よく振られていた尻尾とどがつていた耳がしゅんと萎れたが、俺はコヨーテ一夏を三毛猫一夏の方に行かせて次の一夏に顔を向けた。

コヨーテ一夏は少しの間俺を見上げていたが、やがて諦めたのか三毛猫一夏に抱きついて眠り始めた。

そして俺はまた手に持っていた……ライオン(?) 耳を一夏につけてやる。細長く、先だけがふさふさな尻尾がいつの間にか装着され、俺の足に絡み付いている。

そんなライオン一夏を撫でて、また次の一夏へ。……全く、俺にしては妙なことをしているな。

こうして次から次に出てくる一夏に耳を装着し続けていたのだが、百七人の一夏に耳をつけたところで一夏が出てこなくなった。しかし俺の手にはまだ耳が一つ残っている。……これは多分、ボルソイ犬だな。

一応、自分につけてみる。するともう手に獣耳は出てこない。

俺は先に行かせた一夏達の所に行く。すると一夏達はそれぞれいくつかに固まって眠っていた。人気があるのはヤマネ一夏とリス一夏、鼬一夏、熊(北極熊)一夏、犬(恐らく黒ラブ)一夏などの暖かく柔らかな毛を持っている一夏だった。

そこに俺が行くと、ふっと目を醒ました何人かの一夏達が俺の所に寄ってきた。

俺は寄ってきた一夏達を抱き締めて眠った。いつの間にか俺を中心に円形の一塊になっていたが、暖かいので問題ない。

俺の腕の中で、チワワ一夏が鼻をびすびすと鳴らしていたり、背中

にハムスター一夏がぴったりとくつついてぶるりと震えることもあったが、俺を含めた一夏達は一人も起きることはなかった。

目が覚めると、朝だった。一人寝だったはずなのに、なぜか腕の中だけではなく背中も暖かい。

目を開けると、身長三十五から四十五センチの俺がいた。周りを見渡してみると、どうやら三人居るようだ。全員に獣耳が生えていて、それぞれ秋田犬一夏、白猫一夏、黒兎一夏のようにだった。

……へー、束姉さんの獣耳は凄いな。まさか体を持つようになるなんて。

とりあえず俺は起き上がり、朝の飯を作る。簡単にだが、それで問題は無いだろう。

小さな一夏達を起こして飯を食わせ、それから面倒だけど学校へ。

秋田犬一夏は俺の腕の中、黒兎一夏と白猫一夏は留守番をしている。

……どうなることやら。割とどうでもいいけど、少し気になる。

side 鳳 鈴音

学校で一夏に会った。いつも通りに挨拶しようとして………そこから記憶がない。ただ、犬耳（秋田犬）をつけた一夏が小さな一夏、略してぶちかを抱き締めていたのは覚えている。

弾がぶちかを撫でたら、ぶちかが弾に甘えるように指をなめて、一

夏が弾に寂しそうな顔を向けて撫でてもらっているのも見た……気がする。ちなみに周りは血塗れの地獄絵図（鼻血）、誰もが一夏とぶちかの魅力にやられていた。先生？ ぶっ倒れてたわよ？ 確か。それから私は一夏にぶちかを抱かせてもらって、ぶちかを撫でていたらぶちかが私の指をぱくつと……。起きたら保健室だったわ。隣にいた一夏を見る限り、弾もきつとやられたわね。

side 五反田 弾

ぶちか（鈴命名、既に広まっている）を鈴に預けた一夏は、今は俺の膝の上で座ったまま寝ている。

ぶちかの三倍程度しかない（また少し小さくなってないか？）一夏の頭を撫でると、一夏はくすぐったそうに身をよじる。

ばたばたと尻尾が俺の腹を撫でて少しくすぐりたいが、それ以上に一夏が可愛くて仕方がない。

「……………くん……………」

……………もう俺変態でいいや。一夏が可愛過ぎるのが悪い。

いつもは抱き締められてばかりの一夏の腕を押さえて、代わりに俺が一夏の体に腕を回す。

男としてはかなり華奢な体を抱き締めると、一夏はもぞもぞと動いて俺の体に一番フィットするところを探して移動する。これがフィッティングか。なるほどなるほど。

しばらくして納得の行く位置を見つけたのか一夏は動きを止め、俺の体に体重を完全に預けた。

「……………だぁ……………」

一夏はそう言って、首もとにあつた俺の手に頬を擦り寄せた。

……………ぐがふっ！？

起きたら保健室に居た。隣にいるぶちかを見る限り、鈴もやられたらしい。

一夏が可愛すぎて、生きるのが辛い人達

side 織斑 千冬

家に帰ると、いつも通りに一夏が出迎えてくれる。……今回は山猫か。

犬のように尾をブンブンと振られる事はないが、これはこれで私の脳髓を直撃してくる。

それは例えば食事中。猫系統の耳をつけている一夏はなぜか本当に猫舌になるらしい。しかしいつもは普通に食べているため、食べるから目を白黒させる。

そのすぐ後に涙目になって熱いスープにふーふーと息を吹き掛けて冷ましている一夏は、実に可愛らしい。

その他にも、例えば食事も洗い物も終わり、暇になった時間。一夏は大抵私の膝の上に頭を乗せて丸くなる。その際にしなやかな尻尾を私の腕に絡めてくることがある。

その尾を撫でてやればくすぐったそうに鳴き（これが一番正しい表現だろう）、頭を撫でる手に頬を擦り寄せる。

少し尾に爪を立ててみるなどの悪戯をしてやると、ぞわっと尻尾の毛を逆立ててから泣きそうな目で

「……や……やあ……」

と懇願してくるのだ。

この時の一夏はなんと言うか、守ってやりたいと思うと同時に、も

っと苛めてやりたくなくなってしまっ
しかし、あまりやりすぎると拗ねて自分の部屋に閉じ籠ってしまっ
ので注意が必要だ。その拗ねた姿もまた可愛いのだが。

猫一夏は何故か猫舌になると言ったが、それ以上に大きな違いがあ
る。それは、猫一夏の舌は本物の猫のようにざらざらとしているの
だ。

それに気がついたのはしばらく前のこと。白猫一夏を膝にのせて顎
先を撫でていた時に、少し手元が狂って一夏の唇に触れてしまった
事があった。

その時にぺろりと指先を舐められ、そして私は一夏の舌がざらつい
ていることに気が付いた。

ちなみに犬の時の一夏の舌はざらつきが少ないが、妙に熱い。だが
私はそれらに関係なく、一夏への愛情を滴らせるのだった。

……まったく、可愛い奴め。

side 鳳 鈴音

「これより、IEEE《いっぱいいっぱい一夏》の月例会議を行うわ。
欠席者は？」

「赤崎が一夏の寝顔写真（ぷちかと一緒）を秘密裏に所有していま
したので粛清しましたが、他には」

「そう。わかったわ」

まったく。一夏の寝顔写真の不法所持ですって？ そんなことをしたら肅清されるとわかりきっているのに、どうしてそんなことをするのかしらね？

「今回の議題は、新たに現れたぶちかについてよ」

周囲からざわざわとした声が出た。それが止むまで無言を貫くけれど、それは数秒で必要なくなった。

「協力感謝するわ。それでぶちかの話だけど、今までに一夏が学校に連れてきた七種の他に、少なくとも三種が居ることが一夏の言葉から判明したわ」

『なっ！？』

流石のみんなもこの報告には驚いたらしく、十秒過ぎた今でもざわざわが収まらない。

「そんな馬鹿な！それでは我々の体が持たないぞ！？」

「いや、それ以前の問題だ！存在を知っているのにその姿も何も知ることができないと言つのは由々しき問題だろう！」

「静かになさい」

私が呟くと、一斉に静かになった。一夏と一緒にやった発声訓練はこういうときにも使える。

「種類とおよその生体については調べがついているわ 弾」

「おっ」

ざわっ！と動揺が広がりかけるが、弾が持っている写真を見た途端

に全員が鼻を押さえた。

「……見てわかると思うけど、垂れ耳わんこなぶちか達よ」

ちなみに私は直視はしていない。一夏の前だったらともかく、一夏のいないところでこれを見たらどうなるかわからないから。

その点、弾はすごいと思う。あの一夏を見てもその愛の全てを体の中に押し止めることができるなんて、あの千冬さんでも無理なことをやってみせる。

……最近は何となく一夏の父親になった気分だからと言っていたけれど、それでも可愛さに発狂しかけることもあるそうだ。

魔性の男ね。一夏。

さよなら、またいつか

……さて、今日は残念なお知らせがあるぞ、俺。

なんと、ベスト抱き枕トップスリーの一角、鈴が中国に行ってしまうらしい。実に悲しい。

ちなみに一位はちー姉さん、三位は弾。それ以降は秘密だ。

秘密にした理由？ それも秘密。

とりあえずその事を聞いてすぐにお別れ会を開いてみた。ちなみに主催は俺。会場は俺の家。メンバーはバンド仲間と蘭ちゃん。鈴と仲の良いやつばかりを集めたつもりなんだが、実際のところもう少し居てもよかったのかもしれない。

鈴は中国まで行かなければいけない理由を話したがらないので、俺は聞かない。

それは面倒だからって事もあるが、聞いたところでなにも変わらないうし、それ以前に一応知っているから。原作は七巻までしっかり読んでたからな。アニメは見てないけど。

しばらく会えなくなるわけだし、無理矢理でも涙よりも笑顔の方が良いだろ。

「……ありがとね。一夏」

「気にすんな。たぶんまた会えると思うしな」

俺が原作通りに動けば。

……仕方無い。動くか。束姉さんの手の上で踊るとか怖すぎるけど。

「それっていつもの『なんとなく』かしら？」
「そうだな。『なんとなく』だ」

……いつもの勘とは違って、今回はなんとなくと言う名前原作知識だが。

それでもまあ、鈴が笑ってくれるんだっと思ったら言った甲斐があったかね。まだ半分泣いてるけど。

「……そう。それじゃあきつと、また会えるわね」

「信用してくれて嬉しいよ」

「信用じゃなくって信頼よ」

騒ぎながらもぽつぽつと話は続く。

「弾とはまた会えるかな？」

「さてな。会おうと思えば会えるんじゃないか？」

原作には無かったからな。わからん。それに俺が織斑一夏になってるせいでその原作からも外れてるだろうし、そもそも俺がISを動かせるかどうかもわからない。

……動かせなかったら動かせなかったで別に良いけども。それだけトラブルには巻き込まれなくなるだろうし。

ただその場合は次にいつ鈴に会えるかわからなくなる。やれやれ困ったな。

「ああそうそう、はいこれ饞別」

「え？ なにこれ？」

「お？ なんだもう渡したのか？」

「開ける開ける」

その中身を知っている弾とカズがにやにやと笑いながら鈴に渡したばかりのそれを開けとせかす。

鈴は少し慌てたように指を動かしてその包みを開けた。

「……………これって……………」

驚きの声を漏らした鈴に種明かし。

「今までに俺達が演奏してきた曲のCD。特別編として蘭ちゃんの『トエト』も入っている世界に五枚だけのCDだ。大切にな？」

ちなみに弾が歌ってるのも俺が歌ってるのもカズが歌ってるのも鈴が歌ってるのも複数で歌ってるのも入った特製。中身は九十七分十二秒。

それを見て鈴は、ぽろぽろと涙を流し始めた。

「向こう行っても俺たちのこと忘れんなよ？ 会長さん」

弾がにやりと笑いながら鈴の肩を叩いて言った。鈴はコクコクと頷いたが、声がでないようだった。

「また俺達のバンドで歌ってくれよな、副リーダー」

「うん……………うん……………」

カズは肩を叩いたりはしなかったが、鈴と視線を合わせて言った。鈴はまたコクコクと頷き、そして涙声を隠すこと無く返事をする。

「鈴さん。これだけは言っておきます。……早く帰ってこないと、一夏さんを取っちゃいますよ。……だから、それが嫌なら……早めに一夏さんに顔を見せに来てください」

「……ふん。蘭のくせに……生意気ね。わかってるわよ」

「……ならいいんです。……お元気で」

「……あんたもね」

蘭ちゃんは目を擦って涙を払い、それから鈴に宣戦布告。ただ、なんか原作と比べて鈴だけじゃなく蘭まで大人になっている気がする。

……それでも俺はスルーするんだが。

「……言いたいことは大体言われちまったんだが……また会う時まで元気でな。鈴」

「もちろんよ。……絶対また、会いに来るから」

もう涙の浮かんでいない目を合わせると、そこにはいつもの大人で勝ち気な鈴の姿があった。

ごつつつ、と拳を合わせて、それからまた弾達と騒ぎ始める。

俺はいつもよりちよつと手のかかった料理を鈴達に振る舞い、俺を含んだ五人はいつもよりハイテンションで夜を明かした。ちなみに全員徹夜で次の日ふらふらになっていたが、誰一人として後悔はしていなかった。

もちろん飛行場にも行く予定（学校はサボり。蘭ちゃんを除いた三人だけ）ではあるんだが、飛行場ではこういう宴会のような事はできないし、周りに迷惑になるので自重した。

そして飛行機に乗るためにトランクを引っ張って行く鈴は

「一夏！弾！数馬！」

俺達に振り向いて、一呼吸。

「またねっ！」

とても綺麗な笑顔をしていた。

「……行っちまったな」

「……ああ。そうだな」

鈴の乗っているだろう飛行機を見上げながら弾が眩くと、数馬が少しだけ寂しそうに返す。

「まあ、またすぐ会えるさ。具体的には一年半もしないうちに」

「……それは……いつもの勘か？」

鈴と同じことを聞いてきた弾に、俺はニヤリと笑って返す。

「いや。いつも以上に当たる気がする勘だ」

……さて、帰るとするか。学校には休みの連絡を入れてあるし、問題ないだろ。

受験受験、そして原作までもう少し

鈴が中国まで行ってしまっただけからもう一年。学校がつまらなくなっ
てしまったが、そろそろ中学卒業だ。

弾はさつさと推薦を取っていったので受験勉強には縁が無かったが、
俺には普通に縁がある。

原作で『織斑一夏』が行こうとしていた藍越学園を受験することに
しているが、恐らく束姉さんが何か介入してくるんだろうと思っ
ている。

……まあ、介入があつたらあつただけ原作通り、無ければ無いで睡眠
時間が美味しいことになるから別に良いけど。

……それにしても迷惑な話だ。カンニング防止のためなのはわか
るが、わざわざ四駅も乗らなくっちゃ行けねえんだよ。カンニング
した奴もげろ。男か女かも知れないが色々もげろ。

あゝ、めんどくさい。

そして結局、俺はIS学園の試験会場でISを動かす、かなりの有
名人になってしまった。

……買い物に行くときにはライアーズマスク装備、家の周囲には常
時チャフ、帰る時にはシルバーカーテンを使って姿を消す。まるで
犯罪者が身を隠しているかのようだ。

ちなみにチャフだが、武装な錬金の原作では水滴をあらかじめくっ
つけておいたから霧になったと書いてあったので、水をつけずに散
らしている。俺の家に勝手に入ってくる奴は居ないし、ちー姉さん

は帰ってくる日には連絡を入れてくれるため問題ない。
それでもテレビ局やどこその科学者が連日押し掛けてくるのでカメラを壊したりマイクを壊したり銃の装填されていない弾の雷管部分でチャフを爆破したりするなど利用法はまだまだある。

……さて、やれることはやっておくか。

電話を掛ける。相手は束姉さん。確か原作の『織斑一夏』のISは束姉さんの手が入っていたはずなので、今から色々とネタを仕込んでおいてもらうことにした。

「もしもし束姉さん？」

『いっくん！久し振りだね！元気かな？』

「……知ってるでしょうに。束姉さんのお陰で色々大変ですが、まあ元気ですよ」

『あ、わかっちゃった？』

「まあ一応」

……とは言え、原作を知らなかったら偶然だと思っただらうけど。

「それで、多分日本政府から専用機が来ることになると思うんですけど、改造してもらえませんか？」

『いいよ。元々やる気だったしねー』

軽っ！

……まあ、束姉さんだし仕方無いか。俺の身長が伸び縮みするのと同じようにしょうがない。

『どんな風に改造してほしい？』

「ちょっと長くなりますけど、良いですか？」

『時間はいっぱいあるから大丈夫だよー。東姉さんにまかせなさい！』

やれやれ。いつまでたつても滅茶苦茶な人だな。俺が言える台詞じや無いが。

機体のコンセプトは、当たつたらほぼ負けだから当たらないように頑張れ。つまりは機動力と反応速度の特化。ついでに原作に登場したとある武器を魔改造した物を標準装備。ただし防御は紙。耐久も紙。

『うふふふ、いつくん。この私が作る物がそんな不細工なものだと思つのかな？ 私は完璧にして十全な篠ノ之束だよ？ そんな欠点なんて残すわけないじゃない』

「……えーと……コアの容量の方は？」

『小さいやつを直列で四つ、並列で五つの計二十個のコアをひとつに繋げてやれば大丈夫さつ！』

……いやまあ確かにそうすれば容量は大丈夫だろうが………良いのかそれ？ てかその前にそんなことできるのか？

………できるんだろうなあ………東姉さんだし。

良くなかつたら良くなかつたで無視してやるんだろうなあ………東姉さんだし。

「………流石は大天才にして大天災。ちょっと真似はできないや」

『私もいつくんのあれは真似できないよ？ 自信を持って！』

「ぐらぐらぐら」

『わー揺れるー』

束姉さんはノリノリで返してくれた。

「あれ以外の武器はこっちの方で何とかしますので、よろしく頼みます」

『おっけい！泥舟に乗ったつもりで待っててねえ？』

「沈みますよそれ」

それで電話は終わり。後は……

ちらりと分厚い参考書（原作だと資源ごみに出されたあれ）を見る。

……読むか。仕方無い。

side 篠ノ之 束

久し振りにいっくんからかかってきた電話。やっぱりいっくんはとつても鋭かった。いつもはあんなに可愛いのにねえ？

いっくんは私のやったことに何となくで気付いて見せた。なにか隠しているような気もするけど、そのへんはいいや。

いまはいっくんに頼まれたISをつくる。それが大事。

何て言ったっていっくんのお願いなんで久し振りだからね！束さんは頑張るよ？

コアを新しく作るころから始めて、それを既存のコアと組み合わせるから一週間はかかっちゃうけど、時間がかかる分いいのを作ってあげるからね。期待して待っててね。

ぱらりろぱらりろへろへろ

むむっ！この着信音はあーちーちゃん！

原作開始、つまりは入学

入学式の前に荷物を用意しておく。主に着替えと洗面用具。あと鈴達の曲の入ったCDとCDプレーヤー。他の物は千の顔を持つ英雄でなんとかなるので置いていく。獣耳？ 着替えの中に入っているが？

使い慣れた包丁も持っていこうかと思ったが、それは流石に不味いと思つて自重した。武器だと言われちゃ面倒臭いしな。

……原作ではラ……ラ……眼帯黒兔（名前を思い出すのを諦めた）が軍用のナイフを持ち込んでいたが、別にどうしても必要と言うわけではない。出せるし。

……さてと。そろそろ出発するかね。IS学園に。

……ふぁ……ねむ……。

現在の俺の身長は百三十八センチ。テレビや新聞に出ていた俺の写真は普通に起きていたので百八十一センチほど。明らかに違うんだが、本人だと言つ証拠もあるし信じるしかないわな。俺はなんでも構わないけども。

そして入学式では立ちっぱなしで寝ていた。生徒会長がなにか言っていないかったような（言っていないかった、で正解）気がするが、どうでもいいわぁ………ついでに一組、一番前のご真ん中、原作通り。

背は小さいけどな！寝てるけどな！周りとか完っ全に無視してクツ

シヨン（千の顔を持つ英雄）を枕にしているけどな！

ちなみに話は聞いている。副担任の……や……や………八坂真耶先生。お、これ当ってんじゃないかね？

……いや、無いな。名前の方は二文字だから覚えただけど、名字の方は確実に間違ってるな。断言できる。自慢はできないけどな。

「織斑くん。織斑くんの番ですよ？」

……ああ、自己紹介ね。了解。

ゆっくりと体を起こし、欠伸を一つ。小さくなっているときの欠伸はまるで小動物のようだと言われていたが、何でもいいね。

ちなみに声も高くなるため、歌を歌う時の音をとるのが楽で良い。

……あ、ののちゃんみつけ。

「……………ふあ……………はぶ……………」

こしこしと優しく目を擦る。痛いのは嫌だからな。

「……………ぐっ……………」

「かはっ……………！」

数人鼻血を出し始めたが……平気かね？ 平気だな？ よし平気。

「あ、あの、起こしちゃってごめんね？ でも、自己紹介で『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だから、自己紹介……してくれるかな？」

……おお。原作よりちょっとしっかりしてる。これは俺が子供みた

いな顔と背をしてるから意識してないせいだろうと思う。
そんな……真耶先生に頷きを返し、立ち上がった後ろを振り向く。
……眠い。

「……大半の方には始めまして。約一名にはお久し振り。織斑一夏
です。……好きなことは寝ること……嫌いなことは騒がれること……
……特技は……炊事。趣味は寝ることと、寝るのにいい場所を探すこ
と……以上、お休みなさい……」

くるりと回って椅子に座って、またさつきまでと同じように寝よう
として……なんとなく気配のようなものを感じた。この体って本
当にハイスペック。

……この気配は……ちー姉さんだ！

寝るのをやめて扉の方に顔を向ける。するとすぐに入ってきたのは
……やっぱりちー姉さんだった。

……学校だし、織斑先生の方が良いよな。多分。

「……ん、やっぱり」

「なんだ、驚かんのか？」

「ヒント、束姉さん」

「……あいつめ……」

ごめんね束姉さん。きっとまた何かあるよ。でも半分くらいは事実
だし、構わんよね？

……あ、周りが五月蠅くなる気がする。ちー姉さんは人気あるから
なあ……。

久し振りに見た一夏は、本当になにも変わっていなかった。態度も、声も、なにもかも。

ただし身長は伸びたようだが、それでも私よりずっと低いように見える。

今も教室にいるほとんど全員の視線を平然と無視して千冬さんに眠そうだが七割ほどは起きている視線を向けている一夏に、私も視線を向ける。

……ふと、ついさっき聞いたばかりの一夏の自己紹介を思い出す。

……約一名とは……私だよな？ ぐるりと見回しただけで、私だということを知ってくれたのだよな？

そう考えると、なぜか妙に嬉しくなる。

六年。それだけあれば人間は変わる。私もテレビで一夏を見たときは誰だかわからなかった。一夏は私の前でああしてきりつとした顔を見せたことがないというのも原因の一つだが、普通はわからないはずだ。

それなのに一夏は私だと一目でわかってくれた。それはまるで当然のことであるかのように、確認するまでもないと言うかのように。

……私は一夏に覚えていてもらった。小さい頃には何度も一夏につきかかって行っっては軽くあしらわれていた私でも、一夏は覚えてい

てくれた。

……ほう、と溜め息をついて、私は一夏に視線を向ける。

……… 次の休み時間に、一夏に確認しよう。私のことが、本当に誰だかわかっているのかを。

ののちゃんと再会、金髪に絡まれる

授業について行くことはできている。一応必要そうな単語とその意味、どうやって使い、どんなものなのか。そういった基本だけは叩き込んだ。

なので、後はそうして覚えた基本を……真耶先生（名字は忘れた）の言葉に当て嵌めていけば普通にわかる。わからなかったらその時はその時で質問すればいいし、今のところ必要無いようだし。頭が四割寝ているままでも理解できているので、まあ、大丈夫だろう。

そうこうしているうちに一時間目が終わり、俺は次の時間まで夢の中で復習をするべく服の中で千の顔を持つ英雄でクッションを作り、それに頭をのせて寝る体勢に入る。周りではクッションがどこから出てきたのかとかそういうことで少々騒がしいが、このくらいなら無視できる。

……それじゃあ、お休みなさ

「ちょっといいか」

……おや。この声と雰囲気は……。

顔を上げると、そこには懐かしい顔があった。

「ののちゃん？ 久しぶりだなあ……抱きついていい？」

「なっ！？ く……貴様は本当に変わっていないようだ……」

そりゃそうだ。一応転生済みで自分としての在り方を確立させてる

んだからな。早々変わるかつての。

「それに比べてののちゃんは変わったな。ちょっと強くなった？
インターミドル優勝してたみたいだし」

新聞は見えてないけどそのくらいは覚えている。原作知識は便利だが便利じゃないな。確認しなけりゃ使えないよ。今回はしたけど。確認先は束姉さん。

「な……何で知ってるんだっ！」

「いいから寝ようよののちゃん。ほらこっち」

「よさんか人前で！いくらお前でもやって良いことと悪いことと言
うものがだな！」

キーンコーンカーンコーン……

あ、チャイムだ。俺としたことが全然寝れなかったな。まあいい、
次の休み時間はよっほどの事がない限り寝よう。

「早く席につかないとまずくないか？ 織斑先生の出席簿は硬いぞ
？」

「つつ……」

俺がそう言ったらののちゃんはひきつったような笑いを浮かべた。
想像してしまっただらしい。

……………痛そうだよなあ……………。

授業はつつがなく進んでいく。や……………（カンペを見ながら）山
田先生の説明はわかりやすくもいいな。教科書もこのくらいわかり

やすければ……いや、そんなにわかりやすい教科書があったら教師の仕事上がったりだから……これで良いのか？

……あと、束姉さんから貰った獣耳なんだが、アレも一応ISに分類されるらしい。俺は今まで当然のように使っていたんだが………平気なのか？ 兵器ではある。

……またつまらんギャグを思い付いてしまった。まあ、ISの産みの親からの許可（どんどん使っちゃってよいくん！）があるから平気なんだろう。きつと。

「あ、織斑くんは大丈夫かな？ どこかわからないところとかはある？」

……なんか俺完全に小さい子供みたいな扱いをされてないか？ これでも十六なんだけど。……今は小さいけど。

「大丈夫ですよ？」

とりあえず笑いながら言ってみる。どうやら真耶先生は右隣の誰かさんのようにいきなり鼻血を噴出して倒れることは無いようだ。

「そうですか！ 織斑くんはすごいですね！」

そう言っつて真耶先生は俺の頭を撫でてくる。……あ、やばい気持ちが良い………眠気………が………

……すか………。

「…………むらくん。織斑くん！」
「…………ふあ……………んう……………」

意識が飛んだと思ったら割とすぐ起こされた。どうやら真耶先生が体を揺らしているらしい。

「もう。いきなり寝ちゃダメですよ？」

「…………はい……………大丈夫です……………」
「わかってくれればいいんです」

原因の一つは真耶先生の手ですけどね。

あと、俺が顔を向けていた側の前の方の生徒が凄い良い顔で永眠しそうなんですが。

「はい、それでは授業を……………きゃああっ!？」

おや、気付いてなかったただけですか。そしてちー姉さん。仕方無いつて顔をしながら頷かないで。

まあ、中学時代にもよくこういうのは出たし平気だとは思っけど。今まで死人は出たことないし。気絶したことはあっただけど、重いことにはなってない。

……………それにしても眠い。休み時間になったらさっさと寝よう。

……………さてと。今度こそ寝ようか。お休みな

「ちよっと、よろしくって？」

……………お休みなさい。

……すか……。

金髪に絡まれる、凄く絡まれる

ちよろそつな金髪を無視して寝る。

「……………こほん。ちょっと、よろしくて？」

……………寝続ける。完全に無視して寝る。

「　　ッ！起きなさい！私に話しかけられていると言つのに寝続けるとは、無礼ですわよ！」

……………五月蠅い金髪だな、まったく。

体をゆさゆさと揺さぶられるが、それでも無視を続ける。寝れない訳じゃ無いしな。

「起きなさいと言っているのがわからないのかしら？」

寝てるからな。聞こえてるし反応もできるけど。

……………やれやれ。さつさと諦めてくれんかね。そろそろ鬱陶しくなってきた。原作キャラかも知れないが、俺の睡眠を邪魔する者は敵だ。

「いい加減に起きなさい！男の分際で私を無視するなど千年早いですわよ！」

……………本当に五月蠅い奴だな。さつさと終わらせるか。

「……………ふぁ……………豚が耳元で叫んでる夢を見た」

ビッキイ！とよくアニメで青筋が浮いたときののような音が響いた…
…気がした。
……気のせいだな。

そして金髪ツインドリル 本名は忘れた。セルロースだっけ？
が叫ぼうとした瞬間に、まさに今気づいたかのように話しかける。

「……誰？ ってか騒ぐなよ周りに迷惑だろ。そのくらいの気遣い
すらできないような奴は淑女とは言えないぞ？」

「な……か……くっ……！」

おやおや悔しそうな顔をさせてまあ。一応俺も三十年以上精神的に
は生きてるんだし、こうして相手の出鼻を挫いてやることくらいは
できる。

セルロース……なんか違うな？……は落ち着こうと深呼吸を繰り返
しているが、俺はわざわざ落ち着かせるようなお優しい神経は持ち
合わせていない。

「なにやってるんだ？ あんまり荒い息をついていると変態にしか
見えないぞ？」

「やかましいですわっ！」

「……今あなたに言われてもなあ……ってか質問には答えるよ。
誰だあんた。寝ていい？」

「わたくしはセシリア・オルコット！寝るのは許しませんわ！」

「あなたに許可を求めなくちゃ寝てはいけないなんて法は無い。お
休み」

そして寝ようとするが、せ……セツティーム？ に後ろ襟を掴ま
れて無理矢理起こされてしまった。短気だなこいつ。

「わたくしに質問に答えさせたのですから、今度はわたくしの質問にあなたが答えなさい！」

「え、なんで？ 別にいいけどさっさと消えて？」

「可愛い顔して辛辣だ！？」

周りがいきなり叫び出したが、まあ、どうでもいいな。可愛いって言われても欠片も嬉しくないけど。

「……黙ってる暇があるならさっさとしろって。俺はお前なんかのことより早く寝たいんだ。もうすぐ休み時間も終わるし」

「あ、あなたねえ！」

キーンコーンカーンコーン……

……あらら、鳴っちゃった。まったくこのセルシオのせいで全然眠れなかった。疫病神め。

「チャイムが鳴ったぞ？ 席についたら？」

ギリギリと歯を軋ませているセルビオを無視して俺は自分の席に座る。それでも赤痢菌（ああ、これは絶対違うな）は顔を真っ赤にしたまま俺のことを横から睨み付けている。

……どうなっても知らんぞ俺は。

そしてやはり怒りのあまりチャイムも俺の声も届いていなかったセイクリッドは。

ズパムッ！

「オルコット。席に着け」

ちー姉さんの出席簿クラッシュにやられてしまいましたとき。
……それにしても妙な音だったな。そしてあまりにもでかい音だった。相当痛いに違いない。

side 篠ノ之 篇

一夏は変わっていないと言ったが、撤回しよう。相当変わっていた。まあ、昔は一夏をあのような方法で強引に起こそうとする者など一人もいなかったから本当に変わったのかはわからないが、少なくとも私が起こそうとした時は抱き締められて無力化されるだけだった。

だが今の一夏は無理矢理起こそうとしたオルコットを当然のように罵倒し、相手の罵倒を受け流し、そして出鼻を挫いて勢いを止めて自分の得意な場所に引きずり込んだ。

……いや、恐らく途中からの寝た体勢も一夏の策の一つだろう。相手の言う言葉を初めの言葉で全て消し飛ばし、眼中に無かったを通り越してなにもなかったかのように扱い、プライドに一撃を与える。

そしてオルコットが何かを叫び出す前にオルコットの大切にしているだろうプライドを引き合いに出して黙らせる。

そして挑発を繰り返し、オルコットが激昂した所でそこからは無視。確かにオルコットの許可がなくとも眠れるし、オルコットから始まったものなので少しは外に出ることはなく我慢することに……いや、あれは怒りのあまりに行動が止まったただけか。

ここで最初の寝たふりが効いてくる。

あれは恐らく時間調整のためだ。自分の言いたいことを言い切り、それでいてかつオルコットがなにも言えない状況を作り出すための、その時点では誰もが騙されるほどの『寝たふり』。

そしてそれは成功し、オルコットは千冬さんに叩かれて（威力が凄まじいことを簡単に予想させるような音だった）強制的に席に戻らされている。

……恐るべき策士になったな……一夏！

……ただ、その頭をもう少し私の思いを感じ取ることに使ってくれてもいいと思うのだがな？

まだ絡んでくる、暇なんだな

ちー姉さんが教壇に立っている。うん、やっぱりちー姉さんはかっこいいね。実践で使用する各種装備についての説明か……七割くらい頭を起こして聞くことにしよう。

ちなみに九割起きていても一割が寝ていれば小さいまま、もしくはそこからさらに身長をある程度操作できる。今は面倒だから変えないけど。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦の代表者を決めないといけないな」

………うつわ、なんだか凄まじく嫌な予感がする。困ったねえ……。

「はい！織斑くんを推薦します！」

………ほーら来た。面倒臭いなあ……。さっさと立って反論しろよセブルス（うん、これも絶対違うな）。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

………ようやくか。遅かったな。そんなんだからちよろいとか言われるんだ。

うに………と小さく欠伸をして、それからまたクッションを召喚。さて、セサミの話が終わるまで寝てるとしよう。

………お休みな

もふんっ！

「寝ようとするな」

ちー姉さんに出席簿ハンマーを食らった。クッションで防いだけど頭を机にぶつけて少し痛い。コットンガード！ってやるには下にも必要だったみたいだな。

「すみません織斑先生。ところで織斑先生と呼ぶ度に少し悲しそうな顔するのはなぜでしょうか？」

「気にするな」

ういっす。

ちなみにこの前にセシウムが話をしていたが俺もちー姉さんも完全に無視。いや、ちー姉さんは意識的に無視しているようだった。具体的にどこでわかるかと言うと、手。強く握りすぎて白くなっている。もう少し手爪で手を切ってしまいそうだ。

ちー姉さんの手は大好きなので、とりあえずせ……せ……せ……ぜ？

ゼムクリップ？ を黙らせようと思う。ゾナハラせるのが一番楽なんだが、それをやると色々怒られそうな気がするから却下。

……まったく。人気者は辛いね。けっ。

「……くっ……何度も何度もあなたはっ……わたくしのお話を聞きなさいっ！」

「え？ 聞いているよ？ 左から入って右から出てるような状況、つまり聞き流してるけど」

「それは聞いていないと言うのです！ だいたいあなたは何ですか！ 唯一ISを動かせる男と聞いてましたから少しくらい、そう、少し

くらいは知的さを感じさせると思っていましたら全くの期待外れ！人の話は聞きませんしわたくしのことも知らないほど無知！挙げ句の果てには極東の猿の分際でわたくしの事を馬鹿にする始末！！
って聞いてらっしやるの!？」

「……………え、なに？ ごめん極東の猿だから言葉わかんない、猿語でお願いできる?」

『ぶっ!』

『くすくすくす……………!』

周囲の何人が笑い、セロテープ（これも違うな）の額に異様にはつきりとした青筋が現れた。怒ってるね。

ちー姉さんの方を見てみると……………ちよつと笑ってるし、手も握りは弱くなっている。少し機嫌は直ってきてるかな。よしよし。

「……………わたくしを馬鹿にしていますの?」

「何でわざわざ……………」

わざわざ言っつてやる義理もない。ちー姉さんのことがなかったら無視してるよ。面倒だし。

「……………まあ、クラス代表になりたいんだったらどうぞ。俺はやる気ないし好きにしたら?」

あー、眠い。

のらりくらりと矛先をそらし続けていたら、いつの間にか決闘することになっていた。めんどくせえなあ……………。俺にメリット一つもねえ……………。

決闘をする 睡眠時間が減る。

決闘を受けない ずっと五月蠅い 睡眠時間が減る。

決闘に勝つ クラス代表になる 睡眠時間が減る。

決闘に負ける 奴隷だ何だと騒がしくなる 睡眠時間が減る。

……はぁ……眠い。今日はぶちかを抱いて寝よう。ストレスが……。

side 篠ノ之 篇

一夏……さすがにそれはやりすぎだろう……。千冬さんも止めようとする気配が全くと言って良いほど無かったし……似た者姉弟と言うことか。

私は先程まで行われていた舌戦（一方的）に、少しだけオルコットが可哀想になってしまった。

姉にも弟にもさらりと無視され、流され、怒っても叫んでも正論と詭弁を混ぜ合わせた言葉でいかにも当たり前前の事を告げるかのよう論破される。

というかそもそも一夏の視界にオルコットは入っていなかったのだろう。一夏は私の知る限り嫌われることも嫌うことも少なかったのだよ。よくは知らないが、もしかしたら元々嫌いなものにはあのような態度なのかもしれない。

……その態度と一方的な言動は、私達以外の人間に接する時の姉さんによく似ている気がする。

じっと一夏を見つめっていると、一夏がずっと私に視線を向けてくる。

私はその視線から逃げるように目をそらすが、一夏の視線はしばらく私に固定されたままだった。

お陰で授業に集中できず、気が付いたら時間が過ぎていたが。

ルームメイト、ののちゃん

一日目が終わり、さっさと帰ろうと立ち上がる。さっさと寝よう。腹は減っているが、朝は食べたし死にはしないだろう。

「……………一夏。もしや昼は食べていないのか？」
「ん？ そうだけど？」

そう答えるとののちゃんに肩を掴まれて購買まで引き摺るように運ばれた。

「奢ってやるから食べる」
「え……………朝は食べたし大丈夫だと思」
「食・べ・ろ」

ののちゃんが怖くなった。これは弾や鈴と同じ雰囲気……………っ！
ちなみにちー姉さんにバレた時にはものすごい怒られた。怖かった。

「……………じゃあ、いただきます」
「ああ、たくさん食べる」

なんでののちゃんといい鈴といい、幼馴染み達は原作とこつも違っかな。なんか妙に丸いよな。別にいいけど。

「あっ！ここにいましたか！やっと見つけました！」

おや真耶先生。何の用だろうか？

「もくもく……」くん

「っ……！っ……！！」

「ぐふうっ！」

「な、何て威力………これが唯一の男性IS操縦者の実力だと言
うの……！？」

周りが騒がしいな。何があっただ？

「ののちゃん。何があっただ？」

「一夏は気にするな。お前はお前の思うままにな」

……よくわからないが、とりあえず食べればいいのか？

「……それで、山田先生はどのような御用事で？」

「あ、えっとですね、織斑くんの寮の部屋が決まりました……あれ
？ どうして篠ノ之さんが返事をするんですか？」

なんでだろうな。……ああ、結構美味しいや。

「……ああ、拐われないようにってことですか」

「そういうことです。……あ、ちょっと……はい、取れました」

おや、口の端に食べ滓がくっついてたか。どうも。
荷物は全部あるし、原作みたいに困ることは無い。

「織斑くんの部屋は1025号室ですね。これが鍵です、なくさない
ように気を付けてね？」

「はい」

やれやれ、原作だとののちゃんと一緒の部屋のはずなんだが、どうなのかね。

一緒でした。

食べ終わってすぐにののちゃんと途中まで一緒に行こうと歩いていたら、最後まで一緒だったという(ののちゃんにとっては)驚きの結果になった。

「……とりあえず、お前が私の同居人と言うことはわかった。私も山田先生の言葉を聞いていたからな」

山田先生？ 誰だっ……ああ、真耶先生ね。

「はあ……お前はまだ名前を覚えられないのだな」
「おう。努力はしてるけど無理だな」

そう言うとののちゃんはがっくりと肩を落とす。

「……まあいい。とりあえず、二人で暮らす上での決まりを作ろう。
風呂の時間や着替えについてもな」
「風呂は俺は夜早くに入るから」

夜早く 午前三時から四時。抱きつくものがないと眠りが浅くなるからこの程度の時間に起きてしまうため。もちろん二度寝するが。

「そうか。着替えは……私が脱衣所でしょう。それでいいか？」
「いいよ。じゃあお休みー」

俺は適当に出入り口に近い方のベッドに倒れ込むようにして入る。

……ああ、やっと眠れるな。

side 織斑一夏

薄ぼんやりと夢を見る。原作のだと思う一夏がののちゃんに竹刀でひっぱたかれている。

俺には痛みはないが、見ているだけで痛々しい。

そこで俺が立ち上がると、さっきまで薄ぼんやりとしていた一夏とののちゃんが急にはっきりと俺の事を見てきた。

ちよいちよいと手招きをすると、怪訝な顔をしながらも二人は俺の方にやって来て、そして俺の前で立ち止まると不思議そうに首をかしげた。

俺はいつも通りとなった小さな姿のまま、大きいままの一夏に抱きついてみた。

すると一夏は驚いた顔をして、それから不器用に俺の頭を撫でた。意外と気持ちがいい。

そこで、どことなくメカニカルな気配のするとがった犬耳をつけてみる。俺と違って縮むことはなかったが、何となく凛々しさが増したような気がする。

一度一夏から離れ、今度はののちゃんの方に。抱き着いてみたが、抱きつきにくい。主に一部分が邪魔だ。

膝枕をもらうと、こっちはちょうどよかったのでしばらくして

もらう。

そしてのちゃんにも同じくどことなくメカニカルな犬耳をつける。こちらにも大きいままだったが、それでも可愛らしく見える。

最後に俺が自分でお揃いの犬耳をつけて、にっこりと笑う。

一夏ものちゃんも、俺に合わせてかどうかは知らないが笑ってくれた。

そのまましばらく俺は一夏とのちゃんに撫でられ、可愛がられながら遊び、そして最後に二人に挟まれて眠りについた。

二人は仲良く手を繋いで、俺をゆっくりと撫でていた。

「……………わう……………」

目が覚めると、目の前には死屍累々。見覚えのある姿から全く見覚えの無い姿まで、実に四十人は居るだろう少女たち（精神年齢的にはこつちが上）が幸せそうに鼻から血を流して気絶していた。

ののちゃんはすでに寝ているので、どうやらこの人たちは勝手に入り込んだようだ。

……………とりあえず、携帯電話をポケットから出し、近くで寝ていた白狼ぶちかを片手で抱き締めながら、ある人に電話をかける。

「……………もしもし、ちー姉さん？　なんだか人がいっぱい気絶してるんだけど……………」

ぷつん、と電話は切られ、そしてその二秒後。真夜中の学園寮に怒

号が響いた。

二日月ののちゃんVS俺(前書き)

すじじいよになつてます

二日目、のちゃんVS俺

部屋で気絶していた誰かさん達がちー姉さんに叩き起こされていなくなつた後、朝食は適当に取る

「行くぞー夏。朝はしっかり食べる」

……つもりだったんだが、なぜかののちゃんに連れられて食堂に来ていた。

逃げようとする怖いので逃げないが、まあ、悪いことじゃないから別に構わない。

ただ、ののちゃんに手を引かれている俺を見て鼻血を出している誰かさん達はもう駄目だな。色々。

「……………（ギリッ！）」

あとちー姉さん。ののちゃんは俺の事が心配なだけだから！そんなに歯を軋ませて憎々しげに睨まない。

「今回は奢らんぞ」

「いいよ別に。お姉さんこれお願いね」

「おや、嬉しいこと言ってくれるじゃないか」

そう言ってお姉さんは俺から食券を受けとる。なんだかすごい量になる気がする。ちなみに焼き魚定食。

「はいおまちどう。サービスしといたからね」

早いな。って多くね？

そう思っても外には出さないで、笑顔で受け答えをする。

「ありがとうございます」

「いいんだよ。たくさん食べて大きくなりな」

……いや、実際はもう少し大きいんだがな。具体的には四十センチくらい。

「……ずいぶん多いな……」

「だよな」

ののちゃんが呆れたように口にする。まあ、仕方無いね。

通常魚（鮭）は一尾のはずが三尾だし、ご飯もまるで仏さんに御供えするようなこんもりとした山になっている。おひたしも小さな皿に山になっているし、頼んでないプリンも着いてきた。

……どう考えてもサービス過剰だと思う。周りの奴も啞然としてるし。

理由はわかるけど。俺今身長百四十位だし、そんな奴がこんな量食べるのを見たら、そりゃ目立つわな。

「て……手伝いはいるか？」

「いや、大丈夫。夜食べてないからこのくらいは普通に入る」

そう、普通にな。

「……本当に入るものなのだな」

「まあな。でも実はもう少し入るぞ」

食い過ぎると気持ち悪くなるから腹一杯までは食べないようにして
るけど。

……さて、もうすぐ授業だな。いつも通りでいいか。決闘もまだま
だ先の話だし、確か二日目はたいした描写は……ああ、ののちゃ
んに剣道場に連れ去られるんだっけ。めんどくさいな。

「一夏」

「ん？ なんだいののちゃん」

「放課後、剣道場に来い」

「……んー、三本中二本先取で一回だけね」

ののちゃんは約束は守るから、言うておけば大丈夫だろ。

side 篠ノ之 篇

パン！と弾けるような音がして、私の握る竹刀の軌道が変わる。

一夏の面を捉えるはずだったそれは、肩をかすって下へ。

その隙に一夏は無言で私に片手面を食らわせ、離れる。

それと似たようなことがもう二十以上も繰り返され、私は肩で大き
く息をつきながら半身で竹刀を私に向けている一夏を睨む。

昔は構えさせることすらできなかったが、今ではこうして一夏に構
えさせることができる。

小さな体からは想像もできないほど重い衝撃を繰り出す一夏に、少
しでも近付くことができている。

それが嬉しくて、私はまた竹刀を振るう。一夏が自分から攻めてくることはほぼ無いと言っても良いので、今の私に繰り出せる最高の一撃を。

しかし一夏は私の最高の一閃も片手に持ったままの竹刀で捌き、私に小手を打ち込む。

「……ん、ちょっと強くなったね、ののちゃん」

ほにゃ、と眠そうな笑みを浮かべる一夏。だがやはりそれはまだ四割近く眠っているようだ。

「昔は七割くらい眠っててもなんともなかったのに……ほんと、強くなったな」

……………。

ゴスツ！と竹刀の柄を面に叩きつける。この程度で喜んでいてどうするのだ。私の目標はまだまだ先だろう！

そう考えても私の頬の緩みは直らない。直れ直れと念じてても、ゴスゴスゴスと衝撃を与えても、全く直る気配すらない。

……ええい、ならば笑ったままで構わん！このまま一夏と打ち合っ
てくれるわ！

「はぁあつー！」

今度は乱撃。一撃にかけても一夏はそれをかわしてしまふ。ならば、かわせないほどに高速の連撃を！

連続した軽い快音が剣道場に響く。私は一本をとれるところ全てを散らしながら連撃を打ち込んで行く。

面頬に、胴に、小手に、喉に、ひたすら竹刀を振り、突き、薙いだ。

しかしそれすらも一夏は避け、または竹刀で払い、受け止める。

……ああ、なんて楽しいのだろうか！例え一夏が本気ではなかったとしても、一夏とのこの闘い／遊びは私の心を踊らせる。

更に速度を上げ続け、一夏を攻め続ける。

もう周りの音は聞こえない。見えるは一夏と、私と、私達のいるこの四角い場だけ。聞こえるものは私の呼吸音と、心音。竹刀が風を切り、ぶつかり合う快音。そして一夏の呼吸音。

激しい私のそれとは対局に、一夏の呼吸はゆっくりとしたものだった。

さらに私の剣は速度を上げる。

すると、今まで見えてこなかった、何か、が見えてきた。

それは、間合い。私と一夏の、相手を殺せる距離。

私は今まで一夏のそれに無防備に入り込んでいた。

しかし、結局私にできることはこれしかない。

近付いて、剣を振るう。ただそれだけだ。

するとまた何かが見えるようになった。一夏から何かが私の肩に向かって伸びている。

それに嫌な予感がした私は、それを打ち落とそうと剣を振るおうと

して、……………私からも同じものが出るのがわかった。

私から出たそれは一夏から出たそれとぶつかって消えた。それに一夏は少しだけ驚いたような顔をして、

「面」

私の面頬をひっぱたいていった。

「……………ののちゃん、よくあれが見えるようになったね？」

「……………いや、もう見えない。あれはなんだったのだ？」

一夏にそれを尋ねるが、一夏はいつも以上に眠そうな笑顔を浮かべているだけで答えてはくれなかった。

ただ、わかることがある。

それは、一夏もあの世界に身をおいているということだ。それも、恐らく六年以上前から。

「……………追い付いてきたぞ。一夏」

私は笑い、一夏の後ろ姿に掌を向けた。

……………やっと、一夏の背中が見えてきた。

「すごいー！織斑くん凄い！」

「インターミドルをあんなに簡単に倒しちゃうなんて！」
「の、ののちやくん、助けて〜」

.....はあ.....。やれやれ、仕方の無い奴だ。

入学後、初休日

明日は休日。そこで俺はドーベルマンぶちか（垂れ耳わんこ）を抱いて昼遅く（午後四時くらい）に布団に入った。のちゃんには俺のことを起こさないようにってメールもしたから多分平気。さあ、寝まくろう。

きゅ、とぶちかを抱いている腕に力を込めると、ドーベルマンぶちかが俺の胸に顔を埋めてくうんと鳴いた。
……うん、お休み。

side 篠ノ之 篇

一夏に起こさないでというメールをもらったので、恐らく今日の夕食は私だけで食べることになるだろう。
そう思いつつ私は一夏との戦い／遊びの最中のあの感覚を思い出していた。

今では最後の最後に出てきたあれはまだ見えてこないが、その一つ前の‘問合い’はわかるようになった。

相手の意識が向いている方向が。相手の意識の届いていない場所が。相手の武器の届く距離が手に取るようにわかる。まるで高性能のレーザーかハイパーセンサーでも使っているかのようだ。

今も、私と向き合っている相手の攻撃範囲の半歩外に居る私に相手

がじりじりと近付いてきているのがわかる。

私はゆっくりと相手の隙を伺い、視界としての死角ではなく意識としての死角を探し出す。

………見付けた。

その瞬間相手は私の間合いに入り込みながら私を間合いに納め、鋭く竹刀を降り下ろす。

それを察知していた私はなんなくかわし、そして意識の死角である逆胴に竹刀を叩きつける。

加減はしたし、大して痛くもないだろうと思って打ったそれは、見事逆胴に吸いこまれるかのように命中した。

「一本！それまで！」

部長のその声を聞いて、私は残心を解く。集中を解くと膝から崩れ落ちてしまいそうなほど疲れているのがわかる。

……私もまだまだ修行が足りんな。

部屋に戻って汗を流す。その時に一夏がベッドで寝ているのを見かけたが、起こさないでくれというメールの内容を思い出したのになにもせずにシャワー室に向かう。

明後日はオルコットとの決闘の日だと言うのに寝ていていいのかと思うが、知識は十分、そして体を動かすことでは勝てず、さらに訓練用の機体も借りることができないとなればできることはなにもない。

だからと言って夕食すらも抜いて眠るのはどうかと思うのだが、一夏を起こして布団に引きずり込まれてはたまらないので放置することにした。せめて私が夕食と歯磨きを終わらせてからならば……いやいや、私は何を言っているのだ。

「ねえねえ篠ノ之くん。今日は織斑くんは一緒じゃないのかい？」

剣道部の主将にそう聞かれるが、私が返せる言葉は一つしかない。

「寮の部屋で寝ていますよ。死にたくなければ近寄らないことをおすすめします」

本当にな。

部屋に戻ると一夏はまだ眠っていた。歯を磨き終わった私は眠り続けている一夏の髪を撫でる。

「……いい夢を見るよ、一夏。………お休み」

そうして私も布団にはいる。一夏の腕の中に小さい一夏が居たような気もするが、ここはあえて流すとしてしよう。

side 織斑 千冬

私の朝は一夏とぶちかの写真を眺めることから始まる。

これは一夏が中学生だった頃に、同級生の鳳 鈴音という一夏の友

人から譲られたものだ。

何でも学校で一夏に手を出そうとしたり、独占しようとしたものを肅清し、そして一夏に健やかな睡眠を与えようとしていたと聞くが、その間に鳳自身も一夏に惹かれてしまったのだとか。

そして学校でしか見られない一夏とぶちかのお昼寝シヨットを私に堂々‘賄賂’として渡してきた強者でもある。

……実によくわかっているじゃないか。一夏は私の物だ。そうだろう？

……話がそれたな。とにかく私の朝は一夏とぶちかの写真を見ることから始まる。

そして溢れそうになる愛を抑えきると、私の体には一夏への愛がたつぷりとつまり、脳が、体が活性化する。

ここでようやく私の体は行動できるようになる。

……昔はこんな写真ではなく、一夏が私の腕の中に居てくれて……私はそれを見て一夏分を補充していたのだが……一夏も私のところに潜り込んで来れば良いものを。

……おっと。朝食をとらねば会議に遅れてしまうな。生徒達の見本となるべき教師がそんなことではまずい。一夏に嫌われでもしたら私は確実に自殺してしまうだろう。

私の昼は、一夏の昼寝姿を鑑賞するところから始まる。IS学園に一夏が来て、唯一と言ってもいい良かったことだ。

一夏は基本的に自分の机に突っ伏すようにして眠っているが、たまにぶちかを抱いて椅子に寄りかかるように眠っていることもある。

しかし休日である今日は、一夏はあてがわれた寮の自室で眠っている。

……篠ノ之は一夏に手を出さないだろうな？ 確かに篠ノ之は一夏のことを知っている分手を出す可能性が低いと見たのは私だが、それでも一夏はあれほど可愛らしいのだ。篠ノ之がつい手を出してしまうことも十分考えられ

《ちー姉さん、メールだよ？》

一夏からのメールか。どれどれ……。

本文：俺はぶちかとのんびり寝ています。心配しなくても大丈夫。

……全く一夏め。……む？ 添付ファイルだと？

開いてみると、すやすやとあどけなく眠る一夏と、寄り添うようにして頬を擦り付けているぶちかの写真が。

……くっ……挟まれない！一夏とぶちかに挟まれない！むしろ埋もれてしまいたい！！

私の夜は、一夏の写真にお休みと告げることで幕を閉じる。すやすやと眠る一夏の写真を見ながら、夢のなかで一夏に出会えることを祈りながら眠りにつく。

明日も一夏が幸せであるように。

白式、束姉さん印の魔改造済み

決闘当日。そろそろ始まつてもおかしくないはずなんだが、まだ束姉さんからISは届かない。

……やれやれ、困ったねえ……ちー姉さんからも多分話が行つて
るんだろうし、雪片との併用が難しいのもわかるけども……いくら
なんでも遅すぎると思うんだが。

まあ、束姉さんのいつものノリだろうと思えば理解はできるし諦め
もつく。

……ちなみに、ISの代わりにぶちかサイズ束姉さん人形（兔耳付
き）なら送られてきた。ぶちかたちのお気に入りになってよく抱き
枕になっている。

……抱きつかれるとにへらつと笑つのは気のせいだと思いたかつ
た。俺が抱き締めたら鼻から血を噴き出したあたりで諦めたが。

「……まだかねえ……俺のISは……」

名前はなんだつたっけね？ ……とりあえず白かったような気が
するし、勝手にシロと呼んでおこつ。たとえ来たやつが黒くてもシ
ロだ。はい決定。

「織斑くん、織斑くんのISが届きましたよ！」

……ああ、丁度か。

「はい、真耶先生」

「もう。山田先生ですよ」

「すみません、名字も名前もそれぞれ二文字以上だと覚えられないもので」

そう言いながらそれが来るのを待つ。ちー姉さんは俺の臍出しルックを正面から見た瞬間に頭を壁に叩きつけ始め、今はピットにあったベンチで横になっている。

……今度使う時は千の顔を持つ英雄で全身を覆うタイプのを作ろう。ちー姉さんのためにも、俺の精神安定のためにも。

よくこんな恥ずかしい格好をしていられるよなほんと。俺には無理だ。かなりきつつい。

そしてピットの搬入口から現れたのは、前情報（原作知識）通りの『白』だった。良かったな白で。白じゃなかったら色と名前とがちぐはぐになっていたところだった。

ちぐはぐでもシロって呼ぶことは決定してたんだけどな。例え名前が黄天だろうが紫電だろうが関係無くな！

……さてと。それじゃあさっさと蒸着……じゃなかった、装着しよう。

背中を預けるようにしてシロに乗り込む。するとシロの方から俺に合わせて装甲が閉じる。小さいままの状態でぴったりだが、今までの経験から言って大きくなってもぴったりになるんだろうな。きつと。

「……さて、一夏。気分は悪くないか？」

復活したちー姉さんが僅かに心配そうに聞いてくる。名前で呼んでくれているし、今だけは教師としてではなく、織斑一夏の姉の織斑

千冬として話しているんだろう。

「大丈夫だよー姉さん。なんにも問題ない」
「そうか」

ちー姉さんは俺の答えにほっと安堵の息を吐いた。多分真耶先生にはわかってないだろう。少し得した気分だ。

「……………それじゃあ、ちー姉さん」

この時だけしつかりと起きて、

「行ってきます」

俺はゆっくりとアリーナの中に飛んでいった。

ついでにシロのスペックデータを確認して、束姉さんがどんな風に乗ってくれたのかを確認……………

……………化物じゃねえか、このIS。まだ一次形態移行すら終わってないのにこれってなんだ。

それとお願いしていなかった武器が一つ。名称未設定の近接ブレードが一本。武装自体は千の顔を持つ英雄でどうとでもなるから頼んでなかったから……………きつとこれはちー姉さんのリクエストだろう。

……………まったくもう。ちー姉さんは心配症なんだから。そんなちー姉さんも大好きだけど。

ちなみに、ピットでの騒ぎは努めてスルーした。真耶先生が失言をしてちー姉さんに締め上げられてるようなギチギチという音と悲痛な悲鳴が聞こえた気のせいだった。そう気のせいさあっはっは。

……………今度プリンでも作って行ってあげよう。

side 篠ノ之 篇

一夏の決闘当日、私はステージと観客席を隔てるシールドのすぐそばに陣取っていた。とはいえ他のものの邪魔にはなっていないし、問題はないだろう。

……………一夏は昨日一日中寝ていたが、今日の朝に見た笑顔はいつもの小動物のような笑顔とはまるで違い、明らかに狩られる側ではなく狩る側にする笑い顔だった。

……………それにどうやら一夏はオルコットの事をひたすら虚仮にするつもりらしく、あんまり派手な戦闘は期待するなと言われてしまった。

……………その言葉で私は、一夏がなにをするつもりなのかがおおよそ理解できた。

そう考えているとピットから一夏が現れてオルコットの前に浮く。やる気はほとんど見えず、六割ほど眠っているようにも見える。

だが、今の私にはどうしても一夏が本気でオルコットを叩き潰す気

でいるようにしか見えなかった。

私はつい最近、戦闘状態にある相手の間合いがわかるようになった。相手を捉えることができるだけの一足一刀の間合いと、相手を殺すことのできる間合い。その二つ。

いつもは剣道場で見ているそれが、一夏からも見えている。

ISを展開しなくともただでさえ広がったその殺せる間合い。中間距離の射撃型であるオルコットのそれは、おおよそ五十メートルほど。

しかし一夏のそれはさらに広く、ステージ全てを覆い尽くし、観客席までも飲み込んでいた。

そう、私も。

そこで気付く。一夏の顔は確かにいつも以上に眠そうだが、その瞳には今まで見たことが無いほど剣呑な光が湛えられている。

……だが、一夏は決闘で派手な戦いは期待するなと言った。ならばオルコットが殺されるようなことはないだろう。

……よっぽどのことがなければ。

試合開始の鐘が響き、オルコットは余裕を見せながら一夏に話しかける。

「最後のチャンスをあげ」

「あ、すいません真耶先生、棄権します」

「は？」

.....
。

金髪に絡み付かれる、……計画通り

side 篠ノ之 篇

開始の合図から十秒もしないで行われた、一夏の突然のギブアップ発言。私達が固まっている間にそれは受理されて、決着を告げるブザーが虚しく響き渡った。

「……さてと、決闘も終わったし、寮に戻って寝るか」

「ッ！お待ちなさいっ！」

何でもないかのように平然とピットに戻ろうとする一夏に向かってオルコットの怒声がぶつけられた。

「何だよ五月蠅いな。お前があんまりにも五月蠅くて我儘で鬱陶しくて餓鬼臭くて放っておけば何時までも騒ぎ続けて迷惑だからお情けで決闘を受けてやったんだぞ？ 決着ついたんだし帰らせるよ」

一夏。一の言葉に十のカウンターを返すのは流石に酷いと思うぞ。確かにそのような感じだったが。

しかしオルコットはその言葉に逆上し、オープン・チャネルでアリンナ中に響き渡るほどの大声で一夏にくっつかかる。

「わたくしは言いましたわよね！わざと負けるようなことがあればあなたを奴隷にするよ！」

「え、なに？ 今の時代に奴隷？ 法律的に駄目たる常識的に考えて。第一それはお前が勝手に叫んで騒いでいただけで俺は了承して

ないし。妄想もいい加減にしるよ海賊王国人。お前みたいのがいるからイギリスの国の品位が下がるんだ」

いや、だから一夏。一の言葉に十返すのは辞めると。

「第一決闘って言っても原因はお前が日本を極東の島国で文化的に劣ってる下らないその上そこに住む黄色い猿が珍しいからという理由で自分より目立っているのが気に食わないって騒いだせいだしな。そんな劣るはずの黄色猿に決闘を挑むなんて、つまりわざわざ高尚な人間様から黄色猿と同じ所まで落ちてきたってわけだろご苦労さん。そうして威張ってられる原因のISを作ったのはお前の言うところの極東の島国に住む黄色い猿だってことも忘れてんだろ。そんなこと言うんだったらその極東の島国に住む黄色猿なんかでも作れるISを作ることができなかったお前達は文化的に劣っている極東の島国に住む黄色猿にも劣る豚だろう？ 喧しいからその薄汚い口を塞いで屠殺場に行ってる西洋の飯の不味い島国の白豚が」

…………… ああ、もうこれは止まらん。そして一夏が決闘では派手な闘いを期待すると言った正しい理由もわかった。

つまり一夏はクラス代表になりたくなかったからオルコットに決闘を勝たせてすぐさま叩き潰すつもりだったと言うことか。

…………… ちなみに私が想像していた理由は、一瞬で終わらせるから派手にはけしてならないと言う理由だった。見事に外れたな。

「ん？ どうしたんだそんな顔を真っ赤にして。一応言っておくと先に侮辱してきたのはお前だからな？ 自分のことを棚に上げて他のところを責めて優位に立ったつもりになりたいのか？ そんなんだから駄目なんだよ。なに怒ってるの？ 怒ってるのはこっちの方だよドリル擬きが。俺だけだったらともかく日本人全て、ちー姉さ

んも東姉さんものちゃんも弾もカズも蘭ちゃんも会ったこともないのに馬鹿にした塵屑未満が。オキシフルで全身余すところなく消毒されてから出直してこい。まあ黴菌ばいきんが消毒されて生きてるかどうかは微妙なところだけど」

……よくもまあそこまで舌が回るな。回りの者達はにこにこ笑いながらそう言っているお前を見てドン引きだぞ？

「……言いたい放題言ってくれましたわね……っ！！」

「先に言ったのはお前だつて何回言えばいいんだ？ それとも塵屑に記憶力を求めた俺のミスか？ ……ああ、決闘だつたら仕方無いから受けてやつても良いぞ？ 今回はまともにな。ただ、これで勝とうが負けようがお前がクラス代表をやってくれるんだつたらだけど」

そこで一夏は数秒間を開けて、それから呟いた。

「返事は無いか。……ああ、もしかして……俺に負けて、お前が豚だつて証明されることが怖い？ ならしょうがないな、豚にしては懸命な判断じゃないか？」

……恐らく幻聴だろうが、太い綱が一気に引き千切られるような音が聞こえた気がした。

「……ふ……ふふふ……ふふふふふふ……」

それはまるで地獄から響いてくるような笑い声だった。怒りを煮詰め、憎悪を煮詰め、殺意を煮詰めて混ぜ合わせ、さらに濃縮して凝縮して作り上げた負の感情の結晶のような笑い声が、アリーナに響く。

それは小さな笑い声だったが、妙によく通り、それを聞く全ての者達に恐怖を与えるような響きだった。

しかし、恐らくこの場には最低でも三人、この声に恐怖を感じていないものが居る。

一人は当然一夏。いつも通りに見える笑顔を浮かべたまま、笑い続けているオルコットを見詰めている。

そしてもう一人は恐らくだが千冬さん。あの人はこの程度で恐れることはないだろう。

そして最後の一人はこの私だ。

……正確には怖いと思っっているのかもしれないが、わからない。なぜなら、開始からずっと強まり続けている一夏の怒気の方がよほど恐ろしく、オルコット程度のことには割いている感情のキャパシテイが存在しないからだ。

「……ふふふふ……いいでしょう。その条件を飲みますわ……」

……変わりに、今回あなたが私に負けたら、強制的に奴隷ですわよ？」

「……なんだ、お前程度の腕でも誰かに勝てるのか。驚きだな」

「……試して差し上げましょうか？」

「試させて欲しいのか？」

一夏とオルコットの間空間に火花が散ったように見える。

「……いいだろう。その条件、飲んでやる。……真耶先生！申し訳ありませんがもう一度試合開始の合図を！」

一夏が叫んだすぐ後に開始の鐘が鳴り響き、もう一度強固にバリアが張り直される。

「さあ、踊りなさい！わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる葬送曲で！」

「自分のためのか？ 用意が良いな」

そうしてようやく試合が始まり、私はIS学園で初めて一夏が完全に起きているときの姿を見ることになる。

金髪に絡み付かれる、……計画通り（後書き）

ちなみに、葬送曲にレクイエムとルビをふるのは誤りです。レクイエムは鎮魂歌で、死人の魂を慰める曲です。

間違ってもレクイエムを流しながら人殺しなんていう罰当たりなことは辞めましょう。

試合開始、正確には私刑（前書き）

……もっと正確に言つと……処刑？

試合開始、正確には私刑

開始の合図が鳴ってすぐ、俺はさっきぶりに完全に起きて動き始めた。

色々と話をしていたお陰で既に初期化は終わっている。後は最適化なんだが、これは動きながらじゃないとなかなか進まないのでもまり進んでいない。

………が、そんなことは関係無い。ちー姉さんと束姉さん、俺のこの世界で出来た友人達を馬鹿にしたんだから。とりあえずボコすちなみに俺は優しいから、試合中にアポリオンをばらまいてゾナハらせてからボコすとかイギリス全土にアポリオンばらまいてゾナハらせてから原因をでっち上げてこのドリルを社会的に殺したりとかはしない。優しいだろう？

最初に武装な錬金のチャフ、アリス・イン・ワンダーランドを大量に（具体的には核金十個分にちよっと色をつけたくらい）散布して光を強制的に乱反射させる空間を作り上げた。この中では十メートル離れたらドリルが持っているレーザーライフルでも虫すら殺せなくなるだろう。

それと同時にハイパーセンサーを殺し、さらにロックオンや名前の元になったブルー・ティアーズの思考操作、そして通信すら届かないようにする。

それに気付かない金髪はただただ無為にエネルギーを消費し続けている。

今となっては全く怖くないレーザーライフルを乱射し、動かせない

第三世代兵器を躍起になって動かそうとし、唯一の実体弾であるミサイルもただまっすぐ撃つことすらできずにぐにやぐにやと進路を曲げてアリーナの遮断シールドにぶつかって爆散した。

「くうっ！なぜ！なぜ動かないんですの！？」

「こっちで邪魔してるからだけどなにか？」

金髪の神経を逆撫でするようにヘラヘラと笑い、無駄弾を撃たせる。そろそろエネルギーは二割ほど使ってしまったているだろう。

冷静になれば簡単に気が付くだろうことにも気が付かず、金髪はただ俺にライフルを向けてレーザーを撃つ。

「だから効かないっての。と言うかこれは対B T兵器使用IS用の第三世代兵器なんだから当然だろう。実弾系と接近戦だったら効果はあるけど………できるか？ 中距離射撃型」

さらに挑発して鼻で笑う。卑怯とか言われても、相手のことを調べて対策をたてるのは当然だと思っただがな。

数秒間動きを止めた金髪は、今度は近距離用の武器……インターセプターを取り出して向かってきたが、俺は向かってくるのに合わせてボクシングのヒットマンスタイルに構える。一步を踏み出すボクシング漫画の死神と尾張の竜の技は好きだ。

フリッカーを連続して金髪に叩き込む。俺を目指していても別の方角に行こうとしてしまうので、隙はいくらでもある。

ちなみにこれ、金髪との距離を十メートルより短くしたりはしない。なにが原因で逆転されるかわからないから。

どうやっているかと言えば、俺が束姉さんに頼んでつけてもらった
武装の一つである、衝撃砲で。

基本的にボクシングと同じように左は低威力の高速連射用で、右が
高威力の単発。

大したことがないと思うかも知れない。しかし、俺としてはそう相
手が思ってくれたほうが都合がいい。

しかしこれは束姉さん特製で、鉄甲、拡散、熱核拡散と即座に種類
を帰る事ができ、さらには回転を加えて貫通力を増したり、出力を
一部変えて軌道を曲げることでできる。もちろん左右別々に。

それをひたすら撃ちながら金髪を追い詰める。途中で落ちていた移
動砲台に衝撃砲を撃ち込んで破壊し、抵抗が激しくなってもどうと
でもなるようにした。拾って戻せば多分エネルギーの補給ができる
しな。

……俺ってやっぱり優しいよな。こんだけアリス・イン・ワン
ダーランドを使ってるのに集束させて発狂させたりしてないし、シ
ールドの中で爆破とかしてないし、気で衝撃砲やISそのものの強
化もしてないんだ。優しすぎると思うんだが。

「……それじゃあ。そろそろ終わりにするぞ。眠くなってきたんで
な」

右の衝撃砲を構え、左の衝撃砲で動きを止める。

「じゃあな」

ズドンッ！

試合終了のブザーが鳴り、俺の勝利をアナウンスが告げた。

……寮に戻って寝るか。アベアット。

side 篠ノ之 篇

……一方向的だった。それくらいしか言えない試合だったと思う。
多くの者達の予想に反して一夏はオルコットに勝ってみせた。それも、完全に封殺したような形で。

私しか見えていなかったと思うが……いや、千冬さんなら見えていたかもしれないな。とにかく一夏の間合いの取り方は尋常じゃなく上手かった。

オルコットの間合い（見たところISに効果がありそうだったのは銃口から三メートル程か？）に入らないように、そしてオルコットが間合いに入れられないように動き、そして動きを制限するように攻撃し、相手の攻撃手段を削ぎ、そして予定調和のように勝って見せた。

右拳を突き出し、残心を忘れずにしていたその姿は、実に格好よかった。

……ところで、明らかに身長が違っていることには誰一人として突っ込まないのか？ 気にしている私がおかしいのか？ 初めの話が終わってからの一夏の身長とそれまでの一夏の身長が……
……はあ。誰も何も言わないのだな。

ならば私も気にすることをやめよう。一夏は一夏だ。それで問題あるまい。

あと、一夏は怒らせないようにしよう。千冬さんが怒ったところは見たことがあるが、今回の一夏の方がよっぽど怖かった。

相手を封殺して動きを止め手段を奪い、最後に一思いにぶちっと潰す。

それはまるで無邪気な子供が生きている羽虫の羽を一枚一枚もぎ取り、足を一本一本引き千切り、動くことができなくなったそれを捨てて、踏み潰すようなこと。

ふと、誰かが一夏をもつ一度本気で怒らせたところを想像した。

……………二度と一夏を怒らせることはすまい。

クラス代表、俺じゃないよ？

金髪をボロクソにした次の日。俺はいつもの通りに起きて、いつもの通りにのちゃんと話をして、いつもの通りの一日を過ごす

「御主人様！」
「帰れ」

全くこの金髪はいつまでたっても五月蠅いな。

「……一夏。まずは御主人様発言に突っ込みを入れよう。な？」
「理由は知ってるから。どうでもいいけど」

簡単に言うと、ボコる 新しい世界の扉（具体的にはマゾの扉）が開く 開いたのは俺 御主人様。

当然無視したが、変態は基本元気で仕方ない。面倒だな。
ちなみに束姉さんはちー姉さんになら何されてもオツケーらしい。
聞いてもないのに勝手に教えてくれた。十分変態だな。そして元氣すぎるな。

「……………（そろそろ）」
「触らないで」

金髪が俺の頭を撫でようとして来たので振り払う。冷たくしても拒否しても放置しても優しくしても喜ぶ奴の相手なんて本当に勘弁だ。今も払われた手を胸元に持って行ってぞくぞくしてるし、相手したくない。そしてさっさと寝たい。

……寝ようとするところそると近付いてきて抱き締めようとするから気を張りっぱなしになる。ああやだ。ほんとやだ。

「……はあはあ……御主人様あ……」

「ちー姉さーん！助けてーっ！」

変態は嫌だ。特に俺に襲いかかってくる変態は嫌だ！

「オルコット。一夏は私のものだ」

ちー姉さんはそう言いながら金髪の頭を片手で掴み、ぎしぎしという音が聞こえてくるほど締め上げている。

「……無事だったか？ 一夏」

「大丈夫。ちー姉さんのお陰で助かった……」

ちー姉さんは俺の頭をよしよしと撫でる。……ああ、やっぱり気持ちいいな……。

「……くう……」

……気が付いたら食堂が血まみれになっていた。ちー姉さんもかなりふらついていたが、大丈夫だと言っていたのできつと大丈夫なんだろう。

そういうことにしておいて、俺は教室への道を歩く。のちちゃんと手を繋ぎながら、尻尾をぱたぱたと左右に振って。

……………待て、いつの間に俺は獣耳一号、柴犬を装着した？

覚えがないぞ？ まさか、遠隔で装着したのか？

……凄いな、束姉さん。無駄なところにその技術を使いすぎているよ。よゆうな気がしないでもないけど、すごいものはすごいよな。

……とりあえず吠えておこう。

「わう！」

周囲に血の海が出来た。さっきまではなんともなく手を繋いでいたののちゃんも、そっぽを向いて鼻を抑えた。

「……一夏」

「わう？」

「ぐぶっ……ああいや、何でもない。だっこしても良いか？」

願ってもないことだったので即座にお願いした。お腹が一杯だったせいか、奇妙に眠い。

「……ふふふ。まったく一夏は。いいから寝てしまえ。必要になったら起こしてやる」

……それは、ありがたいことだな。

……それじゃあ……お休み……ののちゃん……。

「……ああ、お休み、一夏」

……くうん。

「……篠ノ之。なぜ織斑がお前の膝で眠っている」
「一夏が眠そうにしていたので打診したらこうなりました」

千冬さんに明らかな嫉妬の視線を向けられるが、私はそれを受け流す。六年ほど会っていなかったのだし、このくらいは良いだろう。……それに、一夏はシスコンで、千冬さんもブラコンだからな。ここで離れたらすぐさま千冬さんは一夏を拐って行くに違いない。せめて授業開始まではこうしていよう。

約束通り、一年一組のクラス代表は一夏ではなくオルコットになった。不満は少し出たようだが、一夏の最後の攻撃の威力を思い出して不満を取り下げた。

ちなみにあの攻撃はオルコットのシールドエネルギーを全て削り取り、アリーナの床に直撃して巨大なクレーターを作り上げていた。そんなものを食らっては操縦者の生命が保証できないし、一夏がISを使う度にアリーナを修理してはいくら金があっても間に合わない。千冬さんと山田先生からも言われていたので、一夏のクラス代表の話はなくなった。

……ここまで考えてやっていたのだとすると、一夏は随分と策士になったものだ。

まだまだ偶然に頼るところも多いが、一夏の狙い通りにクラス代表はオルコットになったし、誰もがそれを肯定している。……理由とやり方はともかくとして、私も。

そんなことをしておいても、今こうして私の膝の上で眠っている一夏はとても可愛らしい。決闘の時はむしろ格好よくて、どうしてもこの一夏とあの一夏が同一人物に見えない。

……雰囲気だけではなく、身長まで変わっているのだから当然か。

「……ん……」

……うむ、可愛い。

ところで、一夏の鞆からこっそりと私と一夏を覗き見している小さな一夏（犬耳付き）はなんなの？ 拾っていいのか？ お待ち帰りしていいのか？

キーンコーンカーンコーン……

む、授業開始か。もう少し抱いていたのだが………周りの視線と千冬さんの視線が痛いし、無理だな。

「一夏。授業の時間だぞ。起きろ」

「……はあ……い……」

私の言葉に反応してゆっくりと一夏が動き出す。ぺたりと伏せられていた耳がピクリと跳ね、眠そうな目を右手で擦りながら顔を上げる。

「……っ、ぐふっ！」

「かはっ!？」

「……っ!？」

……被害は甚大だ。かくいう私も必死になって愛情の暴走を止めているわけだしな。

自分の席に戻った一夏は、どうやって入っていたのかは知らないが四十センチほどの小さな一夏（お揃いらしい茶色い耳と尻尾付き）を鞆から出して、抱き締めて目を閉じた。

小さな一夏もまんざらでも無いらしく、一夏の手を頬を擦り付けて鼻をぴすぴすと甘えている。

「……きゆう……」

「……くう……ん……」

……今思い出しても私は凄いと思う。よく耐えたな、私。
ただ、この時私の頭の中では

『箒。君は頑張った。よく頑張った』

『でも、もう我慢なんてしなくていいんだよ？』

『自分に素直になろうよ。我慢は体によくないよ？』

『見てごらん？ 周りだってああなってるんだ。仕方ないことなんだよ』

『だって、一夏が可愛いんだから』

『……君も、そう思うでしょ？』

……といった悪魔の囁きがぐるぐると思考の大半を占拠していたが、なんとか振り切った。

……その声の主が頭の上に天使の輪を浮かべて純白の羽を生やした小さな一夏と、尖った尻尾と黒い蝙蝠のような羽を持っていた小さな一夏だった理由がわからないが、恐らくそれは永遠にわかる日は来ないだろう。

……ああ、一夏は可愛いなあ……。

IS調整、一次移行マター？

やほ。最近クラスののほほんとした娘におりむーと呼ばれ始めた俺だ。名前は当然、織斑一夏。昔の名前は桜道一哉。哉の字がムズい。ちなみに俺からその娘は『のほほん』と呼んでいる。渾名とか偽名とかは何でか覚えられるんだよな。理由は知らん。

そんな俺だが、今はIS整備室に来ている。黒猫耳と白猫ぶちか装備で。

……途中で色々あつて拐われそうになったり寮の部屋に連れ込まれそうになったりしたけど、スタンガンってのは便利だな。スイッチ入れるとバチバチじゃなくってガギギギって致命的な音がするけど。

……まあ、それはどうでもいいことだ。今はもっと大切なことがある。

実は、シロがまだ一次移行をしないのだ。原作ではもうしているはず……と言うか、金髪との決闘中にするはずなんだが……まあ、相当魔改造されてるからおかしくはないんだが。

そこで原因を調べるべく、整備室で色々と見ておこうとしているわけだ。

機材を借りて適当に繋ぎ、シロの中身を覗く。

……ああ、理由が何となくわかった。

つまり、性格の違うコアを直列並列関係無しに繋ぎあわせたおかげ

で、全体ならともかく一つ一つのコアに対する時間が足りていないわけだ。

ちなみに足りているのは左の衝撃砲と恐らく反応速度を上げているところ。右の衝撃砲は後少し。機動はまだまだでブースターもまだハイパーセンサーは……まあまあか。

……… やれやれ、これじゃあ一次移行はしばらく先になりそうだから代表が俺じゃないから特にな。

……… もし、鈴がIS学園に来て金髪と戦うことになったときに束姉さんからISが送り込まれてきたら、どうしようかねえ……。フィッティングが終わらないとアクセサリみたいな待機してくれないんだが……。やれやれ、困ったねえ……。乱入もできないな。

side 更識 簪

視界の端で、黒い尻尾が揺れ動く。

それは私となり座っている、織斑一夏のものだ。なぜそんなものをつけているのかはわからないけれど……。かわいいとは思う。

小さい白い猫耳の織斑くんが、その尻尾を追いかけて回している所なんて、ついつい手を休めて見入ってしまうほどだ。

何があったのかはわからないけど、織斑くんは難しそうな顔をしていたと思う。

それからため息をついて、専用機をどこかに運んでいった。

……… 何で待機状態にしないの？

ちょっとだけ気になって織斑くんが残していったデータを見てみると、理由がわかった。

……まだ、フィッティングが終わってないんだ。あんなに乗ったのに、まだ。

聞いた話だと、織斑くんは一週間に一度ISに乗って訓練をしているらしい。かなりの好成绩を出していたって聞いたのだけれど……噂が間違っていたのか、それとも初期設定のISで結果を出した織斑くんが凄いのか……。

「……なにやってるの？」

「きやつ……！」

振り向くとそこにはちっちゃい織斑くんを抱えた織斑くんがいた。

……私は今、何をしていた？ 見ればわかる。織斑くんのISのデータを覗き見していた。

……もしも私が打鉄二式のデータを勝手に見られたら？ そのときにならなくてまわる。すごく怒るだろう。

……それじゃあ、織斑くんが私のやっていることを見て、怒らない可能性は？ そんなもの、どこにもない。

噂では、織斑くんは怒ると織斑先生より怖くなるらしい。IS初心者で、起動時間が一時間も無いのに代表候補生を一方的に倒してしまったという噂だ。

そして織斑先生も、怒った織斑くんには手がつけられないのだとか……正確に言うと止められないことはないのだが、その後に怒らせられた相手に対する報復が激しくなるとも言っていたらしい。

そんな織斑くんが、今、私の前に立っている。

「……………ああ、シロのデータ見てたのね」

「あ、あの……………ごめんなさい……………」

「いいよ別に。フィッティングすら終わってない状態のスペックを見られたところで痛くもなんともないし」

……………あれ、意外と……………怖くない……………？

のんびりとした口調。ゆつたりとした空気。眠たげな表情。それらがなんとなく、小さな頃から知っている私の友達を思い出させる。

「……………ああ、って言うかむしろ手伝わてくれない？ このままだとほんとに一次移行に半年とかかかりそうです」

「え……………いいけど……………」

……………って、なんで私は良いよって言うてるの！？

そう思ったけど、織斑くんの嬉しそうな顔を見ると断る気が失せてしまう。……………もう。

「ありがと。それじゃあとりあえず俺は乗るから、フィッティングの手伝い頼める？」

……………えっと……………調整とか整備だったらともかく、フィッティングのやり方はちょっと……………。

「……………使ってれば勝手にしてくれると思うけど……………？」

「八時間くらい乗ったんだけど、どうも遅くてな。二割くらいしか終わってないんだよ」

……どんなISを使ってるの？

鈴、来る

らららコッペパン らららコッペパン いつも変わらない味

……なんとなく出てきたので歌ってみた。若干舌っ足らず風に歌うのがコツと言えばコツかもしれない。だからと言って本当に舌っ足らずにするわけではなく、あくまでも舌っ足らず『風』なだけだ。幼子風とも言っ。

それとシロの事だが、驚きの事実が発覚した。なんとシロは、フィッティングが完全でなくとも待機状態になれたらしい。かんちゃん（本名は忘れたが整備室に居た度の入っていない眼鏡をかけた娘）が言ってくれなかったらずっとわからなかったかもしれない。わかってよかった。あと待機時の形態はなぜか武骨な手甲だった。きっとフィッティングが終わっていないせいだと思いたい。

とりあえずかんちゃんの助けを得てフィッティングを三割まで終わらせた。そう何度も手伝ってもらうのは悪い気がしたんだが、かんちゃんはどうかやらシロの中のどこかのプログラムを参考にしたいらしく、もう少し手伝ってくれるらしい。

……優しい娘だな。

ちなみに俺はかんちゃんの名前も盛大に間違えた。

「サワツディー・神凧かななぎだっけ？」

「……全然違う」

このあとまた教えてくれたんだが、その度に間違えた。俺の体質（日本語に直して平仮名三文字以上の名前は覚えるのに五年以上かかる）の事を教えたら、苦笑いしていた。

ちなみに人の名前だけじゃなくってISの名前も覚えられないことを言った時も苦笑いしていた。

すまん。

ISの実践授業で基本的な飛行操縦をすることになった。ISスーツは臍出ししない全身型のを千の顔を持つ英雄で出して使っているので誰かさん達が倒れることはないだろう。

……なぜかうなじとか尻とかに後ろから視線が集中してるような気もするけど、きっと気のせい。

「……ああ、かわいいいうなじ……」

「背中とか擦ったら、どんな声をあげるのかな……？」

「……………（はあはあ）」

……畜生。変態ばっかりか。全力で逃げたい。

ちよっと涙目になってしまったが、いくらなんでもちー姉さんの前でそういうことはしてこないだろうと思いたい。

ゴスツ！ゴスツ！ドゴスツ！！

「私語は慎め。かわりに元気の有り余っている貴様らにはグラウンド五十周をくれてやる。嬉しいだろう？」

…………… IS学園のグラウンドは一周五キロあるそうだ。それを五

十周……フルマラソンおよそ六回分か。

……まあ、俺ならなんとかなるだろう。ライドインパルスと気の強化を使って全速力でやれば……多分ラカンは秒速十キロくらいは出せるだろうから、二倍と考えると十五秒かからない。

曲がることを考えればもう少し遅くなるだろうが、それでも一分程度だろう。

……… 久し振りにまともにチートか凄いと感じたな。いつぶりだ？

……… まあ、なんでもいいか。がんばれ。

こっちはこっちでIS展開しないと。とりあえずだらんと力を抜いて、シロという鎧をつける感覚で。

(シロ)

反応速度特化型のISであるためか、展開開始から終了までが0.02秒という明らかに頭がおかしい速度になっているが、悪いことではないので気にしない。

それとついでに、シロの機体名がいつの間にかシロになっていた。元は違ったと思うが、呼びやすいから無問題。

「ISの展開は終わったようだな。飛べ」

そういわれてすぐ飛び上がる。機動力特化だがそんなに速度は出さない。面倒だし、まだ慣れてないから自信がない。

百零停止と零百加速はできたけど、やっぱり飛び慣れてないからな。

「ご主人様？」

「ご主人は嫌だ。黙ってくれ」

……ああ、まあ、なんとかなるかね。

ちなみにこのISは急加速や急減速の時のGの軽減用としてかなり性能のいいPICを積んでいるらしい。そうじゃなかったら百零停止で死んでるな。

……いや、この程度じゃあ死なないか。

この後の武装の展開は楽に終わった。いつも千の顔を持つ英雄を使っているのが想像が簡単だったからと言うのもあるだろうな。記録は0.03秒。展開より0.01秒遅いが、まあ早い方だよな？

「武装……あつたんですの？」

「あるから展開したんだけどな」

……さて、今日の授業も何事もなく終わっ

っ！

懐かしい気配を見付けた。すぐさま監視用のゾナ八虫（無害）をそちらに放つ。

すると空港にほど近いタクシーの中でその気配の主を見付けた。

やっぱり来たか。鈴。

ちー姉さんの授業の時と同じくらい起きて、買い物に行く。久し振りの親友との再会なんだし、手の込んだ料理で迎えるべきだろう。

ちー姉さんも鈴のことは嫌いではなかったはずだし、一緒に飯にしよう。のちゃんも呼んで、かんちゃんは………忙しいって断られるだろうけどー応呼んどくか。

後ろで俺が起きたことに驚いている奴等はしばらくほっとこつ。

歓迎会、お出迎え

俺は料理の材料を買い込み、鈴が好きそうな料理を作っていた。主に酢豚や青椒肉絲等の中華料理だが、和食も少し入っている。

ちなみに一番手をかけているのはミニラーメンだ。鈴はラーメンが好きだったと記憶しているので、小麦粉を捏ねて麺を切らずに手で伸ばし、スープもチャーシューもメンマも自作してみた。

途中で見知らぬ誰かが勝手につまみ食いしていたので、とりあえずちー姉さんの真似をしてアイアンクローで浮かしておいた。泡を吹いていたような気がしなくもないけど、きつと気のせいだと思うことにしておいた。

ちなみに俺は、片手で固定されてない西瓜の皮を掴んで挟むことができる。そのくらい簡単だけど、人間相手にはちゃんと手加減している。俺って優しい

それと、鈴の迎えにはぶちか達四体を行かせた。あいつらはあんななりでもISだし、ISなのに小さいシロ、略してミニシロを使うので問題ないだろう。一次移行終わってないけど。

ちなみにミニシロはしっかり衝撃砲も近接ブレード（まだ名無し）をもっているし、機動力も反応速度もシロとほとんど同等と言う驚きのスペックを誇る。

さらに奥の手も存在するので、まあ、拐われることはないだろう。

心配するべき所は、鈴に会う前にはしゃぎすぎて眠ってしまわないかと言うところだが………まあ、なんとかなるだろう。

……なにかなるよな？

side ぷちか四十六号

白狼ぷちかこと、ぷちか四十六号です。名前はこれで固定されました、変更はききません。

おれたちは今、ごしゅじんさまにお願いされて、中学の頃の同級生、
鳳 鈴銀^{リンギン}こと鈴を迎えに行くと言う責任重大な任務を受けています。

そのためにおれが任されたのが、三体の同族達。

黒ラブぷちかこと、ぷちか二十三号。

ボルゾイぷちかこと、ぷちか三十三号。

そしてチワワぷちかこと、ぷちか四十一号。

それに俺を合わせた四体での任務になる。

……報酬はなんと、おにくをいっぱいたべられるのだ。そして、高
確率で鈴さんにだっこしてもらった後、たかいたかいまでしてもら
えることがあると。

………受けるしかないだろこれは！

「わう！」

「わう！」

「わう！わうわう！」

「……くう……わう」

ボルゾイぶちかが大きく吠えすぎたせいで、チワワぶちかが怖がって半泣きになった。とりあえずボルゾイぶちかを『めっ!』してからチワワぶちかを慰める。

……背は同じくらいだから、押されるところころ転がっていつちやうけどね。

それとさっきからハイパーセンサーで周りの様子を見ていると、ころころ転がったりととと歩き回るおれたちを見て、なぜか血まみれで笑顔を浮かべながら倒れてしまう。

そんなになってもずりずりとおれたちにはいよってくるから、ちょっと怖い。

「くう……」

気の弱いチワワぶちかなんて、尻尾を足の間に挟みながら俺にくっついてくるほど怖がっている。

「わうわう!!」

「わう!!」

「わう!!」

「くうん……わう!!」

すぐにこの場を離れて鈴さんを迎えに行く事を提案すると、即答で色好い返事が帰ってきた。

それじゃあ、行こう!鈴さんを迎えに!

「わうわうわう」

「わう、わわう」

「くう、わう」

「わう〜」

尻尾をふりふり、耳をぴくぴく、四体揃って元気に歩く。
鈴さんの居場所はすぐにわかる。ハイパーセンサーと風に乗った匂いで。

まだIS学園の敷地内には入ってきてないようなので、外と中を繋ぐモノレールの駅で鈴さんを待つ。もうちょっと時間がかかるみたいだ。

暇な時間を潰すための遊び道具は持ってきた。トランプだけど。ちなみに絵柄はスピードがわんこ属性ぶちか、クローバーがやんこ属性ぶちか、ダイヤが鳥属性ぶちか（エンジェルぶちかもここ）、ハートがそれ以外の属性のぶちかと絵柄分けされている。

やるのは大貧民。ジョーカー一枚の特殊ルール革命以外一切なし。ついでにジョーカーの柄はミニシロ。

「わう！」

「ふっ……わう」

「わうっ！」

「わ〜う〜」

「わうわう！」

「わう」

なぜかチワワぶちかはこういうのが妙に強い。どのくらい強いかと言っと、物理・特殊受けラッキーレベル100しんかのきせき持ちカウンターたまごうみつきくらい？ 勝てないことはないけどきつい。

「わう！」

革命！？ こんなときに革命だって！？

弱い札から切って行ってあらかた出尽くしたところでこれは……っ！

………ん？ この匂いは……。

くるりと後ろを振り返ってみると、そこには鈴さんが立っていた。
懐かしい匂いだ。

急いでトランプを片付けて、鈴さんをお出迎えする。くるくると鈴さんの周りを回っているだけだけだ。

「……ふふふつ。久し振りね、ぷちか」

「わう！」

「わわう！」

「わうわう！」

「わう！」

「あははっ！元気ねえ。一夏は元気？」

「ごしゅじんさまは元気だよ。ずっとね。」

そういう思いを込めてこくこくと頷くと、鈴さんは嬉しそうににっこりと笑ってくれました。

………それじゃあ、ごしゅじんさまの所に行きましょう！

「あ、私ちよつと先に手続きしないとIS学園に入れなんだけど……場所わかる？」

わかりますよ？

頷いてからその場所に行こうとすると、チワワぷちかが鈴さんに抱き上げられた。

「それじゃあ、案内よろしくね？」

「」「」「わう！」「」

外伝、予知夢？ セシリア編（前書き）

リクエストがあったので書いてみました。

外伝、予知夢？ セシリア編

先に言っておくが、これは少し未来の俺が思い出している話だ。だから金髪の事を金髪と呼んでいない。しかし本編ではまだしばらく金髪呼びをするから、それが嫌なら読み飛ばしてくれ。

このくらい開けとけば良いか。

金髪……わかりづらいしそろそろ名前で呼んでやるかな。シアとセリとせっしーとどれがいいと思う？ オル子も候補には入ってるんだが。
渾名とかだったらなんでか覚えられるから三文字以上でも構わない

んだが……セシリーで良いか。

セシリーを優しくたしなめた次の日の夜。俺はまた薄ぼんやりとした夢を見た。原作の一夏とセシリーが、ISを使って訓練をしている。

俺は邪魔をしないように観客席でそれを見ていたら、一夏が俺に気が付いたらしくこっちの方を見つめていた。それにつられて、セシリーも。

俺はひよいと立ち上がってステージに入る。バリアは張られていなかった。

てこてこと歩いて一夏とセシリーに近付いていくと、一夏はセシリーに一言二言言ってからISを解除して俺の頭を撫でてきた。

……いい撫でテクを持つてるじゃないか。

しばらく一夏の撫でテクを堪能してから、前回と同じように獣耳を取り出す。前回の尖った犬耳とは少し趣向を変えて、今回は垂れ犬耳。ただしどこかメカニカルな気配がする。

一夏は俺が持ったそれを見ると、苦笑しながら頭を下げてきてくれた。うん、つけやすくていいね。

つけてみると、今回は凜々しいと言うよりはどこか愛らしさが増したような気がする。

……うん。いいんじゃないか？

そう思いつつ振り返ってみると、セシリーが俺と一夏をガン見していた。その目には驚愕一色。あまりにもそっくりな俺と一夏に驚いているんだらうか。何でもいいけどね。

こっちのセシリーは俺のところのセシリーと違って変態ではないことを祈りつつ近付いていくと、なぜか撫でられた。このぎこちなさは寝ている俺を撫で始めたばかりのちー姉さんにも匹敵するな。まあ、一夏が俺の事を撫でてたから撫でたんだろぅが……もう少し撫でようがあると思うんだよな。いいけど。

しばらく撫でさせると一夏がまた苦笑して、セシリーに撫で方を教えていた。手取り足取り……いや足はとってないけど、それだけでも格段に撫でテクが良くなった。やっぱり他人に物を教えるときは実際にやってからやらせるのが一番だよな。

……ん、及第点かな？

と言うことでセシリーにも一夏と同じ垂れ犬耳をつける。こっちはなぜかちよくちよく動いている。

そして俺も同じように垂れ犬耳をつけて、にこにこしながら二人の手を取る。これは夢なんだし、遊んで笑って仲良くして、それからみんなで寝ようじゃないか。

side 一夏Another

小さい俺によく似た子供が眠った後、俺とセシリアは手を繋いで横になっていた。

その間にはもちろんその子供が居て、まるで本当の子犬のように俺に擦り寄ってきていた。

……前に見たときは相手は篝だったんだが……あの時は一緒に寝

た夢（しかも俺似の子供も一緒に仲のいい家族みたいな状態で）を見たせいで、しばらく顔を合わせる度反らしてたんだよなあ……………。不思議なことに、篤も俺と同じ夢を見ていたらしく、その事を伝えたらものすごく驚いていた。

「……………」

きゅ、と俺の服（いつの間にかISスーツじゃなくなって制服になっていた）を両手でつかんで、顔を俺の胸に擦り付けている。

「……………わたくしは。なんであまり好かれていないのでしょうか？」

それを見たセシリアは少し不機嫌そうに、かつ悲しそうに言うんだが、俺に言われても知らない。篤の時は普通に篤にも甘えてたんだがなあ……………。

そう思いながら子供の頭を撫でる。……………そう言えば篤とこの子供はなんなのかという話をして、未来の俺の子供じゃないかって言う話になったんだっけ。

……………そう言や相手は誰なんだろうな？ 篤かも、って言ったら篤は顔を真っ赤にして怒ってきたから違うとして……………セシリア？……………まさかな。

そんなことを考えているうちに夢の中の俺は眠っていて、ふっと起きると寮の俺の部屋だった。

あの夢は確かに夢のはずなのに、なぜか本当にあったような気がしてならない。

その上忘れる気配もなく、いつまでも鮮明に覚えている。

……ふと、頭に手をやってみると、なにかに触れた。

……夢のなかであの子供につけられた、垂れ犬耳だった。

……気付いてよかったぜ。このまま教室に行ったら大恥かくところだった。

……いやいやいや、そうじゃない。それは重要じゃない。なん
でこれがここにあるんだ!?

俺は軽くパニックになった。

歓迎会、主催者は俺

食堂を借りきって準備をする。ちなみにかんちゃんはやっぱり来ないらしい。ちよつと残念。

ののちゃんとかー姉さんは結構乗り気だった。それから俺が準備をしているのを見て途中参加したいと言ってきたクラスメイト（例によつて名前は覚えていない）達も手伝ってくれているのかどつている。

……ちよつと料理が足りないかと思つたので追加を作ることにする。鈴には悪いけどちよつとの間ぶちかハーレムで我慢してもらおう。

料理の追加を作っていると、ぶちかたちと一緒に鈴が姿を表した。ちー姉さんやクラスメイトがいいな〜という目で見ていたが、ぶちか達は久し振りに会つた鈴から離れたがらなかった。
……まったく。

「鈴」

「あ、一夏」

俺が姿を見せると、ぶちか達は俺に向かって走ってくる。てててつとつと言つ擬音がとても良く似合う走り方だ。

「……久し振り。料理できてるから、座つて」

「……それじゃあ、お言葉に甘えとしましょうか」

鈴はそう言つて、膝にチワワぶちかを乗せて座つた。

………変わらないな。鈴は。

料理をするのは俺、料理を運ぶのはぶちか達と言う歓迎会は、凄まじい勢いで脱落者を量産していった。

とある少女はぶちかにご飯を食べさせた時の反応に脳髄を直撃されて鼻血を噴き出し、とある少女はぱたと左右に振られる狐ぶちかの尻尾に視線を奪われてただじつと見つめ続け、催眠術にかかったかのように倒れる。

またある少女はぶちかをおもちかえりしようとしてちー姉さんのアイアンクローに浮かされ、頭蓋骨を軋ませながら気絶し、そのちー姉さんも白蛇ぶちか和白虎ぶちか、小さな翼が背中についている鳩ぶちかに囲まれて気絶。残ったのはのほほんとのちゃんと鈴の三人だけ。

ちなみに金髪は開始二十秒で左腕を虎ぶちかに尻尾で撥られて気絶。幸せそうな顔をしていた。

「……なんか、ぶちかもずいぶん増えたわね」

「最初からぶちかは108いるって言つといた方が良かった？」

「……………そんなに一気にぶちかを見たら、出血多量で死んじゃうわよ」

そう言っている間にも片付けの手は止まらない。俺も鈴ものちやんめある程度家事はできるし、このくらいのことば簡単だ。

ちなみにぶちか達は落ちた少女達（ちー姉さん含む）をそれぞれの部屋におくりとどけさせている。ぶちかだけじゃあ確かに難しいだろうが、ミニシロがいるし平気だろう。

ばれたら不味い気もするが、ばれないように武装で錬金なチャフを撒いてカメラや発信器などを無効化してあるので……大丈夫なはず。

「……あーあ。料理の修行もしてこれなら一夏にも負けないうって思ってたなら、もっと上手くなってるなんて……」

「しかたなかるう。それが一夏なのだから」

「……………そうね。……………はあ……………」

「うむ。……………そう言えば、自己紹介がまだだったな。私は篠ノ之 箒だ。箒でいい」

「鳳 鈴音よ。じゃあ私も鈴でいいわ。仲良くしましょ」

ののちゃんと鈴はこの短い時間でわかりあったらしく、こつんと拳を軽くぶつけ合っていた。仲が良かったのは良いことだ。

「あ、でも一夏を一人占めはさせないわよ？ 私も混ぜて」

「なんの話をしている……………と、昔ならば言っていたのだろうか……………安心しろ」

じゃあ俺が言うわ。なんの話だなんの。

「そつだ、私達の部屋に泊まるか？ 一夏の睡眠を邪魔しないのならば許すぞ？」

「はつ。誰に言ってるのよ。私はIEEE（いっぱいいっぱい一夏の会長よ？ 一夏の健やかな睡眠を見守ることを誉れとする私達が、そんなことをするわけないじゃない」

……………まあ、いいか。寝るのの邪魔をする訳じゃないみたいだし、問題ないな。

仕事を終わらせて帰ってきたぶちか達の数を数える。全員いるな。拐われたりはしてないな。

「……じゃあ、歯磨きして寝るか」

「わう！」

「にゃうー！」

「「がふっ！！」」

どささっ！と五十キロ程度の肉が床に落ちたような音がした。その方向を見てみると、鈴とのちゃんが床に倒れていた。床が真っ赤に染まっている。

「く……い、いきなりそれは、反則よ……っ！」

「くう……っ！」

どうやら元気なようだ。

それじゃあ、部屋に戻るか。なんか盗聴機が山のように仕掛けられてるような気がするけど。

……俺、一人部屋になったら自分の部屋にチャフ撒くんだ……。今はのちゃんが居るから使うとのちゃんが発狂しちゃうから使わないけど、一人になったら絶対使うんだ……。

まあ、部屋に着く前にまた全部ぶっ壊したけど。電波障害って地球が磁気を帯びている限り、どんなところでも起きる可能性はあるらしいな。それと同じく磁気嵐も。

……偶然ほど怖いものは無いよな？

原作崩壊、今更だけど

一組のクラス代表は金髪。確か名前は……せ……せ……せ……セリヌン
ティウス・オルゴデミーラ。

……絶対違うな。

「それはそうだろう。メロスの友人とゲームの魔王の名だぞそれは
オルコットだ。セシリア・オルコット」

そうだったか。人の名前は覚えられなくてな。

あと、二組のクラス代表も覚えていない。鈴はクラス代表にはなっ
ていないみたいだし、あまり覚える気も無い。

……原作崩壊が凄まじいな。このままだと原作ではあった束姉さん
の作った無人ISの襲撃がなくなるんじゃないか？

……なくなっても何ら問題は無いか。あつたらあつたで一次移行の
糧にさせてもらうつもりだけど。

それに、なんとなくある気がするんだよな。襲撃。

ついでに一次移行についてだが、かんちゃんのおかげで少しずつ進
んでいる。フラグメントマップが凄いいことになってるらしいけど、
知らん。現在進行率三割五分くらい。

……さてと。昼休みになったし、寝るか。

「一夏、迎えに来たわよ」

「良く来てくれたな鈴」

「あ、筈じゃない。昨日はありがとね。……で、やっぱり一夏は昼

食べてないの？」

「私が引きずって食堂まで連れていかなければ昼どころか朝も夜も食べようとしらないのだ」

のちゃんの話を聞いた鈴に睨まれた。怖い怖い。

「一夏。また作ってきてあげたから、屋上で食べるわよ」

「え。俺は作ってないぞ？」

「んなことはわかってんのよ。いいから来なさい。箸も一緒にどうぞ？」

「……ふむ。ならば一緒にさせてもらおうとしようか」

いつの間にか勝手に話が進んでいた。俺はどうやら屋上で弁当を食べることになったらしい。

……まあ、いいか。

「はい一夏。あーん」

「……はむ。もきゅもきゅ……」

「……いいものだな」

「……いいものでしょ？」

なぜか俺はのちゃんと鈴に優しい目で見つめられている。

……それはどうでもいいけど、鈴のやつ随分腕上げたなあ……俺もつかつかしてらんないな。

「ふふふっ　美味しいでしょ？　一夏に追い付けるように頑張っただから」

「ん。美味しい」

「……そうだな。明日は私も作ってくることにしよう。構わないか？」

ん？ ののちゃんの料理？ ……確か、結構上手に作れたはず。

「お願いします」

「一夏は私達の分ね。私も一夏の分作ってくるから」

「……ああそうか。普通の量では足りないのだったな。だから二人分か。わかった」

一瞬抗議の声を上げようとしたののちゃんも、俺の食う量を思い出したのかすぐに静かになった。

……うん、人に料理を作ってあげるのって、いいよね。

それに感想をもらって、笑顔と一緒に『美味しい』って言ってもらえる、次も頑張る気になる。

……最近、ちー姉さんにご飯作ってあげてないなあ……ちー姉さんの分も一緒に作るのかな。ちなみに、前に一回ものすつごく可愛いお弁当（たこさんウインナー、だし巻き玉子はハート型。ご飯の上にはまたハートで、デザートは当然うささんリンゴ）を作った持たせたら、次会ったときにグリグリされた。痛かった。

何でも周りの人にすつごいからかわれたんだとか。

しかもかなり美味しくて悔しかったらしい。

ごめんねちー姉さん。

「はい一夏。あーん」
「あー……はむ」

一夏のために作ってきた酢豚をバランス良く摘まみ、一夏の口許に運ぶ。すると一夏は躊躇なくぱくりと食いついてくる。

「もきゅもきゅもきゅ……」

……うん、可愛い。

「……な、なあ、鈴」

「どうしたの？」

急に話しかけてきた筈に視線を向けると、筈は僅かに顔を赤らめながら私にお願いをして来た。

「こんなことを頼むのは変だとわかっているんだが……私も、一夏に食べさせてやっても構わないだろうか？」

「あ、良いわよ？」

あまりに軽い私の答えに、筈の体から力が抜けた。

「……いい……良いのか？」

「良いわよ別に。でも、ちゃんと栄養や味の濃さとかも考えて食べさせてあげてね」

ちなみにこれ、結構難しい。どのくらい難しいかを簡単に言つと、他人に最適化されたISを動かすのと同じくらい難しい。

なぜならそれは、一夏の味覚のことをよく知って、そして料理の材料やその味のことをわかっていて、その上で一夏の口の大きさやな

にやらかにやらをわかってやんないといけないけれど……まあ、一夏だったら大体のことは簡単に無視して食べるでしょ。どうしても嫌なら口出しくらいすると思うし。

「……ふう……一夏。あーん、だ」

「……あー……ん」

……うん。初々しくて良いわねえ……。

クラス対抗戦、見所皆無

金髪の独壇場でした。終わり。

さてと。それじゃあクラス対抗戦の前にあつたちょっとした事件の
ことでも話そうか。

「……一夏？ オルコットが頬を染めて身悶えしてるんだが……」
「気にしない気にしない。」

気にしたところで扱いは変わりやしないんだから。

「……お前はそこまでオルコットが嫌いか？」
「ん？ 別にもう大して嫌いじゃないけど？」
「……じゃあ、なぜそこまできつい態度をとるんだ？」
「本人にそういう態度でいてほしいって言われたからだな」
「……原因はオルコット自身か……」

のちゃんはそう呟いて頭を抱えた。
まあ、いつものことだな。

このことは話すのが面倒だから、夢の中の回想で勝手に見てくれ。

side 織斑 一夏

鈴が転入してからしばらくして、鈴から模擬戦のお誘いを受けた。

ちなみにこれは睡眠時間を削ろうとしているわけではなく、シロの一次移行の手助けをしたいかららしい。

なんでも一次移行をする前とした後では機動力や馴染み方が全く違うらしいので、さっさとやっておかないと困ったときに大変だからと聞いた。

週に一回のアリーナの訓練と週に一回の整備室での整備ではデータが足りないらしく、こっちも望むところとOKサインを出した。

その時に金髪がその相手に立候補してきたが、遠距離武器系統のデータの方は足りているので断っておいた。

……普通のISは一つ一つではなく全体で一気変わるものだと思ってたんだが………まあ、これも東姉さんが作ったコアを複数使った初めての機体だからこれが仕様なんだと納得しておくことにした。

そついう機体だって無いとは言えないよな！

「さて、それじゃあ始めましょうか。」

「そつしよつ」

俺と鈴はアリーナでISを装着したまま浮いている。アリーナは借りきったので、ステージには俺と鈴以外は誰もいない。

……ところで、俺がアリーナを使うときにはなぜか毎回観客席がいっぱいになるんだが、理由は知らないか？

「一夏はもてるからじゃないかしら？」

「まさか」

原作一夏だったらともかく、俺だぞ？ 無い無い。

「……ああ、そうだ。一夏の戦闘記録見たんだけど……手加減してね」

「それなりにね」

……さてと。それじゃあ始めようかね。それなりに手加減するけど。とりあえず今回は近接ブレード（名前はまだ無い）を展開する。右手の衝撃砲の最大威力……というか、アーリーナのバリアをぶち抜ける以上の威力を出すのは禁止されたから、右手に。

「あれ？ そんな武器あったの？」

「あつたよ？ 使ってなかったけど」

「へえ……それじゃ、始めましょうか」

弾と鈴と一緒に行った喧嘩では、面白がってこんなことをやっていった。

腰を落とし、下げるようにして開いた左膝に左手を置き、右手は広げたまま鈴に差し出す。ブレードはなぜか腰元で浮いている。鞘に入っていないのにな。

「お控えなすつて。手前、生まれも育ちも日本の本国。無限の空の生国で、一人の姉と共に生き、その生の大半を睡眠に費やして来やしたが、何の因果か空を動かし、こうしてこの学園にて、生を繋ぐために力をつけるために空を舞っておりやす」

ここで一度切つて、息継ぎをする。

「名は、『世界最強の弟』何て呼ばれちゃいますが、血でその者の

全てが決まるはずも無し……凰 鈴音が友、織斑一夏と言う者でござんす。……失礼ながら、お手前は？」

ちなみに鈴の名前の所で少し止まった訳は、シロのハイパーセンサーで出てきた鈴の本名を参考にしていたから。

それを知らない鈴は少し驚いた顔をしたが、すぐにくすりと笑って俺と同じポーズをとった。

「あたしは生まれは中華の国、凰家食房が娘。想い人に毎日の糧を作れるように修行の日々を送っております。両親の思いやりを胸に、想い人に再会いたしました……織斑一夏が友人、凰 鈴音と申します」

……いきなりなのによく会わせられるな。驚きだよ。多分俺もできるけど。

「……って、行きなり言われてあたしが気付かなかったらあんただの痛い人よ？」

「鈴だったら気付くと思って。実際気付いたし」

「まあ、そうなんだけどね」

お互いに笑い合う。けらけらと。くすくすと。

そして全く同じ時に笑いを止めて。

「いざー」

俺が吠える。

「尋常に！」

鈴が叫ぶ。

「勝負！」

……そして、お互いの武器がぶつかりあった。

外伝、予知夢？ 鈴編（前書き）

外伝の時間軸の前後は飾りです。気にしないであげてください。

外伝、予知夢？ 鈴編

原作では鈴と仲直りをした日のこと。つまりクラス対抗戦の日のことだ。

その日の夜、三度俺は薄ぼんやりした夢を見た。

俺の視線の先には原作一夏と鈴の姿。保険室で鈴が一夏の手当てをしているように見える。

俺は座っていたベッドから降り、半分だけ閉まっていた白いカーテンを開ける。すると薄ぼんやりとしていた一夏と鈴の象が急にはつきりとして、その二人が俺の方に顔を向ける。

鈴はやはり驚いているようで、俺のことを穴が開くほど見つめている。しかし一夏の方はもう慣れたらしく、俺の姿を確認した途端に苦笑して、そして手招きして呼び寄せた。

当然俺はその誘いに乗ってはいよいよと近寄っていく。一夏って、なんか安心する匂いがするんだよな。俺からはそれと同じ匂いがしてるのかどうかわからないけど。

きゅっと抱き着いて、それからまた撫でてもらう。身長はさらに縮めて百二十ほど。座っている一夏の頭よりちょっと高い程度だ。

「……やっぱり撫で心地良いよな」

「……はふう………」

こうして俺と一夏がのんびりしていると、鈴がようやく再起動したらしく、急に一夏に近付いて一夏の襟首を掴んで揺さぶった。

「一夏あ！この子誰よ！どこの誰の子よ誰との子よ！？」

「知らねえよ！何で俺にそっくりなのかもわかんねえよ！ついでに俺にそういう相手はいないから！」

……とりあえず、止めるか。

一夏の腰に抱き付いて、少し涙目になる。そして一言。

「……喧嘩はダメ」

俺達のところの鈴だったらこれで止まったんだけど……「うちの鈴にも効くかどうか……」と思っていたら抱き締められた。どうやら効果はあつたらしい。

「そんなに気になるんだつたらその子に直接聞いてみるよ」

一夏はけけほと咳き込みながらそう言うが、俺はその事について話すことはしない。絶対。だってそれじゃあつまらないからな。

「……秘密」

聞かれる前につこり笑って言う。

「何だよ？」

「教えちゃダメって言われたから」

俺が、俺に。まあ、何にしる言わないけどな。

「だってさ。とりあえず撫でとこつぜ。この子撫で心地良いんだ」

「……………あ、ほんとね。なんか撫でてて落ち着くわ」

一夏と鈴はそう言いながら俺を撫でる。セシリーはあんまり上手じやなかったけど、鈴は上手いな。

「……………そう言えば、この子、名前は？」

「……………そう言えば聞いてないな」

うん、言っていないからな。聞かれてもないから教えるタイミングが無かったとも言っけれど。

「……………えっと……………名前を覚えてくれないか？」

「大天災さんが『秘密にしといた方が面白いから教えちゃダメだよ』って言ってたから、ダメ」

……………っていう言い訳を考えた。鈴の方は納得してなかったみたいだけど、一夏の方はすぐに誰だかわかったみたいで頭を抱えている。まあ、気持ちはわかるけどね。

「……………ああ、うん、わかった、教えなくていい」

「ありがとパパ」

「……………は？」

……………おっと、つい面白くなりそうだから言っちゃった。

そこで話をそらすついでにいつも通り獣耳を取り出して一夏につけた。今回は灰色の猫。やっぱりどこかメカニカル。

「な、なあパパってどういう」

「ふあ……………眠くなってきた……………寝よ？」

俺ははぐらかすを使った。一夏はおとなしくなった。

おとなしくなった一夏を保健室のベッドに連れ込む。そして、じー
ーっと鈴を見つめると一夏が鈴を呼んでくれた。

「鈴。どうせ夢なんだし、一緒に寝ようぜ」

「なっ！ばっ……………！……………そ、そうね。夢だもんね。夢のなかだった
ら……………うん」

そう言って鈴は、一夏と自分で俺を挟むようにベッドに入ってきた。

……………おやすみ。

side 一夏Another

……………今回で三回目の夢の中の子供との出会い。今までに一緒に
出会った篤とセシリアとの話し合いのときに出てきたこの子供の正
体について。

……………三回目にして、俺の子供の確率が高くなった。それもめち
やくちや。

普通だったらあり得ない。そう、あり得ないが……………俺と鈴の間で
すやすやと眠るこの子供が言うには、この事には東さんが関わって
いるそうだ。

大天才（少し違う気もするが、あってるだろ）と言えば東さん。東
さんだったらなにをやってもおかしくない。

例えば、未来から俺の夢の中に未来の俺の子供の意識を放り込むとかは朝飯前だろう。

………やばい。なにがやばいって、東さんだったら本当にあり得るからやばい。

そう考えた途端に眠くなった。そしてあっという間に意識が落ちる。まるで誰かが頭の中を弄ったみたいにな

起きると朝だった。夢のことは、あの子供が眠ったところを最後に途切れている。

前回は頭に耳が残っていたので手をやってみると、今回も頭に猫耳がついていた。多分鈴のところにもいつてるだろう。

そう思って枕元に目をやると………箒の時につけた尖った犬耳が置いてあった。

………まあ、東さんが関わってるんだったら何でもありだな。

想像以上、鈴vs俺

……ふぁ……ん。

……ん？ なんだ、まだ見終わってないのか。仕方無いな……もう一眠りするかね……。

……すか……。

side 織斑 一夏

アリーナの中央で武器をぶつけ合った俺と鈴は、その場ですぐさま次の攻撃に移った。鈴は片手で持った大刀を枯れ枝のように振り回し、俺は右手の名無しのブレードで正面から斬り返す。

「さっすが一夏！やるじゃない！」

「鈴こそ凄いな。まだなんか隠してるだろ」

「もちろん！今から出すから 食らいなさい！」

そうして鈴の肩部分のアーマーが開く。そこにあつた球体から、拳にある衝撃砲と同じ空間の歪みが現れる。

それに合わせてこちらも左の拳を鈴の肩に向けて衝撃砲を撃ち出す。

バギンツ！と空間が弾け、お互いに撃った衝撃砲がかき消える。

「まだまだいくわよ！」

「こつちもだよ！」

斬り合いながら拳を振るい、衝撃砲を撃ち合いながら武器をぶつけ合う。鈴の場合は勘で間合いや攻撃を読んでくるからやりづらいところがある。

こういった近距離ではフリッカーは使いづらいので、某一步を踏み出すボクシング漫画の尾張の竜のスクリューブローを真似る。これもまた連射が利いてその上貫通力があるので、衝撃砲同士をぶつけても多少の威力差なら引っくり返せる。

当然直接ぶつけても威力があり、拳自体も結構な威力を持っている。普通こんだけ反応速度と速さを持たせたら他のなにかが落ちる所なんだが……東姉さんマジで凄い。

ガギインツ！と音をたてて鈴の使う両刃の大刀が分かれ、それぞれが上下左右から襲いかかって来る。まあ、後ろからは来ないのが救いと言えば救いだな。

それでも俺は追い付いて切り払う。速度特化舐めんなってな。

「よく片手ずつで衝撃砲と剣撃を全部落とせるわね。いろんな意味で、一夏って人間？」

「多分」

「そこは断言してよ怖いじゃない。『初恋の相手が人外とか……』

…あれ？ 一夏だったら問題ないのかしら？」

初恋カミングアウト。びっくりした。ついでに途中からオープン・チャネルからプライベート・チャネルになってた。流石に聞かれたくはないよな。わかるわかる。

ピロリン

『メールだよ！らぶりい束姉さんからメールだよ！早く、あ・け・て』

.....。

「.....一夏？ どうしたの？」

「あーうん、ちょっと驚愕すべき厄介事。メール入ったからちょっと待っててくれ」

「.....ISってメール着信機能なんてあった？」

「普通は無いと思うよ。俺のが確実に普通じゃないだけで」

.....さてと。どんなメールかね？

開いてみると、いきなり目の前に束姉さん（ハ・ヘンゼル+グレーテル₂）が現れた。

『やつほー プリティーチャーミー束さんだよ、いつくんは元気してるかな？ してるよね？ してなかったら言ってねすぐ行くから（真剣）。まあいいや。これからそっちに練習台送るから活用してね！生きてるのが相手だと手加減しちゃうと思っただから無人ISだよ！安心した？ 安心したらやってくるそれを倒しちゃおう！それと、防御がすつごく固いから左手じゃあダメージほとんど無いよ。ブレードと右手で頑張ってるね！右手を使うとビームで相殺するようになってるけど』

そこまで読んだところでアリーナの遮断シールドがぶち抜かれて、何か 訂正、束姉さん作の無人ISが落ちてきた。

そちらに意識を向けながらも、メールの最後まで目を通す。

『相殺するようになってるけど、頑張つてね！ちなみにこのメールはいっくんが読み終わったら勝手に消えちゃいます。履歴とかも残らないから安心しちゃっていいよ？ じゃあまたね〜』

……そしてヘンゼルとグレーテルを足して2で割つたような格好をしている束姉さんが消え、メールが届いた痕跡が全部まとめて消え去った。

……だから、その科学力をもう少し別のところに使いなさいと。
……無駄だとは思うけど。

……さて、と。折角の束姉さんからの好意（多分それ以外もあるけど）だし、戦うとしようか。わりかし本気（ISのみだけ）で。

束姉さんに俺が頼んだ装備は三種。一つは既に使っている衝撃砲。これについてはよく知っているだろうが、普通は直線軌道のみのはずなんだが、出力調整で曲げ撃ちができる。

二つ目は空間固定兵器とその応用。俺の考えた使い方は、物理的なものに対する盾だったり空中に作る足場だったり、固定する空間を細い細い糸状にして相手が突っ込んできた時に首を飛ばすとかその程度だ。

三つ目は……秘密。どうせまだ使えないし。

そこに恐らくちー姉さんのリクエストの雪片式型（原作知識）と零落白夜が追加され、悪夢の兵器（高速で接近してきて一撃食らうと

死亡、その上動くとなぜか切られるため動くに動けず銃を撃つても防がれ、光学兵器はチャフで封殺）が完成する。マジ外道。

ちなみに空間固定兵器だが、ラ……ラ………銀髪眼帯黒兎の使うAICとは別物だ。

あつちは慣性を打ち消すが、こつちのは簡単に言えば『空間を動かない物質に変える』もの。だから相手が突撃してきた時に顔の前に出してやれば顔をぶつけるし、相手の出したエネルギーに応じて消費するエネルギーが変わるAICと違ってこちらは一定だ。

どちらが便利かははっきりとは言えないが、使い勝手だったらこつちが上だ。

……ただ、たまにAICもほしくなるけど。慣性を打ち消して良いときと悪いときがあるし。

「鈴。あれは俺のだ」

「……本気？ 相手はアリーナのシールドを軽くぶち抜くISよ？ 衝撃砲だつて効くかどうかわからないし、エネルギーも減ってるでしょ？」

……まあ、その通り。確かにエネルギーは三割ほど削られてるし、シールドバリアも満タンとはいえあれが相手じゃ心細い。

……それでも、やるけどな。

「………はあ………なに言っても無駄みたいね。この続きはまたいつかやるわよ」

そう言つて鈴は下がってくれた。ありがとう。

.....
やるか。

予想外、俺VS無人IS

名乗っても返事は帰ってこないだろうと思うので名乗らない。ただ剣を左に持ち替えて、構える。

すると目の前の無人ISがどこかで見たことのあるポーズを取って、機械音声で流暢に話し始めた。

「お控えなすつて。手前、生まれも育ちも月の南極。真空の中で生まれ、道具として生き、漸く死に場を見付けた老兵でございます」

よし待とうか束姉さん。なんで束姉さんがこれを知ってるんだよ。見てたの？

……まあ、いいや。とりあえず名乗りの間は攻撃しないのが決まり事だし、このくらいのことなら乗ってやろう。

「呼び名は色々ありますが、今の名前はゴーレム？と申すものでござんす……失礼ながら、お手前は？」

……仕方がないので俺も乗る。始めたのは俺だし、ここでやらなかったら空気の読めないやつだし。今更。

「俺は生まれは日本の本国、織斑家が末弟、睡眠時間の延長を夢見る男でございます。凜々しき姉に見守られ、この場所まで来ることになりやした……『人外筆頭』、織斑一夏と申す者でございます」

ちなみに一部プライベート・チャンネル。ちー姉さんや鈴に聞かれると割とマズイ。特にちー姉さんには本気で怒られる。

「……………それではすぐに参りましょう。この老兵の、屍を越えて先に行けい！」

「一応言っとくと……………歳は俺のが上だ若僧が！」

真面目にやるかね！

side 凰 鈴音

……………わーお。これは確かに色々無理ね。一夏とゴーレムと名乗ったISの戦闘を見てそう思う。

なんで無理だつて言い切れるかということ……………見えないんだもの。一夏が。

ゴーレムつて名乗ったISに切りつける瞬間に影だけ見えるような速度で移動して、あとは大概見えない。ただかなり直線的に移動をしているみたいで、アリーナの遮断シールドや床や壁には衝突した時の足跡が残っている（遮断シールドはそこに衝突したという名残がある）。

けれど移動の途中に軌道を曲げたり曲げなかったりして、相手になかなか捉えさせない。あの速度で曲がって無事でいられるって……………一夏の体の作りが本当に気になる。

……………まあ、一夏だししょうがないわね。きっとなんでもありなのよ。

そう思いながらハイパーセンサーを高速戦闘用の超高感度ハイパーセンサーに切り替える。すると今まで全く見えなかった一夏の軌道が残像だけ それでも残像だけ 見ることができるようになっ

た。

近接ブレードを振り、ゴーレムの体にしっかり当てながら削るようにブレードを滑らせる。明らかにシールドエネルギーを削ろうとしている動きだ。

その度にゴーレムは高速で回転しながらビームを撃つが、回転を始めた時には一夏は既に射程外にいる。

「……うん、ちょっとこれは手を出せないわね。失敗したら一夏に当たっちゃいそうだし。というか一夏本当にすごい手加減してくれてたのね。あたしと釣り合うくらいに。」

「……まだまだ一夏には遠いかあ……」

あーあ。結構頑張ったんだけどな……。

side 山田 真耶

「……あの、織斑先生。それは塩です」

「……なぜ塩があるんだ」

「いえそれは知りませんが……って織斑先生。それコーヒーじゃありません、醤油です」

「……なぜ醤油があるんだ」

「いえそれも知りませんが……ってだから織斑先生。それはコップじゃなくて砂糖壺で……ああ、お砂糖がみんなダメに……」

「……なぜ砂糖壺がこんなところにあるんだ」

「……あの……織斑先生、落ち着いてください、ってそれさっきの塩入り醤油ですから飲んじゃダメですって落ち着いてください」

「……なぜこれがこんなところに」

「織斑先生がさつき作ったからですよってだからコーヒー入り砂糖を飲もうとしないで下さい体に悪いですから！」

ああもう織斑先生も織斑くんが心配なのはわかりますけどもう少し落ち着いて

「だからコーヒーを醤油で作らないでください！塩分過多で死にますよ！？」

織斑くんっ！はやくなんとかしてええっ！

side 織斑 一夏

なんか真耶先生に助けを求められた気がした。ちー姉さんが何かしたのかな？ 具体的にはコーヒーと間違えてインクを飲もうとしたりとか。

そう思いながらもゴーレムを切りつける。めちゃくちゃ硬い堅い固い三つ揃った非常識な硬さだ。

ちなみに名前を呼べてる理由はハイパーセンサーに出てるから。

それでも少しずつ削り続けているんだが、だんだんゴーレムもこっちの機動を読み始めている。

まあ、読まれたらパターン変えるだけだから別にいいけど。

『やつほういつくんさつきぶり！』

『いきなりこられてビックリしました、後ででこびんです』

『いつくんのでこぴんは痛いんだよ？　頭が割れちゃいそうなくらい痛いんだよ？』

大丈夫。割れない割れない。

……多分、きつと、恐らく、パーハツプス。

『それで、いつくんが予想以上に強かったから東さんも参戦するよ！　ゴーレム操るから頑張ってね！』

その次の瞬間、ゴーレムは急激にその動きを変えた。

……マジで勘弁してくれや。

想定外、俺vs東姉さん

『いつくよおー！』

そう言つて東姉さんは、先程までは巨大な一発を撃つただけだった両腕の砲口からまるでショットガンかガトリングのように小さなエネルギー弾をばらまき始めた。

俺はブレードを右手に持ち替えて左の連射（貫通型）で応戦する。しかしそれでも落とせない弾はブレードで切り落とし、それでも駄目なら局所的な空間固定で凌ぐ。止める空間が小さければ小さいほど使うエネルギーは少なくて済む。

『まだまだーっ！どーんっ！』

そう言われて出てきたのはワイヤーブレードが十二本。エネルギーを纏つたままこっちに向かつてくる。こっちくんな。

それでも俺のやることは変わらず、ただその攻撃を避け、防ぎ、そしてできるなら一撃をぶちこむ。防御が硬すぎてたいしたダメージを与えられていないのが現状だが、なんとか削ることは出来ている。……まったく。厄介すぎるぞ。たまに被弾するようになってきたし。

お互いにシールドエネルギーを削り合う。東姉さんはほとんど無駄弾は撃たなかったし、撃つたエネルギー弾を空中で方向転換させると言つどこかの光学兵器の真似事とも言える荒業をやつて来もしたが、段々弾幕が薄くなつてきたのを見ると無尽蔵にエネルギーを持

っていると言っわけでは無さそうだ。

とは言え、こっちもこっちで割と限界が近い。シロに大した破損はないが、シールドエネルギーがそろそろ不味い。

これじゃあもし零落白夜が出たとしても、一発食らわせられるかどうか。

………なんか忘れてるような気が……あ。そうだそうだ、丁度相手は無人机だし、確かめてみようか。

斬魔剣・弐の太刀が、シールドバリアを無視することができるのか！

狙う場所はその厄介極まる腕。シールドバリアを抜いて攻撃できれば、使えなくなることを請け合いだ。

………確かラカンもこれをやるときはイメージトレーニングをしてたし、俺もそれに肖ろう。

………剣を振って、気を飛ばして、バリアをすり抜けてどーん。

………なんか失敗するイメージが浮かばないんだが、何でだろうな？まあ、成功するのは良いことだし、構わないけど。

「よいせつと」

名無しの近接ブレードを振ると、本当に何か出た。出てきた何かは東姉さんの操るゴーレムに当たり、その右腕を縦に切り裂いた。

……なあ、あれってもしかしてシールドバリアどころか絶対防御すら発動させずにダメージ与えてないか？

『わっ！？ いったん今のつてなに？ 確かに当たって斬られたのに、シールドエネルギーがまったく減ってないんだけど』

……人間相手じゃ使えないな。今度は絶対防御だけに当たるように調節してやってみるかね。

斬魔剣・弐の太刀、百花繚乱！

次からは避けられると思ったので、斬撃を薄くしてハイパーセンサー無しだと見えないようにしつつ全体攻撃。観客の皆さんには当たらないように考慮してアリーナの遮断シールドで消滅するように頑張った。

……失敗したらごめんね？

そこでようやくフィッティングが終わったようで、その事を伝えるメッセージと確認ボタンが現れた。

……まあ、これについては後で一人の時に押すでしょう。確かまた何かあったはずだし、その時に不意をつく的な意味でもその方がいいだろう。多分。

面制圧の斬撃が飛び、ゴーレムのシールドを抜いて腕とワイヤーを切り落とす。

……こんだけ撃ってるのに腕以外は擦らせるだけで済ましている束姉さんの操縦技術にちょっとキレそう。一体束姉さんはどこまで天

才で天災なんだろうか。

頭のなかで、束姉さんがにこにこ笑いながら言った。

「どこまでもだよ、いつくん！」

……………納得できるのがまた嫌だ。

……………まあ、一次移行もできるようになったことだし、さっさと終わらせようか。卑怯だけど。

空間固定で、ゴーレムのコアだけを固定する。高速機動中にそんなことをすれば、当然コアが機体からべぎりといやゝな音を立てて剥がれ落ちる。

「『ありがとね、束姉さん』」

「『いいいいいよ。かわいいいつくんのためだからね！今度また抱き締めに行くから覚悟しておいてね！』」

そう言つてゴーレムの機体は自爆した。最後の最後まで悪の科学者風だったな。

自爆は科学者のロマンだと聞いたけど、わざわざISでそれをやることはないと思うんだけど。

……………やっぱり、天才とかそういうのは置いておいても束姉さんの考えることはわかんないな。

……………あー、疲れた。眠いや。

「……………鈴」

「？ なに一夏。どうしたの？」

近付いてきた鈴に笑顔を向けて。

「……………あとよろしく」

シロを解除して落ちる。すぐに抱き止められたけど、しばらく起きないから。

悪いね、鈴。

いつも以上、保健室にて

……意識がゆらりと浮き上がる。特に体に悪いところはないが、どうやら随分と寝ていたらしい。腹が減った。

目を開けると、すぐ近くにちー姉さんの顔があった。どうもかなり心配そうだ。

「一夏。気が付いたか」

ちー姉さんが話しかけてくる。……くんくん……襟元から醤油の臭いがする。インクじゃなくなって醤油とコーヒーを間違えたのかな。……理由はわかるけど、ちー姉さんはやっぱり俺の事になると慌てやすいな。

「痛いところはないか？」

「……ん、大丈夫。ちよつと腹減ったけど……」

これから食べに行くから大丈夫、と言おうとしたのだが、いつの間にか現れた鈴がその手に丼を持っていた。中身はどうやら卵粥らしい。

「はい千冬さん。熱いので冷ましてから食べさせてあげてください」

「ああ、わかっている。……すまないな、凰」

「いえ。一夏の事が好きですし、一夏のためだと思えば何でもないです」

鈴はそう言うってから俺に視線を向けて、にっこりと笑ってから保健

室を出ていった。

……そう言えば、初恋カミングアウトされたんだっけね。いつも普通に好きだなんだと言ってたから忘れてたけど。

「……ふう……ほら一夏、口を開ける」

「ん……あー……はむ」

……ん、美味しい。

ちよつどよく冷まされた卵粥が喉を通り、じんわりと胃に広がっていく。

「っ……、一夏」

「ん……あー……あむ」

また次の一口。そしてまた一口。うん、美味しい。

……まだまだって言ってたけど、腕を上げたな、鈴。

……ちー姉さんももう少し料理ができるようにならないと、お嫁の貰い手が居なくなるよ？ せめて食べても害の無いものを作るようになるうよ。もう遅いかもしれないけど。

食べ終わって一息つくと、なんだかまた眠たくなってきた。さつきまで寝てたのに。

……まあ、いつもの事だ。普通普通。

「……それじゃちー姉さん。お休み……」

「ああ。お休み、一夏」

眠りに落ちる寸前、何かに頭を撫でられたような気がした。

……この不器用な撫で方は、きつとちー姉さんだろうな。

side 織斑 千冬

すやすやと眠っている一夏の頭を撫でる。

顔を撫でれば頬を緩め、頬を撫でれば撫でた手に頬を擦り付け、顎先を撫でれば甘く鳴き、唇を撫でると熱い舌が私の指をざらりと舐める。

………っ！危ないところだった。一夏を血で汚すわけにはいかな
いからな。

……さて、お持ち帰りするか。

一夏を横抱きにして保健室を出る。やはりと言うかなんと言うか、
一夏はかなり軽い。五十キロどころか四十キロあるかどうかといっ
たところか。

珍しく途中で誰かと出会うことなく寮長室に到着する。騒がれて一
夏が起きるといふことにならないので別に問題はないが、少し奇妙
に感じた。

扉を開け、一夏をベッドに寝かせる。すやすやと眠っている一夏に
背を向けて、私はスーツが皺にならないようにたたんでからジャ―
ジに着替える。

それを終えて、私は一夏の眠っているベッドによこになる。すると
一夏が私の腕を控えめに抱き締めて 花が開いたような笑顔を
見せた。

……落ち着け織斑千冬。深呼吸だ。前に五反田が言っていただろつ、落ち着かなければならないときには深呼吸をしると。深く息を吸って、それから長く吐く。もう一度吸って……一夏の匂いが脳髓を直撃する。

くっ……五反田め。使えないではないか！今度あった時は覚えて

「……くっ」

一夏が私の腕にすりすり頬を擦り付ける。一夏はそんなに襲われたいのか？

そう考えていると、ぼんやりとまではいかないが懐中電灯を遠くから見たような光が一夏の頭に集まり、昔に見た垂れた犬耳とぶちかが現れた。

「……わう」

ぶちかは小さく鳴くと、もぞもぞと一夏とは反対側の私の腕にしがみついて目を閉じた。

すぐに聞こえ始める柔らかな寝息。両側を一夏とぶちかに挟まれ、私はそこで頭が沸騰してしまつたらしく、なにも思い出せない。ただ、久し振りに朝の一夏成分補給が普段の十分の一の時間で済んだことは確かだ。

外伝、予知夢？ 千冬編

東姉さんの操るISを相手にした日の夜。俺はまたもや薄ぼんやりとした夢を見た。

怪我をしているらしい原作一夏と、枕元で周りから見ても明らかにわかるほど心配そうにしているちー姉さんがいる。

……多分、原作で無人ISを一夏が墜として、一夏がボロボロになった時かな。この夢は。

それにしても、原作だとここまで心配そうにしてるのは珍しいよな、と思いつつ俺はちー姉さん達と俺を分けているぼんやりとした霧を抜けた。

するとちー姉さんは俺に気付いたらしく、俺の方に振り向いて……固まった。

それから一夏を見て、また俺を見て、鋭く睨み付けてきた。

……怖いなあ。ちー姉さんのこんな顔はあんまり見ないから……。

ちよつとそこで一夏が目を覚まし、ゆっくりと体を起こした。

そして俺のことを確認すると、また夢だと理解したらしく俺を手招きして呼び寄せた。

「……一夏？」

「大丈夫だよ千冬姉。この子は……東さんが未来から送ってきた俺の子供らしいから」

「……あの……馬鹿者が……」

俺が一夏とお揃いのどこかメカニカルな気配のする狼耳を持ったまま唸っていると、何をしたいのかわかったのか、話を進めてくれた。ちー姉さんはなんの話をしているのかわからなかったよ。できよとんとしているが、俺と一夏の頭についた狼耳と俺が手に持っている狼耳を見比べて……苦笑してそれを自分の頭につけた。

「……………どうだ。似合うか？」

ちー姉さんは冗談めかして言っているが、すっごい似合ってる。束姉さんがこの姿を見たら、それこそ鼻血を噴き出しながら恍惚とした顔で七転八倒してしまっただろうと簡単に予想がつくくらいだ。

……………さてと。一夏達に狼耳も装着したし……………寝るか。

一夏寝ていたベッドに潜り込む。少し狭かったので千の顔を持つ英雄で新しくベッドを隣に出して並べた。意外に使えて驚きだ。今さらだけ。

一夏にくつつきながらちー姉さんの事を上目遣いでじーっと見つめていたら、仕方なさそうに添い寝をしてくれた。

一夏隣と一緒に寝れるせいか尻尾が激しく振られてて隠せてなかったけど。丸分かりだったけど。

……………やっぱり原作でもちー姉さんはブラコンだった。証明終わり。

……………すか……………。

すか、と眠る俺そっくりの小さな子供。最近よく夢の中に出てきては、こうしてのんびりと誰かと眠ることになる。

……そう言えば、千冬姉と一緒に布団で寝るなんて、何年ぶりだろうか。昔は結構な頻度で一緒に寝たと思うが、今じゃあそんなことはまずないからな。

「……一夏」

「……なに、千冬姉」

急に話しかけられて驚いたが、なんとか平静を装って返事をする。

「好きな女はできたか？」

「ぶほっ!?!」

しかしその平静は、千冬姉のお陰であつという間に壊された。

「な……な、なんの話をしてるんだよ千冬姉!」

「なに、と言われてもな? 姉としてお前の結婚相手には興味がある」

丁度ここにこいつがいるわけだしな、と千冬姉は言う。

……確かに俺も誰と結婚してるかは少し気になるけど、だからって今気になってる相手は

尖った犬耳をつけて、恥ずかしそうにしながらも俺の手を握ったまま寝ようとしている筈の顔が浮かぶ

灰色の猫耳をつけながら、小さな俺似の子供を撫でている鈴の顔が思い浮かぶ

垂れた犬耳をピコピコと動かしながら、拗ねたような顔をしているセシリアの姿が思い浮かぶ

……あー、なんとなく決まってるような気がするのは何でだ？

そう考えていると、千冬姉から笑みの気配が強まった。……バレたか？

「バレバレだ。少しは隠す努力をしたらどうだ？」

まず読まないでくれよ、という俺の心の突っ込みは完全にスルーし
たらしく、千冬姉はにやにやとした笑いを返してくる。

「……それで、どうなんだ？」

千冬姉の問いから逃げるように、俺は小さい俺似の子供を撫でながら目を閉じた。

朝起きて、まずは頭に手をやる。すると予想通り俺の頭の上には狼耳がついていて、なかなか恥ずかしい格好になっている。

……多分千冬姉もこうなってるはずだし、俺は気付かなかつた
という事にして千冬姉の狼耳を見てにやにやしよう。周りから意
外とお茶目な先生だったと認識されてしまっ方がいいわ！

……まあ、あれでもかっこいいと言っつのが千冬姉のすごいところ
なんだが。普通はかっこ悪くなるか可愛らしくなるよな？

にやにやはしたけど途中で気付かれてフルボッコにされた。
出席簿の五十連撃は痛すぎる……っ！

お引越しです、ののちゃんが

朝。目が覚めるとそこにはちー姉さん。少し驚きつつ抱き締め直して二度寝を敢行する。今日は休日だし、平気だろう。多分。なんでちー姉さんと一緒に寝てるのか疑問ではあるけども……たまたまにあることだし、別にいいか。

もう一度目が覚めると、既に太陽は空高く昇っていた。昨日寝たのが六時頃で、今は確実に十時は過ぎている。

「……寝過ぎした……ふぁ……」

……ああ、そうだ。シロの一次移行が確認ボタン押してないだけでできてるんだった。さっさと移行させてスペックの確認とか出力調整とかしないと……。

原作だとこのあと更にも厄介なことに巻き込まれてた筈だし、一日十五時間睡眠を破らない程度にできることはやっとなかないと。

……それにしても腹減ったな。十八時間近く飯食ってないんだから当たり前だけど。

くうくうと騒ぐ腹を宥めながら食事に行く。頭には四号の犬耳が付きっぱなしで、後ろにぶちか四号がついてきてるけどその辺りはスルー。

「あ、一夏じゃない。体はもう平気なの？」

「平気と言つかあの程度で壊れるようなヤワな体してない」

文字通り反則な体チートをしてるんでね。その体を持ってても寝るんだけど。

「そう。まあ、元気ならいいわ。……一緒にご飯食べない？ 箒もいるけど」

「それじゃあ御一緒しようかな」

鈴に手を引かれて食堂に行く。ここを使うのも久し振りかもしれない。なんでかそんな気はあまりしないんだけど。どうしてかね？

……まあ、いいや。よくあることだよくあること。束姉さんが騒ぎを起こすのと同じくらいよくある。

「箒、一夏連れてきたわよー」

「む、そうか。まあ、座れ。頼まれたものはもう来ているぞ」

そう言われて机の上を見てみると、なぜか俺の分まであった。こうなることを予想していたのか？

「そうよ。いいから座りなさい、また私達が食べさせてあげるから」

「え、起きたばかりだし自分で食べられるけど？」

「食べさせてあげるから」

「食べさせてやるから」

……ああ、そう言えば告白されたんだっけ。いつも普通に好きだと言いつつ合ってたからまた忘れてた。

俺はよく理解できないんだが、好きな相手に手ずから食べさせてあげるの、また食べさせてもらうのは嬉しいことなんだとか。

……俺は寝てる方が良くいけどねえ。

「いただきます」

「いただきます」

「ところで、さっきからずっとドアの影から一夏を見てる金髪はなに？」

「……………ああ、セリエスか。」

「あの金髪はセメント・オムニバス。喧嘩を売ってきたから買ってポコしたらそのせいで新しい世界の扉を開けた変態だ」

「箒、名前だけ教えて」

「セシリア・オルコット。あとは一夏が言った通りだ。戦闘のデータは見ただろう？」

「……………ああ、あの可哀想なのね。……………度々悪いんだけど、なんであれば頬を染めてゾクゾク体を震わせてるの？」

「変態だから」

「……………ああ、また目覚めさせたのね」

「待ってくれ。『また』？」

おっとののちゃん、そこは気にしちゃいけない所だよ。

いいじゃないか、中学時代に弾の事を馬鹿にした奴（他の学校の奴だった）の精神の支柱を根こそぎ全部へし折ってやったら被虐趣味に目覚めた事とか、小学校の時にちー姉さんの悪口を言った男性教師を縛り上げて目隠しをして知り合いの漢女に引き渡して次見たときには薄く化粧をするようになってた事とか、どうでもいいじゃないか。

「他にもあるけど、聞く？」

「……………いや、辞めておこう」

「あたしもそれがいいと思うわ……………はい、あーん」

「……………あむ」

……ん、うまい。

「……あれ？　ぶちかも欲しいの？　しょうがないわねえ……はい、あーん」

「わう……はうむ……」

膝の上に乗っている犬ぶちか（ダックスフンド）が鈴におねだりしたらしく、鈴は手のかかる幼子を見る母親のような目で見ながらぶちかに合わせた大きさの肉をあげていた。

周りは微笑ましげな目をしたお姉様方と、嫉妬のあまり呪詛を吐きながら壁に頭を叩きつけていたり、恍惚とした表情のままだくだくと血を流し続ける少女たちで溢れている。掃除が大変そうだ。

……まあ、いいか。今は。

「……………（ギリリッ！）」

だからちー姉さん。そんなにするくらいだったらこっちおいでって。……来ないなら来ないでいいけどね。

食事も終わって部屋に戻る。すると、部屋からののちゃんの荷物がきれいさっぱり無くなっていた。

………そう言えば、この時期だったな。のちゃんの引っ越し。忘れてたよ。

………今日から一人寝か。ぶちかがいなかったら毎晩枕を抱いて

たかちー姉さんの部屋に突撃かけてたかもね。

一人になったから常にここにチャフを撒いところ。またいくつか盗聴機やカメラが増えてるからね。

一次移行、協力感謝

武骨な手甲だったシロは、一次移行を終わらせると白い腕輪に変化した。前のとずいぶん違って見えるが実のところ大して違いはないらしく、妙にと言うか奇妙にと言うか………非常に硬い。九ミリ拳銃弾くらいならゼロ距離で受けても全く問題無さそうだ。

もちろん変わったのは外見だけじゃなく、その性能も変わっている。元々の性能もあるだろうが、意思疎通がさらに高速円滑に行われるようになったような感じだ。

加速も減速も今まで以上にうまく行うことができ、衝撃砲も空間固定もさらに安定して応用することができるようになった。例えば衝撃砲の曲げ撃ちで曲げることができる角度が大幅にきつくなったり、空間固定を視界外でも座標に合わせて確実に出すことができるようになった。

………まったく。恐ろしい性能だなシロは。

そして原作通り、ワンオフ・アビリティーとして零落白夜が使用可能に。使ったことはないが、原作を読んでいる限り、接近戦の切り札的存在になるだろうことが予想される。

………三つ目の追加武装はまだ秘密。武装と言うか、正確には能力のようなもののだが………まあ、できることならあまり使いたくはない。確実にちー姉さんに怒られるから。

「………それにしても、シロは凄い」

「あ、やっぱりかんちゃんもそう思う？」
「……………」

俺が聞くとかんちゃんは普段通りの顔で頷いた。

確かにシロは凄い。衝撃砲の即時切り替えは、ある意味では第四世代の先駆けと言っても良いし、零落白夜の展開装甲は束姉さん式の第四世代の解答とも言える技術だと言うことは明白だ。

欠点らしい欠点と言えばエネルギーの消費がかなり早く、動けば動くだけガリガリ削られると言うことと、武装が少ないと言うこと。

二十ものコアを組み合わせて作っているためか空き容量はそれなりどころではなくあるのだが、シロはその空き容量の中に中々物を入れようとはしない。使っただけなら問題ないから別にいいんだけどね……………頑固なのかどうなのかは知らないけど、ちょっとちー姉さんに似てる気がするんだよな。シロ。

確かちー姉さんの使っていたISの……………‘くー’は、完全にブレードオンリー機体であり、異常とも言える機動力と本人の類い希なる反射神経によって、かつて世界一の座に輝いていた。

そのちー姉さんと同じように、シロもなんとなく一つの事を極めるべく他のものを受け付けていないような気がする。

……………なんでそんな気がするのかは、知ったことじゃない。なんとなくだ。

……………とにかく、その欠点を埋めるべく俺はかんちゃんと一緒にシロの出力調整をしていた。

かんちゃんの専用機の……………なんだっけ？ 撃鉄式式？

「……………打鉄式式」

そうそう、それ。そのスラスターの方に、シロほどじゃないにしろ速度が欲しいらしくて、手伝ってもらおう代わりにデータの一部を参考として見ていっている訳だ。

……ただ、かんちゃんはその事を凡人だのなんだのと言っているんだが、信用できない。

……とりあえず言わせてもらおうと……凡人は、両手両足で、八つの、キーボードを、同時に、かつ、完璧に、操作することは、できない。……それもかなりの早さでな。常人には無理だって。

その事を理解していないかんちゃんは、自分を凡人だと思い込むことで努力の源としてきたのかもしれないが、まずはIS学園に入れたと言っただけでも相当優秀だと気付いて欲しい。

……頭の方は凡人な俺が落ち込む前に、是非とも。

……まあ、そう思ってもなにも言わないのが俺なだけだ。

他人の事に口出しはしない。それは面倒だからと言うこともあるけど、前世からの俺の処世術でもある。

俺自身、そういう自分の欠点に口出しされるのは嬉しくない。それがたとえ自分一人の思い込みでも、そう言うもんだ。

自分の信じていたことを、正面から間違っていると言われて腹の立たない奴はそうそういないだろう。

特に、コンプレックスが酷い奴には。

「……さてと。今回はこれで終わりにするか。もうすぐ晩飯だし」

「……わかった。それじゃ」

かんちゃんはそう言うと、自分のISに向き直ってなにやら弄り始めた。どうやらまたインスピレーションが湧いてきたらしい。

「……出来たら教えてね。かんちゃん」

俺の言葉に対してかんちゃんから言葉は帰ってこなかったが、僅かに頷いてくれたのがわかった。

頑張れ、とは言わない。頑張っているかんちゃんに、それは酷な言葉だから。

信じてる、とも言わない。原作では確か、先輩達の助けがあったにしろ完成させていたから。

だから、俺は何も言わない。手伝いはするし、溜まっていた不満や愚痴を聞いてあげたりはするけれど、向こうからなにかを言って来なければなにもしない。

きっかけはある。一步を踏み出せるかどうかは、かんちゃん次第。

頑張れ、とは言わない。信じてる、とも言わない。

でも、楽しみにはしてるよ？

俺はくすりと笑って、かんちゃんがいる整備室から姿を消した。

久し振り、遊びに来たよ

久し振りに弾の家に遊びに行く。電話で確認とつたから大丈夫。ちなみにIS学園を出る時に使ったものはディープダイバーとモーターギアのマリンダイバーモード。特に意味は無いけれどバレないように外出してみた。こっちも許可はとつてあるから大丈夫。

ある程度IS学園から離れたら人目の無いところで地上に上がり、ライアーズマスクで変装しながら弾の家を目指して歩く。有名人（かなり本気で）なので、色々と面倒くさ

「ちよつとそこの。コンビニで水買ってきて」

……。アリス・イン・ワンダーランド、収束。
洗脳してやるから、黙って壁に頭をぶつけてろ。

……面倒臭いな。やれやれ。

弾の家の前でライアーズマスクを解除。いつも通りの顔で弾と対面。

「お、来たか。久し振りだな一夏。ちゃんと飯食ってるか？」

「鈴とののちゃんに言われて食べてる。大丈夫」

「そうか。……つと、立ち話もアレだな。入れ入れ」

「お邪魔します」

言ってみただけ。こつ言うときには大切らしい。

弾の部屋に入って落ち着くと、弾の方から話しかけてきた。例えば、ちゃんと寝てるか、とか、なんか新しい曲でも作ったか、とか、そう言った最近のことだ。

……まるで父親だな。

ちなみに新曲（とは名ばかりのボカロのパクリ）をいくつか楽譜にして渡しておく。それなりに長い間楽器に触れてきた弾は、楽譜を見ればどんな曲かがすぐに理解できるようになっている。

「……おゝ、すげえなこれ。どうしてこうぼんぼんと曲が出てくるんだ？」

「絶対に世に出ない既存の曲をパクっただけ」

絶対と言う理由は、この世界にボカロは無くても、そして俺も作る気がないから。

……さてと。久々の弾の家だし………寝るか。

「おーい一夏。人ん家来ていきなり寝るってのはどう言うことだよ」

「……俺だから仕方ないことじゃね………?」

「………一瞬無条件で納得しかけたぞおい」

そのまま納得しとけて。その方が楽だぞ？

……すか………。

久し振りに一夏と会ったんだが、やっぱ一夏は全然変わってねえ。
……いやまあ確かにそんな簡単に一夏が変わったらビビるが。

一夏はいつも通り勝手に俺のベッドに入る。そんな無防備晒して、襲われても知らねえぞ？ 俺は襲わねえけどその分愛でる。

ベッドにもぐり込んだ一夏の頬をつつく。相変わらず指先に吸い付いてくるような肌をしているなこいつ。ほんとに男か？

そう思いながら頭を撫でて、額を撫でて……あつれ、なんか一夏の額が妙に眩しく見えるんだが……俺、また目覚めたか？

今までに目覚めたのは……髪、うなじ、耳、二の腕、唇、ほっぺた（これが一番正しい言い方だと思ってる）、睫毛、指、太股、ふくらはぎ、脇、腹、背中、臍……その他。

……俺も随分変態臭くなつたもんだ。

でも、仕方ないだろ？ 撫でるとさらさらと指を通す癖のつかない髪とか、切るのが面倒だからと言って少し長めの髪から覗く真っ白なうなじと髪のコントラストとか、桜色で柔らかな唇とか、寝ているときにぴったりと体に引き付けられた二の腕とか、優しく摘んだり撫でたりするといい感触を返してくる耳とか、指でつつくと吸い付くような感触のほっぺたとか、なにかをやる度にピクリと動く睫毛とか、抱きしめられている腕から出ようとすると控えめに服の端を摘まんでくる指とか、丸くなって眠っているときの太股とふくらはぎとか、起きて伸びをしたときにちらりと服の下から覗く腹とか脇とか、つうつと指先で下から上に擦るとぞくぞくうつと体を震わせてからちよつと睨み付けてくる背中とか（それでも視線で抗議するだけで逃げない）、寝返りを打つと時々服が捲れて見える臍と

か……………。

これはもうしょうがないだろ？

……さてと。愛でるか。呼ばないと後々怖いし、蘭も呼んでおこう。一夏を愛でることに關しては俺の方がずっと上手いし慣れてるから、教えてやることもできる。

……とりあえず寝てる一夏を着崩して、喉元を開けて服の裾を出して腹チラさせて、腕はこうで……よし、パシヤリと。後は蘭にメールを打って、今撮った写真を添付して送る。これでよし。

ちなみにメールの内容は、一夏が俺の部屋に来てる。愛でたければ静かに俺の部屋に來い。多分來るだろ。多分。

案の定來た。珍しくかなり気合いをいれたお洒落をして、顔を真っ赤にしながら。どうやら蘭にはあの一夏はレベルが高すぎたらしい。

「わ、わわ……………わぁ……………」

顔を真っ赤にしながらも、蘭は一夏を恐る恐ると撫でている。あんまりそうしていると一夏に腕を掴まれ引き寄せられて抱き締められるぞ。言わねえけど。

……あ、やられたな。

「あつあつあつ……………」

「……………まあ、役得だな。俺は店の方に行ってる。昼飯できたら呼ん

でやるから……健全な付き合いの範囲内で、ごゆっくり」

それだけ言い残して俺は部屋を出る。あの慌てようだと聞こえてたかどうかはわからないが、まあ、良いだろ。

蘭はあれでへタレだから、一夏に手を出そうとしても出せないだろ
うし。

……一夏が弟か。まあ、悪かないな。

久し振り、遊びに来たよ（後書き）

寝て起きたら外伝の弾編と蘭編を投稿します。

外伝、予知夢？ 弾編

IS学園に入ってから、久しぶりに弾と遊んだ日に、薄ぼんやりとした夢を見た。どうやらこのぼんやりとした夢は異世界（原作）との会合地点らしい。毎回毎回原作の誰かが出てくればいい加減わかる。

……まあ、面白いし害はないし睡眠時間も減らないし、悪いことではないから良いんだが。

今回は原作一夏が弾の部屋でゲームをして遊んでいる。俺の場合ゲームではなく昼寝になるから、こうしたゲームってのはあんまり経験がないんだよな。

そう思いながら近付くと、勝負の決着がついて一旦暗くなったテレビ画面に俺の姿が映り、そのお陰で俺に気付いた一夏がくるりと振り向いた。

「……あー、またか。おいで」

「ん？ って一夏あ！？ でも小さい！？」

「うるせえ奴だな。ちよつと知り合いの大天才の手で未来からやって来たらしい俺の子供だとさ」

「なにいいいっ！？ ってかなんでお前はそんなおちついてんだよ！？ もつと驚けよ！？」

「驚いたぞ？ 最初は。でも慣れてきてなあ……………俺の子かわいくね？」

「ダメだこいつ、早くなんとかしねえと……………」

弾はぶつぶつと呟いていたが、ふとあることに気付いて顔を上げた。

「……この子の母親って……誰だ？」

「さあ？ 聞いても教えてくれないから知らない」

一夏は俺を抱えて頭を撫でながらそんなことを言う。弾は爆発しそ
うだったが、なんとか押さえ込んでいるようだ。

「……てめえ蘭に手を出したらぶっ殺すぞ……？」

「なんでそんな話になるんだよ？ 俺が好かれてもない相手に無
理矢理迫るような奴に見えるのか？」

出さないだろうな。むしろ焦れた相手の方から襲われそうだ。原作
の鈴とかだつたら襲つてもおかしくないだろうし。

……まあ、原作一夏が誰と付き合つて誰と結婚して誰と子供作つて
も別にいいけど。

「おかーさんは、『パパはヘタレで中々手を出してくれなかったか
らこつちから襲つた』って言つてたよ？」

「俺襲われんの！？ 誰に！？」

「おかーさんとママ達」

「てめえ一夏重婚とはいいい度胸じゃねえか死ねええ！」

にっこり笑つて言つてみたら、弾が一夏にマジギレして襲いかかっ
ていった。

「……つて言つて面白いから言えつて大天災さんが言つてた」

「東さんはなに考えてんだよ！？」

「おかーさんは、あれが考えていることがわかるようになったら人
間おしまいだつて」

……俺中々酷いこと言ってるな。間違いだとは思わないけど。

とりあえず騒ぎ疲れたらしい二人に獣耳を装着。草食な気がしたので羊耳をつけてみることに。驚いたことに意外と似合う。

……さてと。そろそろ寝ようかね。

side 一夏Another

「……なあ一夏」

「？ なんだよ」

弾がやや疲れたような顔で話しかけてきた。一体なんだろうな？

「……なんで俺達是一緒の布団で寝てんだ？」

「この子に連れ込まれたからだろ。涙目上目使いは反則だよな」

「……………そうだな」

弾はそう呟くと、ふかーく溜め息をついた。

「……嫌じゃねえの？ 男と同じ布団って」

「別に？ 貞操狙ってくるんだったら今からでも蹴り落とすけど？」

「狙わねえよ……一夏は俺をなんだと思ってんだよ……………」

「親友だと思ってるぞ」

「……………ありがとよ」

……弾はなぜか疲れたように俺に礼を言ってきた。俺と弾が親友だつてのは、少なくとも俺には当然の事なんだが。

「……とりあえず、撫でてみな。落ち着くから」

そう言っただけは、俺にくっついて眠っていた俺似の子供を弾に抱かせた。

弾は疲れたような表情を変えることはなかったが、とりあえず腕は俺似の子供を離さないとばかりに抱き締めながら撫でていた。

「……ああ、確かにこいつは落ち着くわ」
「だろ？」

弾が子供を撫でているのを見てから目を閉じると、急速に眠気が襲ってきた。

……あー、眠い……。

目が覚めると、IS学園の寮の部屋だった。どうやらぐっすり睡眠していたらしく、いつ布団に入ったかも覚えていない。ただ、いつもの通りその夢の事はしっかりと覚えているし、頭には弾の頭にもくっついていた羊耳が。

……多分弾にもくっついてんだろつな。電話しといてやるか。蘭にバレたら可哀想だし。

外伝、予知夢？ 蘭編

原作弾と原作一夏と一緒に寝た次の日。まさかの連続での薄ぼんやりとした夢に少し驚いた。今回は誰だ？

周りを見渡してみると、そこは誰もいない五反田食堂だった。

そこに一夏が入ってくると、どこからか蘭ちゃんが現れて一夏にスマイルを向ける。

「いらつしゃい、一夏さん」

「おう、久し振り」

笑顔を向けられた一夏は、俺もよく見た優しい笑顔浮かべる。俺がこういう笑顔浮かべようとすると、優しい笑顔ではなくヤサシイエガオ（別名・怒れるちー姉さん笑い）になってしまうから注意が必要なんだが……。良いよなあ……。ああいうきれいな笑顔浮かべられるってさ……。

……。まあ、鈴や弾にはいつもの俺のままが良いって言われてるから気にはしてないけど。

一夏と蘭ちゃん以外は誰もいない五反田食堂のカウンター席に座って一夏と蘭ちゃんを見ながら足をぶらぶらとさせていると、少しずつ霧が晴れていくように薄ぼんやりとしていた二人がすっかりと見えるようになっていった。

そこで一夏は俺に気付き、ここが夢の中だと理解したらしい。

「またか。二日連続は初めてじゃないか？」

「こっちもちよっと驚いてるよ、パパ」

「ぱ、ぱ……パパあ!？」

俺がそう呼ぶと、蘭ちゃんは凄く驚いたらしく大声で叫んだ。結構ビックリ。

「い……一夏さん……? この子って……」

「俺の未来の子供だってさ。誰との子供かは教えてくれないけど」

「言ったらもしかしたら俺が消えちゃうかもしれないからって大天災さんは言ってたけど、言っても平気なようにしてみせるって張り切ってたよ?」

「……なんか嫌な予感がするなあ……」

ああ、多分正解。こう言うことには勘がいいのに、どうして女心やら好意やらにはここまで鈍いかな。そんなんだから襲われるって言われた時に親友に納得されるんだよ。

まあ、一夏だし仕方無いか。

「もしかしたら、次は意外な人の夢に出てくるかもしれないよ? 確実じゃないけど」

次は原作的に考えて……シ……シャ……シヤンタクだっけ?

……いや、それは確かどつかの神話のかなり高位の邪神の眷属の名前だったような気がするな。ねるねるねるねだっただかねるとんパーティだったかナイアなんとかだったか……最後が一番近い気がするな。とにかくそいつの。

まあ、何でもいいか。確か愛称はシャルだったはず。だから勝手にシャルと呼ぼう。

シャルが相手のはずだ。確か。

まあ、何でもいいけど。

ちなみにこの夢は狙って見ているわけではないので、相手も時間も場所もわからない。だが、もしかしたら一夏のISであるびゃっくん（これでいいよな。わかるし）の中の騎士っぽい女の人が出てくる可能性も無きにもあらず。ないと思うけど。

……あー、ここで蘭ちゃんをママ呼びしたらすっごい面白いことになるんだろうなあ……ちー姉さんとどっちの方がカオスになるかね？

……流石に悪趣味すぎるか。自重しよう。でもこれだけは自重する気は全く無い。

そう思いながら一夏の膝の上に乗って背中を預ける。俺の頭を撫でる手が気持ちいい。蘭ちゃんが羨ましそうな目をしているが、今は無視しよう。

「撫でられるの好きだよなあ」

「……………」

気持ちがいいからね。気持ちいいことは好きだよ？ 寝ること含めて。

上を向くと、俺を見下ろしている一夏と目が合う。その優しい瞳で、いったい何人の女を墜としてきたのやら。

そう思いつつも何も言わずに、俺は一夏に獣耳をつける。今回は蘭ちゃんに合わせて尖った銀色犬耳（子犬）だ。好きな相手には子犬のように甘える的な意味で。

勿論俺もつける。尻尾つき。耳をつけると勝手に尻尾も装着されるため、便利だ。

「……………」

もう一つ同じどこかメカニカルな気配のする銀色の犬耳を持って、蘭ちゃんをじーっと見つめてみる。今なら蘭ちゃんの大好き（原作ではそうだったはず）一夏とお揃いだよーとアイコンタクトを試してみる。通じるかな？

そう思っていたら蘭ちゃんの顔が赤くなったので、多分通じた。一夏と蘭ちゃん自身がお揃いの耳をつけて子供（俺だな）と一緒にいるところでも想像したんだろう。真っ赤になっている。

「ほら、蘭も来いよ。どうせ夢なんだし、寝ないと出れないみたいだしさ」

一夏が言つと、周囲の風景が五反田食堂から織斑家の一夏の部屋に変わる。そこには当然ベッドがあり、俺はすでに潜り込んでいる。

「はいこれお土産。大事にするといいことあるかもよ？」

そう言つて蘭ちゃんに犬耳をくつつける。似合ってる似合ってる。

……………さてと。寝ようか。

一夏と蘭ちゃんに挟まれて眠りにつく。いい夢が見れそうだ。

……………おっと、ここも夢だったわ。

夢だと言われて一夏さんと一緒に布団で寝て、しかもそれは一夏さんの未来の子供とも一緒に、こうしているとまるで結婚してしばらくしてもまだ仲良しな夫婦みたいな気分になって、頭がくらくらするほど一夏さんの匂いに包まれて、そこで私の意識はぷつぷりと切れた。

そして気が付くと、私はいつもの自分の部屋で寝ていた。

……なんだ、やっぱりただの夢かあ……………。

ちよつとがっくり来たけれど、夢なら夢でしかたない。いつかこの夢とおなじように一夏さんと同じ布団で寝れるようにしたい。
ファイト、私っ！

ぐっと力をいれたところで、何となくいつもと違うような気がして頭に手を当てると、そこには夢の中であの子につけてもらった銀色の犬耳が。

…………… 何でここにこれが？ あれは夢じゃなかったの？

寝る前に聞いたあの子の言葉を思い出す。

『お土産』。そして、『大切にするといいことあるかも』

…… あれは、もしかして本当のことだったのかな？

…………… つてことは…………… 私は一夏さんと同じ布団で一緒に寝ちゃったって事で…………… ツ！

顔が熱い。きつと真っ赤になっているだろう。

私は、あの子にもらった一夏さんとお揃いの犬耳を大切に抱え込んだ。

「……………一夏さん……………」

「おい蘭ー！飯できてるぞー！」

……………お兄の……………馬鹿……………っ！！

ちょっとした噂、ほんとかな？

弾の家からIS学園に戻ると六時ごろだった。明日の快適な朝のために寝ようとしたところで、鈴がドアを開けて入ってきた。着替え中だったらどうするんだ。

「謝ってから出直すわね」

そうかい。

「それでねー夏。どうせあんたは夜食べないで寝ようとしてるだろうと思っただから誘いに来たのよ。一緒においで」

「『食べよう』とかそういうのじゃない辺りに鈴の性格が出るよな」

「いいから来なさい」

そう言われて俺は鈴に手をとられて食堂に向かうことになった。あーれー。

いつもの通り、妙に多い食事を平らげてから、わざわざシルバーカーテンでステルスをかけながら女子の一団に近付いていく。鈴からは趣味が悪いと言われたが、俺の将来が勝手に決められそうになってるんだから首も手も突っ込んで当然だと思っ。

きゃーきゃーと騒ぎ続けている一団の、一番俺の近くにいる生徒に声をかける。あえて話したことの無い相手に話しかけるのがポイント。

「ずいぶん騒いでるけど、なんの話？」

小さいときの俺の声はぶつちやけ女子でも通用する程度に高い。だからあえてそのまま話しかけてみたんだが、見事に引っ掛かってくれた。

「それが、今度の学年別トーナメントで優勝すると、なんと織斑君と交際できるのよ！」

……そう言えば、原作でそういう話があったな……。俺の方を見もせずに言った誰かさん。情報提供感謝するよ。

「そうなの？」

「そうなのよ！」

「……情報源はどこ？」

「それが」

「ちょ、待ちなさいバカ！」

「え？ なん……織斑君!？」

ようやく俺に気付いたらしく、その一団の全員が噂の相手である俺の登場に驚愕していた。

「……面白い噂だね？」

にっこりと笑って言うと、なんでか全員が俺から引いた。

「……一夏。あんたがそういう笑い方すると、千冬さんが怒った笑顔にそっくりなのよ。知ってた？」

「知らなかった」

そうか、あの笑い方にそっくりなのか。それは引くな。

「……まあ、別にそんな噂くらいじゃ怒らないけどね」

そう言うと空気が軽くなり、全体的に引いていた一団も元の場所に戻った。

「それじゃあ……その噂って本当なの？」

その問いに、俺はさっきと同じ笑顔を浮かべる。

すると質問をして来た女子生徒は慌てたような顔で、何やら言い訳らしいことを言い始めた。

「あ、ご、ごめんね織斑君！そんなわけないよね、うん。変なこと聞いてごめんね？ みんなデマに決まってるよね……」

「さあ？ それはどうかかな？」

空気が固まった。それはもう、ビシッ……という音が聞こえたような気がするほど。

「……え？ えっと……つまりそれは……」

「……聞いた話によると、今年の学年別トーナメントは二人一組らしいから、仮に交際することになったら、優勝した組のどっちかが引かなくっちゃいけないんだけど」

ここで笑い方の質を変える。鈴曰くのうちー姉さん笑いから、いつもののんびりした笑い方に。

「……頑張つてね？」

直後、俺の声が聞こえていたらしい（そう言えば、途中から食堂全体が静まり返っていたような気がする）全員が、爆発したかのような歓声を上げた。

「マジ!? マジで!?!」

「織斑君から直接言われたんだよ!? マジだよマジ!」

食堂全体がきゃーきゃーと騒がしくなる。先程の一団だけじゃないらしく、周り全員が、だ。

……でも、なんでか鈴とののちゃんは慌ててないんだよな。これはバレてるか?

side 鳳 鈴音

いつもと同じ笑顔で周りのやつらを引っ掻き回している一夏を見ると、溜め息が出てくる。

それはどうやら隣に座った篝も同じらしく、私達は同時に溜め息をついて、それから目を合わせる。

「……気付いてる?」

「……ああ。……全く、質の悪い……」

そう言って篝はまた溜め息をつく。

原因は、もちろん一夏の事だ。

さつき一夏が言った言葉は、噂が本当だといっているように聞こえる。

けれど実際は、噂がただのデマだよなと確認している女子に向かって『さあ?』と曖昧な返事をして、それから例えの話をしただけ。つまり一夏は、噂のことを否定はしていないけれど、肯定もしていないということだ。

それを勝手に周りが肯定だと取り、一夏は詳しく聞かれる前にその場を立ち去る。

……… 中学時代にもよく見た騒乱の種の蒔き方だ。だからわかる。

そして周りが勝手に騒いで、優勝したから付き合っつてと言ったらその事を引つ張り出して言いくるめるんだらう。

……… その前に、優勝すると言っことは、一夏にも勝たなければならぬと言っことだからまず無理だと思っけどね。

無人ISとの勝負のデータはなぜか欠片も残っていなくつたし、あの時は外に出ることはできるけれど中に入ることはできないという状態だつたから、あの時ステージに居た私とピットに居た千冬さんと山田先生、そして篝くらいしか一夏の本気は知らないと思っ。

……… ああ、そう言えばセシリアも居たわね。ピットに。

だからみんな一夏の全力はセシリアと戦った時のあれだと思ってるはず。あれでも私は勝てる気しないけど。

「……… とりあえず、私達は静観ね」

「そうだな。それがいいだらう」

騒いでいる周りには悪いけど、私達はなんにも教えてあげない。だって、その方がやる気が出るでしょ？

百万アクセス記念外伝、ぷちかパーティー（前書き）

今度から本編は23時に予約投稿することになります。

……十五分単位で決められたらなあ………。

百万アクセス記念外伝、ぶちかパーティー

……………あー、これはちょっと昔の話。ちー姉さんがドイツから戻ってきてちよつと過ぎた頃の、ちー姉さんの誕生日パーティーの話だ。

俺は自分にできる限りの料理の腕を振るい、ちー姉さんと束姉さん、そして数いるぶちか達に料理を作っていたため何があつたのかはよく知らない。

だからこれは、ぶちかたちから聞き出した、ぶちか視点のお話だ。

side ぶちか四十六号

「わうわうわうー！」

「うにゃうー！」

「きゅい？」

「ちゅん！」

「……………ふにいあ……………あふ……………」

「ゴロゴロゴロ……………」

おれを含めて百八匹ぶちか大行進。行進はしていないけどとても賑やかで足の踏み場もない。さつきから歩こうとするにつまづくし、転ぶところどころと回りを巻き込んで転がってしまう。

あんまり出ようとしなないケルベロスぷちかやガルムぷちか、ドラゴンぷちかにカメレオンぷちかも出てきていて、本当に賑やか。でも、割と頻繁に真つ赤な華が咲くのはどうなんだろうと思っっていたり。

「……ぷはあっ!?!」

「……かふっ……!?!」

どささっ!とちー姉さま達が倒れる音が連続して聞こえ、またこの場に真つ赤な華が咲いた。

……この一時間でもう三回。ちー姉さまの健康が心配だ。

そんな気持ちを含めて、ちー姉さまと束姉さまの顔をべろりと舐める。ちー姉さまはおれが。束姉さまは白虎ぷちかが担当している。

「……………」

「! わう!」

「ぐふあっ!?!」

どさっ!

一瞬起きていたはずのちー姉さまは、また真つ赤な華を咲かせて気絶した。どう見ても出ている血が致死量を越えている気がするけど………大丈夫かなあ?

「くはっ!?!」

どさっ!

……どうやら束姉さまの方でも同じ現象が起きているみたい。

……大丈夫？ しつかりして！

そんな意思を込めながら、おれたちはちー姉さまのほっぺに顔を押し付け、ぺろりと舐め、肩を少しだけ揺する。

PICで体重をほとんどゼロにした鳩ぶちかや鴉ぶちかがちー姉さまの上に乗っかって顔を覗き込む。倒れているちー姉さまの頭の下には桶熊ぶちかが寝転がっていて、枕の代わりになっている。

ちなみに束姉さまの方には北極熊ぶちかがいて、こっちも枕代わり。

「わう？ わうわう！」

「わうっ！」

「にゃう？」

「わう！」

とりあえずちー姉さまと束姉さまが咲かせた真っ赤な鼻血の華を片付ける。おれの指揮のもと、他のぶちか達は尻尾をふりふり耳をびこびこ掃除を始めた。

……今さらだけどなんで指揮官がおれみたいなことになってるんだろっ？

「わうわう！」

ん？ 雑巾が汚れてきたって？

……だったら洗面台で洗って、綺麗にしてからね。

ついでにバケツも持ってきてくれない？ チェシヤ猫ぶちかもつけるから。

「わう！」

ありがとね。

しばらくそつとしておいたら、ちー姉さまと束姉さまが目覚ました。

「……ふう。ぶちかそつくりの天使が引き戻してくれなかったら危なかったな」

「私もリトルデビルぶちかが引き上げてくれなかったら戻ってこれなかったかもだよ」

そんな風に呟いているちー姉さまと束姉さまだったがけれど、どうやら気合いを入れていれば大丈夫みたいで、今は普通におれたちのことを膝に乗せたり肩に乗せてほっぺをすりすりしたりしている。

なんだか順番待ちの列ができていて、ちー姉さまと束姉さまの前で

『次！次おれっ！』

と言っているかのように目をキラキラとさせている。

「ああ、わかったわかった、順番だぞ」

「わう！」

ちー姉さまに言われて順番待ちのぶちか……ケルベロスぶちか（両手に犬の人形、首輪に『けるべるぶちか』と書いてある）が尻尾を激しく振る。

……なんとなく構ってもらえないのがさみしかったので、ちー姉さ

まの服の裾の部分を指先でつまんで引つ張ってみる。
………いつもはぴんっ！と立っている耳も尻尾も萎れている自信がある。

………狼は、寂しいと泣いちゃうんだよ？

「はいはい、ちー姉さんを困らせないの」

そう言いながらごしゅじんさまはおれをひょいと抱き上げる。
そしてすりすりとおれを優しくおれの頭を撫でてくれた。

「ああ、一夏か。もう料理は」

そこでちー姉さまの声が止まる。その視線はごしゅじんさまの首に釘付けになっている。

それにつられておれもごしゅじんさまの首に目をやると、そこには首輪がついていた。ネームプレートには平仮名で『いちか』って書いてある。

頭にはおれとお揃いの白くて尖った耳。腰からは白い毛に包まれた尻尾。元気よく振られている訳じゃないけど、ふりふりと尻尾は自己主張をするように揺れている。

「一夏」

「わう？ どうしたのちー姉さん」

ごしゅじんさまはそう聞き返す。なんだかちょっと危ない雰囲気になってきたような……。

いつの間にか周りのぶちか達は束姉さまの後ろに隠れようとしてい

た。チワワぶちかなんて束姉さまに抱きついてぶるぶると震えている。

「なに、今日は久し振りに一緒のベッドで寝ようという話だ」

「ちーちゃん？　なんだか目が血走ってるように見えるのは束さんの気のせいかな？」

「ああ、気のせいだとも。一夏の首輪を見てちよっと苛めてやりたくなったり味見を試してみたくなったりなどしてないさ」

「……本格的に食べちゃう気も無いよね？」

「……さあ一夏。私の部屋に行こう」

「ちーちゃん！？　それは駄目だよ束さんもまげてよー！」

このあと色々あって、気持ち良さそうに寝ているごしゅじんさまをちー姉さまがお姫様だっここでお待ち帰りして、おれたちもそれにぞろぞろとついていった。

そしてその日の夜はみんなで一緒に寝た。

ちー姉さまも束姉さまもごしゅじんさまもおれたちも、みんな。

……流石に全員はベッドに入れなかったから、何体かで集まって寝ただけだね。

転校生、……………ん？

俺が噂話に爆薬をくべた次の日のこと。転校生がやって来た。しかも、二人。

……………どうでもいいが、普通はクラスを別にするよな？ 何でわざわざ同じクラスに放り込むんだ？ 向こうさんたっての願いか？

……………正直なところ、なんだっていいんだけどさ。俺とちー姉さんと鈴とののちゃんに被害が来なければ。

後は、無いと思うけど蘭ちゃんと弾とカズも。ついでに心配無用だと思っけど東姉さんにも。

……………手を出したら……………プチッ、しよつかね。物理的に。呼吸音を『ぜび』に変えてやる方が面白いかも。

とは言え、この世界では俺は誘拐されてないし、教室の前の方に居る……………銀髪眼帯黒兎に恨まれる原因は無いし、平気だと思っかね。

ちなみにこの思考は、転校生が入ってきたすぐ後の、自己紹介もまだの短い空白の時間で行っている。千の顔を持つ英雄を自在に操れる身体能力の中に、思考速度も入っていたらしい。

……………まあ確かに、いくらラカンと同等の身体能力があっても、巨大な隕石を空に向かってぶん投げるとかそういうことは無理だろうし、そう考えれば不思議ではないな。ラカン並なのは身体能力じゃなくって気の量だけらしい。しっかり読んでみたらそう書いてあった。わかりづらいことこの上無い。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました」

あ、自己紹介が始まったな。まあ、一応覚える努力はしておこうか。シャルル……だったか。

……間違ってたら悪いね。先に謝っとくよ。

……ふあ……と欠伸をして、自己紹介を前から後ろへ聞き流す。正直言ってあんまりこいつに興味ないし、どうでもいいかね。

ただ、どうもなんか違う気がするんだよな。空気と言うか、雰囲気と言うか……とにかくそうだったものが。

周りで男だ守ってあげたくなる系だと騒いでいるが、静かにしてやれって。

……やれやれ、元気だねえ……。

……嫌な予感。Lv6の枕を準備しておこう。

そう思ってちょうど枕を出し終わった所で、もう一人の転校生……ランドクルーザー・ボロボロ……だったけ？ が、俺に近付いてきた。それと多分名前は違う。まず違う。

……ののちゃんに聞かれたら、ひどい間違いだって言われんだろうな。

ボスッ！

枕ガード！今回は成功した。前はコットンガードって言ったんだっけ？

「……で、誰？」

「そこから！？　いま自己紹介したよね！？」

シャルル・ディアブロが突っ込みを入れた。昔、突っ込みの上手い奴に悪いやつは居ないと誰かが言ってたような気がしなくもない。

「私はみとぶっ！？」

仕返しの枕アタック。ただしこの枕は自動式。某使徒がコアとして持っていたえすえす機関なんて使ってないよ！ほんとかもよ！

「くっ！きさまぶっ！」

抱き枕用の長い枕は勝手に動き、ランドスターの腕に絡み付いて頬を殴り付ける。中身は綿………ではなく、ウォーター枕に見せかけたマーキュリー枕なので中々痛いはずだ。コアもあげふんげふん。

「……知らないのか？　最近の日本製枕は使用者の安眠のことを考えてあつて、寝ている時や寝ようとしている時に襲われると反撃するんだぜ？　しかも中々強いんだ」

「そんなわけないよね！？　そんな物騒な枕はないよね！？」

目の前に強い枕があるじゃないか。現実を認めろよ。

「ちなみに枕は、はじめての使用者を決める際に一対一の決闘を挑み、それに負けた時にのみ使用者を使用者と認めると言う。勿論ナイフ等を使っても良いが、素手で押さえ付けてやらないと使えなくなるからな………苦労したぜ………」

「ウソだよな？　ねえウソなんだよね！？」

やれやれ、だから目の前にその強い枕があるって言ってるのに。

「……一夏め……いつの間にあれほど腕のたつ枕を……」

「あれ？ 僕がおかしいの？ 何でこの教室のみんな当然みたいな顔をしているの!？」

「……ふっ。まさかこれほどの枕を使用しているとはな……どうやら私は貴様のことを見くびっていたらしい」

「え!?! こっちも!?!」

「IS使いの中ではどれ程強い枕を使っているかがステータスとなる。……まさかこれほどの枕と出会えるとは!」

「……俺は、もっと強いぞ?」

俺は、枕と向き合いながら俺の顔を見て笑う銀髪眼帯黒兎を見て、笑う。

「いいだろう!これからお前は私の好敵手だ!」

「面白いことを言うね……受けて立とうじゃないか」

そうして笑い合う俺たち二人の近くで、シャルルが頭を抱えていた。

「……って言う夢を見たんだ」

「……一夏だったらほんとにやりそうだから怖いわね」

「待て待て、いくら一夏でもそれは」

「ここに自動で動いて警護してくれる枕（水銀入り）がね?」

「やめろよ?」

「やめなさいね?」

怒られた。

転校生、正夢か？

なぜか本当に転校生が来た。夢の内容と同じだ。

……だが、流石に枕の件まで一緒ではないだろう。と言っか、一緒じゃないことを祈る。枕ガードはするけどな。

もちろんええすえすな機関は入っていない……はず。

……きつと入ってない。……うん、きつと。

そう考えつつ、俺は頬に向かって飛んできた平手を枕で受け止める。……ちよつと埃が舞った。強く叩きすぎると中の綿が切れて埃みたいに舞うんだぞ。この枕中身水銀だから関係無いけど。

……あれ？　じゃあこの埃はどこから……？

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

そう言ってくる銀髪眼帯黒兎に向かって、俺はいつもの眠そうな表情を崩さないようにして聞き返す。

「……ごめん、眠くてよく聞こえなかった……もう一回お願いできる？」

ぴきつ、と縄に亀裂が入ったような音がしたような気がした。気のせいだな。そうだ気のせいだ。例え目の前の銀髪眼帯黒兎の額につき数秒前までは確実になかった怒りマークがあっても、気のせいでは押し通す。

「……って言うかその前に……誰？」

「……ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「あ、覚える気ないから。ついでに存在自体が眼中にないから。さつさと空いてる席に座ったら？　そこにいつまでも木偶の坊みたいに突っ立っててもなんの役にもたたないどころか織斑先生の授業と話を邪魔になるだけなんだからさ。そう思わないか？」

そう言つてやると銀髪眼帯黒兎は憎々しげに俺を睨んで、後ろの方の空いた席に座ってから腕を組んで目を閉じた。

……ん、最初の頃のセシリーを思い出すね。あれはそのうち俺の大切なものに手を出すと見た。

……その時は覚えてる？　……俺は、執念深いぞ？

所で、この世界には水を自在に操るナノマシンがあるそうだ。きつと水銀でも使えるよな。エネルギー食いそうだけど。

……水銀は金属だ。ランブルデトネイターで爆破できる。

そして気体にすれば毒性を持ち、頭をぶっ壊す事も肺の中で爆破することもできる。

……欠点は、気体になると無差別攻撃しかできない上、IS使用中には恐らく使つても意味がないと言つことだ。ウォーターカッターのように直接ぶちこんでやるんだつたら効果はありそうだが。

……さてと。それじゃあさつさと着替えて第二グラウンドまで行かないとな。

「ああ織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

ちー姉さんはそう言った。やっぱりそうなるかあ……。面倒臭いよなあ……。着替えなんて千の顔を持つ英雄で一瞬で終わるからいいけ

どぞ。

「君が織斑君？」

「いいから先に着替えに行くよ。あとわかると思っけど寝てて自己紹介とか何一つ聞いてないから後で教えてね」

さて、それじゃあ行こうかね。

「毎回空いてるアリーナの更衣室での着替えになるから覚えといてくれ。……ところで、足は速い方？」

「え、えつと……人並みには。走るんだったらついていくから大丈夫だよ？」

そっか、人並みか。じゃあ多分ついてこれないから手を引っ張って行こうか。捕まったら多分怒られるの俺だし。

「それじゃ行くぞ？」

IS発動、ライドインパルス。バレないように展開は最小限に。

……よい、しょつと。

「え、ちよつ……きゃあああああつ！！」

この日、IS学園の廊下には、金髪の少年（……にしては骨盤の形が変だし、股関節の骨のくっついてる所の隙間が広すぎると思うんだよなあ……）の悲鳴が響きわたった。

……原作だったら女の子だったはずだけど、TSなんて結構よくある事だし、気にしないことにした。なにより面倒だし。

「はい到着。毎時間調べておかないといけないから気を付けるよ？
……………平気か？」

その問いに少年（……………にしては以下略）は、荒い息をつきながら首を横に振った。まあ、あれだけきゃーきゃー叫べば疲れるわな。

「……………俺って足速くてさ。人並みだったらついてこれないと思って捕まったら厄介だしね」

主にちー姉さんの出席簿クラッシュが。あれ面でも痛いんだわ。枕ガードしても衝撃抜けてくるし。

「……………はあ……………はあ……………っ、うん、大丈夫……………」

「そつか。知ってると思うけど俺が織斑一夏だ。おりむーでも一夏でも好きに呼んでくれ。ただいっくんだけは勘弁な」

「すー、はー……………うん、よろしく一夏。僕の事もシャルルでいいよ」
「わかった、シャルル」

……………ん？ ‘シャルル’？

「……………なあシャルル」

「？ どうしたの？」

‘シャルル’は不思議そうな顔で聞き返してくる。間違っていると言っ訳じゃ無さそうだ。

くんくんと鼻を寄せてみる。‘シャルル’は顔を赤くして離れようとしたが、逃がさないように手は掴んだままだ。

「……………シャルルってさ……………ほんとに男？」

びくっ！と体を跳ねさせた。わざわざこうして無駄に近付いて平常心を奪った訳じゃない。素直な反応が返ってきてくれて嬉しいよ。

「……な、何を言ってるの？ 僕は男だよ？」

「……それにしても、弾とかカズみたいな男っぽい匂いがしないんだよな……どっちかって言うとののちゃんとか鈴によく似た感じの匂い」

「そ、そういう体質なんだよ！」

……まあ、‘シャルル’がそう言うんだったらそれでいいけど。名前が偽名とかそんなのも含めて。

「……ふーん。そう。まあ良いけどね」

さっさと着替えて行っとくか。千の顔を持つ英雄でISSスーツはもう着てるし。

いい勝負、鈴・セシリー vs 真耶先生

ISスーツに着替え終わり、ちー姉さんに言われた通りに第二グラウンドに向かう。絡まれそうになったが逃げ切れた。かなり楽しかったな。シャルルは手を引かれて悲鳴上げてたけど。

「そりゃあげるよ……なんであんなに足速いの？」

「俺だから」

「……なんでだろう。一夏のこととはよく知らないはずなのに、なんだかすつごく納得できる」

仕方ないさ、俺だもの。

さてと、もうすぐ授業開始だし、さっさと並んでおかなくちゃな。

「では、本日から格闘および射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同練習なので人数はいつもより多い。俺としては鈴がいるのが嬉しいね。

「あたしも一夏と一緒に嬉しいわね」

そう？ ならよかった。

「……今日は戦闘を実演してもらおう。凰！オルコット！前に出る」

「はい！」

……なんだろう、原作と同じはずなんだが、なぜかちー姉さんがイライラしてる気がする。俺が鈴と一緒に嬉しいと言ったからか？

……まさかね。

「それで、相手の方はどちらに？ ……まさか、また一夏さんにいじめてもらえるんで」

ドズツパアン！！

「……あんたも大概馬鹿ね、セシリア」

「ああ、痛いですわ……………ハア……………」

ダメだこの金髪、早くなんとかしないと……………。

恐らくこれはほとんどの者が思ったことだろうと思う。シャルルも冷や汗をかいていた。

妙な空気になったところで、真耶先生が現れた。いつもと同じように柔らかな雰囲気だが、ISを装備しているとなんとなくきりつとで見える。入試の時にあまりにも慌てすぎてるのが見ていてわかったからゆっくりと宥めてやった人と（身長と顔と体格と体型と声と網膜とDNA以外は）同一人物に見えない。

「……………そこまで一緒なのだったら同一人物と言って差し支えなからう」

特に網膜な。あれ同じ人はまずいないそうだし。

……真耶先生が使っているISは隣にいるシャルルの実家の作った
第二世代型量産機の………バザール・デゴザール………
…だったっけ？

「一応言っておくがラファール・リヴァイヴだ。けしてバザール・
デゴザールなどという名では無いからな」

「あ、やっぱり？ 絶対違うと思ってたんだよね」

やっぱりね。

「さつさと始める小娘共。いつまで惚けているつもりだ？」

「……作戦会議は何分頂けますか？」

「実戦の中でやれ」

お、始まった始まった。頑張れ鈴、頑張れセシリ。

真耶先生は強いだろうけど頑張れ。

side 鳳 鈴音

試合開始直後にセシリアとプライベート・チャネルで作戦会議をす
る。

『あたし前衛、あんた後衛、あたしは隙を作ることには専念するから、
できたら撃って』

『わかりましたわ。……ですが、わたくしは一夏様と戦った時のわ
たくしではありませんわ。新しい世界への扉と一緒にいろいろ開き
ましたの』

『そう。だったら頑張つてね』

そう言うてからあたしは突撃して死角を作る。その隙にセシリアはビットを二機だけ飛ばして、自分も動きながら山田先生に少しだけプレッシャーをかける。

あたしもあたしで至近距離からの拡散型で低威力の衝撃砲を連発しながら山田先生の機動の邪魔をする。

セシリアに銃を撃ちたい時に向けられた銃口に衝撃砲を撃ち込んで邪魔をし、ビットを落とそうとする所で邪魔をし、邪魔をしてできた隙にセシリアがレーザーを撃ち込む。山田先生はなんとか避けているけれど、それでも僅かずつシールドエネルギーは減っていつているはず。

そうでなければ山田先生がこんなに難しそうな顔をしている理由がないし。

……………それにしても強い。いつものあたふたとした姿からは全く想像できない強さね。

セシリアやビットを狙うとあたしに邪魔されるということであたしを狙うようになった山田先生は、乗っているのが第二世代の機体とは思えないような強さを持っていた。

正確な射撃。高速かつ精密なスラスタ―出力調整とその機動。フェイントの巧みさ。どれをとってもあたし一人では絶対に勝てないだろう。

そう。あたし一人では。

あたしにできた隙をつこうとする山田先生に、セシリアの操るビッ

トからの青い光条が二本突き刺さる。

それで勢いを削がれた山田先生は、一度下がる……と見せかけてさらに突っ込んできた。武器は近接ブレードと近距離用ショットガン。確かにあたしに近付けば誤射を恐れてセシリアの射撃は少なくなる。けど、私にだって意地がある！

双天牙月をバラしたまま振るい、ショットガンの銃口をあたしに向けさせないように弾く。衝撃砲はコンパクトに連発し、できるだけ攪乱する。

……でも、そろそろ詰みね。

今までも何発か食らってるし、ショットガンの銃口を向けられた直後にぶちこまれたのも二回三回じゃない。その度にセシリアからのレーザーが山田先生に当たりはしたけど直撃には程遠い。機体の性能差で覆そうにも、あたしの技量じゃ無理。

『……ちよつとこれは……』

『やっぱり難しいわよね？』

『勝つのは……難しいですわね』

……まあ、それでも。

『諦めるわけにはいかないわよねえ？』

『その通りですわー！』

一夏に追い付くまでは。

s i d e 織斑 千冬

……ふむ。想像以上に粘るな。これも一夏効果か？

そう思いながら一夏を見るが、肝心の一夏はいつもの通り、七割程度は眠ったまま授業を受けている。

……やれやれ。

お昼ご飯、壊れシャルル(前書き)

色々不味いかも……

お昼ご飯、壊れシャルル

「はうあ~~~~」

シャルルが壊れた。俺がつれてきたぶちか達を見たら壊れた。現在黒猫ぶちかを抱き締めているが、頬の緩みが物凄いいことになっている。写真に残しとけば黒歴史入りは間違いないな。

……やつとくか。面白そうだし。

「……あんたも悪ねえ……パシャリと」

「鈴には言われたくないかな。その手に持つてるのはなんだ？」

「カメラよ？」

「全く、貴様らは何をしようとしてるんだ……録画オフと」

「な、何か聞こえましてよ!? 撮ってましたわね? 完全に撮ってましたわね!？」

まあ気にするなよセシリー。気にしたってシャルルが壊れてしまえば帰ってきそうにないことは変わらないんだから。

さてと。飯にしようか。弁当はちゃんと作ってきたからな。

「シャルル、おいシャルル!」

「ん〜 かわいいにゃ〜」

「………やれやれ……剥くぞ?」

「はっ!?!」

そう言ってやったらようやくシャルルが帰還してきた。黒猫ぶちかはその隙にシャルルの腕から抜け出し、鈴の膝に座っていた獣耳2号チエシャ猫ぶちかの隣に飛び込んだ。

「う〜」

「はいはい、怖かったわね〜……………ところで一夏。シャルルの名前は呼べるのね？　なんで？」

「偽名だからじゃね？」

「!?!?」

びつくーん！と全身を強ばらせるシャルル。バレバレだからね？

……………前に誰かが言っていた。こうやってちよつとずつ追い詰めていく過程が一番楽しいと。

「……………そんなことを言ったのって誰？　ちよつと一夏に変なことを教えた罰を与えてきたんだけど？」

「同感だな。緋宵の切れ味を確かめるちよつどいい試し切りの材料になってくれるだろうよ」

「そうですね。最近になって偏向射撃もできるようになりましたし、試し撃ちもいいかもしれませんわね」

「怖いよ!?!?　冗談なんだよね!?!?」

「さあ？　ちなみに言った奴はちー姉さんと束姉さんの手で人間失格とも言える生活を世界のどこかで送ってるらしいけど」

いいツッコミだシャルル。ツッコミの上手い奴には悪い奴はいないらしいからな。問答無用で O H A N A S H I は勘弁してやるう。

「……………それで、なんでシャルルは偽名使って男のふりしてまでここににいるのかしら?」

「な……………なんのこと？　どうして僕が偽名使ってるって話になるのさ？　それに、僕は正真正銘の男だよ」

シャルルは顔を真っ青にしつつ、それでも言い訳を続ける。

……でもなあ……無駄なんだよ。

「男じゃないってわかった方の理由は簡単。ってかばれない方がおかしいと思うんだが……骨格違うじゃん」

「普通一目じゃわかんないよね!？」

「普通わかるに決まってるだろ? なに言ってるんだか」

「ええええええっ!？」

簡単だろ。スリーサイズはわかんないけど骨格はわかるんだよ。

「偽名の方はもっと簡単だ。……俺が覚えられたからな」

「どんな理由さ!？」

シャルルのツツコミはキレが良いな。

「まあまあ落ち着け。犬と猫どっちが好き？」

「どっちもだけど……って、話をそらさないでよ!」

「はい柴犬ぶちかと三毛猫ぶちか。こいつらを撫でながら落ち着いて聞け」

「にゃうー!」

「わう!」

「……………っ!？」

シャルルはぶちか二体を膝の上ののせ、上目使いを食らってくらくらだ。ああ見ていて面白い。

「一夏はね……………他人の本名を覚えられないのよっ!」

どーん！と効果音が出そうなくらいに威張りながら鈴は俺の特性について説明をしてくれた。

ちなみに俺の特性は、日本語に直して平仮名片仮名三文字以上……と言っていたが、ローマ字に直してa i u e oの五つの母音の数が三個未満（特例として『ん』は母音カウント）の名前なら覚えらるる。

だが、シャルルの名前はローマ字に直すとs y a r u r uで母音は三つ。本名なら覚えられるはずがない。

ただし、偽名や愛称などの本名とは違う名前や開発コードだったらなぜか覚えられる。

それを利用して偽名発見なんてことをできるんだが………シャルルが引つ掛かるとは少ししか思ってたなかった。

ついさっきまで俺はシャルルのことを、女顔で声が高くって男性ホルモン匂いが希薄で女性ホルモンの匂いの強い、骨格が女性そっくりで胸をなにかで押さえつけている性染色体がXXの男だと思っていたからな。

多分なのちゃんとセシリーが

「性染色体がXXの男が居るわけ無いだろ」

的なことを言ってくれてなければ気づかなかっただろうね。

……ちなみに、XXのみつてのは確かにいないけど、XXY（Y）だったらたまに居たりする。人間の細胞はフアジーにできてるな。

「……そこまで解ってたなら気付きなさいよ」

「だってそれを踏まえて『ほんとに男？』って聞いてもイエスって

答えたんだし、なにか知られたくないことがあるんじゃないの？」

例えば、父親が外に作った愛人の子供で母親が死んでから父方に引き取られたけど偶然ISとの相性がよかったからテストパイロットになったはいいけど愛情なんて全く注がれることなく育ててきて、最近落ち目の実家の会社を立て直すために俺とシロのデータを取りに来たスパイみたいなものにさせられてるとか。

「……………いつもの勘？」

「……………いつもより当たるだろう勘……………かな？」

原作知識だけど。

……………ああ、そんなことのために俺の貴重な睡眠時間を削ろうと画策していやがったのか。ムカつくな。実にムカつくな。

「……………シャルル。今の一夏の話で外れてるところとかある？」

鈴が憤怒を抑え込んでいる声でシャルルに問いかける。鈴は元々激情家だし、当たり前か。特に家族関連のことは。

……………しかし、ぶちかに挟まれて壊れていたシャルルはと言うと

……………

「うえへへへへえ……………」

女としては出してはいけない笑い声を出しながら、ぶちか達を可愛がっていた。

気持ち悪いほど蕩けた顔と頭とは違い、手はしっかりとぶちかを優しく撫でていたことを確認した。やっぱり悪いやつじゃないな。

……三分以内に帰ってこなかったら痛いと言判のデロペンをかま
してやる。

昼食、シリアスモードに

‘シャルル’は帰ってこなかったの、痛いと評判のでこぴんをした。本気じゃないからソニックブームも出なかったし、食らった‘シャルル’が吹き飛ばすといったことも無かった。

「ッ！？」

「ッ！？」

「……………うわぁ……………」

「……………一夏。どれだけ力を込めたのだ？」

「……………わたくしの額があるのでこぴんを……………はぁ……………」

約一名を除いて‘シャルル’の反応に引いていたが、三十秒もすると痛みが引いてきたのか半泣き（半分どころか全泣きしてるような気もするが）で俺のことを睨んできた。

「俺の話を完全に無視してあり得ないほど蕩けた笑顔で涎を垂らしていたお前が悪い」

「え！？ う、うそっ！？」

そう言いながら‘シャルル’はポケットからハンカチを取り出し、ごじごじと口の周りを拭き始めた。

「ほらこんな顔してたんだぞシャルル」

「ッ！？」

‘シャルル’は俺の携帯の画面に映った写真を見て顔を真っ赤にする。確かにこれは恥ずかしいよな。

「け、消してっ!」

「はいはい……………で、本題といこうか」

「シャルル」の緊張も解れたようだし、質問タイムだ。盗聴機その他はいつもの通りチャフで無効化してある。ぶちか達に頼んでおけば、学園中のどこにでもすぐさま張ってくれるからいいよな。

「ある程度の予想はついているんだ。さっきシャルルがだらしない顔をしてた時に話したんだけどな」

「あ、あれはもう忘れてよ……………」

……………「シャルル」って、からかうと楽しいな。

「……………とりあえず、イエスカノーかはいいいえでお答えください」

「……………わざわざ二カ国語で言う意味はあるの?」

無いよ?

「まず始めに、前提としてお前の染色体が全てXXであるということとは確認済みだと言うことを頭に置いとくとして……………シャルルは望んで男として来た」

「……………ノーだよ」

やっぱりか。じゃあ次だ。

「お前のところの実家の社長である父親の命令?」

「イエス」

「社長には本妻と愛人が居て、シャルルは愛人の子供?」

「イエス」

「本妻に暴力を振るわれた経験がある」

「イエス」

「父親から愛情らしきものを受け取った覚えはない」

「イエス」

「俺達にバレたからフランスに戻ろうとしている？」

「イエス」

「フランスに戻ったら最低でも牢獄生活、最悪社会的に社長に抹殺されるとわかってる？」

「イエス」

淡々と答える「シャルル」の言葉に、周りの三人が怒りを押さえられないといった顔をしている。俺？俺はそんなことはない。

……ただ、そう言う親は嫌いだけだな。

「目的はシロと俺のデータ取り？」

「イエス」

「それも社長の命令？」

「イエス」

「……ちよつとだけだったが、ここは楽しかったか？」

この質問に、「シャルル」は一瞬戸惑ったものの、儂げな笑顔を浮かべて答えた。

「……うん。楽しかったよ……ほんとにちよつとだけだったし、大変だったけどね」

そうかそうか。それはよかった。

「……できるなら、まだシャルルはここに居たい？」

「……無理だよ。だって」

「イエスカノーで答えろって」

すると、‘シャルル’は少し迷って、小さくイエスと答えた。

……よしよし。素直なのはいいことだよ。

いくらでもやりようはあるし、東姉さんが本気であっちつかない限り負けはない。

俺はにっこりと笑って言う。

「そっか」

……試したことはないけど、多分できると思うんだよね。

「ののちゃん。鈴。セシリー。ちよつと行ってくる」

「……あたしたちの出番は無いつてことね。その分しっかり思い知らせてあげてね……誰に喧嘩を売ったのか」

「そうだな。行ってこい、一夏」

「いい報告をお待ちしております、一夏さん
「ん」

……さてと。やるかね。

千の顔を持つ英雄で、幻想を殺す右手を持った不幸な少年が主人公の世界の滞空回線を作り上げる。あれは学園都市だけだったが、こちのは全世界を覆い尽くせるような馬鹿みたいな数を出す。これだけでもかなり疲れるが、ここからが本番。

魔力を持った武器が作れた。形をもっていれば作れた。だったらこ

いつも作れるはずだと、ネギま世界の電腦兵器、力の王笏を作り上げた。

ここから滞空回線を通じてハッキングをかける。後のことは………
まあ、多分なんとかなる。

とある銀行のデータを騙くらかして、架空の口座に架空の金を大量に用意し、勝手に‘シャルル’の実家の会社を買い取った。ネット上でのあつという間のことだったので、恐らく誰一人として気付いていないだろう。

……ちなみに電子精霊千人長七部衆の姿は手のひらサイズのぷちかだった。きびきび働いてたけど。

……さて後は‘シャルル’を合法的に雇い直して、それから社長を軽く脅してやろう。それには遠距離で当てないように狙撃でもやればいいな。

滞空回線でその場所を見ながらだったら簡単に千の顔を持つ英雄でライフルでも何でも出せる。ああ便利。

周りのことは知らないね。面倒臭い会社のことは任せるよ。潰れるだろうけど。

そしたらテロ組織の亡国企業に罪を擦り付けて‘シャルル’のISだけ貰っていつてやる。

俺の機嫌を損ねた報いを受けるがいい！みたいなの？

……おっと、脅迫メール出しておかないと。

side セシリア・オルコット

一夏さんは黙って目を閉じて、それから数分動かなかった。しかし次に目を開けた時、そこにはわたくしを封殺して苛めぬいた時と同じ光が宿っていました。

「……………ふう……………」

「……………終わったみたいね。はい一夏。あーん」

「……………はむ」

一夏さんはもきゅもきゅと美味しそうに鈴さんの作ってきた青椒肉絲を食べる。何をやったのかわかりませんが、どうやら終わったようですわね。

「多分しばらくすれば答えが出るから、それまでここにいろ」

「それが一番ね。……………そう言えば、あんた名前は何て言うの？ あ

たしは凰 鈴音よ。鈴でいいわ」

「私は篠ノ之 篝だ」

「わたくしはセシリア・オルコットですわ。以後よろしく」

わたくしたちがそう言つと、デュノアさんはしばらくぼかんとわたくしたちを見て……………その目に涙を浮かべた。

そしてぼろぼろと涙をこぼしながら、ありがとうという言葉を繰り返していた。

「いいから飯にしようぜ」。ほらシャルルも笑って笑って」

一夏さんの言葉に従い、デュノアさんもわたくしも食事を始める。

……………ちなみに、わたくしが自作したサンドイッチは酷い味でしたので自分で食べるようにしました。甘苦いタマゴサンドは少しト

昼食、シリアスマードに（後書き）

中途半端にしかシリアスになれない

ISできたよ！やったねかんちゃん！

‘シャルル’の実家の会社をハッキングして脅しつけた次の日の事。俺はいつもの通りにIS整備室に行つてシロの調整をする。乗るたび乗るたび調整しているが、それでも調整の種は尽きない。いくらでも要望は出てくる。

例えば前回は瞬時加速時の移動距離調整が少しぶれていたのである程度固定したし、その前は銃火器を使うときに必要なロックオンシステムがなかったので追加したりもした。

必要以上のエネルギーがスラスタに振られていてスラスタがエネルギーを持って余していた時にはそのエネルギーを別のところに回すように調整することもあったし、装甲の調整も多少とはいえた。

……ちなみに、シロの調整結果はぶちか達の使うミニシロにそのまま繋がっているため手は抜けない。元々抜く気はないけど。

……そして今日は、いつもお手伝いをしてきているかんちゃんの手が完成したというおめでたいことがあった。ちなみに、機体だけ。

それと今必要なのは稼働データと武装。荷電粒子砲はともかく、ミサイルの方は今度の個人トーナメントとあるものを試してみようと思っっているため協力できるだろう。

かんちゃんにはよく助けてもらつてるし、こつちから助けてあげたいと思うのも不思議じゃないはず。

流石に今度の個人トーナメントには間に合わないけど、原作では六巻であった弾丸より早いレースには参加できるんじゃないかと思っ

ている。

……一応使えるんだし、荷電粒子砲も使うことを視野に入れとくか。

「……いいの？ シロは……近接型でしょ？」

「違うんだよねえ。確かに近接白兵戦闘能力が高いのは認めるけど、実際には遠中近距離どこでもいける万能型」

「……でも、武器がない……」

「それについてはなんとかなるようになってる。ミサイルも荷電粒子砲も」

具体的には千の顔を持つ英雄で。

「ほら、よく言っじゃん。そんなものは気合いでどうとでもなるって」

「……いくらなんでも無理だと思う……」

「そう思うのは気合いが足りないからだって。『気合い』を『意思』に変えてみればよくわかると思うよ？ 力があっても技術があっても、それを使う意志が無ければ宝の持ち腐れだし」

だから俺は千の顔を持つ英雄をよく使っているわけだが。

「まあ、俺も自分にあつた戦い方を見付けられてないわけだし、それを探すついでだよ。ラッキーとでも思っときなつて」

けらけらと笑いながら近くにあつたクツキーをかじる。カロリーのことを考えてバターを使わずに作ってみた。サクツとした歯応えではなく、どちらかと言うとガリツといった歯応えだが、それはそれで美味い。

かじりかけのそれを、かんちゃんのお膝の上に座っているリスぷちかに渡すと、かりかりかりと食べ始める。
そんなぷちかを見たかんちゃんは、少しだけ頬を緩めてぷちかの頭を撫でている。

「……………何て言うか、そうやって撫でてるところを見ると親子に見えるなくもないよな」

「……………へ？」

そう言ってみると、珍しくかんちゃんの呆けた顔が見れた。これはなかなか珍しい。

「髪の色は違うけど、ぷちかもかんちゃんになついているみたいだし」

「……………そう……………かな？」

「そう思うよ？ 確かにぷちかは純粋で人見知りはないけど、悪い人にはなつかないからな」

何では知らないけど、実際その通り。悪人というかこつちを利用してやるうとするやつにはなつかなかった。

……………まあ、手がかからなくていいけど。

……………さてと。それじゃあそろそろ帰って寝ようかね。‘シャルル’も待つてるだろうし。

「それじゃあまたね」

「……………うん」

s i d e リスぷちか

カリカリカリカリカリ……

……クッキーおいし

s i d e 更識 簪

……あれ？ いまなにか……あれ？

……気のせいなの？

……。

……気のせいだったみたい。疲れてるのかな。

基本部分は出来上がった打鉄式式のことを思う。武装のマルチ・ロツクオン・システムや荷電粒子砲はまだ完成していないけど、一人で悩んでいた時に比べればずいぶん早くできたと思う。

……これも、織斑さんの協力のおかげ。

……織斑くんは、シロの悪いところを改善するのに協力してほしかっただけで、協力した訳じゃない……って言いそうだけど……。

本当は……わかってる。織斑くんは……本当についてに助けただけ……でも……その割には随分よく整備室に来ていた。……それも、わざわざ私の居るところに。

織斑くんにとっては大したことじゃあなくっても……そうしたわかににくい心遣いの積み重ねに気付くと……嬉しくなってくる。

……こうやって、織斑くんは……無意識に、女の子を落としてるのかもしれない。

……だって……織斑くんと初めて出会ってから……二ヶ月とちょっと……たったそれだけの付き合いなのに……私は……織斑くんに惹かれてる。

ちよつと前までなら……嫌な気分になっていたかもしれないけど……。
……今は……なんだか心地いい。

ふと、考えていた相手の名前を口にしてみる。

「織斑くん」

私は、それだけでひどく赤面した。

束姉さん参上！そしてちー姉さんによる惨状（前書き）

キャラ壊し。どんな意味があるのかは不明。

東姉さん参上！そしてちー姉さんによる惨状

「やつほーいっくん、おひさしー。はぐはぐしに来たよ〜」

部屋に戻ると‘シャルル’の代わりに東姉さんが居た。何をしたのかよくわからなかったので一度部屋を出て確認してみようとしたら、東姉さんに捕まってベッドに引きずり込まれた。

「もう、つれないなあいっくんってば。東さんへの愛はそんなものだったのかい？」

「いえ、びっくりしたのでとりあえずちー姉さんに電話をしようかと」

「おおっとやらせないよ？ 昔からちーちゃんはいっくんのことになると怖いからね。残念だけど連絡を取れないように電波障害を起こしてあるのさー！」

……簡単に言ってるけど、そいつは現代の科学力で簡単にできるとじゃないぞ東姉さん。

「東姉さんの科学力は世界一いー！」
「知ってます」

それこそ嫌っていうほどに。でなけりゃISなんて作れやしないだらうし。

「いいからいっくん！さあはぐはぐの時間だよ〜」

「……お風呂は」

「？ 東姉さんと一緒に入るかい？」

「まだ鬼籍に入る気も人生の墓場に行く気も無いので遠慮しときます」

怖い怖い。束姉さんは言ったら本当にやるからね。有言実行のマツドサイエンティスト、束姉さん。

「じゃあいますぐだね。束姉さんの胸に飛び込んでおいで〜」

束姉さんはにこにこ笑いながら両手を広げるが、俺はそれを努めて無視して束姉さんの隣に寝転んだ。

「いつくんつてばほんとにつれないなあ。でも抱き締めちゃうよー」
「……どーぞ」

「許可が出たよ！じゃあさっそく束姉さんの束姉さんによる束姉さんのためにはぐはぐタイム！はっじまつるよー！」

テンションがアホみたいに上がった束姉さんは俺のことを思いきり抱き締めながらベッドに転がった。少し息が苦しいから手加減してほしいところだけでも……まあ、無理だろうな。

「ほうあ〜久し振りのいつくんだあ〜」

「はいはい、一夏ですよ〜」

そんなことを言いながらも、俺はゆっくりと意識を手放していく。束姉さんはなかなか信用できないけれど、信頼できない訳じゃないからな。

……ふあ……はふ……。

……すか……。……。

しばらくいっくんを抱き締めていると、寝息が聞こえてきた。そこでいっくんの息がつまらないように少し隙間を開ける。

じっ、と見つめていると、いっくんは何でもないように眠り続けている。

……私は知っている。いっくんがISに乗れるとわかってから、いっくんのことを誘拐しようとした組織の半分は、いっくん自身の手で排除されていたことを。

この場所に来てからはそういうことは減ったけれど、その代わりに盗聴機やカメラの個数がずっと増えたことと、それをすぐに学園が仕掛けた護衛用とそうでないものに分けて。護衛用以外を壊していたことを。

一人になった夜に、いっくんの部屋に入ろうとしてちーちゃんに捕まった女のことを。

そして、それを知っていてなにも知らないように振る舞っていたいっくんを。

……束さんじゃあちよつと足りないかもしれないけど、いっくんをこうして抱き締めてあげることができる。

……ほんとはちーちゃんが一番いいんだけどね。いっくんはちーちゃんが好きだから。

ちーちゃんは今、色々忙しい。原因の大半は私だけど、だからこそちーちゃんは忙しい。

……ごめんねちーちゃん。でも、いつくんを守ってあげたいっていう気持ちは東さんにもあるから、安心してね？

いつくんは強い。戦ったらまず勝てない。だから私は、いつくんが本気を出せない状況にして。その上で戦わずに勝つ。

そのために私は白式を……シロを作ったんだし、その中に爆弾代わりの仕込みもした。これでいつくんは死なないまま、ちゃんと強くなれるはず。

相手に選んだあの子も、いつくんを一度は追い詰められるくらいに強くなるように技術提供もした。その結果も期待通りだった。

……だから、きっと大丈夫。

……大丈夫。

私は心細さを隠すように、いつくんを強く抱き締めた。

……起きた時には、いつも通りの『東姉さん』に戻ってなくっちゃ。

……そして、朝。

「……」

ちーちゃんに見付かってアイアンクローをされた。頭蓋骨が軋むとかそんなレベルの話じゃなくて、もっとこう直接的な命の危機にさらされてるような痛みが……っ！

模擬戦闘、俺vsシャルル、

‘シャルル’がここに来てからはや五日。初日に性別詐称が発覚するも、俺は全く気にすることなく同室で寝泊まりしていた。たまに俺のベッドに鈴やののちゃんが居たりして騒ぎになることもあるが、なかなか楽しい生活だ。

……ちなみに‘シャルル’の実家の会社だが、いつの間にか経営が少し良くなっていた。忘れてたけど俺って一応黄金率と幸運スキル持ってるし、当然……なのかもな。

現在の経営者は俺だし、言うことを聞かなかった‘シャルル’の父親はちよつと洗脳したから言うことを聞いてくれるようになったし、問題ない。

そして現在、俺は衝撃砲以外の遠距離武器の練習ついでに‘シャルル’と模擬戦をしている。

ラピッドスイッチの真似事をして遠近両用になっているが、やっぱり面倒臭い。一発の威力も必要だけど、やっぱり弾幕張れる武器の方が好みだ。楽だし。

ちなみに基本戦法は、相手のバランスを崩すとかして意識をそらし、不意を打つように近付いて荷電粒子砲または雪片で攻撃して離れる。わざわざこんなところで手の内を見せたくないし。

ただ、荷電粒子砲って面白いな。束姉さんの使ってた遠隔操作型のISみたいに曲げることはできなくとも、衝撃砲とは違って速度があるし、縦に裂いて散弾のようにすることができると。

エネルギーをアホみたいに食うのが厄介だけど、元々攻撃特化型のISであるシロはそんな感じだし気にしない。

……どんな手を使っても良いんだったらこの世界ではどんなやつにも勝てる自信があるが、流石に人前でディープダイバー使って地面に相手を引きずり込んで地中に放置するのは不味いしな。

「っ！？ い、いま何か怖いこと考えなかった？」

「考えてないぞ。ただ、どうやればシャルルを落とせるかってことだけを考えてる」

「……それはそれで怖いような……」

戦闘中はそんなもんだろ。それ以外のことを考えていて落とされて死んじゃいました、何てことになったら多分ちー姉さんが泣くだろうし。

だから、手加減はちょっとしかししないぞ？

中々いい勝負をした。使い慣れない射撃系武器を使って、よくもまあここまで粘れたな。偉いぞ俺。

「と、言うことで吹っ飛べ」

「ちよっ！？ グレネードがあるなんて聞いてな」

どっかん。

‘シャルル’は不意打ちで放られたグレネードの爆発に巻き込まれ、シールドエネルギーを0にした。

あと、言っていないんだから知らなくてもおかしくはないさ。

「……まーた強くなったわね？ 少しはのんびりしたらどうなのよ」「してるさ。週一しか乗ってないしね」

その代わりに週一でメンテナンスしてるし、出力調整もしてるけど。

鋼龍に

「甲龍よ。読みはシエンロン。クシャルダオラじゃないわ」

そうだったか。すまん。だが俺は覚えられない！だから呼び名はコドラで。

「……まあ、ポルンガよりはましかしら。甲のドラゴンでコドラ？」

「正解、と言うことで正解者にはハグしてあげます」

「バッチこいね。あたしにも一夏にも損のない美味しい話じゃない」

「ああ、できれば私も良いか？」

「わたくしはむしろ椅子にしてもらいたいですわね。一夏さんの重みを体で受け止める……ああ、なんて気持ち良さそう……」

「黙れよ養殖マゾヒスト」

「あはうあー！」

セシリーは自分の体を抱き締めるようにしながら恍惚とした表情を浮かべた。

その上頭のネジが外れたのか、くるくるとその場で回っている。

「お……オルコットさんはどうしたの？」

「あの変態は気にしちゃ駄目だ。変態が移ったら大変だからね」

「普通移らないよね!？」

「普通じゃなければ移るんだけどね？」

普通は移らないって言うことはそう言うことだよな。普通じゃなければ移ってもなんらおかしいことはないわけだ。

「……普通じゃ……ないの？」

「変態って言うのは新しい種族として考えても問題ないと思うんだよな」

「あああああ……」

「一夏、もうやめてあげて。それにこれ以上は一夏の貞操が危ないわ」

「てっ!？」

？ ‘シャルル’はいつたい何を驚いてるんだろうな？ 貞操の危

機なんて割と多かったよ？

原因は基本的に束姉さんと鈴とちー姉さんだったけど。

実際に襲われたことは一度もないし、大丈夫だと思われる。

………と言うか、思いたい。

……さてと。それじゃあ俺は個人トーナメントに向けて銃の練習もしとくかな。

練習中、眼帯兔に絡まれる

しばらく練習をしていると、銀髪眼帯黒兔が現れた。乗っている機体はドイツのシュヴァルツエア・レーゲン。量産の目処が立たないある意味欠陥機らしい。シロよりはまだましだろうけど。

「おい」

さてと。俺は適当に練習を続けるとするか。関係ないし。

「……おい」

それが終わったら明日には整備室に行かないとな。整備は大切だし、データをかんちゃんに見せてあげたいし。やることはいっぱいだな。

「っ！おい！聞いているのか！」

……さつきからおいおい五月蠅いな。誰だよ。

「そう言えば、韓国語でキュウリの事を『オイ』って言うらしいぞ。種のことは『シー』で、日本人が美味しいって言う韓国語では『キュウリの種』ってことになるんだとさ」

「へー、一夏ってそう言う無駄知識は多いわよね」

「まあ、役に立つとは到底思えないが、面白くはある」

「だろ？　ところで、さつきからキュウリキュウリ言ってる韓国人だと思われる人は何をしたいんだらうな？」

「一夏わかってて言ってるでしょ!？」

さて？ なんの話やら。

「え？ だって呼び掛けるにしてお名前を言う気配もないし、傲岸不遜だし、俺の名前はオイじゃないし、高慢な口調がム力つくし、第一俺はあいつのこと好きじゃないしどうでもいいし話したくないし戦いたくないしあいつが俺の事を憎んでるとかどうでもいいし嫌ってる理由なんて聞く気もないし話し合う理由もないし優しく返してやる義理もないし生憎と叩かれそうになった相手に対する優しさの持ち合わせはないし最大限ぶっちゃけると面倒臭いから関わり合いにしたくない」

「そこまで言うの！？」

「まだ加減してるけど無くしてみる？」

「やめてね？」

「加減を？」

「違うからね！？ 本気を出すのをやめてってことだからね！？」

わかってるとも。

「……………貴様……………」

「貴様って誰だろうね？」

「キサマって人が居るんじゃない？ 世界のどこかに」

「いないとは言えんな。そうかそんなものを呼んでいたのか……………幻覚でも見ているのか？」

「……………どうせ見るなら一夏様に苛められる幻覚でも見たいものですわねえ……………」

「どうしよう僕には止められないよ……………」

おちよくりは人数が増えると格段にレパートリーが増えるからな。止めるのも大変だろうな。

「それにしても、こんなに訓練機が多いところで周りに確認もしないで戦闘行為をするなんてまず無いよな。馬鹿のやることだし」
「ぬぐっ……………」

「こらこら、俺の前でそんな風に悔しそうな顔をしちゃ駄目だったの。そこにつけこんで罵倒しちゃうよ？」

「……………一夏は意外とSなのだな」

「今さら気付いたの？ 一夏はあれで嫌いな相手を苛めるのが大好きよ？ あと好きな人に愛でられるのも」

「嫌いな相手と好きな相手に対する態度が全然違うのですわね……………わたくしはどちらなのでしょうが……………」

「セシリーは嫌いじゃないよ？ どっちかって言うとギリギリ好きに入るかな。」

「少し前に襲ってこなければ普通に好きにはいってただけだね。」

「……………じゃあ俺は戻って寝る。あとは好きにして」

「だったら一夏の部屋に泊まるつかしら」

「駄目だよ!?! 女の子が男と一緒になんて!?!」

「そんな風にぎゃいぎゃいと騒ぎながら俺はアリーナから去る。ギリギリと歯を軋ませる銀髪眼帯黒兎をほっぽって。」

「……………つか、名前なんだっけ？ ランサー・ポーキサイト？」

「……………違う気がすんなあ……………どうでもいいけど。」

「そう言えば、何であの子は一夏に喧嘩を売ってきたのかしら？」
「第二回モンド・グロツソの会場内で誘拐されそうになってな。その時に爆破してやったんだがそれが不味かったらしくて試合中止になったんだよ。つまり、俺のせいであー姉さんの大会二連覇が無くなったって事で恨んでるんだろ。態度から見てちー姉さんの崇拜者みたいだし」
「あれって一夏が原因だったの!? 原因不明の爆発事故って聞いてたんだけど!？」

「シャルル」が突っ込みをいれるが、原因不明でも原因はあるという事がわからない年じゃないはずなんだがな。

「ちなみに、爆発は指向性を持っている衝撃と熱をバラ撒くタイプ。起爆点から五十メートルほどが爆砕されていたってさ」

「自分のことだよな!? なんて他人事みたいな言い方をしてるの!?!」

「月に秘密基地を持ってそうな知り合いのお姉さんからもらった防犯装置だったから」

「防犯装置に爆薬つけるの!?!」

束姉さんだからね。自重を知らない束姉さんだからね。

ののちゃんはそういうことをしそうな人のことを知っているので、額に手を当てて空を仰いでいる。まあ、しょうがないね。

「たぶんそれが原因だと思うぞ? 俺は全く気にしないけど」

睡眠時間が削れることなく、さらに俺の身内(家族だけじゃなく友人含む)に被害がなければ、あつたら潰すけどな。

あと、原因は束姉さんじゃなくて普通に俺なんだけど。

練習中、眼帯兔に絡まれる（後書き）

昼頃に外伝「シャルル」編を投稿します。

外伝、予知夢？ シャルロット編

俺がシャルルと同居を始めて数日後。またもや薄ぼんやりした夢を見た。

タイミングを考えると、シャルル、なんだが、もしかしたらのほんちゃんという可能性も……

……と、思っていたけれどやっぱり、シャルル、だった。

……ただし、なぜか、シャルルはコルセットをしていない上に、一夏はベッドに横になっている。シャルルに覆い被さるようになっていたが。

「……パパ？ 無理矢理するのは犯罪だよ？」

「しねえよ!？」

俺の声を聞いて、一夏は凄まじい勢いで体を跳ね起こした。その勢いのまま俺の事を見て……肩の力を抜いた。

「……ふう……驚かせないでくれよ」

「ごめんね、パパ」

ここで固まっていた、シャルル、が再起動。

「い、一夏っ!？ ぱ、ぱ……パパってどういうこと!？」

「ん？ ああ、そう言えばシャルルは会うのは初めてだったな。名前を言うと消える可能性があるから言えないらしいけど、未来から送られてきた俺の子供だっさ」

そこで俺はペコリと頭を下げしておく。礼儀正しくするのもたまには良いだろう。

「……え？ 時間移動って………そんなのできるわけないよね！？」

「できそうな人が知り合いにいるんだよ………」

確かに束姉さんならほんとにできそうだよな。そういうの。今回違うけど。

「そうそう。気にしたって仕方がないんだからさ」

「だよな。束さんの行動を読み取るうって言うのがまず無理だし、行動から考えていることを理解するのもまず無理だよな」

うんうんと俺と一夏が頷き合う。束姉さんを理解できたら、それは確実に人間としてどこかおかしいよな。

……まあ、多少の付き合いがないとわからないことだけだ。

「……一夏は、それを信じられるの？」

「……確かに非常識だけど、束さんは時間移動くらいなら平然とやりそうだし、面白そうだからってという理由で本当にやっちゃうかならなあ……」

「いつか平行世界に行けるようになったら、まだ小さい頃のパパを拐って逆光源氏計画実行するとかなんとか言ってたよ」

「突っ込みどころが多すぎる！？ 俺はどこから突っ込みをいれればいいんだ！？」

「一夏の頭の上の虎耳からじゃないかな？」

‘シャルル’はなんだか色々と疲れたような顔をしている。まあ、気にするだけ無駄さ。

「……へえ？　今回は虎耳かぁ……シャルルにもあると思うぞ。お揃いのやつ」

「期待に沿いまして……じゃーん」

取り出してみた虎耳、ただしどこかメカニカル。

……東姉さんの獣耳を真似ようとしてるんだけど、どうしてもなんとなく機械的になっちゃうんだよなぁ……。

「よしよし、偉いぞー」

一夏に頭を撫でられる。撫でスキル高いよなぁ……はふう……

「っ！」

きゅぴんっ！と、シャルルの目が光ったと思ったら、いつの間にか俺は、シャルルの膝の上に座っていた。

「ん〜　かわいいねこの子」

「可愛いだる俺の子。前に弾にも言ったんだけど、その時には苦笑いされちまってなぁ……」

ぎゅうっつ、と抱き締められているが、苦しくなく、それでいて逃げられないように上手く押さえ込まれている。

普通だったら抜け出せないんだらうけど、俺ならいける。

……やらないけどな。面倒だし。

「はい、大事にしてね」

‘シャルル’の頭にメカニカルな虎耳を装着したあと、自分にもつける。つけた瞬間‘シャルル’の抱きつきが強くなった気もするけど、まあいいや。

「……………ふあ……………」

「ん？ 眠くなったのか？」

その問いに頷くと、一夏は俺を‘シャルル’と一緒にベッドに引き込んだ。

「え？ え、ちよっ！？ 一夏あ！？」

「気にすんなよ。なにもしないさ」

「そういう問題じゃなくって……………ああもう……………」

‘シャルル’は一夏の顔がすぐ近くにあることに驚くが、一夏はもう慣れてきたのかたいした反応を見せない。もしかしたら原作以上に鈍くなってしまったかも知れない。

もしそうなら、ごめんねのちゃん。ごめんね鈴。あとセシリーとシャルルも。

……………まあ、俺はそういうことを気にせず寝るんだけど。

……………すか……………。

目を覚ますと、俺の腕の中に夢で見た俺似の子供がいた………なんて事は無く、いつも通り一人だった。
………なんだか寂しいのは気のせいだと思いたい。一人寝ができなくなるのは困るし。

いつものように頭についていた虎耳を取って、獣耳置き場に。篝の尖った犬耳。セシリアの垂れた犬耳。鈴の灰色の猫耳。千冬姉の狼耳。弾の羊耳（角付き）。蘭の銀の子犬耳。そしてシャルルの虎耳。

………いつたいどこまで増えるんだろうな？

後ろでもぞもぞと動いている気配を感じて振り向くと、シャルルがぼんやりとした目で俺の事を見ていた。

「おはよう、シャルル」

「………いちか？」

ぼけー、としていたシャルルはその雰囲気のままに答えてくるが、だんだんと頭がはつきりとしてきたのか目の焦点が合ってきて………

「………一夏？」

「おっ」

顔を真っ赤にしたかと思うと、がばつと布団に潜り込んだ。

「おーい、シャルルー？ どうしたんだ？」

「見ないでっ！ こんな僕を見ないでええっ！！」

………いつたいなんなんだろうな？

あと、頭は隠れてるけど尻尾が出てるぞ。

書類整理、シロは俺のだ

白式の正式な使用者登録に関係している書類にサインをするという仕事で真耶先生に呼び出された。白式じゃなくてシロだって訂正しておいたけど。

一枚一枚丁寧に見ていたらかなりの時間がかかりそうだったから睡眠時間を多くとるために覚えた速読で読んでからさっさとサインを済ませる。

これで形式的にもシロは俺のISになった。元々束姉さんが作ってくれたやつだから俺のと言っても過言じゃなかったんだが。

ちなみにぷちか達にも小さなISコアがあるが、どうやらこっちは方は束姉さんの不思議技術で本格的なISのコア・ネットワークから独立したネットワーク（命名、ぷちか・ネットワーク）を構築しているらしい。

俺が獣耳を装着するとシロが一端既存のコア・ネットワークから外れ、ぷちか・ネットワークに入って状態を共有、ぷちか達の使うミニシロにシロの状態がフィードバックされてる仕組みになっているようだ。

ダメージを受けている時にはダメージのフィードバックは起こらないが、経験はしっかりと蓄積されていつているらしい。

……… いったいどんな技術を使っているんだか。知りたいような知りたくないような………。

……… やれやれ。

一応晩飯を食べに行くと、もう鈴とののちゃんと、‘シャルル’とセ

シリーはそこにいて談笑していた。初日でこの三人の前で盛大にバラしてやったが、どうやら大して気にしてないらしい。

俺の幼馴染み達は、何故か大体のやつが神経が図太い。弾や鈴が最もよく分かりやすいだろうし、最近ではのちゃんやセシリーもどんどん細かいことを気にしなくなってきた。

今のところ一番そういうことを気にするのは……蘭ちゃんか、シヤルル’のどっちかな。

……自分でバラしといてあれだけでも、性別詐称をあっさり受け入れると言うのはなかなか難しいだろうに。

しかもこの三人は、性別詐称になんとなく気付いていたとか。

理由は、のちゃんが気配、セシリーが言動、鈴が勘。珍しくセシリーが一番マトモな答えを持っていた時には驚いた。

驚きすぎてつい足の甲を踏みつけて確認してしまったほどだ。ちなみに悦に浸っている表情をしていたことから本物と判断した。‘シヤルル’のひきつったような笑顔が印象的だった。

特に山もなく谷もなく食事が終わり、今日という日も終わる。

俺は同室の‘シヤルル’に背中を向けて眠る。今日のぷちかは何ぷちか？ 白蛇ぷちか？ 黒豹ぷちか？ それともまさかの鴉ぷちか？

「ぷち束姉さんでしたー」

「……きゅっ？」

出てきたのはデフォルトでうさみみ装備のぷち束姉さんと、同じく白いうさみみのぷちか六号。きゅーきゅー鳴く姿が可愛らしかったり。

中学の頃は鈴や弾にスティックにんじんをもらってはカリカリかじっていた、アイドル的存在だった。

……それは他のぶちか達も同じだが。

……まあ、いいや。さっさと寝ちやおう。

「おおう、寝ちゃうのかい？ だったらこのかわいいぶち束姉さんをはぐはぐしながら眠ってむぐっ？」

騒いでいたぶち束姉さんを抱き寄せて黙らせる。寝るときは静かにどうぞ。

ぶちかの方はぶち束姉さんを挟むように俺と逆のところに陣取ってぶち束姉さんを抱き締めている。

ぶち束姉さんがなんだかやばい痙攣を起こし始めたような気がするけど、気のせいだろう。

……というか、もしかしていつかぶちー姉さんが登場して俺と一緒に寝たりするの？

……束姉さんだったらあり得る話だが……実行はしないで欲しいなあ…………どういふ反応をすればいいのかわからないから。

……さてと。寝ようか。

side 篠ノ之 束

ここだけの話。私と小さい私はISのセンサーのようなもので繋が

っついて、小さい私が体験したことはこっちの私にも流れてくる。

……つまり、いまの束さんはヘヴン状態！非常に奇妙で異様なテンションで篝ちゃんの専用ISの紅椿を作っているのさっ

白式……今は違うんだっただね。シロとは違って速度に特化した訳じゃあないけれど、全性能の特化に特化したIS。それが紅椿。最高速度、加減速力、反応速度はシロに僅かに劣るけど、戦場に合わせた多様性と防御性能は紅椿の方が上。

武器についてはいつくんの千の顔を持つ英雄に届くことは流石に無いけど、それでも多彩な使い方ができるようにしたし、篝ちゃんにも合うは

「ふああっ!？」

小さい私の背中をいつくんの（相対的に）太い指がなぞりあげていつて、つい声が出てしまう。小さいいつくんも小さい私に抱きついていて、背中から小さい私の首筋に顔を埋めている。

こ、これはいくら束さんと言えども頭がぱーんってなっちゃうよ! ? 溢れ出すリビドーに任せていつくんを襲っちゃうよ! ?

ちっちゃい私はちっちゃいいつくんを、私はいつくんを襲うから、しっかり役割分担だよ! いつくんハーレムだよ! 最後にはちっちゃいいつくんおつきいつくんみんなまとめて束さんのだい!

ぱらりろぱらりらへる〜

むむっ!この着信音はあ……ちーちゃんだなあっ!とっつ!

「いつもニタニタいっくんのそばに、そつと這い寄る混沌束さんだよっ!」

「……今お前、一夏に手を出してぶちかも連れて行ってハーレムだ」とか言っただけか?」

……………(汗)

「……そんなことは……ない……よ?」

「……そうか。欲しいと言っただけでもよかったんだが」

「欲しい!」

「駄目だ」

ちーちゃんがいじめるー!いっくーん!傷ついた束姉さんを慰めて

ー!ー!

のちゃんの独白、そして毒吐く

周りで騒ぐ者達を見て、私は一つ溜め息をつく。

彼女達は、一夏にいいように踊らされているに過ぎない。それはわかっている。

一夏は実は意地が悪い。こういう洒落になる範囲とならない範囲の見極めが上手く、ギリギリ洒落になるところをついてくるのがいつもの一夏の人のからかい方だ。私も昔はよくそれに振り回された。

だが、それでも一夏のことを嫌いになれないのは、一夏が一番辛いときにそこにいて、さりげなく手を貸してくれたり叱咤してくれたりするからだ。

それを恩着せがましく言うでもなく、ただそこにいてうつらうつらと船を漕ぎ、人の事をからかう。

どんなときでも変わらないその在り方は、色々なものを私に教えてくれた。

……主に諦めとかそういうった系統の事だが。

そのお陰で私は性格が少し丸くなったし、人当たりもよくなった。ストレスにも強くなったし、姉さんの奔放さを受け入れることができるようにもなった。

私は、姉さんの事が嫌いではない。むしろ好きであると言っている。あの自由奔放な社会不適合者には色々な事で迷惑を被ってきたが、それでもだ。

……そう、一夏と付き合えるだろうと頑張った剣道の試合当日に引越させられても、重要人物保護プログラムで東西問わずに引越させられて友達の一人もいない青春（今も青春だが）を送ることになってしまっても、一夏にもらった電話の電波を解析されて居場所がわかるのは困るとかいう取って付けたような理由で政府がテレビ電話を壊しても（日本政府に呪詛を送ってみたところ、当時の総理など八人が同時に盲腸で入院した）、姉さんの事は嫌いじゃない。

……よく私は姉さんの事を嫌わないでいられるな。自分で驚きだ。その分政府の方に行っているような気がしなくもないが。

確かにISがなければこんなことにはならなかっただろうが、それをわざわざ戦争に使おうとしたりする馬鹿共がいなければ問題なかったんだ。

そもそもなんだ日本は。初めのうちはISがあったのは日本だけだったのだから交渉の材料にするなりなんなりして日本有利に動かせばいいものを、アメリカに好き勝手にむしられよって。弱腰外交も時と場合を考えてやれ。まったく情けないな。あまりにも理不尽な要求は突っぱねればよからう。

……理不尽と言えば、最近IS学園に転入してきたラウラ・ボーデヴィツヒ。一夏に勝手に恨みを持ち、憧れに泥をつけたと憎み、初対面で暴力を振るおうとしたあげくに喧嘩を売ってくる、軍の特殊部隊の隊長をしているものが、あれでは駄目だろう。

別に私はボーデヴィツヒが一夏を恨むのが気に入らないわけではないし、それを止めようとも思わない。だが、それに周囲を巻き込むのはいただけない。

IS訓練中にやって来たボーデヴィツヒは、恐らくあのまま一夏が去って行ったら容赦なく肩のレールカノンを撃ち込んでいただろう。

……周囲の事を考えることもなく。

一夏とボーデヴィツヒの問題に首を突っ込むことはしたくないが、こちらに被害が来るならば首を突っ込むしかないだろうに。

……やれやれ。困ったものだな。

ちなみに、デュノアはともかく、私と鈴は一夏の心配はまったくしていない。

理由と言えるかどうかはわからないが、戦略や戦術はともかくとして、戦闘で一夏が負ける姿が想像できない。

これにはセシリアも同意していて、どう想像しても一夏がボーデヴィツヒをボロボロにしている画面に繋がったとか。

その想像の中には、一夏は生身でボーデヴィツヒはIS使用と言うものもあつたのだが、セシリアの中ではそれでも一夏が勝ってみせたいらしい。

……笑い飛ばせないのが一夏の恐ろしいところだ。何らかの方法で相手を落としてみせそうで、なかなか怖い。

「……できそうよね」

「……違和感が欠片も無いな」

「二人ともおかしいからね!? 生身の人間がISに勝てるわけないでしょ!？」

私達も、一夏が普通だったら諸手を上げてその言葉に賛同しただろうが、生憎と私達は一夏の非常識さを知ってしまっているし、理解

もしている。

私と鈴はデュノアの肩に手を置いて、言う。

「「ようこそ、非常識な一夏のそばに」「」

デュノアは頭を抱えた。

衝突寸前、鈴・セシリー vs 眼帯兎

side 凰 鈴音

放課後の第三アリーナでセシリアと向き合う。いくら先生が相手とはいえ二対一で負けてしまったあたしたちは、特訓とは呼べない小技の練習中。

急激な戦闘力の増加は無いけれど、手札が増えた分だけとれる手段が多くなった。

とは言っても、あたしのは衝撃砲の効率運用と、あとは一夏がやってた衝撃砲の曲げ撃ちの練習くらいなもの。

龍砲は一夏のシロの衝撃砲みたいに一部の出力を変えることはできないし、後ろから拳による推進力が加わってない分初速が遅い。それに加えて一発撃つ度に砲身を新しく作らないと移動した相手を追えないし、出力も角度も威力も変えることもできないから色々と面倒臭い。

……けれど、逆に考えれば自由度は少しだけ増す。

例えば、砲身が固定されていても、角度や威力が固定されていても、やろうとすれば連射はできるし、口径を小さく作れば当たりになくなるかわりに威力は倍率ドン！さらに倍！になるし、小さくなった分貫通力が増して相手が吹き飛ばなくなったところに何発か叩き込んでやれるようになった。

これも一つの成長ね。やっぱりそばに一夏がいるとやる気になるわ。

だって一夏は、あたしの目標だから。今は追い付けないほど遠くに
いるけど、いつか必ず追い付いてやるんだから！

あと、曲げ撃ちの方は少しの工夫である程度の結果を得た。セシリアも何か新しくできるようになったみたい。

「正確には、確認しただけですわ」

「あつそ。何でもいいわよ」

一夏と戦ってMの扉を開いたセシリアは、同時に色々なものを見付けていたらしい。

今回の特訓（？）で、それを可能なだけ拾い集めて来たんだとか。

……一夏って、人を変える天才よね……………いや、あれは天才と言うよりも、天性の方が合ってるかもしれない。多分本人に自覚はないし。

「……………それでは、最後に模擬戦でもいかがですか？」

「あ、それいいわね。お互い本番に向けて、手札を隠しながらいい勝負をしましょ？」

あたしとセシリアは互いに笑顔でメインウエポンを呼び出して、構える。

「……………なんだか、すっごい面倒なことが起きる気がするんだけど」

「……………奇遇ですわね。ちょうどわたくしもそう思っていたところでしたよ」

例えば……………横から飛んでくる砲弾とかね！

あたしは口径を小さくして威力を上げた龍砲で。セシリアは呼び出

したばかりの青いライフルでその砲弾を撃ち落とす。

そしてその砲弾が飛んできた方に目を向けると、そこには一夏に喧嘩を売ろうとしたあの……名前なんだっけ？ キュウリキュウリ言ってるのは覚えてるんだけど……。

……そうだ、機体情報を参照すればいいじゃない。IS学園に所属してるんだったら、名前は登録してあるでしょ。

えーっと……機体名が『シュヴァルツエア・レーゲン』で、操縦者はラウラ・ボーデヴィツヒか。

「……いきなり何用ですか？ ドイツの軍では挨拶にレールカノンを撃ち込めという作法でもあるのでしょうか？ ずいぶん野蛮な国ですわね」

「しょうがないわよドイツだもの。きつとあれの頭の中身はドイツが最強と言われていた頃で止まってるのよ。いいから無視して模擬戦しましょ」

……そうは言ったけれど、実はあたしは無視する気もセシリアと模擬戦を続ける気も残っていなかった。

初めに向こうから攻撃させることはクリア。実のところこれが戦闘前の最終目的だったので、いくらでも攻撃を返してやることができるのだけれど……まだ周りには人がいるから、逃がさないよ。

「……中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

「はいはい、保健室はあちらですよ。付き添いは必要ありますか？」
「無人のISやスペックしか載ってない画面の方が本物より強く見えるって、確実に頭が逝っちゃってるわよね。精々お大事に」

あたしとセシリアを挑発しているのだろうけど、あたしたち……少なくともあたしは一夏のあの挑発を知っているから大して怒りを感じない。

全てを見下しているような目も、傲慢な口調も、あたしたちには致命的な油断にしか見えない。

『セシリア。あんた多分偏向射撃できるわね？』

『あら、バれてしまいましたわ　　鈴さんこそ、色々できるようになっているでしょう？』

目の前で向き合っているラウラ・ボーデヴィツヒを挑発しながらも、あたしたちは大まかな戦法を練っていく。

……それにしても、セシリアはMじゃなかったの？　よくこうして舌が回るわね。あたしが言えることじゃないけど。

『MとSは表裏一体なのですわ』

『あつそ』

……元々あたしは沸点が高くない。一夏と一緒にいてずいぶんと怒りっぽくは無くなったけど、その分一度怒ると怖いと言われるようになった。

一夏と別れたあとの中国で、嫌だと言っているのに何度も何度も食事に誘ってくる馬鹿を相手に一度キレてから、あたしの評価がキレると龍より恐ろしいというものになった辺りからもその事が伺える。

……あたしが龍より怖かったら、千冬さんなんていったい何よ？

鬼神？

……ああ、似合ってるかも。きっと鬼子母神ね。子供と言うか
大事な弟は一人だけだけど。

まあなんにしろ、あたしは一夏を馬鹿にしたこの糞女　　っと、
下品だったわね。これを許す気にはなれない。

例え一夏がどうとも思ってたなくとも、あたしは嫌だ。

『あなた後衛、あたし前衛。前と同じに見せて、偏向射撃とあたし
の衝撃砲と双天牙月で封殺するわよ』

『あちらにはワイヤーとプラズマエッジ、そしてAICがあります
わよ？』

『わかってるわ。情報は武器だもの。……援護よろしく』

『承りましたわ』

……さて、始めましょうか。

一夏みたいに上手くはできないけれど、言質はしっかり取った。

『加減はいらん』に始まり、『二人で来たらどうだ』、『所詮は数
しか能の無い国』、『古いだけが取り柄の国』、『下らん種馬を取
り合うメスに負けるわけがない』。

……最後の千冬さんにも聞かせることにしましょう。ぼろく
そにしてあげる予定ではあるけれど、もし負けたときでも復讐はで
きるように。

……くすくすくすくすくすくすくすくす……

激戦、鈴・セシリー vs 眼帯兔

side 凰 鈴音

戦闘開始。まずはあたしが口径を小さくして貫通力と速度を上げた衝撃砲を撃ち込む。セシリアはその間にビットを自分のすぐ近くに二機だけ出した。後はまだ腰のところにくつついている。

「ふっ……無駄だ」

そんなことを言いながらあの女は右手を前に出す。恐らくあれがAICの予備動作なんだろう。

別にあれがなくともできるけど、あつた方がやりやすいんだと思う。

まあ、消される前提で撃った衝撃砲でそれだけのことがわかったんだから上出来ね。

相手は動かないようだから、砲身はそのまま衝撃砲を連射する。その時、後ろからセシリアがビットとライフルからレーザーを、ギリギリ当たるラインであの女に撃ち込んだ。

「ちっ！」

あの女は舌打ちをしながらAICを解除して移動する。やっぱりシロの空間固定とは違って光学兵器は防げないみたいね。それに、止めている間は動きと反応が鈍かったし、かなり集中が必要なんだろう。

けれどあたしの砲身リユース式衝撃砲の連射速度を見誤っていたらしく、その装甲がいくつか抉り飛ばされた。

そして、セシリアの偏向射撃で鋭角に折れ曲がったレーザーがISごとあの女を貫いた。

その隙にあたしは瞬時加速であの女に接近し、二つに分けた双天牙月を同時に叩き付ける。

それはあの女の手首のパーツから出たプラズマエッジに阻まれたけれど、私には関係無い。

あたしのやるべきことは、こいつの動きを抑えて進行方向の予想を容易にすること。痛手を与えるのはセシリアが基本だ。

「舐めるなっ！」

「舐めてんのはそっちでしょうが！」

射出されたワイヤーの根元、両肩の四つと腰の二つに口径を小さく砲身を短くして即射性と弾速を上げ、命中精度を少し落とした衝撃砲を打ち込む。

威力は無くてもいい。気をそらせれば、横から飛んできたセシリアのレーザーが、ワイヤーを操る集中力を掻き乱してくれる。

そこで双天牙月の峰に衝撃砲を撃ち込み、さらに圧力を加えてあたしからも精神を掻き乱す。ワイヤーに少し削られたけれど、シールドエネルギーはまだ余裕がある。

「後ろ見なくていいのかしらっ！」

その瞬間に背中に突き刺さる二本の光条。セシリアのすぐそばに待

機していたビットは撃っていないのに、なぜか。
そんな問いが頭のなかを回っているだろうこの女に、囁くように種
明かしをする。

「あんたってほんとに馬鹿ね。射撃型ビットは二つじゃなくて四つ
あるのよ?」

なんの事はない。この女があたしとセシリアの近くにあるビットだ
けに集中している間に、残った二つのビットを後ろに回り込ませて
いただけ。

「馬鹿な! 誤射が恐ろしくないのか!？」

「当たる前に折れ曲がるもの。何度も見たのにわざわざそんなこと
説明させないでよね」

心底馬鹿にしたように言っただけ、この女は屈辱に顔を歪ませる。
いつの間にか眼帯が外れて金色の目が見えている。

……ああ、そう言えば衝撃砲を高速連射したときに落ちてたわね。
どうでもいいけど。

その時から妙に反応がよくなったけれど、どうもこの女は言葉を使
った騙し合いには弱いらしい。

「ほらまた後ろ!」

そういつてやると焦ったような顔で何も無い背後を睨む。

その隙にあたしは双天牙月の峰に面積広めの衝撃砲を撃ち込み、斬
撃の後に打撃を与えて吹き飛ばす。

体制を崩した所にビットから撃たれた四本のレーザーが襲いかかり、

それを避けようとしている間にあたしが近付く。
肩のカノン砲を撃たれたら、セシリアがライフルで撃ち落とす。
そしてもう一度双天牙月を振りかぶって、その体勢のまま瞬時加速
キック。そして双天牙月を振り下ろして、あの女をアリーナの地面
に抑えつける。

プラズマエッジを出す両手は抑えた。ワイヤーを出す両肩と腰の搭
載部分を圧縮衝撃砲で破損させた。AICはこの場ではたいした意
味はない。なぜなら。

「この距離だったら外さないし、あなたの後ろは地面だから吹き飛
ぶことも無いわ　　何発耐えられるかしらね？」

……なんとなく、この女からさあつと血の気が引いたような音が聞
こえた気がした。

「発射」

その単語を皮切りに、アリーナに絶え間なく轟音が響き渡った。

side セシリア・オルコット

鈴さんが一夏さんに手を上げた雌ブ……女に覆い被さり、衝撃砲を
気持ち悪いくらいの速度で連射し始めたところで、わたくしは少し
気を抜いた。

武器を封じられ、動きを止められ、衝撃砲の雨霰を浴びている状況

を引っくり返すなど、織斑先生かあるいは一夏さんくらいじゃないと無理だろうと思えたから。

当然まだ何らかの手を残している可能性があるので警戒はしていませんが、それもほとんど形だけのもの。実態はもう終わったような気分ですわ。

……………それにしても、言うだけあって強かったですわね。一対一ではまず勝てないでしょうし、即興のコンビネーションで勝てたのは奇跡かもしれません。

……………鈴さんとわたくしのISの相性は中々にいいらしい。また今度にタッグマッチでもあれば、組んでみたいものですわ。

そこまで考えた次の瞬間に、ほとんど決まっていた戦況が一気に様変わりした。

そこに居たのは、全身装甲の黒いIS。その手にあるのは、この世界で現在もつとも有名な剣。

色は黒いが、その姿はまさしく現役時代の

「千冬さん!?!」

「織斑先生!?!」

わたくし達の言葉には反応せず、黒いISは一瞬でわたくし達に接近し、手に持った近接ブレード　雪片を振り下ろした。

観戦、そして乱入

実は、セシリーが銀髪眼帯黒兎の背後に二機のビットを回り込ませて撃ち抜いたあたりから観戦していた。なんかあの二人、相性がいいな。

それに、つい最近真耶先生と戦っていい勝負をした時よりも強く……いや、上手くなってるし、セシリーなんかは五巻だったか六巻だったかまで使えなかったはずの偏向射撃ができるようになっていた。

……この短時間に、あの二人にいったい何があったのやら。知りたいうような、知りたくないような……。

だが、観戦程度の気持ちでこの模擬戦を見ていられたのは、鈴が衝撃砲でラッシュを始めて五秒程度までだった。

突然銀髪眼帯黒兎のISから馬鹿みたいな電撃が放たれ、鈴はISごと吹き飛ばされた。

そして状況の変化は続き、黒兎のISがぐにやぐにやとその形を変えていく。

………そういやそんなのもあったなあ……。

「い、一夏っ！あれってどう言うことっ!？」

「何で俺に聞く？俺は何でも知ってるって訳じゃあないぞ？」

第一、あれの名前は知らないしな。知っていても覚えてなさそうだ。

しばらくぐにやぐにやとっていた黒兎のISだったが、衝撃砲を連続して食らっていたためにできたクレーターの真ん中でふわりと浮

き上がり、両足を地につけると同時に急速にその形を整えていった。それは黒い、全身装甲のISだった。束姉さんが前に送ってきた奴とは違ってごつくはなかったが、そのシルエツトは見覚えがある。

「……………あいつ、自殺志願者だったのか」
「誰が!? って言うか怖いよー夏!」

だってそうだろ。束姉さんの逆鱗に好んで触れたがるなんて、死にたがりか自殺志願者か狂人か頭がぱーんしてるかのどれかだろ。もしくはただの無知。

とりあえず俺は怖いから絶対に束姉さんの逆鱗には触れたくないね。とりあえず俺は怖いから絶対に束姉さんの逆鱗には触れたくないね。とりあえず俺は怖いから絶対に束姉さんの逆鱗には触れたくないね。

「なんでわざわざ三回も言ったの!?!」
「重要なことだから」

少なくとも俺にとっては。

……………ついでに言っとくと、口には出してないぞ。思ったけど。

そう思っている間に、自殺志願者R（Lかもしれないけど、それこそ知ったことじゃない）の乗ったISが高速でセシリーに接近し、雪片もどきを振り下ろす。

それが当たる寸前に鈴が割り込みをかけるが、どうやらスペック自体は向こうの方が数段上らしく、見事に弾かれていた。

高速で展開された衝撃砲の砲身も出来上がった頃にはその先に目標がないということが多々あるようだ。

それでも食らいついていける鈴とセシリーに、すごいなあと本気で思う。

……っと、いくらなんでもあれはマズイな。データだけで動いているとはいえ、ちー姉さんだし。

……息を吸って、吐いて、もう一度吸って……周囲の視線が全て鈴とセシリーの方に向いているのを確認し、

「IS発動、シルバーカーテン」

その場で電子光学迷彩をかけて不可視になり、

「IS発動、ディープダイバー」

アリーナのステージと観客席を分けているシールドをすり抜けた。

物理的なものがすり抜けるんだっただけだと思っていたが、やっぱりできたな。うまく応用すればうちのマダラみたいな真似ができそうだな。

生体はすり抜けれない代わりに無機物だったら選択してすり抜けるみたいだし、もう少し便利そうだけど。

いきなりこのことで反応が遅れていた教師陣から、ようやく状況がレベルDだの生徒は避難しろだのと言っているが……まあ、鈴とセシリーは友人だし、ちょっと無視して助けるか。

……それにしても、マジで鈴とセシリー凄いわ。データとはいえあのちー姉さんの攻撃を耐えてるんだから。零落白夜が無いってのも大きいのもかもしれないが、それでもな。

とりあえず、そろそろシールドエネルギーの残量がやばげな二人から引き離すかね。

side 鳳 鈴音

つたくもつ！なによこいつはっ！

いきなり動きの癖や戦法までをがらつと変えたこの女に、明らかに妙な方法で形を変えたIS。色々と聞きたいことはあるけれど、落とそうとしても全然落ちてくれない。

隙はできないし、誘いにも乗ってこない。セシリアがやった背後からの射撃も見事に回避して見せだし、不可視の高速展開型衝撃砲も空振った。攻撃方法はブレード一本で切りつけてくる、高機動・高攻撃力型。ただ、変わる前に相当痛め付けたからシールドエネルギーは限界のはずで、あと一発ぶちこめば終わると思う。

『その一発が遠いですわね……』
『全くよ。なんて理不尽な。ブレード一本でこんな真似ができそう
な人なんて、一夏と』

そこまで言っつてようやく気付く。

一夏が使う雪片式型と、ほぼ同型の近接ブレード。

操縦者と色こそ違うけど、ISに関わる者なら誰もが一度は見たことがあると思われる機体。

高機動型で、高威力かつ高速の剣使い。

『……姿形だけじゃなくて、本当に千冬さんみたいな戦い方をするのね』

……でも、やっぱりこれは違うと思う。

だって本当の千冬さんなら、あたしたちがどれだけ頑張っても五分あれば三回は落とせるはずだし、それ以前に剣が見えるわけがない。今だって双天牙月と打ち合っているけれど、本物の千冬さんなら打ち合うことなんてできないしね。

……けど、やっぱりそんなになっても千冬さん。

一夏曰く、

「ちー姉さんだったら多分『霸王炎熱轟竜咆哮爆裂閃光魔神斬空大鉄拳』で山の一つくらいは吹き飛ばせそうだよね」

とまで言われる千冬さんだ。あたしたちを蹴散らすなんて造作もないことだろうし。

……一夏の言ったあれのことは気にしない。どうせ確実にろくでもないことだし。

ガギンツ！と双天牙月が横からの攻撃で弾かれ、小さく輝が入る。流れた体勢を整えようとするも、あの女の剣の方が早い。

セシリアのレーザーは確かに早いけど、発射までにあるタイムラグが大きすぎるので、今から撃つても間に合わない。

衝撃砲も間に合わないし、もう片方の双天牙月も弾かれてガードに

間に合いそうにない。

……………絶対痛いわよね。あれ。

あたしの衝撃砲と同等くらいの攻撃なんて、食らったら確実に絶対防御は抜けてくるだろう。

ISの操縦者生命活動補助型があるから死にはしないと思うけど、脱け殻とはいえ千冬さんが相手だから油断はできない。

半ば諦めかけていたけど、それでもやっぱり……………

(……………負けたくないなあ……………)

あの女の刀があたしに振り下ろされて、世界がゆっくりになる。最後まで目は閉じない。諦めたくないから。負けたくないから。

……………だから、この光景はきつと神様からのご褒美なんだと思う。

一次移行を終わらせて真っ白になったシロを駆り、真剣な顔の一夏があたしを護ってくれた。

まあ、神様なんて信じちゃいないんだけどね。

原作崩壊？ だから今更だって

鈴に斬りかかる偽ちー姉さん型ISの刃を雪片式型で受け止める。威力だけはしつかりあるみたいで、ぎしりとシロの腕の関節が鳴く。偽ちー姉さんはすぐさま剣を戻して縦に振るが、それも受け止める。同時に左の衝撃砲で貫通型を撃ち込んでやるが、逃げられた。

速いな、流石データそのもの。人間で言う思考時間によるタイムラグがほとんどない。人間でもISに乗っている間はそこのパソコンより演算能力がつかはずなんだが、それでも僅かにあるそれがない。

「よう、鈴。なんだ手こずってるみたいじゃないか。白馬の王子様をただ待ってるだけなんて、鈴らしくないな？」

「五月蠅いわね。ちよつと寝ぼけてただけ……よっ！」

そう言いながら鈴は衝撃砲を撃つ。それは瞬時加速で避けられるが、距離はできた。

「それじゃあ鈴。セシリーもだけど、そろそろシールドエネルギーが不味いだろ。巻き込まない自信はないから退がっててくれないか？」

「嘘つきなさい。普通に『ちー姉さんが相手だと心配だから』って言いなさいよ。わざわざ自分のことを小さく言っていないでさあ」

「そうですね。わたくし達だって彼我の戦力差は承知しています。

一夏さんがわたくし達を巻き込むようなことがないと言っことも」

……む。そうか……。

「じゃあ、後でオウムぶちかに『大好き』って言葉を覚えさせてから抱かせてあげるから退いて」

「退くわよセシリア。ここは一夏に任せましょう」

「そうですね。そういたしましょう」

最初からこう言えばよかったかもな。と思うくらいに簡単に鈴とセシリアは退いてくれた。

……さてと。俺は俺で、鬼退治'とでも洒落込むかな。

……あの黒いISを鬼と考えると、囚われのお姫様みたいだよな。あの銀髪黒兎。名前は忘れた。どうせ言おうとしても相当酷い間違いしか出ないと思うし。

例えば、ランバダ・ボーロキーレとか。

……ほろきれ襪褌布？ 流石にこれは無い。ランドクルーザー・ボロボロと同じくらい無い。

まあ、いいか。とりあえずさつさと終わらそう。

俺は零落白夜を発動し、高速で接近。ギリギリ反応はしたようだが、空間固定で偽雪片と腕を被ってやれば逃げられない。

零落白夜が使えればまだわからないが、使えないみたいだし。

「……さつさと起きろ、馬鹿兎」

俺は雪片式型を振り下ろし、黒い'クー'に似たISを縦に真つ二つにした。

絶対防御の恩恵か何かは知らないが、乗っていた銀髪黒兎はたいした傷は負っていないらしい。

ここでもう一発やったら死んじゃうだろうから、優しい俺はそんな

ことをしないで黒兎（ISと言う皮剥ぎ済み）を静かに受け止めてやる。

今回は大して疲れなかったけど………寝たいことにはかわりない。さっさと引き渡して保健室でも寮の自室でもいいから布団に入ろう。

……そして、こんなものを載せた馬鹿にはお仕置きだ。死人はでないから安心しな？ 代わりに珍しい病気が流行ると思うけど。

side ラウラ・ボーデヴィツヒ

その二人に手を出したのは、単なる挑発と憂さ晴らしのためだった。教官の弟、織斑一夏と戦うための下準備でもあったが、大半はそちらの理由だったと今では思う。

織斑一夏は、必要最低限の時間しかISに乗らないらしい。代表を決める決闘でも、週に一度のIS搭乗日でもできるだけ乗らないようにして、そして空いた時間は情眠を貪る。

それらの情報からただ学年トーナメントで当たっただけではすぐに棄権されると思ったため、棄権しないようにと織斑一夏と仲の良い二人がアリーナに来たところで挑発した。

織斑一夏は友人を馬鹿にされると本気になると聞いたため、ボロボロになるまで叩き潰してやれば棄権することも、戦いを拒否することも無くなるだろうと予想したからだ。

その目論見は当たった。しかし、それも途中まで。

前のデータには無かった、甲龍の衝撃砲の速射と連射。不意を打つための話術と詐術。

ブルー・ティアーズの偏向射撃と、隙を付く巧みさ。

一人一人ならば容易く撃破することもできただろうそれに、私は一方的に追い詰められた。

私は、こんなところで負けるわけにはいかない。

私の憧れる教官を、その存在だけで変えてしまう男。

そんなことを認めるわけがない。そんなものの存在を、認められるわけがない。

だから、私はその男を敗北させ、地に伏せさせると決めたのだ。あの男を、完膚無きまでに叩き伏せると。

そのために、こんなところで負けるわけにはいかない。あの男に触れることすらできずに敗北するなど、あつてはならない。

そこで声が聞こえ、私はその声に、一も二もなく飛び付いた。

力があり、私の全てを払うことでそれを手に入れられるなら、こんな私など何から何までくれてやる！

だから、私に力をよこせ。

比類無き、唯一絶対の最強の力を

私によこせ！！

私は力を手に入れた。先程までは一方的に加えられていた攻撃を全て避け、近接ブレード一本である雌共を一方的に攻撃している。

私は力を得た。圧倒的な、力を。

……しかし、その力すらも目の前の男には届かなかった。

………何故だ。私はあの人の……最強である教官の力を得たはずだ！それなのに、なぜ貴様は遥かな高みに居る！！

『ちー姉さんの力を手に入れた？ アホかお前。ちー姉さん以外にちー姉さんと全く同じ力が持てるわけないだろ。それ以前にあれがちー姉さんの力？ あんな空っぽな力がちー姉さんの物と同じな訳ないだろ』

………ならば、私はどうすればあの人のようになれる！？ 何をすればあの高みに到達できる！

『………馬鹿なんだなお前。自分が新しい自分になることはできても、全く違う他人になれるわけが無いだろ』

………私は、あの人のようにはなれないと言っのか………巫山戯るな！

『五月蠅い奴だな。全く同じになれないっただけだ。お前そのままでちー姉さんの高みに行けないとは言ってないぞ』

………ならば答える。私はどうすればその高みに登り詰めることができる！？

私の悲壮感すら漂う問いに、奴は一瞬も迷うことなく答えた。

『知るか。自分で考える』

それに私が返す前に、その男は続けて言う。

『自分が他人になれないように、他人も自分にはなれないんだから、そんなことを聞いたところで無駄だよ。自分で考えてこそ意味があるし、例えそれが間違っただけでもそれは糧になるしな』

その言葉は奇妙なほど現実味に溢れていて、私はつい聞いてしまった。

お前も、そうして強くなったのか？

『……精神的には、その通りだな。精神は肉体に直結するし』

その言葉に、この男の周りに居る者達がなぜ強いのが理解できたような気がした。

あれは、意思の力だったのだろう。

私のような、依存と嫉妬から来る力ではなく、ただ純粹に思いを通したいという意味の。

そこに到達するまでに、恐らく誰もが迷ってきたのだろう。

高みに登るための道が間違っているかもしれない、届かないところで切れてしまっているかもしれないといった不安を乗り越えながら、ずっと進み続けたのだろう。

間違ってしまった時や転んでしまった時には、周りにいる誰かと力

を合わせて。

この男のために。

『……まあ、そんなわけだ。登りたいんだつたら勝手に登れ。俺はお前のことが大嫌いだが、頑張っている奴を見るのは……まあ、嫌いじゃないからな』

そう言い残して、その男は消えた。

……ああ、ああ、理解した。あの男があれほどならしないのに、あの女達が呆れた顔をするだけで離れようとはしない理由を。

あの男は、人を垂らし込むのが上手いんだ。

気が付いたら近くに居て、気が付いたら心の一部に住み着いていて、気が付いたらその割合をどんどん大きくしている、そんなやつなんだ。

……そして、どうやら私も手遅れらしい。

………全く。あいつは実に厄介な男だ。

織斑、一夏

………本当に、厄介な男だ。

とりあえず電話を掛ける。お相手はさっきの戦いを見ていただろう束姉さんだ。

「もしもし束姉さん？　ちょっとゾナハラせたい奴がいるんだけど、手助けしてくれない？」

『いいよー』

即OKが出た。と言うか束姉さんも凄まじく怒っているらしい。

「ちー姉さんが怒るし、殺人は無しね」

『え？　やだなあいつくん。この束さんがそんなに簡単に死なんていう楽な道に逃げさせてあげるとでも思うの？』

「そんなわけないでしょ。束姉さんがそんなに甘いわけがない。そして俺もそんなことをさせてやるほど優しくない」

『だよね！』

なんだか束姉さんのテンションが高い。理由は何となくわかるけど。

『それじゃあ束姉さん情報を聞くんだいつくん！ちーちゃんの胃の健康はいつくんの手際にかかってるよ？』

「全力でやらざるを得ない」

元々そのつもりだったけど。

細かな金属片に水滴をつけた霧が、部屋の中に現れる。これで学園のカメラは潰れた。盗聴機は率先して潰したため、これでもう俺の

行動を知ることではできなくなった。
そんな中でも何故か束姉さんと俺を繋ぐ電波はそのまま繋がりを保っている。

「それで、場所は？」

『ドイツだよ？』

「それは知ってるよ？」

『適当にドイツ全土にばらまいちゃえばいいと思うんだけど』

「ばれないと思うけど、ばれたらちー姉さんに怒られそうだから、やだ」

『……仕方無いなあいつくんは』

そして束姉さんは詳しく場所を教えてくれた。よし潰すぞー。

ちなみに、ゾナ八虫は戦闘機やミサイルを分解して無力化することができたりする。

さあさあいこうか。そこが地下ならドリルで穴を開けて侵入するのもいいし、吸気口からの侵入もいい。フィルターなんて無いも同然だしな。

とりあえず、三千人分も用意しておけばいいかね。

来たれ。千の顔を持つ英雄。ゾナ八虫【アポリオン】。

当然監視用のゾナ八虫も用意している。監視と確認は重要だよな。

目標、ドイツの秘密研究所。そこにいる人間全てをゾナ八に罹患させる。

ただし、一人たりとも殺すな。ISがあれば持ってこい。束姉さんに渡して改造してもらおうから。

空中投影型ディスプレイで現在のドイツのとある場所の状況を見ている。

『ぜひ、ぜひ、ぜひ、ぜひ……………』

『じ…………ぜひ、ぜひ…………ころ、じ、て…………ぜひ、ぜひ、ぜひ……………』

喉をおさえ、白目をむいたり瞳孔が半開きに固定されたままぜひぜひという苦しげな呼吸を繰り返している白衣の研究者達が、男1、女6くらいの割合で床に倒れて悶えている。

ゾナ八病に発症し、進行がレベル3まで行くと代謝が下がり、体の筋肉も石のようになって飲まず食わずでも死ねなくなる。怖い怖い。

このまま誰にも気付かれず、何らかの原因でその研究施設が吹き飛ばされたりしない限りは、この研究者達は生き続けるのだろう。

もしかしたらゾナ八病の原因解明のために解剖されたりもするかもしれないが、その時はゾナ八虫一匹一匹が見えないように飛び出して解剖している相手をゾナ八病にすることだろう。

それが機械なら分解し、操作しているものや近くに居るものをゾナ八に罹患させる。

……………流石にISを装備されてたら無理だと思うが、装備していないうちに飛び込めば平気だろう。最悪ランブルデトネーターで爆破するし。

「これでいいかな」

『いいんじゃないかな?』

「……………束姉さん。またハッキングして監視カメラの映像をジャック

したんですか？」

『そうだけど、なにか問題あった？』

……無いけども。

どうせやるんだつたらIS管理委員会には流れないようにお願いします。あとついでにデータの全消去も。

何となくその辺りからこっちの方に悪意と一緒に向けられそうなのがするし。

『いいよ？ ただ、ちょっとぶちーちゃん作ってみたから、今度実験よろしくー』

「あいさー了解。ちー姉さんの前に出しても平気？」

『それをやっちやうとちーちゃんと感覚がリンクしてなでなでするとちーちゃんがへヴン状態になっちやうっていつくんの貞操が危なくなっちやうから、やめた方がいいかも？』

「……視覚リンクとかは？」

『もちろんあるよ？』

「……東姉さん、それを使って覗きとかしてませんよね？」

……東姉さんから返事が来ない。どうやらやっていたようだ。

「……ちー姉さんに通報します」

『それはやめてえ〜っ！ちーちゃんのちーちゃんクローは痛いんだよ！？ 頭蓋骨が、ギリギリギリ……』っていう生優しい音じゃなくって、ギチギチギチ……、っていう致命的な音と痛みがするんだよ！？』

「じゃあ俺のでこぴんで」

『……いつくんでこぴんって、確か小学生の頃に誰かを相手にしてハメートルくらい飛ばしたんじゃないかなかったっけ……？』

「それはちゃんと加減してます。鼻から上だけが消し飛ぶとかそん

なことにはなつてないでしょ?」

『でこぴん怖いつ!? いったんのでこぴんすっごく怖いつ!?』

束姉さんの頭が吹き飛んじゃうよっ!?!?』

「加減はします。ダムダム弾の直撃くらいまで」

『死んじゃうつてば!?!?』

「じゃあこんやくを叩き付けたくらい」

『……あれ? 一気に弱くなった?』

「ただし、上空三千キロメートルくらいから三千キログラムくらいを時速三千キロくらいで」

『やっぱり死んじゃう!?!?』

束姉さんはこうやってノリノリで返してくれるから良いね。ちー姉さんだと止まっちゃうし、からかえないんだよね。

最近は‘シャルル’がおんなじ感じでからかえるけど。

「まあ、それじゃあお元気で。きっとそっちにちー姉さんから電話が行くと思いますけど」

『うん! いったんも元気でね』

そうして俺は電話を切り、チャフを下がらせる。

……ふう。一仕事したし……寝ようかな。

……すか……。

予想外の行動、予想外の言動

鈴とセシリーが銀髪黒兎を苛め、俺が張つ倒し、ドイツを相手に一仕事を終わらせた次の日のこと。銀髪眼帯黒兎は俺の席の前に来て、こう言った。

「私はお前がいなくてこの世界に意味を見出せなくなった！責任をとってずっと私と一緒に居ろ！」

そして俺の頭を抱え込み、額にキスをしてから自分の席へと戻っていった。

…………… 徐々に本気で困惑したわ。あと‘シャルル’が黒い気配を醸し出してるのがちょっと怖い。

…………… 何がどうなってるようになったのやら。

side ラウラ・ボーデヴィッツ

予備のパーツをフルに使って組み直されたシュヴァルツエア・レーゲンを使い、本国にいるシュヴァルツエ・ハーゼの副隊長、クラリツサ・ハルフォーフにプライベート・チャンネルを繋ぐ。

クラリツサは本国では私に次ぐ好成績を叩き出している者でもあるが、今連絡をとろうとしている理由はそれだけではない。

クラリツサは確か隊員達に慕われていて、よく悩みを聞いてやっていたはずだ。

当時の私は下らないことだと切り捨てていたが、その事を頭の片隅に止めておいてよかったと、今では思う。

『 受諾。クラリツサ・ハルフォーフ大尉です』

「ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ……突然だが、一つ質問がある」
『はっ！なんなりと』

そう答えたクラリツサに、私は勢いをつけるように深呼吸をしてから本題を切り出す。

本題、それはすなわち

「 男の気を引くにはどうしたらいい？」

そう、織斑一夏のことだ。

しかし、なぜかクラリツサからは返答が来ない。まるで凍りついてしまったかのようだ。

「 ……クラリツサ？ クラリツサ・ハルフォーフ大尉！聞こえているか！？」

『は、あ、え、えええええええっ！！？』

いきなり爆発したような声を上げたクラリツサは、ただただ驚いているようだった。

しばらくの間ひたすら驚き続けていたクラリツサを抑えると、クラ

リッサはなぜか私に質問を繰り返してきた。

なぜそのようなことを聞くのかと言う問いには、正直に『気になる男ができたからだ』と答え、それが誰かと言う問いにも正直に『織斑教官の弟で、織斑一夏と言う男だ』と言った。

確かに相手のことを知らなければ助言などできはしないだろうし、この質問も外的外れなものではないな。

『……隊長は、その男の事を好いているのですか？』

「ああ、惚れている。もし一夏がこの瞬間世界から姿を消したら、世界の九割以上が色を無くしてしまうだろうと言う予想ができるほどにな」

……ただ、それが『女』としての感情か、それとも『今までの何でもなかったラウラ・ボーデヴィツヒ』を『人間であるラウラ・ボーデヴィツヒ』として生まれ変わらせてくれたという『子供』としての感情かの区別はつかないが。

「……今まで私は男とまともに話したこともないからな。隊員の話をよく聞いているクラリツサに話を聞こうと思ったのだ」

『……了解しました。このクラリツサ・ハルフォーフ、ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長のサポートを勤めさせていただきます』

「よろしく頼む」

そこからは早いもので、クラリツサは次々に質問をし、私がそれに答えて作戦を練る。

「惚れていると言ったが、正直に言ってこれが女としての思いなのかわからないのだ。それよりも今は『勝ちたい』という思いが強くてな……」

『なるほど……（恐らく隊長はその相手を好敵手として見ていると同時に、男として意識し始めているのだろう……ならば、私はその背を押してやるまでだ）話は理解しました。隊長は恐らく、その男の事を好敵手ライバルと同時に男として想っているのでしょう。ならば、まずは好敵手として関係を深め、相手のことを理解するのがよろしいかと』

「……だが、それで相手のことを理解できるのか？」

クラリツサの話はわかるが、それが成功するかはいまいち不安だ。

『何をおっしゃいますか。隊長が今回織斑教官の弟君に惚れたのも、原因は弟君との戦闘がきっかけのほずですが？』

「！」

そうだ、確かにその通りだ。私が織斑一夏を想うようになったきっかけはそれだった。

力に酔い、暴走していた私を抑え込み、初めて私が本音をさらけ出して話したのは、織斑一夏との戦闘があったからだ。

「すまない、クラリツサ。私が浅はかだったようだ」

『初めは皆そのようなものです。お気になさらぬよう』

……そうだな。ならばクラリツサの助言に従い、織斑一夏に好敵手として宣戦を布告しよう。

『好敵手への宣戦布告でしたら、こういった方法がございますが』

クラリツサに聞きながら、私は織斑一夏への宣戦布告の言葉を考え抜いていった。

そして次の日の朝。織斑一夏の目の前で言う。

「私はお前がないとこの世界に意味を見出せなくなった（憧れと目標を失って気力がなくなるといふ意味で）！責任（私を強烈に憧れさせた責任）をとってずっと一緒に居る（私の目標で在り続けるといふ意味で）！」

このあと、教官による凄まじい威力のアイアンクローを食らい、そのまま振り回され、壁に何度か叩きつけられ、投げられ、壁に激突して崩れ落ちたところをグリグリと踏みにじられたのは……実に刺激的な体験だった。

刺激的すぎて死ぬかと思ったがな。

トーナメント、ペアを作ろう

銀髪眼帯黒兎から訳のわからない告白を受けた当日の昼休み。俺と「シャルル」は大勢の一年女子に囲まれていた。原因は、学年別トーナメントのペア決め。正直やりたくないが、ちー姉さんにやれと言われたなら仕方無い。

「すまないけど俺はシャルルと組む予定だから」

ちなみにこの事は昨日のうちに決定されていて、既に鈴とセシリー、ののちゃんと銀髪眼帯黒兎が組んでいる。

ののちゃんと銀髪眼帯黒兎の仲が悪くない理由は、どうも目標が俺と言うことで意気投合したらしい。あと縦に前方三回宙返り土下座を披露したと聞いた。

俺も土下座されたけど後方三回宙返り土下座だった。器用だな。

「器用ってレベルの話じゃ無いよね！？ 物凄いやね！？」

「ちー姉さんなら助走無しで三回宙返りに二回捻りくらいはやってくれる」

「織斑先生ってどこまで凄いのさ！？」

普通だよ普通。凄いやけど。

「で、ペアは俺でいいか？ 突っ込み上手のシャルル」

「いいけど……突っ込み上手にしているのは誰さ！」

「シャルル自身だろ。俺が話すとシャルルが突っ込むだけだし」

そっくだよな？

「……もうそれで良いよ……」
「そうか」

「シャルル」はぐったりと体から力を抜いたが、それで良いと言質は取ったし、これからもからかうことにしよう。

食事時にはいつものメンバーが集まって食事をする。のほほんちやんが入ってきたりそれに便乗しているんな人が入ってきたりしてなかなか騒がしいが、今日はいつものメンバー＋一名だった。その一名とはすなわち銀髪眼帯黒鬼。なぜか一緒に食事をする事になった。雰囲気悪くなったりはしないから別に良いけど。

「……そうだ、一夏」

「もきゅもきゅ……じゅっきゅん。……なに？」

「……まさか本当に『じゅっきゅん』って飲み込むのを見るとは思わなかったわ……まあ、それは良いとして、一夏はここでは作らないの？ 睡眠愛好会」

「何それ！？ 睡眠愛好会って何！？」

ああ、そう言えば中学では作ってたな、睡眠愛好会。裏で鈴や弾達がなんか色々やってたような気もするけど。

「……じゃあ、作るか。睡眠愛好会」

「会長は一夏で良いとして、副会長はキャリアのあるあたしで良いわね」

「ではわたくしは参謀などを務めさせていただきますわ」

「私は……何をすれば良い？」

「肅清部隊の隊長なんてどう？」

「いや、それは実力的にそれはボーデヴィツヒか鈴が良いだろう」

「篠ノ之。私のことはラウラで構わん……ならば私が隊長で、篠ノ之は副隊長でどうだ？」

「私のことも箒で構わん。……ならばそうしよう」

「良いんじゃない？ じゃあ決定ね」

「なんの話をしてるの！？ 睡眠愛好会って何！？ 肅清部隊ってなんなの！？ 参謀は必要なの！？ なんだかすつごく危ない組織に聞こえるんだけど！？」

「何言ってるの。裏組織のIII・IS学園本部創設の話に決まってるじゃない。支部長の弾に報告しておかなくっちゃ」

「支部まであるの！？ って言うかIIIってなに！？」

「今日も、シャルル」の突っ込みは絶好調だな。一人で突っ込み続けるのは疲れるだろうけど、頑張れ。

「IIIって言うのはいっぱいいっぱい一夏の略称で、一夏の健やかな眠りを妨げようとする者や独占しようとする馬鹿共を肅清するついでに一夏の可愛らしさを布教するために中学の頃にあたしと親友たちで作り上げた組織のことよ。つい最近ラウラが肅清されたわ」「あれもそうだったの！？」

それは初耳だな。肅清はあそこまで過激なものだったのか。

「だってラウラ強いから」

「強いから じゃないよ！あれはやりすぎだって！」

「どこが？」

「どこがだ？」

「どこがですの？」

「なにがやりすぎだ？」

「ラウラ含めて全員自覚なし！？」

……ほんとに元気だなあ……………ふあ……………。

「どうした一夏。眠いのか？」

「……ん」

うなずくと、のちゃんが自分の膝をぽんぽんと叩く。

「ほら一夏、こっちにおいで」

当然俺はその誘いに乗って近付いて行き、のちゃんの膝に頭を乗せる。

すると俺の頭を誰かが撫でるのを感じた。多分これはのちゃんかな。

俺はただゆっくりと意識を沈める。俺のことを撫でる手が少しくすぐったいが、これくらいなら‘シャルル’が寝る前にやっている頬ぷにと似たようなもんだ。問題ない。

「……………へえ？ シャルルってば毎晩一夏のほっぺをぷにぷにしてたんだ？」

「鈴。ISの展開は禁止されているから、私の腰の緋宵を使うと良い」

「……………護身用のニードルガンがなんの役に立つのかと思っていましたが……………意外とすぐ出番になりましたわね」

「斬る」

「え、ええっ!？」

ののちゃんは俺の頭を撫でているから動けないが、代わりに鈴がその腰の刀を鞘から抜いて構えた。

それと同時にセシリーが袖の中からペン型スプリング式のニードルガンをいくつか取り出して、シャルル’を見据え、銀髪眼帯黒兎がつや消しされた黒のサバイバルナイフを制服の中から引き抜いた。

そして狼狽する、シャルル’に向かって、全員が同時に言う。

「冗談よ」

「「冗談だ」「」

「冗談ですわ」

その言葉を聞いて、シャルル’は、力が抜けたらしく床にへたりこんだ。

「心臓が止まっちゃうかと思ったよお……………」

「人間、心臓が止まった時間が一分以内なら割と助かるらしいぞ?」

「それは知ってるけどさあ……………」

再誕、睡眠愛好会（会員募集中）（前書き）

起きたら外伝のラウラ編を投稿します。

再誕、睡眠愛好会（会員募集中）

起きたら既に授業が始まっていた。いつの間にか席についていて、いつの間にかノートに黒板と真耶先生の話の内容を書き出していた。どうやら俺は寝たままある程度動くことができるようになったらしい。凄いなこの体。

まあその事は置いておくとして、俺は今現在、放課後が楽しみで仕方無い。

シロに乗るのは楽しい。じゃなかったら乗ってないし、わかり会おうともしてなかっただろうし。

かんちゃんとISの整備をするのも楽しい。シロの事がよくわかってくるし、かんちゃんと話をするのも楽しい。

……でも今はそれ以上に嬉しい事がある。

部活動の発足についてはともかく、愛好会の発足についての書類は面倒なことが少ないし、会員が五人以上居れば認められる。部費は出ないが別にいらぬ。道具は千の顔を持つ英雄で十分だ。

ちなみに会員は、俺、鈴、のちゃん、セシリー、‘シャルル’、銀髪眼帯黒兎の六人。会員は随時募集中、ただし盗聴機とか隠し力メラとかを持ってくる相手にはご遠慮願っている。

……部活動に組み込まれそうになったらすぐさま解散して無許可で寮の自室で開いてやる。面倒なことは嫌いだ。

文化祭の出し物とか、中学でやったみたいに放送ジャックして曲流すくらいしか思い付かないしな。

「一番に思い付くのがそれってのもねえ……」

「しょうがないじゃん。中学の三年間毎年やってたんだから」
「毎年放送ジャックって……なにやってるのさ……」

「シャルル」が疲れたように突っ込むが、しょうがないじゃん事実だし。

……それにしても、プライベート・チャンネルは便利だな。黙ったまま話ができるし。ほんとには校則違反なんだが、俺は準待機モードかつステルスモードにしておけばまずばれないから平気。
欠点はそのちゃんが入ってこれないところなんだよな。紅桜ベニザクラを早く作って送ってもらおうかな？

……ちよつと違う気がするけど。

「ああ、確かに違うな。紅椿だ」

「……何でできるの？」

「姉さんに頼んで作ってもらったんだ。ただ、機体はまだだから通信くらいにしか使えないと聞いているがな」

「……ほんとにそう思う？」

「思わん」

だよな。東姉さんだし、絶対なにかしら仕込んでるよな。武装だけ展開するとかだったら普通にできそうだし。

……それどころか普通に完成してそうだし。

……まあ、何でも良いんだけどね。トーナメントで使うのか？

「使わん。アリーナがもう使えないから練習もできないし、ぶっつけ本番でできると思うほど自惚れてもないのでな」

「そ。まあ、頑張ってる」

放課後。真耶先生に愛好会発足の書類を提出してどこかを部室がわりに使えないかと話し合いを試みるが、やっぱり使えるところは無いらしい。

仕方無いので寮の俺の部屋を部室がわりにすることでファイナルアンサー。俺もシャルルもあんまり物を持ってないからスペースはあるし。

ちなみに愛好会だから顧問はいないし部費が学園から出ることもない。大会なんてありやしないし、あったとしても出たくない。

活動内容は、学園の敷地内で四季折々に合わせた昼寝スポットを探し、健やかな睡眠をとること。猫だけが知っている涼しいところや温かいところ、みたいなものだ。

裏で鈴やのちゃん達がなにかやってるけど、それについては関知していない。勝手にどうぞ、俺は寝るけど。

side 凰 鈴音

「弾？ 久し振り」

「ん？ おお、鈴か！久し振りだなあ。元気してたか？」

「そばに一夏がいるのに元気じゃないわけじゃない」

「それもそうだな」

弾とあたし、久し振りに話して笑い合う。そこには一年離れていた

ことによるぎこちなさなんてまるでない。これこそ同志って言うものよね。

『……で？　もしかしてIS学園そ うちにもIEEを作ったとかそんな話か？』

「話が早いわね。頭のいい味方は一夏の次に好きよ？」

『何回も聞いたから知ってるよ』

本当に弾は察しがいい。ここまで来たら最後まで当てられないかしら？

『それで一夏の居るそっちを本部にしたいって話だったら構わないぞ。一夏からお前が日本に戻ってきてるのは聞いてたし』

「本当に察しがいいわね。ありがと」

『そう思っただったら写真送れよ！。コピーして布教するから』

「それなんだけど、一夏がIS動かせるようになって有名になっちゃったから、ごくごく一部の身内だけにしてくれる？」

『……ああ、なるほど。わかった』

弾はあれで頭がいい。今もたったこれだけでなぜ隠すのかを理解してくれた。

まったく。ありがたい話ね。

「それじゃあ、蘭にも、よろしく、言っておいて」

『おう。またな』

電話が切れて、ツー、ツー、という電子音が聞こえる。

……弾も蘭も、元気でやってるみたいね。よかったわ。

……やっぱり家族は仲良くなかったちやね。

外伝、予知夢？ ラウラ編

ラルちゃんに熱烈な告白を受けてからおよそ一週間が過ぎた日の夜。俺はつい最近も見た薄ぼんやりした夢の中に居た。

……まあ、今までの事を考えると、十中八九ラルちゃんなんだが、もしかしたらかんちゃんということや束姉さんと言うことも有り得る。誰が来ても驚かないように、覚悟だけはしておこう。

そう思いながらぼんやりした霧のカーテンをぬけると、一夏とラルちゃんが一つのベッドの上で仲良く眠っていた。

……確か、ラルちゃんは寝るときには服を着ないんだっけ。布団を捲る前に一応パジャマ（昔、ちー姉さんが使っていた物と同型）を用意しておこうか。ついでに一夏が寝巻きに使っているのとおんなじシャツも。千の顔を持つ英雄で。

……便利だなあ……………。

寝ているうちにとりあえず黒い兎耳を二人に装着。残念ながらこれは起きないと外れないぜ？

大丈夫、俺もつけるから恥ずかしくない。赤信号をみんなで渡ればなんとやらってやつ。俺の場合は積載量オーバーした十トントラックが時速百二十キロでぶつかってきてても大丈夫だけど。

何て考えているうちに、一夏がもぞもぞと動いてラルちゃんの事を抱き締めたじゃないか。これは多分もつすぐ起きるな。

ぱちっ、と目を開いた所で、一夏の事を上から覗き込んでいた俺と一夏の目が合う。

「おはよう、パパ。布団を捲るんだったら上の方から少しずつ捲っていった方がいいよ」

「……………夢？」

「そ。いつものね。もう一人は誰だかわかる？」

一夏はここで少し考え込んで　　ここで考え込めるあたり一夏は本当に鈍いよな　　、答えた。

「……………ラウラ……………か？」

……………ラウラ……………？

……………ああ、そうそう、そういう名前だったな。そう言えば。

「そうだよ？　パパがいま抱き締めてるのがそう」

「どれど……………れっ!？」

一夏は俺の忠告を忘れたらしく、なんでもないかのようにさっさと掛け布団をめくりあげてしまった。俺はすぐさま目を閉じたけど。

「……………パパのえっち」

「ち、違っぞ！これはラウラがどんな状況かわからなかったからであってだな！」

「……………抱き締めるときに色んなところを触ったのに？」

かああっ……………と赤くなっていく一夏。ラルちゃんはまだ眠っているようだ、布団は剥がれているし一夏の声は大きいしで、恐らくすぐ起きるだろう。

「……………えっち」

「ぐはっ!？」

止めとして言ってみたのだが、想像以上にダメージは大きかったらしい。

「……………む……………何事だ……………?」

ちょうどここでラルちゃんが起きた。寝てるときにも眼帯は外さない主義らしいラルちゃんは、露になっている右目だけを眠たげに擦っているのだろう。ただし全裸で。

微睡みタイムを放棄するように何度か目を擦ったラルちゃんは、俺の事を見つけて急激に気配を刺々しい物に変えた。

「あー待て待てラウラ!こいつは未来から大天才の束さんの手で送り込まれてきた俺の子供なんだ!そんな睨み付けるんじゃない!!」

一夏が言つと、まるで銃口を向けられているかのような刺々しい気配が少し和らいだ。怖い怖い。

「……………今の言葉は本当か?」

「あ……………ああ、本当のはずだ」

「誰との子供かは教えられないけどね」

教えたら本気でこっちの未来が激変しかねないし。

だが、ラルちゃんはえっへんと胸を張って言い切った。

「問題ない。私の嫁の子供なら私の子だろう」

……………自信满满だなあ……………ある意味では憧れるよ。少しだけ。

……………でもね。

「だとしたら、子供の前で全裸ってのはまずいんじゃない？」

教育に悪いだろうし。目はずっと瞑ったままだから俺には関係ないけど。

「……………ここにちょうど寝巻きに使えるそうなパパのシャツがあります」

「私に渡せ」

「ちよ、おいしいっ!?!? 何やってんだよ!?!?」

……………何って、見ればわかると思うけどね。

「寝る準備だよ? パパ達は二度寝になっちゃうけど」

まあ、二度寝はいいものだ。個人的には特に微睡みからの二度寝は最高だと思う。

ラルちゃんの準備(一夏のシャツを着る)も終わったし、さっさと寝ようぜ?」

side 一夏Another

……………俺似の子供にせがまれて二度寝をすることになったんだが、どうやらここはまだ夢だったらしい。時計が動いてなかったし。だから寝ることについての不満は無いんだが……………。

……どうしてこうなった……………。

右を見るとラウラの顔。かなり近くで、いつもの凜々しい顔とは全然違う表情をしている。

それはいい。ちょっと前までは騒いでただらうけど、いい。

問題はラウラが俺のシャツしか着てないのにぴったりとくっついてくることだ。ラウラの兔耳が俺の兔耳にちょっかいをかけてくるとかそんなことよりも。さすがにこれはまずい。

いつもだったら間に入ってくれる息子（もう断言してしまおう）は、今回に限って俺の左腕を全身で抱き締めて眠っている。
可愛いんだが、そして嬉しいんだが嬉しくない。

ラウラの顔がすぐ近くにあると言う状況は、どうしてもあのキス事件を思い出してしまうから。

………あーやばい、落ち着け俺。確か、こういう時には素数を数えるんだ。

………羊が2匹、羊が3匹、羊が5匹、羊が7匹、羊が11匹、羊が13匹、羊が17匹、羊が23匹、羊が29匹、羊が31匹、羊が37匹、羊が41匹、羊が43匹、羊が47匹、羊が53匹、羊が

………

………か……………。

トーナメント、その前に調整だ

トーナメント前の最後のシロの調整。最後なのでとりあえず気合いを入れてやってみた。

「……荷電粒子砲も、ミサイルもないみたいだけど……」
「シロが受け入れてくれないからちよつと反則臭い方法でやることにしたから安心してくれ」

千の顔を持つ英雄でリアル『空が3でミサイルが7』をやってやるつもりだし。

もちろんミサイルだけじゃなくて荷電粒子砲も実弾兵器も使うけど。荷電粒子砲は弾をカートリッジ式にしてそのカートリッジを千の顔を持つ英雄で交換してやれば銃身が焼き付きを起こすまでいける。もちろんシロの高速機動を殺す気は無いけどな。ミサイルの弾幕をすり抜けてゼロ距離から荷電粒子砲をぶち込んでやる。

……悪役のやることだよなそれ。

普通に考えたらある意味じゃあ根比べなんだけど。

具体的にはミサイルの段幕に耐えきれたら後は武装のないこつちを一方的にボコるだけ。耐えきれなかったらアウト。ゲームオーバーだ。

まあ、俺本体がミサイルの隙間を抜けて一発入れていくから、実際はもつと難易度高いんだろうけど。

ミサイルが（切れないけど）切れたら雪片式型と荷電粒子砲で、荷電粒子砲が（切れないけど）切れたら左右の衝撃砲と雪片式型で戦

える。

空間固定でコア抜きはしない。それやったら乗ってるやつが落ちて地面に叩きつけられたザクロかトマトみたいになるからな。楯にはするけど。

「……頑張つて」

かんちゃんは、いつもの無表情をちょっと崩して心配そうな顔をしている。

「大丈夫だよ。シロもかなり具合良いみたいだし、優勝も狙えるかも」

「……そう」

「そう。データを楽しみにしてるよ」といいよ

データ取りの他にはあんまり意味ないし。遠距離武器とか千の顔を持つ英雄で作った剣をぶん投げてランブルデトネイターすればいいよ。もしくは相手に一瞬触つてからランブルデトネイターで直接爆破してやればいいよ。

ミサイルはミサイルで使い道があるから別にいいけど。

「とりあえず、いい時間だし昼食べにいかない？ 頭使つとお腹空

くでしょ」

「……わかった……行く」

よっし、ご飯だご飯。

うどんのかき揚げはしっとり派な俺。かんちゃんはたっぷり全身浴派だそうだ。

どう違うかというのと、先に全部沈めちゃうのがかんちゃん、食べるときにちよつとずつ汁につけて食べるのが俺。

先につけちゃうとサクサクが全部なくなるから、その時その時につけてサクサクもしつとりも味わいたい欲張りな方におすすめ。途中からサクサク派に変えることも全身浴派にすることも可能だ。

……最後の方は強制でしつとり派になるけど。

「ちゅるるる……もきゅもきゅもきゅ」

「……もきゅもきゅ……じゅくん」

……IS学園の学食って美味しいよなあ……ちよつと量が少ないのが珠に傷だけど、その辺りは男に食べさせることを想定してないだろうから仕方無い。

その分お代わりすれば良いし、問題は無いかな？

ちなみに周りは上級生や同級生に囲まれている。騒ごうとしたところで『食事中は静かに』ってことを言っただけだから静かだけ。

あと、その時に『めっ！』てやってみたら全体の五割くらいが鼻血を噴き出して倒れ、倒れなかった奴の七割くらいが俺をお持ち帰ろうとしてどこから現れたちー姉さんにアイアンクロー+震動で気絶させられた。残りはなんだかにこにこしながら俺を見ているような気がする（ちー姉さん含む）。

「ちゅるるる……もちゅもちゅ……じゅきゅん」

「……じゅち、向いて」

「？」

かんちゃんに言われて振り向くと、口の端に付いていたらしいかき揚げのかけらを指で摘まみ取られた。

「……はい、もういいよ」

「ありがとう、かんちゃん」

ちなみにとつてもらったかき揚げのかけらは俺が食べた。指にはくりと食いついた時になんだか物凄い負の気配があったような気もしたけど、中学の頃にはよくあったから気にしない。

中学の時は鈴に食べさせてもらった後に鈴が俺の口の端に付いていた酢豚のたれを指でとつてペロりと舐めた時とかにあったよな。

ぶっちゃけるといつものことだ。

「……もう少し……気を付けないとだめ」

「むく？」

「……はあ……なんでもない」

そ。ならいいや。

一回戦、その直前

来賓に色々と来ているらしいが、正直なんでもいい。俺には関係ないことだし、邪魔さえしなければ。

「どうでもいいって言うけどね……あの人達の目的の一つには、夏を見ることも含まれてるんだよ？」

「見られるのには慣れてるから別に平気。邪魔さえされなければ」

「……一夏らしいなあ……」

俺だからな。

……さて、確か原作では初戦が銀髪眼帯黒兎ことラルちゃんとのちゃんコンビだったんだが、こっちはどうなのかね？ 鈴とセシリーも居るし、原作なんて無かったんだ！くらいの勢いだし。

セシリーはリベンジに燃えているようだし、鈴は再戦を楽しみにしているみたいだ。のちゃんとは初勝負だし、一応ラルちゃん自身とも初勝負。

それなりに気合い入れてやらなくちゃ負けるかもな。今のセシリーは強そうだし。

かんちゃんと約束したし、頑張らないとなあ。面倒だけど。

「……あと、僕のことをシャルルって呼ぶのは辞めてくれないかな？」

「じゃあ何て呼ぶ？ 普通に名前と呼ぼうとすると、多分酷い間違いがあると思うけど」

シヤアザク・デュケーンとか。

……俺の頭はどうなってるんだろうな。かなり本気で不思議だよ。

「……じゃあ、一夏が決めて」

「シャルで」

「……安直だなあ……」

「安直なのは嫌？　じゃあ【シヤラポワンヌ】とか【草臥れシヤーさん】とかが良いのか？」

「い、いやシャルがいいな！　シャルっていうのがいいな！」

「そっか。じゃあシャルで」

‘シャルル’改めシャルは、なんだかかなり本気で胸を撫で下ろしている。何でだろうね？

「一夏のせいかな」

「そうなのか？」

「そっだよ一夏。だからちょっと癒しを提供してほしいな」

そう言っつてシャルはベンチに座り、膝をポンポンと叩いた。

……寝ると？　シャルの膝枕で寝ると？

まあ、良いけどな。

……すか……。……。

起きたら相手が決まっていた。ラルちゃんとののちゃんだった。こ
ういうところは原作通りなんだな。

まあ、ラルちゃんのあの変型機能（不許可な上違法）はネタが割れ
て使用不可になっているし、鈴やセシリーも参加してるし、ののち

やんが実は奇妙なほどに強いし……外れてるところは多々あるんだけど。

一番のイレギュラー（転生者、チート持ち、魔改造IS持ち）がなに言ってるのかも思うけど、面倒だし気にしないことにした。

……もうちょっとで始まりかぁ……あー……棄権したい。

「開始直前にいったいどんな夢を見てるのさ!？」

「俺は大抵寝てるぞ？ 最近起きたのはラルちゃんにお仕置きした時とゴーレムとバトった時とセシリーをボコった時くらい」

「結構起きてる!？」

「でもその前にはつきり起きたのは実は中学の学園祭の睡眠愛好会特別バンド♯1の時以来だったり」

マイナス1〓鈴、プラス1〓蘭ちゃん、それなりに好評だった。

………まあ、やるか。仕方無い。

side 篠ノ之 篇

……初戦の相手が一夏か………勝てる気が欠片もしないな。勝てたとしても一夏の棄権か面倒だったから大会そのものをサボったかのどちらかだろう。

「ラウラ。一夏に勝てると思うか？」

「無茶を言うな」

ついに一夏に勝つこと自体が『無茶』と言われるようになったか。理解はできるが。

「まあ、それでもやるしかなかろう。一夏は私の目標なのだから、戦えると言つのなら喜ばなければな」

「ほう？ なかなか良い目をするな。期待させてもらつとしよう」

「専用機を持たない私にいったい何を求めているのやら……………期待に応える努力はするがな」

「それでいい」

いつの間にか仲良くなったラウラと、軽く拳をぶつけ合う。よく一夏と鈴がやっているのを見るこれは、なかなか面白い。

「……………では、行くとするか。幕」

「そうだな。ラウラ」

私達は飛ぶ。一夏の居るだろうアリーナに向けて。

……………一夏。私はお前に近付けているか？

ほんの少しだけでも、昔よりお前の近くにいますか？

私はお前に教えてもらった強さを追い求めて来たから、どこまでこれたんだ。

だから、お前が私に教えた強さが、お前にどこまで通用するかを確かめさせてくれ！

一回戦、その直前（後書き）

このあとしばらくバトルが続きます。途中で和める外伝をいれるつもりですが。

一回戦、俺・シャルvsラルちゃん・のちゃん

試合開始寸前に、俺はのちゃんにプライベート・チャンネルを繋ぐ。

「のちゃん」

「どうした、一夏。棄権するのか？」

できればしたいんだけどね。面倒臭いし。

「いやいや、先に謝っておこうと思ってさ……ごめんね？」

「………凄まじく嫌な予感がするのだが」

きつとそれ正解だよ。うん。

………ああ、あと三………二………一………

「シャル。下がるぞ」

「大丈夫！わかってるよっ！」

開始直後に俺とシャルは一気に後ろ向きに瞬時加速をして下がり、俺は千の顔を持つ英雄を発動する。

使うものは大威力拡散荷電粒子砲と、武装で錬金な世界にあったミサイルポッドの武装錬金。

荷電粒子砲の方には名前はないが、ミサイルポッドには名前がある。その名前は

「ジエノサイドサーカス！」

特性は‘無限弾装’。数は八。とりあえず、リアルで『空が三でミサイルが七』をやってみた。

「……………」
「……………」

その無数の弾頭を向けられているののちゃんとラルちゃんは、なんだか物凄く顔をひきつらせていた。

「……………」
「……………」
「……………」

そして、隣に居るシャルと観客席に居る鈴とセシリーの顔も盛大にひきつっているように見える。

「秒間百五十発×2のミサイルが、三十秒ほど続くから……………頑張って避けてね」

「……………無茶苦茶言っなっ……………」
ラルちゃん、ののちゃん、シャルに口を揃えて言われた。悲しいなあ……………悲しすぎるからとりあえず発射しよう。

「発射ア！」

号令と共にミサイルの第一陣が発射され、ラルちゃんとののちゃんに向かって飛んでいく。

「頑張つてね？」

「死ぬわっ！」

……そう返されたんだが、結構なんかなるらしい。

ラルちゃんは予備の部品で組み上げたばかりのシュヴァルツェア・レーゲンを。のちゃんはいつも乗っていたらしい打鉄を使っているが、二人ともに妙に切れが良い。

ラルちゃんが大口徑レールカノンとワイヤーブレード、そしてAICを駆使して自分に当たるミサイルを落としているのはわかる。けども、のちゃんが打鉄の近接ブレードでミサイルの横っ腹を高速で飛び回りながら全部切り捨てているのを見ると、ちよっと呆れる。

「……もう十五秒過ぎるけど………凄いな、あの二人」

「凄いやな。流石ののちゃんだ………さてと。俺も行くかね」

カートリッジ式の荷電粒子砲を持って、ミサイルの雨が降り注ぐ中に飛び込む。まず狙うのはのちゃんだ。

ほとんど無いミサイルの隙間をすり抜けてのちゃんの背中に回り込む。

「………見えているぞ！一夏あつ！」

するとそれに気付いたのちゃんに斬りかかられた。ミサイルの影を伝ってきたし、見えないようにしたって言うのに随分と鋭いことだ。

「なに、肉眼では見えなくとも気配の目では見えている」
「そりゃすごいな」

そう言いながらののちゃんが切り落とす寸前のミサイルに重なるようにののちゃんを撃つ。

「見えていると……言っているだろうがっ！」

そう言つてののちゃんは荷電粒子砲の射撃とミサイルの誘爆まで避けきって見せた。

……が、すべてを見通している訳じゃない。

ズドンッ！といきなりののちゃんの後ろに爆風と衝撃が起き、ののちゃんのバランスと姿勢を崩させた。

「一夏ばかり見て、僕を忘れちゃダメだよ」

「くっ……デユノアかっ！」

今までちよこちよこラルちゃんの方にばれないようにちよっかいを出していたシャルが、ののちゃんの背後にグレネードを投げつけたのがさっきの爆発の原因だ。

バランスと姿勢を崩されたののちゃんはミサイルを懸命に避けようとしていたが、流石に無理があったらしく直撃を十数発食らった辺りでシールドエネルギーが0になったようで、一応残っていた機動用のエネルギーを使ってゆっくりと降りていった。

「……次は、負けんぞ」

「あるかどうかもわからないけどね」

短い会話を終わらせて、俺はののちゃんに向かっていた分のミサイルにまで襲われているラルちゃんに意識を向けた。

シャルはシャルでアサルトライフルを使ってうまいことラルちゃんにダメージを与えている。

なんと、AICの張られている場所をミサイルの停止位置から考えて、無いところに撃ち込みつつ誘爆でじりじりと減らしているらしい。器用だな。

……ののちゃんがミサイルの雨に倒れた時間が、開始から26秒程度。残りのミサイルはまだまだあるが、三十秒と言ったし一秒分をののちゃんの分からとっておこう。

……いやまあ、実際にはそんなこと必要ないんだけど。

「……あ、ミサイル切れた」

と、わざとギリギリ聞こえるくらいの声で言ってみる。するとそれに釣られたのかラルちゃんが元気になった。

……ここで『嘘だ阿呆が』とか言ってミサイル出したらかなり絶望感溢れる表情が見られるんだろうな。

………とか思ったりしたが、俺は優しいからそんなことはまだしない。

……まだ、しない。

「……いつか……やるの？」

「やるけどどうかした？」

「……ううん。なんでもない」

あっそ。

それじゃあ次行こうか。

今度は背中から大量にガトリングガン系統の銃を適当に五十ほど用意してみた。弾の口径は八十八ミリで、一発一発がライフル弾のように回転している。

「…………おい、冗談だろう？」

酷く青ざめてひきつった笑顔を浮かべるラルちゃんに、俺も笑顔を返す。

「大丈夫。痛いのはちょっとだけだから」

そして俺は、トリガーを引いた。

最早只の苛め、何を今さら

ガトリングガンのトリガーを引くと、弾が飛び出す。当たり前のことだ。

そしてそのガトリングガンではらまかれた弾は、殆どがラルちゃんのAICによる停止結界で止められてしまった。

「シャル」

「うん。わかってるよー夏」

その際にシャルがAICを避けてマシンガンでラルちゃんに向けて銃弾をばらまく。

ラルちゃんはシャルのばらまいている弾を避けながらもAICを辞めようとはしない。まあ確かに一分に千五百発の三十倍で八十八ミリ弾をぶちこまれたら十秒持たないだろうしな。

ちなみに反動は全部相殺されている。そのかわりに全然動けないけど。PICが高性能で助かった。

「……………ねえー夏。そのガトリングってどこで売ってるの?」

「自作って言ったらどうする?」

「……………冗談でしょ?」

「冗談だといいいね」

そうやって俺が笑うと、シャルはなぜか複雑そうな表情をする。

……………んー。そろそろラルちゃんのエネルギーが切れてもおかしくな
いんだけどな?

AICつて要するにPICと同じで、相殺する物の運動エネルギーが大きければ大きいほどエネルギー食うはずなんだけど。シールドエネルギーとは別系統だから強制解除とかにはならないだろうけど、まともには動けなくなるはずだし。

……さてと。それじゃあ荷電粒子砲でも撃ち込むとするかね。ガトリングの反動を消すのも面倒になってきたし、これなら止められないだろ。

ゆっくりと狙いをつけて、引き金を引く。

AICの壁をすり抜けて、光線がラルちゃんを貫いた。

「……そう言えば、そんなのもあったね」

「ガトリングの印象が強くて忘れるだろ？」

忘れてくれれば隙をつけるしな。こういうド派手な武器の裏に、効果の高い地味な武器を隠しとくのが好きなんだよ。

そしてアリーナに試合終了のブザーが鳴り響く。

『試合終了。勝者　織斑一夏、シャルル・デュノアチーム』

……ふう。やっぱり強いやつ相手はめんどくさいわ。さっさと寝たい。帰りたい。ちー姉さんに撫でてもらいながら寝たい。

「あ、ちっちゃくなった……なんで一夏の身長は伸び縮みするのさ！？」

今さらすぎる疑問だな。確かに見せるのは二回目で、一回目はそん

なことを気にできる状況じゃなかったし、仕方無いか。

……ふあ……。

……すか……

side シャルロット・デュノア

一夏がさっさと帰っちゃったあと、回りを見てみると見学していた大体の人がひきつったような顔をしていた。うん、気持ちはわかるよ？ だって多分僕も似たような顔をしてると思うから。

一夏の言葉を信じると、秒間150×2×30秒で9000発のミサイルと、1500×36/60(分)×30門で27000発の銃弾がこの試合の中で飛んだことになる。当然これは一夏が撃った弾の合計で、僕やラウラが撃った弾は別計算だ。

……どこにそんな容量があったのかとか、昨日見た時にはそんなの無かったよねとか、色々と言いたいことはあるけれど、やっぱりやったのが一夏だと思うとなんでか納得できちゃうのは……どうしてかな？

「……ふう。やはりまだ勝てんか……手加減までして貰ったと言うのに、情けないことだ」

「どこに手加減の要素があったのさ!？」

僕が言うと、筭はきよんとした顔で、当たり前前のことを当たり前前

に説明するかのように言った。

「雪片も零落白夜も使っていないだろう？ それに、遠距離からの狙撃で直撃させられる隙などいくらでもあった。そこを突かないと言っただけで、十分すぎる手加減だろうが」

……………そんな隙なんてあったっけ……………？

「ああ、あった。私にも、ラウラにも」

へえ……………。

……………あれ？ 僕って今声出したっけ？

「一夏に付き合った時間がある程度長くなれば、何となくで読むことができるようになる」

「読心術を使えて普通ってどんな普通さそれはっ！？」

「普通ではないが、常識だ。シャルルも覚えておくといい」

「そんな常識はやだよ！？」

「諦めろ、デユノア」

「あ、シャルルでいいよ。このトーナメントが終わったら名前変わるけど」

「そうか」

ラウラに諦めろって言われちゃったので、受け入れることにした。でも、きつとこの突っ込み癖は直らないんだらうなあ……………と思う今日この頃。

「……………さて。そろそろ移動しよう。次の試合の邪魔になってしまう」「そうだね。行こうか」

「うむ」

僕達は一夏の消えていった方向に向かって飛ぶ。多分一夏はピット
のベンチで寝ちやっつてると思うし、着替えても大丈夫だよな？

「私は相手が一夏なら全く問題ないが」

「私もだな」

「そこは恥じらいを持とうよ!？」

一回戦終了、二回戦までは暇

ラルちゃんとののちゃんのコンビをなんとか倒し、俺はのんびりと寝ることにした。

……したんだが、その前にやることがある。それは、今回の戦闘のデータをかんちゃんに見せないといけないと言っことだ。

ミサイルと荷電粒子砲は、それなりに相性が良いらしい。荷電粒子砲がスナイパーライフルに変わっても同じように使えらと思っけど、やっぱり複数のミサイルはコンビ戦等の多対多の勝負に有利だ。

「……でも、打鉄式には……あんなにミサイルはない……」

「波状攻撃って意味では同じだと思うけど？」

特に、ミサイルに気をとらせて荷電粒子砲で遠距離射撃とか、そう言った戦い方だったらある程度少くないと誤爆するし。

「あと、マルチ・ロックオン・システムの方はどう？ 無理矢理やるんだったら48個同時に通常のロックオン・システムを使えばできなくはないと思っけど」

「……それは……無駄が多すぎる」

だろうね。だから『無理矢理』って言ったわけだし。

でも、多分原理的には似たようなものだよな。48発のミサイルをそれぞれ独立させて狙っつてのは。

「……織斑君は……どうやっていたの……？」

かんちゃんはそう聞いてきた。どつって言ってもあれはぶっちゃけるとなんとなくなんだが……。

「……簡単に言うと……気合い？ 射撃用のシステム搭載してないし」

「そんな機体であんなに弾幕を張ったの!？」

おおう、びっくりした。かんちゃんが大声を出す所なんて初めて見た。

「そうたよ？ ハイパーセンサーもあつて動体視力は良いし、弾幕張るタイプの武器だからある程度狙えば当たるしね」

「……だから、弾幕なの？」

「そうだよ？ 荷電粒子砲の時は近付いて撃つか、相手の動きが止まったところでゆっくり狙って撃つてたし」

「……そう……近付けば……狙わなくても当たる……」

まあ、乱暴に言えばその通りだな。

ついでに言うと、近くなれば空気中を進むことによる威力の減衰もほとんど無いから威力は高いままだしね。

「それじゃあ、俺は運動した分寝なくちゃいけないから、この辺りで失礼するよ」

「……待つて」

ん？ なんだ？

かんちゃんは俺の方を見ると、無言で腿を叩いた。

「……そんなに眠いんだったら……ここで寝ていけばいい」

そう言っているかんちゃんの頬は真っ赤だったが、俺はお言葉に甘えることにした。

……布団は千の顔を持つ英雄で出せるし、ベッドはいらない。枕はかんちゃんの膝枕。考えようによってはかなり贅沢な気がする。

そう考えながらも俺は布団を用意して、かんちゃんの膝枕に頭をのせる。

「おやすみ、かんちゃん」

「……おやすみ………一夏」

……初めて名前を呼んでもらった気がする。嬉しいね。

そう思いながら、俺はゆっくりと意識を深く落としていった。

……すか……。……。

side 更識 簪

織斑君は、私の膝の上で寝息をたてている。五月蠅くてもまず起きないと言っていたけれど、私を含めたこの場に居る全員は、できる限り静かに作業を続けている。

「……織斑君の寝顔……可愛いね」(小声)

「だよねだよねっ！」(小声)

「……撫でて大丈夫かなあ……嫌われちゃったりしないかなあ……

……」(小声)

……それは大丈夫だと思う……だって織斑君は……撫でられるのが大好きだから……。

今も私が撫でてあげると、ほにゃっという笑顔を浮かべて私の手に髪を擦り付けている姿を見ながら、そう思う。

……だけど、教えてあげない。この時だけは、織斑君は……一夏は、私だけのもの。

そんな独占欲を持ちながら、私は片手で打鉄式式のデータを弄り、片手で一夏の頭を撫でていた。

「……んう……はむ……」

かぶっ、と一夏に私の指が食べられた。そんなに強くは噛んでないみたいだけど……なんだかすっごいクルムがある。

はみはみと一夏は私の指を甘噛みし、その度になんだかぞくぞくしてくる。

このままじゃあいけないと思って一夏の唇から指を抜く。結構簡単に抜けたけど、何でかまだぞくぞくする。

指を見てみると、一夏ので私の指が濡れて

……この指を舐めたら間接キスになるんじゃない……。

そんな邪な思いがよぎったけれど、意識してそれを頭から追い出す。

……打鉄式式の方に集中しないと……。

そう思って画面を見てみると、そこには一面に『一夏と間接キス』の文字が踊っていた。

……空間投影型のディスプレイじゃなくって、ほんとによかった。

私は画面に映った文字を、いらないうところだけ纏めて消した。

二回戦、原作何それ美味しいの？

確か原作では一回戦で中断することになったはずなんだけど……
まあ、続くんだっいたらそれは仕方ない。面倒だけど。

「一夏。油断はダメだよ」

「わかってるよ。油断せずミサイル弾幕を」

「弾切れ起こしたって言っただけじゃなかった!？」

「なんか増えてた」

「何でさ!？」

「知らない。何で俺に聞くんだよ」

「一夏のISだからだよ!？」

「じゃあシャルは自分のISの部品の一つに含まれる合金の種類と割合と元々の金属の原産地までわかってるの？」

「僕の聞いたことってそんなに難しいこと!？」

「幽霊が存在しない確たる証拠を見付けるのと同じくらい難しい」

ちなみに、存在することを証明するにはそれを見つければ良いが、存在しない証明は存在する可能性を全て否定しなければならぬのでまず無理だそうだ。

「ああ、ちなみに増えてたつてのは冗談だから」

「……なんだ、冗談だったの？ よかったあ……」

「本当は最初から切れてなかった」

「あれだけ撃つといてまだ残ってるの!？」

のちゃんに撃つはずだった分が少しね。それがなくても作れば普通にあるんだけど。

それ以前にジェノサイドサーカスの武装錬金としての特性は無制限装だから切れないんだけど。

「半ば冗談だよ」

「もう半分は！？ もう半分は本気なの！？」

「まあ、どちらにしろミサイルは使わないけどね。もう残ってないし」

「結局残ってないんだ！？」

シャルの突っ込みが今日も冴え渡る。良いなあ……。

「……僕もう疲れたよ……」

「諦めるといい」

そう言うとシャルはぐったりとした表情で俺を見てから、無言でISを展開してカタパルトに向かった。

……拗ねたのか？

「拗ねてないよ」

「拗ねてるように見える」

「拗ねてないってば」

まあ、本人がそう言うなら構わないがね。

……それじゃあ、始めようかね。

二回戦の相手は、名前も知らないだれか。使っている機体はどちらも訓練機のラファール・リヴァイヴで、あんまり変な武器も持っていないみたい。

「ただ、油断はできない。さっき幕が見せてくれたように、訓練機だって使い方次第であそこまで上れるんだから。」

「セシリア。油断は禁物よ」

「ええ。わかっていますわ」

あたし達の視線はたぶん鋭い。相手の二人にはちょっと悪い気がしなくもないけど、本気で行くことにする。

ただ、あたしは我流の無理矢理な衝撃砲の曲げ撃ちを、セシリアは偏向射撃を封印中。これは一夏と戦うまではとっておくつもりだから。

「それじゃあいつもの通り、あたしが前衛でセシリアは後衛ね」

「わかりましたわ。落とされないようにお気をつけて」

「誰に言ってるのよ。あたしは凰鈴音、中国の代表候補よ？ 一夏にはまだちょっと勝てる気がしないけどね」

くすくすと笑い合い、それから武器を展開する。

「確かに、わたくしも一夏さんにはまだ勝てる気がしませんわね」

それでも、あたし達は目標に向かって進むことしかできないんだけどね。

双天牙月を構え、相手に視線を向ける。少し前に輝を入れた双

天牙月は新しいものに変えられているため、早々折れることもないだろう。

試合開始の合図まで、あと六秒。

試合開始直後にあたしは瞬時加速で接近する。一秒足らずで隣接距離まで入り込んだあたしは、双天牙月の先端をリヴァイヴの腹に直撃させたまま更に力を込める。

もう一人の方には口径を広げた拡散型の衝撃砲を一発。シールドエネルギーは大して削れはしないけど……………

「隙ありますわ」

「えっ、キャアアアアッ!?!」

セシリアのビットから出たレーザーがもう一人のリヴァイヴを貫いて、ダメージを与えた。あれ直撃すると割とダメージ大きいのよね……………。

そんなことを考えながら、あたしはアリーナの遮断シールドにリヴァイヴを叩き付ける。シールドエネルギー同士が干渉して、リヴァイヴのシールドがガリガリ削られているのがわかる。

もちろんここでなにもしないあたしじゃない。小さく衝撃砲を展開して、武器を展開しようとした両手を撃ち抜く。

もちろんそれでシールドエネルギーの消費は速まるし、そろそろこちのリヴァイヴのシールドエネルギーが切れても

双天牙月を持ったまま、急速上昇。後ろから相手のパートナーの撃

った弾が飛んできた。危ないわね。

「な……なんで避けれるのよ!？」

「勘よ。勘」

なんて当たり前の事を聞くのかしらね？

「……鈴さん。当たり前ではなくってよ?」

「はいはい、つまらない冗談なんて言っていないで、続きしましょう」

なんでわざわざそんな下らない嘘を言うのかしらね？ 誰が聞いても嘘だってわかるじゃないの。

「……はあ……」

「? なによ溜め息なんてついて?」

「……なんでもありませんわ」

……なんとなく気に食わないけど……セシリアがなんでもないって言うならなんでもないんですよ。

決戦、俺・シャルvs鈴・セシリー

色々あって、一年の中ではこのどれかの組が優勝するだろうと言われている組が三つあった。

始めに、俺とシャルのペア。

次に、ののちゃんとラルちゃんのペア。

最後に、鈴とセシリーのペア。

そのうち、ののちゃんとラルちゃんのペアは一回戦で俺達に敗退したため除かれた。

それでは、次はどちらがこの勝負から消えるのだろうか。

「ふふふふ……一夏っ！……私達が死なない程度に、手加減してね」

「元々殺す気は無いつての」

「なんで普通に殺す殺さないの話になってるのさ！？ これ試合だからね！？」

「……？ 何を言ってるの？ 試合では『事故』と言うものがあるんですよ？」

「事故は狙って起こすものじゃないからね！？」

「そんなものは当然ですよ？ 全く、シャルルさんはいったい何を言っているのか……」

「え、悪いの僕なの！？ 僕なにか変なこと言った！？」

俺と鈴がいつものかけあいをしていると、シャルとセシリーが二人らしいかけあいを初めた。仲が良いなあ。

まあ、二人が強くなったのは知ってるから……手加減はしても、悔むことはしない。負けちゃうからね。

特にセシリーの偏向射撃。あれは流石に完全に避けきるのは難しいしね。

例えば、シャルと俺を重ねて作った死角からの攻撃に鈴からの攻撃を合わせ、更に偏向射撃で狙い撃たれると避けにくい。

シロは攻撃特化+極限速度特化だから、防御は固くないんだよね。弱点は超々広域殲滅攻撃。もしくは東姉さんによる搦め手。

……こう考えると、結構弱点多いのかもね。

……まあ、いいか。

『とりあえず、シャルは鈴の方をお願い。鈴の衝撃砲は速射で狙いを散らしたりすることができるとは気が付けて。あと、壁に押し付けられたらラルちゃんを落とした超速連射が来るから』

『……あれかあ……うん、頑張ってみるよ。一夏も気を付けてね！』
『当然。死にたくないからね』

……さてと。頑張ってみるかね。

開始のブザーが鳴り響き、四機のISが動き始める。

俺はセシリーに向かい、セシリーは後方に飛びすさり、鈴はこちらに向かい、シャルが鈴に向かって飛ぶ。

「あら？ あたしの相手はシャルルなの？」

「うん、そうだよ。一夏じゃなくってごめんね？」

「別にいいわよ……あたしがあんたを落とせば良いだけだしねえっ！」

どうやら向こうは向こうで話が付いたらしく、急激に戦場の空気が辺りを包み込む。

「あら？ あの時とは違って今度は一夏様からダンスのお誘いですか？」

「まあな。鈴と一緒にだとかかなり面倒なんで、悪いが付き合ってもらうぞ？」

鈴と組まれると凄まじく厄介だからな。コンビネーションを発揮される前に叩き潰してやらないと。その方が楽そうだし。

「……ふふふふつ それでは一曲お相手しましょう」

「よろしく頼むよ、セシリー」

相手をしてくれるんだったらかなり嬉しいし。その方がシャルの勝率は上がるし。

「……では、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズ。参ります！」

「織斑一夏とシロ。相手をしてやるよ。面倒だけど」

やれやれ。これが終わったら、思う存分寝るとしようかね。

side 凰 鈴音

あたしの相手はシャルロット。それは別にいい。たぶんこうなると

思っていたから。

一夏はきつと、ある程度読みやすいあたしよりもセシリアの方を優先するだろうという予測はたてていた。

そのときのこととも一応考えてはいたけれど、やっぱり一夏の操るシロは凶悪ね。高機動状態でもない筈なのに、あたし達を一瞬置き去りにして動いた。

あの時に攻撃されていたら、きつと避けることはできなかっただろう。

まあ、もしものことを考えても仕方ない。一夏はあたし達を攻撃しなかったし、あたしはこうしてシャルロットと向き合っている。

シャルロットの言った通り、本当なら一夏と戦いたかったところだけど……だからって今の相手に集中しないまま戦うほど、あたしは馬鹿じゃない。

それに、さつさと倒せば一夏とも戦えるかもしれないしね。

……でも、相手は二世代機とはいえ専用機持ちで、さらに随分改造されている。こつちの手札は全部はバレていないけど、それは向こうも同じ。どんな隠し球があるかわかったもんじゃない。

「……それじゃあ、いくよっ!」

「来なさい!」

シャルロットがショットガンを展開すると同時に、あたしは武装を展開せずに口径を広げた衝撃砲を撃ち込んだ。

威力は下がるし発射速度も落ちるけど、シャルロットが動こうとする前から準備をしておいたから関係ない。

そして発射直後に砲身を破棄。双天牙月を展開して、シャルロット

に斬りかかる。

「わっ、わっわっ！」

「ほらほらあ！あんまり逃げ回っていると、その可愛い可愛いお尻を取っ捕まえて食べちゃうわよあ？」

「ひいつ！？ り、鈴！？ なんだか手つきが怪しいよあ！？」

失礼ね。ただちよつと揉んで擦って撫で回して押し潰して掴んで指先で擦って爪を立てて弄ぶだけじゃない。噛み付いたり食べたりなんてしないわよ。

「それでも、だけ、じゃないよあ！？」

「嫌なら勝ちなさい？ 一夏に助けてもらっくんじゃなくって、自分でね」

あー、一夏がシャルロットをからかう理由がわかった気がするわね。

この娘………慌てた時の反応がすごく可愛いわね。一夏ほどじゃないけど。

まあ、それなりにからかいながら戦うとしましょうか。

……真剣に、ね？

決戦中、俺・シャルvs鈴・セシリー

「そこですわっ！」

「教えてくれてありがとうございます」

俺とセシリーは空中を舞うようにして戦っている。

偏向射撃ができるようになってから、セシリーは中距離だけではなく近距離もそれなりにできるようになった。誤射の可能性が低くなつたということもあるんだろうな。強い強い。

……ちなみに、鈴とシャルは結構離れたところで逃げ回り、追いかけ回しながら撃ち合いをしている。

「わああああん！」

「あははははっ！まだまだいくわよーっ！」

「こないでよおおっ！」

……楽しそうだな、鈴。まあ、昔からこうして他人をからかうのが好きだったからな。俺と同じで。

「余所見とは随分余裕があたりですことっ！」

「視界は前後上下左右全方向にあるっての」

あんまり活用できてるやつはいないけど。

その点は仕方ないよな。人間の脳味噌はそんな視界に耐えられるようにはできてないことが多いからな。例外はあるけど。ちー姉さんとか。

そんなことを考えながら飛んできた青いレーザーを避ける。銃口と銃身を見ればある程度避けられるのがレーザーって言うものなんだが……………曲げられると言うのがきつい。ギリギリの回避もできないし、流石のシロも光速では動けない。もちろん俺も、光速あるいは亜光速での機動は無理……………だと思つ。やったことないからわからないけど。

ちなみに今の避け方は、左手の衝撃砲でセシリーの持っているライフルの横っ面に衝撃を叩き付けて射線を外し、偏向させないと当てられないようにしてから避けている。ビットの方は、出てきた四機を空間固定で止めてすぐさま退場願ったら残った二機は出てこなくなつた。

あんまり頭使うのは好きじゃないんだけどなあ……………。寝るのは真逆の行為だし。

でも、ちー姉さんに言われちゃつたし、負けるのは気に食わないしなあ……………。

……………こつなつたら被弾覚悟で一気に零落白夜で叩つ切るか？ それが一番早そうだ。

今のところ、セシリーのライフルが一発撃つてから次を撃つまでに必要な時間は0.5秒ほど。これだけあれば一発二発食らう程度で済むだろう。

瞬時加速を発動。セシリーに一気に接近する。

それと同時に雪片を振る　　わずに、もう一度瞬時加速で横に軌道を変える。

するとセシリーの腰にくっついていた二機のビットからレーザーが

飛び出し、虚空を貫いた。

「……先に落としたうちの二機は、射撃型じゃなくて弾道型だったんだな」

「ええ。よく避けましたわね」

セシリーがなんだか地味に策士だ。ちっちゃい策だけど有効だよな。

……まあ、こつちもやることはやったし、おあいこってところかね。

「セシリー」

「はい？」

「右肩見てみ」

俺の言葉に従って、自分の右肩を見る。するとそこには

「なっ!?! グ、グレネード!?!」

「正解」

瞬間、爆音と共に、赤い大輪の炎の花が開いた。

「たーまやー」

side 凰 鈴音

爆音と衝撃がアリーナ全体を揺るがせた。

鬼ごっこ(シャルはかなり必死)をしていたあたし達は、同時に一

夏とセシリアの方に振り向いた。

「隙あり」

「無いわよ」

ついでにシャルはあたしにショットガンを五発ほど撃ち込んだけれど、口径を広げた擬似的な拡散型の衝撃砲で撃ち落とした。

「……何があっただと思っ？」

「とりあえずあたしに向けてのマシニングの斉射を辞めてから聞いてよね」

「防いでるくせに」

「まあ、実態があって軽ければ双天牙月で落とせるからね。あと、さっきのことだけど……どうせ一夏が馬鹿威力のグレネードでも使っただでしょ」

と言うか、セシリアの声が聞こえていればわかると思うけどね。おもいっきりグレネードって言ってたし。

……一夏って、グレネードなんて持ってたのね。

まあ、勝負を終わらせるにはもう少し必要みたいだけど。グレネード一発で落ちるほどセシリアもヤワじゃないだろうし。

「えいつ」

「返すわ」

「困るよ」

「こっちもよ」

シャルロットがグレネードを投げってきたので双天牙月で打ち返す。盾で打ち返してきたので今度は上に弾く。

……なんだか、ほのぼのとしながら殺伐とした戦いね。何でもないことみたいにグレネードを投げ合うことになるなんて、思ってもみなかったわ。

……普段からそんなことを考えているのは、それはそれでまずいことかもしれないけど。

「……そろそろ終わらせない？」

「あ、それいいね。僕もちょっと（貞操の）危機を感じてた所なんだ」

シャルロットはそう言って、いつもの高速展開で両手に連装型のショットガンを二丁取り出した。

「ああ、負けたらシャルルのところに泊まるから」

「え……」「困るよ！」

ああもう可愛いわね。どうせいつもと同じように一夏と寝るだけなんだから、気にしなければ良いのに。

「じゃあ頑張りなさい」

「うっ……鈴の意地悪……」

そこまで言って、お互いに瞬時加速。どうやらあつちも不意を打とうとしてたみたいね。

それに驚く感情はあるけど、それよりも今はシャルロットを倒さなくちゃ。

そして一夏と……まあ、本気じゃなければ五分くらいは持たせてくれるかな？

……それも、ここでシャルロットを倒せばの話だけ。

あたしは双天牙月を弓を引き絞るように片手で振りかぶり、シャルロットの胸を貫くように突き込んだ。当然、シャルロットは腕の盾で防いでからショットガンを撃ち込んでくると思っていたのだけれど……………

「ぐうっ……………」

「な……………」

シャルロットは、盾で防御しなかった。

「あ、あなたなに考えて」

「うふ」

ぞくり、と寒気が走る。シャルロットは今の一撃でシールドエネルギーがかなり削られていて、あとはちよっと力を込めた衝撃砲の一撃で落とせそうなくらい弱っているはずなのに。

「うふふふふふふふ……………捕まえたあ……………」

バンツ！という破裂音がして、シャルロットの腕の実体盾が弾け飛ぶ。そしてその腕から覗くそれは

「盾殺し《シールド・ピアース》ですって!？」

「ふふふふ……………この距離なら……………鈴の衝撃砲より僕のこれの方が早い!」

あたしは急いで離れようとするけれど、それより早くシャルロットはあたしに向かって瞬時加速をした。

全てがゆっくりとした空間の中。双天牙月の間合いの内側で、シャ

ルロットはまるで千冬さんのような　　寧猛な獣の笑顔を浮かべた。

「ぶ……っち抜けえっ！」

ズガンツ！という轟音と共に、あたしの体にパイルバンカーの一撃が突き刺さる。

同時に絶対防御が発動し、シールドエネルギーが一気に削られる。

けれど、それだけだ。確かに食らった胸は痛いけど（一瞬『成長止まったらどうしよう？』なんて思ってたらないっと思ったら思ってたない）、そんなのどうってことはない。

あと一発叩き込めば、シャルロットは落ちる。だから私は痛みを訴える体を見捨て、衝撃砲の砲身を作り上げる。

短くても、小さくても、薄くてもいい。一発撃てればそれでいい。

あたしはそう考えて、シャルロットの四回目のパイルバンカーの攻撃と同時に衝撃砲を撃ち込んだ。

ただのネタ、時間軸とかは気にしないこと（外伝）

真っ暗な中で、何かが動く。それは人間にしては小さな影だったが、人間の大人以上に俊敏に動き回っていた。

「わうわう？」

「きゅっ！」

「くきゅっ！」

「ちゅぴっぴっ！」

「わう！」

そのうちのひとつが確認するかのように声をあげると、帰ってくる声は四つ。

「うわう？」

「きいっ！」

今度は別の方向に確認の言葉を向ける。何を確認したのかはわからないが、何かを聞いたと言うことはわかるだろう。

「わうわう？」

「にゃう！」

ぱっ！とスポットライトが点き、色々なことを確認していた小さな影を照らし出した。

それは、いつもの寝間着だったり制服だったりする白狼ぶちかではなく、きりつとした燕尾服を着ている白狼ぶちかだった。

白狼ぶちかが手に何かを持ったままその手を上に上げ、ひゅっと動かした。

すると暗闇の中からピアノとフルートとドラムの音が聞こえ始め、それが一つの音楽になる。

それと同時に新しく一つスポットライトが何かを照らし、その姿を露にした。

それはリスぶちか。格好は白狼ぶちかと同じく燕尾服だが、白狼ぶちかの持っている細長い棒の代わりにぶちかサイズのバイオリンとその弓を持っている。

「おれは音楽家織斑ぶちか（栗鼠）　上手にバイオリン弾いてみましょう」

そこまで歌ってからリスぶちかはバイオリンを構え、曲に合わせて弾き始めた。

~~~~~　　~~~~~  
都合により省略させていただきます。

「いかーがですー」

リスぶちかがそう歌い終わると、リスぶちかに向けられたスポットライトはそのままに新しいスポットライトが別の何かを照らし出す。

白い兎耳を頭につけた燕尾服のぶちかが、ピアノの前に座っていた。同時に、さっきまで流れていたピアノの音が消えて、代わりにバイオリンの旋律が流れている。

「おれは音楽家織斑ぶちか（白兔）　上手にピアノを弾いてみましよう」

~~~~~  
~~~~~  
都合により以下略。

「いかりがですー」

また新しくスポットライトが点き、今度は燕尾服を着た金色の小鳥ぶちかを照らし出した。手にはフルートを持っているが、今は吹かれていないために音は出ていない。

代わりに少し休んだ白兔ぶちかが代わりに入り、補填している。

「おれは音楽家織斑ぶちか（金糸雀）　上手にフルートを吹いてみましょう」

~~~~~  
~~~~~  
都合略

「いかりがですー」

もう一度スポットライトが新しい影を照らし出す。

狸耳をつけた燕尾服を着たぶちかが、太鼓の前に座っていた。

「おれは音楽家織斑ぶちか（狸）　上手に太鼓を叩いてみましょう」

~~~~~  
~~~~~  
都合略。

「いかりがですー」

そして最後に、指揮をしている白狼ぶちか以外のぶちか達が全員同時に歌い始めた。

「おれ達音楽家織斑ぶちか 上手にあわせて演奏しましょう」

~~~~~ 全略。

「いかがですー」

最後のフレーズを何度も繰り返しながら、ゆっくりとぶちか達はフールドアウトしていった。

side 織斑 一夏

再生の終わったブルーレイディスクを取り出して、『演奏会ぶちか？』と書いてあるケースに丁寧に仕舞う。

空間投影型の画面を消して、一緒に見ていた鈴達の方に振り向く。

死屍累々だった。

「……おい」

「ぐ……がはっ……あ……はあ……はあ……」

「けほ……篝は……まだ声が出るなら平気ね……それよりは……」

「……」 (鼻血をだくだくと流して恍惚の表情を浮かべて倒れているセシリア)

「……………」(鼻血をだくだくと流してだらしなくかつしまりのない笑顔を浮かべているシャル)

「……………」ゴパツ」(今まで耐えてきたが我慢の限界に達して吐血したラウラ)

「……………」(燕尾服を着た白狼ぶちかが出てきたときにぶっ倒れた千冬)

「……………」こっちのをどうにかしないと……………」

「……………」すう……………」はぁ……………」そうだな」

「ちなみに、弾にも送ってみた」

「……………」弾。あなたなら平気だと信じているわ」

鈴は空を仰ぎながらそう言った。何故か、空に笑顔の弾が浮かんだような気がした。

ただのネタ、時間軸とかは気にしないこと（外伝）（後書き）

……書いてから思ったんですが、これっていいんですかね？ 替え歌なんですけど……。
ちなみに、ぷちか達の声は一夏によるアテレコです。

それと、このブルーレイを送られた後の五反田家の一部の惨状を、台詞主体でどうぞ。

「ん？ 一夏からなんか来てるな？ 珍しいこともあったもんだ……
……ってこれ切手とか郵便配達の手紙とか張ってないんだけどどうやって……一夏だし何でもありか」

「仕事が終わって」

「さてと。それじゃあ一夏からのプレゼントを開けてみるかね」

「……なんだこりゃ？ DVD……いや、ブルーレイディスクか？
まあいい、再生してみるか」

「見終わってから」

「お兄！さつきから晩御飯が……きゃああっ！！？」

蘭が扉を蹴り開けたそこには、血まみれで倒れる弾の姿が。

「お兄！大丈夫！？」

「あ……ら、蘭……」

「よかった……何があったのお兄！？」

「……あ……あれを……」

弾が指差したのはテレビ。今は何も映されていないが、どうやらビデオに設定されているらしい。

「テレビ？ テレビがどうしたの！？」

「……ブルーレイだ……ブルーレイが……致命傷を……」

そこまで言って弾の腕が力を失って床に落ちる。蘭は弾の遺言（？）に従って、ブルーレイを再生させてしまった。そして……

「……かはっ……」

どさっ！という音と共に、弾の部屋に死体が一つ増えた。

試合終了、整備に行こうか

……シャルと鈴の方も終わったみたいだし、そろそろ真面目にやろうかね。これ使うとISのプライベート・チャンネルが使えなくなるから自重してたけど、これなら使っても平気だろう。

千の顔を持つ英雄で作るは、毎度お馴染みのアリス・イン・ワンダーランド。

ISに乗れるとわかってから出番がかなり増えていたりするこれをとりにあえずサービスで核金二十個分ほど水滴をつけてばらまく。これで光学兵器の大半は無力化できたし、機動も無茶苦茶なものになるだろう。

「く……またそれですの!？」

「前回も使ったから、今回はちょっと工夫して霧もオプションにつけてみた。効果は倍増だ」

セシリーは始めにミサイル・ビットを俺に落とさせてしまった。だから使えるのはゼロ距離のライフルか近接戦闘用のナイフくらい。あと機体の装甲で直接殴るとか、最悪ライフルで殴るとか？

まあ、セシリーならライフルで殴るってのはやらなさそうだけど。

とにかく、視界は封じてビットの操作とレーザーも封じた。あとはさっさと斬り倒すだけだ。

機動はこっちが上だし、すぐ終わるだろう。

……周りには見せないけど。

「……………零落白夜」

雪片式型の実体部分が消え、鬱陶しいくらいに眩しく輝くエネルギーの刃が現れた。霧のお陰で向こうからは見えないうけど。

そして後ろから近付いて、剣を振る。これで終わり。

……………さてと。それじゃあさっさと帰ろうかね。色々やりたいこともあるし。

ここは整備室。そして整備室と言えば……………そう、かんちゃん。

「やつほーかんちゃん。勝ってきたよ」

「……………うん……………見てた」

どうやら見ていたらしい。それならもう少しミサイルの効率運用に気を使えばよかったかもしれない。

だけど俺の使い方は飽和攻撃で押し通す事だしなあ……………。

まあ、いいか。過ぎたことだし。

「……………ん」

かんちゃんが俺に向かって手を差し出していた。なにかかな？

「……………シロの調整……………しないの？」

「ん、する。ありがとう」

「……………私も……………助かってるから」

そう言ってくれるとありがたいね。

「……あー……眠い……。」

ふあ……とあくびをしてから立とうとすると、かんちゃんに腕を引かれてかんちゃん隣の隣に座らされた。

そして、いつの間にか膝枕に移行している。いったい何が起きたんだらうね？

「……お休み。織斑君」

「……ん。お休み……かんちゃん」

そして俺は目を閉じる。その寸前にかんちゃんが鼻をつまんで上を向いたような気がしたが、きつと気のせいだろう。

……すか……。

side 更識 簪

織斑君が私の膝の上で眠っている。これは一週間に一度は起きることだから珍しくもなんともない。

けれど、今の織斑君だとちょっと問題かもしれない。

全身にぴったりと張り付いているISスーツが、男の子にしてはかなり華奢な体のラインを強調している。

いつも制服の裾から覗くお臍や首筋よりも、なんだか艶かしく見えるのは……きつと気のせいじゃない。

「あ、織斑君はここにいましたか。探したんで……寝てます？」

「……………」

私は山田先生に頷くだけで返し、左手で織斑君の頭を撫で、右手と右足でシロをいじる。

……それにしても、シロの機動は凄い。と言うよりも、織斑君が凄いのかな。こんな真似をしようなんて、私じゃあシロを持っていたとしてもやるうとしないだろうし。

「えっと……一年四組の更識さんですね。織斑君に伝言をお願いしてもいいですか？」

「……はい」

「それじゃあ、今日から男子生徒はお風呂が使えますので、その旨と……あと、織斑先生が『毎朝の一夏分の補給がきかなくなってきた』と嘆いていたので、今度寮長室に行つてあげてください、と」

「……………」

……私は今、笑っていないだろうか？ あの織斑先生がそんなことを言うなんて……………。私としては、なんとか抑え込んでいるつもりなのだけど……………ちょっと不安になる。

笑ったらきつと織斑君を起こしちゃうし、我慢、我慢……………。

「……………」

トーナメント終了、送られてきたモノ

すべての試合が終わり、表彰式に移る。優勝は俺とシャル。賞品は無いけどね。元々欲しくもないけど。

……さてと。それじゃあ……寝ようかな。時間もとれるよ
うになったし。

……すか……。……。

side ????

……うんうん、いっくんはよく寝てるなあ？

その事を確認して、私は静かにいっくんのベッドの脇に段ボール箱を展開した。これぞ束さん流、遠隔展開だよー
いっくんが起きたどんな反応をしてくれるかなー

楽しみ、楽しみ

side out

目が覚めて、ふと横を向いてみると……そこには段ボール箱が一つ

置いてあった。

……誰が置いたのかは知らないけど、多分束姉さんだと思う。だって束姉さんだし。

とりあえず開けてみることにした。上のところを目張りしているガムテープを剥がして、それから蓋を開く。するとそこには、

「……………」

「……………」

三十センチくらいで頭に茶色の狼耳をつけているちー姉さんが俺のことを見上げていた。

とりあえず抱き上げて撫でておく。なんでかうつとりと目を細めるんだが、それがまた可愛い。

「……………」

「はいはい、おいで」

それをじーっと見つめていたのは狼ぶちか。なんだろうっねこれ。嫉妬か？

手招きすると、てててと走ってくる。良いねえ。でも鈴や弾に見せたら大変なことになりそうだよなあ……………。

きゃいきゃいと騒いでころころともつれあったまま転がるぶちー姉さんとぶちかを見ていると、なんでかまた眠くなってきた。

今日は休みだし……………一日寝て過ごそうか……………。

俺の意思を汲み取ったのか、狼ぶちかが俺に駆け寄ってきた。ちょ

つと服がぼろつとしていているのはご愛嬌といったやつだろつ。ぷちー姉さんの方もちよつとぼろつとしてるし。

俺が布団に入ると、ぷちかもぷちー姉さんも布団の中に潜り込んできた。ぷちー姉さんがかぷかぷと甘噛みを繰り返すのがちよつとくすぐったいけれど、まあ、問題ない。

ぷちかとぷちー姉さんの頭を撫でながら……お休みなさい。

side 織斑 千冬

私の朝は、一夏とぷちかの写真を見ることから始まる。これによつて一夏への愛を全身に巡らせ、一日頑張ろつと言つ気力を沸き立たせるのだ。

しかし、今日は違った。なぜなら、私の体が一夏に包まれていたからだ。

何がおきたのかはわからないが、これは確かに一夏だ。一夏の臭いがするし、一夏の声がするし、一夏の味がするし、一夏の肌の感触がするし、一夏がすぐ近くに見える。

ただ、一夏にしては大きいと思つたのだが……どうやら私が小さくなつてゐるらしい。隣にぷちかの姿があつた。

どういふことかはわからない。どうなつてゐるのかも、どんな状況なのかもわからない。

わからないが　　なんだこの幸せな拷問は……っ!?

一夏がこんなに近くにいるのに抱き締められず、撫でられず、頬ブ
二もできず、首筋に舌を這わせることもできないなど……………っ！

……………ええい、我慢できるか！私は一夏の部屋に行くぞ！

そこで私が見たものは、ベッドで眠る一夏とぷちか。そして小さな
私自身だった。

「……………ん……………あ、ちー姉さんだ……………」

一夏はぼんやりとした焦点のあっていない目で私を見つめ、ほにや
りと笑顔を浮かべた。

「ちー姉さん……………一緒に寝よ？」

色々な意味でくらくらしていた私がこの一夏の誘惑に耐えられる筈
もなく……………気が付いた時には私は一夏と同じ布団で眠っていた。
小さい私が尻尾を振っていたり、ぷちかが小さな私の頬をぺろりと
舐めているのを見て、ようやくさっきまでの感覚が小さな私を通し
て伝わった物だと言うのがわかった。

……………それにしても、そろそろ本格的にまずいな。

今までは抑えられたのだが、よく会うようになってから我慢が利か
なくなり始めている。このままでは本当に食べてしまいそうだ。

なにしろ、今も一夏の唇を見て『……………キスくらいなら問題ないの
では？ そうだ、そのくらいやっているところでは普通にやっている
。そして私は一夏が好きだ。うむ問題ない』という思考が一瞬で

展開され、そして数分迷ってから却下されているのだから。

……それにしても、一夏の唇は柔らかそうだな。それに甘そうだ。一夏の唇に指を当て、少し力を入れてみる。すると一夏の唇はくりにりとつぶれ、私の指にほんのりと暖かく、少し湿った柔らかな感触を伝える。

「……んう……はむ……」

一夏にくわえられた指に、ぬるりとした一夏の舌が這う。奇妙なほど熱く感じるそれに私は耐え切れず、意識がまるで木っ端のように消し飛んだ。

目が覚めると、私の腕の中に一夏がいた。それも、腕をきゅっと自分の体に引き付けたまま寝ているという凄まじい威力を誇る姿で。

……やれやれ助かったな。これを前に着せた『だぶだぶのYシャツ一枚』でやられていたら……

『……ちー……姉さん……?』

いつも通りの眠そうな目に、わずかに涙が浮かんでいる。だぼつとしたYシャツのボタンは上から二つが外されていて、胸元まで見えてしまっている。

『ぶぶ……一夏。お前は本当に可愛いな……』

私は一夏の肌に唇を落とし、一夏の反応を楽しむ。

『んっ……あ……』

『こら一夏。そんなに可愛い反応をしていると……食べてしまっぞ？』

私は一夏の耳元でそう呟き、耳をぺろりと舐めた。

ぞくぞくうっ！と体を震わせた一夏が目を開く。

『ち……ちー姉さんなら……いいよ……？』

『……くくくく……可愛い奴め』

私は一夏の顎先を指で持ち上げ、ゆっくりと顔を近づけていく。

『一夏。目を閉じろ』

一夏は素直に目を閉じた。

それを確認して、私はまた一夏に顔を近付ける。

そこまで妄想した私の頭をかなり本気で殴る。非常に痛いが目は覚めた。

……ああ、今の私は相当不味いな。認めたくはないが、束のことをどうこう言えない程度には。

やれやれ。どうするか……。

睡眠愛好会日誌、またの名を一夏観察日記

俺の部屋には、表紙に【睡眠愛好会日誌】と書かれたノートがある。俺は使ったことはないし、中を見たこともないが、鈴達はかなりの頻度で使っているらしい。理由は知らないけど。

……まあ、なんだっていいけどな。

side 睡眠愛好会日誌

六月 日 凰 鈴音

今日は記念すべき睡眠愛好会の活動初日。と言うことで活動の内容をつけるこのノートを用意したから、皆も書きたいことがあったら好きに書くといいわ。

今日の一夏はいつもより少し深く眠っていたように思える。きつと色々あったせいであんまり寝れてないのね。

あと、やっぱり一夏は可愛いわよね。臍チラ最高！うなじもいいし二の腕のぷにぷにもいいけど、やっぱりあのお腹に顔を埋めた時の感触が一番よ！

六月 x日 篠ノ之 篤

今日の一夏は少し寝相が悪かった。膝枕が嫌なのかと思ったがそんなことはなく、ただ頭がちょうどよくはまる場所を見付けるのに時

間がかかっただけらしい。

一度そこを見つけてからは実に大人しく、いつもと同じように髪を撫でさせてくれた。

……ちなみに私は一夏の髪が好きだ。さらさらと指に通るあの感触が良い。

それに匂いも良いしな。なぜ一夏はこれほどいい匂いがするのだろうか？

六月 日 セシリア・オルコット

今日の一夏さんは、いつもとあまり変わった所は見受けられませんでした。

いつもの通りにのんびりと眠っていて、あまり大きく動くことはしません。

ただ、なにかを食べている夢でも見ているのか、時折むにむにと口が動くのがわかります。

ちなみにわたくしは足首から太股にかけてのラインが好みですわね。抱きつきながらこの脚も使ってしがみつく姿と感触が最高ですわ。

六月 日 更識 簪

……初めまして。更識簪です。今日は整備室で寝ちゃった織斑君を運んで、その時に見つけたので書いています。

今日の織斑君はいつもと変わらず私の膝を枕にして、犬耳をくってつと萎れさせたまま寝ていた。なんだかすごく撫でてあげたくなる表情をしていたから、つい撫でてしまった。

それと同時にシロの整備をしているのだけど……なぜか『織斑君がどんなものを求めているか』が簡単にだけどわかるようになっていた。

……これは……慣れ？

私はおでこが好き。撫でていると、なんだか落ち着くから。理由はわからないけど。

六月 日 凰 鈴音

はじめまして、更識さん。そしてようこそ、IEEE（いっぱいいっぱい一夏）へ。一夏に健やかなる眠りを！

今日の一夏はなかなか起きてこなかった。入ってみると、なんとシヤルルが一夏と同じ布団に入って顔を真っ赤しにたまま胸に顔を埋めていた。羨ましいわね代わりなさい。

ちなみに、本当に代わってもらったわ。遅刻しそうになったけど。

脚のラインと、髪と、おでこ………むう、どれも捨てがたい……。

あたしはどれを選べばいいの！？ 教えて弾！

六月 日 五反田 弾

初めましての人は初めまして。鈴ともしかしたら一夏には久し振り。一夏の親友五反田 弾だ。

深夜に書いてるから 日でいいよな。もう一時だけど。

……羨ましいな。是非とも写真を送ってくれ。俺の所にある永久保

存版一夏アルバムに入れるから。中学までの写真が欲しい奴は、是非とも五反田食堂に来てくれよな。

高校生くらいの赤い髪の男が俺だ。注文は『ワンサマーアルバム』だ。出前はやってないけど。

あと、完全予約制だ。予約はここに取りに来る日時と一緒に書いてくれればいい。

それと、鈴。お前に俺に降りてきた天恵を教えよう。

『一夏の全てが可愛い』

これで解決だ。

六月 日 凰 鈴音

どうやって書いたのかはわからないけど、ありがとう弾！迷いの霧が一気に晴れ渡ったような気がするわ！

そうよね、みんなみんな一夏だもんね。選ばうとするのが間違ってるのよ！何であたしはこんな簡単なことにも気が付かなかったの！？

……あたしもまだまだ修行が足りないわね。

六月 日 シャルロット・デュノア

いや、突っ込みどころが多すぎるんだけど！？ どうしてみんな突っ込まないのさ！？

何でいきなり鈴はそんなカミングアウトするのさ！？ そして箒や

セシリアも、乗っちゃ駄目でしょそこは！？
それと更識さんも毒されないで！お願いだから！

あと五反田さんはどうやってここに書き込んだんですか！？ 不法侵入するのはまず不可能なはずなんですけど！？ ワンサマーアルバムは半ダース貰います。いくらになりますか？

……腕の中って、あつたかくって、おちつくよね。

六月 日 ラウラ・ボーデヴィツヒ

……ふむ。なるほど。私の好敵手の腕の中は落ち着くのか。今度試してみるでしょう。

好敵手のことを知ることは大切なことだ。私もワンサマーアルバムを頼もうか。

……ああ、確か出前はしていないのだったか。それではまた今度、直接出向くでしょう。

ちなみに私はあの強い意思の籠った目が好きだな。あの目に見詰められると、体が熱くなってくる。
理由はわかるようなわからないような曖昧な状態だが、あの目は良い。

六月 日 織斑 千冬

……貴様等、面白い話をしているな？ 一夏の話に私を呼ばないとは、まさか私と全力で模擬戦をしたいという遠回しな自殺か？
………まあいい。今回は多目に見よう。話を持ってきたのは鳳だったしな。

そして五反田。貴様はいいことを言った。

そう、一夏は全てが素晴らしいのだ。それをわざわざ分割して考えようとするからこんがらがるのだ。一夏は一夏、それを理解して一つのものとして考えれば、一夏がどれほど素晴らしいかが見えてくるはずだ。

例えば声。一夏の声はそれ単体でもかなりの威力を持つが、それに甘えるような響きと人懐っこい子犬のような視線を加えればその威力は格段に増す。一夏が私に抱きついている状態だったなら更にク
るな。

その他にも背筋や首筋も良い。撫でたときの反応や、ふつと息を吹きかけてやった時にきゅうつと目を閉じる姿はこれまた威力が高い。

さらに (以下数万文字を省略)

六月 日 布仏 本音

わー。織斑せんせいって、実はすっごいブラコンだー

臨海学校、準備中

もうすぐ臨海学校があるらしい。そのための準備は一応してあるけど……泳がないし、水着なんていらないうな。

そう言ったら、鈴とののちゃんとシャルが一瞬でアイコンタクトを交わし終え、いつの間にか買い物に行くことになっていた。メンバーはいつもの六人。多分ちー姉さんもくることになると思うけど。週末の日曜に駅前のショッピングモールに行くことになったが、どんな水着を買えばいいのやら。

「俺、泳がないよ？ 砂浜で寝てるよ？」

「それじゃあパラソル買いましょパラソル。ずっと日の下に居て熱中症になったら困るものね」

「そうだな。スポーツドリンクは……学園で買えばいいか」

「それと、僕達の水着も選んでくれると嬉しいかな」

そんな感じで話は進み、たまに絡んでくる頭の悪そうな男と女にはニアデスハピネスで肺を内側から軽く爆破してちよっとやばい状態にしたりしながら買い物をする。

「一夏。こっちのワンピース型とこっちのタンキニ型はどっちがいいと思う？」

「ん……黄色いほうかな？ 鈴にはそっちの方が似合うと思うぞ？」

「そう。じゃあこっちにするわね」

なんでかシャル以外の分の水着まで俺が選んでいる。まあ、みんな似合ってるけど。

セシリーだけは自分で用意した水着を着るらしい。なんのためにここに来たんだらうね。

ラルちゃんは誰の入れ知恵かは知らないけど黒が主体でレースがついている水着。確か原作でもこんなのを着ていたはずだ。

「ふふん。どうだ一夏」

「……ほー……意外だけど似合ってると思うぞ」
「そうだらうそうだらう。くくく……」

なんで威張ってるのかはわからないけど、その姿も似合ってる。

でも、試着室から出てくるときはちゃんと元の服に着替えてから出てこような？ 見られてもいいなら別にいいけど。

「一夏。こっちの白と赤とならどちらがいいと思う？」

「なんでみんな俺に聞くんだ？ ちなみに最大限ぶっちゃけるとどっちも似合ってるから選びづらいんだよ」

強いて言うならのちゃんには性格的に『情熱の赤』より『純粹な白』が合ってるような気がするが。

「そうか、白が似合うか。なら白にしておくか」

なんで喋ってないのにわかるんだらうな？ 便利だから別にいいけど。

「いや便利だからって……」

「シャルも読んでるじゃん」

「そうですねよシャルロットさん。あと、そろそろ性別の公表をしたらどうですか？」

「……大丈夫かなあ……？」

「平気平気。一夏が止めないってことはなんとかなるってことだから」

「妙な信頼をされてるな？ 確かにこれについては問題ないだろうけど。」

「ちなみにシャルの水着はおそらく原作通り。黄色いし所々黒いし背中が紐が交差してるし。違うかもしれないけど似合ってるし問題ない。」

「あつ！ 織斑君！」

「一夏と……貴様等か。何をしている？」

「一夏に水着を選んでもらっていました。千冬さんも選んでもらったらどうですか？」

「真耶先生とちー姉さんが現れた。なんでちー姉さんはちょっと不機嫌？」

「あ、織斑先生は織斑君に誘ってもらえなくて拗ねて」

「山田くん。学園に戻ったら武術組手をしよう。折角だし五十本ほど」

「そんなことをしたら折角の織斑君との時間が無くなっちゃいますよ？ 織斑先生？」

「なんだか真耶先生が強かだ。ちー姉さんが原作よりも一部份子供っぽい分が真耶先生の方に行っているんだらうか？」

「……織斑先生が選んで貰わないなら、かわりに私が選んでもらっちゃいます ということ……どっちが似合うと思いますか？」

そう言つて真耶先生が見せてきたのは、共にワンピースタイプでパレオ付きの水着。色は薄いピンクと黄緑色

「黄緑の方で」

「そうしちゃいますね。……ほら、織斑先生も」

「うむ……どちらがいいと思う……？」

真耶先生にせかされたちー姉さんが俺に見せたのは、機能性重視な白の水着と、機能性だけでなくおしゃれの方まで視野に入れられて作られただろっ黒い水着の二つ。

まあ、即決だよな。

「黒い方。その方がちー姉さんの髪が映えるんじゃない？」

「……そうか」

ちー姉さんはそう言つと、白い水着の方を戻しに行った。

ちなみに俺は原作の一夏のように気に入った方を先にじっくりと見ることはない。とりあえずほとんど均等にしているつもりだ。

……全員分の水着選びは終わったことだし……寝たい。

なぜか最近さらに小さくなれるようになり、今では100センチメートルを切ることもできるようになっている。

と言うか、気を抜くと勝手に縮む。そして争うように獣耳が遠隔展開してくる。

その度にお持ち帰られそうになったり、実際にお持ち帰られたりしている。

……ただし、お持ち帰りできてるのはシャル（まだ同じ部屋）と鈴（泊まっていく）とののちゃん（同じく）とちー姉さんくらいなも

のだ。

「寝たいなら寝ればいい。運んでやるぞ？　一夏は軽いしな」

「ん……ありがとう……」

ののちゃんのお言葉に甘えて、ののちゃんの背中に乗せてもらう。剣道で竹刀を振っているお陰か、確りと筋肉がついていて安定感がある。

……昔にしてもらったちー姉さんの背中もこんな感じだったよなあ
……。暖かいんだよ。凄く。

そして誰かが　まあ、鈴だろうけど　が俺の体が冷えない
ようにと肩になにかを羽織らせてくれた。嬉しいね。

……すか……。……。

臨海学校、移動中

バスに揺られて移動中。止まるときの細かい揺れはともかく、動いてるときの大きな揺れは寝るのに丁度いい。揺りかごみたいで、ちなみに俺の隣は、百に届きそうな数十回のあいこの結果、ラルちゃんが取っていった。

鈴の勘とののちゃんの気配とセシリーの理論を抜けた理由は、左目を使うことによる動体視力の底上げで出す手を読んでいたらしい。どこかで聞いたことのあるじゃんけんの必勝法だと思ったが……まあ、ルールは守ってるし問題はないだろ。

それとこれは俺達の中ではもはや当然のことなんだが、手を上げてから下ろすまでの間に手の形が四〜六回変わる。俺は身体能力任せで五〜六十回程度は変えられたりもするが……まあ、使わない無駄能力だな。

それでもあいこが続いたのは、流石にラルちゃんは手の動きが追い付かなかつたらしく、最後のに合わせて手の形を変えるのに苦労したからだろう。

……シャル？ シャルは頑張っつていていこうとしたけど、六十三回目で脱落。流石に幸運だけでは勝てなかつたらしい。自分の出したチヨキを凄く恨めしそうな顔で見詰めていたのを俺は知っている。

それは置いておくとして、俺は今、ラルちゃんと寄り添うようにして眠っている。起きているところは五厘（0.5%）程度。正直寝てるのと変わりない。

何で起きているかと言うと、夏になると蚊が多くなるから自動で潰せるようにだ。痒いのは嫌。そしてあのモスキート音（本物）も嫌大嫌いだ。

いつもはそれ専用のライトで何とかするんだけど、ここで使うと勝手に触られて感電されても困るし使えない。普通の人間ならまず死ぬ威力だし。

……まあ、何でもいいけど。ここに蚊はいないみたいだし。

……ふぁ……。

side 篠ノ之 篤

ラウラと一夏が眠っているのを、私は（自分では見えないが、おそらく）優しい目で見守る。一夏の隣になれなかったのは残念だが、こうして一夏を眺められるのだから……まあ、いいだろう。

「可愛いわよね」

「本当にな」

「……いや待つてよ。何で鈴がここにいるのさ！？ このバスは一組のバスだよね！？」

「千冬さん……っと、織斑先生を一夏の生写真と実際に使っていた腹巻きで買収したわ」

「それいいの！？ いや駄目だよね！？」

「五月蠅いぞシャルロット。一夏が起きたらどうするつもりだ。一夏がくれたソードサムライXの錆にしてやるうか？ 手入れはするから錆にすらさせないが」

「ちょ……冗談だよな？ 冗談なんだよね！？」

シャルロットは小声で叫ぶという器用な真似を試みせた。まあ、これなら冗談にしても構わないか。

「もちろん冗談だとも。なあ鈴」

「そうよ。あたし達がこんな人目のあるところで殺るわけないじゃない。どうしても殺るならセシリアの定番よ」

「その通りですわね。バレるような真似はいたしませんわ」

「冗談にしても酷すぎるからね！？ 冗談に聞こえないんだってばあ！？」

ん？ 『冗談に聞こえない』だと？

それは当然だろう。私だけでなく、鈴やセシリアもそこそこ本気なのだから。

……まあ、それを表に出すようなことはしないがな。一夏のそばに居られなくなるのは困る。

「はっはっは、シャルロットは小心だな？ いいことだと思っぞ？」

戦いには必要だ。恐怖が無ければ人間はどんどん退化していくだろうし。

………おや、どうやら目的地に到着したようだな。一夏を運んでやらなければ。

「篠ノ之。織斑は私が運ぶ。お前はボーデヴィツヒを運べ」

「………職権乱用では？」

「フツ………権力とは使つたためにあるのだ」

そう言って千冬さんは、いつもと同じく小さくなった一夏を背負ってバスを降りていった。

……まったく。千冬さんはブラコンだな。それも超弩級の。

「仕方無いわよ。だって千冬さんだもん」

「……まあ、そうだな」

やれやれ。

心の中でため息をつきながら、私はラウラを背負う。

……軽いな。ちゃんと食べているのか？

……いや、体格からしてこれが適正体重的なのか？ 私はあまり気にしていないからよくわからないが……。

「気にしてないのにその体型って言うのは……羨ましいわねえ……」

……ちよつとくれない？

「私としても少し貰って欲しいのだがな。残念ながらそういう技術がない。諦めてくれ」

私はもう少し小さい方がよかった。手のひらにはギリギリ収まらないくらいの大きさがよかったのだがなあ……。

理由？ この胸で寝ている一夏を抱き締めると、一夏を窒息させてしまう可能性があり、抱き締められないからだ。かなり悲しい。そしてその点では千冬さんが羨ましい。

……まあ、羨んでも事実是不変なので諦めてはいるがな。

臨海学校、睡眠中

目が覚めるとちー姉さんがいた。が、気にせず眠ることにした。

ちー姉さんの腕枕はいいね。固すぎず柔らかすぎず、高すぎず低すぎず……。

それに、よく俺の髪をなでりなでりと撫でてくれるし。ぎこちない撫で方のはずなんだけど、なんでか気持ちがいい。

「……………ふにう……………」

……………どうやら今は猫系がくつついていてるらしい。猫っぽいあくびが出たし、尻尾が猫だし、耳も感触的に猫だし。

まあ、いつものことだ。

もう一眠りしようとかまたあくびをして、そこで俺が空腹だったと言うことに気が付いた。

……………まあ、いいか。眠いし寝よう。一食や二食抜いたところで死には……………。

……………すか……………。

side 織斑 千冬

くきゅう、という軽い音で目を覚ました私は、とりあえずその音の音源を探してみることにした。

きゅくうう〜……

……それはすぐに見付かった。それもそのはず。その音は私のとなり、一夏から聞こえてきたのだから。

さらに正確に言うならば、一夏の腹から聞こえてきたのだが。つまり空腹なのだろう。

……そう言えば、一夏は昔から食事を抜いてまで寝ていたな。今日は昼抜きか。

ならば、夕食は確りと食べさせなければいけないな。一夏の健康のためにも。

「ん……………うみゆ……………」

「ぐふっ!？」

……………だが、夕食の時間にはまだ早い。もう少し一夏を堪能していてもいいはずだ。この柔らかな一夏の抱き心地を離すのは惜しいしな。

一夏を抱き締め、頭を撫でる。一夏の髪に鼻を埋め、ゆっくりと深呼吸をする。

……………ふう。愛情が暴走してしまいそうだ。

side セシリア・オルコット

隣に座る一夏さんを見る。一夏さんは起き抜けということもあり、いつも以上に眠そうにしている。

たとえばふらふらと揺れる体や、こっくりこっくりと船を漕ぐ頭。そして

「……………ふにゆ……………」

という可愛らしい寝言。これのお陰で多くの方達が血の海に沈んでいる。

それは当然耐性の低い生徒だけではなく、花月荘の従業員にも飛び火しているあたり、流石一夏さんだと思っ。

生き残っているのは……………わたくし、鈴さん、篝さん、シャルロットさん、ラウラさん、更識さん、布仏さん、山田先生、そしてこの女将の九人だけ。後は血の海が暴走して鎮圧されたか前後不覚ですわね。

……………まったく。修行が足りませんわよ？

「ふにやう……………」

くねりと揺れる猫尻尾。たまにピクリと震える耳。可愛らしい声と行動。

……………ああ……………天国ですわ……………

「一夏さん。あーん、です」

「……………んう……………あむ……………」

……………ふう……………こんなに幸せだと明日が恐ろしいですわ……………。

臨海学校一日目の間、一夏はバスを降りて（降ろされて？）から夕食まで、私達の前に出てくることはなかった。千冬さんの手によって教員室の布団の中に監禁されているのだろう。鎖のかわりに千冬さんが抱き締めていたと見た。

……実に羨ましい。妬ましい。

「はいはい、割と本気の冗談はいいから。今は一夏の写真を撮るのが大切よ……パシャリと」

「……ふむ、その通りだな。妬むより先に私達にできることをやるう……ええい携帯の画像が粗いな。こんなことになるのなら姉さんに改造してもらえばよかった……まあ撮るが」

「後で送ってね」

「無論だ総帥」

「総帥になった覚えは無いわ。……あたしはＩＩＩの本部長よ」

「それは失礼した、本部長殿」

鈴と私はちらりと視線を合わせてから、同時にフツと笑う。

「あ、一夏がおねむよ？ 行ってきたら？」

「そうしたいのはやまやまだが、今行ったら確実に千冬さんがラウラにやったあれを仕掛けてくるだろう。ラウラと違って私はか弱いからな。あんなものはできれば食らいたくない」

「……自分が膝の上に乗っけてるものをよく見てから言ってみなさい」

「膝の上……？」

鈴に言われて自分の膝の上を見てみると……おや一夏。いつの間に私の膝に頭を乗せたのだ？

「……………」

それと千冬さん。そんな雰囲気が悪いと一夏が怖がるぞ？

そういつたことを視線に乗せて送ってみると、凄まじい殺気が私‘だけ’を貫いた。気配を読んでみると、見事に殺気が一夏を避けている。

「……………命知らずね……………」

「たまに言われるよ」

……………さてと。姉さんへの頼みが増えてしまったな。報酬は一夏の風呂上がり（髪の毛しっとり、肌上気、タオルでわずかに湿っている頭を私に拭かれている）の写真で構わないだろうか？

ちなみにその写真は鈴がアナログオンリーで撮った写真だから流石の姉さんも持っていない……………らしい。嘘臭いが。

……………当然だが服は着ていたぞ？ 流石の私や鈴も一夏の裸を無断で撮ろうとはしない。

……………何があつてそうなったのかは知らないが、鈴と、鈴の友人の一人は許可をもらっているらしいが。

「……………」

「ちょ、箒、あたしを巻き込まないでよ。千冬さんからの視線がいきなり強くなつたじゃない」

「それはすまないな、本部長殿」

「次は無いわ。私が出会う前の一夏の写真をくれたら考えないでも

ないけど」

……あつたか？ 出会いが確か小学校だから……… ああ、あるな。

「ちようだい？」

「構わんぞ。私と千冬さんと姉さんも写っけていてもよければ」

「……大事なの？」

「まあ、相当な」

出会ったばかりの一夏と私は、お世辞にも仲が良いとは言えなかった。姉同士が友人だったから、たまたま千冬さんが私の実家の道場に通っていたから………程度の仲だったな。

……それが変わったのは………いつのことだったか………。

「……… 等。回想に入ろうとしてるところ悪いんだけど、千冬さんの視線と殺気がそれだけで殺人レベルにまで強くなってきているから辞めて。いくらあたしでもそろそろ胃が痛いわ」

「……… 回想という逃避から戻って見れば………ここまでの濃密な殺気は一夏が本気でキレた時以来だな」

「……… え？ あんたもアレ見たの？」

「……… なんだ鈴木か」

あの時の一夏を思い出してみても……… 一気に体温が下がった気がする。だから私達は何も言わずに食事を終わらせ、すぐに席を立つ。私のかわりにシャルロットに膝枕をさせて、すぐさま退散する。

……… シャルロットの胃の冥福を祈ろう。

臨海学校、まだ睡眠中

……すか……。……。

side 鳳 鈴音

あたし達はいま、鬼の寝床に来ている。

「誰が鬼だ、誰が」

千冬さんです。………と言いたいのを我慢して何も言わずにスル
ー。何か言ったら………プチッ、されちゃいそうで怖い。もしくはラ
ウラみたいに

【ガッ！ギチギチギチギチギチギチギチ………ヴォンヴォン
ドゴッ！ガズッ！ゴッ！ヴォンガゴオンッ！ズダンッ！ゴリゴリ
ゴリゴリゴリ………（かなりシヨッキンクな映像であるため、
効果音だけでお送りしました）】

………つていうのにはなりたくないね。あの後しばらくラウラの目
のハイライト消えてたし。瞳孔が開きっぱなしになってたし。怖か
ったわね。

ちなみに、一夏は今も寝ている。お腹も膨らませたし、しばらく起
きないだろう。

「……それで、あたし達を呼んだ理由はなんですか？ 一夏の写真を全部渡せつて言うのだったらIS使つてでも抵抗しますよ」

「安心しろ、それは違つ……が、後で商談があるんだが」

「後でですね、わかりました」

どうやらいつもの千冬さんに戻つたらしく、あたしや篝やシャルロットに殺気を叩きつけるようなことはしないでいてくれている。

「なに、ちよつとした興味でな。……お前達、一夏のどこを好きになつたんだ？」

千冬さんは片手で一夏を撫で、もう片方の手でビール（作業用オイル、と悪戯書きがされている）を飲みながら聞いてきた。はいはいそういう話ですか。千冬さんも女なんですな。

「あたしは優しいところです。あと、辛いときにそばにいてくれるタイミングの良さ？」

「同じく、辛いときにそばに居て色々な方法で励ましてくれる優しさですね。可愛いからというのも無いとは言いませんけど」

こうしてすぐさま答えを返すのはあたしと篝。篝はどうだか知らないけど、あたしは前に『一夏のどこが好きなのか』を考えたことがあつたからすぐに答えられた。

「そうですね……優しく厳しく激しくわたくしを教育して下さつたから……と言うのが始まりで、今は………純粹ちじゆんに好きだから……ですわね。どこが好きなのかはわかりませんが」

まあ、あるわよね。どこが好きなのかわからないけど、なんでか好きって言うのは。

「僕は やっぱり、優しいところ、です……」

初々しいわね。可愛い可愛い。一夏ほどじゃないけど。

「な……なんで撫でるの？」

「可愛らしいから？」

にこにこ笑いながら言ってみる。

「ラウラは……ラウラ？」

「……すっ……」

気が付いたらラウラは一夏のすぐそばで眠っていた。

……ラウラ。起きないと危ないわよ。千冬さんのアイアンクローが
少しずつ迫っていつてるわよ。言ったら矛先がこっちに来るから言
わないけど。

「……起きろ、ボーデヴィッヒ」

「むぐっ！？」

おお、口封じ《マウスキラー》。口だけじゃなくて鼻も塞いでるよ
うに見えるけど……大丈夫かしら？

それに、ギチギチとまではいかないけどミシミシって音はしてるし。
骨が軋んでるんじゃない？

「……！……！……！……！……！……」

ぱたぱたと無音で暴れるラウラに千冬さんは冷たい視線を向け、静
かに手を離れた。こんな時でも止まらずに一夏の髪を撫でたり指先

に絡めたりしている逆の手とのギャップが恐ろしい。

「……話は聞いていたか？ ボーデヴィット」

「はい、教官」

びしっ、とラウラが千冬さんに敬礼を返すけれど、さっきまでの「」とを見ていたからシユールでしかないわね。

「私は、一夏の心の強さに惹かれたのです」

確かに一夏の心は鋼鉄の粘りとダイヤモンドの硬度を併せ持ったような強さを持つてるわよね。

そのくせ霧や煙みたいに掴み所がなくなつて、どんな形にも見えるつていう不思議設計だし。

まあ、それでも普通に優しいっていうのはわかるんだけど。

「まあ、色々聞いたわけだが……一夏はお前達にはやらん」

「構いません。奪い取りますから」

「あたしは一夏の方から選ばせてみせようかしら？ それなら千冬さんも邪魔できないでしょうし」

「わたくしはそばにいられるだけで幸せですわよ？ できることなら少し構って欲しくはありますけど」

あたし達三人はニヤリと笑う。ラウラとシャルロットもあたし達の言葉を聞いてやる気になっている。

そして、そんなあたし達を見て、千冬さんはニヤリと……いや、むしろニタリと笑った。ゾクゾクときそうな笑顔だった。

「それでいい。女ならば惚れた男の一人くらい奪って見せる」

……うわかつこいい。いつも一夏にデレデレしている千冬さんと同
一人物とは思えないわね。周りがキヤーキヤー騒ぐ理由もわかる気
がするわね。あたしは一夏がいるから特に騒がないけど。

臨海学校、まだまだ睡眠中

こしこしと目を擦って……夜であることを確認した。

……ん。じゃあ寝よう。よい子は寝る時間だよー、と。

……すぴー……。

……はみ……はみ……。

side 織斑 千冬

私の夜は、一夏に抱き締められて気絶することで幕を閉じる。たまに人生の幕も降りてしまいそうになることもあるが、そんなものは気合いと一夏への愛情でどうとでもなる。

私が死んでしまったら、誰が一夏をどこかの国や個人の魔の手（人体実験上等な不法な研究所など）から守るといふのだ！

……束？ あの奇人変人極まりない奴に託せと？ 本気で言っているならば、私は貴様の皮膚を剥ぎ取り筋肉と神経を切り分けて筋肉を硝酸で溶かし、神経と血管と骨だけになった体を鑪で少しずつ削って粉にして魚の餌にしてくれる。

まあ、慣れのお陰でしばらくは一夏を抱き締めたり撫でたり頬擦りしたり頬や額にキスしたり嘗めたりできる。堪能しよう。

「……かぶ」

「ッ……！？」

「はむ……」

「つぐう……！？」

「……はみ……はみ……」

「……」（へんじがない、ただの萌え死死体のようだ）

……ぎゅっ……。とどめ

side 織斑 一夏

起きたらちー姉さんが幸せそうな顔で俺を抱き締めていた。何でここまで幸せそうなんだろ……？ と思いつつ、俺はちー姉さんを抱き締め直してまた目を閉じる。

……そう言えば、昨日の記憶が無いなあ……。また寝てたか？
睡眠こそが俺の生き甲斐だから、別にいいけど。

……ちー姉さんって、なんかいい匂いがするよな……。

side 織斑 千冬

前にも言った通り、私の朝は一夏の寝顔を眺めることから始まる。
今回は写真ではなく、一夏本人が私の腕の中に居るため、愛情チャージがいつもより早い。

狼耳を着けたぶちかも私の背中に身を擦り寄せていて……。ああ、

うむ、役得だ。

ただ、そろそろ一夏に離してもらわないと愛情が暴走して何をしてしまうかわからん。姉弟でそういったことは不味いと頭では理解しているのだが、頭の片隅で悪魔が私に囁くのだ。

『食べちゃえ食べちゃえ』

『法律なんて周りが勝手に決めただけのものだし、IS学園では親近婚は禁止されていない』

『それに、もうキスはしてしまったんだからおんなじだよ。誤差誤差』

……い、いや、しかしだな……

『やつちやいなって。弟さんも喜ぶと思うよ？ 痛いのは君だけだし』

『我慢は体によくないよ？ ほら、もう限界なんじゃあないのかい？』

『きつと弟さんの体は美味しいよ？ 柔らかくて、すべすべしていて……』

……っ……………。

『……もしかしたら、君のトモダチに食べられちゃうかもよ？ ぱくっ……………っね』

『くすくすくすくすくすくす……ほらほら、食べちゃいなよ、織斑千冬。きつとすっごく美味しいよ？』

「……ちー姉さん？」

はっ！？ と気が付くと、一夏が私のことを見つめていた。

「……………大丈夫？ 目が血走ってるけど……………」

「……………あ……………ああ、大丈夫だ、問題ない」

一夏がここで話しかけてこなかったら……………まずかったかもしれないがな。

「そっか……………まあ、ちー姉さんが平気って言うならそれでいいよ」

そして一夏はまた私に擦り寄り、肩のあたりに顔を埋めて寝息をたて始めた。

「…………………………」

私は無言で一夏の頭を撫でる。まったく、可愛い奴だよこいつは。

……………それにしても、一夏が寝ているところを見ると眠くなるな。起きたばかりだと……………言う……………の……………に…………………………。

目を開くと一夏がいた。ぷちか達がいた。たくさんいた。

右を見る。ぷちかが折り重なって眠っている。

左を見る。一夏が私の腕と小さな私を抱えて眠っている。

布団がない。ここはどこだ？

「ふはははははあゝ！ここはいつくんとちーちゃんの夢の中っ！束さんの超科学によりちーちゃんといつくんの夢の世界をくつつけてお邪魔したのだっっ！」

「出ていけ」

「あう、ちーちゃん酷い！東さんはすつごく頑張ったのに！感謝料を請求します！具体的にはいつくんをハグハグさせあばばばばばばい〜た〜い〜よーっ!？」

「当然だ。痛くしているんだからな」

ふざけたことを言い始めた東の頭を締め上げる。骨が軋みを上げることが、知ったことではない。

「ちよつと前より格段に強いよーっ!？」

「一夏の貞操を護るためならば、私は鬼にだってなるさ」

「ぴぎいいいっ!？」

数分間締め上げてから振り回して真上に投擲。落ちてきたところで掴んで頭から地面に埋めてやった。犬上家だな。

スカートの中身が見えないように、その辺にあった紐で脚にくくりつけ、放置する。一夏の教育に悪いからな。

「……つぶはあ！痛かったよちーちゃん。いつくんをハグハグするくらいいいじゃないか。初めてって訳じゃないんだから」

「……初めてじゃない、だと……?」

私がそう聞き返すと、東は私から目をそらして大量の冷や汗をかきはじめた。

「……え、えー？ 東さんそんなこと言ってたかナー？」

「一夏。東に抱かれたことはあるか？」

東に聞いてもらちが明かないので、今度は一夏に聞く。

「……………むう……………キヌまでしかされてない……………」

そう言つて一夏は小さな私を抱き締めて意識を落とした。

……………抱く、とはそういう意味では無かつたのだが……………そうか、キヌまでか。

「ち……………ちちち……………ち……………ちゃん……………？」

……………ああ、ここまで怒るのは久し振りかもしれないな。確か、一夏を拐おうとした黒服の言葉を盗み聞きした時以来だ……………ッ！

……………頭が冴える。すかーっと青空のように澄み渡つていて、それでいて氷河のように冷静だ。

その上体は火照つていて、まるで私が焦熱地獄か煉獄の炎にでもなつたような……………そんな気分だ。

「さあ、東……………貴様の罪を数えろ！」

「に、やあああああああつ！！！！」

私の夢のなかで、東の悲痛な叫びが響いた。

side 織斑 一夏

……………起きてみると、ちー姉さんはなんだか変な顔をしていた。具体的には怒りと憤怒と激情が入り雑じつたような……………同じか。

……どんな夢を見てるんだろっね？

臨海学校、まだまだ睡眠中（後書き）

千冬の夢の中身はただの夢です。束ならあり得る話ですが、今回はただの夢です。

臨海学校、漸く起きた（前書き）

.....なんかがごめんなさい。

臨海学校、漸く起きた

ちー姉さんを起こして一緒にご飯を食べる。ちー姉さんにあーんで食べさせたり、ぷちー姉さんにあーんで食べさせたり、ちー姉さんにあーんで食べさせてもらったり、ぷちー姉さんが小さい雪片を振り回そうとしていたのでぷちかに頼んで止めてもらおうとしたらなぜかころころ転がっていったり、ちー姉さんの膝の上で撫でられたり、白猫耳がくつついていたので猫のポーズをとりながら「にゃん」と鳴き真似を試してみたら周囲が赤に染まったりとか……………まあ、色々あった。

ちなみに、ののちゃんと鈴も鼻を抑えている手の隙間から血を溢れさせていた。

「……………血じゃ……………ないわ……………」

「これは……………血ではなく……………」

「……………つく……………一夏様への……………」

「『愛情』よ!」

「『愛情』だ!」

「『愛情』ですわ!」

……………仲が良いね。良いことだと思うよ。いろんな意味で。

ついでに言うと、シャルはちょっと致命的とも言えそうならしい笑顔で気絶していて、ラウラは鼻血は出していないものの頭がオーバーヒートしたらしく気絶中。

起きている鈴とののちゃんとセシリーも、出血多量で動けないらしい。

……何が言いたいかと言つと、

「可愛すぎるよ！っくーんっ！！」

こうして俺を拉致ろうとしている束姉さん（一人不思議の森のアリ
ス）を止めることはできないと

「たあああばああああねええええええつ！！！」

復活したちー姉さんのアイアンクロー！束姉さんはえげつないダメ
ージを受けた！

なんと、一夏を落としてしまった！

「大丈夫？ 一夏」

しかし、鈴に拾われた。鈴は一夏を拾った！

「……………ん。大丈夫だ……………お休み」

「これから装備の稼働テストがあるんだから、すぐに起きてもらつ
わよ」

……………どうせシロには使えないと思うけどな。

そう言えば、かんちゃんは機体だけはもうできるからこの臨海学校
にも来てるし、装備もいくつか送られてきていたはず。それ使うの
かな？

確か完成したつて聞いた後、色んな人に話を聞いてちよこちよこ強
化していったみたいだし、マルチ・ロックオン・システムはまだ七

割程度だけど荷電粒子砲の方は完成したって言う話だ。直接聞いたんだけど。

……もしかして、俺の分までかんちゃんがやることになるのかね？
それならそれで問題無いような気がするけど。

「それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。迅速に行え」

うん、かつこいいよちー姉さん。でもさ、その右手に掴まれてヤバい感じに痙攣してる束姉さんにはちよつと引く。

「あ……あの……織斑先生？ そちらの方は……？」

真耶先生がちー姉さんに恐る恐る聞きにいくと、ちー姉さんは不思議そうに自分の右手を持ち上げて……

「……ああ、忘れていたな」

いやいや、人を一人掴んでおいて忘れるってなにさ。掴んでるのが当然みたいな状態か？

「これは束だ。篠ノ之はこっちに来い」

「は……はい……」

当たり前のように言うけれど、束姉さんはあれでもISを作った大天才（天災？）科学者なんだけど……いいのかあれ。

……まあ、いいか。どうせすぐ復活すると思うし。束姉さんもたい

がいシスコンだからな。ののちゃんとの話のときには元通りになっているだろ。

束姉さんはやっぱりすぐに復活した。今はののちゃんと話をしていく。

「やあ！久しぶりだね篝ちゃん！」

「ええ。お久しぶりです姉さん。お元気なようで何よりです」

「もちろん元気さっ！篝ちゃんも元気みたいでよかったよ！それにしても大きくなったよね。特におっぱいが」

「姉さんのほうが大きいではありませんか」

「最近またおつきくなっっちゃってね」

「そうですね。やはり大きすぎるのも困り物ですね」

ののちゃんと束姉さんは仲良く話を続けているけど、周りの目が怖いよ。特に一部の人の目が。

ちなみにかんちゃんはそこまで怖くはないけどなにも映していないような目でののちゃんと束姉さんの胸を凝視している。

「あははは……この合宿では関係者以外はこの島には入っちゃいけないはずなんですけど……」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言うね？ ISの関係者と言うのなら一番はこの私をおいて他にはいないよ」

「関係者というのが『ISの関係者』ならばその通りですが、『学園の関係者』としては少しばかり足りないような……」

おお、言い返した。

「……ですので、篠ノ之さんと織斑君と……できればそれ以外の人のISも少し見ていただければ『臨時の技術者』として処理できるのですが……」

「やだよ」

「………ですよね。織斑先生に聞いてましたが、やっぱりそうですよね」

まあ、諦めたほうがいいと思うよ？ 束姉さんは俺と同じくらい我儘だから。

「まあ、安心していいよ。私は篝ちゃんに頼まれた物を持ってきただけだしね。ついでにフィッティングもしていくけど、別にいいよね」

質問の形をとってはいるけど、どう聞いても引く気はないな。

それがわかったらしい真耶先生は、小さくため息をついてしまった。

「……もう好きにしてください」

「いい判断です山田先生。こいつは何を言っても無駄ですから、山田先生は各班のサポートをお願いします」

「……はあ………はい、わかりました」

「むう、ちーちゃんが優しい………さてはこのおっぱいでたぶらかしたなおっぱい魔神め〜！」

そう言っただ束姉さんが真耶先生に飛びかかって行って………視界がなにかに塞がれた。多分鈴の手。耳も塞がれている。多分こっちはのちやんだろ。

………まあ、何が起こってるのかは大体わかってるけどさ。気配と原作知識で。

十秒くらいしてから解放される。そこには顔を真っ赤にしながら胸を両手で庇っている真耶先生と、頭から砂浜に突っ込んでいる束姉さん。そして束姉さんが立っていたであろう場所の一步後ろに立つち姉さんがいた。

……何があつたのかわかりやすいな。本当に。

臨海学校、紅椿参上！

「……姉さん。大丈夫ですか？」

「うづ……ちーちゃんが酷いんだよ篝ちゃん……傷心の束さんを慰めて？」

「はいはい」

そう言いながらのちゃんは束姉さんの頭を撫でる。どっちが姉がわかったものじゃない。

「……復活！」

「ならもう一度いっておくか」

「ひーん助けて篝ちゃん！」

「織斑先生。話が進みませんのでそろそろ……」

……本当に、どっちが姉か……。

まあ、束姉さんは楽しければ良いって感じなんだろうし、ののちゃんを守るのはちゃんとやってるから姉としての仕事はやってると言ってもいいんだけど。

……不器用だけど。

「うづ……ありがとう篝ちゃん……」

「構いませんよ。姉妹じゃないですか」

「そんな優しい篝ちゃんにお姉さんからプレゼントおーっ！があるよ。さあさ大空をご覧あれっ！」

腰に左手を当て、右手を空に向かって突き上げる束姉さん。それを見ていたほぼ全員は、つられて空を仰ぐ。

ズムツ！

鈍い音が響き、銀色の塊がそこに現れていた。

落ちてきたようには見えなかったし、見えないほどの高速で落ちてきたにしては衝撃波やらなにやらが少なすぎる。しかしそれでも放射状の落下跡があるので落ちてきたはずなんだが………まあ、慣性停止か何かをやったんだろう。束姉さんだし。

「じゃじゃーん！これぞ私が篝ちゃんのために作った専用機こと『紅椿』！篝ちゃん以外が乗ろうとするととりあえず周りに居る奴皆殺しにするまで止まらないようにプログラムしてあるから注意してね！」

「……何をやっているんですか姉さん。危険すぎるでしょう」

「しょうがないよ。全スペックが現存するほとんどのISを凌駕するISだからね。奪われたときのこともしっかり考えておかないとまあ、皆殺しにするって言うてもちーちゃんといっくんと篝ちゃん、そして私自身は平気なんだけど」

……あれ？ 現行IS全てを上回るんじゃない？

「ちなみに、速度関係と一部の機動系は白式……いや、シロが上だよ？ シロはそれに特化して作ってあるからね」

……なるほど、そのせいか。確かに原作ではコアは一つだったはずだし。

もしかして、紅葉の方もコアをいくつか積んでいたりするの？

「積んでるよ？」

積んでるそうさ。恐ろしいな。

「さあさあ篝ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをするからね。おいでおいで」

「……全く、姉さんは……」

ののちゃんはそんなことを言っているが、ちょっと嬉しそうさ。原作と違って大抵の場合笑っているようになったのちゃんの『ちよつと嬉しそう』は、『すつごく嬉しそう』と訳して構わない。

「……それでは、お願いします」

「堅いよ」。実の姉妹なんだからもつとキャッチーな呼び方でいいのに」

「……例えば、どんな？」

あ、これ本気でわからなかったんだな。嫌みとかそういうのじゃなくで。

「……うーん……」

「……むう……」

「……うーん……」

「……むう……」

「似た者姉妹だと言うのはよくわかったから、さつさとフィッティングとパーソナライズを終わらせる。悩むのはそれからだ」

「わかったよちーちゃん。それじゃあ篝ちゃん、あとで一緒に考えようね」

ぼちっ、とよくあるボタンを押す音が鳴り、紅鮭(きつ)と違う。と言つか違ってほしい(が)しゃがんでから操縦者を受け入れる形態に移る。しゃがむ機能とか地味に便利だな。

「そうですね。あとで一緒に」

ののちゃんは束姉さんにつこりと笑顔を向けて言った。原作よりもずっと仲が良い。よかったよかった。兄弟姉妹で仲が悪いのは嫌だよ俺は。

みんな仲良くが一番だ。その方が厄介事も減って睡眠時間が増えるし。いいことづくめだ。

「え〜っと、篝ちゃんの戦い方は基本は剣だよね？」

「はい、そうですが」

「よかったよかった。近接戦闘主体の万能型に調整してあるからすぐ馴染むと思うよ。なんと自動支援装備付き！すごいでしょ？」

「姉さんの頭がどうなっているのか本気で気になるくらい凄いなと思いますよ。流石姉さん」

「えっへん！」

それは誉めて……るんだろうね。ののちゃんの誉め方はよくわからない。

まあ、束姉さんは嬉しそうにしてるし、別に良いけど。

「はい、フィッティング完了〜 パーソナライズが終わるまでは

大人しくしててね？」

「はい。……………それにしても、凄い機体ですね。スペックから色から装備から何から何まで」

「そりゃあもうね。束さんが篝ちゃんのために直々に作ってる訳だし、特別であって当たり前だよ」

まあ、束姉さんもシスコンをこじらせてるしね。特別製で当然ですよ。

あとセシリー。こう言う時には話しかけない方が良いでしょう。束姉さんはちー姉さんとののちちゃんと俺以外には　　原作にはもう一人、娘としているくーちゃんとかやらが居たけど、俺は知らないから省くとして　　基本毒舌だから。また心を折られても知らないぞ。

そこで、群衆の中から小さな声が聞こえた。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？　身内ってだけでだよねえ。なんかずるいよねえ」

……そうか？

「身内って結構大切なことだと思うけどな。俺もちー姉さんの身内じゃなかったらIS学園き来る前に拐われて解剖なり実験なりに使われてたと思うし」

なんかいきなり空気が重くなった。なんでだろうな？

「そもそもなんで家族のことに口を出すのかわからないんだが。こんなの誕生日の贈り物と変わらないだろうに。ちなみにISのやり取りは法律で禁じられているけど、それは『前に束姉さんから渡された467機について』の話だと明言されてるから、束姉さんが新しく作ったISは束姉さんの好きにしちゃって良いんだよね。悔しかったら束姉さんに気に入られるように動けば？　もう無理だけど」「い……一夏？　なんで挑発してるの？　と言うか誕生日のプレゼントにしては規模が大きすぎると思うんだけど！？」

「挑発？　してないよそんなの。なんであんな現実を見てない知識も足りない脳が足りない奴にどうして俺が時間を使ってやらなくっちゃいけないんだ？　そんなことをやってる暇があるなら寝るよ」「

「同感だね。あれは歴史の勉強をしたことがないか、あるいは夢見がち過ぎる脳味噌のお陰で宗教の教主とか為政者の建前だけの戯言を心の底から信じ込んでしまっている可哀想な馬鹿なんだから。あんなのに挑発の言葉を向けるくらいならいっくんを膝枕していた方がずっと有益だよ」

「それってただの欲望ですよね!？」

「シャルロット。諦める。姉さんも一夏もこうなったら暫く止まらん」

「あ、そうだいつくんシロ見せて。東さんはシロがどんな風に進化してきたのかに興味津々なんだよ」

「良いですよ」

「止まったあ!？」

止まるさ。面倒だし。

……………おいで、シロ。

(一部を除き) 最高性能、紅椿

東姉さんがシロを調べている間にのちゃんの紅梅のパーソナライズが終わったらしい。ハイパーセンサーに出てきたらしいそれを視線でクリックしてから、のちゃんはゆっくりと空に浮かび上がり始めた。

「で、いつくんのシロに新しい機能をつけてあげよっか？ コスプレ機能で千種くらいの服が展開できるように」

「辞めてください」

「そう言うと思ってたよ。だからこれあげる。コスプレ用のISね」

そう言うって東姉さんが渡してきたのは灰色っぽいISコア。二次移行はしていないらしく、まだ丸い。

………東姉さんは何を考えてこんなのを作ったんだろうか？ あと、名前は？

「名前はそのまま【コスプレイヤー】だよ。【クロゼット】でも良いけどね」

「じゃあクロで」

「クロゼットからクロね。いいんじゃない？ なまじシロっていうISを持っているせいで色だと勘違いしちゃうよね」

……まあ、そのあたりはしょうがない。呼ぼうとするとまた変な呼び名になると思うし。クラレットとか。

ちなみにクラレットと言うのは赤ワインのことらしい。あんまり一般には知られていないけど。

だから、ホテルに行って「クラレット一つ」ってからかうのはやめてあげよう。新米だったらまず引っ掛かるから。

「それじゃあパーソナライズも終わったみたいだし、空飛びついでに刀を使ってみようか？」

「刀……ああ、これですか」

「そうそう、それぞれ。右のが『雨月』で左のが『空裂』ね。武器のデータ送るよー」

束姉さんはちゃちゃっと空中に指を走らせて武器データをののちゃんに送る。それを確認したらしいののちゃんは、同時に二本の刀を抜いた。

そう言えば、ののちゃんは二刀流の方が強かったね。一本の方がちよつとだけ上手いんだけど。

「束姉さんの解説付きだよー 雨月と空裂、どっちからがいい？」

「……では、雨月から」

「おうけい！雨月は対一使用の武装で、打突にあわせて刃部分からエネルギー刃を出せるんだよ。なんと連射機能つき！射程はアサルトライフルくらいでたいして広くないけど、紅椿の機動性なら大丈夫！やってみて？」

束姉さんのお願ひ(?)を聞いたからかどうかはわからないが、ののちゃんは右手に持った雨月を雲に向けて突き出した。

するとこのののちゃんの右手の周りに赤色の光球が現れ、次々に飛び出してその雲を見事に穴だらけにした。

「次は空裂ねー。こっちは対集団用で、斬撃に合わせて帯状の攻勢エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動展開してくれるから超便利、というわけでこれ落としてみてね」

束姉さんが出したのは、十六連装のミサイルポッドが二つ。それが現れたと思った瞬間に、一斉射撃を行った。

「ののちゃんがんばー」

「百人力だ！」

ののちゃんがそう言ったのと腕を振るったの。いったいどっちが早かったのやら。

とにかく紅楸の出した攻勢エネルギーの帯がミサイルをまとめて撃ち落とす。出力すごいな……。

「まあ、これで武装の説明は終わりだよ。あとは慣れていくにつれてちょこちょこ追加されていくはずだけど」

……後々になって凄まじい超兵器が出てくるような気がしたのは間違いだらうか？

「……奇遇ね一夏。あたしもなーんか嫌な予感がするわ」

『うむ。妙な気配が近付いてきている気がするしな。遠すぎてあまりはつきりとはしないが』

……うん、たぶんそれ束姉さんのやったアレだと思う。なんだっけ……シルベスタ・スタローン？ 違う気がするけど。

例えるならば、ラルちゃんのISの名前がツヴァノレシエフ・レーズンだっというのと同じくらいおかしい気がする。

「それはおかしいわね。いろんな意味で」

「おかしいよな。色々と」

うん、おかしいな。

「ああ、姉さんに質問が」

「ん？ なにかな？ 篤ちゃんの質問だったらなんでも答えちゃ
うよ？」

「……もう一つ武装があるのですが……」

「……………え？」

ひゅん！と風を切つて降りてきたののちゃんが、束姉さんに自分の
見ている画面を見せる。

「……もう出ちゃったのか。っていうか、流石の束姉さんもアレだ
けで穿千を構築するなんて予想してなかったよ……………」

「……………やっぱり、おかしいですか？」

「ほんとなら十月くらいに構築されると見てたんだけど……………ま
あ、速いならそれに越したことはないから良いけどね」

なるほどね。本当なら……………確か……………七巻で構築されるアレか。出
力可変型のプラスタライフル。威力と射程距離は折紙付きの。

「うーん……………ついでに試し撃ちしてみる？ 大出力すぎてPICを
姿勢制御に結構回さなくっちゃまともにあたらなないけど」

「いえ。エネルギーがそろそろ切れそうなので」

ののちゃんはしっかりそつちにも目をやっていたらしい。流石武人
だ、視野が広い。

でも、確か紅檀にはワンオフがあつて、エネルギー切れとは無縁の
はずだけど。

……………ああ、そうか。まだ使いこなせていないんだな。貰ったば

緊急事態、わー大変

ちー姉さん、事件です。いや、本気で。

原作通りと言っちゃえばそれで終わりなんだけど、なんか明らかに空気が痛い。あと眠い。

「一夏。今は流石に寝ちゃ駄目よ」

「ん〜……………わかった」

眠いんだが…………。まあ、仕方無いか。ゾナ八虫による監視網で見ている限り、どうも面倒なことになっちゃったみたいだしね。

ハワイ沖で試験稼働中だった軍用ISが暴走したようだ。名前は…シルフィード・エヴァンジェル……………だっけ？ 違う気がするけど。

とにかくそれが暴走して、何故かこのすぐ近くを通過するルートを取るようだ。一時間はかからないくらいで。

地球上のどこにでもいる監視用ゾナ八虫でわかっていたけど、本当に面倒。

ののちゃんがISを手に入れて、そのスペックを見せつけた当日にこんなのが来るなんて……………おかしいとは思わないか？ 俺は思った。これ絶対束姉さんが絡んでる。原作でもそうだったはずだし。

ちなみにいまはもう説明が終わり、作戦会議の真っ最中だ。

そのIS…………シルバリオ・ゴスペル（空間投影型ディスプレイに載ってた）の仕様は、広域殲滅用の特殊射撃型。銃ではなくそれ専用の射撃用の武装があるらしい。弾丸は実弾ではなくエネルギー弾で、

触れると小規模ながら爆発を起こす。

エネルギー総量は軍用ISだけあってかなり多く、かなり長い時間飛び続けることができそうだ。

その上攻撃と機動力に特化した機体で、ちょっとシロに似てる。武器が剣か射撃武器かの差はあるが、たった一つしか武装がないところもそっくりだ。

……きつついな……セシリーが超遠距離から狙撃して曲げ撃ちで一方的にぼこせればなあ……。

ISを使わなくてよくて、さらに後々のことを考えないでいいんだつたら、千の顔を持つ英雄で束姉さんが作ったあの無人ISを数億単位で作って蹂躪させるなり宇宙戦艦降らせるなりしてやれば楽にいけるけど……後の事を考えると……無理なんだよなあ……。

ミサイル弹幕も多方向同時射撃とエネルギー弾の爆散が相手なら相当多くつき込まないといけないだろうし、原作そのものよりたぶん少し強くなっているだろうから厄介だ。

束姉さんが何を考えているのかはわからないが、俺とののちゃんだけを強くして用意した敵役を強くしない……何てことがあるわけないし。

……嫌な予感がするな。これは三枚目の切り札も切らされるのか？

……使いたくないな……あれ使ったら絶対ちー姉さんに怒られる。

もうミサイルを秒間一万くらい撃ち込み続けるとか、大出力レーザー兵器で一撃必殺とかそっちの方が楽だと思う。

駄目だしされたらもうアリス・イン・ワンダーランドで方向感覚とハイパーセンサーいかれさせてシルバースキン・リバーズで動きを

止めてから叩き斬るしか

「一夏っ!」

「わっっ!?!」

いきなり尻尾を掴まれて変な声が出てしまった。びっくりしたあ……。

「なに? 尻尾は敏感なんだから優しくしてくれよ」

「あ、ごめん。……で、話は聞いてた?」

全く聞いてない。どうやって潰すかばかり考えてたから。

それを敏感に感じ取ったのか、鈴は溜め息をついた。溜め息をつくのはいいから尻尾をわしゃわしゃしないほしい。腰の内側からぞくぞくしてくるから。そしてなんか妙な気分になってくるから。

「ふあっ!あ、や……んんっ!?!」

「……………箒。ちよっと私のこと殴ってくれない? 手が……止まらない……………っ!?!」

「あ、うあ、や、鈴、だめだつて、あ、ふああっ!」

……………いやいやいやかなり本気でこれはまずいって声抑えられないし体は動いてくれないしやばいやばい本当に待っ

ゴガスッ!

鈍い音が響いて鈴の手が尻尾から離れた。本気でやばかった。真面目に意識とか色々なものが飛ぶところだったぞ。

そうやって抗議したいところだが、全身がくったりとして動きたくない。動けるだろうけど動きたくない。

「 鳳。貴様、私の一夏に手を出すとはいい度胸だな」

「おおうあああ……あ、頭が……頭が割れ……っ！」

ちー姉さんの情報端末クラッシュ！鈴は頭を抱えて悶絶している。
痛そうだな。なにもしてやらないけど。

「一夏、大丈夫？」

「……おー」

「……大丈夫じゃなさそうだね。一夏が福音を落とすことになっただけど……いける？」

「……十分休ませてくれればなんとか……」

「うん、わかったよ」

どうやらここは原作通りに俺とのちゃんが行くことになったらしい。すごい体力使った……前まではこんなこと無かったんだけど、なんで急にここまで敏感になったんだ？

……束姉さんがなにか弄ったのか？俺がシルファリオン・ドスペラードに苦戦するように。

「一夏。シルファリオン・ドスペラードではなくシルバリオ・ゴスペルだ。お前の特性はよくわかっているから言うが、無理をして呼ぶ必要は無いぞ」

「じゃあシルバリオファミリーで」

「シルバニアファミリーか。そこまで呼べるならシルビーでもシーでもギンでも良いだろうが」

「じゃあギンにする。」

……ああ、よかったよかった、普通に喋れるくらいまでは回復した。回復できなかつたらどうしようかと思っただよ。

ぼてりと転がり、シャルの膝に頭を乗せる。ちょうどいい高さだと思しながら、鈴がちー姉さんにお仕置きを受けているのを見る。

「……………」

ギシギシギシギチギチギチギチギチ……………（アイアンクローで締め上げている音）。

ヴォンヴォンドガンツ！ガツ！ガツ！ドムツ！ヴォンドムツ！ダズンツ！！（そのまま振り回して机、壁、壁、床、振り回してからの床の順番で叩きつけてから踏みつけた音）

ドゴスバゴンツ！ダムボゴツ！（蹴り上げて天井に叩きつけられて落ちて床にぶつかった所に鳩尾のあたりにちー姉さんの爪先が入った音）

「お。織斑先生！いくらなんでもやりすぎです！凰さん死んじやいますよ！？」

「安心しろ山田先生。凰はこの程度ならあつという間に復活する」

「そんなわけが」

「ぶはあっ！あー、自業自得とはいえ死ぬかと思ったわ」

「なんで無事なの！？ あんなにポコポコポロポロスタボロで、あのときのラウラより酷かったのに！？」

「気合いよ。あと一夏への愛と謝りたいという強い思いの力」

「どんなさー！？」

……………今つて一応緊急事態のはずなんだけどね。緊急事態（笑）になっちゃった。

まあ、こうして笑い合っている方が俺達らしいと言えば俺達らしい

んだげど。

出発、紅と白

回復した俺はののちゃんに運ばれて作戦区域に入る。もうすぐ白マリオ（違うはず。方向転換の度に気の抜けるような音が聞こえるようなISは嫌だ）と接触するはずだから、それなりに気を張っている。

ただ、運ぶ時は軽い方が良さだろうと言うことで小さく小さくなっている。現在の身長は92センチくらいのはず。

このサイズになったときにシャルが暴走しかけてラウラとセシリーに止められていたのが記憶に残っている。正直に言って、ちょっと怖かった。ついさっきの鈴よりはましだったけど。

その鈴は自分の右手を左手で掴んで

「鎮まれ……あたしの右手……っ！こんなところで暴走しちゃ駄目なのよ……！」

という中二感溢れることをやっていた。確かに実際に暴走されるとまずいことになるから助かるけど。

展開装甲から放出されている真紅のエネルギーを放出し、俺を乗せているとは思えないほどの速度で紅椿は空を駆ける。

「……一夏。惜しいが違う。紅椿ではなく紅椿だ。アカでいい」

「アカちゃん？」

「ちゃん付けはよせ。私の力が抜ける」

それはまずいな。もしギンとぶつかれなかったら作戦遂行が難しく

なる。

束姉さんがよつぼどの事をしていなければ勝てると思っただが、束姉さんはそれをまるごとひっくり返せるような『よつぼどの事』を用意しているかもしれないし、油断はできない。

してなければしてないでその方が嬉しいけどな。最善は、今の俺がこうして考えていることが全部的外れの考えすぎで、束姉さんとはなんの関係もない暴走事故だった、って所かね。ついでに新兵器の暴発かなにかで自滅してくれるとさらに嬉しい。

……ないだろうけど。

「……想像以上にエネルギーの消費が早いな……これでは本当に一夏を運んだ後は大したことはできんぞ」

「この速度で運んでくれるだけでもありがたいけどな」

「そうか。一夏がそう言うならばよしとしよう。……まだ眠いか？」

ののちゃんはまだ小さい俺を見てそう言う。ある意味では俺はいつでもどこでもどんな時でも眠いんだけど。

「……大丈夫だ。接敵五秒前には起きてるよ」

「……ならばいいがな。……あと十秒だ。集中しろ」

「あいよ。ののちゃんも接敵後は自己判断で頑張って」

俺はそれを最後に意識をギンだけに集中する。

できれば一撃で落として何事もなく帰りたいんだけど………といふ思いを込めて、零落白夜を雪片を振る一瞬だけ発動して攻撃をする。

瞬時加速からの零落白夜はエネルギーの問題であまり使ったことがなかったが、数回使ってみた時以上にガリガリとエネルギー残量が

削られる。これも高速戦闘仕様ならではのことだろうな。

しかし、ギンはなんと当たる直前にぐにやりと体をよじらせて零落
白夜の光刃を避けた。中の人間のことが心配になるような避け方を
したんだが、大丈夫なのか？

やってるんだから平気だろうと割り切つて、俺は速度を落とさない
まま反転してギンに攻撃を加える。速度だけならのちゃんのアカ
にも負けないシロは、僅かにギンの装甲を削り取った。

『……敵機確認。危険度Aと判断。攻撃レベルAで対処する』

ギンは異様に正確な機動で剣を避け、至近距離から弾幕を撃ち放っ
てきた。

……つておいなんだあの弾幕の密度は。気持ち悪いんだよ。

「お前のやったミサイル弾幕も似たようなものだ」

ののちゃんがそう言いながら現れ、ギンの弾幕を纏めて切り捨てた。
エネルギーを相当食いそうだけど便利だな。

「ののちゃん」

「わかつているさ。援護する」

以心伝心だな。

ギンの翼のようなスラスタに数多く存在している砲口から、小さ
な羽根のようなエネルギー弾が発射される。弾幕ゲームは神経使う
からあんまり好きじゃないが、苦手じゃない。

何が言いたいかというと、このくらいの弾幕なら普通に避けられる
と言っただ。

それにしても、ギンのエネルギーはどれだけあるんだろうか？ 二時間半以上高速飛行を続け、今はこうして高機動戦闘に加えて圧縮エネルギー弾幕をばら蒔いているというのに、一向に切れる気配がない。

「……………一夏。一分預かるぞ」

なにかを考え付いたのか、のちゃんは高速で転回して彼方へと飛び去っていった。何がしたいのかはわからないが、のちゃんに任せられちゃったんだから仕方無い。一分くらいだったら普通に持たせられるだろうし、別にいいけど。

ののちゃんがいなくなった分密度を上げたギンの弾幕だが、この程度だったら速度と気合いにまかせて避けられる。

時々掠りそうになるが、シールドエネルギーが削れるだけで大したダメージは無い。

『一夏。その動きを止められるか？』

急にののちゃんからプライベート・チャンネルの通信が入る。まあ、可能か不可能かで言えば可能なんだが……………そこまで離れて何をするんだ？ アカには遠距離系の武器は……………あつたな。そう言ええば。

『あいよ。でも止めるのはちょっと時間がかかるから、少し待っててくれ』

『わかつているさ。落とされるなよ』

通信が切れて、ののちゃんが飛んでいった方向からかなりのエネルギーが感知された。

同時にギンも気が付いたらしく、のちゃんの方に向かって飛んでいこうとしたが、

「よっと」

瞬時加速で回り込んだ俺がその道を塞ぐ。ギンはこの程度では止まってくれそうもないので、ショットガンをばら蒔くことで無理矢理足止めをする。

高速飛行時には実弾系射撃武器の威力は上がる。ギンはショットガンの弾を見事に避けきって見せたが、速度が僅かに落ちたし機動の道も見えた。

「そこだ」

その道を通ろうとしたところで、空間固定で動きを止める。あとは俺がのちゃんとギンを繋ぐ直線から移動すれば、のちゃんが決めてくれるだろう。

ギンの全身を固めている空間固定を維持しながら、俺はその場から十メートル左に移動する。

『恐らく、これを撃ち終わったら紅椿のエネルギーは切れるだろう……運んでくれよ?』

まあ、画面を見る限りかなりのエネルギーを集中しているわけだし、予想はしてたからいいけどね。

『穿千……発射!』

カツ!と真紅のエネルギービームが超高密度圧縮状態で放たれた。

出発、紅と白（後書き）

白マリオ「イヤッフー！」

……いや、嘘だろおい

ののちゃんの撃った超高密度圧縮エネルギー・ビームがギンに接近する。それは一瞬のことだったが、何でかかなりゆっくりに見えた。そのゆっくりな世界のなかで、ギンが動く。翼のようなスラスターの砲口を全てののちゃんの方に向け、まるで鷹か鷲のような大型の鳥がその翼を広げるように、スラスターをばさりと動かした。

砲口が光り、単発の小さなエネルギーの羽根が撃ち出されるのかと思っただが、撃ち出された羽根がギンのすぐ前方で集束を始める。

溜めの時間は僅かだったが、三十六の砲口から随時追加され続けたエネルギーの総量は馬鹿にならない。

そしてギンがスラスターを飛ばたくように前に押し出すと同時に、集束しきったエネルギーの塊が羽の奔流となって放出された。

……こんな攻撃って原作にあったっけ？ 束姉さん印のちょびつと魔改造か？ ……ちよつとじゃねえよ！

空間固定は解けないし、接近してののちゃんの大出力レーザーに巻き込まれるのも嫌なので左の衝撃砲で攻撃。翼の一部を削り取ってダメージを与えるついでに、例の羽の奔流のエネルギー供給の邪魔をする。

そうしている間にゆっくりした世界の中で、ののちゃんとギンのエネルギーの奔流同士が正面から衝突した。

轟音が響き、エネルギー同士が互いを消滅させ合う。どちらもエネルギー兵器であってレーザー兵器でなくてよかった。レーザーだったらお互いにすり抜けて両方に当たるから。

エネルギーがぶつかり合った中心で衝撃波が起き、遙か下の海面にまで被害が行っている。

先生達が海上を封鎖していてくれて助かったな。こんなところに船なんかがいたら、確実に転覆するか壊れてしまっただろう。本当に、封鎖してくれていて助かった。

確かに海上は封鎖されている。だから、船がいるはず無い。つまり、シロが映し出している船は『こんな所にはいない』。きつと塵気楼かなにかだな。そうに違いない。

舞い踊る羽と真紅の極光はお互いに削り合い……………のちゃんの
方が撃ち負け始めた。

確かに初めのうちはこのちゃんが圧倒していたが、やはりエネルギーの使いすぎが痛かったらしい。あと数秒は持つだろうけど、それ以降は保証できない。

だから俺はギンにかけていた空間固定を解除し、のちゃんの所に瞬時加速で向かう。ギンにグレネードをいくつか投げ付けておくのも忘れない。

……………間に合うかね？

side 篠ノ之 篇

私は福音との撃ち合いになり、拮抗しているのを見て作戦の失敗を悟った。

確かにあんな砲撃方法を福音が持っているというデータは事前のス

ペックデータにはなかったが、それでも失敗は失敗だ。

私の策は福音に大出力砲撃系の装備がないことが前提で、撃ち合いになることを想定の中に入れていなかった。

それに、と肩の穿千に目を向ける。

穿千は相当エネルギーを食う兵器だろうと予想はしていたが、まさかここまでのものだとは思っていなかった。

高速の移動と一夏の運搬でそこそこエネルギーを削られていたこともあるが、それでも七割近く残っていたエネルギーがほとんど削られていくのがわかる。

エネルギー残量のゲージがどんどん短くなって行き、ついに警告メッセージが視界の隅に点灯し始めたが、私は無視を決め込んで前に視線を向ける。

今砲撃をやめてしまえば拮抗している福音の砲撃に飲まれてしまうし、かといってやめなくともいつかはエネルギーが切れて同じ未来が待っている。

八方塞がりとも言えるこの状況の中で、私は前だけを見つめ続ける。

……なぜか、目まぐるしく変わっているはずの今が遅くなり、そして私の過去にあった思い出が頭の中身を占領して行く。

一夏との出会い。私の実家の道場で私が竹刀を振っているのを、一夏は壁に寄りかかりながら眠そうな目で眺めていた。

一夏との初めての会話。いつも私を眺めているだけの一夏に竹刀を突きつけ、『稽古をつけてやる』と言ってやったこと。

初めての試合では、一夏は私の剣をひたすら避け続け、そして時間切れまで一度も攻撃らしい攻撃はしてこなかった。

何度も延長して試合を続けて、三回目の延長の試合で一夏は私の振った竹刀に自分から当たりにいった。

試合に勝って勝負に負けた私は、何度も一夏に向かっていく。この頃に学校でよくからかわれたのだが、一夏はからかわれても平然とあしらっていた。

ただ一度一夏が本気で怒った時。千冬さんを悪く言った教師は次の日には一夏を見るだけで恐慌状態となるようになり、学校をやめさせられた。

ISが世界に広まり、私は姉さんの妹と言う目で見られることが多くなった。しかし、一夏は今まで通りの私として見てくれた。

転校してからは電話もできず、手紙のやり取りもできないという状態が続き、私は少しだけ姉さんを恨んだが、それはすぐに政府に向いた。

しばらく続く色褪せた生活。完全に白黒モフクロではないだけかもしれませんが、ないが、姉さんの失踪の後に何度も行われた尋問に辟易としていた。

剣道大会での優勝。確かに色々なことがあってなにかに当たりたいと言う気持ちがあったことは認めるが、自分の剣のあまりの醜さを見て、頭の中身を抑え込む術を身に付けた。

感情を抑制し、気に入らないものをただ否定するだけということをやめてみれば、少しだが交遊ができた。やってみれば簡単なことだ

ったのだ、と考えたな。

そして、一夏がISを使えるという話が広まり、IS学園への入学が決まったという話をテレビで見た。

……少し前までならあまり素直に認めることはできなかっただろうが、今ならできる。

私は一夏が好きだと。

そしてIS学園での再開。全く変わらない一夏に苦笑いと、それ以上嬉しいという思いが溢れる。

抱きつかれた時には少し驚いてしまったが、けして嫌ではなかった。ここでも私が一夏のことが好きだと再確認。

一夏に振り回され、やきもきし、甘えてくる一夏を可愛がり、真剣に向き合い、生涯の友を得て……今、私はここにいます。

……ああ、私はまだまだ死ねないな。一夏に告白もしていないし、鈴達との掛け合いも楽しい。

だから、私はエネルギーの放出をやめた。

穿千は真紅のエネルギーの放出をやめ、がしゃんと砲口を閉じる。それと同時に展開装甲を防御に使用おうとエネルギーを集めたところで、一夏の乗ったシロが私を抱えて砲撃範囲から移動した。

「助かったぞ、一夏」

「なに、気にすんな」

一夏と私はそう言いながら笑った。

………それにしても、お姫様だっこを一夏にされるのは………初め
てだな………。

強制睡眠、そして一時帰還

ののちゃんを抱えてギンの砲撃を避ける。羽根の奔流はそこそこ離れた海面に衝突してかなりの被害を出していたが、まあ、少なくとも今はどうでもいい。

海面にギンの砲撃が衝突すると同時にギン本体の方からも爆音が響く。俺が手土産に投げつけておいたグレネードが爆発し、ギンのシールドエネルギーをそこそこ削り取ったらしい。ギンの装甲が僅かに削れていたため、絶対防御も発動していただろうと予想される。

「……ちよつと暴れるから、下りててくれる？」

「……ああ。悔しいが、あまりエネルギーが残っていない。……」

「……後は任せた」

そう言っただけでギンの機動用エネルギーを相当削っていったののちゃんは、海面近くにまで下りていった。

どうやら海面近くでISを解除して、エネルギーを少しでも回復させようというつもりらしい。アルカリ乾電池じゃあるまいし、無理だと思っただけ。

ワンオフでも発現させれば話は変わってくるんだらうけど、今は使えないはずだし。

「……まあ、気乗りはしないが頑張ろうかね。」

頑張ろうと言ったが、結局やることは変わらない。相手の撃ってくる弾幕を避けて、こちらの攻撃を当てる。

羽根の弾幕自体の速度があまり速くはなかったことが救いとなり、

今のところ被弾ゼロ。ただしそろそろ決めないと機動系統のエネルギーが不味い。三割くらいしか残っていないし。

遠距離系の武器はあの弾幕を抜けられず、接近戦に持ち込もうにもやはり弾幕に遮られる。

もう一度空間固定で止めてしまえば良いのだろうが、ギンをまるごと止めるとなるとかなりのエネルギーを持っていかれるし、かなり離れているから余計に持つていかれる。

近ければ近いほど、止める空間が狭ければ狭いほど、使うエネルギーは少なくなるが……逆に言えば遠ければ遠いほどエネルギーを使うわけだ。

はつきり言って、制限解除していないシロだとエネルギーが不安。と言っか、まず足りない。

……やくれやれ。後が怖いぜ……。

東姉さんに頼んでシロにつけてもらった特殊な武装は三つ。

一つは曲げ撃ち可能な衝撃砲。かなり初期にお披露目となった、両拳の狡い武器。

一つは空間固定能力。使いどころは限られるが、かなり使える第二の能力。

そこにちー姉さんのリクエストで雪片式型が入り、偶然（物語的には必然）に零落白夜が入るが、俺がお願いした能力ではないので除外する。

三つ目の特殊な武装。それはさらにピーキーで、試合ではけして使

えない能力だったりする。

それを使おうとした所で、違和感が走る。確認のためにシロに捜査を頼むと、すぐに結果が出てきた。

ほんの数秒前までは三割くらいは残っていた駆動系エネルギーが、全くのゼロになっていた。

そして駆動系のエネルギーが減った分、満タンを越して増えているシールドエネルギーを見て確信した。

………東姉さん。確かにこうすれば俺はISの絶対防御の致命領域反応のお陰で動けなくなるし、確実にしばらくの間退場させられるだろうけど

動きが止まった俺に、ギンが翼のようなスラスターの砲口を向ける。そしてそこから一斉に発射されたエネルギー弾幕が、俺の視界を埋め尽くす。

いくらなんでも、これは酷いだろ。

そう思いながら、俺はののちゃんにプライベート・チャンネルを繋ぐ。伝える言葉は一言。

『ごめん、なんか無理っぽい』

それと同時に、あるものをののちゃんのISであるアカに送りつける。

そして全身に衝撃が走り、シールドエネルギーがガリガリ削れていく。

……こつそり体を強化しているからあんまり痛くはないが、シールドエネルギーがひどく削られていくお陰で意識が飛び始めた。

……任務失敗かあ……。

side 篠ノ之 篇

一夏からの通信が入った瞬間に、私は再び紅椿を展開して空を舞う。福音の砲撃の直撃を受けて巨大な爆発に包まれた一夏を必死に探す。と、爆煙の中から生身の一夏が落ちてきた。

私は一夏の体を受け止める。どうやらなんとか生きていたようだが、ISの絶対防御の効果で眠っているらしく、目を覚まさない。いつもならば私が呼び掛ければ軽く返事をする一夏だが、いまはなんの返答もしてくれないところからもその事がわかる。

……私はまだ戦うことはできる。エネルギーは僅かだが、戦える。

しかし、一夏は今戦うことができない。気絶しているからと言うだけではなく、ISであるシロもボロボロであることが予想できてしまうからだ。

私は福音を睨み付ける。ギシリと噛み合った歯が軋みをあげ、頭の中身と太陽が入れ替わったような熱が私を焼くが、それでも私は福音に背を向ける。

……もう一度、私は福音と戦うことになるだろう。先生達が止めようとも、確実に。

そのために必要な物は、ついさっきに一夏から送られてきた。これのお陰で私はまだ戦えるし、一夏と一緒に戦うことができる。

そう思うと同時に、紅椿の装甲から金色の光の粒が溢れ出し、削られるばかりだったエネルギーが回復していく。確認してみると、そこには『絢爛舞踏』という文字が躍り、これがワンオフ・アビリティだと示していた。

……もう少し早く出てきてくれればよかったのに、という思いを打ち切り、私は回復したエネルギーをフルに使い、全速力で戦場を離脱した。

……それにしても、なぜ一夏は避けなかった？ まるで、残っていたはずのエネルギーが一瞬にして消えてしまったかのような動きをしていたが……。

……まさかな。

帰還後、密かに支度中

一夏は眠る。起きる気配は一向に無い。

side 篠ノ之 篇

全速力で一夏を旅館に連れ帰った私は、他の専用機持ちと同じように待機していた。

ただ、エネルギーは既に全て回復させ終わっていて、今は時を待っている。

ベッドの上で『大きな姿のまま』眠る一夏に目を向け、頬を撫でる。熱を持っていることに安堵し、そして力の無かった自分と、一夏に怪我を負わせた福音に怒気を向ける。

……私は、一夏の隣に立ちたくて、姉さんにISの作成を頼んだ。姉さんは私に答え、素晴らしいISを作り上げてくれた。最強にして、最硬にして、最速に最も近い最高のIS。紅椿を。

それなのに私は、そんな素晴らしいISを作ってくれた姉さんにも、信じてくれた一夏や鈴達にも、応えることができなかった。

昔のように力に流されてしまう自分はいない。だが、それと同時にどこかで慢心していた自分も居たのだろう。そうでなければ、こうして昏睡している一夏の隣で、ただ座っている等ということもなかったはずだ。

だから今は、そんな私を私の中から追い出し、ひたすらに思い出し続ける。

一夏が福音に落とされた時の驚愕を。

爆煙の中から落下した一夏を受け止め、反応が反ってこなかった時の憤怒を。

激情の中で福音に背を向けた時の、私への憎悪を。

この場所に戻ってきて、治療を終わらせた一夏の顔を見たときの悲しみを。

そしてそれらを纏め、純化し、昇華させて行く。この感情は、昔に感じたことがある。

当時はこの感情をなんと呼ぶのか知らなかったが、今ならばわかる。

これは、殺意だ。

………とは言え、実際に殺すことは無いだろう。私も抑えるし、一夏もあまりよく思わないだろうと考えればどうとでもなる。

そして、私の中の全ての感情が福音への殺意に転換し終わった時。誰かが突然ドアを開いた。

……この気配は………鈴か。

「篝。あたしの言いたいことはわかるわね？」

「ああ。丁度私も瞑想を終わらせ、これから有志を募ろうとお前たちに順次声をかけていくつもりだったのだ」

私は立ち上がり、閉じていた目を開く。そして鈴と目を合わせて………そこでふと、少し前に鈴から直接聞いた話を思い出した。

鈴は元々激情家。だが、一夏と関わっていくうちに角がとれ始め、少しずつ丸くなっていったという話だ。

その話を聞いた時は半信半疑だったが、今の鈴を見てなるほど思ってしまった。

その目は、私と同じようで全く違う色に染まっていた。

例えるならば、私が純化した氷のような殺意を持つとすると、鈴のそれは何もかもを取り込みながら静かに燃える炎のような殺意。

……私達は、私達が自覚している以上に似ているのかもしれない。

「……………場所はわかるの？」

鈴の問いに私は首肯して答える。

「ああ。一夏が落とされる前に、福音に発信器をつけていたらしくてな。その受信コードを受け取った。それによると、福音は現在三十キロ離れた沖合上空に居る」

「そう。流石は一夏、と言つべきなのかしらね」

私と鈴の視線が同時に一夏へと向き、辺りには沈黙が広がった。

「……………一夏がこうなったのは、あんたのせいじゃないわ」

「……………感謝する」

ぐっ、と拳を作り、さらに力が加えられる。この痛みも、恨みも、また純化してゆく。

「簷が手伝ってくれたから、全員パッケージのインストールはもう

終わってるわ。専用機は動くけれど、まだ少し不安なところがあって参加できないからせめて、って言ってね」
「そうか。簪にも感謝しなければな」

私の紅椿はパッケージのインストールが必要ない。つまり、既に私達の準備は全て終わっていると言うことだ。

「……………それでは、行こうか」
「ええ。鬼の居ぬ間に墮天使狩りね」

墮天使とは、言い得て妙だな。

機械の体と機械の翼を持ち、電子の意味で暴れまわる『銀の福音』。なるほど、確かに墮天使のようだ。

私は、左腕の紅椿を握り締める。

……………我儘な操縦者で済まない。だが、もう少しだけ……………お前の力を私に貸してくれ。

そう思うと、私の左腕の紅椿から、ほんの少しだけ気配の揺らぎがあった。

「……………ありがとう」

私はそれだけ呟いて、鈴達の作戦会議に混ざっていった。

……馬鹿者共が。あんなに大きな声を出しておいて、気付か
れていないわけが無いだろうが。

確かに誰にも言わずにここまで支度を終わらせていたのには驚愕す
るが、一夏の周りであのような話をするような馬鹿があるか。

「……でも、止めないんですね」

山田先生が私に笑いかけながら言う。

「ああ、止めん。………と言うか、山田先生は止められるのか？」

「……無理ですね」

ならば、私達にできることは限られているだろう。責任をとるのは
……大人の仕事だ。

「そうですね、織斑先生」

……さて。それでは書類を作ろうか。『私達が専用機持ちを全員作
戦に参加させた』という書類をな。お前にも手伝ってもらおうぞ、束。

「はいはい　ちーちゃんの頼みだったら何時でもウエルカムだ
よ。四十六喜んで！」

「五月蠅いぞ。それと、算が気になるのはわかるが手は抜くなよ」
「もっちろん！」

……やれやれ。また面倒なことになるな。

一夏の夢、そして接敵

よくわからないが、なんでか俺は海に居た。ここがどこかもわからないし、何でここにいるかもわからない。

確か、俺はギンを相手にしているときに妨害を受けて落とされたはずなんだけど……。

そう思いながらあたりをきよるきよると見回してみると、なんでもそこには真っ白いワンピースを着た真っ白な髪（白髪とは言いたくない）の少女が歌いながら踊っていた。楽しそうだな？

とりあえず、俺は寝ることにした。近くにあつた流木の端を枕にして、俺は砂まみれになるのも構わず横になって目を閉じる。

潮騒と少女の歌が良い感じに混じりあつて……俺は浅く眠り始めた。

side ラウラ・ボーデヴィツヒ

ハイパーセンサーに映し出された福音に照準を合わせる。胎児のようにつづくまっついているその姿は、まるでなんの力も持たない少女が自分の宝物を身の内に隠そうとしているかのようだ。

だが、私達は知っている。事前に見たスペックデータと、直接相對した幕からの新情報で、福音が相当の戦闘能力を所有していると言っことを。

私はためらうことなく引き金を引いた。ほんの数秒で【ブリッツ】

から吐き出された砲弾は五キロの距離を詰め、大爆発を起こした。

『初弾命中。続けて砲撃を行う』

福音が私を見つけるより早くもう一射。これも命中したが、これで私の場所はばれてしまったな。

向かってくる福音に、ブリッツからの砲撃を連射する。しかし福音にそのほとんどを落とされ、もしくは避けられてしまう。予想より……… 僅かに遅く飛びながら。

……なるほど。相当量のエネルギーを削ったと言っていたな。筈のあの砲撃とほぼ等量と、一夏を落とした時のあの砲撃分。さらに通常の弾幕による波状攻撃分を数十分に、だめ押しで機動分がかなりの量になる。

ここまで削られてしまえば、流石の福音も少々危なくなってきた、と言うことが。

反動相殺のために機動力の低下したシュヴァルツエア・レーゲンは、元々機動力に特化している福音の攻撃を避けることは難しい。使う武器が実弾兵器ならばAICで止めることもできただろうが、生憎と福音の射撃武器にエネルギー系以外の武器は存在しないため、止めることは不可能だ。

………だが、私は元々避ける気など持ち合わせていない。

「 鈴！」

オープン・チャネルで呼び掛けた瞬間、上空から炎を纏った四つの衝撃が、福音を海面に叩き付けた。

「はっ！ざまあ見なさい！」

ステルスモードを解除した鈴は、わざと必要以上に目立つ大声を上げながら福音を叩き付けた海面を……………否。ちょうどその場所にステルスモードで潜り込んでいたISを見つめた。

「……………首尾はどう？」

「完璧だよ、二人とも」

そこにいたのは、防御パッケージを装備したシャルロット。ステルスを解除した直後に福音に向かって瞬時加速で突っ込んで行くのがハイパーセンサー越しに見えた。

「……………気を付ける？ シャルロットのそれは……………痛いでは済まないぞ？」

side 凰 鈴音

シャルロットが左拳を突き出しながら瞬時加速で飛び込んでいく。弾幕にシールドエネルギーを削られながらも左腕のシールドを弾き飛ばす。

そこから現れたのは、あかし達の中ではシャルロットの武器と見えればこれという印象が最も強い、二世代機の最強装備。そう……………

とっつきだ。

「違うからね！？　こんなときにまで変なこと言わないで……よっ
！」

そう叫びながらもシャルロットは福音の腹に【灰色の鱗殻】を叩き
込む。

それも、瞬時加速で福音をラウラと逆方向に押しやりながら。

「ああああああああああつー！！」

ズガンツ！！という轟音が五度響き、左腕の先から福音が抜け出し
た。

けれど、そのくらいは予想済み。むしろ少し遅かったわね。

「わたくしの狩り場によろこ。ゆっくりしてってくださいな」

シャルロットに弾幕を張ろうとしていた福音に、青いレーザーが六
本突き刺さる。

そのうち四本はビットから。残りの二本はセシリアの持つ二丁のラ
イフルから放たれていた。

大型Bトレイザーライフルの【スターダスト・シューター】と、長
大な大出力ライフルの【ブルー・ピラス】。どちらもセシリアによ
って偏向されていて、ほぼ確実に福音の体に突き刺さっている。

「もちろん、あたし達のことも忘れないでよね」

「僕の場合は別に忘れちゃっていいよ？　その隙に壊してあげるか
ら」

「私達の全力をもって……な」

「……まだだ」

ラウラが呟く。恐らくその目でなにかを確認したのだと思う。あの速度のなかで、よく見えたわね。

「ええ。まだ福音のシールドエネルギーは切れていませんわ。何かあるかもしれません」

セシリアも、海中の福音に二丁のライフルを向けたまま気を抜いていない。

「……うん。大丈夫。わかってるから」

シャルロットも、一発だけ残っている灰色の鱗殻を格納し、新しくショットガンとマシンガンを一丁ずつ構える。

……さあ、第二ラウンドの準備はできたわよ？ 福音も早く上がっ
てきなさい？ あなた

続く夢、続く戦闘

浅い眠りからゆっくりと意識を浮上させると、少し状況が変わっていた。

白い少女は歌うのをやめ、俺のを見つめている。そして枕にしていた流木の代わりに、その白い少女とほとんど同じ姿をした少女が膝枕をしてくれていた。

……どういう状況なんだこれ？ 何がどうしてこうなった？ いつも右腕にくっついていてははずのシロもないし……どうなってんだ？

……いや、いるのが、シロ。どこにいるかはわからない……と言つか、どこにでもいるような気配がある。……なんともわかりづらい状態だな。

「もう少し分かりやすいヒントが欲しかったよ」

俺はそう言って、膝枕をしている真っ白な少女の長い髪を掴まんでみる。

「……シロ……の、一人で良いのかな？ 代^{シロ}」

白い少女の一人は、驚いたように俺のを見つめる。何に驚いてるんだろっな？ 呼び名か？

ちなみに【シロ】と言う名前は少しは考えてつけてある。色が原作で白かったからという理由が一番大きなものだというのは変わらな

いが、それ以外にも。

【シロ】は、20のコアを繋げて作られた、『総体』としての名前。今言った【代】は、中心となる【白】のコア以外のいくつかにつけた名前。その意味は『材料となるもの』。同じように【素】と【料】が居て、これらの【シロ】は基本的に演算やら何やらのスペックの底上げをしてきている。

【代】は主に速度や反応の即応性の上昇にその演算能力を使い、【白】の演算の『代』わりをしていくからそう呼んでいる。追加されたうちのほとんどが、この【代】だ。

【素】は武器や装甲の容量、つまり拡張領域を増やしている。これによって俺の頼んだ特殊武装や能力を使用可能にしているわけだ。武装や装甲、能力の『素』を補っていると言うことだ。

【料】はエネルギー方面を増やし、衝撃砲や空間固定のエネルギーだけでなくシールドエネルギーまでを産み出し、溜め込んでいる。ここで生まれた燃『料』は、【素】や【代】を通り、【白】を動かしているわけだ。

……まあ、ただの言葉遊びだ。つけている最中はそこそこ面白かった。

「……………それで、何か話があるんじゃないのか？」

いつの間にか初めての白い少女を入れて『20人』になっていた少女達に話しかけると、なんでか白い少女達の中から騎士風の女性が進み出て問いかけてきた。

「力を欲しますか……？ 何のために……」

side セシリア・オルコット

福音が落下した海面を睨む。落下してから数秒しか過ぎていないのに、わたくしには数分にも感じられた。

突如、注視していた海面が、強烈な光に吹き飛ばされる。

球状に吹き飛ばされた海面の中心にいるのは、自らを抱き締めるようにして浮かんでいる、青い電光を纏った福音だった。

……とりあえず撃っておきましょう。動かないようですし、こんなチャンスを逃すなんてバカのやることですわ。

全員がそう考えていたらしく、福音にラウラさんの砲撃が直撃する。それに僅かに遅れて鈴さんの真つ赤な炎に包まれた衝撃砲と、わたくしのレーザーが突き刺さった。

爆煙に包まれていて肉眼は見えませんが、ハイパーセンサーの映像ではかなりのダメージを与えられたらしく、装甲に無数の罅が入っているのがわかる。

これならあと少しで倒すことができる……と思った瞬間。その全身の罅から、眩く輝くエネルギーの翼が映えた。

「……………これは、不味いわね」

鈴さんの勘が危険警報をこれでもかとはかりに鳴り響かせているら

しく、その口調はいつもより遙かに重い。

「……ええ。まさかここでセカンド・シフトをするなん」

「セシリア！垂直降下！全速力！」

即座にわたくしは瞬時加速で高度を急落させる。すると直前までわたくしの居たところを、銀のISが貫いた。

「皆さん、お気をつけて！先程までとは比べ物にならない早さですわ！」

そう言いながらわたくしはレーザーを撃つ。それは軽々と避けられてしまいました。そのくらいのことは予想済みですわ。

ハイパーセンサーを振り切る動きはしていない。つまり、どこに居るのかはわからなくともどの方向に居るのかは十分わかる。それだけわかってしまえば、後は偏向射撃で撃ち込むだけ。

グンツ！と曲がったレーザーは福音の胴体に直撃し………胴体の輝から生えたエネルギーの翼に防がれた。

同じように、鈴さんが撃った衝撃砲もシャルロットさんが撃ったアサルトライフルも、全てエネルギーの翼に弾かれてしまった。

………あれは、まるで攻性防壁ですわね。それも、相当性格の悪い方がお作りになられたものでしょう。

何よりも驚愕するのはそのエネルギーの絶対量。あれだけの弾幕を張り、あれだけ飛び回り、あの巨大な砲撃を二度も撃っておきながらもいまだに切れないエネルギー量。まるで、一機の中に二機分のエネルギーがあるかのよう。

今もわたくし達は射撃を続けていますが、そのエネルギー量を活かした防壁によって全てを防がれてしまっています。

このままでは、わたくし達のエネルギーが切れるのが早い。それともあちらのエネルギーを削りきれるかというマラソンになってしまいます。それはできれば回避したいですね。

……だから、多少の無茶は許してくださいね。

……ブルー・ティアーズ。

夢は終わり、眠たがりは戦場へ向かう

急に言われた問い。何のために力を求めるのか。その答えは、実は凄まじく簡単なことだったりする。

前にも言ったが、俺の本音はただ寝たいだけ。それを邪魔するやつを排除するためだったり、そもそも邪魔をさせないようにするため。に力をあの腰の低い神から受け取った。

その力を人前で使うと目立つところから、俺は新しくISを求めた。その時には既に俺がISに乗れるとばれてしまっていたため、あまり悩むことはなかった。

だから、俺が力を求めることになった理由は、簡単に言ってしまうと睡眠時間の確保のためだ。

とは言え、今はそれだけではない。

今は周りに好きなモノが増えすぎた。

弾や鈴、のちゃん達といった友人達。ちー姉さんや（たぶんもうこの世に居ない）両親。この学園の生活も、そこそこ楽しいしな。

だから、なんのために求めるかって理由は……………

「今のまま過ごすため」

……………かね？

……………なんでかここにいる全員にくすりと笑われた。なんとという

か、シャルにはできないけど鈴やののちゃんにはできそうな『まあ、一夏だからね』という笑いかただ。少しイラツとしたので、とりあえず近くにいた【代^{シロ}】のほっぺをつまんでみた。

……なぜかさらに笑みが深くなった。あと視界の外で鼻を押さえている奴がいる気がするんだが………気のせいだといいな。気のせいじゃないだろうけど。

「じゃあ、行かないとね」

その声の聞こえた方向に視線を向けると、そこにいたのは初めて見付けた歌う白い少女。多分、【シロ】。

寝転がっている俺を起こすために俺に向かって手を差し出しながら、俺のことを眺めて笑っている。

「……そうだな。そろそろ行かなくちゃ不味いか」

俺はシロの手をとって、体を起こす。すると急にこの場所全体が白く輝き始めた。どうやらこれで目が覚めるらしい。

………そう言えば、騎士風の女性（多分【白^{シロ}】）はどこか姉さんに似ていたような気がするなあ………。

ふっ、と目が覚める。ここはどうかやら旅館の一室らしい。

周りには誰も居ないが、どうかやら一応見張りはついているらしく、戸の外に気配をいくつか感じ取れる。カメラの数はわからないが……まあ、壊してしまえば同じだな。

ゾナ八虫を数匹カメラに送り込み、同時に全て爆破する。当然爆発音を聞いて外のが入ってくるわけだが、その時にはディープダイバーで俺はこの部屋の床をすり抜けて消えている。

後はシルバーカーテンで姿を消して、堂々と歩いて外に出ればいい。

『……織斑君……起きたの……？』

何故ばれたし。

『……シロが、ステルスモードになったから……』

おおう盲点だった。確かにそれなら場所はわからなくとも、起きたってことはわかるな。

……どうしようかね？

『……私も連れて行って』

『んな無茶な。まだIS完成してないんじゃないの？』

参加してなかったのもそれが原因のはずだし……。

『……ついさっき、最終調整が終わった。……確かにロックオン・システムは従来のままだけど……十分、戦える』

『……もし、置いていったら……？』

『……泣く。みんなに迷惑かけないように……声を殺して布団にくるまって……泣く』

やべえ罪悪感が半端ない。流石はIS界最強の妹属性の座を蘭ちゃんと奪い合っているかんちゃんだ。そりゃああの生徒会長もシスコンになるわ。

『わかったわかった、今どこにいる？』

『……さっきまで……織斑君が寝てた部屋に……』

『よしわかった。迎えに行くから窓を開けて顔を出して待ってて』

……さてと。アグレッシブなお嬢さんが同伴することになったが……
……まあ、いいか。後はちー姉さんに話を通しておかないと困るだろうし（もう遅いかもだけど）、エネルギーの問題も………ん？
満タンになってる？

「陰謀暗躍困った時はすぐに呼びましょ束姉さんだよっ！」

「……なんで束姉さんがその陰陽師の歌を知っているのかは束姉さんだから聞かないけど、とりあえずありがとう。そして後ででこぴんします」

「なんでさ!？」

「シロの能力を逆向きに使って俺が動けないようにしたでしょ」

束姉さんはそっぽを向いた。その上口笛まで吹いている。なんで『ロイツマ』なんだよ。ぶちかにか歌わせたこと無いぞ。言葉は全部わうわうにやうにやうだけど。

「……帰ってきたらまずでこぴんです」

「いつくんが帰ってくる前に逃げちゃうもんねー」

「帰ってきた時に居たらでこぴんの後抱き枕の刑です」

「……抱き枕……でもでこぴん………うーん………」

なんだかすつごく悩み始めた。まあ、放っておいても大丈夫だろ。多分。

じゃあ、行こうか。

さつきまで織斑君が寝ていた部屋で、私は織斑君を待っている。爆発が起きたこの部屋は少し煤けているけど、そんなことは気にならない。

打鉄式を組み上げるのは大変だったけれど、このときに間に合っ
て良かったと思う。織斑君には感謝しなくっちゃ。

……もちろんそれだけじゃなく、私に色々なことをアドバイスして
くれた先輩達にも。

織斑君を見ていて、私は変わった。

昔の私はどうしても人の手を借りずに打鉄式を完成させて、姉さ
んの隣に立てるように……せめて正面から向き合えるようになりた
いと思っていた。

けれど今は、あまりそういうことは思わなくなっている。……と言
うか、織斑君を見ていると、そうだったことがどうでもいいことに
思えてきてしまう。

織斑君は自分がお姉さんと違っていても気にしていない。完璧とい
えるお姉さんを持っていても、自分を変えようと思わない。

自分を貫き通せる心の強さを持っている人は、かっこいいと思う。
もちろん織斑君だけじゃなく、織斑先生や凰本部長。それに姉さん
の……お姉ちゃんのこと、そう思う。

……たまに悪い方向に頑固な人も居るけれど。

空を眺めながら考え事をしていると、不意に私の頭に影が射す。顔を上げてみると、そこにはいつも通りに眠そうな織斑君が、シロを展開して飛んでいた。

「……………待ってた」

「悪い。ちよつと人にでこぴんの約束をしててな」

でこぴん？ と不思議に思ったけど、そんなことをしている場合じゃないと思い直して、私は窓から身を踊らせる。

「おいで……………打鉄式」

私の右手の中指に填まっている指輪が輝き、打鉄式が装着される。ISスーツは脱がないでいたから、そのまま大丈夫。

「それじゃ……………行く？」

私は織斑君に手を伸ばす。

私のヒーローは、にっこりと笑ってその手を取ってくれた。

「ああ。行くつか」

私達は、赤くなりそうな空に向かって飛び立った。

「ああそつだ。ちー姉さんには報告いれてあるから大丈夫だよ。後で相当怒られると思うけど。これは出席簿クラッシュですむかどうか……」

「……怖いこと言わないで……早く行かないと……」

「そつだな。じゃあ、しっかり捕まってるよ？ シロのこの状態での最速は 秒速2キロだ」

……え？

呆然としている私を抱えて、織斑君はなにかを確認してから加速を始める。

それは打鉄式式では到底出せないような速度で……

「きゃあああああつー！」

私の悲鳴を置き去りにして飛んでいった。

戦場は移ろい、表情を変える

side シャルロット・デュノア

……これは、ちょっといけないかな……。そう思いながらも、僕はどうすればこの化物を落とすことができるのかを考えていた。

今の速度は、確実に僕たちの誰よりも早かった。僕たちはきつと、あのエネルギーの翼に押し留められて攻撃を当てることはできないだろうと思う。

だからといってなにもしないわけじゃない。保険はまだあるし、うまくいけば誰も落とされずに落とすことができるかもしれない。

エネルギーの翼を全身から生やした福音は、ゆっくりと僕に向き直り

『キアアアアアア………！！』

異様に高い獣の咆哮のような声を上げて僕に飛びかかってきた。その動きはまるつきり獣で、そのあまりの速度に僕は簡単に捕まってしまった。

「……まあ、いいけどね」

だって……もう一発だけ残ってるからねえ！

最速で灰色の鱗殻を呼び出し、即座に顔面に叩き込む。それはエネルギーの翼で防がれてしまったけど………それでも十分。

だって、こうしている間は確実に福音の動きが止まってるっていう

ことだからね。

エネルギーの翼がゆっくりと僕を包み込んでくる。セシリアがレーザーを撃ち込んで助けてくれようとするけれど、絶対的に出力が足りていなくて、福音が僕から離れることはない。

「…………ふふふふ……………」

それでも僕はにっこりと笑い、呟いた。

「今だよ、箒」

瞬間、真つ赤な閃光が飛来して、福音がその光に飲み込まれた。

『…………着弾を確認。無事か？ シャルロット』

プライベート・チャンネルから声が聞こえる。僕達がここに着く前から福音のことを狙っていて、後詰めをお願いされていた最後の保険。

「ありがとう、箒」

「なに、構わんさ。私も友が落とされる所を見るのは忍びない」

赤いエネルギーの奔流が書き消え、ステルスモードを解かないまま箒は場所を移動し始める。またしばらくしてから福音に狙撃をするんだろう。

今の箒にはワンオフ・アビリティでエネルギーを回復する手段があるし、かなり本気でお怒りモードだから手は抜かないだろうね。怖いくらいに。

「それじゃあ、僕もそろそろ秘密兵器のお披露目をしちゃおうかな」

まあ、盾なんだけどね。対エネルギー弾体用の特殊コーティング仕様の。エネルギーを散らすのにいいんだってさ。どうやって作ったのかは知らないけど。

……あの時に一夏が何かしてから、デュノアの兵器部門の発展が尋常じゃないんだよね。何をしたのかなあ？

そう思いながら僕はエネルギーの弾幕を盾で受け止め、そして突貫してくる福音を実体盾で弾き飛ばす。

その間にセシリアのレーザーや鈴の衝撃砲がエネルギーの翼のない部分に当たって僅かずつ削り、たまに飛んでくる筈の赤いエネルギー砲が福音を飲み込もうとする。

その度に福音は別の誰かを狙おうとするけれど、無理矢理に僕とラウラがその道を塞いで狙いを僕に向けさせる。

防御能力だけなら、今の僕は（筈の展開装甲を防御に回した時を除いて）トップだからね。そうそう落ちてはあげないよ？

「……………！お前達。どうやらもうすぐ心強い援軍が到着するらしい。気合いを入れる！」

筈からオープン・チャネルでもたらされた情報に、少しだけ首をかしげる。

援軍って言っても、今の僕達は秘密でここにいるわけだし、例え僕達が外に出ていることを知っていたとしてもここにいるのがわかるとは思えない。

けれど、筈は確信を持って『援軍が来る』と言っていた。

……………更識さんかな？ でも、まだ専用機が完成していないって

……………。

「一夏と簪に一夏のお昼寝プロマイド」

「では私は一夏さんに一夏さんのお昼御飯の写真を」

「私が参加するのはフェアではないからな。ラウラはどうする？」

「むう……あれだけの攻撃を受けて起き上がれるとは思えん……
教官達教師陣に一夏の『にゃん』の写真を賭けるか。ワンサマー
アルバムを一グロス買ったらダブったのでな」

「一グロス!? どれだけ買ってるのさ!? っていうか賭けして
る暇なんて無いでしょもう! 一夏と更識さんに織斑先生とお昼寝
写真!」

「……シャルロットも参加してるんじゃない」

だって僕も一夏プロマイド欲しいんだよ! 可愛い一夏が大好きなん
だ! 僕は悪くない!

そう心の中で叫んでいると、突然シールドのない横から羽根の形を
した弾が装甲の一つに突き刺さり、爆発を起こした。その方向を見
てみると、伸びたエネルギーの翼の一部だけが盾の隙間から覗いて
いた。

すぐに下がって翼から逃げようとするけど、その翼は当然のように
ついてきて僕に弾幕を浴びせる。

まあ、防いではいるけれど、かなり鬱陶しい。

攻撃はほとんど効かない、凄く早い、攻撃力もかなりある、操作性
は抜群。まったくもう。僕はどうかやればこの鉄屑をグチャグチャパ
ラダイスにすることができるのさ?

「とりあえず……力を借りればいいと思うわよ?」

「誰のさ? 鈴達力ならこれでもかっつてくらいに借りてるよ?」

「誰のかって……遅れて来たヒーローと同胞の、かしら？」

その瞬間に横から飛んできて福音を吹き飛ばしたのは、さつきから飛んできている赤い閃光ではなく、白い三本の荷電粒子砲の光だった。

そっちの方を少し見てみると、そこには大マジな目をした一夏と、そのとなりに浮いている更識さんが荷電粒子砲を構えていた。

「全員無事か？ 無事じゃないやつは大声で返事しろ？」

「無事じゃなかったら返事できないよね？」

「まあ、一夏だし、それであってるような気もするけどね」

「そうですね。おはようございます一夏さん。ブルー・ティアーズに背中を押してもらうなんていう無茶なことをしたセシリアを叱ってくださいまし」

「おあずけ」

「そんなひどい」

「やれやれ。最近ましになってきていたと思っただが、セシリアはやはりセシリアか」

……一夏が現れた瞬間、空気がいつも通りになっちゃった。かくいう僕も、さつきまでの頭が沸騰しそうなほど冷静な状態を抜け出している。

「油断はダメ……まだ動いてる……」

「おうとも」

バジュンツ！と空気を引き裂きながら一夏に飛び掛かる福音を見て、一夏は当然のように雪片で一番大きな翼を切り落とす。

切り落とされたエネルギーの翼は爆発し、衝撃を盛大に撒き散らした。

「……………エネルギーって斬れるんだね。びっくりだな」

「あまり驚いていないようだけど？」

「驚きすぎて逆に冷静になっちゃったかな」

そう言いながら僕は特殊シールドに隠れる。僕の後ろには更識さんがいて、福音に荷電粒子砲を向け……………あ、当たった。止めてないのに何で当たるんだろ？

「努力と勇気と友情と気合いと愛と練習と根性……………だよ……………？」

「うんわかった、更識さんも理不^{そうち}尽側なんだね」

努力と練習はわかる。根性と勇気と……………友情も……………まあ、わかる。気合いと愛って……………。

「……………あ、それとノリと織斑君」

「一夏も入るの？ っていうか一夏に対する愛情だったりするのかな？」

更識さんは顔を真っ赤にして、コクンと頷いた。

……………あれ……………？ なんだか胸がきゅんってしたよ？ なにこの可愛い娘。あといつの間にか一夏が福音をばこぼこにしてるんだけど。零落白夜って凄いな。

……………まあ、それもこれも、一夏だから仕方無い……………のかな？

その後の話と、『お仕置き』と

こうして戦闘を終わらせて旅館に戻ってきた俺達だったが、今はちー姉さんによるお説教の真っ最中だ。

まあ、命令がなかったのに出勤するのはまずいわな。全員正座中。そろそろセシリーの顔色がやばい。かんちゃんとののちゃんは平気そう。慣れてるのか？

「織斑。気を散らしている余裕があるのか？」

「すみませんでした織斑先生」

今回は本気で心配させたと思うので、俺は全力で平謝り。ちゃんと起きている状態で。

「……………まあ、貴様らには帰ってすぐ反省文の提出と懲罰用特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでな」

「はい、織斑先生」

この後、一度休憩が入ってから体に異常がないかの診察があったはずなんだが…………。

「……………それと、一夏」

おや、名前で呼ばれた。なんだろね？

「ここにうつ伏せで寝ろ。すぐにだ」

そう言われて指差されたのは、ちー姉さんの足元。ああ、昔よくあ

ったあのお仕置きか。

そう考えながら移動して、ちー姉さんの足元で寝転がる。そしてちー姉さんは俺の背中に足を置き、強弱をつけて踏みつけた。

「……………まったく貴様は。もう少し周りの事を考えて行動しろ。お前はお前自身の想像以上に周囲への影響力が強いんだからな」

「うきゅ、うみゅっ、ふぎゅうっ！」

肺を背中から押し潰されるから、どうしても猫が踏み潰された時の鳴き声っぽいのが出ちゃうんだよな。

勝手に出るんだから、まあ、仕方無い。

「それと、なぜ起きた時に直接会いに来ない。心配をかけたという意識が足りんぞ」

「ふぎゅうううう……………」

「自分の健康管理もなっていない。落とされて気絶していた直後に直ぐ様ISに乗ろうとするとは何事だ。せめて健康診断をして、私と顔を合わせてから行け」

「うきゅ、う、きゅう、うにゅっ」

それから三十分近くの間、俺はちー姉さんに楽器のように鳴かされるのだった。

「大体だ。なぜお前は簡単に体を他人に預けたりする。そういうのは家族であり、姉であるこの私が初めに候補として出てくるのが…

……………」

「ふにゅっ！うきゅっ！きゅうううう……………っ！」

なんだか話がずれていつてる気がするよ……。

疲れたからご飯抜きで寝ようとしていたら、鈴とかんちゃんとのちやんとラルちゃんに布団を剥がれて運ばれてしまった。尻尾わしやわしやするわよ、と言われたら起きるしかないじゃないか。うう……鈴の意地悪……。

あの背骨の内側がぞくぞくするような感覚は、正直に言って色々やばいから好きじゃない。頭がぼんやりして何も考えられなくなるし、何より疲れる。ついでに恥ずかしい。

今はあそこまで酷くはないのかも知れないが、試してみたくはない。後で束姉さんに聞いてみよう。

「はいー夏。あーん」

「……あむ………もきゅ………もきゅ………」

「……かなり疲れてるみたいね」

まあ、あれで疲れてなかったら変だろ。大して疲れてないけど。だけど眠いのは本当なんだよな。気合い入れて動くとかーなーり眠くなる。なんでだろうね？

……ふあ……。束姉さんのでこぴんどうしようかなあ……。

「紅椿の稼働率は72パーセント。うんうん、相当扱いにくいはずの紅椿をたった三回でここまで乗れるようになるなんて、さっすが篝ちゃんだね！お姉ちゃんは鼻が高いよ！でも鼻ってそんなに高いと邪魔だよな？ いっくんにすりすりする時とか！」

「それより先にこっち向いてほい」

「は〜いったあ!!?」

バツチイン!!という高い音が響き、束姉さんの額にでこぴんが直撃した。そしてのけぞった束姉さんは、そのまま柵の向こう側に落ちていった。

「束さん復活!いきなりなにをするのさいつくん!束姉さんの眉間から上が消し飛ぶかと思うくらい痛かったんだよ!? ISを応用した移動型ラボを展開してたのに!」

「気合いを入れたでこぴん。それだけ」

「いつくんでこぴん怖い!旧時代の兵器の直撃にも耐えるシールドエネルギーを楽々ぶち抜いてきたよ!? ちーちゃんより強いんじゃないの?」

さて、それはどうかね? 力だけなら負ける気はあんまりしないけど……… 実際戦うとなるとなあ……。わかんね。

ただ、装備にYシャツ(ちー姉さんのお下がり。ただ、お下がりと言うには貰ったときは新品のように綺麗だったし、ちー姉さんのサイズより二つ三つサイズが大きかったような気もする)を装備し、犬耳(ガラム、ゴツイ首輪と鎖付き)で行ったら戦いにならないと思うね。色んな意味で。

ちなみに、前に一度やってみた。今生のセカンドキスが実姉になった。ちー姉さんは頭が沸いていたらしく忘れていたみたいだけど。ファースト? 束姉さんだよ? 母さん父さん除けばだけど。

「まあ、旧時代のミサイルより強いでこぴんができるかどうかなんて置いておいて、早く来ないと教員部屋までアイアンクローで運びますよ」

「そ………それは困るかな………」

「それじゃあ、はい」

手を優しく掴んで出発進行。テンションあげたくとも眠くて上がらない……。ふあ……。

「……いつくんつてば……魔性の男の子になっちゃって……」

知らないよ、そんなこと。

臨海学校、これにて終幕

朝起きたら束姉さんがちー姉さんに変わっていた。ついでに俺の体が全体的に真っ赤になっていた。多分鼻血で。出血多量で死んでもおかしくない量だぞこれ。平気か？

……まあ、ちー姉さんは大丈夫そうだな。束姉さんは……あ、部屋の片隅でシーツ巻きになってる。

「乙女のたしなみ、縄脱け」

どなたたしなみだ。そんなのたしなむな。

「さうてそれじゃあいつくんの寝顔を眺めてくんくんしてから帰ろつかな。くーちゃんも待つてると思うしね」

くーちゃんが誰かは知らないが、なんだか貞操のピンチ。ちー姉さんに抱き締められてて逃走は不可能。万事休すか？
まあ、束姉さんに少しの理性があることを期待しよう。もしくはヘタレであることを。それならなんとかなるかもしれないし。

「……くんくん……すんすん……いつくんの匂いがするよお……」

たーすけてー。だーれかたーすけてー。

「ふっふっふ。助けを呼んだって無駄なんだよ？　ここ人間には暫く大人しくしてくれるように起床時間ぎりぎりまで起きないように」

「たばね？」

あ、ちー姉さん起きた。ついでに放してくれると嬉しいかな。

「なっ!?!? ち、ちーちゃん!?!? どうしてちーちゃんが起きて…?!?!?」

「一夏の助けを求める声が聞こえた。ならば姉である私は万難を排して助けねばならないだろう」

「くう……流石はちーちゃん! この束さんが唯一認めた同格のブラコンだけはある……でも! 今のちーちゃんは無理して起きているだけ! それなら束さんには勝てないよ!」

なんだろうかこの暑苦しい展開は。俺はどういう反応をすればいいんだ? リス耳でも着けて『喧嘩はダメだよ?』とでも言うておくか?

「ふ……残念だったな。葉など一夏への愛の暴走で全て外に出ている!」

「な、なんだって!?!?」

「詰めが甘いんだよ貴様はなあ!」

そこで俺はちー姉さんと束姉さんを同時に布団の中に引きずり込んだ。

「なっ!?!? い、一夏っ!?!?」

「……喧嘩はだめ。お仕置き」

そう言っただけ俺はちー姉さんと束姉さんを抱き締める。ちー姉さんが慌てたり束姉さんが発狂しそうになってるのは意図的にスルーすることにした。

「ま、待て一夏！今そんなことをされたら私は……私はっ………ぷふあっ!？」

「くんくん……すう……」
「ポッ!」

……対象沈黙。作戦完了。これより二度寝に入る。

……すか……。

帰りのバスの中で俺は寝る。隣は二百数十回の読み合いの結果、偶然他の全員がチョコキを出した時にグーを出していたシャルがかつさらっていった。

ああ、それと尻尾の件はやっぱり束姉さんが何かしていたらしい。設定を前の状態に戻してもらって事なきを得た。

だから今シャルに尻尾をわしゃられても大丈夫なわけだ。少しくすぐりたいけど。

「……うえへへへほへほほへへほへへ……」

……駄目だこれ。早くなんとかしないと取り返しのつかないことになるぞ……。

「シャルロット。シャルロット!よだれ凄いわよ」

「ほへえ……? ……っ!???!?!?!??」

っ!??」

「………悪いんだけど、できれば人間の理解できる言語でお願いできると……」

「ああ。流石に」

っ!??」では何が何だかさ

「つぱりわからん」

「……よく発音できるな。普通は」

「っ！？」

「など聞き取ることも発音することもできないだろうに」

「そうよね。まあ、たとえ」

「っ！？」

「うのを聞き取って発音できても、」

「っ！？」

「の意味なんてわからないから意味無いけど」

「さっきからなんの話をしてるんだ？」

「っ！」

「？」

「っ！？」と五月蠅いぞ？

「ちなみに写真も撮ったわ。こんな顔してたのよシャルロットは」
「私も撮ったぞ。姉さんの改造のお陰でパネルが空間投影型になり、
相当画像が細かくなった」

「お願いだからやめてよおおっ！！」

「シャルは半泣きだ。まあ確かにあの顔を写真に残されるのは嫌だろ
うな。俺でも嫌だ。」

「……まあ、頑張れシャル。」

「……すか……」。

side 篠ノ之 篇

「一夏が寝落ちしてすぐ、バスに見知らぬ女性が入ってきた。」

「ねえ、織斑一夏くんっているかしら？」

すぐさま気配を読み取ってそこに悪意が無いか確かめる。全く同時に鈴とセシリアもこの女性の観察を始めていて、ラウラはいつでもナイフを抜けるように構えていた。

「ちよ、なんなのいったい？」

……特に悪意に当たるものは感じ取れないな。少なくとも、一夏に向かったのは。

鈴とセシリアに顔を向けて確認すると、二人とも同じ答えに辿り着いたらしく頷きを返してくる。すぐ近くにはシャルロットも居るし……まあ、問題ないだろう。何かをしたらソードサムライXの出番だが。

緋宵は切り口から足がつきやすいと言われたのでこっちに。こっちの方なら確実に隠し通せるらしい。

「……失礼しました。少しばかり過剰反応してしまいました。あそこで寝ているのが一夏ですが、起こさないでください」

「少して……」

「問答無用で刻み潰していないので、少しです」

「それってどんな基準よ!？」

どんなと言われてもなあ？　こんな、としか言えんが。

「常識だよな？」

「常識よね？」

「常識ですわよ？」

「常識だな」

「自分のじょーしきを、世界のじょーしきとは思わない方が良好よっ。」

む、布仏は良いことを言ったな。その通りだ。
それができない奴が宗教に嵌まると色々と訳のわからないことをやる
ことがあるから面倒だ。

「……はあ……それじゃあ、伝言をお願いできるかしら？」
「なんででしょうか？」

「『銀の福音』の操縦者から、ありがとう、ってね」
「承りました」

それだけ言ってその女性はバスを降りていった。

………しまったな。名前を聞き忘れた。

夏休み開始、驚愕の事実

夏休み。それは俺にとって最高の一月。

理由は実に簡単。俺がいくら寝ていても、文句を言われることがまったく無いという理由だ。

と、言うことで俺は寝る！……………と聞いたい所なんだが、前にやったことで少しばかり驚く結果が出てきているのでそっちの方を終わらせてからにする。

何が原因でどんな結果が出たのか。これも簡単。原因はデュノア社で、結果は頭がいかれてるんじゃないのかと言うレベルの黒字の預金通帳だ。

デュノアを買収した時に作った偽造金庫がいつの間にか本物の金庫になってしまっている。それもこれも黄金律と幸運のせいだろう。兵器の部品に千の顔を持つ英雄を使っているものをデュノアの製品として売り出し、かなりの売り上げを得ている。もちろんこれにも意味はあり、できれば世界中の量産機の武装をデュノア製にしてしまえと思っている。

…………… 敵対された時にその部品だけ消して暴発させてやることのできるし、消すのではなく爆破することもできる。それができるようになれば量産機の脅威が欠片もなくなる。

…………… IS 本体？ 知らんよそんなの。

そして今はそうしてできた黒字の金庫から引き出して、ちょっと弾の実家である五反田食堂にむかって歩いている。ライアーズマスクって顔だけじゃなく姿形を変えるから便利だよな。

身長を変えるのは無理らしいけども、それはなんでか俺ができるから大丈夫。

こうして面倒なのに絡まれないようにして、さて、行こうか。

なんでか五反田食堂にシャルとラルちゃんが居た。シャルは私服だけどラルちゃんはいつも通りの制服でアホみたいに分かりやすかった。まあ、それがなくてもわかりやすい容姿をしてるんだけど。二人は同じテーブルを使っていて、真剣にメニューを睨んでいる。

「あ……あの……お水………です」

蘭ちゃんが恐る恐る二人の前に水の入ったグラスを置いて、そそくさとカウンターに戻

「注文、いいかな？」

……ろうとしたところで、シャルに捕まった。蘭ちゃんは何でかびくびくしながらシャルとラルちゃんの所に戻った。

「は、はい。なににいたしますか………？」

蘭ちゃんの、今まで聞いたことのない妙な敬語を聞いて、ちよつと面白いと思ってしまった。随分緊張してるねえ。それとも怖がってるのかな？

まあ、その二人はいきなり噛みついてきたりはしないよ。

「この……『業火野菜炒め』っていうのを、二つもらえるかな？」

「は、はい」

蘭ちゃんはなんでかびくびくしてる。なんでだろうね？

「あ……い、いらっしやいませ」

ん？ ……ああ、そう言えばライターズマスクを解いてなかったな。面倒だし今回はこのままでいいや。

「ん。それじゃあ業火野菜炒め単品と、焼き魚とフライの盛り合わせ定食を」

「えっ、あ、はい」

蘭ちゃんは慌ただしく引っ込んでいった。大変そうだね。

そこで、入り口の方から見知った影が大量の袋を持ってやってきた。

「ふう、やれやれ間に合った。シャルロット・デュノアさんが六つでラウラ・ボーデヴィツヒさんが一つね」

「あ、こっちですこっち」

シャルが急に弾に向かって手を振る。いったいなんの話だろうか？
そう思っていると、弾と目があって

「……一夏？」

なぜばれたし。ってかよくわかったな。女の格好してるのに。

「お前への溢れんばかりの愛情の成せる業だ。写真撮っていいか？」
「可愛く撮ってね？」

特に意味は無いけど言ってみる。スカートを履くのは躊躇われるの

で、外見的にはGパンを履いているように見えるはずだ。

パシャツ！と弾はどこから取り出したカメラで数枚俺のことを撮り、それからシャルとラルちゃんに向き合った。

「遅くなって悪いな。予約されてたワンサマーアルバムだ。初回利用特典でレア写真一枚サービスとした。これからもご贖員に」

弾はにつこり笑ってから、すぐにエプロンを装備してカウンターのの中に入っていった。まあ、弾やシャル達にも色々あるんだろうな。知りたいような知りたくないような……。

「……ふむ……なるほど、一夏は小さい頃から変わっていないのだな……」

「そうみたいだ……っ！？　こ……この写真は……っ！？」

「シャルロット。ここは公共の場だ。我慢しろ」

「わ……わかってるけど……頭に血が昇ってくらくらするよお……」

いったい何を見たんだあの二人は。

「お待ちせしました」

「ん？　ああ、ありがとう」

丁度蘭ちゃんが業火野菜炒めと定食を持ってきてくれたのでそれを食べる。もきゅもきゅ……美味い。

そして食べながら弾とアイコンタクト。

『なんでそんな格好してんだ？』

『ここに来るまでの雌避け。直そうとしたら顔見知りがいびつくりしてついこのまま入ったんだけど、よくわかったね?』

『まあな。鈴ほどじゃないが勘は良い方だし、なんとなく一夏と気配が似てたし、目付きが一夏だったし、後は少し考えればな』

弾すげー。平均してハイスペックな弾すげー。

ちなみに鈴は勘が廃スペック（言わずもがな）。のちゃんは気配察知が廃スペック（同じく）。そしてセシリーは思考能力が廃スペック（ビットのマニュアル操作をそろそろ六つ同時にできそうだと言っていた）。

……あつれえ？ 弾にできないことってなんだ？

『彼女』

自分で言ってる悲しくないのか弾は。

『別に？ いつか好きなやつがきたら報告するわ』

『その時はきつと応援するよ。ちー姉さんが相手だったら三発くらい殴るけど』

『ねーよ』

『ちー姉さんの何がダメだって言うんだ!』

『ええええ良いのか悪いのかどっちだよ!?!』

『あ、冗談だよ？ 弾はちー姉さんのことをそういう風に見れないつてのはよく知ってるから』

『……一夏ア……』

怒られちゃった。ごめんね？

「カリカリカリカリ……」

「もしやもしや……」

「わう！」

「カリカリ……きゅ？」

「もしやもしや……にゃう？」

廊下で歩き食いはよくないぞ、と言ったらおれのマフラーを椅子の代わりにしやがった。これでいい？ じゃなねえよよくねえよ。地味に重いんだよ。

「うにゃ」

「……わう」

まったく、おれがたい焼きなんかで釣られるのはこれが最後だぞ？

……もきゅもきゅ。

「にゃうー！」

「わう？ わうわう！」

おれは座ってるから良いんだよ。あー美味い。

side ぶちか12号

白猫ぶちかだ。みんなと一緒にお昼寝中。いまだかつてないほど眠いので、とりあえず目を閉じてみることにする。

どこかで他のぷちかが身動きをすると、それがぷちか達を伝わってどこかがころりんと転がって、離れてしまったぷちかは他のところのぷちか玉に入ってまた眠る。いくらこの部屋が広くても、100近いぷちかすべてが寝転がるのは不可能。しかも、ぷちー姉さんとぷちたば姉さんも居るし。

だから何体かのぷちかは他のにのし掛かったりしている。それでも狭いけど。

まあ、寝るのには問題ないから、いいかな。

「ふみい……はむ……」

「……わきゅ？」

「きゅー……」

たまに誰かにぱくりと噛まれてよくわからないといった鳴き声をあげるチワワぷちかや、のしかかられて苦しそうな呻き声を上げるイタチぷちか。羽に顔を埋められてくすぐったそうな鳥ぷちかに、水を張ったたらいの中でぷかーっと浮かんでいるラッコぷちか。

……きつとちー姉さんはこれを見たら、辺りを真っ赤に染めるんだろうな。自分の血で。

そして蝙蝠ぷちかがちー姉さんの顔についたままの血を舐めとっている時に目を覚まして、さらに周りが赤くなるに違いない。

そんなことを考えながら、おれはきゅううっと伸びをする。ベッドの上でぷちー姉さんとぷち束姉さんと一緒に寝ている。ごしゅじんさまだつてもちろん一緒だ。

一緒に寝ているだけで、なんだか嬉しくなってくる。ぼや〜とした中でごしゅじんさまの体温を感じると、なんだか幸せだ。

「……邪魔するわよ」

鈴さんが入ってきた。すごく小声で呟いていたけど、今の部屋の状況をみてゆっくりとポケットから携帯電話とカメラを取り出した。

「……なによこのぶちか天国。とりあえず弾に送ってから……あ
と、箒達も呼ぶ必要があるわね。みんなで一緒にぶちかに溺れま
し
よう」

すごい勢いでシャッターを切っているのに、どうしてか音は全く
ない。凄いねそのカメラ。

「……篠ノ之博士に超高画質デジタルカメラを依頼しておいてよ
かったわ。ちゃんと音は出ないようになってるし、暗いところでも普
段と変わらない明るさで撮れるし……これで撮った写真を毎回渡
すだけでいいなんて、得したわね」

ああ、だからあの束姉さんに作ってもらえたのな。なるほどなるほ
ど。

「撮ったら勝手に送ってくれるみたいだし、本当に便利ねこれ。現
像とかもできないかしら？」

鈴が一人言のように呟くと、カメラの下部から現像済みの写真が連
続して出てきた。……確かに画質いいね。

「……よく撮れてるわね」

そこでゆっくりと扉が開き、また何人かがこの部屋に入ってくる。

「……わあ……わあ……！」

「来たぞ、鈴。……うむ。桃源郷だな」

「そうだな。絶景、と言うべきか……ふあ……」

「ちっちゃい織斑君が……こんなにいっぱい……」

「……さて、わたくしはどの場所に埋まればよいのでしょうか？」

「おう、ぶちおりむーがいつぱいだ」

……なんだか人がたくさん。元々足の踏み場もないのにどうやって上がる気だろう？

「……さて、それじゃああたしはぶちかの海に溺れにいくわ。皆も起こさないように気を付けてね」

その場の全員が無言で敬礼をして、すぐにこの部屋の中でぶちかに埋もれて眠りについた。

「……うえへへへへえ……」

……駄目だこのシャル。早くなんとかしないと。

ようやくまともな、夏休み

とある日。俺はいつも通りに自室でうつらうつらとしていた。こうして起きているような寝ているような状態、つまり微睡眠タイムは大好きだ。

毎日起きてから完全に体が起きるまでの時間は二時間。その二時間を微睡眠続けて過ごした俺は、一応食事をしに行く。食べてないことが鈴やのちゃんやちー姉さんにはれると怒られるから。

ただし、面倒だから服は着替えない。だぼつとしたパシヤマを着たままスリッパをつっかけて食堂に行く。

適当に日替わり定食を選んで食堂のお姉さんのところに渡しに行く。最近身長の伸び縮みが楽にできるようになってきたから、カウンターの高くて置けないということは無い。

少しだけ待って、出てきた定食を適当なテーブルに運んで食べる。

………もしかもしゃ、ごっくん。………おいし

ぺろりと食べ終えてから食器を返却して、自分の部屋に戻る。とても眠い。我ながら病気じゃないのか？ ってぐらい毎日寝てるけど、体は完全に健康体なんだよな。理由は知らないけど。

まあ、理由を知ったところで何か得があるわけでもなし。気にしないでおこう。

「あ、見付けた。部屋にいなかったから探してたのよ？」

「……ん……ごめん」

「良いわよべつに。あたしが勝手に探してただけなんだから」

そう言っただけで現れたのは鈴。その手にはなにやら一枚の紙切れが握られている。なんだろうな？ チケット？

「そうよ。詳しい話は一夏の部屋でしましょ」

鈴は俺のことを抱き抱えると、揺らさないように静かに俺の部屋に向かって歩き始めた。

……………揺れが良い感じだな……………寝ちゃいそつだ。

「はいはい、寝ちゃってもいいけど話は聞いてもらつたよ」
「ん……………」

まあ、原作的に考えるとプールの誘いなんだけど……………どうしようかなあ……………明日は外のケーキを買って食べる予定があるんだけど……………。

……………起きてから考えよ。今は考え事なんてしたくないし。

……………すか……………。

夕方に起きると、鈴が膝枕をしてくれていた。セシリーとののちゃんとかんちゃんがベッドのすぐ横で俺のことを眺めていて、シャルとラルちゃんはどつやら落ちたらしく、部屋の真ん中に転がされていた。

ただ、ラルちゃんは普通に寝てるだけっぽい。白蛇ぶちかを抱き締めてるけど。

まあ、蛇は変温動物だから夏には涼しくて良いよな。俺にはある意味無縁だけど。

「ああ、起きたわね」

「……ん……一応……」

まだ眠いことには変わり無いけど、一応話を聞いて言葉を理解して考えて返答するくらいのができるくらいにはなった。まあ、これなら起きてるって言っても良いだろうな。

「それじゃあ勝手に話すから、聞き返すなりなんなりしなさいよ？ 明後日の日曜に、新しくできたウォーターワールドに行かない？ みんなで」

「……やっぱりそのお誘いだったか……。プールなんて学校以外だところ十年は行ってないな。」

「……行ってみるのもいいかもな。水の上で昼寝というのも悪くなさそうだな。悪かったらプールサイドでプールに足だけ入れて寝てよう。暑いし。」

「いいよー」

「そうよねーやっぱりイヤよ……。え？」

何でか信じられないものを見たっていう顔をされた。確かに俺はこゝういう付き合いは最悪って言えるレベルで悪かったけど、これは酷くないか？

「……来てくれる……。の？」

「うん」

「……落ち着きなさい私。あの一夏が来てくれるですって？ よく

考えるのよ。……1、これは夢で、はしゃぐとベッドから床に落ちて頭を直撃。悶絶することになる。2、あまりの暑さに見ている幻覚。本当の私は保健室でぐったりしている。3、現実意外と優しくできている。4、一夏のあまりの可愛さに頭が沸騰して出血多量で見ているいまわのきわの幻想。あたしとしては3番だと嬉しいわね。はい、答えはどれ？」

「鈴。三番だ。良かったな」

「三番だから……安心していいよ……？」

「三番ですわ。なぜそこまでいぶかしがるのかは知りませんが、今回は優しい現実ですわ」

それを聞いても鈴は信用できないらしく、自分のほっぺを引っ張ったりつねったりと忙しそうだ。

「……断った方がよかった？」

「いやいやいやいやいやいやそんなことは無いわよ？ ただ、今までにないことで驚いただけよ」

ならいいんだけどね。

「……明後日ね。準備しとくよ」

水着はあるし、タオルとゴーグルもある。使うことはほとんど無いけど。

……あ、そう言えばプールは騒がしくなるんだっけ？ そしてシロのデータ取りを真耶先生が伝えるのを忘れてたんだっけ？

……あ、大丈夫だ。だってまだシロは二次移行してないし。よーし自由時間ができたな。無駄に遊び呆けるか。

じゃあ明日は外にケーキでも食べに行こう。IS学園のケーキも美味いけど、他のところのも食べたいからな。

甘い物、ちょっとした騒ぎ

鈴達とプールに行く約束をした次の日。昼頃に起きた俺はのんびりと町を歩いていて。あまり背が小さすぎると歩くのが面倒なので、130センチくらいにまで大きくなっている。

目指す場所は@クルーズ。原作だとプールに行く約束をした日に銀行強盗が立て籠った喫茶店だ。

まあ、プールに行くのは明日だし、問題ないだろ。

そう思いながら@クルーズの店の扉を開ける。

「いらつしゃいませ、@クルーズにようこそ」

「……………何やってんの、シャル」

そう、そこにはシャルがいた。ちなみに執事服を着ている。

「……………え……………あれ……………？ いち……………か……………？？」

「おゝ、昨日ぶり。……………それにしても……………」

シャルの服装を見て、やっぱり、という思いを強める。

「似合ってると思うよっ」

「……………う……………うわああああん！」

なんでかシャルは泣きながら走って行ってしまった。なんでだろうな。

「……なあ、ラルちゃん。ラルちゃんはシャルが泣きながら走って
いった理由とかわかる？ 俺は全くわからないんだけど」
「さてな。私も理解できん」

俺に気付いて寄ってきたラルちゃんに聞いてみたが、ラルちゃんも
わからないらしい。まあ、女心と他人の思考はいくつになってもわ
からないからな。

「……それはそれとして、一夏」
「ん？ なに？」

ラルちゃんに呼ばれたので考えるのをやめて振り向いてみると、ラ
ルちゃんがその場でぐるりと一回転。長めのスカートがふわりと少
しだけ浮いて、ラルちゃんが止まるとゆっくり元の位置へ。
そして笑顔を向けられて、一言。

「@クルーズへようこそ、お客様」

……。おゝ。凄い凄い。つい最近まで私服を持たないまま軍服と制
服とISスーツだけで過ごしてきたとは思えないな。

「……どうだ？ 惚れ直したか？」
「惚れ直した云々は置いといて、似合ってると思うよ？ 可愛い可
愛い、やるじゃんラルちゃん」
「ふっ。当然だな」

ニイ……。と笑うラルちゃんは、それはそれは魅力的だった。ちー
姉さんにちよっと似てるということとは関係無しに。

「ああ、とりあえずおすすめの紅茶と、ケーキを全種類一品ずつお

願いね。パフエはいらないから」

「……それは構わんが……食べきれんのか……？」

ラルちゃんがひきつったような笑みを浮かべながら聞いて来るけれど、朝も昼も食べてないから楽勝だ。

「……頼んだからには食べ切れ」

ラルちゃんはそう言って厨房の方に消えていく。さてと。俺は適当なところに座って待つてようか。

しばらくして、紅茶と一緒にケーキの群れが運ばれてきた。メニューを見てみたが、そこに乗っている量からするとずいぶん少ないから、多分これで第一波。周りに座っている客からざわざわと言う声が聞こえるが、気にしない。

「……お、お待たせいたしました。紅茶でございます」

主にケーキを運んできたのはラルちゃん。紅茶を慎重に運びながら、無理が出ない程度にケーキも運んできたのがシャル。ラルちゃんはケーキを机の上に並べて空きができることを確認すると、またすぐにカウンターの方に行ってしまった。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？ よろしければ、こちらで入れさせていただきます」

顔を朱に染めながらも、シャルは仕事を全うしようとしている。流石シャル。真面目だな。

「それじゃあ、砂糖はいらないけどミルクたっぷりをお願いね」
「かしこまりました、それでは、失礼いたします」

そうやってシャルは紅茶にたっぷりミルクを注ぎ、静かにスプーンで紅茶をかき混ぜる。紅茶だけなら砂糖を入れてもいいけど、ケーキと一緒にだったら砂糖はいらない。

……さてと。それじゃあ俺もケーキタイムにしようか。甘いものは嫌いじゃないし。

フォークでケーキを二割くらい削って、そのまま口に運ぶ。うん、美味い。そして甘い。

ぱくぱくと一つを食って終わってから、紅茶を一口飲む。紅茶も美味しい。やっぱり紅茶はミルクティーにして飲むのが良い。個人の考えだし、レモンティー好きやストレート好きやコーヒー党を馬鹿にする気は無いけど。

紅茶で口を湿らせて、それから二つ目のケーキに取りかかろうとした時、急速に状況が変わった。

「全員、動くんじゃねえ！」

いきなりこの店に雪崩れ込んできた三人の男が怒鳴り、天井に向けて発砲した。

……弾痕付きの喫茶店か。まあ、世界のどこかにはそんな酔狂な店に来てみたいって思う人も居るんじゃない？ どこにいるのかは知らないけど。

ちなみに男達の格好は、安そうなジーンズにジャンパーに覆面。背

負ったバッグからは一万円札が何枚か飛び出しているのが見えていて、手には銃を持っている。

……どう見ても銀行強盗帰りの逃走犯です、本当にありがとうございます
います（ry

「そこまで言っちゃったんなら最後まで言っちゃおうよ」

こんな時でもツッコミを忘れないシャル。そこに痺れる憧れぬ！憧れない理由は疲れそうだから。実にわかりやすい理由だな。

ちなみに俺は無視してケーキを食べている。とある理由から撃たれても平気だから。

………面倒臭いなあ………。

………あ、このモンブラン美味しい。お土産とかできないかね？ ち姉さんと一緒に食べたいよ。

超外伝、未来図？ 移動編（前書き）

今さら出してみた。後悔はしていないけどまたしばらく間は空くと
思われ

超外伝、未来図？ 移動編

朝起きると、目の前に一夏の顔が広がっていた。それも鏡ではなく、原作の一夏の顔だ。

どうなったのかを考えると、恐らく俺が寝返りでも打って平行世界を渡りでもしたんだろう。

……こうなったら楽しまなくちゃな。とりあえず原作一夏の呼び名は『パパ』で固定して、背は百六センチくらいにしておけば良いだろう。

平行世界からやって来たんだが、ここはいつも通り未来からやって来たとも言うっておこう。どうやってかは………東姉さんの科学力は、ついに時空すらも越えたとか言うっておけばなんとかなるはずだ。

……きつと。

……そう言えば今はいつだ？ 三巻か？ 四巻か？ まさかの五巻六巻？ その先？ ののちゃんがないから一巻ではないだろうし、シャルがないから二巻では無いだろうけど、正確な時間はわからない。

……お、一夏が起きそつだ。ここは朝一で『おはよう』と言ってやらなくちゃな。

そつだ、名前はとうしようか。面倒だし織斑家ルール（数字＋季節）で百秋にでもしとけばいいかな。シロ、しばらく名前の偽装よろしく。

シロがきらっと輝いた次の瞬間、一夏が目を覚ました。

そして俺のことをぼんやりとした目で見つめている。微睡みタイムだ。いいよね微睡みタイム。

「……………ん？」

「おはよ、パパ」

一夏はぱちぱちと数回まばたき繰り返して、それからようやく俺のことを抱き締めていることに気付いたらしい。そして俺が誰かも。そして、大きく息を吸い込んだ……これは来るな。

急いで耳を塞ぐと、ギリギリでそれが間に合った。それでも五月蠅いけど。

「なにいいいいいつ!?!?」

この日、IS学園は一夏の声によって朝を迎えた。午前4時30分ごろのことだった。

……………迷惑だなあ……………。

いきなり一夏が叫んだことで、一夏に近い少女たち（精神年齢的にはこっちが上）が一夏の部屋に集まってきた。

「一夏っ！何があった!?!?」

「どっしたの一夏っ!」

「敵襲か!?!?」

ばたばたと騒がしく集まってきた少女たちが一夏の部屋で見たもの

は……。

「……ふに……」

一夏の胸元に額を当てて寝ている俺（ここまで小さくなると女顔に見られる）と。

「ちょ、待った、なんでここに……あ」

……そんな俺の肩に手を置いて、見ようによっては押し倒そうとしているように見える一夏の姿だった。

「……ほう？ まさか私達の目の前で、知らぬ女を連れ込むとは……」

「一夏？ グレネードの威力実験に付き合っただけ？ 今すぐ」

「蜂の巣にして差し上げますわ！」

……大変だな。一夏。

朝っぱらから爆発音と破壊音が響き、一夏は起きたばかりだと言うのにボロボロになってしまった。

……可哀想に。

「……って、この子どこかで見たことあるような……」

「……たしかあれは……」

「……夢で見た、僕と一夏の……」

「いや、私との子だろう。なんと言っても夫婦だからな」

シャルさんや。爆弾発言はいい加減にしないと怒られるよ。後ろにいる鬼神（‘きしん’ではなく‘おにがみ’と読む）に。

「朝っぱらから喧しい！」

パアンツ！x6

お、こつちだと叩かれる音はまともなんだ？

「まったく、いったいなんの騒ぎだ……ん？」

そこでちー姉さんは俺に気付いたようで、キョトンとした目を向けてきた。

「……お前は確か……一夏の息子……だったか？ なぜここに居る？」

「大天才さんの技術力は、ついに時空をも越えたって」

「……またあいつか……」

ちー姉さんは頭痛がするのか頭を抑えてしまった。大丈夫かな？ とててつと近付き、手を引っ張ってしゃがんでもらう。

そしてちー姉さんの頭を撫でる。いたいのいたいのとんでいけー。

……アホらしく見えるが、俺がやると少し効果がある。マジで。

「……ああ、ありがとう……名前は何聞いてないんだっただか？」

「大天才さんは、俺が過去に行った世界と過去に行っていない世界に分かれるから大丈夫だって言ってた」

元々平行世界だしな。全く問題ない。

「そうか。……名前は？」

その問いにはにっこり笑って答えよう。大嘘だけどな？

「織斑 百秋ちむあき、十歳だよ？」

身長的には、一応そのくらいで通るはずだ。

よし、潰そう

俺がもきゅもきゅとケーキを食べているところに、いきなり現れて立て籠った銀行強盗帰りの三人組。仮名称コーさんゴーさんトーさん。ギンは別にいるからつけられないんだ。ごめんね？

……なんでこんなに落ち着いてるかって？ 撃たれても平気だからだけど？ まあ、大丈夫大丈夫。

外ではなんか警察が色々騒いでいる。なんというか、懐かしいような古めかしいような定型文を吐いている。

そんなことはどうでもいい。今はケーキだ。冷えてるうちに食べないともつたいたい。紅茶も冷めると味が落ちるし。

……あ、このショートケーキ美味しい。クリームが秀逸だ。なに使ってたのかね？

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺たち全員」

こっちのチーズケーキもいいな。レモン風味で甘すぎず、生地もしっとりしてて美味しい。今度チーズケーキも作ってみるか。美味しくできたらみんなで食べよう。

「うるたえるんじゃないっ！焦ることはねえ、こっちは人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

お、ミルフィーユか。サクサクの層が良いよな。クロワッサン系統のこういう生地は基本的に好きだ。歯応えがあるし。

ただ、寝てる時には嫌だな。食べにくいから。

「へ、へへ、そうですね。俺達には高い金払って手に入れたコイツがあるし」

拳銃より大きな発砲音が響き、蛍光灯が破裂してガラスを撒き散らしたような高い音がした。

「きゃあああつー!!」

……それにしても、このケーキはみんな美味しいな。ティラミスも美味い。水分が多すぎるといってもなく、甘すぎず苦すぎずバランスがいい。

今度は拳銃の発砲音。そんなに弾を使うと必要なときに使えないぞ？ どうでもいいけど。

「大人しくしてな！俺達の言うことを聞けば殺しはしねえよ。わかっただか？」

……あ、紅茶無くなった。どうしよう？ 新しいの頼もつかね？

「おい、聞こえるか警官ども！人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！勿論、追跡車や発信器なんかつけるんじゃないやねえぞ！」

……まあ、いいか。バレないように千の顔を持つ英雄で補給してやれば。

カップに手を被せて、出して、ミルクと混ぜて飲む。……及第点だな。俺。

「おい、何してやがる！」

……………ん？ 俺？

横を向いてみると、ハンドガンを持った覆面がすぐ近くに立っていた。やっぱり俺らしい。

「大人しくしてるんだからケーキを食べるくらいいいだろう。温くなったケーキと紅茶は味が落ちるんだぞ？ もったいない」

もう話は無いだろうから、俺はケーキに向き直る。さあ、ケーキタイム再開だ。

「ッざけやがって！このガキ！」

バゴオンツ！という音と共に、テーブルに乗ったケーキがテーブルごと跳ね上がる。そしてケーキと紅茶は無惨に床に叩きつけられ、ケーキからケーキだったものに変わってしまった。

……………よし、潰そう。物理的に。

side シャルロット・デュノア

一夏に銃を突き付けた男が、一夏に向けて怒鳴っている。自分がどれ程の事をしたのかも気付かずに、喚き続けている。

一夏の視線の先には、潰れたケーキの残骸と、割れた紅茶のカップ。そして溢れた紅茶がある。

それを見て固まっている一夏が、暴力に対する恐怖で固まったのだ

とでも思っているんだろうか。あの男は。

自分が、眠たがりの竜の逆鱗の上でタップダンスを踊っていることにも気付かない。

「シャルロット。お前もシリアスの中でギャグを言うようになったな」

「……………ああ、そうだね。今気付いたよ。だけど、確かにそんな感じだと思わない？」

全く同時にちらりと一夏の方を見て、もう一度ラウラと視線を合わせる。

「……………確かにな」
「……………でしょ？」

「……………止めるのが大変そうだなあ……………」

もう一度一夏の方を見てみると、全く動いていなかった一夏が動いていた。それは、ハンドガンを持っている強盗の一人の腕を掴んでいるところだった。

「……………今のうちなら、一夏に気をとられてる残りの二人を無力化できるかな。」

ラウラに視線を向けると、ラウラも同じことを考えていたらしく、すぐさま頷きが帰ってきた。

それじゃあ、行動開始。

静かにその二人の後ろに回り、そしてちょうどいい場所に立って期を待つ。

それはすぐにやってきた。ゴシヤリ、という鈍い音が響き、リーダーらしい男のハンドガンを持った手首が一夏に握り潰される。

「うぐあああつ!?!」

「あ、兄貴っ!?!」

その悲鳴に完全に意識がこちらから離れたのを確認して、肝臓のあたりに爪先を擦り込んだ。防御が頭に無い状態でのこれは結構効いただろう。

ちなみにラウラは思いきり蹴り上げていた。どこをととは言わないけど。

悶絶するその二人を気絶させようと頭部と鳩尾と肝臓のあたりに二三発ずつ蹴りを入れ、動かなくなったのを確認して武装解除をする。ショットガンとその弾と、内ポケットの中のハンドガンも取り上げてから、脱がせたジャンパーで両腕を縛る。足の方は……まあ、いかなって思っただけで放置。

ラウラも同じように気絶させ、武装解除してから縛り上げる。覆面を裂いて足を縛っていた。あ、そんな手があったんだ。僕もやるっど。

……ちなみに、一夏のこともちろんと見ながらやってたよ？ 心配は……一夏の心配はいらなかったみたいだけど。

「HAHAHAHAHAHAHAHAHAHA!! HA~~~~HAHAHAHAHAHAHAHAHA!!」

ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
！！

………や………やりすぎだよお………。

そう思うと同時に、一つの事柄について納得もしていた。

………一夏は、やっぱり織斑先生の弟なんだ、って。

「H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H
A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H

ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス
ゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴスゴス

………って、そんな場合じゃない、止めないと！

よし、潰そう(後書き)

殴り方は武装錬金の照星さんの的な物を想像していただければ。

その後の話と、ミックスベリー

気が付いたら俺はラルちゃんとシャルに止められていた。拳は血まみれで目の前には『公共の電波に乗せるときにはモザイクをかける必要があるだろうと思われる赤黒い塊』がある。一応、人型は保っている。

「ええい放せ！俺はそいつを殴るんだ！グシャグシャになっても殴るんだ！ミンチになっても殴るんだ！！ペーストになるまで殴ったら綺麗にロースト作るんだ！！！」

「グシャグシャの時点でやりすぎだってば！それ以上やったらホントに死んじゃうから！」

「大丈夫。人間って意外と丈夫にできてるからこれくらいならまだ死なない」

「だから死ぬ前にやめないと駄目なんだってば！って言うかローストされたら確実に死ぬから！」

「……………ふむ。確かに外傷は凄まじく見えるが、内蔵へのダメージや出血量は大したことがないのか。なるほど……………」

「ラウラも感心してないで一夏を止めるのを手伝ってよお！大きい一夏は僕一人じゃあずつとは止められないんだから！」

「あ、じゃあやめるか。そろそろ疲れてきたし」

「止まつちやった!？」

シャルはかなり驚いているようだったが、実のところミンチになっても殴ると言っていた時にはもうただの悪ふざけだった。

「……………一夏の悪ふざけは本気にしか聞こえないんだよ……………」

そう言いながらシャルはその場へたりこんだ。どうやらかなり疲れているようだ。大変だね。

さてと。それじゃあ俺は頼んで来たケーキと紅茶の分の金を置いて、さっさと逃げるか。面倒事は嫌いだし。

「と、言うわけでこれ代金ね。じゃねー」

「え、ちょ、待っ」

シャルの言葉？ 聞こえんなあ。

夕方。俺はとある公園でクレープを食べていた。シンプルにチョコバナナもいけれど、たまにはしょっぱいクレープもいいよな？ ということで、俺が今食べているのはツナレタス。これが意外と美味い。クレープ生地さえあれば家庭でも簡単に作れそうだ。

「それじゃあ次はこのチョコミントってやつを一つ」

「……お嬢ちゃんまだ食べるのかい」

俺は男だ。まあ、女扱いでサービスしてもらえらんだったら普通に受けるし訂正しないが。

「……はいできたよ」

「どうも」

代金を渡してすぐ近くのベンチでチョコミントクレープを食べる。クリームにチョコとミントのソース的な何かがかかっている。おいしい。おいしい。

「……次はブルーベリーにするか」

それが聞こえたのか、クレープ屋の中で店主が動き始めるのが見えた。

「ブルーベリー一つ」

「お待ちどうぞ」

正直二秒も待ってないけどな、と思いつつ、できたてのブルーベリーのクレープを受け取る。今日は俺にしては珍しくよく食べる日だな。

これでクレープは最後にしようと思えば店を離れると、ちょうど知った顔に出会った。

と言うか、ついさっきまで会っていた顔だ。

「よ。なんか疲れてる顔してるけど、大丈夫か？」

「……………一夏が……………それを言うの……………？ あのあと……………どれだけ大変だったか……………！」

ちー姉さんもかくやという目で睨まれた。怖い怖い。

「まあまあ、これでも食べて機嫌直して。食いかけて悪いけど」

「何が むぐっ!？」

食いかけてのブルーベリーをシャルの口に押し込み、俺は新しいクレープを買いに戻る。

「ラルちゃんは何食べたい？」

「ぶむ……………それでは、苺を買おうか」

クレープ屋のメニューを見て何かに気付いたらしく、少し笑みを浮かべながらラルちゃんに苺を頼んだ。

「じゃあ苺とラズベリーを一つずつ」

「あれ？ ミックスベリーは？」

ミックスベリー？ …………… ああ、いつも売り切れのミックスベリーの話か。確かそんなのもあったな。忘れてたけど。

「売り切れみたいだぞ」

「あ、そうなの？ 残念……………」

「…………お待ちどう。…………それにしてもお嬢ちゃん、よく食べるね。それでもう14は食べてるだろ？」

クレープを渡しながら俺にそう言う店主は、何でか苦笑いを浮かべていた。

「…………まあ、このくらいは」

代金を渡しながら言う俺も、たぶん少し苦笑いをしているはず。

「さてと、それじゃあ食べようか。…………シャルはどっちを食べたい？」

「こっちのでもいいよ」

そうか。まあ、いいって言うならいいけどな。俺はどっちでも構わないし。

「…………ふむ。私としては一夏の食べているそれにも興味があるのだ

「がな」

「ん？ それじゃあ一口いる？」

「貰おうか。……はむ」

ラルちゃんがそういったことで始まった交換会は、俺とラルちゃんがシャルにミックスベリーの種明かしをしてからかうまで続いた。……それにしても、シャルはからかうと面白いな。いい反応を返してくれるし、ツッコミキャラだし。

「最近ハシャルロットもボケに回ることがあるぞ？ 頻度は低いかな」

「周りのキャラが濃いからしょうがないと言えはしょうがないんだけどな」

「なにそれ？ 僕の影が薄いつてこと！？」

影は濃いと思うぞ？ ツッコミは貴重だし。シャルとかんちゃんの二人だけだし。その二人もタイプが違うから被ることもないし、大丈夫だって。

夏休み、ウォーターワールドにて

今月できたばかりだというウォーターワールドに来ている。確か何かあったような気がしたんだが、何も無い。普通に騒がしく、普通に静かで、水の感触がなかなか気持ちいい。ぷかーっと浮かびながら天井を見上げていると、なんだか眠くなってきた。

「楽しんでるかしら？」

「ん。まあ、そこそこ楽しんでる」

すい〜つと音もたてずに泳いで近付いてきた鈴にゆっくりと答え、また浮かんだまま流れる。かんちゃんも隣で一緒に流れていてくれるお陰か、まだ一度も監視員に声をかけられていない。

昔からこうして浮かんでいると声をかけられたり、酷いときには溺れてると勘違いされて引き上げられることがあったからな。感謝感謝。

あと、水着似合ってるぞ。

「あ……ありがとう……とう……」

「ふふふ……簪も可愛いわね。初々しくて。……あたしにもこんな時期があったのよねえ……」

まあ、なんにしる俺は今まで通り浮かんで流れ続けるだけだけどな。……あと、悪いんだけど今の鈴の言葉がすごい年より臭く聞こえた。

「……せめて大人っぽいつて言ってくれないかしら？」

「だ……大丈夫……鈴も、可愛いよ……？」

「ありがとう。簪に言われると自信を持てるわ」

鈴はそう言っけれど、実のところ始めからあんまり気にしていないようだ。雰囲気を読むのはそこそこ得意だし、鈴も隠す気はないよ。うだからそれが楽にわかる。

「……そう言えば、なんかイベントなかったっけ？」

気になっていたことを鈴に聞いてみた。確か、原作ではセシリーと一緒に出てISで暴れて大会そのものがなくなっただけはず。

「水上ペアタッグレースのこと？ それだったら昨日のことよ。そんのがあつたら一夏が落ち着いて遊べないだろうし、あたしもそんなのよりも一夏と一緒に流れてる方が好きだしね」

「ありがとう鈴。そんな思いやり深い鈴が好きだよ？」

「あたしもこうして素直に心情を顯す一夏が好きよ？」

「わ……私も……好き……」

平然としたまま返してくる鈴と、顔を真っ赤にして口許まで沈んじやったかんちゃんを見ていると、なんだか暖かい気持ちになってきた。かんちゃんは可愛いねえ……。

「……？ どうして……撫でるの？」

「簪が可愛いからよ。ねえ一夏」

「そうだな。かんちゃんが可愛いから撫でる。おかしいことなんてなにもない」

と、いうことでなでなでタイム。かんちゃんを俺と鈴が撫でながら、

ちよつとの間流される。

「……そういや、ののちゃんとラルちゃんは？」

「箒とラウラ？ 確か、ラウラが一夏の真似をして浮きながらぼんやりしてたからついて行くって言うってたわよ？ ちなみにシャルロツトは妄想の海で溺死して賢者モードらしいわ」

「なに、それ……？」

そうか、賢者モードか。女でもなれるんだな。驚きだ。

弾は一時期常時その状態で、巖さんと蓮さんと蘭ちゃんに本気で心配されてたっけな。あの時はショック療法で直したんだっけ？

確か、当ても寝巻きとして使ってたちー姉さんのお下がり（にしては下略）のボタンを上から二つ開けて、首輪つけて鈴つけて肉球つけてにゃん って鳴いたんだっけな。

その後軽く襲われて、弾だったら男相手でもまあ良いかな〜と思って抵抗しないでいたら鈴と蘭ちゃんに弾がしばかれてた。二人ともキレると瞳孔が縦長になるのな。まるで猫科の動物みたいだ。

まあ、ちー姉さんがキレた時の白いところが黒く、黒いところが赤黒く変わった目よりは怖くないけど。

……ああ、比較対照にするのがそもそも間違ってたな。あの状態のちー姉さんと同等に怖いものなんて、明らかにイカれた笑い声をあげながらキーボードを十枚くらい同時に叩いている束姉さんくらいしか知らない。人間の声帯ってあんな音（声とは認めない）を出せるんだと知ってびっくりした。

ちなみにその日に寝たら夢の中でひたすらその束姉さんが笑い続けたのでちー姉さんの布団に潜り込んだら、最初はまた出てきたけどすぐにちー姉さんが夢に出てきてアイアンクローで止めてくれた。ありがとねちー姉さん。

「あ、一夏。その水着似合ってるね」

「ん、ありがと。シャルも似合ってると思っよ」

プールサイドでにこにこ笑いながら俺のことを見ているシャルは、なんと言うか本当に落ち着いていた。多分今ボケても普段みたいなツツコミは返ってこないんだろうなあ……。

「ツツコミだけなら来るわよ？　ただ、いつもとはかなり違うツツコミだけどね」

「そうなのか？」

「まあ、いつもとは違うと思うよ？　今なら僕をIS学園に送り込んだあの人と顔を会わせても延髄に踵落としを決めるだけで許してもいいかなっていう気分だし」

「シャルがそれで許したら、その後に俺が男として再起不能にしてやるけど」

「そしてあたしが本妻の方を女として再起不能にして、」

「私が刀で精神崩壊まで追い込み、」

「私がそれを物言わぬ蛋白質の塊に変えればいいのだな？」

「なら、わたくしはその場所を都合する裏方にでもまわりましょうか」

「はははっ。その時はよろしくっ！………なんてね」

本当だ。随分と芸風が違うな。いつもならもつと慌てて俺達を止めようとするだろうに。

「え……あ……えっと………だ、駄目！」

かんちゃんも急に大きな声を出した。一体なんだろうと見てみると、かなり慌てていた。

「お、織斑君……そんなことしたら……駄目」

……もしかしてこの妙にアグレッシブなところのある娘さんは、今の冗談を本気で受け取ったのだろうか。

……可愛いなまったく。プールの入り口近くの柱の影にいる誰かさんとは大違いだ。

「え……な、なんで……撫でるの……？」

「さっき言ったばかりよ？ 簪が凄く可愛いからよ」

まあ、それ以外に理由なんて無いわな。可愛い可愛い。

「かんちゃんって可愛いよな」

「そうだな。私も撫でていいか？」

ののちゃんの問いに、かんちゃんは顔を真っ赤にしたまま答えなかった。

夏祭り、神楽舞

ののちゃんの実家の神社で祭があるので、行ってみることにした。甚平で。

祭に行くなら甚平だろうと前世の父親に教えられていたので、その辺りは一応こっちの世界に来てからも守っている。

ちなみに俺の甚平姿はなかなか好評で、賢者モードから抜け出したシャルといつも通りのちー姉さんを含む生徒達（ちー姉さんは生徒じゃないけど）があたりを真っ赤に染め変えていた。ちよつと困る。毎朝起きると全身が赤くて鉄臭い物で被われていて、寝間着があつという間に駄目になってしまるのが特に困る。ワイシャツなんてもう色が染み付いてとれないし。

中学生時代にその血がついたままのシート（量はすこしで真ん中よりすこし下の方に点々と付いていたやつ）を見た弾が俺のことを押し倒してきたり、鈴が押し倒してきたりしたから毎回漂白するようにしたという出来事もある。

……それとこれは余談だが、押し倒された時にはかなり詰問された。端から見れば完全に強姦一步手前の状況だったと思われる。頭の上で両手を抑えられたり、着ていた部屋着のボタンが上からいくつかとれたりしてたし。

……まあ、俺が説明を終えた後は自分の勘違いに気付いて呆然としてたけど。

その時に腕にできた痣と服のボタンのことから一日泊まらせて、寂しい夜の抱き枕になってもらったことは言うまでもない。

ののちゃんには秘密で出発し、神社に到着。秘密にした理由は、その方が面白そうだったから。

武装な錬金のリーダー、ヘルメスドライブを使つてののちゃんを捕捉した俺は、遠くから神楽を舞うののちゃんを見ている。気配を読まれてバレているだろうけど、まあ気にしない。気を散らしたら悪いから、できるだけ気配は消してるつもりだけどな。あくまでつもりだけ。

……は、綺麗だな。しばらく見ていたいね。

side 篠ノ之 篇

懐かしの私の生家に戻ってみれば、そこはほとんどなにも変わっていないかった。変わっているものと言えば、壁にかけられた木製の名札の数と、それに書かれた名前くらいだろうか。

昔は私と千冬さんと一夏の三人と、私の父を入れても四人だけという状態だったが……と、しっかりと手入れのされている道具を見ながら思う。

ふと、昔の情景が私の前に現れた。

床に置かれた面を拾い、小さな一夏に竹刀を突きつける小さな私が、壁に寄りかかったままぼんやりとした目で私を見つめる一夏に言う。

『今日こそお前に勝ってみせる！剣を取れ！』

それに対して小さな一夏は、ゆっくりと息を吸い込み、ゆっくりと大きく吐き出した。

『……………一戦だけね』

『臨むところだ！』

すぱんっ！すぱぱんっ！ぴしっ！ぱんっ！べしっ！ばしっ！
パンばしっ！べしっ！すぱんっ！べしっ！べしっ！べしっ！べしっ！
！べしっ！すぱんっ！びしっ！

……………ぺち。

『……………まあ、頑張った』

『くう……………明日こそ……………明日こそ勝ってみせる！』

……………ああ、そう言えば無言で打ってくるせいで一本を取れないからと、ぼっこぼこにされていたな。

……………後に響かないように優しく、それでいてけして手加減はせずに。

あの頃の私はそうしてもらっていることにも気付かないで、ただがむしやらに向かっていったな。

……………懐かしく、それでいて少しばかり恥ずかしい話だ。

生徒手帳を開き、中に入れてある数枚の写真を見る。

それらは私の思い出の写真。一つは折り目がついているが、今ではその折り目は伸ばされている私と一夏と千冬さんと姉さんの集合写真。折り目は当然、私と一夏のツーショットに見えるようになる場

所に入っている。私も子供だったものだな。

二枚目は最近撮ったもので、IS学園の屋上で私が一夏に膝枕をしている。自分で言うのもどうかと思うが、この写真の私はかなり優しげな笑みを浮かべている。記憶にある母の笑顔のようだ。

三枚目はこれまた最近撮った物で、私と姉さんが二人で写っている。私のことを後ろから抱き締めながら心底楽しそうに笑っている姉さんと、それを見て苦笑いを浮かべている私の写真だ。

くす……と笑ったところで外に気配を見つけた。恐らく雪子叔母さんだろう。遅くなった私を探しに来た、というところだろう。無理を言って手伝いをしているというのに、悪いことをしてしまったな。

写真の挟まった生徒手帳を閉じて、もうすぐ雪子叔母さんが見えるだろう扉の方に向き直る。

「篝ちゃん、ここにいたの」

「ええ。懐かしくて、つい。すみません」

「あら、いいのよそのくらい。元々住んでいた所だもの。誰だって懐かしくて見て回るわよ」

「そう言っただけで、ありがたいです」

……ああ、やはりこの人も変わらない。それが私は、たまらなく嬉しい。

「……神楽舞は、六時からでしたか」

「そうよ。……それにしても、よかったの？ 夏祭りのお手伝いなんてして」

「迷惑でしょうか？」

「そんなことないわよ。大歓迎だわ」

恐らく雪子叔母さんの中には、誘いたい男の一人でもいるのではないかと、というのがあるのだろう。

だが、相手はあの一夏だ。あの眠たがりがこのような祭にわざわざ参加しにくるわけがない。

……私の神楽を見てほしいという思いはあるのだが、それを強制することはできないしな。

舞装束に身を包み、金の飾りをいくつか装う。それだけで私の意識は純粹に舞うことに向かう。

昔から私は影響を受けやすかったらしく、この格好をすると舞うのだという意識が強くなる。

口紅を塗り、鏡を見て、綺麗に塗れていることを確認した私は、渡されていた扇と雪子叔母さんの持ってきた宝刀を持つ。

「そう言えば篝ちゃん、昔はこれを一人で持てなくて扇だけだったわねえ」

「ええ。そうでしたね。懐かしい話です」

だが、今は持つことができる。

刀を抜いて右手に持ち、左手には鈴のついた扇を持つ。

それでは、練習も兼ねて一差し舞うとしようか。

一応練習も続けてはいたし、そこまで酷いことにはならないだろう。

夏祭り、屋台荒らし

ののちゃんの神楽舞を見終わってから本格的に祭に参加。

「……………しようと思ってたんだが、何年か前に作った悪名のことを思い出して諦めた。」

仕方がないから焼きそばを買って食べつつお守りでも買おうとお守り売り場に行ってみると、ののちゃんがにこやかに売り子をやっていた。

「やつほーののちゃん。神楽綺麗だったよ。あとお守り14個ね。」

健康祈願が8で家内安全が5、あと安産祈願が1」

「なんだ、見ていたのか……………ありがとうな。14か……………構わないが……………そんなに買ってどうするつもりだ？」

「配るんだけど？」

健康祈願がかんちゃんとラルちゃんとシャルとセシリーと鈴と真耶先生とカズとちー姉さんで、家内安全が東姉さんとののちゃんと弾と蘭ちゃんと俺。安産祈願はネタでシャルに一回渡してから冗談だつて健康祈願を渡すつもり。

「……………そうか。シャルロットも不憫にな……………」

そう言いながらもののちゃんはお守りを種類別に包んでくれる。手際が良いな。何で不憫なのかはわからないけど。

「あ、そうそう。どうせだし一緒に祭を見て回らない？ 一人よりその方が楽しそうだし」

「……ふむ。それは面白そうだが、生憎と仕事があつてな
そっか。残念。」

「あら、あらあらあら？ ……うふふふ 篝ちゃん、あとは
私がやるから、夏祭りに行ってきたさいな」

「……よろしいのですか？」
「いいからいいから。ほらほら急いで。まずはシャワーで汗を流し
てきてね。その間に叔母さん浴衣を出しておくから」

なんだか話が良い方向にばかり進んでいく。夢か？ それとも現実
か？ 現実だったら嬉しいね。いろんな意味で。

「ちょっとだけ待っててね。彼女を待つのも彼氏の役目よ」

そう言つてその人（多分ののちゃんの叔母さん。話には聞いていた
けど会うのは初めて）はのちゃんをつれて行ってしまった。

そう言えば、お守り売りに誰もいなくなつたんだが………ほつと
いていいのか？ 良いなら良いんだけど。

十五分くらいで浴衣で現れたののちゃんは、綺麗と言うより可愛い
という感想の方が合っていた。まあ、どっちにしろ似合つてること
には変わらないんだが。

俺のいる場所から少し離れた所でののちゃんは目を閉じて、それか
ら数秒後に俺に視線を向けた。気配で俺を探してたんだな。

「……一夏。どうやってそんなところに座つた。危ないから降りて

「こい」

「はいはい、っと」

俺は鳥居の上に座っていたが、のちゃんに呼ばれて飛び降りる。場所はのちゃんのすぐ手前だ。

ちなみに普通にジャンプしたら登れた。久し振りにチートを凄いと思った。

「浴衣似合ってるな。可愛いと思うぞ」

「そうか。……ふむ。案外嬉しいものだな」

とりあえず褒めてみると、のちゃんはまんざらでもなさそうな顔をした。うん、可愛い可愛い。

そんな可愛いのちゃんの手を取って、祭の喧騒の中に歩を進める。

「それじゃあ、久々の祭を楽しもうか」

すつ、と大きくなり、のちゃんに見合う大きさに。多分こっちの方がのちゃんは嬉しいだろうしな。

そうするとのちゃんは珍しく頬を少し朱に染め、僅かに恥ずかしそうに付いてきた。

「……むう……その姿は慣れないが……格好良いと思うぞ。一夏」

「ありがとう」

褒められたら礼を返す。まあ、当然の部類に入る事だよな。

……それじゃあ、行くか。

一夏につれられて神社の中にある出店を回る。色々な店があるが、なぜか一夏入るか食べ物扱うところにしか行こうとしない。焼きそばや焼きとうもろこし。チョコバナナにソース煎餅。そういった店をいくつか回ってから、ふとその事実が気が付いた。

「一夏。覚えているか？ 小さい頃にこうして屋台を回りながら、何度も勝負をしたな」

「ああ、やったな。懐かしい話だ」

「……どうだ、再戦でも」

しかし一夏からの返答は色好みものではなかった。

一夏は何となく私から目をそらしながら、一言だけ呟くように言葉を発した。

「……いや、無理だと思う」

ここで私の興味を引いたのは、一夏が言った言葉が『嫌だ』とか『断る』と言った拒絶する系統の物でなく、不可能だという答えを返してきた事だ。

『無理』とはどうして『無理』なのか。どうしてそのような答えが帰ってきたのかを知らないまま、私は一夏を金魚すくいをやっている店の前につれていった。

「いらっしゃ………なっ!? そんな馬鹿な…… 『屋台荒らし』だと!?? …… 去年の祭に参加していなかったから油断した……っ

「！」

「……………は？ 『屋台荒らし』？ なんの話だ？

そう思いながら一夏を見てみると、なぜか一夏は苦笑いをしている。

「あー、安心してくれ。今回は前みたいに金魚がお椀に山積みになつてるのを無視してひたすら掬い続けるとか、跳弾で景品をまとめて持っていくとか、籤で良い方から四つ全部持っていくとか、そういうことはしないから」

「……………一夏。お前はそんなことをやっていたのか」

確かにそんなことをしていれば『屋台荒らし』と呼ばれる訳も理解できるが…………。

「まあ、そんなわけで俺は基本的にそういう屋台から出入り禁止されてるんだよ」

「……………まあ、それなら一夏が『無理だ』と言った理由もわかるな。それは確かに無理だ。」

「……………まあそれは置いといて…………俺は駄目でもものちゃんはずいぶん平気だよな？」

「……………まあ、お前さんじゃなければ大丈夫だろうが……………」

「だってさ。やる？」

「……………いや、やめておこう。」

「そっか。見てるだけでも結構楽しいから、少し残念だ」

一夏はそう言ったが、私としては一夏と一緒に金魚掬いの店の前を離れたのだからな。

私はそうして一夏と一緒に金魚掬いの店の前を離れたのだった。

夏祭り、初対面の二人

ののちゃんと一緒に食べ歩きをしていると、なぜか色々面白い事が起きる。

例えば射的屋で土下座されてお引き取り願われたり、輪投げ屋で土下座されてお引き取り願われたり、籤引き屋で土下座されてお引き取り願われたり、スーパーボール掬いで土下座されてお引き取り願われたり……………。

なんだ、いつものことが。

「お前はいったいどれだけ屋台荒らしをしたのだ」

「大してしていないぞ……………あ、焼きそばのおっちゃんやっほー」

「おお、織斑の坊主か。久し振りだなあ。とりあえず持ってけ。二百円だ」

「ありがとうおっちゃん」

「バカヤロオ、お兄さんだ」

「……………なあ、一夏。あの方とはどのような経緯でこのような関係に？」

「ん？ 焼きそばのおっちゃんは何年か前からこの祭で焼きそば屋台を出してて、それを食べて美味かったからまとめ買いしたらそれが呼び水になったのかかなり儲けが出たらしくて、それ以来の付き合いだな」

「……………そうか」

ののちゃんはなんでか納得していないような雰囲気だったけど、まあ、気にしたって変わりやしないんだからほっとけて。

確かに焼きそばのおっちゃんはかなり強面で子供が見たら泣き出し

て、泣いた子供が凄まれたら涙と呼吸と心臓が纏めて止まりそうな顔してるけど、優しい人だぞ？ ヤクザの中でそこその地位に居るらしいけど。

「完全に危険人物では……いや、顔と経歴だけで人を判断するのは良くないな。確かに怖いが」

「ののちゃんってば酷いね。初対面の人にそんなことを言うなんて」「さっきあそこまで言ったお前には言われたくはない」

まあ、そうだよな。

ちなみにこの祭で食べるものを売っている所には大概強面のおっちゃんorおじちゃんorお兄さんがいたりする。毎年のもので突っ込みを入れる人はほとんどいないが、久し振りに帰ってきたのちゃんには刺激が強かったようだ。

でも、喧嘩があったりすると店から出てきてすぐ止めてくれるし、基本的に気のいい人ばかりだから問題ないとは思うんだがね。

……未成年だろうがなんだろうが、気に入った相手に酒をすすめてきたり、あと組に入らないかって誘ってきたりするところは多少マイナスだけだ。

「……まあ、とにかく今は祭を楽しもうぜ？ ほらののちゃん、あ

ーん」

「む……あー……ん」

もぐもぐと焼きそばを食べていたののちゃんの目に、驚愕の色が浮かび上がる。

気持ちはわかるけどな。焼きそばのおっちゃんはヤクザをやっているのに、なんでか妙に焼きそばを作るのが上手い。そしてこの焼きそ

ばは美味い。

「……美味しいな」

「俺が焼きそばのおっちゃんを、焼きそばのおっちゃん、って呼んでる理由がわかった？」

ただ焼きそばを作ってるだけじゃそうは呼ばないとも。その焼きそばが美味いからそう呼んでいるんだよ。顔のせいとか売り上げはそこらしいけど。」

「それじゃあ、今度は飲み物でも買ってくるか」

「そうだな。人混みの中はやはり暑苦しい」

それに息苦しいしな。

「なにがいい？ ラムネ？ オレンジ？ 緑茶？」

「焙じ茶があればそれだな。なければ緑茶でも構わんが」

「それじゃあ間をとって鳩麦茶を」

「それでも良いぞ」

驚いたことにOKが出た。それじゃあ一緒に買いに

「あれ？ 一夏……さん？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。この声は……

「やっぱり蘭ちゃんか。久しぶり」

「あ、は、はい。お久しぶりですっ」

くいくい、とのちゃんに軽く袖を引かれたので視線を向けてみる

と、困惑した顔のののちゃんが俺のことを見ていた。

蘭ちゃん。弾の妹で、初代睡眠愛好会の特別学外会員二号だ。

そう思ってみると伝わったらしく、袖をつまんでいた指が離れた。

「……それはそれとして、蘭ちゃんは浴衣も似合うな。いつも洋服のイメージだったけど、可愛いと思うぞ」

「はう！あ、ありがとうございますっ！」

うんうん、やっぱり蘭ちゃんも可愛いな。流石はIS界の二大妹属性の一角にして、唯一の年下属性と言ったところか。

蘭ちゃんの後ろできゃいきゃいと蘭ちゃんと同い年くらいの娘達が騒いでるけど、まあ、あのくらいの女子にはよくあることだろ。前世でも普通にあっただし。

……前世のは結構腐ってたような気がするけど。性根じゃなくて趣味嗜好が。

「……元気だな」

「ああ。そうだな」

あそこまで元気だと、もはや少し羨ましくなってくるよ。

てけてけてけー、と人混みの中を浴衣を着ているとは思えないほどの速さで駆け抜けていくその娘達のことを見てから、俺は蘭ちゃんに向き直った。

「……蘭ちゃんがよければだけど、一緒に回る？」

そう言うと、蘭ちゃんは凄く嬉しそうな笑顔を浮かべて

「はいっ！」

と、元気に答えた。

「……そう言えば、そちらの人は……彼女さんだったり……」
「安心しろ。まだ違う」

ののちゃんはからかうようにそう言って、手に持っていた綿飴を噛み千切った。

夏祭り、屋台遊び

ののちゃんと蘭ちゃんを連れて祭の屋台を回る。俺が参加しなければ屋台のおっちゃん達も土下座したりはしないので、そこそこ楽しく回ることができた。

あと、蘭ちゃんの射的は凄かった。よくあの鉄板をあの銃で倒せたもんだ。

本人にそう言ったらなんか微妙な顔をしてたが、何でだろうな。

「女心という物は複雑なのだ。そっとしておいてやれ」
「そうする」

ちなみに蘭ちゃんが落としたのは液晶テレビ。いくら俺でもそんな物を蘭ちゃんに持たせたまま祭の見学を続行しようとは思わないので、蘭ちゃんの代わりに俺が持っている。そこそこ重いが、前に運んだことがあるIS一機よりは楽だ。

「それはそうだろう」

「？ 何がですか？」

「ん？ 五反田は一夏の思考がわからないのか？」

「わかるんですかそれ!？」

「一夏への愛情を満ち溢れさせれば、自ずと理解できるようになるはずだが……そうか、まだまだと言うことだな」

「むっ！そんなのわかるのは筈さんだけじゃないんですか？」

「私以外には鈴とセシリアとラウラと……最近簪がわかるようになっていたな。それに千冬さんもわかるぞ」

「ついでに弾もわかるよ」

「お兄が!？」

蘭ちゃんはなんでか驚いている。弾が俺の思考を読めるって知らなかったのか？

「知りませんよ！と言つかそんなの普通の人間にできるわけないじゃないですか！」

「五反田……………いや、蘭。お前もいまこの時よりまともな人間ではなくなつたぞ。おめでとう」

「なんの話ですか！」

「蘭ちゃん、ついさつき読んでたからな？」

蘭ちゃんはそれを聞くと、ピシッ、と固まった。

「まあまあ、お前もようやくこの高みまで登つてこれたんだ。歓迎するぜ」

あ、弾だ。甚平似合つてるぞ。格好いい。

「ありがとうよ」

「……………ほんとに読んじゃつてるし……………と言つか、さっきまで私お兄に一夏さんへの愛情で負けてたとか……………」

「まあ、蘭も私達と同じ場所に立ったのだ。これからいくらでも挽回できる」

「……………ありがとうございます」

「そつだぜ蘭。俺は蘭を応援してるぜ？」

「うっさい、バカ兄」

……………その後に蘭ちゃんが言っていた『……………でも、ありがとう』という言葉は聞かなかつたことにする。ちなみに、俺はたしかに鈍いが原作一夏ほど鈍くはないからそれだけでも十分わかる。

……と言つか、前にも言った気がしなくもないけどあれでわからない原作一夏は異常。

まあ、かなりどうでもいいけど。あいついつか刺されるだろうという予想を含めて全部。

「まあ、そんなことより祭を見て回るうぜ。適当なところで俺は抜けるけど」

「抜けるんだ？」

「おう。いくら俺でも他人の恋路の邪魔はしねえよ」

「私は弾がいてくれても一向に構わないが？ 誰にんと言われようが、私の想いは変わらないのでな」

「そうか？ まあ、なんにしる抜けるけどな。現像しなきゃならぬ写真が大量にできたし」

「一組だ」

「毎度」

ののちゃんと弾は仲良さげに笑っている。仲がいいのはいいことだ。

「それじゃあ一週間以上たってから来てくれ。それまでに焼き増ししておくから」

「かたじけない、支部長殿」

「いってことよ、肅清部隊副隊長」

「なにその物騒な呼び名！？ 篤さんもなんで普通に受け入れてるの！？」

「まあまあ、ののちゃんたちにはののちゃん達の事情があるんだよ。よく知らないけど」

「知らないんですか？ 本当に？」

「まあな。いいからまた回るうぜ」

「……あれ？　おい。蘭ちゃん？　頭から煙出てるぞー？」

あああああああー夏さんの顔が近い近いちかいかいかいか
いちかいかいかいかいかいあうあうあうあうあうあうあう
ううううつ！！

結局頭の中身がショートした私は、ここで夏さんに連れられて家
に戻る事になってしまった。

……ああ、もう。

厄介事と、二学期開始？

ギンの時以来のまともなIS戦闘は、のちゃんを相手にする時がかなりきつくなったこと以外は変化なしに終了した。アカのワンオフ狡いって。俺が言える台詞じゃないことはわかってるけど。

「触れたら一撃必殺の剣を持つてんのに、なに言つてんのよ。そういうのはあたしやシャルロットみたいな特徴らしい特徴がないISを使っている奴じゃないと言えないことよ」

「……シャルロットさんともかく、鈴さんは十分特徴的だと思いますわよ？ 主に衝撃砲の砲弾の一部を武器で削つて軌道を曲げるという斬新な戦い方が」

「あんたも十分イカれた戦い方してるじゃない。二回曲げ撃ちつてなによあれ。最早凄いを通り越して気持ち悪いわよ。いつかあんた一つの銃口から出たレーザーを縦に裂いた一本一本を独立させて手にぶち込むとかいう鬼畜な真似するようになるんじゃないの？」

「落ちて着けお前達。同類が同類を馬鹿にしたところで自分に帰ってくるだけだぞ」

「ラウラよ。お前が言える台詞ではないだろう。AICで動きを強制的に止めて、一方的にプラズマブレードで切り刻むような真似をしたお前が。まあ、私も人のことをどうこう言える立場では無いが」

「……まあ、皆のISは……と言うか、皆はかなりアレだもんね……普通って言えるのは僕達のだけかな？」

「そうかも……。あとは……訓練機くらい……」

その訓練機から見れば、シャルのISもかんちゃんのISも十分ハイスペックだけどな。

……まあ、なんでもいいけど。

「とりあえず、俺は寝るから」

「駄目よ。ちゃんと昼も食べなさい。作ってきてあるから」

そう言われて食堂まで連行される。確かに腹は減ってるけど、人間一食や二食抜いたところで死にはそこまで考えたところで鈴とのちゃんとシャルに睨まれた。怖い怖い。多分こういう鈴達には一生勝てないな。

「はい一夏。あーん」

「あー……ん」

……うん、美味しい。鈴が俺の食べ物の好みをよく知ってるからか、鈴の弁当は実に美味しい。いい母親になること請け合いだな。

「ありがと。どうせなら協力してくれない？」

「協力ってなんのさ!？」

「勿論お母さんになる手伝い、つまり子供を作る手伝いよ？」

「普通そんなことを公衆の面前で言う!？ 恥じらいを持つとうよ!」

「いいじゃない。普通なんて言葉に縛られて身動きがとれないなんてお断りよ……はい、あーん」

「そうだな。と言うことで一夏。私にも協力してくれ」

「筈まで何を言ってるのさ!？」

「それでは私も立候補させて貰おうか。私が勝ったら勝者特権で「ラウラ!？」 だからなんでみんなそんなにオープンなの!？」

「わたくしは……」

「まさかセシリアまで子供を作る手伝いをしてほしいとか言うんじゃないよね!？」

「いえ、わたくしは首輪でも着けて愛玩動物として一夏様に所有し

ていただければ」

「一番アブノーマルな答えが返ってきちゃった!? ここには僕の味方はいないの!？」

「大丈夫……」

「か……簪い……僕は……僕はあ……」

「……一夏は、私達も纏めて……皆を愛してくれる……から」
顔を真っ赤にするくらい恥ずかしいなら言わなければ良いのに。

「だって……言わなかったら、前には進めないから……」

「よく頑張ったわね、偉いわよ簪。はい、あーん」

「……はむ」

鈴はそんなかんちゃんにご褒美としてか弁当を食べさせていた。食堂の入り口付近で時々ちらりと見える水色の髪が、ぴくりと跳ねたのが見えた。出てくれば良いのに。

「うわあああああんっ! 簪の裏切り者ーっ!」

あら、シャルつてば泣いちゃった。仕方無い、ここは鳩ぶちかに任せよう。

「う……ひっく……」

「くるっくー」

「……ひっく……ひっく……慰めてくれるの……?」

「くるっくー」

「……ありがとう……ありがとう……っ」

シャルは感極まって鳩ぶちかに抱きつき、背中を頭を体を翼を撫で回している。

「シャルロットって意外とエロいわよね」

「鈴には言われたくないよっ！」

「くる？」

「あ、大丈夫だよ、うん……僕はまだ、頑張れるよ……」

……まあ、頑張れシャル。そんな頑張るシャルを応援してる。

応援だけけど。

……さてと。それじゃあ俺は早めにアリーナに戻っておこうか。遅れたらまたふみふみされそうだし。あれって見た目に反して結構辛いんだよな。

アリーナで昼寝をしながら授業開始を待っていたら、気が付いた時にはなぜか狼ぶちかと一緒にのちゃんに膝枕されていた。

「……おはよ」

「おはようー夏。授業の時間だ」

ああ、もうそんな時間か。寝足りないなあ……。

まあ、今日の夜にでもぐっすり寝ればいいのか。

……あれ、なんか凄く嫌な予感がする。具体的には俺の睡眠時間を削る画策をどこかでこっそり進めておいて、逃げ道を塞がれた上で実行されそうな気がする。

予感的中、キレていいよな？

九月四日の朝に、SHRと一限目のおよそ半分を使うらしい全校集会が開かれた。内容は今月中頃にある学園祭について。

……だけど俺は正直に言っただけでやりたくない。クラスの方より睡眠愛好会の方を優先したいと思っている。

ちなみに睡眠愛好会の出し物は休息場。携帯を弄ったりカメラなどで写真や映像を撮るのは不可だが、静かにしていればおよそのことが許される。

そこで俺は寝続けるのだ。学園祭の間、ずっと。

……って鈴に言ったら却下された。一応起きてクラスの方にも顔を出しとかないとマズいからと言われて。

そのため俺は学園内を歩き回る事になったんだが……こうなったら弾とカズと蘭ちゃんを呼んで学園の放送機材を乗っ取ってギリライブでもやってやるのか。

とりあえずチケットは俺と鈴のがあればカズと弾は呼べるから、後はのちゃんからでも……いや待てよ？ ののちゃんはもしかしたら束姉さんにチケットを送るかもしれないな。確認はしておく。

そして駄目だったらセシリーかシャルカラルちゃんかかんちゃんから貰おうかね。

……ラルちゃん、まさか本国の部下に送ってたりしないよな？

くその頃のクラリツサ

場所はドイツ。とある軍事訓練所で、十数人の十代女子と僅かな二十代女子が、ひとつのテーブルを囲んで座っていた。

そんな中、一人の女性が話を始めた。

彼女は黒ウサギ隊ことシュヴァルツェ・ハーゼの頼れる副隊長、クラリツサ・ハルフォーフ大尉。黒ウサギ隊のメンバーをこの場に集めた本人でもあった。

「お前達。こんな時間に呼び出したのは他でもない……この、隊長から送られてきたチケットで、誰が隊長の好敵手にして初恋の相手を見に行くかを決めるためだっ……！」

その言葉に一瞬誰もが沈黙し、すぐさま様々なところから声が上がる。

「副隊長！その役目は是非この私に！」

「いや、私に！私にお任せください！」

「なに言ってるの私が行くのよ！」

「副隊長！ここは隠密行動に長けた私が行くべきかと愚行いたします！」

「はっ！そんなの胸が小さかったから目立たなかっただけじゃない。あゝあ、胸が大きいと不便ねえ」

「……あ？ いまなんつった？」

「一部の盛りが少ないと、隠密行動では便利ね、って言ったのよ。乳だけじゃなくって頭も貧しいのかしら？」

「……その乳……貰い受ける！」

「あんたにできるとは思えないわよつるぺたが！」

「微乳舐めるな垂れ乳予備軍が！」

わーわーぎゃーぎゃーわーわーぎゃーぎゃー。

ドズンッ！ゴッ！ゴッ！ガスッ！

～戻る～

………なんか、ドイツあたりで凄いことが起きてる気がするな。それに、送ってる気がする。今日の昼休みにラルちゃんに直接確認しとこう。その時に全員に聞けばいいだろ。

全員駄目だったら………偽造するか。千の顔を持つ英雄で。まあ、そんなことにはならないと思うけど。

………なんでもいいから早く集会終わらねえかなあ………。

そこまで考えたところで、ざわざわざわと喧しかった女子連中が静かになった。

よしよし、これで立ったまま寝れるな。静かじゃなくてもいけるけど、できれば静かな方がいいし。

シスコン生徒会長の話を右から左に聞き流していると、凄まじく嫌な予感がしてきた。

………変わりすぎていたからあんまり気にしてなかったが、そういえばこの場で生徒会長は

「名付けて、『各部対抗織斑一夏争奪戦』！」

..... ああ、やっぱり。

..... 何故だか俺の隣のシャルが後ずさってるんだが、理由を知っているやつはいるか？ 言わなくていいけど。

..... バレなければ、チート能力を使っても問題ない。そうだよな？

side 篠ノ之 篤

私の頭の中は、現在進行形でパニック状態だ。パニックでも意外と考え事はできるものだ。考えているだけで実行しようとするとかパニックになった体に邪魔されて動けないが。

ちなみに、今こうして冷静に考え事をしている私は私の極々一部だけであり、意識の大半は未だに暴走中であることを明記しておこう。

さて、私がなぜここまでパニックを起こしているかと言えば、今さつきに私達の前に出てきた簪を明るくして胸を増量し、眼鏡を取り払ったような生徒会長の言葉に起因する。

本人は実に楽しそうに話を続けているし、大半の生徒はその説明に意識を奪われていて気付いていないだろうが..... 私にはわかる。恐らく、近くに見える鈴と一夏の隣のシャルロット、そして一夏のことをよく知っているセシリアにラウラに、勿論千冬さんもだ。簪は距離が離れているから気付いているかどうかはわからないが、恐らく気付いているだろう。

一夏が、しっかりと目を覚まししていることに。

……私は正直に言って、気付かないで済むのならば気付きたくはなかった。

だが、一夏との付き合いの中で生まれたこの感覚は、今の一夏の状態を逐一私に伝えてくる。

……つまり、今の一夏は、疑う余地の欠片も無く、疑うことが馬鹿馬鹿しく思えてくるほどにわかりやすく、千冬さんを馬鹿にされた時と同等かそれ以上に　　キレていた。

『な、なななななななんとかならないの筈!?!』

鈴から視線すら向けられずに無言で怒鳴られるが、どれだけ怒鳴られようがこればかりは。

『むむむむむ無茶を言うなあっ!いくら私でも本気でキレた一夏を止められるわけが無いだろうが!なら鈴が止めてみるか!?!』

『なななななななに不可能なことを言ってるのよ無理に決まってるじゃない!千冬さんでも止められないのにあたしが止められるわけ無いでしょうが!!!』

『ならどうする私はまだ死にたくないぞ!それもこんな巻き添えのような形で死ぬなど真っ平ごめんだ!』

『あたしだって死にたくないわよでも助からないわねあゝあ。一夏の子供……欲しかったなあ……孫の顔も見なかったわ……』

『それは私も同じだ!一夏の子ならいくらでも産んでやる!重婚は認められた相手だけなら可!』

……こうして鈴との会話をしているわけだが、この時間は一瞬にも満たない。つまりこれは一種の走馬灯のような物だ。

……ああ、もう少し生きて、一夏と結婚して幸せな家庭を皆で築いて子供を作って育てて一人立ちさせて伴侶をつれてきた子供を笑顔で送り出し一夏や鈴やシャルロットや簪やセシリアラウラ達と共に年を取って老衰で死んで行きたかった……。

キレた、苛めた

ディープダイバーを使って地面に潜る。当然地上にはシルバーカーテンで作った幻影と、幻影を触られてもわからないように人形の人形を置いておく。女性型を置いてしまったかもしれないが、気にしない。どうせ後で入れ替わるし。

潜った俺は武装な錬金のサテライト30を使って六人に分身し、それぞれルリヲヘッド、エアリアルオペレーター、アーマーバロン（破壊男爵の元ネタ的な人）の鎧を装備。

そして両腕にピーキーガリバーを装着して、準備完了。今回は周りを巻き込むわけにはいかないからな。

ずるっ、と顔を隠した三体が地上に上がり、すぐさま生徒会長を捕まえる。

そして問答無用で地面に引きずり込み、それなりに深い地下にまで連れていく。

その途中で生徒会長はISを展開したようだが、そもそもそこらのISより俺は力が強いようだし、地下から破壊男爵で引っ張っているから逃げられない。素でヴィクター以上に力があるならまた話は変わるが。

ごちゃごちゃと煩い話は無視して、生徒会長にルリヲヘッドを装着ちなみにこれは新しく作ったやつだから顔はバテてないはず。

それからルリヲヘッドの能力を応用して、生徒会長にとある幻覚を見せる。かんちゃんにひたすら『大嫌い』と言われる幻覚………ではない。そんなのやつたらかんちゃんと生徒これ会長の仲が修復不能になるかもしれないから。

だから、前世であったとある漫画のキャラクターを使った拷問モドキを用意した。耐えられるやつは耐えられるらしいけど。

そのキャラクターの名前は『エクスカリバー』。ソウルイーターという漫画の中でも屈指のウザさと力を持つ、一人だけでもウザいあれ。

それが数千ほどいて、上を見ても下を見ても右を見ても左を見ても前を見ても後ろを見てもどこを見ても視界を埋め尽くすほどのエクスカリバーが常時話しかけてくる。BGMはエクスカリバー本人による『エクスカリバー』』という声の無限リピート。

当人は歌ったり踊ったり話しかけてきたり人の話を無視して話し続けたり理不尽な質問をしてきたり自分語りを始めたり紅茶を飲んだりパジャマに着替えたりいきなりアップになったりカメラから引いたりポーカークしたりと自由気ままに動いているだけなんだが。

……東姉さんとどこか似てるような気がしなくもない。東姉さんはあそこまでウザくは無いけど。

side 更識 楯無

「私の武勇伝を聞きたいか」

「私の伝説は12世紀から始まったのだ」

「エクスカリバー」

「まったく、人が話をしているときは相手の目を見たまえよ。礼儀を知らぬ奴だ」

「しかしここはどこだ。男前ばかりで場所がわからん」

「エクスカリバー」

「君はどこから来たのだね？ 私はエクスカリバーだ。サインはや

らんぞ」

「バカめ。パジャマに着替える」

「朝は紅茶だ」

「エクスキヤリバ~~~~」

.....つざい.....なによこのウザさは.....。ここまでウザい
ものが存在していたなんて.....。

「聞いているのか？ 君はどこから来たのかと言っているのだ」

「私は、IS学え」「この世界で最も偉大な伝説は何かを知っている
かね？」「

「え、ちょ、自分から聞いておいて」「そう、それは私の作り上げた
伝説だ」「

あ.....あはは.....ど.....ど.....どうしようかしら。お姉さん本気でキ
レちゃいそうよ？

「エクスキヤリバ~~~~」

.....ぶちっ

「.....っだああああ鬱陶しい！『ミステリアス・レイディ』！」

ISを呼び出してすぐさま武装を展開。ラスティー・ネイルで周り
の変なのを斬り飛ばそうと振るうが、それは当然のように避けられ
る。

「バカめ。その程度で食らっ私ではないわ」

「バカめ」

「バカめ」

「バカめ」

む……むっかつくうっ！

言葉に構わず水の鞭で蛇腹剣でランスで攻撃するけれど、どれも当たらない。

その間も周りからは

「エクスキヤリバ~~~~~」

「バカめ」

「バカめ」

「エクスキヤリバ~~~~~」

「バカめ」

「その程度で当たるものか。バカめ」

「エクスキヤリバ~~~~~」

「エクスキヤリバ~~~~~」

「エクスキヤリバ~~~~~」

「エクスキヤリバ~~~~~」

あああああああああああうっっとうしいいいいいいいいい
いっ！！！

「ならば私は黙ろう」

「ただしBGMは流したままだな」

ふつつ、と話し声が消え、エクスキヤリバーの

「私はエクスキヤリバーではなく、エクスカリバーだ。間違えるな」

「黙ってるんじゃないの？」

「エクスキヤリバ~~~~~」

「エクスキヤリバ~~~~~」
「エクスキヤリバ~~~~~」

それっきりエクスカリバーは話さなくなり、私のことを困んだままじっ……………と私を見つめていた。

「エクスキヤリバ~~~~~」
「エクスキヤリバ~~~~~」
「エクスキヤリバ~~~~~」

……………だんだんと、時間の感覚が鈍くなってきた。

「エクスキヤリバ~~~~~」
「エクスキヤリバ~~~~~」
「エクスキヤリバ~~~~~」

……………どうやれば私はこの場所から出ることができのだろうか。
聞いたところで、答えは帰ってこない。

「エクスキヤリバ~~~~~」
「エクスキヤリバ~~~~~」
「エクスキヤリバ~~~~~」
「エクスキヤリバ~~~~~」
「エクスキヤリバ~~~~~」

聞こえるのは、エクスカリバーの声だけ。そのエクスカリバーは、BGMに合わせて近付いてきたり遠巻きにしたりくりと回ったり……………うっとうしい。

「エクスキヤリバ~~~~~」
「エクスキヤリバ~~~~~」

「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」

いつの間にか私はISを解除して、その場に踞っていた。

「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」

この声はそんな私に構うことなく、ずっと私の頭に響き続ける。

「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」

.....。

「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」

「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」

..... ああ、あたまが、まわらなく..... なっ..... て.....

「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」

..... えくす..... きゃりば.....

「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」
「エクスキヤリバ」

「エクスキャリバ」~~~~~
「エクスキャリバ」~~~~~
「エクスキャリバ」~~~~~
「エクスキャリバ」~~~~~
「エクスキャリバ」~~~~~
「エクスキャリバ」~~~~~
「エクスキャリバ」~~~~~
「エクスキャリバ」~~~~~
「エクスキャリバ」~~~~~
「エクスキャリバ」~~~~~

.....

S i d e 織斑 一夏

「.....っという夢を見たんだ」

「前にもあつたわよねこんなこと」

「ああ、あつたな」

「あつたんだ？」

「ああ、あつた」

確かその時は正夢になりかけたんだっけ。

「今回も正夢になったりしてね」

「まさか。いくら生徒会長でもそれは無いだろう」

.....。

「ある方に中学生時代のブロマイド三枚」
「ある方に小学生時代のブロマイド五枚」
「ある方にプレミアブロマイド二枚です」
「ある方に二枚」
「ある方に四枚」
「ある方に……三枚」
「それじゃあ賭けにならないと思うぞ？」
ある方に「ぶちかのウマウマ動画」

……って、結局賭けにならないな。

キレた、苛めた(後書き)

注意 まだ夏休みです。

実はまだ夏休み、でももうすぐ終わる

夏休み初めに一度戻って軽く掃除はしたが、本格的に掃除をするためにもう一度家に戻る。

まあ、その程度なら三時間もあれば終わるので、終わったあとはのんびり寝ることにする。

……訂正。終わった後も《・》のんびり寝ることにする。どうせ今日は暇だし時間はあるし、昼も無しで夜まで食べずに寝てよう。朝も抜いたけど、まあ、平気だろう。人間二〜三食抜いたところで死にゃしないからな。

……すか〜……。

……ポーン……。

……かー、……いの……？ ……ちか……？

何か音が聞こえたのでふつと目を覚ますと、なぜか体が動かない。

「いつく〜ん……むにゃむにゃ………」

原因がわかった。どうやったのか束姉さんが入ってきて俺を抱き締めていたかららしい。しっかりと体を押さえ込まれていて、動ける気が欠片もない。

どうやら外にはいつものメンバーが勢揃いしているようで、気配を感じてみるとなかなか騒がしい。

動けないので仕方無くぷちかを何体か呼び出して鍵を開けに行かせる。ぷちかは見た目以上に力があるから肩車を繰り返してぷちかタワーを作って鍵を開けるくらいの事は普通にできる。ちー姉さんが見た時は暴走しかけてたけど、まあ、平気なはず。

「あれ、ぷちかじゃない。………ってことは、一夏はやっぱ寝てるのね」

確かにさっきまで寝てたけど、今は起きてるぞ。動けないけど。

「寝ているのに上がって良いの？」

「ぷちかが出たから良いのよ。一夏が寝てることなんてよくあることだから」

「………いいのかなあ………」

別に良いよ。

仕事を終わらせたぷちか達は、てててと俺の部屋にまで走ってくる。階段はぴょんぴょん跳ねて走り抜け、玄関の鍵を開けた時のようにぷちかタワーを作って俺の部屋の扉を開ける。

そして束姉さんに抱き付かれた俺と同じ布団に潜り込み、ぷちかばねーさんとぷちーねえさんと呼んで一緒に布団に潜り込んでくる。

俺の部屋のベッドは結構どころじゃなく大きいので寝るのには問題ないが（なにしろ部屋の面積の三分の一をベッドが占領している）、それでもこうしていると少し狭いと思ってしまう。

………狭いところで一塊になって寝るのも好きだから別に良いけど。

ぷちーねえさんは布団に入るとおとなしくなるが、ぷちかばねーさんは布団に入るとむしろテンションが阿呆みたいに上がる。騒いだ

りはしないが、楽しみにしていた遠足を明日に控えた小学生のような状態だ。疲れてか俺達につられてかはわからないが、ほっとけば普通に寝るからまだ良いけど（実際は気絶していることも多い）。

ぶちかにつられて俺の部屋にやって来たいつものメンバーの内、初めて来たやつはベッドの大きさに驚愕している。

結構大人数（主にぶちか。ぶちかたばねーさんとぶちーねえさんも最近は入ってくる。たまに束姉さんがどこから入ってきたり、ちー姉さんが入ってきたりすることもある）で寝ることが多いから、このぐらいはないと困るんだよな。ぶちか布団っていう手もあるけど、それだけだと冬になると寒いし。

静かに静かに部屋の扉が開き、鈴とののちゃんとかんちゃんとラルちゃんとシャルとセシリーがトーテムポールみたいに首だけをドアの隙間から覗かせてこっちを見ている。

束姉さんの事を見てののちゃんと鈴以外は少し驚いていたけど、その二人だけは奇妙なほど冷静にこっちを覗き見している。

「……覗き見するくらいだったらさっさと入っちゃいなよ」

束姉さんがそう言って体を起こした。……って言うか、起きてたのか。ちよつとびっくり。

するりと音も立てずに六人が俺の部屋に入る。全員人間のカテゴリから一部とは言えはみ出して来てない？ 別に良いけど。

「いっくんは寝てるから、静かにね」

「勿論」

鈴はそう言いながら懐から何か本のようなものを取り出し、束姉さんに手渡した。

「約束のブツよ」

「ふむふむ……………」

しばらく束姉さんは黙っていたが、ページを捲る音がやみ、静かに本を閉じる音がした。

「ナイスシャッター」

「感謝の極み」

なんの話だ。と言うかノリ良いな。

「約束のとは…………鈴。何を約束していたのだ？」

「高性能カメラを作ってもらうかわりに、撮った写真を焼き増しして博士に送るって約束よ」

「そんな約束をしていたのか。……………ところで、その写真は貰えるか？」

「勿論よ。でも現像にちょっと時間がかかるから、アルバム式にして渡すのはまた今度ってことになるわ」

「構わんさ。なあ？」

どうやらかんちゃん達も喜んでるようす。それが良かったのか悪かったのかはわからないが、俺的にはよかったということにしておこう。そう思わないとやってられない。

くきゅー〜。

……………腹減ったな。朝と昼を食べてないだけなのに、何でここまですで腹が減る？ IS学園で毎日三食しっかり食べてたからか？

「私はチヨキを出そう」

「では私はグーを出すとするか」

「……私は……パー」

「私もパーにしますわ」

「じゃああたしは、チヨキ以外を出したやつに衝撃砲を撃ち込むわ」
「なんでいきなりそんな危ないことを言うの」

「ではグーを出したものには、私が抱きついてから展開装甲を開いて
攻撃エネルギーを撃ち出す新技を見舞おうか」

「パーを出したものにはAICからのプラズマカノンを撃ち込んで
やろう。なに、手刀の出力を変えればその程度の事は簡単にできる」

「チヨキを出されたら困りますので、福音の砲撃からヒントを得た
増幅レーザーを撃ち込んでやりますわ」

「……山嵐を舐めない方がいい」

「急にみんなが物騒なことを言い始めちゃったじゃないか！どうす
るんだよこれ！？ 何を出しても地獄だよお！」

頑張れシャル《ツッコミ》。そんな苦労人なシャルを応援してる。

……なんだかご飯を作ってくれるみたいだし、俺は束姉さんを抱き
締めながら寝ようかな。

……すか……。

「おお、束姉さんのお腹がそんなに気に入ったかい？ 普通はお
っぱいの方だと思っただけだね？」

知らん。

「ご飯と遊びと、皆の泊まり」

ご飯を食べているときに鈴に聞かれて、うつかり二食ほど抜いて寝ていたことを白状したら怒られた。頬をつままれてむにむにむにむにむにむにむにむにと揉みしだかれた。一人二分。最後の方はちよつと痛かった。

食事はずいぶん豪華で、しかも国際的だった。セシリーの料理からは特に何も感じなかったので、恐らく人間がそこそこ普通に食べられる物はできているんだろう。よかったよかった。

ただ、ラルちゃんの料理はずいぶん豪快で、明らかに料理の経験が薄そうだった。冷凍しといたブロック肉をサイコロ状にして塩と胡椒で適当に味をつけて完成。まあ、失敗はしづらそうでは有り。

束姉さん？ 束姉さんはちー姉さんより少しマシ（一言で言うところ、まあ食える味）程度らしいので辞退したようだ。疑わしい。

ののちゃんは束姉さんに料理を習っていて、つい最近もアドバイスを貰っていた筈なのにそれはおかしいだろうと。

……まあ、多分ののちゃんの作った料理を食べただけなんだろうけど。美味しいからな。ののちゃんの料理は。

ちなみに、かんちゃんはデザート担当。原作に出てきたカップケーキ……かと思ったら、ふわっふわのシフォンケーキが出てきて驚いた。

ちなみにこのシフォンケーキのクリームには、生クリームではなく自作の豆乳クリームが使われているらしい。甘さ控えめカロリー控えめの自信作と、自負とかそう言ったことが控えめなかんちゃんからそんな言葉が出るとは思っても見なかったが、出たということは

自信があるんだろう。

……かんちゃんも変わったな。ずっと内側を向いていて、話に聞くお姉さんの影だけをずっと追いかけていた始めの頃とは見違えるようだ。

口説いている訳じゃないが、やっぱりかんちゃんもののちゃんも鈴木もラルちゃんもシャルもセシリーも東姉さんもちー姉さんも、笑い顔が一番きれいだと思う。

……ああ、怒れるちー姉さんの笑いは綺麗の内に入るぞ？

凄まじく怖いけど、綺麗なことには変わらない。

凄まじく怖いけど。

凄まじく怖いけど。

「三回も言ったのは、やっぱり怖いから？」

「怖いけど綺麗だから、虫除け？」

そう言ってみると、東姉さんに後ろから抱き締められた。なんでか俺は東姉さんの膝の上に座っている。

……なんでだ？

「だってその身長じゃあ机が高くて食べにくいでしょ？ 私も役得だし」

本音が出たな。

『呼んだ？』

呼んでない。ってかなんでのほんがでてくるんだ？ シフォンケーキを食べたいのか？

『食べたいくすつごく食べたいく！』

少し残しておくことにした。

遅い昼御飯も終わり、現在はトランプでポーカーをやっている。手札は五枚でチェンジは一回。場に二枚カードを出しておいて、その二枚と手札の五枚を好きに組み合わせる役を作るタイプの。ただひとつ予想外なのは、

「エースとクイーンのフルハウス！」

「なっ……またフルハウスだと!？」

「これでもう四回目じゃない! いったいどうなってるのよ!？」

「むう……シャルロットめ……」

「……強い……」

「またシャルロットさんの一人勝ちですか……一夏さんはいかがですか?」

「キングとジャックのフルハウス。ちよつと届かない」

「惜しいねー」

シャルが剛運無双している。いろいろ変えたがいつもこんなのだ。

神経衰弱だと勘で鈴が無双。ババ抜きだと気配読みでののちゃん負け無し。ポーカーとかバカラだと今みたいにシャルが無双で大貧民だとセシリーが強い。

俺? 俺は長年カードを使ってきたから、傷とか痛みかたでガン付けくらいはできる。しかもかんちゃんが徐々にカードの傷の付き方を覚えてきていて、だんだん勝率を伸ばしている。

ちなみにラルちゃんはなんでも中の上から上の下くらい勝っている

高水準な平均型。一芸特化のそれには負けるが、十分高い能力を持っている。

……普通に考えて、たかが遊びのトランプで使う能力じゃないよなこれ。

「遊びこそ全力でってあたしに教えてくれたのは一夏だったはずだけど?」

「そうだな。好きこそ物の上手なれ、だから楽しむために遊びだと思ひ、全力で、と言ったぞ」

「そんなこと言ってたんだ? じゃあ僕ももつと頑張ろつと」

「私も本気でやろう。ヴォーダン・オージエを解放させてもらうぞ」

「どこまで本気さ!」

「どこまでも、だ。シャルロット」

「……私も……頑張る!」

全力全開だな。

……それをキャッチコピーにしていた恐ろしい魔砲少女が居たような気がするが、名前を忘れてしまった。確か……な……な……

……ナツパ?

………違い。命令

「次はなにやる? 王様ゲームとかそつち方向のに手を出してみる?」

「何を言っているのだ鈴。そんなことが許されるはずが無いだろう………おっと、手が滑って1から8までの数字と王冠が書かれた籤を落としてしまった」

「それは大変! すぐにこの黒い紙で被われた壘に入れないと大変なことにつ!」

鈴とののちゃんと束姉さんが手早く準備を進めていくが、ラルちゃんとかセシリーとシャルの三人はののちゃん達が何をしようとしているのかわかっていないようだ。かんちゃんは顔を真っ赤にしている。可愛い可愛い。

「えっと……更識さん？ 先程から話に出ている【王様ゲーム】とは一体なんですか？」

「か……簪で、いい……。……王様ゲームは……その……」

かんちゃんは聞き耳をたてている三人にぼそぼそと囁く。聞こえちゃってるんだが、まあ、聞こえてないことにしておく。

「え……ええっ!？」

「そんなゲームが存在していましたの!？」

「ふむ。案外シャルロットなら一番初めに引かせれば毎回王様になれるのではないか？」

なるだろうな。シャルロットだし。運のゲームは馬鹿みたいに強いし。

全員同時に引くから関係ないけど。

「せーの、王様だーれっ!」

………あ、俺だ。

「じゃあ、命令。みんな寝よう」

こうして俺達は、馬鹿みたいに大きなベッドを丸々2つ使って寝るのだった。

一学期開始、……の前日

二学期開始の前日。俺はいつも通りに明日の支度をしてから布団に入る。現在時刻は二時。

午前二時？ いや、午後二時、つまり十四時だ。俺が夜中の二時まで起きてるとか、いったいどこのハルマゲドンの前兆だよ。鈴が慌てて騒いで槍が降る核の炎が降るどうしよう弾もしかしたら日本が、いや地球が、いや太陽系が崩壊の危機よ！とか弾に電話しそっ
だし。

ちなみに前に一度本当にこうして鈴が弾に相談したことがあった。原因はその日の俺が学校で一度も寝なかったから。

まあ、当時の俺は、鈴がマジ泣きしてるところなんて久し振りに見た。なんて暢気なことを言ってたんだが。

それはともかくとして、昼御飯を食べた俺はカーテンを閉めて電気を消して狼ぶちかかと楽しそうに揉み合いながらころころ転がっているぶちーねえさんを拾い上げて抱き締める。拾ったときの顔は毎回『きよとん』としていて可愛い。ちー姉さんにもこんな時代があったのかね？

「……はあはあ……ちっちゃいちーちゃんもちっちゃいつくくんも可愛すぎるよっ！こうなったら束さん式遠隔転送でちっちゃいちーちゃんといつくくんをここに呼び出してすりすりするしかないよね！」
「ぶちか。GO」

号令と共にぶちかが二十ほど出てきてぶちたばねーさんをあつといつ間に包み込んだ。

「ほうあー！ちっちゃいっくん達にもみくちゃにされてるよぉ〜
！暴走しちゃうよぉ〜っ！！！」

「わうわう！！」

「にゃうにゃう！！」

「ほうあー！！」

ぷしゅっ！という水音がして静かになった。ぷちたばねーさんの近くにいたぷちかは赤っぽくなっていた。見事に暴走したと言っわけですねわかります。

流石に布団を血で汚されるのは嫌なので、血まみれぷちか達を風呂に入れてから寝ることにした。犬属性ぷちか達は割と普通に入ってくれるが、猫属性ぷちか達はなかなか入ろうとしない。ミニシロまで使って逃げている。そこまで嫌か。

「にゃう！！」

嫌だそう。こんなところまで猫っぽくしなくてもいいだろうに。

仕方がないから無理矢理捕まえて、逃げられないように首根っこをつまんで持ち上げる。汚れた猫属性ぷちかが二体だけでよかった。それより多かつたら面倒だった。

「みゃー！！」

「おとなしくしてればすぐ終わるから」

「みゃー！！！！」

……………やれやれ。

ぷちか達を風呂に入れて、わしわしと洗う。浴槽はなくとも洗面器はあるからな。無かつたら作ればいいだけだけど。

犬属性ぷちか三体は、俺が洗っている猫属性ぷちかではない方を抑えていてくれている。ありがとな。

そして今洗っている方の猫属性ぷちかは、

「にゃ、にゃあ、あゝ……」

全身くまなく洗われて、満身創痍になっていた。さっきまで気持ち良さそうに鳴いていたのにな。鈴が聞いてたら暴走しそうな感じで。

「はい次。黒猫ぷちか」

そう言うと、なぜか素直に洗面器の中に座り込んだ。

ちなみにさっきまで洗われてたのは白猫ぷちか。赤い斑点が凄まじく目立っていたからついしっかりと洗い尽くしてしまった。

黒猫ぷちかの方も、しっかりと洗ってやらないとな。

……もちろん、犬属性達も。

side ぷちか一号

ぷちか一号こと、柴犬ぷちか。今はごしゅじんさまに洗ってもらう順番待ちの途中だ。

黒猫。ぶちかがごしゅじんさまの大きな手でわしわしとマッサージをされながら洗われていて、気持ち良さそうな鳴き声をあげている。それを聞いて他のぶちか達もそろそろと並び、今ではほとんどのぶちか達のごしゅじんさまの前に並んでいる。

それを見たごしゅじんさまは、面倒臭そうなため息をついたあと、壁に六角形の穴を開けておれ達を呼んだ。

そこに入ってみると、そこは大きなお風呂だった。そして、ごしゅじんさまが三十人も居た。

三十人のごしゅじんさまは、わしやわしやおれ達を洗ってくれた。頭を洗い、首から背中を洗い、腕を洗い、足を洗い、血がべったりついていたおれ達は前も洗ってもらった。ごしゅじんさまの手は温かかった。

全身くまなく洗ってもらったおれ達は、今は大きいのに浅い風呂に浸かってだらけている。最後のぶちかを洗い終わったごしゅじんさまは、そんなおれ達を見てぽつりと

「ちー姉さんが見たらお湯が真っ赤に染まりそうな光景だ」

とだけ呟いて、それから始めの方に入っていたぶちかを優先してお湯から引き上げて体を拭いて、ベッドに運んでいた。

運ばれたおれ達は、先にベッドに入っていたぶちーねえさんやぶちたばねーさんを抱き締めて布団にくるまる。

何体も何体も運ばれてきて、ベッドに乗らなくなったらどこからともなく出てきた新しいベッドを連結してそこに寝る。

……わう……おやすみ……。

超外伝、未来図？ 狂乱編

織斑百秋、十歳（大嘘）です。シロにもそう登録されてるけど。

とりあえず意識せずに原作の世界に来てしまった俺は、現在はこっちの世界のちー姉さんと織斑一夏と一緒に食事中だったりする。なんだか周りが色々騒がしかったりするけれど、俺は全く気にしない。

……そうそう。のちゃんがISを貰っていなくて、かつシャルとラルちゃんがいることから二巻と三巻の間の空白期だと予想される。中々面倒な時期に飛んだもんだな。

「そついやさ。お前って結局俺と誰の子供なんだ？」

一夏によるいきなりの爆弾発言。これによって周りにいた一夏のとが好きな皆が聞き耳をたて始めた。耳がダンボのように大きくなっているように見えるのは、きつと気のせいだと思う。

だが俺は素直には答えない。にっこりと笑いながらこう切り返す。

「当ててみて？」

すると一夏は悩み始める。そしてそれと同時に、一夏のが好きなこつちのののちゃん、鈴、セシリー、シャル、ラルちゃんが一夏を睨み始めた。なんだか一番最初に出された名前が本命だとか考えているような気がするけど……相手は鈍感選手権世界記録保持者の一夏だよ？ 髪の色とか目の色とかで考えるに決まってるじゃん。

「……………ん……………箒か？ 髪真っ黒だし日本人っぽいし」

ほらね。

ちなみにののちゃんは今の一瞬で笑顔を浮かべ、凍り付き、殺気を放っている。

とりあえずこっちの一夏を殺させないように、一夏の膝の上に座ってみる。

「違うよ?」

なんだかののちゃんの殺気がこっちにも向いた気がする。怖い怖い。さてと。それじゃあこっちからも爆弾落とし返すか。

「母さんの子供は女の子だけだから」

「ちょっと待て!?!」

なんでか叫ばれた。なんでだろうな？

「母さんの子供はって……………じゃあお前は!?!」

「母さんは母さんで、おかーさんはおかーさんで、シャルママはシャルママで、ラルママはラルママで、鈴木さんは鈴木さんで、セシリママはセシリママだよ?」

「なにその状況!?! 俺未来でいつたいなにやつ」

ゴズンツ!

「一夏。少し話があるのだが」

「あたしもね。どういうことかしら……………?」

「もちろんわたくしもお忘れなく……おほほほ……」
「へえ？ 一夏って重婚なんてしちゃうんだ？ 僕、びっくりだな」
「お前は私の嫁だろう。何を勝手にそんなことをしているのだ」
「まだなにもしてねえよ！ なあ、百秋からもなんか言ってるよ」
「れ！」

なにか……なにか……。

「パパって夜のお布団の上だとおかーさん達よりずっと凄いの、
やっぱりお昼は」

「うおおおおおい！？ 未来の俺はなにやってんだ！？ 見られて
るぞおいしいiiiiiiii!？」

反応無し。

そう思っていたら、いつの間にかちー姉さんの膝の上に移動して
いて、一夏が五人に連れていかれているのを見ることがになった。頑張
って生き残ってね？

「……それで、お前を産んだのは誰だ？ ん？」

俺はそれに答えずに、ちー姉さんに背中を預けたまま眠りについた。
全員の居る前で言った方が面白そうだし、あと普通に眠いし。

……ふぁ……。

起きたら既に時間は昼だった。場所は……多分、寮長室。
備え付けのベッドは他の部屋と同じように柔らかく、体が布団に沈

み込む。

……ちなみに、俺としてはもう少し固めの方が好み。そして枕は抱き枕推奨。

別にいいけどね。寝れるし。

……さてと。もう一眠りするかね。昼食ってないけど平気だろ。多分。

ちなみに俺の無駄特技として、寝ながらご飯を食べる（受動）というものがある。

簡単に言つと、鈴や弾にご飯を食べさせてもらいながら寝れると言つ特技。自分からは動かないから、無駄特技。

とはいえ、割と使われる頻度の高い無駄特技だったことは認めるが。

そうして無駄なことを思い出しつつ二度寝の体勢に入ると同時に、寮長室（仮）の扉が開いてちー姉さんが入ってきた。

「百秋。起きているか？」

「……ん〜……まだ寝る……」

「昼を食べてからにしろ。一夏達も待つているようなのでな」

……仕方無いなあ。

そう思いつつ、俺はゆっくりと起き上がる。……やっぱりもつちよつと寝ていたい。

いつの間にか装着されていた狼耳をぴこぴこ動かし、ぎゅゅ〜つと体を伸ばしてからぷるぷると頭を振る。

それから顔を上げると、なんでかちー姉さんが、よく鈴や弾がしてる目と同じ目をしていた。言葉で言つと、「ああ、こいつ可愛いな

あ……。」という目。

それから手を繋いで食堂まで一緒に歩く。数人の女生徒がちー姉さんの子供かと噂してアイアンクローを食らって撃沈したり、お菓子をくれたりした以外は普通だった。

「それで、結局百秋は誰の子供なんだ？」
「パパのだよ？」

わざと惚けて当たり前の事を言ってみる。

「いやだから……百秋を産んだのはだれかって聞いてるんだけど」
直接的に聞いてきたか。まあ、これで爆弾を落とす準備はできたかな？

「おかーさんの事が知りたいの？ パパだって知ってると思うんだけどなあ？」

「じゃあヒントー！ヒントをくれ！」

……ヒント……ヒントねえ……。

……わかりやすくいいか。

「ヒントー。料理は上手じゃないよ」

ここでシャルとののちゃんと鈴が脱落。一夏に憎々しげな表情を向けている。

ちなみにちー姉さんはそんな状態を見てにやにやしている。

「ヒント2。おカーさん達の中ではかなり強いよ」

ここで視線はラルちゃんに向く。ラルちゃんは勝ち誇った顔をしている。

「ヒント3。ここにいないたつちゃんやかんちゃん達とは違うよ」

「おいしいiiiiii!？ 俺何人と付き合ってたんだよおお!？」

「……いち、にい、さん、しい、ごお、ろく、なな、はち、きゅ
う………いっぱい?」

「iiiiいちかあああああつ!!そこに直れえええつ!!」

こつちの世界のののちゃんは怒りっぱいなあ。そんなことをしてて好きだと気付いて欲しいって言うのは虫がよすぎないか?

……俺には関係ないし、別にいいけど。

……うん。ここのチャーハンは美味しいね。薄味で、寝惚けた舌にはちょうどいいよ。俺は大抵寝惚けてるけど。

「……結局、誰かは言わないのか?」

ちー姉さんがそんなことを言うけれど、ののちゃん達の暴走が酷くて言えないだけなんだよね。

「……聞きたい?」

「ああ。教えてくれるのか?」

「いいよ?」

にやにやと笑っているちー姉さんの耳元に口を寄せる。なんだかすぐ近くでIRSを使っていれば聞き取れそうだけど、その辺りはあえて無視して言うてみる。

「俺のおかーさんの名前はね」

「ああ。なんだ？」

「織斑千冬って言うんだよ。おかーさん」

すると、すぐ近くでISを使っていた数人と、ちー姉さんがまるで石化したかのように固まった。

……さてと。ご飯の残りを食べちゃおうかね。

数人が固まっているのに気付き、不思議そうにしているののちゃん
と一夏以外の専用機持ちは、全員がちー姉さんのことを凝視してい
る。

「……な……なあ……何があつたんだ？」

一夏の能天気なその言葉が静かなこの場に響いた後、

「……な」

「な……なな」

「……な」

ここで俺は耳を塞ぐ。やばいことになりそうだし。

「なにいいいいいいいつー！！？」

俺が耳を塞ぐと同時に、辺りに絶叫が響き渡った。

……ほら、やばかった。耳を塞ぎ損ねた一夏とののちゃんなんて悶絶してるし。
大変だね。

一学期開始、まず整備から

新学期が始まって、俺は久しぶりにシロの調整をしていた。

久しぶりの模擬戦が終わった辺りで少しのズレに気が付いて、ちゃんと一緒に整備と調整を繰り返している。

「あ、更識さん。……ここで織斑君と一緒にいるところを見るのは久しぶりじゃない？」

「は、はい……夏休みのあいだは……来てませんでしたから……」

そう言っただけで話しかけてきたのは二年生にして新聞部の改竄。パラッチこと繭染桜子^{まゆぞめ}さん。名前はきつと違う。

かんちゃんはISを完成させるときにこの人の力を借りて、それから交遊を続けているらしい。

ちなみに俺とも一応顔見知りではあるが、俺はあまりこの人のことは好きではない。

理由は、取材取材と騒いで睡眠時間を削るうとしてくる上に、改竄率が凄まじいから。IS学園でハーレム作るのが夢だなんて言っていないっての。

そんな記事をあげてくれやがったので、俺は鈴とのちゃんに「めっ！」って感じで叱られてしまった。

仕返しに新聞部に突撃してこの人の頭をそこそこ本気で潰れない程度にかつ逃げられない程度にアイアンクローで締め上げたことがある。泡噴いてたけど人間ってのはかなり頑丈だから大丈夫なはず。

「……いや、あれは痛かったよ？ 具体的に言うと、あの記事をあ

げた直後にやってきた織斑先生にやられた時とおなじくらい」

ああ、織斑君は織斑先生の弟なんだなーって思った、などと言っているが、原因は向こうなので謝らない。悪いともあんまり思っていない。

酷いかもしれないけど、これもまた一つの戦争なのよね。

「ところで織斑君？　織斑君は更識ちゃんのことはどう思ってるの？」

「ポケットの中のボイスレコーダーとカセットと俺の後ろで別の物を撮っているふりをしながら声を録音しようとしている誰かさんを何とかして言葉を改竄または捏造もしくはそれに連なることをしないんだつたら答えてあげないこともないですけど？」

実はなにも無しで答えを返しても一向に構わないんだが、一応言うておく。

「……何でわかるの織斑君？　織斑君つてもしかしてエスパー？」
「まさか。やりそうなことを列挙して気配を読んでみたら集音マイクがこつちに向いたまま別方向をそしらぬ顔で撮っている誰かさんがいるのがわかったから、カマかけてみただけ」

まさか本当に当たるとは、ちょっとしか思ってたよ。

「ちなみにかんちゃんの事は好きだよ？　友愛って意味だったら愛してるって言うてもいいくらいには」

なんでか、五月蠅いはずの整備室の音が完全に消え去った。ガシャガシャと五月蠅かった機械の音から話し声まで、一切合切が消えて

しまった。

「あ……え……？ 織斑……くん……？ あい、してる……？
愛……して……」

かんちゃん顔が顔を真っ赤にして煙を出してしまった。いったい何が
あつたんだ？

今の言葉を聞いたくらいでこんななるって言うのは無いだろうし、
熱も無かつたはずなだけ。

「え……いいの？ まだ切ってないんだよ？」

「改竄したり捏造したり煽りの材料にしたりしなければ別にいい」
したらアイアンクローからの振り回し 叩き付け 投げる 空中コ
ンボ フィニッシュ 追い打ち とどめまでのフルコースを食らわ
せる予定。おかわりは自由だから足りなかったらいくらでも持つて
け。

「それは遠慮したいかな……あはははは……」

特に意味はないけれど、怒れるちーねえさん笑いと呼ばれた愛想笑
いを浮かべてみた。そしたら泣かれた。なんでかね？

「織斑くん？ ……すっごい怖いよ……？」

「ああ、やっぱり」

だよな。まあ、怒ったちー姉さんは怖いよな。いろんな意味で。

いや、一番怖いのは無邪気に殺意を向ける束姉さんか、炎のような
憎悪と氷の殺意と機械のような繊細な技術を使うちー姉さん……あ
れ、ちー姉さんだ。

……とにかく、ちー姉さんは怒ると怖いし容赦がなくなる、と。

結論が出たところで、俺は寝ようかね。かんちゃんはまだ真っ赤だけど、しばらくすれば戻ってくるだろ。

かんちゃんの膝を借りて、俺は久し振りに整備室で眠る。実は五月蠅かるうが起きないことはできるんだが、やっぱり静かな方がいい。

……すか……。……。

side 更識 簪

織斑君がいきなり私のことを愛してるって言って、なんにも考えられなくなって、頭が真っ白になって、膝の上の織斑君の頭を撫でて私の口から言葉にならない声の羅列が溢れて、お姉ちゃんに助けを求めて、もぞもぞと動く織斑君が動きを止めるまで待つて、先輩がにやにやと笑つてて、携帯で織斑君の写真撮つて、打鉄式を腕だけ展開して黛先輩にでこぴんをして、あうあうとわからない言葉を発して、顔が真っ赤になってることを自覚して、頬を片手でおさえて、メールで本部長に写真を送つて、打鉄式を戻して、織斑君の頭を撫でて、シロに目をやって、コンソールを叩いてロックオンシステムを作つて、織斑君のほっぺをぶにぶにして、指を舐められて、その指を織斑君の口から抜き取つて、織斑君の唾液をべろりと舐めて、何をしたかに気付いてせっかく冷めていた頭がまた沸騰して……とりあえず私は気絶することにした。

……きゅ。

全校集会、これ夢で見たな

「やあみんな。おはよう」

そんな声がスピーカー越しに響いて、なんだか凄まじく嫌な予感がする声が俺の鼓膜を震わせる。

壇上で挨拶をしている生徒会長の挨拶のはずだが………やっぱりやられるのかね？ 俺は一応部活に入ってるんだけど。

……愛好会は部活にカウントされないとか？ だとすると少し困るな。俺の睡眠時間が減るし。

まあ、原作的に考えると外せない出来事だろうし、一応顔見知りではないにしろ会ったことはある訳だし、予想通りの事になったとしてもキレすぎないようにしないと。

努力はするが、確定ではない。キレる時はキレるだろうし、怒るときは怒るだろう。頑張れ俺の理性。そこそこ期待してる。そこそこ止まりだが。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

……なんだかあんまりよろしくしたくない感じの、悪戯好きで嗜虐心満載の猫のような声だな。あんまりよろしくしたくない。よろしくしたくない。よろしくしたくない。よろしく

「一夏。何回言ってるのさ？」

「重要なことだから、つい」

「……つい、つて……」

シャルに突っ込まれている間も……名前なんだっけ？ ……猫座の生徒会長でいいか。面倒だし。……猫座の生徒会長の話は続く。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは 名付けて、『各部対抗織斑一夏争奪戦』！」

……夢で予想してたのより、ム力つくな。自分の事が勝手に決められるのも、睡眠時間が減らされるのも……。

シャルが隣で俺の事を驚愕の眼差しで見つめている。どうやら夢の話が本当に起こったから驚いているらしい。

……それにしても、ほんつとにム力つくな。多分エクスカリバーでもここまでム力つかない。あいつは話をするだけで、叩き起こしたり睡眠時間を削ってきたりはしないだろうから。

「……い……一夏、落ち着いて？ ね？」

シャルがだらだらと冷や汗を流しながら俺を見上げて小声で説得しようとしている。どうやら俺がこの後に夢の中と同じような事をしてないかと思っているらしいが、まあ、関係ないな。

あと、流石に人前であれば無い。やらないから安心してくれていい。そう思いながら顔を上げて猫座の生徒会長を見やると、笑顔と一緒にウインクを返されたので、こちらからは百万ドルの笑顔（ちー姉さんレートでは価値億倍らしい）を返す。

なぜか、俺の半径二メートル以内から人がいなくなった。
なんでだろうかね？

………とりあえず、後で怒られるのを覚悟してから猫座の生徒会長を苛めよう。逃げられそうになったらシロの三つめの特殊装備を使えば逃げられないはずだし。

IS？ 使われたときにシロを使う予定だから、まあ、平気じゃない？

………さあてと。行くか。

side 凰 鈴音

Bell & Bulletの、悔しいけど一夏のために物理法則を越えられない方、鈴よ。ちなみにBulletは弾ね。わかってると思うけど。

こうして妙な自己紹介をしているのにはわけがあるのだけど、今は省かせてもらおうかね。

あたし達は今、全校集会で生徒会長の話を聞いているんだけど………
…一夏ってエスパーだったりするのかしら？ なんでここまで正確にわかるのかしらね。

一夏の夢では、この後一夏がキレて生徒会長を地面に沈み込ませて発狂するまでエクスカリバ……を聞かせるはずんだけど……
………流石にやらないわよね？

例えばラウラやシャルロットの時みたいにな、どこかしら変わるはずよね？ ね？

『……変わるとういがない』

『……そんな絶望的に確率の低い奇跡に期待する兵士みたいな口調はやめてよ。こっちに移るじゃない』

確かに絶望的だけど。

……千冬さんがいなければ、ここから逃げるとかサボるとか、そんな選択肢も取れたのに……。

……ああ、まだ死にたくなかったなあ……。

『…………ISを使って逃げるわけにはいかないか？』

『あの千冬さんから逃げられるって本気で思ってるんだったら、試してみたら？ 無理だと思うけど』

だって千冬さんって、大魔王より大魔王でしょ？ 大魔王からも逃げられないのに、千冬さんから逃げられるわけが無いじゃない。

………どうしよう……。

『……私は気合いで貧血に似た症状を起こして保健室に行くが、どうする？』

ず、狡い！そんなことができるなんてっ！！

『鈴も愛らしすぎる一夏を想像すればよかるっ』

それだっ！！

すぐさま可愛い一夏を想像する。いつもは我慢するところを我慢しないでいると、すぐに鼻から愛情が溢れて……

って、駄目じゃない。私に一夏への愛がある限り、愛情が溢れて貧血になるわけがないわ。

「ちよっ！？ 凰さん！？ すごい量の血が出てるんだけど！？」
「ほ、保健室っ！ 救護室っ！！ 衛生兵ーっ！！！！」

……あら、意外と抜けられたわね。

……じゃあ、シャルロットとラウラとセシリアは………頑張って生き残ってね？

夢とは違う、この現実（前書き）

—夏が拍子抜けするほど優しいです。

夢とは違う、この現実

周りから人がいなくなつたせいで目立ってしまったているが、そのく
らいならなんとでもなる。

シルバーカーテンを使って姿を消し、それからすぐに猫座の生徒会
長の後ろに回り込む。

いきなり俺が消えたせいでざわざわとしているクラスメイト達をス
ルーして、猫座の生徒会長の後ろでシルバーカーテンを解除する。
そして、猫座の生徒会長の肩を、あくまでも優しく叩く。

「え？」

「……………」

につこり、と笑いかけると、冷や汗を滝のように垂れ流しながらも
笑顔を返してくれる。少しは手加減してやるか。あくまで少し。

まあ、元々本気で殺す気は欠片も無いわけだけど。

につこりと笑いながら猫座の生徒会長の頭に右手を置いて、一言。

「なにか言い残すことは？」

「……………えへ」

冷や汗を流しながらとは思えない、悪戯っぽい笑顔を頂きました。

ギョヂイイイッ！！

side ラウラ・ボーデヴィツヒ

その音が聞こえると同時に、私は自分の頭に鈍痛を覚えた。今、一夏が生徒会長の頭を使って奏でているこの音は、少し前に教官にされた仕置きの際に頭の内部で響いた音と瓜二つだったからだ。

まるで、鳴いている蝉を踏み潰したときの断末魔や、首をへし折られて死んだ瞬間の豚の鳴き声を思わせるその音は、教官によく似た笑顔を浮かべる一夏と、生徒会長の口から溢れ出る悲鳴が混じるおかげでさらに恐ろしい。

明らかに致命的な音を立てていると言うのに、一夏は欠片も容赦する気はないらしく、全く手の力を緩めていないようだ。

生徒会長の口から溢れていた悲鳴も、今では悲鳴と言うよりも呻き声と言うべきものに変わってしまったている。

じたばたと暴れさせていた手足もだらりと垂れ下がり、時折痙攣するように跳ねる以外に動いている様子は無い。

「……………そう言えば、昔から言ってみたかった言葉がある」

生徒会長の胸元についていたと思われるピンマイクを通して、一夏の声がホール中に響いた。

一夏はいまだに笑顔を浮かべたままだったが、その手にはすでに相当の力が込められているらしく、見えている手首から先には血管が浮き上がっているのが視認できる。

「……………私の握力は、53万です」

それはどう鼻屑目に見ても、人間の握力ではない。

と言っか、もはやそれは地球上の生命体が上空からの自由落下以外の方法で出していい威力ではない。

「ただし単位は普通にグラム」

隣で、なんだグラムかー、びっくりしたー。等と言っ言葉が囁かれているが、よく考える。

53万グラムだぞ？ 530000グラムだぞ？ キログラムに直しても530キログラムだぞ？ 十分人間の出せる握力ではない。

……まあ、冗談なのだろうがな。

「……一夏だったらありえる気がするのは僕だけかなあ？」

「シャルロット。頼むからそんな恐ろしい予想をたてるのはやめてくれ。洒落になっていない」

言われて見れば、ありえる話だ。一夏だしな。

「……一夏だもんねえ……」

「……一夏様ですからね……」

「……一夏だからな……」

私達は視線を合わせ、溜め息をついた。

しばらくギリギリギリギシギシギチギチギチギチギチギチと猫座の生徒会長の頭を掴んでいると、ちー姉さんに怒られた。確かに猫座の生徒会長はなんかバイ感覺到に痙攣してはいたが、もう少しやっても大丈夫だと思っただけ。人間ってのは意外と頑丈にできてるからな。

けれど怒られちゃったものは仕方ないから、猫座の生徒会長の頭から多少めり込んでいる指をはがす。

「やりすぎだ、馬鹿者」

「許可も取らずに勝手なことを言いたい放題いってくれやがりましたので、つい。後悔はしていませんが反省はしています。闇討ちすればよかつ」

出席簿でひっぱたかれた。枕ガードを発動したらその隙に頭を捕まされた。

「……ちー姉さんの握力って、いくつ？」

「織斑先生、だ。……それと、私の握力は精々250キログラムに届くか届かないか、と言ったところだ」

十分化物の域ですわかりません。

そう思うと同時に、ちー姉さんの握力が一気に強くなってきた。気で強化なんてしないで甘んじて受けることにした。

元々、大して痛くもないし。

後で鈴やラルちゃん達にその事を言ってみたら、凄まじく驚かれた。そう言えばこの二人はちー姉さんの握撃を受けたことがあったな。

半死半生になってたり、モザイクなしで公共の電波にのせたらアウ

トになりそうなほどダメージ食らってたけど。

……よく平気だったよな。色々と。

「一応生徒が相手だからな。加減した」

十分アウトです。ちー姉さん。

クラスの出し物、サボろうか

色々あった全校集会の放課後。クラスの出し物を決めるための話し合いの時間を設けられたわけなんだが

『織斑一夏のホストクラブ』

『織斑一夏とツイスター』

『織斑一夏とポツキー遊び』

『織斑一夏と王様ゲーム』

.....。

「セシリー。俺はもしかしてまたアイアンクローを望まれてるのか？」

「わたくしにですかっ！？ でしたら喜んでお受けいたしますわっ！」

「違う違う。わざわざ俺の睡眠時間を減らそうとしたらどうなるかを簡単に教えてあげたのに、まだこんな馬鹿なことを考える人は、もしかして今度こそ頭を握り潰されたいのかね？ ってこと」

そう聞いてみると、セシリーはあからさまにかつ心底残念そうな顔を浮かべてから言う。

「恐らくですが、そういったことは考えていないのではありませんか？ わたくし達はそんなことは恐ろしくてとてもとてもできそうにありませんが、知らなければ魅力的に見えるのでしょうか」

あっそう。まあ、仕返しはするけど。

シルバーカーテンを使い、消える。するとさっきの案を出した数人が慌てて自分の後ろをきよろきよろと見回す。始めに自分のところにくるんじゃないかと思っただけを探しているようだ。

……はっはっは、そんな誰か一人だけを狙うわけがないのにな。

とりあえず、でこぴん一発で許してあげることにした。経験者（鈴）曰く、首から上が吹き飛んだんじゃないかって思ったのはあれが初めて、と言われる程度には痛いらしいが、たいしたことはないはず。ぱっ、ととある一人の目の前で透明化を解除し、にっこりと笑いながら手を振ってみる。なぜかひきつった笑顔を返された。

……つい最近に似たような顔を見たな。具体的にはあの猫座の生徒会長の頭に手を置いたときに、猫座の生徒会長が浮かべた笑顔がこんななんだっただけだ。

「……もしかして私……頭ぶちつてやられたり……？」

「しないしない。でこぴんするだけだから」

まあ、そのでこぴんは効果音をつけると『キュボツ！』とか『ドズムツ！』とか、そんな音になるようなでこぴんだけだ。

とりあえず加減をして優しくでこぴん。教室中に響くような音をたてて額に直撃したでこぴんに、そいつは悶絶する。

「……あ……あ……あ……い……ったあ……」

「はいそれじゃあまともな案を出してねー」

また変なのが出たらでこぴん百列拳（拳じゃないけど）を食らわせ

てやる。

結局原作と同じようにメイドやら執事やらが接待する『ご奉仕喫茶』になった。

やっぱりこの世界にも原作の修正力つてのがあったりするのかな？ちなみに俺は執事だが、途中で抜ける。睡眠愛好会のほうの出し物も決めなくっちゃいけないし。

……さてと。楽しい楽しい学園祭のために、少しだけ働くとしようか。

……面倒臭いけど。

side 凰 鈴音

真っ暗な部屋の中で、私達は円形のテーブルに輪になって座っている。全員が真剣な顔をしていて、ピリピリとした空気が伝わってくる。

「……それではこれより、IEEEの月例会及び、睡眠愛好会の学園祭の出し物についての会議を始めるわ」

「それではまず、参加している人達のクラスの出し物の詳細を要求します」

「許可するわ。あたし達二組は中華喫茶の予定よ。シフトの時間は午前の10時から11時半まで。それ以降は空いてるわ」

「一組はご奉仕喫茶ということで、一夏様やわたくし達が使用人に扮して接待をする喫茶店ですわ。一夏様はずっといれっぱなしになっていますが、十中八九途中で抜け出すでしょう」

「そうでしょうね。一夏はそうやって働くのはあまり好きじゃないもの」

うんうん、とあたし達は頷きあい、それからまた話し合いを始める。

「最近一夏の食事が量が増えてきているわ。昔の一日二食が当然だった頃に比べれば、かなり健康的ね」

「だが、一夏の肥満は大丈夫なのだろうか？ もしそんなことになったら私は泣くぞ？ そして脂肪を燃焼させるぞ？」

「その件は、昔に一夏から直接解決策が出ているわ。……………一夏つて、ある一定以上は太らないんですつて」

正直、凄く羨ましい。いくら食べても太らないとか、世界中の女が羨むことよね。

一夏が女だったら、きっとあたしは嫉妬で一夏の乳を揉みしだいたと思うわ。千冬さんの弟だし、妹だったらかなり大きそうだしね。

ちょっと想像してみる。女になった一夏……………

いつものように寝ていて、とても可愛いけど怒ると怖い一夏（女）。身長伸び縮みはデフォルトで、弾に優しく撫でられている一夏。弾に恋をして、相談に来ている一夏。腕に挟まれて強調された乳を、あたしがからかいと嫉妬を込めて揉んでいる。

『あんっ！や、鈴っ、ダメえっ！』

ズゴギンッ！！

ド派手な音を立ててあたしの頭がテーブルを頭の形に叩き割り、額

から少し血が出てしまった。

「り、鈴っ!?!?」

「……気にしないで。ちょっと頭を冷やしたただけだから」

……やばいやばい。あたしにそっちのケは無いつての。
確かに可愛いとは思ってたけどさあ……。

……もしかして、弾も似たような感じなのかしら？
だとしたら、弾も大変ね。

……なんの話だったかしら？ 確か、文化祭の話だったと思うけど
………？

ついでに、こうして襲いかかってくる相手に対する配慮とか心配とかも全く無いし。

手加減はある。死なないようにかつ再起不能にもならない程度に。

竹刀を待機状態のシロで弾き、頭を掴んで握る。

「ヒギイイッ!？」

HAHAHAHA、まるで屠殺された瞬間の豚のような悲鳴だな。聞き苦しいから黙れよ。今イライラしてるんだよ潰すぞ。

ごきつ、という音が聞こえた？ 気のせいだよ気のせい。

そう思っているとき窓が割れて矢が数本飛んできた。

見てみると隣の校舎の窓から矢を撃ち込んでいる袴女が一人。

イラついたのでスタングレネードを20ほど呼び出してぶん投げる。向こうの袴女の顔もこっちの猫座の生徒会長の顔もひきつつたが、知ったことじゃない。

「話の途中で出てくんよ」

閃光と爆音がこの場を満たし、俺はISを発動させてなんとか平気だった猫座の生徒会長に向き直る。

「話は生徒会室でいいよな？ 猫座の生徒会長さん？」

猫座の生徒会長は、こくこくと頭を縦に振ってくれた。

……そうそう、忘れてた。

廊下の掃除用具入れのロッカーの扉を開け、そこに音響弾をいくつか放り込んで扉を閉める。中身がガタガタ騒いでいるが、扉はガム

テープで止めてある。

耳を塞いでさっさと移動する。……あと……3……2……1……

後ろからくぐもった爆音と、女の悲鳴が響いた。

「……容赦無いわね……」

する意味がないから。代わりに加減はしてるけど。

話し合い、生徒会室にて

猫座の生徒会長の名前を聞いたが、やっぱり覚えられなかった。逆さか引竹槍ひきたけやりだっけね？

「それで、実際なんで俺に生徒会長の座を渡そうとしたんだ？」

「……私一応織斑くんより年上なんだけど……」

「敬語を使ってほしいなら使われるようなことをしてから言えや。」

今のところササニシキ生徒会長の株価は買ったら逆に金がもらえるくらい安くなってるから望み薄だけど」

「株価マイナス！？ って言うか、私はササニシキじゃなくて更識

！できれば楯無たてむって呼んでくれると嬉しいかな！ たっちゃんでも可

！」

「で、笹搔ささかき生徒会長は」

「更識！」

「沢尻さわじり生徒会長は」

「更識だつてば！」

「杯さかすき生徒か」

「さ・ら・し・き！」

「たっちゃんは」

「更識……あつ！」

「で、猫座の生徒会長殿はどうして」

「ごめんもつかいたっちゃんって呼んで！ 今度はちゃんと返事するから！」

面倒だから嫌。猫座の生徒会長は猫座の生徒会長で十分だ。

「……おゝ。楯無お嬢様がここまでからかわれてるのを見るのはは

初めてだ」

「あ、のほほんだ」

「気付いてなかったんだねえ？ ちょっとだけ悲しいかも」

気付いてたけど意図的に無視した。けどわざわざ言うこともないだろうからとりあえず頭を撫でてみた。なかなかいい感触だ。

「お〜？ えへへ。撫でられちゃった」

「本音ちゃんと私に対する扱いの差が酷くないかしら？」

「好意の差がそのまま出てるんじゃない？」

恋愛ゲーム風に言うと、猫座の生徒会長は俺とのフラグを未来の分まで纏めてへし折ってる状態だし、ここからの挽回は相当難しいんじゃないか？

ちなみにのほほんの方は、結構仲の良い友人程度の付き合いって所だ。かんちゃんもうちよと………あ。

「そう言えば、猫座の生徒会長はかんちゃんをストーリーキングしてなかったか？」

返事がない。目を合わせようとしてみたら反らされた。

……まあ、別にいいけどな。かんちゃんがどう思うかは別として。

「とにかく俺は生徒会長はやらないから」

「それはお姉さん困っちゃうんだけど……」

「どうしてもって言うなら、俺と勝負して勝ったら良いぞ」

ただし、勝ったらその時点で向こうの方が強いってことになるから生徒会長は猫座の生徒会長の方になるんだが。

……もしかしたら、原作の方でもこうやって二重三重に罫を仕掛け

ていたりしたのかね？ 原作一夏は初めの罫にことごとく引つ掛か
ってる訳だけど。

「……それ、私が勝っても負けても織斑一夏くんには悪いこと無い
じゃない」

「嫌ならやらなくても一向に構わないが？ その間は仕事なんてし
ないし、生徒会長でも無いけど」

勝っても負けてもやらなくても、俺に損は無い勝負。なんて良い勝
負だろうか。

「ちなみに種目は平和的にコーカスレースで」

「それ勝ち負けつかなくない!？」

そうだな。つかないな。

あえてそういう種目を選んだんだだけど。

全員が適当な場所について好き勝手に走り、適当に好きな場所で走
り終わって終わり。実に平和的だな。

その上勝っても負けても問題ない。最高の戦いだ。

「そう言うわけで、俺は帰って寝る。あと、これね」

猫座の生徒会長に俺の制服にくつついていた盗聴器と発信器を手渡
すと、また盛大に笑顔がひきつった。

俺は他人が怖がっている顔よりも、普通に柔らかな笑顔を浮かべて
いる方が好きなんだだけどな。

だからと言って、泣きそうな相手に脅迫しながら笑えと命令したり
するとか、そういうった外道なことを命令するなんてことは無いと

思ってくれて良い。
俺は優しいからね。

「優しいの定義がわからなくなってきたわ……」

「生徒会長も大変だな」

「今は君が生徒会長よ？」

「違うけど？ 認めてないし受ける気もないし」

ついでにやる気も無い。

……さてと。帰るか。

side 更識 楯無

むう……一筋縄じゃ行かないわね……。

てけてけと生徒会室を去っていった織斑一夏のことを思い出しながら、私は思考を巡らせる。

正直に言うと、私は生身で織斑君に勝てる気は全くしない。いくら戦闘になるとは思っておらず、警戒もしていなかったとは言え、あそこまで完璧に姿を見失い、背後を取られ、あまつさえ頭を掴もうとする手に気付いていたのに避けることができなかった。

かと言って、IS戦闘なら勝てるのかと言われるればそれも自信がない。最速が秒二キロの相手にらくらく勝てる自信なんて持てたら、それはもう人間じゃないと思うの。

タガタガタガタ………)

「お嬢様——っ!？」

とある日の朝、至福の時間（鈴編）

side 凰 鈴音

一夏が衆人環視の中であの生徒会長を（文字通り）締め上げてから数日。あたしは一夏と同じ布団で眠っていた。

それも、あたしが一夏の布団に潜り込んだのではなく、一夏があたしの部屋にやって来ているのだから驚きで、そして嬉しい。

こうして一夏があたしのところに来ているのには訳がある。

簡単に言うと、部屋に猫座の女（生徒会長の事らしい）がやって来て心休まる暇がないと言つて一夏があたしの部屋に転がり込んできたのだ。

始めに千冬さんに頼んだらしいのだが、千冬さんは苦虫を億単位で噛み潰したような顔をしながら握った手の爪が手のひらの皮膚を突き破るほどに握り締め、唇を噛みきつてしまい血が出ている状態のまま、学校でその事が許可されていることを告げたそうだ。

そこで千冬さんの怪我に手当てをして、それからあたしのところに来たと言っていた。

一番初めに千冬さんの所に行くのはわかる。寮長だし、一番始めに相談するのが当然だろう。

けれど、その次にすぐあたしのところに来てくれたっていうのが嬉しい。

女としてもそうだけど、親友としては、親友が頼りにしてくれることほど嬉しいことはない。

きゅっ、とあたしに抱きついている一夏の頭を抱き締める。お腹の辺りに顔を埋めている一夏を見てみると、なんだか母親になったような気分になってくる。

……弾が言ってたことは正しかったわね。一夏が愛おしくてたまらないのに、いくら詰め込んでもこの愛は噴出することがないわ。

そのかわりに今までの愛も量を増やすから、そっちは今もガンガン出てるんだけどね……………っ！

鼻血を止めるには深呼吸。これによって一夏への愛情と向き直り、全てを受け入れることによって自らの器を拡張、愛情の容量を上げると共に愛情を純化して体積を減らす。

そして純粋な愛情だけを残して一夏に向き合えば

「……………うん……………」

この通り、一夏を見てもなんの問題もなくなる。

一夏をあたしの血で汚すことを心配しなくてもいいし、一夏の体の感触（エロい意味ではないことをここに明記しておく）を楽しむこともできる。

……一夏を除けば一番のチートは弾よね。一夏耐性一番強いし、なにげに平均的なスペックはあたしより数段上だし、実はIEEEの仕事の七割近くは弾がやってた事実もあるし。

……………いや、昔の話よ？ 今はちゃんとあたしがやってるわ。

まあ、なんにしろう一夏は可愛いわね。うん。

もぞりと動く一夏を撫でて、あたしは至福の時間を味わう。まったく、こんなに幸せだと怖くなっちゃうわね。

「んう……………り……………ん……………」

「はいはい、大抵にこにこ一夏の側に、幼馴染みの凰鈴音よ」
「かべっ」

……あら？ 寝起きのティナが二度寝を始めたわね。起きれなくってもあたしは知らないわよ？

幸せそうな寝顔をしているし、大丈夫じゃないかって思うんだけど。

………そう言えば、話は変わるけど一夏のファーストキスは箒のお姉さんの篠ノ之博士で、セカンドは千冬さんだつて聞いたわね。
千冬さんが姉弟の壁を無視して先に進んだんだつたら、あたしが親友としての壁を少しだけ越えちゃっても………なんの問題も無いわよね？

………つてことで、一夏の唇を美味しく頂いちゃおうと思いまーす
どんな味がするのかしらね？ 甘いとか、レモン味とか、現実的には味のついてないユッケとか色々言われてるけど、あたしも初めてだからわからないのよね。
今わかるんだけど。

あたしのお腹に埋められている一夏の顔を少しだけ浮かせ、一夏の体を全体的に引き上げる。一緒にあたしの服も捲れ上がっちゃったけど、どうせここにはあたしと寝てる一夏とティナしかいないんだし、別にいいわよね。
一夏の顔が目の前に来ると、流石に少しドキドキする。半ば悟りを開いてるような状態の弾ですらあの一夏に負けたんだから、悟りを開くどころか道半ばのあたしがこうなるのは自明の理かもしれないけど。

………それにしても、一夏の肌って綺麗よね。すべすべでぷにぷにでやーらかくてあったかい。子供や眠い人の体温が高いって言うのと

おなじ理由で、一夏の体温はかなり高くて気持ちいいのよね。
一夏のほっぺにあたしのほっぺを擦り付けて、ぷにぷにとあったか
いを感じ取る。女としてちょっと嫉妬しちゃいそうよ？

一夏のパジャマ代わりにだぶだぶなワイシャツの首元をはだけさせ
て、日焼けなんてまったくしてない一夏の首筋を露出させる。

……………うん、エロい。

それじゃあ……………

「……………キス、するわよ。一夏」

……………寝てて聞こえないでしょうけどね。
寝込みを襲うなんて狡いとは思っけど、ごめんね？

ゆっくりと一夏に顔を近付ける。目を閉じて、一夏の頭を抱えるよ
うにして、ゆっくりと。

そして、あたしの唇が、温かくて柔らかなものに触れた。
目を開くとそこには一夏の顔があり、あたしと一夏がキスをしてい
ると言うことを如実に示してくる。

ああ、あたし、一夏とキスしてるんだ

そう思うと、急にあたしの体が思うように動かなくなった。

にゆるん、と勝手に舌が動き、一夏の唇を割り開く。ちよっとちよ
っと！理性！理性仕事して！

そう思ってもあたしの体は一夏を抱き締めるのをやめず、むしろ積
極的に一夏の舌を求めて動き回る。

一夏の口の中を蹂躪し、舌を絡め、唾液を交換して、また舌を絡める。ぬるぬるとした一夏の舌はずっと受動的なままで、一夏が起きていないということを教えてくれる。

一夏の味は、何でかは知らないけどほんのりと甘かったような気がする。頭が沸ききっていてよく覚えていないけれど、少なくとも十分はそうして舌を絡めていたはず。

気が付くとあたしはもう一夏に夢中になっていた。まあ、元々夢中だったんだけど。

けれど、とんとん、と背中を叩かれて気が付いた。

「……起きたらいきなりこれってのは、流石にちょっと驚いた。寝込みを襲われたのも初めてだし」

さあっ……とあたしの顔から血の気が引いていく。さっきまで血が昇りすぎてまるで動いていなかったあたしの頭は、今度は血が足りなくてまるで動こうとしない。

どうにか言葉を返そうとするけれど、あたしの口から漏れる言葉は訳のわからない単語ばかり。

「……まあ、とりあえず落ち着きなっ」

頭をきゅっ、と抱き締められて、あたしは一夏の胸に耳を当てる形で固まってしまっ。

「とにかく、しばらくこうしておくから……」

ぼん、ぼん……と優しく頭を撫でられ、一夏のゆっくりとした心音を聞いていると、本当に落ち着いてきた。

「……言いたいことは色々あるけど、とりあえず一つだけ」

一夏と目が合う。そしてわかったのが、一夏は別に怒っていないし、嫌がってもいないということ。

「前にも言ったことがあるけど………鈴だったら別に良い」

しゅるるっ、と小さくなった一夏は、あたしの事を小さな手で撫でた。

「……好きにしてい」

この瞬間。あたしの理性の糸がぶちぎれ、そして気絶してしまっただのは言うまでもない。

……今度は、一夏が寝てる間にもっと進めよう。じゃないといつまでも本番にたどり着けないわ………。

……その点を考えて、一番近いのは弾ってことになるのかしらね？
もしくはラウラかしら？

どちらにしろ、負けたくないわね。

生徒会長？ やりたくない

「一夏」

急に話しかけられたので一応視線を上げると、そこにはなんでか立腹なラルちゃんが居た。ほっぺを膨らませると可愛くしか見えな
いから、どちらかと言うと逆効果だと思う。

ちなみに、知ってる声でかつそれなり以上に仲のいい相手の声だったから顔をあげた。じゃなかったら無視して寝てるところだよ。

「織斑一夏くん？ あんまり無視されてるとお姉さん悲しいんだけどー？」

この猫座の生徒会長みたいに。

「なんだいラルちゃん。この猫座のストーカー長の事を聞きたいのか？」

「なんか私の呼び名がだんだん酷くなってない！？ 名前で呼んでくれないとお姉さん悲しくて泣いちゃうよ！？ 楯無だよ、た・て・な・し！はいどうぞっ！」

「ハ・ゲ・あ・り」

「よっしその喧嘩買ったあ！」

「参った、はいこれでそっちの方が強くなったな猫座の生徒会長。ストーカー長からの昇格おめでとう」

「あつねえ！？ 嬉しいけど嬉しくないよ！？」

よし面倒事が減った。

「で、どうしたねラルちゃん」

「……私との決着がまだついていないのに、新たに好敵手を作るとはいいご身分だな？」

「勝手に向こうが突っかかって来るんだよ」

……ラルちゃんからこんなことを言われるのは初めてかもしれない？
なんだ？ 恋人とかそっち系統には嫉妬しない代わりにこっちに来るのか？

まあ、ラルちゃんも成長してるってことでいいのかな。

「……そういう訳で、だ。私と戦ってもらおうか」

「今だったらやだ」

「いくら私でも今この場で始めようとはしない。今度のIS訓練日の話だ」

「ならいいよ」

どうせ誰かと戦いながら話ながら機動やら何やらを覚えていくわけだし、別にいいかね。

ちなみに、一番わかりづらい説明をするのがのちゃん。原作よりはマシだけど、やっぱり酷い（右足の親指の先をきゅっとして膝をぎゅんっ！と伸ばしてやる感じだ！やってみる！）。

鈴は……自分は感覚でやってるから、他人の感覚を押し付けて俺の機動を殺すわけにはいかなんかと言っただけで説明には不参加。ただし、戦闘の相手はしてくれ。

セシリーはほぼ原作通り。ただし、実際に射撃を避けるところを複数回折れ曲がるレーザーを使って実際に見せてくれる。結構わかりやすいが時間がかかる（回避するのならばこのように後方に二十度反転します。すると……このように抜けていくわけです。この時

（以下略）。

ラルちゃんはとにかくやり方を教えたらすぐさま実践。失敗したら弾や刃に当たる（やり方はわかっているな？ それでは実践に入るとにかく避けてみる）。

シャルは理論と大雑把な感覚だけを教えて、あとは一緒にやりながらできるようになるまで待っていてくれる（……うん。だいたいできてるね。それじゃあ、今度は滑ってみようか）。

かんちゃんは、驚いたことに感覚的なタイプだった。仮面ライダーや戦隊もの、光の巨人に巨大ロボなどの戦闘を想像すればだいたいのことはできてしまうらしい。かんちゃんはかんちゃんで天才肌なんだと思っただ瞬間だった。

「わ、私も参加していいかな？」

「……………邪魔をしないなら、好きにしろ」

明らかに邪魔な物を見る目で、ラルちゃんは猫座の生徒会長を睨み付けている。猫座の生徒会長もそれに気付いていながらも、どうやら引く気は無いらしい。

まあ、本人がやりたいって言うんだったら好きにしてくれて構わないけどな。

ただし呼び名は猫座の生徒会長で。名前で呼ぶことはまずないと思われる。

呼んだとしても間違えるだろうけど。さっきからも間違えてるっばいし。

第四アリーナでは、軽い戦闘が行われていた。

片方は猫座の生徒会長の乗った【ミステリアス・レイディ】。俺の中での呼称はお水のお姉さん。水色で、水を使うから。ついでに名前はハイパーセンサーに表示されてたのを読んだ。

もう片方はラルちゃんの操縦する【シユヴァルツェア・レーゲン】。俺の中での通称アメちゃん。けして大阪のおばちゃんのポケットに入ってることが多いあれではない。

「あはっ ラウラちゃんってば中々やるねっ！」

「伊達に一夏の練習相手を勤めているわけではないのでなっ！」

ラルちゃんがAICで猫座の生徒会長を止めようとして、猫座の生徒会長はそのAICを潜り抜けてはガトリングランスやナノマシン入りの水を使つて攻防を繰り返す。

水を使えばどこにAICが張られているかもわかるし、そうでなくとも空間攻撃の【清き情熱】は辺りの湿度を上げた方が使いやすくなる。使えるところでは使わないとな。

そうこうしている間に、猫座の生徒会長の操る水がアメちゃんの装甲を削り取り、同時に爆発させる。これはかなり使い勝手のいい技だな。千の顔を持つ英雄ほどじゃないけど。

ところで、猫座の生徒会長の持つる槍つて、どう見てもガンランスだよな。龍撃砲とか撃てたりするんだらうか。

原作では似たようなのを撃つてたような気もするけど。

そんな俺の思考を知らずに、ラルちゃんと猫座の生徒会長はまだ戦いを続けている。お陰で俺は二人の戦術機動や細かい癖のようなものまで把握できるから別にいいんだけど。

早めに終わらせて、さっさと部屋で寝たいんだがなあ……………。

「はあああぁっ！」

「」……………のおっ！」

ラルちゃんのワイヤーブレードと、猫座の生徒会長のナノマシン操作の水がぶつかり合うのを見て、思う。

……しばらくは無理そうだ。

やれやれ。

結局、こうなったか

ラルちゃんとシャルが夏休みに一日だけ働いていたカフェから、メイド服が届いた。シャルの分だけは執事服も届いていた事が笑いを誘ったが、笑ったら多分シャルが泣くと思ったので自重する。俺は優しいからな。

「珍しく普通に優しいわよね」

「そうだな。一夏がそう言っていた時に一般的な意味で優しいと言
うのは珍しいことだ」

「……否定、できないかな……」

「ああ、できんな」

「普通に優しい一夏さんも素敵ですが、意地悪な一夏様も素晴らし
いですわよ?」

確かに一般的な意味で優しかったことは少ないが……。

って、ちょっと待った。

「……なんで鈴がここに?」

「……はっ!? そう言えばそうだよ!なんで二組の鈴が一組にい
るのさ!?!」

「気合いと愛の力で分身したわ」

「うっそお!?!」

「く……鈴に先を越されたか……次に一夏への愛情の力で物理法則
を越えるのは私でありたかったのだが……」

「いやいや物理法則を越えるのは色々まずいから!世界の法則が乱
れるのは本当にまずいから!」

シャルのツッコミは今日も快調だな。うんうん。

「私は行けるぞ」

「ラウラまで!？」

「そうなの？ 凄いわねえ……」

「くう……まさかラウラにまで先を越されるとは………こっぴごうなつたら、修行あるのみだ!」

ののちゃんがなにかを吹っ切ったみたいだが、実はののちゃんはののちゃんできちんと前に越えていたりする。

あの口振りからすると気付いていない可能性が濃厚だが、なんで気付かないんだ？ 周りに居るのがちー姉さんとか鈴とか、ふとした拍子に無意識で物理法則を無視できる存在ばかりだから、それが普通だと思ってるのか？

……つまり、ののちゃんはもう染まりきってるわけか。たーいへん。

「なんだかすっごい他人事なんだけど!？」

「実際他人事だからな」

俺としては物理法則を越えられようが越えられなかるうが、正直に言っただけでもいい。

ただ、できれば一緒に寝てくれれば。

「……嬉しいことを言ってくれてるではないか。襲っていいか？」

「なに言ってるのさ篤!？ ここ一応教室だからね!？ 山田先生だけど先生もいるからね!？」

「人前だから自分の思いを伝えることすらできない人生など願わなげだ!私は一夏が好きだ!それを人前で言っただけが悪い!」

「なんでいい感じに纏めようとしてるの!? かつこよく言っても内容は一夏を性的な意味で食べたってこととなんら変わらないからね!？」

「一夏様? わたくしの指を少し強めにかじっていただけませんか?」

「はいセシリア! こっそり一夏に痛くしてもらおうとしない!」

「なら堂々やりますわ。と、言うことで一夏様。ここに乗馬用の鞭が」

「そういう問題じゃないの!」

「ならば一夏。私と寝よう。好敵手の腕の中は暖かくて落ち着くからな」

「それ僕も一緒にやるから反対側は開けといて!」

本音が出てるぞ、シャル。

「呼んだ〜?」

「呼んでないが、一緒に寝ないか?」

「わ〜い」

のほほんが来たのでとりあえず放課後の昼寝に誘ってみたら、嬉しそうな答えが返ってきた。

「あのお……一応授業中なんですけど……」

「各自のメイド服の選別（サイズの意味で）の時間ですけどね」

「そうそう一夏」

「ん〜?」

鈴の方に視線を向けると、鈴はにっこりと笑ってメイド服を見せつけてきた。

「着てみない？ 一夏だったらきつと似合つと思つのよね」
「似合うだろうけど本番でメイド服で御奉仕することになりそうだから、やだ」

……いやまあ、実際に結構似合つちゃうんだよな。ちっさい俺ってちっさいちー姉さんと似てるし。

「ちなみに俺は自分の服は持つてるから」
「え？ そうなの？」

クロっていうコスプレ用IS（一応シールドエネルギーとPIC装備。出力は弱い）があるからな。

……ところで、『メイド服で御奉仕』って言った途端に、周りの女子の目が、飢えた肉食獣が極上の獲物を見る目に変わったんだけど……。

「……一夏。着てみよう？ ね？」

シャルも今回は敵に回つたらしい。

「本番は執事服でいいんだつたら、まあ」

そう言つたらすぐさまシャルに服を剥かれた。なんで周りの奴も止めない？ 男の着替えなんて見ても楽しくないだろうに。

そう思いながらも抵抗はしない。スカートはロングだったので、ズボンは脱がされないように説得（一部脅迫）した。

そして現在。俺は女子としてのプライドをべつきりやられたらしいorzな女子たちを無視して着替え直している。

ちなみに、ワイシャツのボタンを外すときに鎖骨が出たあたりで鈴が退場。全てのボタンを外して、脱いだ時に前にいたののちゃんとセシリーが退場（決め手はヘソチラ）。後ろの方に居たのもなぜか退場（主にうなじ）。

色々あって、鈴とののちゃんとセシリーが復活したあたりでメイド服に着替え終わった俺が居たわけだが………誉めてくれたのは鈴とののちゃんとセシリーとラルちゃんとのほほんと真耶先生とシャルだけだった。

後は全員orzかなんかブーツとしてるかの二択。黒い猫耳を付け、カチューシャも付けて、気分だけはメイド………だったんだが、早々に禁止令を出されてしまった。

鈴曰く、「弾でも下手したら死ぬわね」ということで、写真を残すだけで着替えることに。

まあ、別にいいけど。そこそこ面白かったし。

ただ、これで不特定多数の人間の前に出るのは嫌だ。そこだけは言わせてもらった。

「それで、おりむーはどんな服を着るの？」

「一般的な執事服（に見える、束姉さんお手製の明らかに服と言うレベルを超越してしまった何か）だぞ？」

「……姉さん……何をやっているんだ………」

ののちゃんがなぜか遠くを眺めている目をしている。どうも目をそらしたいことでもあったらしい。

ちなみに、防御性能だけだったら確実にシルバースキンの方が上だ

つたりする。凄いな錬金の戦士長。ブラボーだ。

「見せてー見せてー」

「本番までお楽しみ……って訳にもいかないか」

実際に着てみて問題があつたら困るし。

と、言うことでクロを展開。服は分解されて収納され、そのかわりに燕尾服が俺に纏わりつく。

なぜか片眼鏡モソクルが標準装備されているらしいが、どうやらこの片眼鏡は伊達眼鏡と言っわけでは無いようだ。

ののちゃんに視線を向けると、頭の上に 篠ノ之 箒 と名前が出てくる。鈴に向けてもなにも出てこないことから、どうやら登録制らしい。

とりあえず鈴に笑いかけてみる。

「ぶふあっ!?!」

鈴は真つ赤な華を咲かせて倒れてしまった。ダイイングメッセージのように、震える指が血を使って何かを書いている。

『LOVELY一夏』

おいおい、とツッコミを入れつつ、すぐに消させてもらった。ルミノール反応すら出ないだろう。

……まったく。これだと俺が犯人だと思われるだろうが。犯人ではないけど原因ではある。

「……鈴」

「1」はっ!?!」

上半身を抱き起こして囁いたら、どうやら追い討ちになってしまったらしい。

だが、どうしようかね？　ここに今動ける奴は、俺を含めて四人だけなんだけども。

俺と、ラルちゃんと、真耶先生と、のほほんの四人だけ。後は血の海。

……たーいへん。

学園祭、ちょっと前

「今日集まってもらったには訳がある。みんなの学園祭の招待券の使い道についてだ」

俺が言うと、鈴だけは納得したように頷き、他の五人は何でそんなことを聞くのかわからずきよんとしている。

「あたしは弾に送る予定だし、一夏は蘭に送るでしょうから……後は数馬の分ね」

「……ああ、なるほど。そう言うことか」

弾の名前が出てきた事で、ののちゃんは俺のやりたいことがわかったようだ。

「すまないが、私の分は姉さんに既に送ってしまっている。姉さんに頼めばコピーでも偽造でもしてくれそうだが、統合性が無くなるだろう」

「私は本国のクラリツサ達に送ってしまった。誰が来るかで揉めているようだが、恐らくクラリツサ本人が来るだろうな」

よっし、そのクラリネットと言う奴には色々お話タイムを設けよう。勿論普通のお話だけではなく、O H A N A S Iもすることになるだろうが。

主にちー姉さんが、ラルちゃんがやったでこちゅー事件の重要参考人として、拳を交えた話し合いを。

「……クラリツサ。すまないが、私に教官は止められん。……」

強く生きてくれ……っ！」

「何でそんな悲壮感が漂ってるのさ！？ いや何となく理由はわかるから別にいいけど！」

「……あれは……キツイわよね……」

「鈴までなんか遠い目をはじめちゃったんだけど！？」

その二人はちー姉さんの必殺コンボ（常人だったらまず死ぬ）を食らったことがあるから、クラムボンの生命が……まあ、平気だろう。

……多分。

「私は……あげる人いないから……」

「わたくしもですわね。ですから、はい、一夏様」

「様やめ」

「はい、一夏さん」

こうして枚数は揃った。後は送るだけなんだが……弾や蘭ちゃんの予定とか聞いてなかったな。聞いたくか。

……あと、一枚余った分をどうしようか……。

side 五反田 弾

どうも、一夏の町の食の殿堂、見かけによらず、味は最高。五反田食堂にて修行中の五反田 弾だ。

見かけによらず、のところで金属製のお玉が飛んできたが、とりあえずじいちゃんに投げ返しておいた。じいちゃんは本当に人間か？

まだ手が痺れてんだけど。

そんなことは置いて、ちょうど今、一夏から電話がかかってきた。

『あ、弾？ 元気だった？』

……ああ、一夏の声だ。久し振りに新鮮な一夏分が補給されていく……。
……っと、トリップしてる暇はないな。せつかく一夏が電話をかけたきたんだから、しっかり対応しねえと。

「……ああ、こっちは問題ない。で、なんだ？ 鈴と喧嘩でもしたか？」

いや、無いと思うけどな。だって鈴と一夏だし、喧嘩したとしてもほっぺのつねりあいかなんかで微笑ましく平和的に解決するだろうし。

『違う違う。……で、弾』

「ん？」

『……IS学園の学園祭のチケットがあつてだな。これがあればIS学園に合法的に入れるんだけど……』

「マジかつ！？」

『マジマジ』

マジらしい。

「何枚ある？ ちゃんと蘭や数馬の分まであるよな？」

『当然用意してある。で、来る？』

「俺は確実に行く。蘭と数馬には俺から確認して、俺から電話を掛

けるから」

『ん。待ってる』

そうして電話は切れた。とりあえず小さくガッツポーズをとってみる。

「…………お兄、なにやってるの?」

「ん? ああ、一夏から学園祭の入場チケットがあるから、俺と数馬とお前の予定がなければ来ないかってさ」

「学園祭って………… IS 学園の!?!」

「そうそう。どうする?」

「それって何日の何時から!?!」

「………… 今月の18日の、9時からだな」

ピッピッポパッ!

………… プルルルル………… プルルルル…………

「あ、もしもし私だけど、悪いんだけど18日に外せない予定が入っちゃって………… うん、そうなの………… ありがとう。ごめんね?」

ぶっつ。

「行くわ」

予定無くしやがった。流石は恋する乙女だな。行動力が凄いこと。

「それじゃあ数馬の奴も誘うか…………… もしもし?」

お兄からもたらされた話は、私のその日の予定をまるごとキャンセルさせるに足る重要な話だった。

なにせ一夏さんの学園祭の招待チケット！手に入る入らないではなく、そんなものの存在も知らなかった私には、まさに夢のようなチケットだから。

とりあえず、おしゃれなの着てかなくっちゃ……えっと……このワンピースと……あ、でもあんまり余所行き用のを着てると、浮か
れるように思われちゃうかも……。

……こんな時には我が家で一番一夏さんのことを理解しているお兄に話を聞こう！

「お兄。一夏さんってどんな服が好きかな？」

「一夏の好み？ さてなあ……あんまり外見を気にしないやつだから、どうせ磨くなら中身を磨いた方が有意義だと思うが……一応言っておくと、一夏のクラスはご奉仕喫茶とか言つのをやるらしく、一夏は執事服だとさ」

「執事服っ！？」

瞬間、私はその姿を想像してしまう。

最新の設備が整った真新しい扉を開くと、まるで漫画にでも出てき
そうな片眼鏡モノクルをかけた一夏さんが頭を下げる。

ぴしっとした燕尾服を着こなしていて、綺麗にのびた背筋を想像させる。

『いらっしやいませ、お嬢様。こちらへどうぞ』

一夏さんは優しく笑い、私を先導して一つの机に座らせる。椅子に座ろうとするとタイミングよく椅子を押され、ちょうどいいところに座ることができた。

目の前にメニューが開かれる。それは一夏さんが持っているらしくて、受け取るうとしたらやんわりと拒否されてしまった。

メニューの内容は、ごくありふれた喫茶店と変わらない。けれど、一つだけ違うものがあつた。

執事のご奉仕ケーキセット、と名前をつけられているそれに惹かれ、私はそれを頼む。

一夏さんはいっこりと笑うと、かしこまりました、と一言だけ残して奥に消えていった。

数分待つと、一夏さんが小さなケーキと紅茶のカップを銀色のお盆にのせて運んできてくれた。

どうしてこれが執事のご奉仕セットなのかと思っていたら、一夏さんがケーキをフォークで削り、私の口許に運んでくれた。

……確かに、これはご奉仕セットだ。そう思った私は、努めて冷静にそのケーキを食べる。

甘いクリームとスポンジは、なぜか想像以上に甘かつた。

私が一夏さんにそう言つと、一夏さんは紅茶のカップを手にとつた。口直しに飲ませてくれたりするのかな？

そう思っていたら、なんと一夏さんはその紅茶を自分で飲んでしまった。

それからなにも言わずに私に顔を近付けてきて……って、もしかしてこれって、口移s

「蘭。蘭！平気か蘭！顔がヤバイぞ！？」
「……………」

頭が沸騰した私は、その場で崩れ落ちるよつに気絶した……と、後にお兄に聞かされた。

学園祭、ちょっと前（後書き）

学園祭の日程は適当です。信じないで下さい。

学園祭当日、執事織斑

服は黒の燕尾服。目には名前登録制の片眼鏡^{モノクル}。両手には手袋常備で、懐には銀色の鎖付き懐中時計を持っている。

執事状態だったら普通に大きい方がいいよな、と思ったため大きいままだが、学園祭の準備で忙しそうにしていたほとんどがヤバイ痙攣を起こすか見とれるか、もしくはハアハアしながら俺を見つめてくる。

そんな俺が教室に入ると、いきなり目の前にちー姉さんの顔が現れた。

「一夏。さてはお前、私に襲われたいのだろう？」

「織斑先生ストロップ！ここ教室ですから！人前ですから！もうすぐ学園祭始まりますから！そして織斑さんと織斑先生は姉弟ですから！」

「？ 姉弟だからどうした？ 私は一夏と今日の夜に同じ布団で一夜を過ごそうとしただけだぞ？ 最近スキンシップが足りていないしな」

「……確かに、昔に比べて相当減った気がする。とりあえず今日はちー姉さんの部屋に泊まるか。」

そしていっぱい撫でてもらうことにしよう。

「一夏。尻尾が千切れんばかりに振られているぞ」

ののちゃんに言われて確認してみると、狼の尻尾が生えていた。猫耳メイドと狼執事か。

「……あり……なのか？」

「……ありだな」

「無問題ですわね」

「一夏。抱き締めてすりすりしていいかい？」

「^{ライバル}好敵手よ。とりあえず抱かせる撫でさせる。そしてそのまま昼寝をしないか？」

ラルちゃんの言葉にかなり惹かれた。だが最低限の仕事はやらないといけないので、仕方無く拒否した。

俺だって寝たいさ。学園祭の間中寝てたいさ。俺がいなくちゃ成り立たない喫茶店なんかなくなれ。休憩所にしてみんなで寝ようぜ。

……今さら言っても無駄だけどな。

次々に舞い込む注文。凄まじい速度で指名される俺。ゲームの相手とかもう飽きたんだけど。

それでも指名は止まらないので、仕方無くちゃっちゃと終わらせる。チートも使ってるし、ガンカードもしてる。

ダーツは普通にやってもまず負けないし、神経衰弱は自分の番になったときに一回で全部まとめて取るため負ける方が難しい。じゃんけんは……まあ、昔から鈴や弾とじゃんけんしていたのは伊達じゃないってことで。

その合間を縫ってケーキを運んだり紅茶を運んだり紅茶にミルクと砂糖を入れたり、本当に忙しい。

まあ、途中で抜けるけど。

「織斑くん！二番テーブルにケーキ持って行って、それからすぐゲームしてー！」

「……それではお嬢様方。ごゆっくり……」

……あー、めんど。

「やつほー一夏。忙しそうね」

「いらっしゃいませ、鈴お嬢様。……お似合いですよ」

「ありがと。気分がいいから後で手伝ってあげるわ」

「ありがたき幸せにございます」

そうやって軽口を叩きあいながらとある席に付く。ちなみに今の鈴は背中が開いてかなり深めにスリットの入っているチャイナ服だ。真っ赤な布地に金の龍があしらってあり、金色のラインが綺麗なかなり凝ったデザインだった。髪はシニヨンで、それはそれは似合っている。

まあ、原作のままと言ってしまえばそれまでなんだが、やっぱり似合うな。

俺がタイミングよく押した椅子に当然のように座り、俺が広げたメニューにゆっくりと目を通していく。

「……そうそう、その格好、似合ってると思うわよ。格好よくて惚れ直しちやいそう」

いたずらっぽく微笑みながらのその言葉に、俺は少し笑顔を深めて返す。

「ありがとうございます。鈴お嬢様」

お互いに笑顔を向けあい、数秒だけ見つめあう。

「……それじゃあ、ケーキセットを一つと、執事に『褒美セットを一つ。それと一夏をテイクアウトで』」

「鈴っ!?! 一夏をお持ち帰りして何をする気なのさ!?! 駄目だからね!」

シャルのツッコミが入る。やっぱりシャルの鋭いツッコミは必要だな。

けれど、たまにかんちゃんはやわらかつつこみが恋しくなるのはどうしてだろうか?

「申し訳ありませんが、執事の飲食及びお持ち帰りは禁止させていただきます」

「そう。残念ね」

「なんで一夏はそんなに落ち着いて反応できるのさ!?! 自分の事でしょ!?!」

自分より遥かに驚いている奴を見ると、なんか落ち着いてくるよな。シャルとか。

「まあ、冗談は置いておくとして……さっきの二つは宜しくね、執事さん?」

「『ご注文を繰り返し返させていただきます。ケーキセットと執事に『褒美セットを一つずつでよろしいですか?』」

「ええ」

「承りました」

メニューを閉じて、それから厨房に注文を入れる。冷蔵庫の中で冷やされていたセットは、二つともすぐに出てきた。

それを銀のお盆（千の顔を持つ英雄で出せた。縁で殴られたら痛いよな。ほら武器だ）にのせて鈴の所に運ぶ。

「お待たせいたしました」

「ありがとう。それじゃあはい、座って座って」

どうやら鈴は執事に「ご褒美セットの内容を知っていたらしい。まあ、分身して一組に入り込んでたんだし、知っててもおかしいところはなんにもないな。

「はいー夏。あーん」

「鈴。一応言っておくが、一夏にポッキーをくわえさせた後、強制的にポッキーゲームに移行する……等と言うことは無かるうな？」

ののちゃんの言葉に、鈴はピシリと固まった。……返事がない、どうやら凶星だったようだ。

「……一夏に食べさせることができるのが、執事に「ご褒美セットでしよう？ 食べさせ方の指定は無かったはずだけど？」

「却下だ。お前や簪たちだけならともかく、他の奴まで一夏にそういうことをしようとするのは許さん」

「……確かにそれは嫌ね。わかったわ……はい、あーん」

ポッキーはひんやりしていて美味かった。尻尾がどこから現れてぱたぱた振られていたらしいが、まあ、どうでもいいことだな。

「……和むわねえ」

「……そうだな……」

カリカリカリカリ……うまうま。

超外伝、未来図？ 終了編

俺による大暴露（大嘘）が行われ、IS学園は局所的に大混乱を起こしていた。

「えっ、ちよっ、まっ、え、じょうだ、えっ、ち、千冬さああんっ！？」

「ま……まさか……そんな……」

「怪しいとは思ってたけど……やっぱり二人の秘密の時間とか……」

……ここで嘘だつて言ったらちー姉さんにボコされる気がする。まあ、絶対に言わないけど。

「おかーさんいわく、ブラコンで何が悪い。いいじゃないかブラコンで」

「千冬さんついに開き直っちゃった！？ いや未来の話だけど！」

「織斑先生だ馬鹿者！」

ズッパアンツ！！というかなり良い音が鈴の頭から響く。ちー姉さんも良い感じにテンパってるね？ 突っ込むところはそこじゃないと思うけど？

「な……なあ、千冬姉。なんの話だ？」

「織斑先生だと言っているだろうが馬鹿者っ！」

また良い音が、今度はこっちの一夏の脳天から響いた。痛そうだな。よくちー姉さんは肩から先の動きだけであそこまで良い音を出せる

な。

まあ、べつにいいけど。

「パパ。パパはやっぱり鈍いんだね」

「いてて……鈍いってなんの話だよ？」

……こいつ本気で言ってるのか？ 確かにあれだけボコられてれば好かれてない、むしろ憎まれてると思ってもおかしくないと思うが、もう少し深いところを見てやるうぜ？

……それで一夏がモテてることを自覚したら、いったいどんな反応を返すのか……ちょっと興味があったりするが、俺は気にせず寝る。面白そうではあるけど、絶対見たいって訳じゃないし。

「……ふぁ……それじゃあおかーさん……おやすみなさい……」

「ちゃんと歯を磨いてから寝るんだぞー」

「はーい」

食器を片付けて、それから寮長室に行く。歯磨きは千の顔を持つ英雄で作ったブラシを使う。使った後はすぐ消せるから、とつても衛生的。

布団に入って毛布にくるまり、抱き枕を千の顔を持つ英雄で作って抱き締めて寝る。

……こつちの世界は少し騒がしいが、それでも気持ちよく寝れそう
だ。

……すか……。……。

目が覚めたら鈴が一緒の布団で眠り、丸まっているぶちかが目に入ったことから元の世界に戻ったのだと理解した。
それにしても、向こうではこれからいつたいどんな変化が起こるのか、ちよつと楽しみかもしれない。
またいつか行ける時が来たら、その時にでも色々と話聞こう。

……向こうのちー姉さんが暴走してたりしなけりゃいいんだけど……
……まあ、してたらしてたで面白そうだから構わないけど。

side 織斑 一夏（原作）

朝から夜まで俺達を引っ掻き回し、爆弾をばらまくだけばらまいていった俺の子供は、次の日の朝には綺麗に姿を消していた。

恐らく初めから一日だけと言うタイムリミットがあったんだろうが、いなくなる時には挨拶くらいしていてもいいだろうと思つのは、我儘だろうか？

百秋がいたと言う証拠はどこにも残っていない。IS学園のカメラ等の映像にはなにも残っていないかつたし、俺の白式やセシリアのブルー・ティアーズ、シャルのリヴァイヴと言つたISの記録にも残っていないかつた。

しかし、少なくとも俺達全員の記憶の中には、百秋という眠たがり素で爆弾を落としていく子供の姿があるし、俺達を見ていた他の一年生達も百秋のことを覚えていたから、百秋は本当にこの時代に来ていたんだと言うことがわかる。

……東さんなら、きつとまた百秋を送つてくると思うし、それでなくてもいつか俺は百秋に会うことができる。悲しむことはないさ。

……さてと！今日も一日頑張りますか！

……そう思った矢先に、鬼のような視線を箒と鈴から突き刺された。理由はわかんねえけど、酷くね？

空気が悪い中で朝食を食べ終えてから教室に行くと、なんでか千冬姉に元気がない。励まそうと思つただけで、それはどうしてかシヤルとラウラとセシリアに強く強く止められた。

何というか今日の千冬姉は、自分が心から信じていた大切ななにかをポツキリ折られた敬虔な宗教家のようにも見えた。一体なんで千冬姉がこんなに憔悴してるんだ？

そのことを箒たちに聞いても

「知るか」

「知らないわよ、このシスコン！」

「自分の胸に聞いてみたらどうかかな？」

「無知は罪ですわ」

「的外れな事を言つて教官に殲滅されてしまえ」

……というありがたーい言葉しか返つてこなかった。俺が何をしたつて言うんだよ？

「まだなにもしてないけど、これからするんでしょうが。この変態」「ちよつと待て！？ 誰が変態だよ！？」

「あんだよあんだ！　いつたい子供になに見せてんのよ！」
「まだなにも見せてないし、見せる予定もねえよ！」

多分百秋の言った言葉のお陰で怒ってるんだと思うんだけどさ……
…正直、なんで怒られてるのかわかんないんだが……。
千冬姉も俺から逃げるみたいにすぐいなくなっちまうし……何があつたんだ？

side 織斑 千冬

百秋は、一夏が父親で、私が産みの親だと言っていた。
つまりそれは、私と一夏がやったと言うことで、しかも私はそれについて後悔はしていないと……。

ぐるぐると頭の中で思考が巡る。

私の大切な弟である一夏が、私の大切な男になる……。
ただ、その状況が頭の中が何度も何度も巡ってしまう。

弟だと思っていた一夏に女として抱かれ、微笑む私。

IS学園を辞めて、一夏に習いながら少しずつ料理などの家事を学んでいく私。

一夏が他に女を作ったと聞いて、怒る私。

その相手が篠ノ之や嵐、デュノア、オルコット、ボーデヴィッツだ

と聞いて、どこかで納得してしまう私。

……ああ、まったく……私らしくない。

百秋は言った。百秋が来た時点で世界は分かれ、未来は変わったと。ならば、百秋の言った言葉がすべて実現するとも限らん。

そう思うと、私はようやく思考の渦から抜け出すことができた。

……まあ、一夏についてはなるようになる。どうなるかは今の私にはわからないが……もしかしたら、私が

頭を振ってそんな考えを追い出す。やれやれ。調子が狂うな。

客人登場、そしてお迎え

side 五反田 弾

IS学園の学園祭。IS学園の生徒と教師以外でチケットを持っていない者は遠くから見ることしかできないそれに参加するために、俺達はモノレールに乗っている。

朝、家を出るときに一夏に貰ったチケットがあることを確認して、駅で数馬と合流。チケットを確認して、始めは電車に乗る。

電車からモノレールに乗り換えるんだが、蘭は緊張しすぎて完全に固まってしまっている。

「蘭」

「ひゃっ!?!」

声をかけただけでこの驚きよう。一夏の前に出たら、どうなっちゃまうんだろっとな?

「少し落ち着け。慌てても学園祭は逃げないし、その服も誉めてもらえらるって」

「ほ、ほんとに? ほんとに似合ってる? 一夏さんもそう思ってくれる!?!」

「ああ。一夏は誉めてくれるし、似合ってるって言うてくれる」

ほっ、と胸を撫で下ろす蘭。いつもは頭の上で纏めている髪を下ろして、白いワンピースを着ている蘭は、実際に絵になっている。

その肩から下げられた鞆には、一夏から送られてきた家内安全の御

守りがぶら下がっているが、それも含めて絵になっている。多分、俺と数馬が隣にいなかったらナンパが絶えないんじゃないかってくらいに。

ふと、蘭の視線が鞆にくっついていて家内安全の御守りに向かう。少しだけ揺れるモノレールの中で、蘭はゆっくりとその御守りに手を伸ばす。

御守りを掴んだその手を顔の前に持ってきて、蘭は幸せそうな笑顔を浮かべた。

「恋をすると女は綺麗になるそうだけど……実の兄としてはどう思うよ?」

数馬がそんなことを聞いてくるが、それこそ愚問だろ。

「誇らしいし、嬉しいに決まってるだろ」

あの蘭が恋をして、自分の魅力でそいつを振り向かせようとしているんだ。

その恋路にはライバルも多いだろうが、俺は蘭の兄貴として応援するし、できることはしてやりたい。

「も、もう! なんの話をしてるんですか数馬さん! お兄も!」

「ああ、ごめんごめん。蘭ちゃん綺麗になってるから、一夏だって落とせるよって。な?」

数馬は楽しそうに笑い、蘭に発破をかけていく。当然俺もその言葉に乗り、

「そうそう。俺達は応援するからよ」

と言っておく。

その言葉に蘭は顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまったが、真っ赤になった耳は見えてしまっている。

「……………ありがとう」

ぼつり、と注意深く聞いていなければ聞こえなかっただろう言葉は、あえて聞き流す。返したりしたら、蘭は恥ずかしがって怒るだろうし。

素直じゃない蘭に笑顔を向け、ちらりと窓の外を見る。

IS学園はまだ見えないが、それでももう楽しみだ。

……………一夏。もうすぐ着くからな。

side 織斑 一夏

……………弾がもうすぐ着く、という電波が届いた。実際は電波じゃなくてただの勘なんだけど。
さてと。迎えに行くかね。

「……………一夏？ どうして窓を開けるの？」

「それはな、シャル。俺の友人がもう来るみたいだからだ」

「……………一夏？ どうして一夏は方向を確認してるの？」

「それはな、シャル。駅がどっちかを正確に知るためだ」

「……………一夏？ どうして一夏は窓枠に足をかけてるの？」

「それはな、シャル。ちょっと用事ができたからでかけたいけど、まともに出ようとしたら止められるのが目に見えてるから、窓から飛び出そうとしているから……………だ！」

神から貰った身体能力を使ってあいきゃんふら〜い！

まあ、冗談だけだな。ちゃんとエアライナーを足下に引いてる。

「一夏っ！……………って、一夏あ！？ どうしてISも展開してないのに空中に立ってるの!？」

「それはな、シャル。クロはISだっことをシャルが忘れてるっだけの問題だよ」

大嘘だけだな。思いつきインヒューレントスキルの方のISを使ってるし。

まあ、インヒューレントスキルもISではあるから、嘘ではないと言えなくもない。

クロは一切関係無いけどな！

「ちよっ！今一夏にいなくなれちゃうと困るよ！僕達だけでどうやってこの店を回していけばいいのさ!？」

「ぶちか五体呼んであるから、そっちに頼め！」

と、言うことで俺は走る！あとは頑張れ！

シユタツ！と片手を上げてから走り去る。後ろから俺の名前を呼ぶ声が聞こえてもスルー！

まあ、ぶちかが五体いるなら大丈夫。あいつら信じられないような特技を持つてるから。

「一夏あああああつ!」

まあまあ、なんとかなるって。

……あ、それ以前にサテライト30の俺自身を残してくれば良かったか。失敗失敗。

side 篠ノ之 篤

突然外に飛び出してしまった一夏の気配を意識だけで追いながら、私は軽く溜め息をつく。
そして目の前で行われている、ぷちか達の事を見る。

「わう!」

「わう?」

「にゃ〜う〜……」

「きゅっ?」

「……」

上からそれぞれ、柴犬、ダックスフンド、ライオン（猫サイズ）、黒兎、ヤマネだ。

「うー」

「うー」

「うー」

「うー」

「篠ノ之さん。そのぶちか達のテイクアウトをお願いするわ」
「申し訳ございませんが、従業員の所持品はご遠慮ください」

につこり笑いながら言っただけだが、目の前の女達の暴走は止まりそうにない。

「うー」

そんなぶちか達を見ていたら、いきなり、かつ！と、ぶちか達が光り輝いた。

ぶちか達に見とれていた私達は一斉に目を光に焼かれ、しばらくにも見えなくなってしまった。

暫くして視力が回復すると、そこにはぶちかではなく一夏が……
いや、違う。

あれは、ぶちか達が大きくなったのか！

その考えに至った私に、大きくなったぶちかにはにつこりと笑いかけ
てきた。

「わう！」

死にかけた。

邪魔者一つと、お客さん

武装な錬金のレーダー、ヘルメスドライブを使って弾とカズと蘭ちやんを捕捉した。まだモノレールに乗っているようだが、多分あと十二分もすれば到着す

「ちよつといいですか？」

「ちよつとだけなら」

ちよつと（約0・3秒）。

「それでは」

「へ！？ いやあの、ちよつと！？」

「……何さ？ ちよつと待ちましたが。具体的には0・2998952秒くらい。と言うかどちら様ですか？」

適当だけど。

ちなみにここは人通りの多い校舎内。なんでこんなことを言ったかって？ なんとなく。

「あつ……し、失礼しました。私、こつという者です」

そう言って手渡されたのはただの名刺。名前は巻紙礼子となっている。

……ああ、確か原作では……。

名刺をひっくり返して名前を呼んでみる。

「巻紙さん？」

「はい。織斑さんにぜひ我が社の装備を使っただけないかなと思わせて……」

クロダ。こいつ確実にクロダ。いや俺が今も着ているISじゃなく、有罪無罪の意味でのクロダ。

こんなところで偽名を書いてある名刺を渡してくるとか、本気で意味がわからない。それも、手袋もなしで渡してきてるから指紋も取り放題だし。

バカだね？

「必要ありませんし、まずそつという話は学校を通してからでなければこちらも受けることはできませんし、不要ですし、この後用があるので話にお付き合いすることもできませんし、要りませんし、実は最初から受ける気はありませんし、不要ですし、あなたを信用できないので受けたくないですし、最大限にぶっちゃけますと邪魔にしかならないのでお断りしますし、遠慮しますし、断固として拒否します」

「な……んだと……じゃない」

目の前の仮面の剥がれかけた女が落ち着こうとしているうちに、俺はさっさとこの場を離れる。

「待ちや………お待ちください」

「やですよエムさん」

ビキツ！と巻紙《イニシャルM》の額に青筋が走ったのがわかった。この名前にした理由？ ただの嫌がらせですが、なにか？

「巻紙だからイニシャルをとってエムさん。別にどこにも変なところ

るは無いですよねエムさん。どうしましたエムさん？ 顔色が悪いですよエムさん。いったい何があったんですかエムさん。どうしてエムさんの顔がどんどん赤くなって行くんですかエムさん。ねえエムさん答えてくださいよエムさん。手を強く握りすぎると痛いですよエムさん。ああ血が出てるじゃないですかエムさん。すぐ消毒した方がいいですよエムさん。保健室は下ですよエムさん。道中気を付けてくださいねエムさん。強く手を握りすぎて出血なんてバカらしいですよエムさん。今度から気を付けてくださいねエムさん。それではエムさん、さようなら」

さてと。俺はさっさと弾のところに行くとしようかね。笑顔を崩さないままに額に青筋を浮かべまくっているエムさん（笑）を無視して。

「よう、弾。蘭ちゃんも。夏祭りの時以来だな。カズはほんと久しぶり。元気してたか？」

「おう一夏、こっちは元気だったぜ。数馬も相変わらず元気だったし、蘭も……ほれ」

とん、と弾に背中を押され、蘭ちゃんが俺の前に出てくる。

「あ……そのっ……お久しぶりです、一夏さん」

「そうだな。……うん、その服似合ってるな。可愛いと思うよ」

すると蘭ちゃんは頬を朱色に染め変えて、嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「あ、ありがとうございますっ！あの……一夏さんも、よく似合っ

てます！」

「ん？ そつ？ ありがとな」

ぼんぽんと蘭ちゃんの頭を撫でて、にやにやと俺と蘭ちゃんを眺めている二人に顔を向ける。

「とりあえず……」

「ああ。行こう」

以心伝心だな。

ちなみに行くところは俺の教室。いつもは俺が五反田食堂で接待を受けてばかりなので、今日は俺が接待する側に回ってみることにした。

……さつきから必死に鳴り響いている電話も五月蠅いし。

「……出ないのか？」

「用件はわかりきってるし、なにもしないでももうすぐ解決すると思っし」

着信音がシャルだし。

「……なんかただの着信音がすっごい必死そつに聞こえるんだが……」

俺もそつ聞こえる。

「……俺達は気にしないから、出てやねって」

「……じゃあ、そつする」

携帯を取り出して画面を見ると、そこには予想通りに『シャル』

の文字が。

「はいもしもし」

『やっと出たっ！一夏は今どこにいるのっ！？』

どうやら、カーナリー切羽詰まった状況らしい。たーいへん。

side 五反田 弾

一夏が少し離れて電話に受け答えをしている間、俺達は俺達で談笑していた。

「よかったな蘭。可愛いってよ」

「うん……うん……」

顔を真っ赤にして俯く蘭は、同年代の男だったらほっとかないんじゃないかってくらいに可愛らしかった。兄の欲目もちよつとは入ってるだろうが、まあ、俺も人間だし、そのくらいは許してくれよ。

「お……お兄。……これからどうすればいいかな……」

「ん？ そうだな……一夏は好きな相手にはかなり優しいし、とりあえず好きだって言われたらこっちも好きって返すとかだな。あいつは気付いててもなにも言われなければスルーしてくるから、ちゃんと言っという方がいいぞ？ なあ数馬」

「そうだな。一夏は鈍いんじゃない、気付いててもスルーするから見てると鈍く見えるだけだし。いやまあ実際鈍いところもあるんだけど」

「え、そ……それはちょっと……恥ずかし……」

……別に俺はそれでもいいけど、恥ずかしがってるだけじゃあ前には進めないぞ？ これ経験談な。

「あの、そこのかた？」

「はい？」

急に聞き覚えのない声で呼ばれたので振り向いてみると、少し年上に見える眼鏡の人がいた。IS学園の制服を着ているから、多分学園の関係者なんだろう。

「あなた達、誰かの招待？ 一応、チケットを確認させてもらっていいかしら」

「どうぞどうぞ」

俺は自分の分と預かっていた蘭の分を。数馬は自分の分をそれぞれ差し出した。

「配布者は……あら？ 織斑君と、凰さんと、オルコットさんね」

「オルコット……ああ、あの人が」

脳裏に浮かぶのは、金髪をカールさせた貴族風の常連客。確か彼女が名乗った名前がオルコットだったはずだと思考する。なんでそのオルコットがあるのかというのは、多分一夏がチケットを貰って俺達に送ってきたんだろうと予想がついた。

「はい、返すわね」

「ご苦労様です」

チケットを返してもらって、一夏のチケットを蘭に直接手渡す。キ
ヨトンとしている蘭に、こっそりとささやく。

「それ、一夏の」

蘭は真っ赤になって、そのチケットを綺麗に鞆の奥深くにしまい込
んだ。

「お仕事頑張ってください」

「ふふっ。ありがとう」

その人は綺麗に笑うと、くるりと背を向けて行ってしまった。

……それにしても、可愛い人だったな。

その頃、教室にて

一夏がいなくなった教室では、非難の嵐が巻き起こっていた。

「ちょっと！なんで織斑君がいないのよ！執事姿の織斑君が！」

「で、ですから一夏はいま」

「いいから早く織斑君を連れてきてっばー！」

「どこにいるかもわからないし、電話にも出てくれないし、ISのコア・ネットワークの座標把握もできないからどうしようも……」

シャルロットがなんとか押さえようとしているが、女子たちの暴走は止まりそうにない。

「……あれ？一夏はいないの……？」

そこに現れたのは、かなり初めのうちに並んでいたのにようやく入ることができた簪。きよろきよろと視線を動かして一夏を探すその姿は、まるで親とはぐれた小鹿のようだった。

「……」

「ほ……簪？……どうして撫でるの……？」

「お前が可愛いからだ」

うん、それはわかるかな。簪って時々妙に保護欲をそそられるよね。……ところで簪。あの五体合体グレートぶちかはどうしたのさ？

そう目で伝えてみると、疲れたらしく裏手に引き込んですぐにバラけて寝ちゃったと言う答えが返ってきた。

……そつか、寝ちゃったか……。

「うーふーふー　ちっちゃいつくんは私のものお」

「すまないシャルロット。少し用事ができたから、とりあえず千冬さんをお呼びできてもらえないか？」

「え、う、うん、わかっ」

スパコンツッ！

「馬鹿者。織斑先生だ」

「い、いつの間につ！？」

「なに、少しばかり束の悲鳴が聞きたくなくなってな……一夏に手を出してみる。切り刻み、搗り潰し、湯を潜らせ、油で炒め……ドロドロになるまで痛め付けてくれる……」

「織斑先生。途中から料理教室のようになっています。織斑先生の場合は出来るのは料理ではなく産業廃棄ぶ」

めりっ。

「……知っているかシャルロット。実は叩かれたときに出る音とは無駄なエネルギーであり、同じ強さで叩くなら音がしないように叩かれた方が痛いんだ……ッ……ッ……ッ……」

「……いや、今は筈が悪いよ。って言うか、いまのやりとりどこかで聞いたことがあるような……」

シャルロットはぼつりとそう呟くが、恐らく気のせいだろう。

「……さて、それでは私はこれよりあのバカの肅清に入る。こちらのごことはお前たちが何とかしろ」

「ええ！？」

シャルロットは今も騒ぎ続けている女子の軍団に顔を向け、悲鳴をあげた。

「……とりあえず、一夏に電話をかけてみたらどうだ？」

「さつきからかけてるけど、ぜんぜん出てくれないんだよ」

何度も何度もリダイヤルをかけ直し、その度に帰ってくる合成音声に心が折れそうになる。

しかしそれでもかけ続けるシャルロットに、天はどうやら微笑んだようだ。

何度もコール音が響き、今回もダメかとシャルロットが思ったその時。

『はいもしもし』

ついに、一夏が電話に出た。

「やっと出たっ！一夏は今どこにいるのっ!？」

『校門の前に居るけど……』

「すぐ戻ってきて!すぐ!」

『……もしかして、すっごいやばいことになってたり?』

「そっだよ!だから早く」

「ちよっと!織斑君はまだなの!？」

「ラウラ!ちよっとお相手して差し上げて!」

『……大体の状況は把握した。これから友人連れて戻る』

「早くね!とにかく早くね!」

ぷつっ、と電話が切れ、後には疲れた顔をしているシャルロットが残る。流石の女子達も今のシャルロットに鞭を打つような真似はし

ようとせず、シャルロットは静かにその場に取り残された。

「……………ふう……………箒」

「……………どうした、シャルロット。一夏が帰ってくる目処がたったか？」

「うん。いまこっちに向かっているって」

「そうか」

箒とシャルロットの話の聞いていたのか、周りの女子達は異様なほどに盛り上がる。

「やったやった！織斑君来るって！」

「ここまで待つていた甲斐があつたわ！」

「……………よかつた。一夏に会えるんだ……………」

「あはは。かんちゃんつてば、女の子の顔だ」

「ち、ちが……………わないけど……………」

本音に指摘されて赤くなつた顔を俯かせる箒。それを見ていた数人は、口を揃えてこう言つたのだつた。

「箒は本当に可愛いなあ」

「……………あう……………」

くその頃の束さんく

「ああもついつくくんつてば可愛いよいつくんいつくんいつくくんつ！私が作つたにしてもいつくんを見て自己進化してるし、このまま可愛い方に進化していったら束さんだけじゃなくなつてあらゆる女

の子がいつくんやちゅちゃいいつくんにめろめろになっちゃうよ？
その前に束さんが食べちゃおうかな？ いいよね食べちゃっても
大丈夫大丈夫、痛いのは束さんだけだし、いつくんは痛いどころか
気持ちいいはずだし！経験は無いけど束姉さんは頑張るよっ！」
「ほっ？」

ぴしっ、と音をたてて束の動きが止まる。まるで、時間が止まった
かのように。

そして、ゆっくりと首を声のした方に向けていく。

それは錆びた歯車が軋みをあげながら動く様に似ていたが、それを
咎めるものにはいなかった。

「ち…………ち…………ちゃん…………っ!？」

「ああ。私だ」

千冬は心底戦慄したという表情を浮かべる束に、にっこりと笑顔を
向けてみせた。

その笑顔はとても魅力的で、誰もが見とれてしまうほどに美しかっ
た。

だが、束にはとある副音声が聞こえていた。

『あはははっ 私の大事な大事な一夏に手を出す色惚けウサギを
はーっけーん そんなのーみそ桃色春満開ウサギさんは、この私
があ…………ぶ・ち・こ・ろ・し・ちゃ・う・ゾ』

色々な意味で怖すぎる副音声だった。

数秒後。IS学園1年1組の教室から、IS学園中に響き渡るよう
な断末摩が発されるのだった。

束は死んでいません（重要）

「後々のことを考えれば当然だろう。いくら私がブリュンヒルデと
呼ばれ、最強のIS使いと言われていても、ISの開発者である束^{いしの}
とは重要度がまるで違うだろう。その程度のことでも理解できないで
一夏が護れるものか」

出戻り、そしてジヨブチェンジ

弾とカズと蘭ちゃんを連れて教室に戻ると、並んでいる人数がえらいことになってた。正直、なんでここまで延びるのかわからない。教室に戻る階段の端に長い列ができていると思ったら、それが自分のクラスに続いているとか……。

「いらつしゃ……あら、一夏じゃない。お帰り。そして弾に数馬に蘭も、久し振り」

なんでか鈴がチャイナからメイドにジヨブチェンジしていた。似合ってるけど。

「ありがと。でもいまはそれより仕事仕事。シャルロットにやること聞いて、その通りにさっさと済ませてね」

「はいはい」

……でも、弾達はどうしようかね？

「なんなら、俺達も手伝うか？ 執事服もメイド服もないけど接客だったら慣れてるぜ？」

「ほんとに！？ 是非お願い！あっちに服の予備があるから着替えてきてっ！」

「え、ええ？ ええ！？」

「……おいおい。まあ、いいけどよ」

弾とカズと蘭ちゃんは、シャルに連れられて制服の予備があるらしい裏につれていかれてしまった。

「一夏はどんどん出てきたのを運んで！それからテーブル一つ回ってゲームして行って！」
「はいはい」

人使いが荒いね。今の状況だったら仕方無いけど。

「織斑くんこつちこつち！神経衰弱やろうよ！」

「こつちも！こつちはジャンケンで！」

「早く早くっ！」

……やれやれ。女三人集まると姦しいと言うが、それ以上に集まると更に喧しいな。

一部、全く騒がしくないテーブルもあるようだが。

そこに座っているのは二人の少女。中の人的には自分の半分くらいの年だし、間違っていないはずだ。

一人は、何故かこのメイド服を着ている猫座の生徒会長こと、こちら沢尻区盾有少年刑務所前派出所さん。略してこちたてさん。

もう一人は、内気キャラでありながら時々アグレッシブな可愛い系愛でられ妹キャラ、かんちゃんメイdiver。本名は……今は凄まじい間違い方をしそうだから言わない。

その二人が一つのテーブルで、ただ座っている。

こちら沢尻区盾有少年刑務所前派出所さんこちたてさんは、かんちゃんと目を合わせることができていない。

対するかんちゃんは、なんでか目を逸らし続けるこちたてさんに少

し悲しそうな顔を向けている。

……ってか、なんで鈴やかんちゃんがこのメイド服を着てるんだ？ シャルにスカウトされたか？

「誰かさんが勝手にいなくなっちゃったからね！一夏の着替え写真（後ろ姿でシャツを脱いでいるところ）を手離すことになっちゃった！」

「悪い」

……それはそれとして、隠すべき所をおもいつきり暴露してる気がするんだが、そんな調子で大丈夫か？
恐らくやさぐれてるんだと思うが……後悔しても知らないぞ。

……やさぐれシャーさん？

「一夏」

なんだか俺の後ろに修羅がいる。

「あんまり変なことばかり考えてないで……仕事しようねえ？」

「了解、シャルロットメイド長」

「……………え？」

今のは片眼鏡モノクルに登録しておいた名前を読み上げたただけなんだが、非常識なほど驚いている。

「……………一夏……………いま……………僕の名前を……………」

「ちよっとずるしたけどね」

カンニングとも言つ。

「も、もう一回！もう一回呼んで！」

「……シャルロット」

「かはうっ!？」

どこかから銃撃音が聞こえたような気がしたが、きっと気のせいだろう。こう、ズッキューン!って。

くいくい、と袖を引かれてそちらを見ると、かんちゃんが物欲しそうな目で俺のを見つめていた。

「……名前で、呼んで……?」

……これは素直に呼ぶしかないな。この状態のかんちゃんには勝てないって。

と、言うことで実践。ただし少し悪戯含む。

「……え? あ、い……いち……か……?」

かんちゃんを抱き寄せて、わざと上を向かせる。顔が俺の胸の辺りにあったら、目を合わせるためには上を向かなきゃならないからな。そこで俺はちー姉さん笑いではなく、普通の意味でにっこりと笑いかける。

「あ……い、一夏……近い……」

かあ……と赤くなるかんちゃんの間を見ながら

「簪」

「あ……………あ……………」

かくん、とかんちゃんは気を失ってしまった。やっべ、やりすぎた？

「簪ちゃんに何てことするのっ！」

急に現れた猫座の生徒会長にかんちゃんがさらわれてしまった。いや、本当はずっといたんだけどね。

「おや、猫座の生徒会長。簪とお話はできた？」

きつ！と鋭い視線で睨まれた。まあ、確かに気絶させたのは悪いとは思うけど、そこまで睨まなくてもいいと思うんだけどね？ 内容を聞いてたんだったら特に。

……………ああ、嫉妬か。まあ、猫座の生徒会長も人間だったってことか。

ところで、猫座の生徒会長って呼ぶのとこちたてさんって呼ぶのとどっちがいいと思う？ 俺はどっちでもいいんだけどさ。

「……………睨むくらいなら話くらいしっかりしてやれよ。かんちゃんはあんたと話したがってたじゃないか」

「う……………」

……………気付いてはいたけど、勇気が出せなかった、と。なんだろうねこの姉妹。

姉は普段は明朗快活な完璧人で、そのうえ大体のことを器用にこなす一種の天才（その上努力もしている）。

しかし、大事な存在に気を使いすぎるあまり、とたんに臆病になるようになった隠れヘタレ。

妹の方は、普段は姉の影に隠れていて目立たないが、それでも自分を持ってしつかりと自立している。ただ、生来か環境からかは知らないが、あまり自分と言うものを外に出そうとはしない。

しかし引いてはいけないところではけて引かず、自分の意思を押し通そうとする力を持っているアグレッシブお嬢さん。

……なんというか、随分と対照的なことだ。似ているところと言えば、根っこは二人とも暑苦しいくらいに熱いってところと、優しすぎるくらいに優しいってところだな。

見ている面白いけど。

「…………おねえ…………ちゃん…………？」

「！ 簪ちゃん！」

かんちゃんが目を覚まして、猫座の生徒会長がかんちゃんの顔を覗き込む。

そんな猫座の生徒会長の顔を、かんちゃんはゆっくりと両手で包み込んだ。

「…………やっと、私を見てくれた……………」

そうしているかんちゃんはとても嬉しそうで、そこにいる全員はその光景を邪魔することができないでいた。

…………まあ、仲直りの道は一步進んだってことで。

時間も開いたし、接待しよう

色々ありつつも増えた人手を使ってなんとか混雑を乗り越えた。最長100mはあったのではないかと思われる人の行列は、今では10mもない。

と、言うことで俺は弾と蘭ちゃんとカズとかんちゃんと鈴、つまりクラスメイト以外で手伝ってくれた人の接待をしている。束姉さん？ 束姉さんは裏でちー姉さんの接待を受けてるけど？

ただし、珍しく暴行以外の意味も含めて。

「そう言えば一夏。さっきあんた簪のことを簪ってちゃんと呼んでたわよね？ どんなトリック？」

「俺が覚えたって可能性を最初から除外してるあたり付き合いの長さがわかるよな」

「覚えたの？」

「いや違うけど」

「じゃあいいじゃない」

確かに。

「臨海学校の時に、束姉さんにコスプレ用のIS貰ってたの覚えてる？」

「……ああ、そう言えばそんなのも貰ってたわね。それが……って、もしかして……」

「そう、この執事服はIS【クロ】だ」

にっこり笑ってそう言うと、流石の鈴も驚いたような顔をした。

「……つまり、ISのハイパーセンサーの応用で、名前を登録しておけば呼ぼうとした時に名前が出てくる……ってことか。篠ノ之博士もあんたのことをよく理解してるわね」

「まあ、私の姉だからな。多少ストーカーのケがあったりなかったりだが、悪い人ではない。変人だが」

たったあれだけの説明でよく理解できたな。俺自身でもなにも知らない状態からじゃあわからないと思うぞ。

「愛よ、愛。英語で言うとインフィニティ・ラヴ」

「無限ってどこについてたのさ!？」

「あたしの一夏への愛をバカにするなっ!そんなの前提条件でしようがっ!」

「なんか怒られちゃった!? あとごめん!」

「許してあげるわ」

「……え……なんでこんなにオープンなの……?」

「蘭。一夏の周りではこれが普通だ。言わなければ伝わらないのが当然だからな」

正確には、伝わらないことはないけど、曲解あるいは流されることを前提にしてくれってことだな。

大半は流すけど。

「……私も、言わなくっちゃだめなのかなあ……?」

「言つといた方が良いと思うぞ? ……一夏、大好きだ」

「俺も弾は好きだよ? 蘭ちゃんも」

「ふえっ!？」

いきなり俺にそんなことを言われた蘭ちゃんは、急に爆心地に放り

出された新兵のようなすつとんきょうな声をあげた。
ちなみに、これは別に悪戯ではなく、実際蘭ちゃんのごときは好きだから言っただけ。それ以外の理由は特にない。

「へ、あ、あの、あのそのっ……………あう……………」

「……………ふふふ……………蘭は可愛いわね。よしよし」

真つ赤になって俯いた蘭ちゃんを、鈴が優しげな笑顔を浮かべて撫でている。

原作ではお互いに睨み合っている描写があつたような気がしたが、きつとこの世界ではそんなことにはならないだろうな。

「……………え……………えつと……………織斑一夏くん……………？」

「……………猫座の生徒会長と、こちら漣区盾剥ぎ精神疾患者専用隔離病棟前派出所さん略してこちたてさんと、どっちの名前で呼ばれたい？」

「なにその二択！？ 普通に楯無じゃ駄目なの！？ 駄目ならたちちゃんでも可！」

「たつちゃんの方なら別にいいよー」

「軽いつ！？ それじゃあ何で今まで断り続けてきてたの！？」

「まず、いきなり俺をどこかの部活に強制入部させるって話を俺に通さず勝手に決めたことと、いきなりやって来て生徒会長なんていう面倒臭そうな役割を押し付けようとしたことと、それを拒否してのに強引に押し通そうとしたことと、俺の部屋にやって来ていきなり泊まるうとしてきたことと、その時に俺の部屋にこっそり盗聴器を仕掛けていったことと、」

「ごめんなさい私が悪かつたわだからそろそろ暴露話をやめて簪ちゃん達の視線が突き刺さってきてなんだか物理的にかつ本格的に痛くなってきたのだからお願いしますやめてくださいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

まあ、途中から色々なところから嫌悪感とか殺意とかそういうのが大量に含まれた視線が突き刺さってたもんな。

視線の元は、鈴とののちゃんと弾とかんちゃんと蘭ちゃんとシャルとラルちゃんとカズとセシリーと教室にいる全員に、教室の外からじとつとした視線を向ける束姉さんと、同じ場所から『人間としてどうなのそれは？』って言いたくなるような顔をしているちー姉さん。

正直、俺がこんな視線に晒されたら……無視して寝るかも。シルバースキンを200枚くらい重ね着してからの話だけど。

シルバースキンを200枚重ね着しておけば、およそあらゆる状態に対処できる。

空気が薄くなっても、宇宙服として使うことができるシルバースキンを着ていれば大丈夫だろうし、エネルギードレインを防いでいた所を見るとエネルギー系兵器もレーザー系兵器も核も放射線も問題なく防げるだろうから。

ただ、ガス系にはあんまり強く無さそうだからどこぞの大上老君の怠惰スーツでもあればいいんだけど。エアリアルオペレーターでも可。

「……で、なに。演劇だったら出る気はないよ」

「そこをなんとかならないかしら」

「こつちにも予定があるからな。何も言わずに勝手に人を引き込むとするからこうなる。前回も原因は同じだろ」

「……どうしても駄目？」

「66兆2000億ユーロ積んでも駄目」

「法外すぎない！？ しかもそれでも駄目ってなにさ!？」

「シャル。嫌なことを嫌だつて言うのには理由は必要ないんだつてよ………と言うことで、諦めといた方がお互いのためだと思うぞ？」

主に、あれからずっとたっちゃんを睨み付けているちー姉さんが原因だけだ。

……あと、なんでかんちゃんは蘭ちゃんのことを睨んでるのかね？
拗ねてるのか？

「……拗ねてなんか……ない……」

ぷくつとほっぺを膨らませながら言っても説得力がないんだけどな。
……ん〜、いつもは蘭ちゃんのポジションはかんちゃんのだし、
自分の居場所を取られたような気がしてるのか？

恋愛はみんな一緒でいいのに、そのポジションを取られるのは嫌か。
恋愛方面は共有スペースだけど、撫でてもらう方面はパーソナルスペースって思ってたとか？

で、急に出てきた相手にその場所を取られると感じたわけだ。

……そんなところも可愛いと思うのは、きっと気のせいでもなんでもないと思う。

とりあえず、かんちゃんに機嫌を直してもらったためにも……やるか。
ちょうどメンバーもいることだし。

鈴と、弾と、カズに視線を向ける。三人はすぐに頷きを返してきた。

……よし、行こうか。

ゲリラライブ、IS学園編

弾と鈴とカズと蘭ちゃん、つまりバンドのメンバーと、観客としてののちゃん、セシリー、シャル、かんちゃん、ラルちゃん、束姉さん、ちー姉さんを俺の部屋に招待して、直後にアンダーグラウンドサーチライトに入る。

アンダーグラウンドサーチライトは異次元にシエルターを作るため、中に入ってしまうえばISを使われようがまず入ってこれないし気付かない。

なぜ俺達がアンダーグラウンドサーチライトに入ったかと言えば、見付からないで演奏できる場所が欲しかったからだ。

見つからない場所と言うことならば、アンダーグラウンドサーチライトとIS【不可触の秘書】フロレンス・セクレタリーの合わせ技ほど有効なものは早々ないから。

ちなみに【不可触の秘書】フロレンス・セクレタリーはインヒューレントススキルの一つで、完全ステルスと思考速度の加速ができる。使っていたのは確か一番上のお姉さんだったはず。

まあ、それはどうでもいい。かなりどうでもいい。すごくどうでもいい。とにかくどうでもいい。あと……どうでもいい。

「そこまでどうでもいいの!?!」

「今からやることには一切関係ないからな」

今からやるのは演奏だし、と思いつつ楽器を取り出す。

「お、待ってました!」

いち速く弾がドラムを弄り、自分に使いやすいように調整を始める。その隣では鈴がギターに弦を張り始め、カズと蘭ちゃんはその他の楽器の調整をする。一応調律はしてあるんだけどな。

「だろうと思ってその方面には触ってない」

「信用してくれてありがとさん」

「俺達の中で一番楽器に精通してるのはお前だからな」

楽器に精通はしてない。千の顔を持つ英雄には精通してるつもりだけど。

「じゃあ、何からやる？ とりあえず練習は必要だと思うのよね。久し振りだし」

「じゃあ、『般若心経ロック』で」

「なんであえてここでその曲をチョイスしちゃうの？ もう少しまともな曲だってあるじゃない」

「じゃあ『紫蝶々』」

「オツケー」

さてと。それじゃあ歌って奏でて遊ぼうか。放送機材のハッキングは

「もう終わってるよ？ 東さんを舐めちゃいけない！ でもほんとはペロペロしてほし」

ちー姉さんの アイアンクロー！（タイプ的には鋼ではなく格闘かノーマル）

こうかは ばつぐんだ！

束姉さんのひめい が アンダーグラウンドサーチライト の く
うかんに ひびきわたる！

束姉さん は アイアンクロー を されている！

ちー姉さん の アイアンクロー！（タイプのには以下略）

こうかは ばつぐんだ！

……なんか、初期のポケモン思い出した。巻き付かれると動けな
いんだよな。あれ。

束姉さん は おとなしくなった。

突然のことだった。放送機材が全てこちらの制御を離れ、こちらの
操作を一切受け付けなくなってしまった。
そして流れ始めるのは、陽気な男女の声と、小さなBGM。

『あー、あーあー あー あー？ マイクテスマイクテス、感度は

「どうかかな？」

「いいと思うわよっ。」

「そうかい？ ああそうそう、この放送は、ご覧のスポンサーの提供でお送りします」

「音だけだからご覧できないけどねーwww」

「解説は私、Sammer & amp; Bellの揚げ物より煮物が好きな方、サマーと！」

「同じく、Sammer & amp; Bellのティガレックスにハシマーで勝てちゃう方、ベルがお送りいたします！」

この放送はあまりに突然流れすぎて、この場にいる全員が驚愕して固まってしまっている。

「それでは一曲目！初めは騒がしいくらい騒がしいのから流すからね。五月蠅かったら扉を閉めると良いよ！【初音ミクの消失・Dead end】！」

「このタイトルの初音ミクさんはフィクションよ。もし本当にそんな名前の人を見かけても、なにも言わずにスルーしてあげてね？お姉さんとの約束よ？」

「お姉さんwww」

どごっ！バギッ！ビチャチャッ！

「始まるわよーっ！」

そうして曲が始まった。

.....ど.....ど.....ど.....ど.....ど.....ど.....？

数曲の練習の後、俺達は本格的に演奏を始めた。

弾がドラムを叩き、鈴がギターを弾き、俺とカズは使う楽器をころころ変えて必要なものを演奏している。

今回用意した曲は【初音ミクの消失】に始まり、【メルト】、【ブラック ロックシューター】、【ダブルリアット】、【恋は戦争】、【下剋上】、【magnet】、【人狼狂詩曲】……といった激しい曲を主体にしている。一部激しいかどうか疑問なものもあるが、俺としては楽しければ良いけどさ。

ちなみに、最後にはカズの歌う【なまえのないうた】を予定してある。だんだん静かにしていく予定だし、ちょうどいいと言うことで。

あと、実はナレーションはサテライト30で増えた俺と、俺がライアーズマスクで変装した鈴だったりする。

ライアーズマスクは声も変わって本当に便利。

「ところでここってどこなの？」

「気にすんな。気にしたところで変わりゃしない」

曲の合間に鈴が聞いてきたが、秘密にしよう。説明が面倒だし、俺もどうやって作られてるのか知らないし。

……そうそう、すぐ近くにいる招待客の皆様には好評だった。よかったよかった。

……？　なんか無かったか？

IS学園の放送機材をジャックして行ったゲリラライブも終わり、今はクラスの片付けをしている。

机と椅子のいくつかを千の顔を持つ英雄で代行しておいたため、テーブルクロスを含めて消滅させるだけでおおよそ三割は終了。後はセシリーが持ってきたやつだから少し時間がかかる。

ちなみに劇はやっていない。生徒会がなにをやったかって？　興味ないから知らない。

……なんか物騒なことがあったような気がしたんだけど……
……フラグを折っちゃったかね？

まあ、別にいいけど。

「一夏、ちょっとこれ食堂に返ってきてー」
「おー、わかったー」

台拭きを受け取り、廊下をのんびり歩く。今日は本当に疲れた。主に精神的に。

執事服を着てにこにこ笑って、演奏して、接待して、片付けて……
……俺らしくないことこの上ないな。

今日はもうゆっ……くり寝ることにしよう。この状態で理不尽なことを言われたら、本気で切れてしまいそうだ。

まあ、あまり理不尽すぎることでなければ切れる前に寝ると思うけど。

例えば、弾が交通事故に遭って、犯人は逃走中って知らせが入ると

か、どこかの悪の秘密結社の工作員がやって来て、シロを頂こうかと思ひまして、とか言ってくるのか。

……その他にも色々ありそうだけど、今はこのくらいにしておこう。理由？ そりゃ簡単だ。目の前にたっちゃんがいるからだな。

「一夏くん」

「……真剣な話臭いなあ……なに？」

いつもみたいな不透明かつ信用できないうえ緩い空気だったらともかく、今は不透明なのは同じだが、真剣で引き締まった空気を発している。

「……今日、何かあったかしら？」

「文化祭とゲリラライブとご奉仕喫茶以外に？」

「ええ。短刀直入に言うと、誰かに襲われたりは？」

性的な意味でだったら束姉さんとちー姉さんに襲われたし、好敵手ライバル的な意味でラルちゃんに少し人気勝負を持ちかけられたりもしたけど、バトル的な意味では無いな。

「無い無い。一人になる時間はほとんど作ってないし、エムさんに遭遇してからはずっと一人にならないように気を付けてたから」

「え……エムさん？」

「巻紙礼子って人。多分偽名。いらなからこの名刺あげる。素手で触ってたから指紋とか採れると思う」

「……ありがとう」

たっちゃんはなんでか複雑そうな表情でその名刺を受け取り、これまたどうしてか溜め息をついた。

「そんな落ち込んだような顔をして、どうしたんだ？ 正直に言って似合わないぞ？ 愚痴くらいなら聞いてもいいけど？」

聞くだけだけど。文字通り文言通り聞くだけだけど。

「ん〜……なんかさ……私がでしゃばるようなことじゃなかったのかな〜って思っちゃってね……」

ポツリと溢した言葉は、しっかりと俺の耳に入るくらいの音量だった。話すでも話さないでもよかったんだが、どうやら話す方を選んだらしい。

「本当は、一夏くんに被害が行く前に一夏くんを囮に一夏くんを狙っている奴を捕まえたかったんだけど……一夏くんは一夏くんぢやんと考えて動いてたって知らなかったし」

まあ、知られないように動いてたし、普段の俺を見てたら何かに警戒してるようには見えないわなあ。

実際は臆病すぎるくらい警戒して、安心できる状態でしか寝ないようにしてるんだけど。

俺に被害が来そうになっただけならすぐに起きるし、大体のものは防げるようにしてあるし。

「……私のことって、お節介だった？」

「睡眠時間が減って本気で殺してやるうかどうか迷うくらいには……っていう俺の完全な個人の意見は置いといて、理性的に考えた場合は感謝しているけど？」

「……へ？」

あ、馬鹿みたいに呆けてる。

「たっちゃんが優しいことはよく知ってるし、無駄なことをしたくないのもよく知ってるから理性的には感謝。ただし寝るのが大好きな俺個人としては、どこかの四肢切断大好きバラバラ大魔王みたいに殺そうか、エクスカリバーに再度出演願って精神的に殺そうか、アイアンクローで頭を握りつぶそうかって悩むくらい憎く思ってるけど」

「なんか一つよくわからないのがあったけどほんとにやめて!？」

「いいよー」

「つて軽っ!？」

「重い話は似合わないからさっさと明るくしようと思って」

重い話なんて前世の友人の暗黒時代の黒歴史ノートに記載されている設定の中身だけでお腹一杯。それ以上は胸焼け起こすよ。胸焼けは気持ち悪くなるから嫌だ。

「……………そう」

「ん。そう」

……あ、そうだ。これを食堂にもっていかなくっちゃならないんだっけね。面倒だけど。

ついでに、釣りでもするか。

「たっちゃんたっちゃん」

「ん？ なにかしら？」

ちよいちよい、とたっちゃんを手招きで呼んで、耳元でこっそり囁く。

「……まだ居るみたいだけど、釣ろうか？」

さっきまでなんとなく落ち込んでいるような空気を発散していたたつちゃんが、急に目付きを鋭くさせた。

「……お願いできる？」

「いいよー」

「……前から思ってたけど……軽くない？」

「軽くたっていいじゃない。俺だもの。……まあ、釣った後はよろしく」

俺が囿で、たつちゃんが実働。どんな結果になることやら。

……食堂食堂、片付けしないと。

外伝、予知夢？ 楯無編

またぼんやりとした夢を見ている。なんと言うか、かなり久し振りと言う感覚だが、実際は精々数ヶ月。大したことはない。

ただ、最近の生活の密度は高い。俺にとっては寝ている時間が一番密度が高いんだが、面倒事が大量にやって来るおかげでそれに肩を並べそうだ。

まあ、正直なんでもいいけどな、と思いつつ辺りを見回してみると、猫座の生徒会長と原作一夏がISの戦闘訓練をしていた。

原作一夏はフルボッコにされてるだけだったけど。

「痛そうだね、パパ」

「うおっ!？」

後ろからこっさり話しかけたせいか、原作一夏はびくんっ!と肩を跳ねさせ、集中が切れたらしくあらぬ方向に吹き飛んでいった。

「……大丈夫？」

「……百秋。これが大丈夫に見えるのか？」

原作一夏を試してみる。腕はある。足もある。妙な斑点も浮き出てないし、顔色が異常に悪いってこともない。ちよつと壁にめり込んでいるだけのようだ。

「大丈夫に見える。パパはおかーさんに壁の真っ赤な染みになるほど折檻されても大丈夫だったから」

「俺えええええっ!?!? いったいなにやってそんなことになっ

てんだよ!？」

「大天災さんに子供ができたからだって。俺の腹違いの妹だってさ。もう何年も前の話だったけど」

そう言うと、原作一夏はorzになってぶつぶつとなにかを呟き始めた。呪いの言葉か？

「え……えっと……百秋くん……よね？」

「ん？ そうだけど……なんだたっちゃんか」

「私を知ってるの？」

「その事については未来のパパに聞いて」

「ちよ……ちよっとそれはできないかな〜なんて……」

「じゃあ諦めて」

「……もしかして百秋くん……私のこと嫌い？」

そんなことを冷や汗を流しながら聞いてくるたっちゃんに、笑顔で一言。

「嫌い」

「そこまで!？」

「俺が気持ちよく寝ようとしてたところで叩き起こして、その上俺じゃなくてもできるどころか適任がいるのにわざわざ俺に仕事を押し付けて来るって言うのを何度も繰り返してくるような人が好かれるって、本気で言ってる？」

「……あの……ごめんなさい。ほんとにごめんなさい」

しゅんとしてしまったたっちゃんに、青っぽい猫耳をつける。やっぱりどうしてもメカニカル。

きよとんとしているたっちゃんを置いて、今度は一夏に青っぽい猫耳を装着。かんちゃんの中には水色の犬耳にしよう。そうしよう。

まあ、機会があつたららの話だけど。

それからなぜか一夏の寮の部屋に変わった夢の世界の中でベッドを指差し、俺は言う。

「一緒に寝てくれたら考える」

side 織斑一夏

久しぶりに会った未来の俺の子供は、なにも変わらず俺の腕の中で眠っている。

……ただし、楯無さんに背中を向けたまま。

撫でられてもなんの反応も返さず、脇に手を近づけられたらその手をペしりとはたき落とす。なんで楯無さんはこんなに嫌われてるんだ？ これじゃあ前のセシリアの時以上じゃないか。

「……楯無さん。なにやっただんですか？」

「あ……あははは……お姉さんってばなーんかやっちゃったみたいだね？」

楯無さんは苦笑いを浮かべるが、どうも身に覚えが無いらしい。

まあ、今はまだ産まれていない百秋に嫌われる理由に覚えがあつたらある意味怖いけど。

きゅ……と身を寄せてくる百秋の頭を撫でてやると、百秋の頬が少しだけ緩む。

……可愛い奴め。

「……なんだか、すっごくお父さんの顔になってるわよ?」

「ん〜……まあ、未来の話とはいえ、俺の子供であることには変わり無いので……」

……誰との子供かは知らねえんだけど。

「……もしかしたら……私の子供だったりして」

「無いですね」

だって前に「たっちゃんじゃない」って言ってたし、楯無さんのことをたっちゃんって呼んでたし。

「……むうそんな即答で否定しなくてもいいじゃない」

「本人の口から違うって言う質は取ってますから」

「そ、そうなの?」

「はい」

なんでかほっとしているように見える楯無さんのことはよくわからないので、とりあえずまた百秋の頭を撫でておく。

楯無さんも撫でようとしていたけど、その度に百秋の青っぽい猫尻尾に払い落とされている。

……ほんと、この人は未来で何をしたんだろうな?

百秋の尻尾にぺしぺしと手を払われている楯無さんの姿は、頭の上の耳のこともあって親猫の尻尾にじゃれつこうとしている子猫のように見えるてきた。

……楯無さんなのに、なんか可愛く見えてきた。こんなことを考えてるって知られたら、またからかわれるんだらうなあ……。

百秋の頭を撫でながら、百秋の尻尾に集中している楯無さんの頭に手を置く。

置かれてようやくその事に気付いたらしい楯無さんの頭を、ゆっくりと撫でてみた。

……百秋の髪より少しだけ柔らかいけど、百秋の髪の方が若干指の通りがいい。

それでもかなりいい感触だったので、気の向くままに優しく撫でる。

「こーらっ。お姉さんの頭を撫でるなんて、生意気だぞっ?」

「はい、ごめんなさい楯無さん」

そう言いつつも撫でるのは辞めない。最近は百秋のお陰で撫でテクが上がってる。ラウラやシャルみたいにいつもよく撫でさせてくれる奴だけじゃなくて、最近は篝や鈴やセシリアも普通に撫でさせてくれるしな。

それどころか、撫でる時間が増えていくと目を閉じて優しげな顔になるんだ。

……篝はいつもあの表情の方が可愛いと思うんだけどな。鈴やセシリアも同じく。

……ふぁ……なんだか眠くなってきた。

百秋と楯無さんを一緒に抱き寄せて、目を閉じる。なんか楯無さんの顔が一瞬赤くなったような気がしたけど、多分気のせいだろ。楯無さんがこの程度で顔を赤くするほど恥ずかしがるとも思えないし、楯無さんは俺を玩具とかからかって遊ぶと楽しい奴とか、そのくらいにしか思っていないだろうし。

……ああ、ISの出来の悪い生徒とも思われてるかもな。事実だし仕方ないけど。

「あ、あの一夏くん？　なんだか顔がすごく近いんだけど……」
「気にしない気にしない。俺も気にしませんから」

逃がさないようにさらに抱き寄せて、百秋を挟むようにしてしまう。苦しそうには……してないな。

そこで俺の意識がゆっくりと沈み始める。最後に薄目を開けてみると、目の前五センチも無いところに楯無さんの顔があった、

……確かに近かったな。

………そうだ。起きたら耳を片付けないと………また楯無さんにか
かわれる………。

やれやれ、やっぱりあったな

食堂からの帰り道で、わざと人気の無い場所を通る。賢いやつなら誘いだとか思つかもしれないが、あの短気な奴だったらどうなんだろうな？

しかも、わざと名前を大嫌いなやつコードネームと同じにしてやったから、相当本気でキれているはずだ。単純そうな顔と雰囲気してたし。

……噂をすればなんとやら。本当に単純だったな。

まあ、単純な奴ほど自分の得意な状態にはまると強いから、単純とというのは悪いことではない。

例えば、某一步を踏み出すボクシング漫画の主人公は単純一途で、ひたすら前に出ることしかできないが、はまれば最大級に恐ろしい相手の代表格だろう。

それと同じようにはまれば恐ろしい相手になるのか、それとも口だけの相手なのかは知らないが……まあ、頑張れば多分なんとかなるよな？

ならなかった時はならなかった時で考える。場合によってはバスターバロンとサテライト30とシルバースキンと激戦とブレイズ・オブ・グローリーとヘルメスドライブの同時使用も厭わないつもりだ。

「

「あ、エムさんじゃないですか」

相手が口を開こうとした瞬間、それに被せるようにして俺は挑発をさらに繰り返す。繰り返すはおかしくないかって？ 初めのあれも

挑発の一部だからいいんだよ！

「ところで、エムさんはこんなところで何をしているんですか？もう文化祭は終わりましたよエムさん。よいこは帰る時間ですからお帰りくださいエムさん。エムさんがここには仕事に支障が出ますから、できるだけ早くお願いしますねエムさん。エムさん？聞いてますかエムさん。そんなプルプル震えてもエムさんは所詮エムさんだからやめといた方がいいですよエムさん。と言うか最大限ぶっちゃけますと邪魔ですよエムさん。仕事は失敗したんだからさっさと帰って上司に叱られて来てくださいよエムさん」

「うるせえな。こっちの仕事はまだ終わっちゃいねえんだよ！」

エムさんは本気でキレているらしく、俺に殴りかかってきた。たしかあの秘密兵器はこっちがISを使ってなくちゃ使えないはずだから、こっちも使わず応戦する。

千の顔を持つ英雄を使ってトンファーを呼び出す。普通のトンファーではなく、振り回すところの先に鉄球がある。ワンピースで有名なトンファーを使う敵が居たな。それを振り回し、

当然のように鳩尾に爪先蹴りを叩き込んだ。

「おげえっ!？」

なんか変な声を上げてその場に踞ったエムさんの後頭部をトンファーで殴る。実は拳より蹴りよりトンファーの方が威力が弱いから、これでも手加減の一種なんだよな。

しかしそのトンファーの一撃は、ISのシールドに阻まれて届かな

い。

仕方がないので神鳴流烈蹴斬式の太刀でシールドを抜いてもう一度蹴る。今度は喉を蹴り潰す感じで。

「ゴウオツ!？」

酷い悲鳴だな。急に襲いかかってくるからそうなる。もっとちゃんと『襲いますよ』って言うってから来いって。

そうすれば手加減の一つや二つは………してやらないこともないが、結局殴る。そして蹴る。ついでに関節を極める。あと折る。それから無限エクスカリバーの刑。最後にちー姉さんに引き渡す。

……知らない奴が多いが、ISを使っているても関節技を極めれば普通に骨折や脱臼くらいまでは持つていけたりする。関節技こそ王者サブミッションの技よ!とはよく言ったものだな。

「……ぐあ………て………てめえ………この………クソガキがああああああつ!?!」

なんか蜘蛛っぽい爪が出てきた。その上、先端が開いて銃口が顔を出している。見た目がキモい。

「まあ、関係無いけどな」

なんのために俺がわざわざ実際に接触したと思ってるんだか。ダメージは二の次。本命は、エムさんの使うISにとある能力の発動に必要なエネルギーを送り込むためだったりする。

その能力とは、俺が神に実際に頼んだ能力の一つ。名前をインヒューレントスキル・ランブルデトネイターと言う。

流石にこの距離で爆発されると色々きついので、シルバースキンを三枚ほど装着して、それから爆破。ISの装甲だろうがコアだろうが、金属できてきているなら壊せない道理はない。

……実はシルバースキンを爆破することもできたりする。ただし、その場合だとシルバースキンは自動修復されないから、新しく出す必要があるが。

一番便利な爆破の元は、エンゼル御前の矢かモーターギアの二択。激戦もいいが、疲れる。

急に八つの爪の全てを爆破されたエムさんは、全身にISを展開して備える。俺はそんなエムさんを帽子の下から眺めるが、どうしてもギンの方が強そうに見えるし、束姉さんが操縦するゴーレムの方が強い気がする。

「で、エムさんはなにやってるの？」

「私をあいつと同じ名前で呼ぶんじゃないやねえ！私は秘密結社『亡国企業』が一人、オータム様だ！」

「覚えるのが面倒だからエムさんで固定な。自己紹介も終わったし、帰れば？ どうせエムさんじゃあ俺には勝てないだろうし」

帰してやる予定は一切ないけど。

「っいたらああああっ！！」

急にエムさんは俺に襲いかかってきた。爆破されて先端を失った機械の脚をわしゃわしゃと蠢かせ、結構な速度で飛んでくる。

うん、生理的に受け付けられないくらいキモい。

シルバースキンを解除し、クロの上からシロを展開。クロはISだからほぼ完全にシロと同期することができる。ISスーツより便利

だ。

雪片式型を展開して、それから左右の衝撃砲と接近しての斬撃でかなり一方的に追い詰める。ネットなんかがこのシロに効くと思うなよ。

決るようにして、撃つ。それだけでかなり削ることができる。ぶっちゃけ弾丸バレットだな。久し振りの出番だけど。

鈴達との模擬戦闘の時に使うと割と深刻に体に響くから使っていないしな。

……さてと。俺としてはISだけ置いて帰ってくると嬉しいんだけどな。エムさんにマーキングはしたし。それに、そろそろたっちゃんの仕事に来るはずだし。

「あら、私が助けに来るまでもなかったかしら？」

「いやいや、来てくれて嬉しいよ」

とりあえず、これで俺の仕事の一部は終わり。後はたっちゃんの仕事だ。

『……お疲れ、一夏』

「ほんと、疲れたよ。ののちゃん」

………ん？ ののちゃん達はずっと見てたぞ？ 屋上あたりから、ISを使って。

穿千とスターライトmk3を展開してたり、衝撃砲の砲身をロングバレルな形で形成する準備が整ってたり、レールカノンやミサイル弾幕や狙撃用グレネードランチャーとかの準備ができてたりもするけど。

……それじゃあ、仕掛けもすんだことだし、寝るか。

その後、亡国企業本部にて

どうやらあの後エムさんは逃げきったらしい。たっちゃんがそう報告してくれた。

まあ、実はすぐにでも居場所を見付けて殲滅することもできたりするんだが……いいや。セシリーの後の事を考えれば、この辺りでちー姉さん似的の……名前なんだっけ？

織斑はわかる。織斑………なんだったかな……。

ま……ま………そう、マゾカ。そんな感じの名前だったはず。自分の顔にナイフを滑らせて悦ぶような変態性癖の持ち主だし、名は体を現すって本当のことだと思った瞬間だった。コードネームもMだし。ぴったりな名前だと思う。

……とにかく、マゾカと戦っておくのはためになるだろうし。

……さてと。ちょっと悪戯しようかね。エムさんと大雨さんに挨拶でもしとこう。

アリス・イン・ワンダーランドは本当に便利。あれを使って電話のように話をすることもできるんだから。

まあ、電波やら何やらを狂わせ、機械を狂わせ、人間の感覚すらも狂わせるアリス・イン・ワンダーランドだ。電波のやり取りくらいはできてもおかしくない。

と、言うことでエムさんにくっつけたマーキングをヘルメスドライブで見付け出し、その位置にアリス・イン・ワンダーランドを薄く散布する。これで話ができるな。

できればエンゼル御前を付けたかったが、いくらなんでも見付かるだろうと思って断念した。

今思えば、エンゼル御前にシルバーカーテンを使ってやれば見つか

らなかつたんじゃないかと思ったりもするが、過ぎたことを気にしすぎるのはよくない。反省するだけして、後はきっぱり割り切ろう。

原作内では第二位と三位の謎キャラ（何を考えているかわからないという意味と、謎に包まれた出生的な意味で。一位はダントツ束姉さん）の二人と話ができるんだから、ISのファンとしては楽しまなくっちゃ損つてもんだ。

ファンの割には崩壊させる率が非常に高いけど、まあその辺りは気にしない。

俺だからな。

……でも、やっぱり眠いからまた今度でいいや。と言うか、盗聴とかいいや。もう面倒になつてきたし。

適当に【死ねばいいのに】でもリポートかけとけばいいや。【ベンゼン】とか【ニトロベンゼン】でもいいけど。

……ふあ……………ねみい……………おやすみ……………。

……すか……………。

とある高層マンションの最上階の、豪華な飾りが溢れかえるほどに存在しているその部屋で、一夏にオータムと名乗ったが一度もその名前で呼んでもらえず、あるうことか目の前にいる大嫌いな新入りの少女と同じ名前で呼ばれ続けた可哀想と言えば可哀想な女性が、

少女に詰め寄っていた。

つい先程、更識楯無を主とした七人の少女達に一方的にボコられていたところを助けてもらっておいて、恥を恥とも思わない、しょーもない女である。

「るっせえ！！何で私ばつかこんなめにあうんだよ！？ あれか！お前私の事が嫌いか！？ 私もお前の事なんか大嫌いだくそつたれが！！」

「……何も無い天井を向いて話すとは……本格的に駄目女だな。女以前に人間としても駄目だが」

「てめえに言われる筋合いはねえよクソガキ！」

その女は八つ当たりも含めて少女の体を壁に叩きつけ、無理矢理押さえつけていた。端から見ていると強姦現場に見えなくもない。

「明らかに悪意満載じゃねえか！私にはスコールっていう恋人がいるんだよ！何でこんなちんちくりんに手を出さなくっちゃなんねえんだ！？」

なんだ、浮気か。浮気魔とか脳天に穴を開けられて脳味噌をスプーンで掻き出されて死ねばいいのに。
死ねよ。

「ついにこいつ直接罵倒してきやがった！？」

「……スコール。この頭が可哀想な女のどこが良いんだ？」

「あら、可愛いじゃない」

突然聞こえた女の声に振り向くと、そこには女の恋人であるらしい女が一人。名前はスコールと言っらしい。

「スコール！」

「あらあら、可愛い顔が台無しよ？ もっと落ち着きなさいな」

「それより！」

「いいから、落ち着きなさい」

いつの間にか近付いていたスコールに優しく抱き締められ、エムさんと呼ばれ続けたオータムは顔を赤らめて静かになる。それを少女は下らないと切り捨てて部屋を歩き去る。

「エム。ISは整備に回しておいて頂戴。サイレント・ゼフィールスはまだ奪って間もない機体だから、再度の調整が必要よ」

「わかった」

「それと、オータムを連れてきてくれてありがとう」

その言葉に一瞬だけ足を止めるが、すぐにその足は動き出す。

「ふん。命令だからな」

閉じたドアの向こう側で囁かれるように口に出された言葉を知るのは、口に出した張本人であるエムだけだった。

……ところで、オータムってちよろいよな。正直に言うと、一言で機嫌を直すオータムを見て、すわ二代目ちよろいさんの降臨かと思っただし。

まあ、ちよろータムだから仕方がない。ちよろシア・ちよろコットと同じくらいちよろいちよろータムだから仕方がない。

返事とかは無いが、返事があるのが無かるうがちよろータムがちよろい事には変わらない。藤崎漫画の封神演義の足音がロリロリな奴みために、歩く度にちよろちよろとでも効果音をつければいいのに。

……冗談だよ？ なに、空気を読めって？
はっはっは、そんな無茶な。

『ぜんぶ聞こえてんだよおおおおっ！！』

盗み聞きか。変態め。

その後、亡国企業本部にて（後書き）

真暇はオータムのは嫌いではありません。ただ、からかって遊ぶと面白そうだからついやってしまったんです。
だから、『僕は悪くない』

……最後以外は本当ですよ？　最後はネタですが。

学園祭の、裏話

……これはちー姉さんから後々になって聞いた、学園祭の時にちー姉さんが行ったことの話だ。
多少の推測が入るために完全とは言えないものの、恐らくちー姉さんがわざと隠した部分もそこそこ正確に描かれているだろうと思われる。

まあ、ちー姉さんの暴走はいつも通りだし、そこまで気を張って読む必要もない、単なる報告書みたいなものだ。

side 恐怖公 血冬

ゴッ！ガッ！ガッ！ガッ！ドゴス！ベゴシャ！ブチブチブチ
ッ！！ゴギンッ！ベゴォ！ドムドムッ！ドムドムドゴスベギグシャ
ッ！！

side 織斑 千冬

学園祭当日。私はとある女を後門のすぐ近くで待っていた。束か？
と思うかもしれないが、今回は珍しく違う。

私が待っているのは、ボーデヴィットにあのようなことを吹き込んだ主犯であり、私の教え子の一人でもあるクラリッサ・ハルフォー

フだ。

あの女がたわけたことをボーデヴィツヒに吹き込んだお陰で、一夏の額に……ひたいに……ヒタイニイイイイ!!

「ひいつ!？」

……オヤア……? 漸く来たようだナア……?

久し振りに顔を会わせるが、ハルフォーフも大きくなったものだ。私とそこまで年は離れていないのだが、初めて出会った時のハルフォーフは年齢的には中学三年から高校一年程度で、その頃のイメージが強い私はい子供相手のような気がしてしまう。

……だが、ここまで育っているならば加減は要らんだろう。外交問題にはならない程度に全力でボコってくれる。

目の前で青い顔をしてカタカタと震えるハルフォーフに私はゆっくりと近付きながら、どの程度まで加減するかを考えるのだった。

結局、そこそ本気のアイアンクロー程度で手を打ったのだが、ハルフォーフはハルフォーフで嵐ほどではないにしろかなりの再生能力を有していたのですぐに復活してしまった。三十分は悶絶させるつもりだったのだが、実際に悶絶していたのはたったの1分ほど。……まったく、私も衰えたものだ。

「いえ、かなり痛かったですよ、教官。隊長への愛をみなぎらせていなければ、危ないところでした」

「そうか」

……つまりハルフォーフも、相手は違えど私達と同じ位階に足を踏み入れようとしているのか。

……と言うことは……もう少しやっても平気と言うことだな？

「お願い致します、辞めてください」

右手をゴキゴキと鳴らしていると、どうやら自分の末路を悟ってしまつたらしいハルフォーフから土下座せんばかりの勢いで頼まれてしまった。かなり本気の懇願のようだったので、仕方なくやめてやることにした。私はそこそこ優しいからな。

ハルフォーフと別れてすぐに、私は一夏に連れられて一夏の中学時代の同級生達（＋）のゲリラライブを楽しむことになった。クラスの事は……まあ、なんとかなるはずだ。

一夏と凰と五反田兄が気合いとノリと勢いで分身してクラスを切り盛りしているので人手が足りなくなることは無さそうだし、山田先生が一肌脱いでメイドをしてきているので問題ない。

山田先生は少しひきつったような笑顔を浮かべていたが、最後に見た限り本気で楽しんでいたしな。

……さて、私もそろそろ仕事に戻るか。束を放置するわけにもいかんしな。

「楽しかったよー。まったね〜！」

そう言いながら帰っていった束の姿が消えて、私は漸く一息つくことができた。

学園祭には、多くの国の上層部、または諜報部の者達が、代表候補生等から一般参加用のチケットを使って堂々と入り込んでくることがある。

チケットを使っている以上、なにもしないうちに追い出すのは不可能だが、逆に言えばなにかをすれば責任を問うこともできると言うことだ。

……ここで何が困ったかと言うと、束の存在とその優秀さだ。

束の居場所の情報は、束を欲しがる国家や組織の上層部にとっては何よりも価値あるもの。当然、見つけたならばすぐにスカウトや強引な勧誘、最悪拉致等を仕掛けてくるものも居なくはない。

そんなことをしてくる相手に束が加減をするわけもなく、私はやり過ぎた制裁を止めるのに四苦八苦した。

確かにその組織からの勧誘などを抑える方法で一番確実なものはその組織を潰すことだが、組織を潰すために国家を丸ごと潰すと言うのはいただけない。

加減するべきところで加減をしなければ、それは天災ではなくただの暴力だ。

暴力を振るうのは最終手段として、それでいて自分に正当性がなければ排除されるのは自分だ。

……まあ、束はそれをわかって限界ギリギリの所をにこにこ笑いながら踏みこむのだから質が悪い。

結局話し掛けてきた数人を見事に首にさせ、その者が所属する組織と国家にそこそこの損害を出させるだけで抑えさせたが、それでもやはり疲れた。束と一緒にいると、精神的に疲れてしまう。

……今日は一夏のプリント付きの抱き枕を抱いて寝よう。束もたまにはいいものを作る。

そう思っていたのだが、寮長室のベッドで丸まっている一夏を見て、抱き枕が必要ないことを悟った。

……今日はいい夢が見れそうだ。

決定事項、面倒臭い

今年は一年生に専用機持ちが多いと言うだけの理由で、キャノンポール・ファストとか言うレースに強制出場させられることになってしまった。

とにかく早くゴールすればいいだけの話らしいので、周りの妨害をしつつさつさとんずらするのが正解だろう。

ラッキーなことにシロは速度特化型だし、そこまで時間がかかるようなことは無いはず。ゴールしたらさつさとコースから出て寝よう。そうしよう。けってーい。

「はいはい、それでもいいから試合中は本気でやってね。本気のー夏に勝ったら千冬さんに挑戦して、一夏をあたしに下さいつて言うんだから」

「私もいいか？」

「む、では私も立候補しよう。近くに居ればその強さの秘密が分かるかもしれないし、私も嬉しいしな」

「……………すう……………ふう……………一夏を、私にくだしゃひ……………うう……………」

……………小声で練習しているかんちゃんはなんだか見ていて和む。

「……………？ また撫でられた……………」

「可愛いからよ。可愛い子は撫でられる運命にあるのよ。私が決めた、今決めた」

「うんうん、かんちゃんは可愛いね」

「……………あう……………」

何この娘可愛すぎるんですが。本気で可愛らしすぎるんですが。
……まあ、撫でとじっ。

「……はあ……うん、つつこまないよー、僕はもつつこまないよー」

「ところで一夏さん？ 犬を一匹飼ってみる気はありませんか？
名前はセシリアと言いますが」

「……つつ！……つつ……つつこまない……つつこまない……つつ！」

「面倒を見れなさそうだからやめとく」

「ご安心下さい、トイレの躰はできておりますし、洗濯と掃除はバツチリですわ。……料理は不味くもなく美味しくもなくという程度ですが」

「……つつ！……つつ！……」

「……シャルロット。我慢は体によくないわよ？」

「そうだぞシャルロット。あまり自分の中に溜め込みすぎていると体を壊してしまう。病は気からと言っが、騒の気も鬱の気も、過ぎれば体には毒にしかならん」

ふるふる震えてツツコミを我慢しているシャルだけど、ツツコミ属性がツツコミを我慢できるわけが無い。前にあった賢者モードだったらともかく、平常時だったら特に。

その上シャルは完全にツツコミ属性だ。ツツコミもできるポケ属性ではなく、真性のツツコミ属性だ。

……あと、弄られキャラでもあるな。

……まあ、なんにしる準備はしとかないとな。面倒だけど。

「キャノンボール・ファストが終わったら、みんなと一緒に寝ましよう？ だから、頑張って」

「……鈴。お母さんって呼んでいい？」
「できればやめて」

やめると言われてしまった。仕方無い、やめるか。

「そう言えば、キャノンボール・ファストで思い出したんだけど、
一夏の誕生日当日よね？ 何か欲しい物ってある？」

「睡眠時間がほしい」

「……また難しい注文をするわね……腕がなるわ」

「そうだな。それでは共同作業でつくるとしようか」

「……とりあえず、五反田さんに連絡を取ることを提案いたします
わ」

「」「意義無し」「」

「……すー……はー……すー……はー……落ち着け、落ち着くん
だ僕……素数を数えて落ち着こう。素数は1か自分自身でしか割
りきれない孤独な数字、僕に元気を与えてくれる……」

なんだかシャルはツツコミを我慢するあまりネタに走っちゃってる
よ。このままだとボケとツツコミのバランスが崩れて大変なことに
なりそうだ。

原作的な意味ではとくにポイント・オブ・ノー・リターンに帰還不能地点を通り過ぎてるけどな。

「……とりあえず、今度の休みに皆で一緒に寝ましょう。千冬さん
や弾達も呼んで」

「私も姉さんと呼ぶか？」

「お願いするわ。一緒に寝る人数は多い方が夢の中が楽しくなりそ
うだし、幸せだし……安全だしね」

……ああ、あのエムさんのことでも思い出してるのかね？

エムさんはしばらく大丈夫だと思うがね。聞いた話だと原作よろしく自爆して逃げようとして失敗して、地獄の断頭台を食らいそうになったところでマゾカに連れられて逃げ出したそうだし。

ちなみに、逃げてる最中にセシリー凝縮歪曲光線と、ののちゃんの真つ赤なエネルギー砲と、鈴の重複圧縮衝撃砲（左右の衝撃砲の口径をすぼめて威力を上げて、そのまま同一地点に撃ち込む大技……らしい）と、ラルちゃんのレールカノンと、シャルの大口徑対物ライフル砲（部品の一部と銃身に千の顔を持つ英雄を使用しているデユノアの製品。なかなか壊れない上威力が馬鹿高い）と、かんちゃん（山嵐（手動ロック）が打ち込まれたが、シールドビットを犠牲に相手は逃げ切ったらしい。凄いなマゾカ。流石マゾカ打たれ強い。

……まあ、誕生日のプレゼントは毎年似たようなものだし、結果も毎回似たようなものに落ち着くし、これでいいだろ。

……さてと。俺は寝ようかね。やることと言えば後でキャノンポール・ファスト仕様にシロを調整するくらいだし。

……対光学兵器用に雪片式型は必要だけど、衝撃砲は封印。空間固定も封印。機動に全部回せばいけないことはないだろう。千の顔を持つ英雄もあるし。

とある日、セシリアの悩み

……ふう……と溜め息をつく。これで今日、いったい何度溜め息をついただろう？

その回数を数えようとして指を折り曲げ始めたが、指を曲げ伸ばしした回数が25を越えた辺りで憂鬱になり、数えるのをやめた。そしてその事でまた溜め息。

「……………はあ……………」

「……………セシリア。そんな溜め息ばかりついていると幸せが逃げるわよ？ 何があったのよ」

隣の席に座る鈴さんが心配そうな雰囲気の話しかけてきてくれるけれど、今はそれに笑顔を返すことすら難しい。

どうにか笑顔らしきものを浮かべて見せましたが、鈴さんにはどうやら笑顔に見えなかったようで、さらに心配そうな表情を浮かべてしまった。

「……………なんかあんた、本気で調子悪そうね」

「……………いえ、そんなことは……………」

「あるでしょ。バレバレなのよ」

いつもの勘……………ではなく、恐らくただ観察した上での言葉に、わたしは溜め息をつく。いつもならばここまで分かりやすいことはないはずなのだけれど、今日はとことん調子が悪い。

『……………話してみたら？ ……ここだけの話にしとくからね』

すると聞こえてきたのはISのプライベート・チャンネルでの声。どうやら本格的に相談を聞いてくれるつもりらしく、鈴さんはわたくしのことをじっと見つめている。

『ああ、千冬さんにはれると後が怖いから目はそらすわよ?』

ちゃんと聞いてるから、と言って鈴さんはのんびりと麻婆定食を口にする。

『……実は……』

『うん、実は?』

『……最近、一夏様に調教し《いじめ》ていただけなくて欲求不満気味なのですわ』

『……』

わたくしの言葉を聞いた鈴さんは一度固まり、それからレンゲを置いてナプキンで口の周りを拭いた。ナプキンには何もついていなくとも綺麗に食べていたのだと言ったことがわかった。

「あんた真性のマゾヒストね」

「ッ!」

いきなりの罵倒に体の一部が熱くなる。喉からせりあがってくる声を唇を噛み締めるようにして殺し、両手を思いきり握り締めて波が過ぎるのを待つ。

『きゅ……急に何をおっしゃるのですか!心の準備もなかったお陰で危つく気をやるどころでしたわ!』

『……本気で餓えてるのねあんた。一夏以外でもこうなるなんて……』

……』

『恐らく、鈴さん、篝さん、シャルロットさん、ラウラさん、簪さん、織斑先生相手ならこうなる自信がありますわ』

『………はあ………確かにそれは不味いわね。後で一夏に話はつけてあげるから、今はこのくらいで我慢してね』

鈴さんはわたくしの額にでこぴんの前状態の指を近付け、容赦の欠片もなく撃ち込んだ。

バチンツ！という音と共にわたくしの額に鈍痛が走り、わたくしは椅子から床に転げ落ちてしまった。

『じゃあ後でね』

『あ………あああ………あ………はあ………』

わたくしは久し振りに他人から与えられた痛みに恍惚としながら、皆様が内履きとはいえ靴で歩き回っている床を這いずりまわる。

顔が汚れた？ 髪に埃がついている？ むしろそれはご褒美ですわっ！

放課後になり、わたくしはいつものように一夏様の元に。するとわたくしのことを見た一夏様は、いつもと違う表情でわたくしを見た。

「鈴から話は聞いている。だから今日だけは、ちょっと付き合っただけあげる」

「！？ あ、ありがとうございますっ！」

わたくしはその場で頭を下げる。いつもならばなんと流され続けていたが、今日はわたくしのことをとことん苛め抜いてくれ

ると言ってくれただから、喜ばない理由がない。
換気を露にしているわたくしを見て、一夏様はにっこりと笑いながら言う。

「あははは、気持ち悪いやつだなあ」

「あはうああぁっ!？」

たった一言。一夏様の口からたった一言の蔑みの言葉が出ただけで、わたくしの脳髓から背骨を通り、全身を甘い甘い稲妻が走り抜けた。声も抑えることができずにはしたくない声をあげてしまったし、全身にまだ残っている稲妻の余韻が抜けた後に体を支えられる自信がないほど疲労している。
しかしそれでも、わたくしの頭のなかは幸福感で一杯だった。

(……………少し濡らしてしまいましたわ……………)

「こっちにおいで、雌豚」

「はううづううっ!？」

れ……………連続技は卑怯ですわっ!いくらわたくしでも、身体が持ちませ

「来い、豚」

いつもより数段強い口調。それで一夏様に命令いっしょくつされてしまえば、わたくしが逆らうことができるはずもなく……………わたくしは動きづらい体を懸命に動かして一夏様に近寄って行く。

数十秒をかけて一夏様の足元に到着したわたくしは、一夏様の顔を見上げる。

一夏様は優しい笑顔を浮かべ、わたくしの頭をゆっくりと撫でてく

ださった。

いままでの急に跳ね上げられるような感覚ではなく、ゆっくりと持ち上げられていくような感覚に、どんとんとわたくしの身体が火照っていくのがわかる。

一夏様の触ったところは頭だけだと言いつのに、わたくしの身体はまるで火にかけられたかのように熱い。

「……セシリー」

「……はい……ごしゅじんさまあ……」

わたくしと御主人様の視線が絡み合う。それからゆっくりと影が近づいて

「お嬢様。あれほど派手な下着も『馬鹿には見えない下着』も控えるように申しあげましたのに」

急に現れたチエルシーが、にっこりと笑うのを見て悟る。

「……夢………ですね」

「慧眼です」

ぱん、と世界が弾けて消えた。

目が覚めるとそこは一夏の部屋。セシリアはぶちか数体に囲まれて眠っていた状態からゆっくりと体を起こし、真っ暗な中で目を凝ら

す。

すると一夏の布団の上には何人分もの影が存在していて、自分はその
こから弾かれたのだと知る。

(……わたくし……欲求がたまっているのでしょうか……?)

そう考えながらもベッドに寄りかかり、一夏の寝顔を観察する。

「……たまには、夢の中の御主人様のように……わたくしを苛めて
くださいね？」

……お願いしますわ、御主人様。

そう、心の中で呟いて、健やかに眠る一夏様の額に唇を当てた。

IS改造、依頼先は……？

side 篠ノ之 篤

私は今、携帯電話を片手に学校の屋上に居る。

まだ電話を掛けているわけではないが、すぐにかける予定だ。

電話帳から姉さんの携帯番号（なぜか始まりが090でも070でも080でもなく666な上、13桁という市販ではありえない番号だが）を呼び出して電話を掛ける。内容は、紅椿について。

抱き付きからの零距离展開装甲攻撃の威力の底上げと機動力の上昇のため、胸部と腹部に追加装甲をお願いできないかという話をするつもりなのだが………なんと言うか、姉さんならば普通に用意ができてそうで恐ろしい。

数度の呼び出し音が響いて、

『やあやあしばらくぶりだね篤ちゃん。東さんはちょっと寂しかったよ？』

いつもとまったく変わらない、能天気な姉さんの声が聞こえた。

「そうでしたか。それは悪いことをしました」

『も、前にも言ったけど篤ちゃんってば固いよ？ もっとキャッチーに呼んでくれたまへ』

……キャッチーに、というのがどういったものかよくわからないの

だが……とりあえず、呼び方から変えてみるか。

「……わかりました……お……お姉ちゃん」

電話の向こうで氷に輝が入ったような音が響いた。そして、一夏に再会してから聞きなれた粘性の高い液体が滴る音も。

「お……お姉ちゃん？」

『けっ！……だ、大丈夫だよ篤ちゃん！お姉ちゃんは元気だよっ！』

姉さんはそう言っているが、どうしても平気そうな場面が見えてこない。

「……なんとというか色々大変そうなので、やっぱり姉さんと呼びます」

『うん、束さんもあんまりそう呼ばれすぎると身体が持たないからその方が嬉しいかな！ざんねんだけどね！すっごくざんねんだけどね！……』

いつも通りの高いテンションを維持したまま姉さんははしゃぐ。全くこの人は。いつまでも子供のようだ。

「……ところで、今回電話した理由ですが……」

『わかってるよー。紅椿に追加で展開装甲をつけたいんでしょ？お腹と胸にさ』

本当に理解していたようだ。いったいこの人は、どんな世界で生きているのやら。

『篝ちゃんのご事はほとんどなんでもわかるのさっ！だって私は篝ちゃんのお姉ちゃんだからね！』
「凄いですね」

色々な意味で。

『それじゃあすぐそっちにいつちやうから、明後日の四時くらいから三十分くらいは開けといてねー』

「はい、ありがとうございます」

『まったねー！』

ぷつり、と切れた携帯電話に目を落とし、一つ息を吐く。千冬さんに連絡を入れておかねばな。千冬さんには迷惑をかけてしまうが……一夏の小学校のプールの写真1ダースで許してもらえらるだろうか？

姉さんにもありがとうという思いを込めて渡すつもりだったが、それが2セットになったところでそこまで変わらないし……。まあ、何とかしてみせよう。姉さんの手伝いも、もう慣れた。

side 凰 鈴音

「……もしもし、楊管理官でしょうか？ 代表候補生、凰鈴音です」

『代表候補生管理官、楊です。用件をどうぞ』

「現在開発中のキャノンボール・ファスト用高機動パッケージの仕様について、できる限り詳しいスペックデータを要求します。未完成情况であっても、予想値は既に出ていますよね？」

『はい。まず衝撃砲ですが、出力を落とし、近距離用拡散仕様に変

更されていますが、基本的には使えます。増設スラスタは新技術を用いた物で、従来のスラスタとは感覚が違います。事前に慣れしておくように」

「了解しました。……衝撃砲ですが、口径変更は可能ですか？」

「……一応、可能ではありません。しかしそれには相当の集中力が要求され、高速機動中には難易度が高く、狙い通りにいかない可能性が濃厚です」

「了解。実際の最高速度と加速度は？」

「残念ですが、正確な値は出ていません。完成後の調整で多少の変更が効きますが、およそイギリスのブルー・ティアーズの強襲制圧型と同等以上の性能を持ちます」

「わかりました。いつごろ届くことになりますか？」

「……そうですね……今週末というところでしょう」

「了解。それでは」

「はい」

ぷつ、と電子音が鳴って電話が切れる。携帯を数秒眺めて、ぱたりと閉じた。

……いつも、一夏とは仲良く過ごしてきた。

それと同時に、競う時は必ず全力でぶつかり合った。

いつしか一夏はあたしよりずっとずっと強くなって本気を出してはくれなくなったけど、それは私が弱いのが悪い。

だからこそあたしはやれることはみんなやって、いつでも全力でぶつかっていく。

今回こそ、一夏の本気を引きずり出してみせる！

………そうだ。今回はあたしだけじゃないんだから、協力を頼みましょう。

あたしはいま閉じたばかりの携帯とは別の携帯を開き、そこに登録されている番号に一つ一つ電話を掛けていく。たぶん協力はしてくれらると思うけどね……。

お出掛け、待ち合わせ場所

数日前に、シャルと出掛ける約束をした。なんでも、腕時計をくれるとか。

俺としてはあんまり必要だとは思わなかったんだが、どうしてか妙にすすめてくるので一応使ってみることにした。

………シロに計時機能があるっていうのは黙るところ。うん。

そして今はその約束の時間の30分と少し前。なのにシャルはもうそこに居て、その上なんか絡まれている。

………嫌がってるみたいだし、助けに入った方が良いのかね？ 必要無い気がするんだけどさ。

side シャルロット・デュノア

数日前に勇気を出して一夏をデート（これ重要）に誘って、なんとかOKをもらった。

その日からずっと今日が待ち遠しくて、今日のために何日も前から服を選んだりもした。

………まさか、待っている時間がこんなにも嬉しいと思う日が来るなんて、夢にも思わなかった。

なんとなく前髪が気になって、手鏡を使って前髪をチェック。……

………なんか、決まらない気がする。

ちよんちよんと前髪を整えること30秒。なんとか自分で納得できる位置になったのを確認して、手鏡を鞆にしまう。

ちらりと時計を見ると、待ち合わせの時間まであと36分くらい時間があつた。

……うん、ちょっとはしゃぎすぎてたかも。落ち着いて落ち着いて……笑顔の練習でもしようかな。

にこつ、と笑顔を浮かべる。鏡では見えないけど、頬がひきつっていたり眉間に皺がよっていたりはしない、普通の笑顔を浮かべることができた……と思う。

……うん、大丈夫。一夏にちゃんと向けられる顔をしてるはず。変な顔とか言われないはず……大丈夫、大丈夫……。

「ねえねえ、カーノジョっ」

「今日ヒマ？ 今ヒマ？ どっか行こうよ」

……何この人たち？ 何で僕に話しかけてくるの？

……もしかして、ナンパってやつなのかな？ 僕ってそんなに軽そうに見えるのかな……？

「約束がありますから」

「えー？ いいじゃん、いいじゃん。遊びに行こうよ」

「俺、車向こうに駐めてるからさあ。どっかパーっと遠くに行こうよ！ フランス車のいいところいっぱい教えてあげるからさ！」

……寝てるところを邪魔された時の一夏って、もしかしたらこんな気持ちだったのかもね。さっきまですごく幸せな気持ちだったのに、今はすっごく気分が悪い。

もしそうなんだとしたら、叩き起こされた一夏があんなに不機嫌になる理由もわかる。

……だつて今、すつごい機嫌悪いもん。逆鱗に触れられた竜とかつて、きつとこうなるんだね。暴れるのもわかるかなあ……。

僕もできることなら暴りたいけど、一応国家代表候補生で専用機持ちだから、自重しないとね。

「……この地球温暖化で騒がれているご時世に、日本の公道で、よりによって燃費の悪いフランス車ですか……ふうん」

気に入らないから近寄らないでほしいという思いをふんだんに込めた笑顔を浮かべて、それを目の前の人たちに向ける。できればこれで諦めて帰ってほしいんだけどなあ……。

そう思いながら適当にリヴァイヴの新武装を山のように使って、香水の臭いを必要以上にさせている目の前の二人の頭を何十回か爆散させる。

……あの豆腐か何かが詰まってるだろう肩の上にある帽子掛けを、ショットガンの斉射で弾け飛ばすことができたら……きつとすつごくすかつとするんだろつなあ……。

目の前の二人の帽子掛けや案山子の体に、弾丸やらグレネードやらミサイルやらを撃ち込む想像を繰り返すこと62回。一夏との約束の場所はここだし、どうしようかなあ……と思っていると、二人の後ろに一夏が見えた。うん、なんだかいつもより少しだけ大きい一夏も良いね。

……120センチくらいかな？

「一夏！」

「おー、来たぞー」

片手をふりふり僕の方に歩いてくる一夏を見ると、すっごい可愛く見えてしまう。真剣な時はあんなにかっこいいのに、こんなに可愛くもあるなんて反則だよおっ！

僕がそうして一夏の可愛さに悶えていると、目の前の二人は今度は一夏に難癖をつけ始めた。

「ああ？　なんだガキじゃねえか。悪いけど彼女は俺たちとの用事ができちゃったからよ？　向こう行っててくれるか？」

……殺されたいのかな、この二人。一夏に喧嘩を売るだけじゃなく、一夏を馬鹿にして……鈴や箒や織斑先生に聞かれたら、一瞬で首と体がちゃんばされちゃうよ？

僕とセシリアと簪だった場合は銃撃されたりミサイル撃ち込まれたりするから結局死ぬし、五反田支部長に聞かれたら拷問地獄らしいけど。

「……もしかして俺って喧嘩売られてる？」

「おいおい、弱いもの苛めなんてできねえよ。なあ？」

「そうそう。ほら、あっち行った行った」

「……シャル。約束したのか？」

「してないよ。勝手にこの二人が言ってるだけ」

「そ。……ってことなんで、お帰り願えますか？　どこのどなたかも存じませぬが、無理矢理な勧誘は条例違反ですし、ついでにその趣味の悪い香水の臭いがきつすぎて公害になってるんですよ。これ以上頭の悪そうな言葉をしまりの無い口からぼろぼろ溢すのを辞めて、可及的速やかに産業廃棄物処理場と言う名の自宅に帰って荷物を纏めて財産を慈善団体に寄付して縄を一本と衣服だけで富士の樹海からあの世への旅行にでも行ってくださいな」

「うん一夏、否定する気は欠片も無いけど言い過ぎじゃないかな！

？　なんか殺気立つっちゃってるんだけど！？」

「殺気立った産業廃棄物は自分の本性という醜い毒を、汚らわしい口から汚物のような言葉と一緒に痴呆のように垂れ流しながらだっ子のように暴れるしか能がないんだから、それを否定しちゃったら生きる価値も存在する価値も何もかもが無くなるだろ？　そんな残酷なこと俺にはできないよ。俺優しいから」

「優しいの使い方が間違ってると思うんだ！　優しくないよね？　優しいどころかそれと真逆の行為を普通にしちゃってるよね！？」

「俺、間違ったこと言ってる？」

「うん！　だって産業廃棄物にそんな毒を吐くなんていう高度な真似ができるわけ無いじゃないか！　一人で勝手に自滅するか人に迷惑を掛けて一人で自滅するか人に迷惑を掛けるか三択だよ！　今だって人目を気にしないで殴ろうと拳を振り上げてるし！　こんなところで殴ったら確実に現行犯で犯罪者になるっていうのがわかんないからそうなんじゃないの？」

「……………シャル。シャルの方が酷いこと言ってるって」

「本当のことだけど？」

「本当のことばかり言っていると、相手を傷つけてしまうだろ？　どんな愚かで見苦しく醜く汚らしい相手でも、たまには優しい嘘も必要なんだよ」

うん、一夏には言われたくないかな。

お出掛け、優しいスルー術

相手を衆人環視の中でひたすら罵倒し続けてから少し。歯を軋ませ、憎々しいな目を向けながら去っていく二人から免許証をすり、警察に条例違反の罪と言うことで通報し、その男達が捕まったのをゾナハ虫経由で眺めつつ丁寧に無視して、俺とシャルは駅前のショッピングモールを歩いていった。

「それで、どこから回る？」

「え、えっと……じゃあ、あそこ！」

シャルの指差した方向を向いてみる。しっかりと女性用下着売り場が顔を見せていた。

ついでに、ちょうど会計の途中らしい蘭ちゃんも見えたが……ここは優しくスルーしておくところだろうな。

顔を戻すと、自分の指差した所がどこかを理解したらしく、顔を真っ赤にしてから大急ぎで手首から先をぶんぶんぶんと高速で振っていた。

「ち、違うよ！？ これはちよつと間違えちゃっただけであつて、一夏に好みの下着を選んでもらおうとかそんなこと全く無いから！」
「シャル、ここ公共の場だから。声が大きいし、それ以前に凄い悪目立ちしてるから」

はっ、とシャルが気付いて回りを見るが、どうも少しばかり遅かったようだ。周りの人からの奇異の視線が中々痛い。

「……………い……………一夏……………さん……………?」

見つかつちゃったか。まあ、別に問題は無いからいいけど。

「やつほー蘭ちゃん。元気だった?」

「え、えと、はいっ!」

おやおや蘭ちゃんもずいぶん元気だな? 元気なのはいいことだけ
ど。

「ちょうどいいし、紹介しところか。こっちがシャル。フランスの
代表候補生で、いつものように俺はそう呼んでる」

シャルを指して紹介すると、シャルは一步前に出てにつこりと笑っ
た。

「初めまして……………じゃないよね。文化祭でも会ったし……………シャル
ロット・デュノアです。よろしく」

「えつと……………前に二人組みでうちのお店に来て、業火野菜炒めを二
つ頼んでからお兄になにかをもらっていた方ですよ?」

「覚えててくれたんだ?」

「……………正確には、覚えていたんじゃないかって忘れられなかっただけで
すけど」

ああ、何となくわかるような気がする。あの笑顔は忘れようとして
もなかなか忘れられないだろうな。

……………まあ、俺の周りでは中学時代あたりからそれが日常茶飯事だっ
たんだが。

「ん……………まあ、とにかく、よろしくね?」

「はい。よろしく願います。……あ、私は五反田蘭です」
「うん、わかったよ……そういえば、自己紹介はしてなかったね」

そうなんだよな。一緒に働いたのに、なんでか自己紹介はしてなかったんだよな。

まあ、あの時は忙しかったし、しょうがないっちゃしょうがないんだけど。

……ああ、そう言えばキャノンボール・ファストの特別指定席のチケット渡す相手を誰にしようか迷ってたんだけど……丁度いいここで渡しとくか。
弾には鈴から渡してもらおうとして……カズは……どうしようかねえ？

「蘭ちゃん、携帯持ってる？」

「は、はひっ！」

「そう。それはよかった」

使い慣れない携帯を弄って、蘭ちゃんの携帯にチケットデータを送る。

「俺の誕生日と同日にある、キャノンボール・ファストの特別指定席のチケット。いらなかったら誰かにあげるなり転売するなりしていいから」

「いえ見に行きます！絶対！」

なんだか蘭ちゃんは興奮しているようだ。理由は知らないけど、まあ、想像すればなんとなく予想はつくな。

「弾には多分鈴から行くと思うけど、席はランダムだから気にせず

見れると思つよ」

「ありがとうございますっ！」

喜んでくれたなら幸いだかね。

それから十数分後。時計店のディスプレイを眺めながら、俺はのんびり考え事をしていた。

ちなみに、シャルだけではなく蘭ちゃんもここにいる。

どうも蘭ちゃんは今日は丸々空いていたらしく、時間はたっぷりあるし今帰っても暇だから、と俺達に同行していいですかと言ってきた。

まあ、なんとなく理由はわからないでもないが、野暮なことを言う気は無い。

……時計くらいだったらいつでも作ることができるし、シロに時計の機能はあるんだけど……まあ、いいか。これも十分野暮なことにはいるだろうし。

「一夏。気に入ったのあった？」

「ん？ とりあえず、腕時計より懐中時計の方が寝る時にいちいち外す必要がなくて楽そうだな。装飾は無いに等しいくらいシンプルなのがいい」

「……ほんとに一夏は睡眠優先なんだね」

「まあ、俺だし。それにちー姉さんに作ってあげた時も装飾は控え目の懐中時計だったし」

「うん、ツツコミどころが出てきたね。作ってたって、なに？」

「だから一から作ったんだよ。時計」

「どっやってさ!？」

「東姉さんに少し協力してもらって」

ただし材料は千の顔を持つ英雄で、東姉さんの協力はデザインとあつたら便利な機能をあげてもらったくらいだけど。

とりあえずIS用の132ミリ口径銃弾を800m/sで秒間144発撃ち込むのを五時間続けても傷ひとつつかない上、時間のズレがほぼ皆無という時計ができた。

これで心臓の辺りを撃たれても『……ふっ……こいつが私の命を救ってくれたのさ……』ができると東姉さんと適当に盛り上がったリ、デザインをちー姉さん好みのシンプルなのやつにしたり、とても楽しかった。

ちなみに、今でもしっかり使ってくれているのを知っている。

動力は東姉さんに唆されてノリと勢いで作った永久機関。ただし小規模すぎて一度に取り出せるエネルギーは多くないけど。

「まあ気にしない気にしない。胃が荒れるよ?」

「誰のせいだと思って……っ!」

俺のせいじゃないことは確かだな。うん。

「いや……一夏さんのせいだと思いますよ……?」

そんな馬鹿な。

「あっはっは」

「『あっはっは』じゃないよもっ……」

シャルはなんでか頭を抱えてしまった。まるで東姉さんの話を聞い

た時のののちゃんみたいに。

蘭ちゃんに慰められているシャルを見ながら、俺はのんびり懐中時計を選ぶのだった。

……あ、この銀のやつ安いしシンプルだしいいかも。これにしよう。

昼御飯と、プレゼント

時計店でシンプルな銀色の懐中時計を買うと、丁度昼食の時間になつていた。

そこで、適当に近くにあつた雰囲気の良さそうなカフェに入る。…ランチメニューは蟹クリームスパゲッティか。美味そうだしこれでいいか。

「あ、あの……ここって結構高いですよ……?」

「大丈夫。聖徳太子が10人居るから」

「聖徳太子……って古っ!? 今でも使えるんですか!?!」

「使えるぞ? ただ、オークションとかで売った方が得だし、諭吉も25人くらい居るからそっち使うけど」

「なんでそんなに持つてるんですか!?!」

「色々あつて、会社を一つ所有してるから」

「それ僕も初耳なんだけど!?!」

あれ、言つてなかつたっけ?

「まあまあ、いいじゃないか。ほら入るよ」

「え、ちよ、ええええええええ!?!」

あつはつは。シャルはからかうと楽しいなあ。

「あ、ところで二人つてなにかアレルギーとかあつたっけ?」

「え? あ、私は何もないです」

「僕も大丈夫だけど……急にどうしたの?」

「何頼んでいいのかわからなかったから、とりあえず絶対アウトな

奴は聞いといたってだけ」

まあ、なにもないなら平気だろ。

と、言うことで適当に蟹クリームスパゲッティを含むランチメニューを食べている。たまにはES学園以外の食事も良いもんだ。高いけど。

「……一夏つてさ……こうやって外食するのに慣れてるの？」

なんでかシャルからそんな言葉を頂いた。別にそんなことはないんだが、確かに手慣れてるようには見えなかもな。

「別に慣れてる訳じゃないな。外食するより家で適当に作って食って寝るか、食わずに寝る方が多かったし」

「食べないのはどうかと思うんだけど……」

「今は食べてるから大丈夫」

もきゅもきゅ……ごっくん、と飲み込んだところで、シャルが紙ナプキンを一枚取った。

「一夏。こっち向いて」

「ん？」

シャルの言葉に従ってシャルの方に向くと、今取ったばかりの紙ナプキンで口許をきゅっと拭き取られた。

「ソースついてたよ」

「あ、そう？　ありがとう」
「どういたしまして」

そう言つてシャルはまたスパゲッティを巻き取る作業に戻る。なんか今のつて、母親の行動そっくりだったな。お母さんつて呼んでもても良いだろうか？

「駄目だよ」

駄目だそうだ。ちよつと残念。

「あ……あの……」

なんでかちらちらとシャルを見ながら、蘭ちゃんが話しかけてきた。

……ん……確かあの時もこんな感じだったよな……。

「ん？　どしたの？」

「い、一夏さんとシャルロットさんつて、付き合ってるんですか！？」

「友達付き合いつて意味だったら付き合ってるな。そうじゃなかったらこうして一緒に出掛けるとかしないで寮で寝てると思うし」

やっぱりそうだった。前にののちゃんと祭りで会った時にも、こんな感じでののちゃんを見ながら聞いてきたんだっけ。

ほんとに一月くらい前の話なのに、なんでかかなり昔に感じる。まあ、色々あつて密度が高い生活を送ってきてるからな。当然と言えば当然のことか。

俺の言葉を聞いて、蘭ちゃんはほつと息を吐く。流石にこれを『なんだ？』とは聞かない。原作一夏じゃあるまいし、このくらいのこ

とはわかる。

……まあ、なんでもいいか。俺は別に独り身でもいいし、寝れればおおよそOKだ。

「……もう。またほつぺについてるよ？」

「んむ……ごめん。ありがとう」

昼御飯も終わり、買い物も終わり、後は帰るだけになったので蘭ちゃんを送っていくことにした。女性上位の時代でも……いや、女性上位の時代だからこそ、危ない時は危ないからな。

「あの……ありがとうございますっ！」

「おう。弾にもよろしく言っというて」

「は、はい」

のんびりと笑いながら蘭ちゃんを見ている俺に対して、蘭ちゃんはずいぶん落ち着きが無さそうだ。

まあ、理由は何となくわかるけども。

「そ、それじゃあ、その、また誕生日会で」

「そうだな。……大会の方も、まあ、そこそこでいいから応援してくれよな」

「それはもう！頑張ってくださいね！」

蘭ちゃんは元気だね。

……あ、そうだ、忘れてた。キャノンボール・ファストでなん

か起きるんだった。

原作では平気だったけど、この世界は原作と似ているだけの別世界だから保証は無い。一応保険は懸けとくべきかな。

「蘭ちゃん、利き手どっち？」

「へ？ え、あ、み、右手……ですけど……」

右手ね。じゃあ形は腕輪でいいか。

蘭ちゃんの右手を取って、手の大きさやら手首の周径を確認する。そしてそのデータを元に、千の顔を持つ英雄で腕輪を作る。勿論ただの腕輪ではない。

顔を真つ赤にした蘭ちゃんの手に、懐で作った赤銅色の腕輪を嵌める。先に言っておくと、ISの待機形態ではない。

「あ……あの……」

「お守り。なんか嫌な予感がするからほんとは来ないのが一番なんだろうけど、来たいでしょ？」

何がなんだかわからないという顔をしながらも、こくこくと頷く蘭ちゃん。可愛い可愛い。

「だからお守り。肌身離さず持つてると、もしかしたらいいことがあるかもよ？」

まあ、確実にあるんだけど。10トントラックに跳ねられても無傷でいられるくらいのシールドっていつご利益が。

もう一度。ISじゃないってことを明記しておく。

「あ……ありがとうございますっ!」

「気にすんなって。……そうそう、弾に『来るならアレ付けて来い』って言っというてね」

「アレ？ アレって……」

「秘密」

その方が面白いしね。

強いて言うなら、ののちゃんに渡した物に似ているとだけ言っておく。

「じゃあ、またね。伝言よろしくー」

ひらひらと手を振りながら、俺はIS学園に戻る。弾ならアレがあれば大体の事はなんとかできるはずだし、安心しておこう。

「……えっと……どんな予感がしたの？」

シャルが興味深げに聞いてくる。俺はそれにとっこりとした笑顔で、簡単に返した。

「ちよつとしたテロが起きる気がしただけ」

「駄目だよねそれ!？」

シャルに驚級のツッコミを受けた。

大暴露、大暴走

蘭ちゃんと別れてIS学園への帰路につく。その道中で、なんでかシャルはご立腹の様子。

ちよっと蘭ちゃんに似合いそうな赤い腕輪をプレゼントしたただけなのに、なんで拗ねてんだらうな？

「……拗ねてなんてない」

「拗ねてるように見える」

「拗ねてないってば」

拗ねてないらしい。というか似たようなことを前にもやったことがある気がする。

まあ、やったことがあるうがなかるうが別にいいけど。

「……こんなに正直じゃないシャルの分は、懐にしまっちゃおうね」

「えっ!?!」

ちなみにシャルの分は金色。大した特殊能力は無いけど、なんでか異様に硬い。

まあ、蘭ちゃんにあげたやつも大した能力じゃないんだけどさ。

「ほら、手を出して」

「う、うん!」

さっきまでとは違ってかわって嬉しそうな表情で俺に腕を出すシャル。やっぱり笑顔の方が可愛いと思うんだけどね。

そう思いながらシャルの右腕に腕輪を通す。きつくなく緩くなく、抜こうとしなければ抜けないようなちょうどいいと思われる大きさの腕輪を作ったつもりだったんだけど……ちょうどよかったらしい。

「わあ……わあ……!!」

シャルはかなり嬉しそうで、自分の右腕の腕輪をキラキラとした目で見つめている。

「これ、ほんとに貰っちゃっていいの!？」

「いいよいいよ。材料費なんてかかってないようなもんだし」

「へ?」

なんでかシャルが妙な声をあげた。なんでだろうな？

きりきりきり……となにかが軋れるような音をさせながら、シャルは俺に視線を向ける。

「……もしかして……一夏が作ったの?」

「そうだけど?」

「デザインも?」

「シンプルなのしかできないけどな」

「……ほんとに?」

「おっ」

シャルはどうしてかそんなことを聞いてくる。弾とか束姉さんとかだったらもつと凄いのを作れるし、大したことは無いと思うんだけどな。

だってあの二人はこの世界原産の公式チート。そのくらいの事はブ

ランチ前のはず。ちなみにブランチってのは、およそ10時くらいに食べる朝昼兼用の食事のことらしい。よくは知らない。

「……一夏って……凄いな」

「ありがとう」

「……ところで、これの材料ってどうしたの？」

千の顔を持つ英雄で作った……とは言えないので、ちょっと嘘をつく。

「さっき言った会社の給料的な物で買った」

「そうなんだ？　へー……一夏の会社の名前ってなに？」

「デュノア」

「……………へ？」

さっきより間の抜けた『へ？』を頂きました。

「シャルの目の前でなんとハッキングしたことがあったろ？　あのときにちよちよと弄って俺の物ってことにしたんだよ。……………言っただけじゃあないよ？」

「一切聞いてないよ！」

おお、驚いた。

「まあ、やり過ぎたかもとは思っただけど、後々のことを考えたらこの方が後腐れも面倒もなくていいなって。ちなみに、シャルに最近よく送られてくる非常識な装備だけど、あれも俺の指示」

「ええっ！？　ほ、ほんとに！？」

「ついでに、一部の部品は俺が命じて作らせた」

「……まあ……？」

後々のことを考えて云々つてところと、武装を送らせたつてところ以外は嘘だけだな。

実際は千の顔を持つ英雄で作った部品を直接組み込んでから開発命令なんて出してないし、実はやりすぎだとも思ってた。むしろもう少しやつとけばよかったと思ってる。

「非常識なのは仕方ないだろ俺なんだし。まあ、これでシャルはデユノアを自分から辞めない限り首になることもないし、卒業後も会社の面倒事に混ざらなくても良くなつたわけだ」

「そ……そうなんだけど………なんと言うか………」

「殺るときは徹底的にと言うのがちー姉さんと束姉さんから教わつたことの共通項だからな。ここは守つとかないと」

「殺るの!？」

「シャルの父親は人間的にはもう死んでるぞ？ ちよつと洗脳して自分の意思で行動してると思い込んだまま生活してるし」

「知らない所でなんかすごいことになってた!？ 一夏ってそんなことまでできるの!？」

千の顔を持つ英雄をしっかりと使いこなせれば楽勝だ。

使いこなせるようになるまでがかなり大変なんだろうけど、その辺はチート凄いと云つておこうか。

「まあ、鈴や弾が俺への愛で物理法則を越えるのと同じような物だよ。シャルのことは好きだし」

「ふえっ!？」

なんだかさつきからシャルは驚いてばっかりだな。ビックリした顔も面白いから別にいいけど。

「さて、それじゃあそろそろ歩かない？　ずっとバス停前じゃあ目立つし」

「ちょ、言いたいことだけ言ってすぐに帰るって……一夏あっ!？」
「あっはっは。詳しい説明を聞きたかったら寮の部屋に入る前に捕まえてごらん」

「一夏の本気に追い付くにはリヴァイヴ使わなくっちゃいけないよ
うな気がするんだけど……」

それは確実に気のせい。俺を捕まえるならシロの最速状態を使い潰すつもりで来ないと可能性すら無くなると思うぞ？

つまり、リヴァイヴじゃあ無理だと思う。

「いや、いくら一夏でもそれは……」

「ちー姉さん」

「うんなんか納得できた。そうだね、一夏だもんね。織斑先生の弟
さんで、世界一理不尽で常識はずれな一夏だもんね」

「失礼な。一番の常識はずれは束姉さんだ」

「……篠ノ之博士もかなり常識はずれな人だとは思っけど、一夏も
一夏で相当常識はずれな人間だと思っただけど……」

細かいことを気にしすぎると禿げるよ。

「禿げないよっ!」

しゅたたたた……と怒ったシャルから逃げる。怒ったシャルは恐い
んだ。

まあ、鈴や弾やちー姉さんの怒った時に比べれば大したことさな
いかな。

怒ったちー姉さんの恐さを完全再現できたら、それ以上に怖いもの
は無さそうだけど。

……引き合いに出すのが間違いか。

久し振り、休息时间

学園祭という面倒極まる行事を乗り越え、ついでにエムさんをからかい倒し、キャノンボール・ファストまでは時間があり、それでいて機体調整も（今回は完全に自力で）終わらせたところで俺は寝ようとしていた。

ちなみに、今回自力で機体調整をした理由は、かんちゃん達に手を抜かないで欲しいと言われたからだったりする。

情報を渡さないように自分で調整して、機材は千の顔を持つ英雄で作り、場所は武装な錬金の避難壕であるアンダーグラウンドサーチライトを使って用意した。

見様見真似と束姉さんのテレビ電話講義のお陰であまり時間はかからなかったけれど、かなり疲れた。

まあ、それも終わったし後は寝ようと着替えを始める。最近ようやく小さくなるのが止まったので、その体に慣れようとしているところだ。

制服の上着を脱いで、ハンガーにかけて皺を伸ばす。ちー姉さんの弟がしわしわの制服を着ていたなんて、ちよつとばかり恥ずかしくてできやしない。

まあ、実際に皺になったとしても二秒で伸ばせるんだけど。

そしてワイシャツを脱いで別のハンガーにかけて、寝巻き用のだぶだぶなワイシャツを着る。ボタンは真ん中あたりにあるのを一つ二つつけて、それで終わり。

歯磨きも終わってるし、ズボンを脱いで

「一夏？ 昼御飯……」

「……あ、鈴」

急に入ってきた鈴に、少しばかり驚いた。こういうのは普通立場を逆にしてやるもんじゃないのか？

そう思いつつも俺はベルトを外したズボンをそのまま脱いで、さつさとハンガーにかける。鈴はそんな俺をじっと見つめているが、なんでか動こうとも話し始めようともしない。

「……一緒に寝る？」

「くぶはあっ!?!」

俺がそう聞くと、鈴は急に真つ赤な液体を鼻から噴き出して倒れてしまった。

仕方がないので鈴の顔を綺麗にしてから布団に運び込み、そのまま抱き締めて目を閉じる。

朝になったらもっとヤバいことになってそうな気がしたが、完全に気のせいと言っことにしておこう。

気のせいじゃなかった。と言うか、なんか予想以上に酷いことになった。

具体的に言うと、なぜかそこら中に女物の服が散乱している。それも、すごく見覚えのあるやつが。

それから俺の隣で寝ているのが鈴一人からちー姉さんとラルちゃんの二人になっていた。鈴はベッドの近くの床で簀巻きになっていた。そこに折り重なるようにのちゃんとシャルとセシリーが倒れてい

て、一様に苦しそうな呻き声を

「あ……あはあ……」

……訂正。約一名を除いて苦しそうな呻き声をあげていた。折り重なっているから結構重いんだろうな。

………つてののちゃん達を簀巻きにしてるのって俺の明日の布団のシート（敷き布団、掛け布団、マットレス用）じゃん。千の顔を持つ英雄で出したやつ。

明日のシートは……まあ、明日また出せばいいか。……やれやれ、仕方無いなあ。

ちー姉さんを抱き締めて、二度寝の体勢に入る。もう夕方だし、昼も食べてないけど眠いのだから仕方無い。

side 更識 簪

……こつそりと一夏の部屋に入り込んで、そつと扉と鍵を閉める。

一夏を起こすわけにはいかないから、慎重に慎重に……。

足音を立てないように一夏が寝ているはずの布団に近付いて……ふと違和感を見付けて立ち止まり、そのまま違和感の現況である足下に視線を下ろす。

初めは暗くてよく見えなかったけど、少ししてからそれが人影だとわかった。あれは……本部長達だ。

しかし、本部長達が縛られているにしては一夏の布団の膨らみが大

きいことに気付いたところで、さらに慎重に近付く。

そして一夏の寝顔が見えたときに、私は嬉しくてつい笑ってしまっ
た。

それから持参した毛布を羽織って、一夏の眠っているベッドの端に
頭を預ける。

ディスプレイはケースに入れてしまっており、大丈夫と思って、
私はそのまま目を閉じる。

……一夏の臭いだけじゃなくて、誰か他の人の臭いもするけど、そ
んなのはいつものことだから気にならない。すんすんと鼻を鳴らし
ながら、一夏のベッドに顔を埋める。

……本当は、男子の部屋に泊まるのはよくない事なんだけど……こ
れはお泊まりじゃなくて、休憩だから大丈夫。休憩しているとときに寝
ちやうことって、よくあるよね？

「あるある〜……………」

「……………あるよね〜?」

……………あれ? 今一夏の声が聞こえたような気が……………。

……………うん。きつと気のせいだよな。

高速機動、実は巡航速度

「はい、それでは皆さん。今日は高速機動についての授業をしますよー」

なんだか久し振りに聞いた気がする真耶先生の声が第六アリーナに響き渡る。そして、なんでかその実演は俺とセシリーがやることになった。

セシリーは高速機動型になっている。ただし、腰のあたりにくっついているビットの砲門は封印されていない。これなら加速しながら撃つことが簡単にできそうだ。

「その分、多少最高速度は落ちますが……妨害能力は数段以上に伸びますわ」

「わー怖い。お手柔らかに」

ちなみに俺はほぼ通常状態。ただし、いつもよりスラスターに振る割合が大きいけど。

右手に振る分は全部スラスターに行ってるし、左手の方も二割くらいはスラスターに行ってる。一人で調整頑張ってみた結果がこれだなかなかだと思う。

ちなみにこの状態でも空間固定は使えるが、使うとエネルギーが削られるからやる気はない。

左手の方もあんまり使う気がないのに、空間固定みたいな燃費の悪い物を使う気にはなれないって。

高速機動補助バイザーを起動して、空中に浮き上がる。……なんと
言うか、あまりにも鮮やかに見えすぎて気持ち悪い。

『慣れないと酔いますわよ。お気をつけて』
「ありがとう」

まあ、気持ち悪いけど酔いはしなさそうだ。気持ち悪いけど。

セシリーが俺の隣に浮き上がり、にっこりと笑う。さてと。もうすぐスタートだな。

「準備はできましたね？ それでは……3・2・1・ゴー！」

真耶先生の合図と同時に、キュンツ！と風を切って加速する。最高速はまだ出さない。そして今回は妨害もなし。授業だしね。

いつもより少しだけ気を使ってカーブを曲がり、速度を上げたり落としたりと色々確かめながら塔を周回する。

……うん、まあ、大体感覚は掴めたな。最高速はまだ出してないし、最後の切り札っぽい特殊装備の三つ目は使ってないけど、多分大丈夫。

……できれば永遠に使う機会が来なければいいんだけど……。
………これ、もしかしてフラグか？ 嫌だねえ。

『流石ですわね一夏さん』

なんでかセシリーに誉められた。しかもセシリーはいつの間にか隣に並んでいる。ちょっと性能を確かめるのに時間を使いすぎたか？ ……それと、セシリーの技量を上方修正しておく必要があるそうだな。鈴とシャルとののちゃんとラルちゃんの方も。

代表候補生（約一名違うけど）の技量は甘くは見れないと。

「まあ、ありがと。どうせだし、一緒に行く？」
『是非！』

嬉しそうに頷かれたので、セシリーと並んで塔の周回をする。たまにはゆっくり飛ぶのもいいもんだ。

いつもISを使う時は急ぐ時ばかりだからな。

戻ってきてから俺は少しだけ調節をする。よく考えたら左手では衝撃砲ではなくグレネードランチャーでも持てばいいので全面的にカツトし、スラスターに回すことに。

原作だと既に二次移行していて、荷電粒子砲なんて物を装備していたが、シロには今のところ移行する気配は無いからな。こうして遠距離武器を使わないと遠距離攻撃が気弾か居合拳モドキか剣を投げるくらいしかないからな。

気弾は流石に不味いし、居合拳は鞘の代わりのポケットが無いから不可能。あつてもやらないけど。そして剣を投げるのは、人前のIS戦では却下。

まあ、銃とかミサイルとかを出せるから別にいいんだけど。

ちなみに、ののちゃんは絢爛舞踏と展開装甲をフルに使っての仮想高機動体。無尽蔵に近いエネルギーを利用しての高速機動状態での瞬時加速は恐ろしい物があると予想できる。

…… ああ、怖い。轢かれたらどうしよう。

…… 面倒臭いが作戦を考えておくべきだな。それも、早急に。

とりあえず、先制して何かしらのことをしてやれば出鼻はくじけるよな。

そしてキャノンボール・ファストはレースなんだから、先にゴールした方がいい。

……あ、狡いけど有効そうな手を考えた。これを成功させれば少しは時間稼ぎにはなるだろう。

勘のいい鈴と、動体視力のいいラルちゃんには効くかどうかかわからないけど、やらないよりはマシなはず。

………すつごい批難されそうな事だけど、禁止されてないからルールのには大丈夫。

人道的には………まあ、問題ない………と思う。

………本番は頑張ろうかね。そしてその後、俺は自分でも呆れるくらい寝るんだ………。

弾丸よりも、なお速く

キャノンボール・ファスト当日。会場は大入り満員で、空には花火が上がっている。

弾丸よりも速いもの、と言われると、どうしても俺は『黒のヴィルマの流星』が出てきてしまう。かっこいい死に方だったけど、俺は死ぬ時は今度こそ布団の上でのんびり眠るように死にたいね。

……あ、弾と蘭ちゃん発見。チケットの都合で少し離れてるけど、何かあつたらすぐに合流できるくらいの距離だな。よかったよかった。

弾には俺のせいだなにかと迷惑をかけることになるだろうからと、IS学園に入学が決まった時に色々渡してあるからそこまで心配はしてないけど、蘭ちゃんにはあんまり渡せてないから心配だ。

鈴に言ったら、弾のことは心配するだけ無駄だと言っていたし、蘭ちゃんも弾が守るだろうから多分大丈夫だと言っていた。そこそこ安心できた。

……さてと。俺は俺で頑張るか。卑怯な手も反則にならない範囲で使う予定だし、ある程度インヒューレントスキルの方のISも使うつもりだし。

……解りづらいから、インフィニット・ストラトスの方のISはIS、インヒューレントスキルの方のISは【IS】と表記することにしようか。

シルバーカーテンで空中に浮かした金属塊を不可視にしたり、金属塊の近くをすり抜けようとしたところをランブルデトネイターで爆破したり、レイ・ストームで拘束光線と破壊光線の撃ち分けをした

り、ディープダイバーを使って実弾系統器と実体系近接武器の無効化をしながら飛ぶとか……使い道はいくらでもある。

……多分、ディープダイバーは使わないけど。反則過ぎるから。

「一夏。もうすぐ出番だし、準備しといた方がいいわよ?」

「ん? そう? わかった」

鈴に呼ばれて俺はピットの中に向かって歩き出す。

その途中でピタリと止まり、くるりと振り返る。

視線の先にはおめかしした蘭ちゃんと、色々装備している弾の姿があり、二人とも興味深げにレースの行く末を見つめている。

……俺の日常は、沢山の欠片から出来ている。その欠片の中でも取り分け大きいものが、ちー姉さんと弾だ。

最近ではのちゃんや鈴、セシリーにシャルにラルちゃんにかんちやんに蘭ちゃんも中々大きくなってきているが、やっぱりこの二人の存在が大きい。

俺の日常は、欠片ひとつの形が変わっても元が同じなら変わらず動くが、欠片がさらに欠けては途端に回らなくなってしまう。

……だから、できるだけ護らないとな。

俺は全身を被う形のISスーツ（の形をしているクロ）に身を包み、視線を前に戻して歩き出す。

『……よろしく、たっちゃん。今度かんちゃんも一緒に昼でも食べ

』

『任されたわ!』

嬉々として答えを返すたっちゃんには視線を向けず、俺はぽっかりと開いているピットの入り口に歩を進めた。

ピットに到着した俺は、ゾナハ虫を使って二年生のレースを見物している。

専用機を持っている二人は参加していないから訓練機しかないが、それでも技術は一年平均と比べたら段違いだ。

特にイギリス代表候補のサラって選手が凄い。セシリー曰く専用機は持ってないらしいが、素人目にも相当なもんだと思う。

……とは言え、戦闘中はどんな手を使ってもいいんだったら負ける気はしないけど。

「……終わつたようだな」

ののちゃんがそう呟いた。確かにその時終わっていたし、歓声のピークがそこだったことを考えれば大体の予想はつけられるだろうけど、やっぱりののちゃんの気配探知能力は凄まじいものがある。

「……それじゃあ、そろそろあたし達の出番ね。……一夏。負けないわよ?」

「もちろん、わたくしも全力を尽くしますわ」

「ふむ、一夏。一番の障害はお前だ。全力をもってして勝ちに行くから、覚悟している」

「……負けない!」

「あははは……みんなやる気満々だね。僕もそうだけども」

皆が皆俺に意思表示をかけてくる。のちゃんには少し前に貰った……こっちも手を抜く気は無いから、安心してくれていいよ？

「そうか。ならば良い」

全員がISを展開する。異様なくらいに速度を求められたISが、その姿を見せる。

鈴とセシリーとラルちゃんは原作とあまり変わっていないはず。ただ、細かい仕様の変更はあるだろうから、注意はしておく。

のちゃんは胸部・腹部・腰部に追加の展開装甲が取り付けられ、さらに器用な行動がとれるようになってる。

シャルは会社から送られてきた新型の増設スラスターを両肩に二つ、腰の両脇に二つ、背中に一つの系五つ配置している。これも当然、千の顔を持つ英雄を使っているため壊れにくい。

そしてかんちゃんだが、どこからか大型のスラスターを持ってきて、背中と両肩に三基取り付けている。これだけあれば十分な加速と速度が得られるだろう。

俺の仕様は前に言った通り、特殊武装を二つとも封印してスラスターに全振り。さらに雪片も零落白夜を封印した状態で受けることを主体に使う。

……攻撃は、作戦が上手く行けばしなくて済むからあんまり考えていない。上手くいかなかったら罫を張るし、ジェノサイドサーカスを使ったミサイル弾幕ならいつでもできる。

「みなさん、準備は良いですか？ スタートポイントまで移動

しますよー」

真耶先生のマーカー誘導に従い、スタート位置につく。俺は七人いる選手の真ん中に並んでいる。

『それでは皆さん、一年生の専用機持ち組のレースを開始いたします！』

大きなアナウンスが会場に響き、観客からの歓声がさらに大きくなった。

しかし、カウントが始まる段階になるとその声が一斉に小さくなる。

シグナルランプが点灯し、スタートの時間が近づいてくる。

三色のランプから青が消え、黄色が消え………赤が消えると同時に、弾丸より速いレースが始まった。

一周目、卑怯戦法

side 凰 鈴音

開始の合図と共にあたし達は一気に加速した。

ピンッ！

「オフッ!?!」

「ゴフッ!?!」

「かはっ!?!」

その直後にあたしのお腹から腰にかけてのあたりがぎゅっと締め付けられて急制動がかかり、がくと手足が前方に投げ出されるような形になって止まった。

周りを見てみると、あたし以外も同じように急制動がかけられたみたいでその場に止まっていた。

よくよく見てみると、あたしを含んだ全員の体には、薄いくせに強靱な細布のような物が三本巻き付けられていて、それが後ろで固定されていたからシートベルトをつけている時の事故のようになってしまったらしい。

全員がそれを確認すると同時に、背後で轟音が響く。

全員がそっちに振り向く。その先では、一夏が太い釘のようなものを地面に打ち込んでいるようだった……た？

……もう一度よく見てみると、あたし達を捕まえている細布は釘と

一緒に地面に埋め込まれていて……………。

呆然としているあたし達の横をすり抜けて、一夏が先頭に躍り出る。それからあたし達の方を向いて、にっこり笑った。

「ごめんね？」

それだけ言い残して、一夏は背中を向けて飛び去っていった。

会場全体が静寂に包まれて

い……

「……………一夏ああああああつ！！！！」「……………」

あたし達は爆発した。

「はあああつ！！」

箒は全身から出る攻性エネルギーの刃でその細布を切り刻んで脱出し、

「ええいつ！！」

シャルロットは新装備らしいナイフで細布を切り払った。

ラウラはビームエッジで細布を焼き切り、セシリアも同じように凝縮レーザーで焼き切る。

あたしは圧縮集束衝撃砲で力尽くでぶち破り、簪はなんと一部ずつISを解除することですり抜けた。

それぞれの方法で一夏の拘束を抜け出したあたし達は、一夏を追うために再度加速した。

バンッ！

「ブッ!？」

「へブッ!？」

そして、すぐに見えない壁にぶち当たった。

そこからのあたし達の行動は早かった。

まずあたしが衝撃砲で壁の一部に罅を入れ、ラウラがレールカノンでその穴を広げる。

その穴には筭がすぐに飛び込み、次の壁にエネルギーの刃を突き立ててすぐに退散。そしてシャルロットがグレネードで爆破し、簪が次の壁に薙刀を突き刺して下がり、あたしの衝撃砲で風穴を開ける。

透明な壁は三つで終わりらしく、後はひたすら加速を繰り返す。

どうやら一夏はエネルギーの節約を考えているらしく、一番燃費の良い状態で飛び続けているのがわかる。

……あれなら、ギリギリだけど追い付ける！

衝撃砲の口径をすばめ、飛距離を伸ばして一夏の後ろ姿に撃ち込む。セシリアとシャルロットも同じように攻撃するけれど、くるりと振り返った一夏の雪片に叩き落とされてしまった。

「……一夏さあ……今、レーザー斬らなかった？」

「……グレネードも斬っていらしましたわね」

「……衝撃も叩き落としてたよね。剣で」

……やっぱり、一夏は千冬さんの弟ね。理不尽だわ。
まあ、あたし達も人のことは言えないんだらうけど。

「次々行くわよ！」

「言われずとも！」

衝撃砲とB Tレーザーの雨を、衝撃は避け、レーザーは当たる前に叩き落しながら一夏は飛ぶ。じりじりと距離は縮まっているけど、このままだとちょっと足りないかも……。

「私も……やる！」

簪が突然二丁の荷電粒子砲を展開し、高速で連射する。あたしの衝撃砲とセシリアのレーザー、そして簪の荷電粒子砲の連射に、一夏は避けることを最優先にしているらしくどんどんと距離が縮まっていく。

……あれ？

「……なあ、私はあまり勘には頼らない方なのだが……」

あたしがなんとなく嫌な予感を感じたのと時を同じくして、ラウラがポツリと呟く。

それはあたし達にはなんとか聞こえるくらいの声だったため、全員が僅かにラウラに意識を向ける。

「……なぜか、凄まじく嫌な予感がするのだが」

「奇遇だな。お前もか、ラウラ」

箒も同じように眩くけれど、その理由がわからない。
だって、一夏のISに……シロに遠距離武器は……

そこまで思い出したところで、恐らくあたし達全員の顔がひきつった。

理由？　ここにきてみればわかると思うわよ？

だって、今まさにあたし達に向かって五百は軽く越えていると思われるミサイル発射口が開いているんだもの。

「……ああ、なるほど。私達が嫌な予感を感じるわけだ」

「ああ。反則レベルの勘を持つ鈴ならともかく、これを直接食らったのは私達だけだからな」

箒とラウラはなんだか虚ろな目をして言葉を交わしているけれど、別に諦めているわけではないらしい。

あの時の箒は訓練機だったし、習熟もいまいちだったけれど……今の箒は違うものね。

あたし達は、雨のように降り注ぐミサイルに向かって突貫していく。勿論、防ぎきれただけの自信はある。

「ノルマは一人百発！できる限り潰すわよ！」

あたしは叫びながら衝撃砲でミサイルを落とす。隣ではセシリアがライフルから飛び出したレーザーを束ねて何発も撃ち抜いていた。箒はまた全身の展開装甲からエネルギーを放出して今度は砲撃し、シャルロットは両手に大口径のショットガンを束ねて持ち、それでミサイルを落としている。

簪は相変わらず……と思ったら、一番効率よく数を落とせる所を正確に狙って荷電粒子砲で砲撃。誘爆で結構すごいことになっている。ラウラはなんと、ワイヤーブレードをぶん回して大量に叩き落としている。あれ便利ね。

すべてのミサイルを叩き落としたけれど、その間に一夏は先に先にと進んでしまっている。

一気に追い付きたい所だけど、確かあれの後には馬鹿みたいな量のガトリング砲が待ってるのよね。

最初の二つ以来ダメージは受けてないけど、ちょっとあの威力のあの密度の弾幕に飛び込んでいくのは遠慮したい。

「……セシリア。ここから一夏だけを狙い撃てない？」

「……避けられたり打ち緒とされたりということを度外視すれば、可能ですわ」

「じゃあ、やって」

そのくらいやらなきゃ勝てないと理解したセシリアは、ブルー・ピアスとかいうライフルで一夏に狙いをつける。

そしてその直後に一夏を赤い光条が襲い、一夏が身をくねらせるようにしてそれを避けた。

セシリアのライフルからは、まだなにも発射されていなかったのに。

あたし達はすぐに一夏に追い付き、そして一夏に砲撃をかました闘入者に視線を向ける。

「……サイレント・ゼフィルス……!!」

それは、少し前に亡国企業のISパイロットをあたし達の攻撃から
連れ去った機体だった。

……とりあえず、リベンジと行くっかしら？

闖入者、静かな……何？

突然現れていきなり俺に狙撃してきた相手を見上げる。骨格とかが中学生ぐらいのちー姉さんに瓜二つだ。

あと、顎の形とかそんなのもそっくり。なに？　ちー姉さんのクローンか何か？

……まあ、そんなことは正直どうでも良いんだけど。

視線を動かさずに客席を見る。弾と蘭ちゃんは………よし見付けた。蘭ちゃんはたっちゃんに連れられて安全地帯に行つて、弾はそれを確認して追っかけてるみたい。

……これなら、暴れても被害は弾と蘭ちゃんの方にはいかないだろう。

すぐに何が起きたのかを察したらしい鈴達が俺の近くに集結する。あんだけ足止めしといたのに、たった数秒分しか離せなかったか……予想以上に速いな。

「……で、なんの用だ？　いきなり入ってきていきなり銃撃してくるなんて、知り合いのヤの付く自由業の鉄砲玉みたいだぞ？」

「こんなときにまで悪口は欠かさないの！？　もう少しシリアスに」

そんなことを言った瞬間、目の前のIS操縦者はまた狙撃。しかも今回はビットも使った七発同時攻撃だ。

とりあえず危ないから全弾雪片式型で叩き落とす。強度も耐熱性もかなりのもんだから十分使える。

ただ、相手の顔は少しひきつったように見えただけ。

「……そりゃあひきつりもするわよ。レーザーを剣で打ち落とすってどんな悪夢よ」

「現実と言つ名前覚めない悪夢ではないか？」

「ああ、それなら納得ね」

「納得しちやダメだよ！？　なんでそんなに落ち着いてるの！？　さっきから思ってたけどおかしいでしょいくらなんでも！？　なんでレーザーを、それも一発だけじゃなくて七発全部打ち落とせるのさ！？　どんな反射神経と動体視力と機体性能さ！？」

「束姉さん謹製だから仕方無い」

「うむ、姉さん謹製だからな。仕方あるまい」

「きつとクロックアップとか体感時間をゆっくりにしたりとかもできるに違いないわね」

鈴はそんなことを言っているが、流石に時間操作は難しい。カタログスペックには載ってないし、きつと無理。

……束姉さんだったら、隠し技とかそんなのでできるようにしてさうだけだ。

とりあえずそんな思考はどっかそこらへんに置いて、ちょびつとイラついてるしさつさと追い返そう。

時間の無駄だし、これが終わればさつさと寝られるだろうし。

そう思うと、今度はこっちから青い光条が二本飛び、カカツと折れ曲がって目の前のISに襲いかかる。セシリーはどうやら更に一つ武装を展開したようで、両手に一つずつ長いライフルを持っている。一つはさっきから持っていた【ブルー・ピラス】。そしてもう一つは、普段から装備している【スターライトmk？】だった。

……ところで、俺はつい最近までこのスターライトmk？の【mk

？】の所を、『マジで空気読めない三号機』だと思ってたんだが……
……どうやら違つらしい。

「全然違つから！」

シャルのツツコミが入る。一番気が抜けてるのはシャルじゃないかと思つたんだが、シャルはシャルで88口径ガトリング砲を構え、臨戦態勢を整えていた。

セシリーのレーザーが当たる直前、サイレント・ゼフィルスは自分の側に控えさせていたビットからシールド状のレーザーの幕を張つた。ここから見ていると、スプーンの裏に水道の蛇口から水をかけた時の水の膜みたいに見える。赤いけど。

「……やはりシールドビットを……。鈴さん、篝さん、ラウラさん、シャルロットさん、簪さん。多角攻撃を三組にわかれて波状攻撃しますわよ」

「……俺は？」

「逃走防止のための最後の一枚をお願いしますわ。わたくし達の中で最も機動力があるのは一夏さんなのでから」

……まあ、早く終わるんだつたらそれでいいけどさ。

セシリーの腰から四本の光条が伸び、サイレント・ゼフィルスに向かって進路を変える。

同時に鈴が下から衝撃砲を叩き込み、片側の衝撃砲の進路をねじ曲げて背後から襲わせる。

その攻撃を、サイレント・ゼフィルスはシールドビットで受け止める。うまく流すように受け止めているため、サイレント・ゼフィル

スのエネルギーはあまり減ってはいないだろう。

そこにシャルからの銃弾の雨が降り注ぐ。88ミリ弾頭は流石に堪えるらしく、凄まじい回避能力でシャルの弾丸を避け続けている。当然避けきれずに被弾はしているが、直撃だけは綺麗に避けている事からもサイレント・ゼフィルスの操縦者の実力が伺える。

そんな中にのちゃんの砲撃が乱入し、不意を打たれたサイレント・ゼフィルスを飲み込んだ。

しかしサイレント・ゼフィルスはシールドビットを重ねてののちゃんのエネルギー砲を防いでおり、致命的なダメージは受けていない。

そこに二本の荷電粒子砲が突き刺さり、サイレント・ゼフィルスは今度こそよろけた。

サイレント・ゼフィルスの視線の先にはかんちゃんが居て、腕の下を通して砲門はサイレント・ゼフィルスを向いている。

サイレント・ゼフィルスは苦々しげな顔をして後ろ向きに飛ぼうとして……がくとその動きが止まる。

その背後には眼帯を外したラルちゃんが、サイレント・ゼフィルスに向かって右掌を突き出していた。

「チエックだ」

そう言いながらラルちゃんは左手にプラズマブレードを展開し、サイレント・ゼフィルスに斬りかかっていく。

しかし、サイレント・ゼフィルスの操縦者はその上を行く。

サイレント・ゼフィルスの指先が僅かに動き、その手の中にあったライフルの引き金を引く。

するとそこから予想通りのレーザーが発射され、急角度で軌道をねじ曲げてラルちゃんの鼻先を掠める。ラルちゃんがそれに気付いて高速で後退していなければ直撃していたらうことは予想に難くない。

そして今まではシールドビットとしての仕事ばかりをさせられていたビットからそれぞれ一条ずつ、合計六条のレーザーが撃ち出され、その内二条がセシリーに。二条がシャルに。残りの一条ずつがらんちゃんと鈴に向かっていく。

同時にラルちゃんに向けてライフルを撃ち、ギリギリ避けられたレーザーを次の一撃を撃つ隙を狙っているのちゃんに向けて曲げる。のちゃんはずぐに射撃を中断してその場から離れ、穿千を格納して雨月と空裂を展開して、サイレント・ゼフィルスのレーザーを空裂のレーザーで打ち落とす。

……上手いなあ。

そう考えながら俺はサイレント・ゼフィルスの操縦者の頭を片手で掴み、

おもいつきりアリーナのバリアに叩き付けるように突撃した。

闖入者、どこが静か？

サイレント・ゼフィルスの操縦者の顔面をアリーナのバリアに叩きつける。急激な加速と衝撃になにをされたのかと一瞬呆然としていたサイレント・ゼフィルスの操縦者だったが、すぐに俺に叩きつけられたのだと気付いてライフルの引き金を引く。

ライフルの銃口から光が溢れようとしたその瞬間に、俺はサイレント・ゼフィルスを片手でバリアに押し付けたまま、高速で平行移動を開始した。

「あ……あああああつ！？」

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリ！！と激しい音を立ててシールドエネルギーが干渉し合い、火花に似たエネルギーが飛び散るのを無視して俺は更に速度を上げる。こんな状況でもライフルを離さないサイレント・ゼフィルスの操縦者には、ある意味尊敬の意を持ってしまう。

まあ、尊敬の意を持つのとこれは関係無いから引き回しは続くんだが。

アリーナのバリアを一周半したところで、徐々に下に降りていく。更に半周した時には、実体の壁が一部螺旋を描くように削られている痕ができてしまったが気にし

キユンツ！と横から飛んできたレーザーを避けるが、その時にサイレント・ゼフィルスの操縦者には逃げられてしまった。

どうやらサイレント・ゼフィルスの操縦者がビットを追い付かせて

射撃したらしいが、あの状態で良くビットの操作ができたな。

俺から離れながらシャル達に牽制としてレーザーを放つサイレント・ゼフィルスの操縦者に視線を向けると、やはりと言うかなんと言うか、睨まれた。

ただどまあ、サイレント・ゼフィルスの操縦者の力量は凄まじいものがある。サイレント・ゼフィルスを上手く使っているし、荷物があつたとはいえ極限まで速度に特化させたシロにビットを追い付かせるのは難しい。

それをやってのけるんだから、凄いやな。

……でも、なんか少し悔しいような気がするな。

束姉さんの作ったシロが、何か他の物に追い付かれるってのは……
…なんか、悔しい。

そこで俺は、ずっと存在すら隠し続けていた秘密兵器のお披露目をすることにした。

ちー姉さんには怒られるだろうけど、それはまあ仕方無い。負けず嫌いなのは織斑家の家風なんだから、諦めてもらうしか無いだろう。ちなみに、名前を覚えてもないこの世界の両親も、俺の元居た世界での両親も負けず嫌いだった。

……うん、仕方無いな。悪いのはDNAだ。遺伝子が悪いんだ。俺にはどうすることもできやしない。

と、言う訳で実行だ。さつきガリガリ削ったお陰でアリーナのバリアの強度が心配だけど、まあ、なんとかなるだろ。

……つむ。一夏の非常識さには慣れたつもりだったが、やはり一夏は私の予想など遥かに越える非常識なのだな。

私はそう考えながらサイレント・ゼフィルスを引きずり回す一夏を眺める。

結構な被害が出ているような気もするが、その辺りはなんとかなるはずだ。

気配を読みながらの見物はなかなか難しいが、今の一夏に加勢をすることほど難しくはない。

今の一夏には追い付けないし、射撃でサイレント・ゼフィルスだけを狙うこともできない。

このままならば放っておいてもサイレント・ゼフィルスのシールドエネルギーは削りきられてしまうだろうが、あれだけの攻撃を受けきったサイレント・ゼフィルスがこのままで終わるとは思えない。

それは全員が同じ感想を抱いているらしく、武装を解除している者は一人もいない。

そして、私達の予想を裏切ることなくサイレント・ゼフィルスは一夏の手から抜け出し、今は私達を全員同時に注意しながら退く傾合いを見計らっているようだった。

そこで、状況に変化が起きる。

バシユン！という音と共にシロの装甲が姿を消し、一夏が全身を被うだけのISスーツ姿になったのだ。

前に見たエネルギー切れによる消え方ではない。しかし、装甲が消

えるというのはそれだけで重大な欠陥だ。

一瞬。私達が呆けていた時間はたったのそれだけだった。その一瞬の間に、サイレント・ゼフィルスは一夏に銃を向け、邪悪に口元を歪める。

「死ね《．．》、織斑一夏」

サイレント・ゼフィルスはバイザーに隠れていない口からその言葉を紡ぎ……ゆつくりと引き金を引く。

……否。ゆつくりと引いたのではなく、私達の思考が早くなっているだけのようだ。

鈴が衝撃砲を展開し、射撃して当たるまで……この距離ならば0．3秒。セシリアが引き金を引くまで0．2秒。シャルロットが狙いをつけて弾をばらまくまで0．5秒。ラウラが最速で攻撃するまで0．4秒。簪の荷電粒子砲が発射されて当たるまで0．2秒。私の最速で一夏とサイレント・ゼフィルスの間に割り込みをかけるのに必要な時間は0．15秒。

そして、サイレント・ゼフィルスの撃ったレーザーが一夏を捉えるまでの時間は、およそ0．2秒弱。

ギリギリだが　　私ならば間に合う！

展開装甲を全て開き、全速力で一夏の前に飛び出す。流石にGがきついが、泣き言を言っている暇はない。

サイレント・ゼフィルスの持つライフルからレーザーの光が溢れようとした時、

「よいしょっと」

そんな気の抜ける声と同時に一夏の姿が消え、同時に金属質の何か
が碎かれるような音が周囲に響く。

音の原因だと思われるサイレント・ゼフィルスを振り替えると、そ
こにサイレント・ゼフィルスの姿は無く、ISスーツ姿の一夏だけ
が浮いていた。

闖入者、普通に五月蠅い

side シャルロット・デュノア

ISには、どれだけ仕様が違ってても変わらない部分っていうものが存在する。

シールドエネルギーを発生させたり、現存するどんなコンピュータよりも演算力のあるISコアは当然として、ハイパーセンサーの感知系などがそれに含まれる。

……つまり、今僕たちの目の前で起きた事を見ることができた可能性があるのは、篠ノ之博士謹製のISを使っている筈と、左目のお陰で視力と動体視力の底上げがされているラウラのどちらかだけ。けれど、二人とも全く見えなかったらしくて目をぱちぱちとしばたかせていた。

……まあ、無理もないけど。まさかISが展開されていなかったのにあの速度で動ける上に空を飛んでるなんて誰も考えないって言うか人間にはいくらなんでも無理だよなそれ!？
一夏だからできそうって思っちゃったけどいくらなんでも無理だよな!？ って言うかなんで出来そうって思ったの僕!？

ぶんぶんと頭を振ってある意味怖い考えを追い出した頃には、サイレント・ゼフィルスの姿がどこにあるかを簡単に知ることができるようになっていた。

サイレント・ゼフィルスは、アリーナのシールドバリアに叩きつけられていて、そのシールドバリアもかなりポロポロになってしまっている。

その上、口の中を切ったのか口の端から血を流している。

……いったい一夏は何をしたんだろう？ どうしてIS無しで空を飛んでいるんだろう？

いくらシロが速いって言っても、ここまで速いって言うのは普通あり得ない。

なぜなら、あそこまでの加速力だと乗っている人間の体が耐えることができないから。

そのためにPICがあるんだけど、それでも打ち消すことができる限界はある。一夏のやった動きは確実にやっちゃあ駄目な動きだ。死んじゃってもおかしくない。

それなのに一夏は普通に動いて、平気な顔をしてそこに浮いている。ISのことを知っているからこそ、目を疑う光景だ。

「……何をした」

サイレント・ゼフィルスの操縦者が、苦しげに一夏に話しかける。距離はあるけど、ISのお陰で聞こえないことはない。その言葉に一夏は、特に気負った風もなく言う。

「蹴った」

「軽く言い過ぎー！」

なに蹴ったって！蹴ったってなに！軽すぎでしょ！

「じゃあ、速く近付いて蹴った」

「僕が言いたいのはそう言うことじゃあなくってねえ！？」

「まあまあ、細かいことは後で説明するからさ」

そう言われたら、僕に反論することはできない。なんだかんだ言っても一夏は僕の恩人だし、僕は一夏が好きだからね。

……なんで一夏に言わないかって？ 鈴達とは違って恥ずかしいっていう気持ちがあるからだよ。

簪みたいに勇気がある訳じゃないし……僕ってばダメダメだね。

無言で睨み合う一夏とサイレント・ゼフィルスの操縦者。片方はロボロボになったESを纏い、もう片方はスーツだけでESを使っていないという二人は、なんだかとおかしく見える。

「……大変なことに気付いた」

「っ！？ どうしたの！？」

「……もしもここでこの……名前がわからないから少女Sとしとくが、少女Sを捕まえた場合……確実に事情聴取とかでこの後の予定がまるごと吹っ飛ぶような気が……」

一夏がそこまで言った途端に、上空から轟音が響く。

音のした方を見てみると、原因はわからないけどアリーナのシールドバリアが破られていた。

「わーたいへん、てがすべってありーなのしーるとばりあにあなあけちゃった。そのうええねるぎーをつかいすぎてにげられてもおいつけないわー」

「あらたいへん、それではわたくしがかわりに……あら、てをすべらせてらいふるをおとしましたわ」

「わざとらしい！わざとらしすぎるよ二人とも！？」

なんだかサイレント・ゼフィルスの操縦者の方から憐れみの視線を感じる。

み……見ないでっ！僕をそんな目で見ないでえええっ！！

僕が悶えている間に、サイレント・ゼフィルスはアリーナのシールドバリアに開いた穴を通り抜けて逃げていつてしまった。けれど、誰も追いかけてようとはしない。みんな一夏の誕生会の方が重要だと当然のように思っているらしい。

……これって、おもいつきり私情だよね？ 代表候補生なのに……。

「ばれなきゃいいのよ。ばれなきゃ」

「……いや、いくらなんでもまずいつて!？」

「はいはい、ほんとは不味いつてわかってるけど……一夏が楽しそうだからあたしは構わないわ」

鈴が構わなくつても僕は構うんだけど……。

………はあ。もう考えるの疲れてきたや。やーめたつ。明日の朝まで細かいことは気にしないでおかないと、そろそろ頭が大変なことになつちやうや。

そうだね。楽しいことを考えよう。これから一夏の家で誕生会だけで、どんな感じになるのかな？

「………なんだか……色々危ない状態………」

簪の声が聞こえた気がしたけど、気にしな—い

誕生会、その前に説明

サイレントゼフィルスを追い返した後、俺達はピットでのんびり

「さあ一夏。説明してもらおうよ？ さっきのはいったいなんなの？」

……は、していなかった。シャルが随分問い詰めてくるから。

「そうね。なんだかこれについてはしっかり話を聞いた方がいい気がするわ」

そして今回は鈴も問い詰める側に回ってしまった。シャルだけだったらともかく、鈴と一緒に誤魔化すのは無理だなあ。

……仕方無い。誤魔化し無しで話すか。後が怖いけど。

「じゃあ、聞きたいことがあったら質問をどうぞ」

そう言うと、シャルと鈴から次々に質問が飛んできた。

「どうやって生身で飛んできたの？」

「生身じゃなく、クロをISスーツ型にして着てたから」

「どうやってあの速度を出したの？」

「シロの三つの特殊武装の最後の一つを使ったから」

「特殊武装の詳細を求むわ」

……うん、これが怒られる原因だから話したくないんだけど……。

「秘密じゃダメ？」

「駄目よ。なんだかこれについてはしつかり聞かなくっちゃいけない気がするの」

「そうだな。その話になった瞬間に一夏の気配が僅かにぶれたからな。なにかしらの後ろめたい隠し事があるのだろう」

「さあ、話して一夏」

「……しょうがないな。」

「……詳しい理論は解らないんだが、速度特化のシロを更に速度特化させる秘密兵器。装甲を捨てて軽くして、シールドエネルギーを機動用のエネルギーに変換して、そのまま動くってやつ」

ギンとの戦闘の時に、機動用エネルギーが無くなってシールドエネルギーが過剰に増えていたのは、この特殊武装を逆向きに使われたせいだ。

「……わかる人にわかりやすく言うと、リリカルな魔法使いの三期の死神さんが使ったライオット。防御をギリギリまで削って速く動くっていう。」

ちなみに、装甲すらもの質量分のエネルギーに転換するため、一度使うと暫くまともには使えなくなってしまう。

エネルギーから装甲を編み直し、回復していく分のエネルギーも装甲の修復に当てなければならぬため、最低でも三日は使えない。

「……サンライトハート改やのちゃんの協力でエネルギーを供給し続けられれば、三分くらいで行けたりするけど。」

「……つまり、一夏はあの時装甲もシールドエネルギーも無い状態であんな無茶をやらかした、ってことね？」

「そうなるね」

まあ、実のところ防御力自体はシルバースキンを重ね着した方が強いから生身の方がいいんだけど。

それに、生身だとIS装備中は使えない帝国九七式破城鎚型魔導手甲とか斬艦剣とかピーキーガリバーとかソードサムライXとかを使いたいだけ使えるからある意味では楽なんだけど。

「……………はあ……………」

鈴は溜め息をつくど、ポケットから携帯電話を取り出した。そしてそのまま流れるようにボタンを押して、誰かに電話を掛ける。

「……………あ、弾？　一夏がまたやらかしたから、ちょっとピットまで来てくれる？　……………そう、またやったのよ？　……………速くね」

ピッ、と電子音を発してから電話が切れる。

「……………ねえ一夏。馬鹿なの？」

「酷いな。生き残る自信があったからやったって言うのに、それは酷い」

「馬鹿よ馬鹿。そんな動いただけで普通死ぬようなことを何でやったのよ」

「実は俺、生身でグレネード食らっても平気だったりするからそれやっても大丈夫だろうと思って束姉さんに依頼した。束姉さんはシロの取り扱い説明書にしっかりとその事も書いてくれたから、悪くないよ？」

「今の人間とは思えない発言はスルーするとして、もっと自分の体を大事にしなさい。そういうのが周りに知られたら大変なことになるかもしれないのよ？」

「そうだぞ一夏。俺たちならともかく、どこぞの国の研究者にでも知られてみる解剖されて標本にされるかもしれないんだぞ？」

「……じめん」

あつれえいつの間に五反田さんがここに！？ というシャルの叫びはスルーして、俺は鈴と弾に頭を下げる。謝るべきところで謝れるのが俺だ。

まあ、相手によるけど。エムさん相手だったら絶対謝らないし。

「じめん」

「……いい？ 危ないことは控えること。あたしから言えるのはこのくらいよ。……千冬さんのお説教が待ってるし、このくらいにしてあげるわ」

「……そう言や俺ってここに居ちゃ不味いんだっとな。また後でな」

……そうだった……ちー姉さんのお説教があるんだっただ……。

「……まあ、覚悟を決めなさい」

鈴が親指で指した先には、腕組みをしたちー姉さんがいた。

……… やっぱり、行くのは少し遅くなるかも……。

誕生日会、本番

ちー姉さんになんか本気で怒られ、俺は現在すっごい疲れている。

……いやまあ確かに俺が悪いんだけど。珍しくかなり本気でひっぱたかれたし泣かれちゃったし。

よっぽどの事がない限り使わないと約束させられた。まあ、あつたら使つていいんだし、俺も疲れるからあんまり使いたくないし、別にいいんだけどさ。

……あの状態でライドインパルス？ 走っただけで普通は死ぬし、やっぱり疲れるからあんまりやりたくない。

そんなこんなでちー姉さんからのお説教も終わり、今は俺の家で誕生日パーティーを開いている最中だ。

メンバーは俺といつもの六人。そして弾と蘭ちゃんとカズの中学時代の友人たち。なぜかそこにIS学園生徒会のメンバー三人が入り、いつの間にか束姉さんが参加している。

原作では束姉さんがいない代わりに誰かがいたような気がするんだが……まあ、いいか。

ちなみにちー姉さんと真耶先生は結構忙しそうに働いていたが、市街地戦闘をしていないだけ原作よりましだったろうと思っっている。

俺も取り調べを受けはしたが、ちー姉さんのお説教の時間を除けば15分くらいで解放された。他のみんなもそのくらいの時間で解放され、先に誕生日会の準備をしてれていた。

ちなみに、俺の誕生日会は一日泊まって家に帰るまでが誕生日会らしい。いつの間にかそういうことになっていた。

まあ、そんなことは別に良いとして……今はこれを楽しむとしようか。ちょうど腹も減ってきた所だったし。お説教とかそう言うので昼は食べてないんだよな。

「はいラーメン。花嫁修行の一環で作れるようになったのよ。ご賞味あれ」

タイミングよく鈴がラーメンを出してくれた。考えてることがわかるとかそういうのも凄いが、こうしてそれ以外の予測も使って色々行動できるってのは優秀な証拠だよな。

「ありがとう。喜んでくれたなら嬉しいわ」

「東姉さんも色々用意してきたよ！簡単なものばかりだけどね？」

そして東姉さんがなぜか持っていたおかもちから、次々に料理が出てくる。常識的に考えておかもちに入る量じゃないし、種類が和洋中と……どこの料理だ？ と聞きたくなるような料理も混ざっていた。

いや、美味しそうなんだけどね？

とりあえず延びると美味しくなくなるラーメンから食べ始める。魚介系の塩味が美味しい。どうやら麺だけじゃなくスープもチャーシューも手作りらしく、やけに俺の好みに合う。

「久し振りに作ったけど、まだまだ衰えてないみたいね。よかったわ」

「む？ これは私達の分か？」

「わあ、美味しそう……！」

鈴は当然のように台所から小さいラーメンを持ってきて全員の前に並べた。確かに俺だったらともかく、のちゃんやかんちゃん、蘭ちゃん達が一杯食べた後に追加で食べられるとは思えないし、いい判断だと思う。

ちゆるるるゝ、とラーメンを食べ終わった俺は、次に東姉さんの料理に手を出した。味が想像できないものからおよその想像がつく物まで、まさに選り取り見取りだ。

適当に一番近いところにあつた料理を小皿に取り分けて、口に運ぶ。

……うん、辛い。でも美味しい。これ子供泣かせな料理だ。

始めはかなり辛めで、少し経つと辛味が一気に消えて美味しいのが口に残る。辛いのに美味いから止まらない。流石東姉さん、神算鬼謀は料理にまで役立つんだな。もうこれは一種の才能だよな。びつくりびつくり。

「東姉さんは天才だからね！」

「天災？」

「外れてはないかな？」

「……流石姉さん、やはりまだ修行が足りないか……」

「う……辛いのに……辛いのに……」

東姉さんの料理は好評で、どんどんと数を減らしていく。

もちろん辛くないものもあるから、辛いのがどうしても嫌な人はそつちを食べている。

そして、辛くないのもやけに美味しい。

基本的にちー姉さんが苦手なところは得意で、ちー姉さんが得意なところはそこそこ苦手って言うのが東姉さんだし……まあ、ちー姉さんの料理の腕を考えればこのくらいはできて当然……かな？

「最近はお姉さんが作ることも多いからねー。頑張ってみて！」

「流石は【お母さん】だね？」

「……一応、何で知ってるのか聞いてみていい？」

「俺だから」

「いつくんだからか。ならしょうがない」

「仕方無いわね。だって一夏だもの」

「ああ。これは納得するしかないな」

「………ツッコむよ？ いいね？ ツッコむからね？ ……………」

何で納得しちゃうのさ！？ って言うか幕は自分のお姉さんにいつの間にか子供ができてることを当然のようにスルーしちゃってるの！？ ここは普通ツッコむ所でしょ！？ 相手は誰とかいつ子供ができたのか臨海学校の時にはお腹膨らんでなかったよねとかさては一夏の寝込みを襲ったなパルパルパルとか色々！それなのに何で普通に受け入れちゃってるのあり得ないよねどうして僕ばかりツッコミなのこのままじゃ僕の死因はツッコミ過ぎによる過労死かストレス性胃炎からの胃潰瘍が進化した胃癌とかそんなになっちゃいそうなんだけどどうしてくれるのさ！？ 僕に死ねって言うの！？ たまにはツッコミ変わってよ僕だってツッコミたくてツッコんでる訳じゃないんだからいつだって変わってあげるよだからお願い助けて一夏ー！！」

「……シャルロットは時々わかりにくいボケをかますな。必死すぎて笑えん」

「仕方ないだろうラウラ。シャルロットはかなり本気でかつ必死なのだ。自分の胃の安寧のためには避けては通れない道なのだよ」

「わかってるんだっいたら助けてよ！？」

「………大丈夫………私は味方だよ………？」

かんちゃんもシャルルの頭を抱えるように抱き締めた。なんと言うか、子供が自分より小さい子供を優しく宥めているようにも見える。

……うん、可愛い。シャルもかんちゃんも可愛いなあ……。

「……………」

「……………？ お姉ちゃん……………？ 何で……………」

「簪ちゃんが可愛すぎるからよ。可愛い簪ちゃんを撫でない理由はないわ」

……先を越された。まあ、いいか。

くその頃のマゾカさんく

ひゆるるる……………と秋風が吹く中で、織斑家の玄関が見える位置に少女は居た。

こっそりと近場のビルの屋上に身を隠しながら織斑家の玄関を眺めている。

少女はずっと黙っていたが、ふと自分の体を抱えるような体勢をとった。

「……………今日は冷えるな……………」

その言葉は、誰にも届くことなく虚空に消えていった。

誕生会、終幕

八時前にすべての片付けを終わらせ、八時には布団に入る。異様に大きなベッドだから、12人くらいは一緒に寝れる。

「広すぎて？ 実はここは俺の部屋じゃなく、俺の部屋のドアにリ口を作ったアンダーグラウンドサーチライトの中だったりする。そうしないと流石に全員は入らなかったから、苦肉の策だ。ちー姉さんはまた勝手に入ってこれるだろうけど、普通の人間じゃ無理だ。」

ちなみに、寝ない子には『どんな子供でも寝なくなる無限エクスカリバー』を使うと脅迫したら、大半は布団に入ってくれた。

布団に入らなかったたっちゃんにはアリス・イン・ワンダーランドで幻覚を見せて、『……パトラッシュ……なんだかとても眠いだ……』状態にしてからベッドに放り込む。

まあ、明日の朝には治ってるだろ。多分。

ちなみに虚^{うつろ}さんは弾の隣で顔を赤くして小さくなってる。メールアドレスとかも交換したようだし、弾にも春が来たってことでいいのかね？

「弾の春はとっくに来てるわよ？ 相手は一夏だったけど」

「そうなの？」

「おう。初恋の相手が男つてのは自分でもちよつと不味い気がしてたんだが……まあ、一夏相手だったらいいかと」

「俺も、相手が弾なら男相手に抱かれる側に回ってもいいと思ってる。カズもまあ、いいんじゃない？」

「あゝ……っつこみすぎて喉が痛い……」

がらがら声でシャルが呟くが、つつこみは飛んでこない。喉が痛い
せいか。
まあ、あれだけ全力で叫びながらツツコミを続けてたら喉も腫れる
わなあ…………。

「……………」

シャルは無言の重圧をはなつた！

一夏には効果はないみたいだ…………。

鈴の抱きつき！

きゆうしょにあたつた！

効果はいまひとつのようだ。

一夏のこっげき！

ぷちか召喚！

こっかはばつぐんだ！

「うー」

「ぶぱっ！？」

シャルは動かなくなった！

一夏はシャルをベッドに引きずり込んだ！

……お休み。

夢を見る。なんだか薄ぼんやりした霧が漂い、鏡映しの影が見える。

一人は俺、織斑一夏。もう一人も俺、桜道一哉。

どっちも俺であるせいか、鏡映しで同じポーズをとって寝ている。

どちらも気持ち良さそうに寝ているが、それを眺めていてふと思つ。

……俺って、いったいどっちだ？

……まあ、いいか。どっちでも。

鏡映しの二人の間に滑り込み、俺はそのまま寝始める。考えるのとかもう面倒すぎる。

正直に言って、こんなことを考えるなんて俺らしくない。俺らしくなさすぎて蕁麻疹が出てきそうだ。痒い痒い。故に俺はさっさと寝る。夢の中だろうが関係無い。夢を見ているってことは脳が働いているってことだし、経験もあるから問題ないはずだ。

〜その頃のマゾカさん〜

「じゅ〜」

「……………」

じーーーーー。

「じゃ〜」

「……………」

ひたすら猫と見詰め合っていた。

ふと、目が覚めた。俺にしては珍しいな……と思いつつ、体を起す。

腰の辺りに抱きついているかんちゃんを剥がし、足にぴったりとくっついていたセシリーを剥がし、するりとベッドから降りる。

……なぜか、妙に目が冴えている。前世でもたまにあっただが、こっちではもう4年くらいはこうなっていない。

こうして目が冴えている時には、なぜか色々なことが起きる。むしろ、色々なことが起きるのを体が予測して勝手に起きてんじゃないの？ と思えるほどだ。

靴を履き、夜の町に歩き出す。狙われそうな気がするので、服装はシルバースキンの重ね着だ。

職務質問されることもあるが、俺が顔を見せると何事もなかったかのようにスルーされる。

まあ、実のところこんなのを着込まなくても普通に身体能力が並みじゃないから問題ないんだが。グレネードを至近距離で爆破されても問題ない体だし。

だからと言ってそれがバレるのはなんか不味い気がするから、シル

バースキンでカモフラージュ。今までバレたことはない。

……さて、夜の散歩は久し振りだな。前は麻薬をどこからか持ってきてばらまいてた不良グループをいくつか潰して、それから裏をとって知り合いのヤのつく自由業の人達にお願いしたんだっただか。警察の方には色々手を出して引つ掻き回してやったから、全くバレていなかった。

今回はいったいどんな事件が起きるのやら？

〜その頃のマゾカさん〜

「……む、ようやく動くか」

織斑家の玄関をずっと張っていた少女は、漸く目当ての人物が一人で行動する場面に当たった。

「にゃ〜」

「……済まないが、ここで別れだ、にゃーたん」

そう言って少女は抱き抱えていた猫を放し、静かに目当ての人物を追いかけて行くのだった。

夜の散歩は、危険いっぱい

夜の町をあてども無く歩く。毎回一晩限りの騒動が起きるんだが、今回はどうも静かだな。

そんなことを思いつつ、自動販売機に野口を一人突っ込んで適当にボタンを押す。

がこん、と音を立てて出てきたのは……秋茄子サイダーチーズおかし風味。味の予想がつかなさ過ぎる。

ついでに当たり付きだったらしく、もう一本選べるらしい。次はまともにホットココアを選んだ。

暖かいココアは寝る前に良いんだ。家にあるけど。

ココアの缶を開けてくびつと一口。砂糖が多すぎる気がするが、料理では引き算はできないから仕方無い。

くるりと振り返って元来た道を歩き出そうとすると……そこに人影を見つけた。

なんだかちよつと寒そうにしてるが、その辺りは気にしない方がいいのだろうと思って流す。

それに、この娘さんは多分例の……サイクロン・ジョーカー？ ……

……の中の人だし、からかえそうならちよこちよこからかうが、からかえそうにないならさっさと帰ってもらう。

……原作的に考えて、からかえそうに無いけど。

「……………あ、ココアいる？ 寒そうだし」

「……………もらおうか」

あ、貰っちゃうんだ。へー。

……なんかちよるそんな匂いがしてきたような気がするの、は気のせい
いか？ もしかして……ニックネームをちよるかに変えなきゃいけ
ないフラグ！？

そう思いつつ……どっちで呼ぶべき？ マゾカでいい？ ……マ
ゾカにしとくか……マゾカにかなりいっぱい入ったココアを渡す。
それを両手で受け取ったマゾカは、ちびりちびりとココアを飲んで
いく。

時々

「あつっ」

とかいう悲鳴に似た何かが聞こえるのは気のせいではないと思う。

……猫舌なのかもな？

ふーふーと息を吹き掛けながらココアを舐めるようにして飲んでい
るマゾカは、なんと言うか小動物的だった。どこでこんなにぶっ壊
れたんだろっな？

千の顔を持つ英雄で薄いマグカップを作り、マゾカが持っているコ
コアを移す。こっちの方が冷めやすいからな。

しばらくしてからちょうどいい温度になったようで、マゾカは僅か
に湯気がたつココアを一気に飲み干した。

「……ふう……」

「……で、何の用だ？ 亡国企業のドM」

「ふ……気付いていたかって違う！誰がドMだ！」

あ、この子凄い純粹だ。良いか悪いかは置いといて、純粹だ。ノリツッコミができるのは純粹な奴くらいだし。シャルとか。

「私はMではない！私は織斑マドカだ！」

「え？ 織斑マゾカ？」

「そうだ織斑マゾカ違う！！」

「どっちだよ」

「マゾカではないマドカだ！」

「わかったわかった、マゾカなんだな」

「違うと言っているだろう！」

「自分の顔をナイフで傷付け、ナイフに付いた血を恍惚の表情で舐めとるような奴がマゾじゃなくて何？ 名は体を表すって本当じゃないか」

「バカな！？ なぜそのことを知っている！？」

カマかけたただけなんだが……………マジでやってたのかこのドM娘。

「もうマゾカで良いだろ。はいけってーい」

「訂正しろ！私はマゾカではなく」

「うるせえマゾ。深夜だぞドM。騒ぐな被虐體質。喧しいんだよ興奮するな」

「わかった呼び名はマゾカでいい。マゾカでいいからせめて名前の原型くらいは残して呼べー！！」

「なんだやっぱりただのマゾか」

「……………ッ！！」

「……………ちゃんとマゾカって呼んだろ。何が不満だ？」

「全てだ！」

……………まったく、我儘なマゾだ。地獄の九所封じでも喰らってしまえ。弾なら地獄のメリーゴーラウンド以外は再現できるからお願いして

みたら？

流石に弾は生身でダイヤモンドの硬さはないが、アレを使えばかなり硬くなるし。具体的には某男爵様の鎧にシルバースキンをコーティングしたやつなだけだ。

ミサイル食らっても全く問題ない。レーザー食らっても大丈夫。ただし攻撃能力はそんなにない。背中のガン・ザックを使って突貫するくらいだ。

まあ、それでも防御能力はそこらのIS以上にあるから使いようはある。主に鎧として。

それ以外に移動用としても使えたりするが、そんなに使われてはいないらしい。

だから、悪いけど今回は色々あるから手は出さないで欲しいかな。

……ちなみに待機形態は蘭ちゃんにあげた腕輪と同じような腕輪。

ただし色は蘭ちゃんにあげたような赤銅色ではなく、赤錆色とも言えそうな鈍い赤。

まあ、蘭ちゃんはあれで結構ブラコンだからお揃いっぽくしても良いと思っただけだ。後悔は一切していない。

「……まあいい」

「呼び名はマゾでいいのか？ だったら」

「それはよくない。最悪でもマゾカと呼べ。出来ればマドカだ」

「じゃあマゾカで」

「それでいい……いや本当はよくないが、もういい」

これでいいらしい。まったくマゾカはマゾだな。Mだな。流石コードネームがMなだけある。

「そう言えば、マゾカってちー姉さんに似てるけど、クローンか何か？」

「……いや。私はお前だ、織斑一夏」

「あっそ」

「……………それだけか？」

「おう」

「……………はぁ……………まあいい」

もしかして、マゾカの口癖は『まあいい』だったりするんだろうか？
？ どうでもいいけど。

ちゃきつ、とセーフティを外しながら、マゾカは俺に拳銃を向ける。

「私が私たるために……………お前の命をもらおう」

マゾカはすぐさま銃の引き金を引く。

パン！という軽い銃声が夜の町に響き渡り、拳銃が小さな弾を吐き出した。

夜の散歩は、これでおしまい

パン！と銃声が響いた直後、ギーン！と硬いもの同士がぶつかり合ったような音がした。

まあ、シルバースキンに銃弾がぶつかって弾かれた音なんだけど。

「……やはり、この程度では傷ひとつ付けられんか。」

「俺って一体なんだと思われてんだ？」

「化物に決まってるだろ。あの速度を出して生きていられるところもそうだし、その速度の中でまとも動いているところもそう。現に今も、銃弾を弾いただろう。」

「いや、弾いたのは防護服のお陰だから。いつも着てる防護服のお陰だから。」

「……そうなのか？ 生身ではないのか？」

「化物扱いはわかったけど、俺ってどこまで化物だと思われてるんだよ？」

「素手でISに勝てるかもしれない唯一の人間だと聞いたのだが……」

多分それはできる。乗ってる相手と機体にも依るが、多分できる。

……… ついでに、生身じゃないが男爵様モードの弾と、いかれた（イカれたのか怒れたのかは、自分で判断してください）ちー姉さんだったら勝てるかもしれない。なんとなくそんな気がする。

この世界の人間はそこそかもな人間しかいないと思ってるんだけどなあ……… 精神面はともかく、肉体面は。

「………とは言え、流石にそれは言い過ぎだと思ってるかな」

「まあ、普通はそうだよな」

「ああ」

「どうやらマゾカはそこそこ常識と言つものを持っているらしい。マゾなのに。」

「……………どうやら私ではお前を殺せないらしい。私がISを展開したら、お前も使うのだろう?」

「勿論そのつもりだ。正当防衛立証のために全力で叩き潰して【『ぬ』のハンカチ】の刑に処してやる」

「……………なぜだ。内容が一切わからないのに、凄まじく嫌な予感がする」

「まあ、前にちよつとやってみたら、二時間後にはトラウマができていたな。黄色地に黒で小さく『ぬ』と大量に書いてあるハンカチに」

ちなみに内容はエクスカリバーと同じようなもの。ただし、大量の天の助が両手に『ぬ』のハンカチを持ってひたすら「『ぬ』の、ハンカチイ!」と叫んではハンカチを投げ付けてきて、失敗してもしなくても最後には『ぬ』のハンカチに埋もれて死ぬ。

埋もれて一度（幻覚で）窒息死したら最初からやり直し。またひたすら『ぬ』のハンカチを投げつけられる。

……………そりゃトラウマにもなるわな。

「……………あ、帰りたいなら帰っていいよ? 正直に言って、あんまりやる気ないし」

「そうか。ならば帰らせてもらうが……………覚えておけ? 私はいつでもお前を狙っているぞ?」

「性的な意味で?」

「そうそう風呂場や寝室では気を付けろって違う!」

……うん、この娘原作が一番あてにならないキャラだ。なんでだろうな？

「まあ、気にすんな。……そうそう、マゾカのところにもエムさんいるだろ？」

「……エムは私だ」

「……やっぱりMなのか」

「コードネームだ!!」

そういう事をこんなところで大声で叫ぶのは辞めといった方がいいぞ？ 年齢も合わさって中二臭くて仕方ないから。

「……あー……… 巻紙礼子って名乗って学園祭に来た奴に、『お前の頭の中の声の大半は俺が流してる。ざまあm9 (^ ^) www www』って伝えといて」

「……ああ、だからあいつはずっと虚空に叫んでいたのか………わかった」

「しつかり『www www』まで伝えてくれよ？ 明らかに見下した感じで、かつ嫌みっぽく、そしてム力つく半笑いで」

「………難しいな………こうか？」

「そうそうそんな感じで。ただ、手はこうやってわざわざ少し高めに構えて、指を附角にして………上手い上手い」

しばらく授業的なことをして、俺とマゾカは別れる。

さっきの言葉のついでに、さっき買った要らないジュースも押し付けた。ちよろータムにでもやればいいと言ったら、割と普通に受け取った。

ISを展開して飛んで帰ったマゾカが見えなくなったのを確認して

から俺は家に戻る。明日は振り替え休日だし、眠気も出てきたから
ゆっくり寝るかねえ……。

side ちよろータム

「おい待て！？ なんでここで私なんだよ！？ ここは普通あのク
ソガキだろうが！！」

「喧しいぞ、エムさん」

「ぶっ殺すぞクソガキ！！」

「そうだったな、今はちよろータムだったな」

「殺す！！」

ちよろータムは少女に飛び掛かる。しかし所詮ちよろータムはどこ
まで足掻いてもちよろータム。少女にあつという間に床に押さえ付
けられ、みすばらしく床に這いつくばったまま少女にねめあげるよ
うな視線を向けることしかできなくなった。

だっせー（笑）

「うるっせえんだよてめえも！ぶっ殺してやるうか！？ ああ

！？」

「……そうだ、お前に伝言がある。……織斑一夏からだ」

「ああ！？」

無様に惨めに這いつくばっているちよろータムに、少女は見下した
ような視線を向け、指差す。

「『お前の頭の中の声の大半は俺が流してる。ざまあm9（＾　＾）
wwww』……だそうだ」

「……………あゝ？」

「聞こえなかったのか？ 『お前の頭の中の声の大半は俺が流して
る。ざまあm9（＾　＾）wwww』だ」

繰り返されたその言葉に、ちよろータムは額に青筋を立てる。小者
臭がぶんぶんするなあ……………。

まあ、仕方無いか。小者だし、ちよろータムだし。

「殺すつ！殺してやるぞつ！織斑一夏あああああつ！！」

「精々頑張れ、ちよろータム」

「まずはてめえからぶつ殺す！」

どったんばったん。がしゃんぱりーん。パンパン！スキュウウ
ウンーデロデロデロデロデロデロデロ……………。

……………亡国企業。本当に大丈夫か？

「大丈夫だ。問題ない」

「よそ見してんじゃ」

「食らうがいい、これがロメロ・スペシャルだ！」

「ぎゃあああああああつ！！？」

夜の散歩は、これでおしまい（後書き）

むしろ問題しかない。

夜の散歩の、裏のお話

side 五反田 弾

一夏が目を覚まして外に出掛けた瞬間に、俺は一夏のベッドから静かに起きる。

全員を起こさないように注意しながらすり抜けるようにベッドから出て、一夏の後を追いかける。

いつもだったら鈴は起きるんだろうが、今日は色々あって疲れているせいか、起きる気配が全く無い。

まあ、いきなり襲撃されて、一夏がなんか見えないほどに動き回って心配して、それから料理を作って飲んで（酒じゃないことを明言しとく。じゃないと冬冬さんに殺されそうだ）騒いでようやく寝たところだし、仕方無いけどな。

一夏曰くの『男爵様の鎧』を装備し（これISじゃね？）と思ったが、違うらしい。どこがどう違うかと言われると困るが、違うそうだし、背中ガン・ザックで空を飛ぶ。

ガン・ザックはロケットっぽい構造をしているのに、異常とも言えるくらいに静かだ。

これはベルトの前部にあるスイッチ一つで火が入り、俺の体とこの鎧を上空に打ち上げることができる。左右の出力の変化で旋回とかそういうのも可能。

ついでに、飛ぶ時にはそのガン・ザックから翼が飛び出て機体制御を楽にしてくれたりもする。

そのまま銀色のコートを着た一夏を静かに追いかける。

すると、下に一夏の後を追いかける小さな影が見えた。

……あの影の骨格……重心……乱入してきたあのIS乗りじゃねえか！

すぐにその場に行こうとしたが、一夏に一瞬視線を向けられて牽制される。

大丈夫だからと伝えられたが、それでもやっぱり心配なものは心配だ。

……って言うか、バレてたんだな。邪魔だったか？

……まあ、今は一夏を信じて待機しとくか。

……落ち着け落ち着け。一夏が撃たれたからって怪我したわけでも無いんだし、一夏自身も気にしてないみたいだし、俺が気にすることではないと理解しているんだが……普通に考えて、理性と感情がそんなに簡単に一致するわけ無いよなあ？

一夏に銃撃しておきながら平然と逃げている女に、最高速で突貫する。

漫画の悪役のように馬鹿みたいに声を上げながらではなく、静かに素早く拳を叩きつけようとしたが、それは寸前で気付かれてしまい、避けられた。

「く……なんだ貴様は！？」

「お前が気にすることはない。無様に惨めに敗北し、生き恥を曝させてから千冬さんに突き出してやる！」

がちん、とベルトのスイッチを押し込み、既に火の入っているガン・ザックにさらに燃料をくべる。

このガン・ザックの燃料は、俺の心の力。俺の心がたぎればたぎるほど。震えれば震えるほどに出力も硬度も増していくと一夏から聞いた。

それを聞いたときに、それほど俺に合ったものは無いと思った。

なぜなら、俺の心は常に一夏への愛に沸き、尽きることも無く産み出されるからだ。

鈴や蘭には悪いが、これについては誰にも負ける気は無いし、負けたくない。例えその相手が千冬さんでもこの想いは変わらない。

精神的なエネルギーを物理的なエネルギーに変える方法はよくわからないが、俺達みたいな一般的に非常識と呼ばれる人種は無意識にそれを行っているらしい。

だからこそ俺は恐れることなくガン・ザックに燃料をくべ、加速する。

「つらアー!!」

「くっ……」

ガギインツ！と音を響かせて鎧に被われた俺の拳と相手のISの装甲がぶつかり合い、互いの横をすり抜けあう。

俺はガン・ザックを片側だけ噴射を強くして反転し、ISに向き合う。

「……何者かは知らんが……ここで死ね!」

その言葉と同時に撃ち込まれた銃弾を拳で弾き、再び突貫。左に避けようとしたので右側の噴射を強くし、追いかける。

まるで一世代前の戦闘機のようなデッドヒート。相手が逃げ回りながら俺を撃ち、俺はその弾丸を拳で弾き落としながら追いかける。はじめのうちは赤いレーザーが飛んできたりもしたが、そっちは無視して弾くことすらなく突貫。それを見た相手はひきつったような顔を俺に向け、すぐさまレーザーではなく実弾に弾種を変更した。

その判断は間違っていない。むしろ、最善かなりに近いだろう。しかし、最善にかなり近いそれでも、俺には決して届かない。

無数の弾丸をばらまきながら、相手は空を縦横無尽に駆け回る。優雅に、華麗に、そして無駄なく飛び回るその姿はまさに風。加えて風切り音の一つもしないその消音性能は、まるで風を支配しているかのような。

俺はこいつを逃がさないことはできる。ただ、落とそうとするとかなり難しい。

こいつは俺を翻弄できるが、かわりに落とすことも逃げきることもしできない。

お互いに手詰まりのこの状況で不利なのは……俺だ。

俺の駆る男爵の鎧はISじゃない。だから男でも操縦できるし、こいつでISと互角に戦うこともできる。

だからこそ、こいつをそう簡単に人目に触れさせることはできない。こいつが人目に触れれば、ISの発表と白騎士事件と同じように、一気に世界のあり方が変わる。

そして俺は、あまり目立つことは好きじゃない。一夏とも一緒にいられなくなるだろうし、一夏の時のように五月蠅い奴等が俺の家に群れをなしてやって来るだろう。

……仕方無いか。

ガシユン、とガン・ザツクの火を一つを残して全て落とす。それに気付いたらしい相手は、なぜかその場で止まった。

「……何故止まる？ 私を殺しに来たのでは無いのか？」

「うるせえ。状況が変わったんだよ。行くならさっさと行っちまえ」
しっしっ、と追い払うように手を動かすと、相手はくるりと俺に背を向けた。

「次、一夏に手を出したら……本気で潰す」

俺のその言葉には何も返さず、その女は薄く光が出てきた空の彼方に消えていった。

……俺も、帰るか。疲れたしな。一夏分の補給が必要だ。

ゲームソフト、IF

ゲーム。それは娯楽の対象。妄想の具現。

まあ、色々と言っている方はあるが、ここではその辺りは一切無視しよう。面倒だから。

なんで今そんな話をしているかと言うと、俺自身も忘れていたあのゲームソフトが目の前にあるからだ。

その名前は、インフィニット・フォーチュン。通称IF。まあ、ネタとして俺と束姉さんが適当に作って発売してみたところ、気持ち悪いほどに売れてしまったゲームソフトだ。

ちなみに初回生産版にはプレミアがついていて、捨て値で売っても6桁は普通に行くらしい。

テストプレイヤーは俺。原作知識と言う名前のネタを使って、色々とキャラを組み込んである。

まずは俺をモデルにした『織野 壹佳』。主人公と言うかヒロインと言うか……そんな立場の娘。俺みたいな特殊な能力は無い。

専用機は【白蓮】近接特化型。

ちー姉さんをモデルにした『織野 千尋』。大抵スーツだが家に戻ると生活能力皆無のかつこいい系お兄さん。ただし隠れシスコン。一番ルート入りが難しい。

専用機は【夕柳】近接特化型。

ののちゃんをモデルにした『東雲 総司』。剣道の達人で、かなり面倒見がいい。

専用機は【緋桜】近接よりの万能型。

セシリーをモデルにした『セシル・オーウェル』。イギリス代表候補生の初めは高飛車キャラ。ただし後々では性格を変えることも変えないことも可能。

専用機は【スカイ・ティアーズ】。中距離射撃型。

鈴をモデルにした『鳳^{ファン}廉韻^{レンイン}』。中国代表候補生。鈴が嫌がりそうだからアルアルは言わない。ただし、肉まんは持っている。専用機は【神龍】。近接・中距離格闘型。

シャルをモデルにした『シャルル・デュラン』。フランス代表候補生。初めは女として入学してくるが、途中でバレル男の娘。背が低くて童顔なのが悩みのツツコミキャラ。

専用機は【ラファエロ・カスタム】。近接・中距離・遠距離全てに適正あり。

ラルちゃんをモデルにした『ラルフローレン・ボーデルヴィフト』。ドイツ代表候補生。銀髪赤目に右目に眼帯。そして眼帯の下は金色の目のどう見ても中二キャラ。壱佳を憎んでいる。専用機は【シユヴァルツェア・リヒト】。基本的にIS……じゃない、IFの性能と武器は原作のISとほぼ同じ。

かんちゃんをモデルにした『逆色^{さかしき}神薙^{かんなぎ}』。努力家でいつも控え目。ただし通すべき所は押し通す気概のある眼鏡の似合う少年。

そして生徒会長である兄にコンプレックスがある。身長もほんの少しだけ届いていない。

専用機は【頑鉄^{がんてつ}式式（未完成）】。ゲーム中に完成させるにはルート入りが必須だったりする。

たっちゃんをモデルにした『逆色^{さかしき}武在^{たけあり}』。天才肌で努力家な完璧

超人……に見えるが、仲良くなつていけば行くほどに、そのお茶目な所やヘタレたところが見えてくる。

専用機は【ミステリアス・ジェントル】。近接・中距離技巧型。

真耶先生をモデルにした『佐藤 真岬』。優しい先生で、常識人。

ただし、千尋をからかおうとしてはほこされる。そんな役割がある。専用機はなし。ただし、訓練機でもかなり強い。

そんなキャラクター達がイベントを通して戦い、友情を育み、恋をしていくゲーム。

それが【インフィニット・フォーチュン】。通称IFと言うゲームだ。

……ちなみに、ラルちゃんとシヤルとたつちゃん以外には許可をとった。隠しキャラとして東姉さんがモデルのキャラと弾がモデルのキャラも居たりするが、攻略するにはオープニングの約七秒の間に×ボタンを百回押すという常人には難しいことをやらなければならぬ。

……それでも、ちー姉さんがモデルのキャラとのベストエンドよりはずっと楽だけど。

事の始まりは、ある少女が寮インカマではないの俺の部屋にゲーム機を持って遊びに来たところまで遡る。……まあ、それも精々五分くらい前の事だ。そのハードで使えるソフトがIFしか無かったので出してみたんだが、なんとその娘さんがIFの大ファンだったらしく、俺の持っていた初期生産版を羨ましそうに眺めていた。

「やらんぞ」

『デロデロデロデロデロデロデロデロデロデロデロデロデロデロデロ！』

「え、ちよっ、なにしたの!？」

「隠しルート『千尋ベストエンド』の道を開けて、隠しキャラクタ

ー『五こ圈けん間ま 円えん』を出して、隠し難易度『鬼神』を出しただけ」

「千尋さんエンド以外はどれもこれも聞いたことないんだけど!？」

「ベストエンドだから少し変わるぞ」

「なんでこんなの知ってるの!？」

「教えてあげない」

その方が面白そうだから。

……さてと。一応頑張ってみるか。

難易度鬼神、開始

『私……織野 壹佳。今日からここ、IF学園に入学します!』

そんな文句から始まるIFだが、難易度が鬼神だとかなり操作の自由度が上がる。

それは主に戦闘時の事で、普通は三次元の行動を横から眺めて操作する形で固定されているが、難易度が鬼神だと自分の使うキャラクターの視点で戦闘を楽しめるようになる。

……ただし、一人プレイの時のみ。

今回は周りの人のことも考えて観戦しやすい横からの視点にしているが、パイロット視点も中々楽しい。

それだけではなく、壹佳に一夏らしい行動をとらせることもできる。具体的には、高飛車セシルの揚げ足を掬い、言葉尻を捉えて言葉で惑わす……といった機能が実装されている。

流石は篠斑製品だよな。俺と束姉さんの作った書類上にしかない会社だけだ。

経営者は篠斑 十柄とつかとなっている。実際は違うが、ばれなければ問題ない。

そう思いながらフレキシブル射撃を繰り返すセシルの攻撃を高速機体制御と加減速で避け続け、そして壹佳の操る白蓮の零落白夜でセシルを落とす。

『これで決めるっ! はあああっ!』

「……………ねえ、織斑君。これってこんなに完成度高かった?」

「実は初回版以外はスペックが下がってたり」
「だからあんなにプレミアついてたの!？」
「さあ？」

画面の中では吉佳が零落白夜を解除し、にっこりと優しい笑顔を浮かべながらセシルに手をさしのべていた。こうしてフラグは乱立していくわけだな。

「……笑えばいいだろう！嘲ればいいだろう！！あれだけ大口を叩いておいて、無様に敗北した僕を！」

「……笑わないよ」

吉佳は、涙を流して悔しがるセシルの頭を抱き締めて、ゆっくりと撫でる。

「オーウェルさんは強いよ。強いから、今までずっとこうやって来たんでしょ？」

「……でもね？　ずっとそうやって強く、硬く……って思っているも、硬いだけの物って結構脆いんだ」

「……だからね、オーウェルさん」

誰かに頼っても……泣いても、いいんだよ？

わー超展開、と思って見ているが、セシルは吉佳の胸に顔を埋めて泣き始めた。

テストで何度か見ているとはいえ、やっぱりよくわからない。人間の心ってのはわかりづらいなあ……。

「……見苦しい物を見せてしまったな」

しばらくしてセシルはそう言う。その顔は僅かに羞恥の色に染まっている。

しかし壱佳はそんなセシルに笑顔で言った。

『ううん。なんだかやつとオーウェルさんの素顔が見れたみたいで、嬉しかった』

そこでセシルは、壱佳の胸元についた自分の涙の染みに気が付き、さっきまでの状態が想像以上に不味い状態だったと言うことに漸く気付いた。

そのセシルの視線を追って、壱佳は自分の胸を見下ろす。

そして少しだけ顔を赤くして、セシルに言った。

『……女の子の胸は、男の子の涙を隠すためにあるって円えんが言ってたけど……あんまりじつと見ちゃ……やだ』

「ぶつはあぁっ!?!」

「がはっ!?!」「ぼっ、ぼっ……」

「ぐふう……」

……あつれえ?　なんか画面のセシルよりも後ろの鈴達の方がダメージでかいみたいなんだが。

「……ひ……卑怯よこんなの……いきなりそんな……」

「……」(だくだくと鼻から愛情混じりの血を垂れ流しながら倒れているセシリア。恍惚とした笑顔はもう淑女を名乗れなくなってしまうほどのレベル)

……ちなみにこのシーン。東姉さんもヤバい感じで痙攣しながら気

持ち悪い笑い声を上げてしまうほどの威力があるらしい。
千の顔を持つ英雄を使って絵を作って読み込ませてやったんだが…
…まあ、一秒間に52枚もあれば十分動いて見えるな。

わたわたと慌てるセシル。ちょっと顔が赤い筈。

……まったく。ゲームとはいえ、初々しいな。

それから色々あつて、最終的に俺はなんとか千尋さんの最後の分岐に辿り着いていた。

……ここに来るには、全ての戦闘で一撃も食らっちゃいけないからかなり神経使ったよな。

廉の拡散衝撃連砲とか、シャルのラピッド・スイッチによる弾幕とか、ののくんこと東雲の緋桜のエネルギー攻撃とか、ラルフローレンの慣性停止。シルバリウス・エヴァンジェルのエネルギー弾の雨に神薙のミサイル弾幕に武在の水分による爆破能力など、白蓮ではかなり避けづらい能力は多々あつたが、それでもなんとか生き残ってきた。

……そのかわり、かなり疲れた。まあ、疲れた後の睡眠は格別だから、それもいいんだけど。

『……やっと……ここまでできたよ。兄さん』

『……ああ』

そう言って画面の二人はIFを展開し、空中に浮かんで睨み合う。

『……どうしてもやるのか？』

『……』

千尋の問いに、壹佳は短く答える。

二人とも使う獲物は剣。近接特化、速度と攻撃力に特化した二人の間では、恐らくこの空間はゼロに等しいだろう。

『……行くよ、兄さんっ！』

『来い、壹佳』

そして壹佳と千尋がぶつかり合う絵が流れ、バトルが始まった。

……ちなみに千尋の専用機である夕柳の唯一仕様の能力は、壹佳の白蓮と同じ零落白夜。ゲーム内ではまともに当たれば一撃必殺だが、発動中はHP代わりのシールドエネルギーが無くなっていく仕様になっている。

オンオフは自由にできるが、使い所が難しい能力の一つだったりする。

そして今、画面の中では零落白夜同士が干渉しあって火花を散らしている。

お互いに少しずつシールドエネルギーが減っていくが、それでも零落白夜発動中の千尋と鏢迫り合いをするのに零落白夜を使わないわけにはいかないのでこうして戦っている。

時間は3分。この間に、自分のシールドエネルギーを守りきり、かつ千尋を落とさなければならぬ。

後ろで目をキラキラさせているのはほん達の期待に応えるのも、まあ、悪くない。

ただ、それは神経を疲れさせるついでだけ。

さあ、行くか！

難易度鬼神、おしまい

千尋との戦闘は、なんとか吉佳の勝利で幕を閉じた。

零落白夜を使用中の千尋の強攻撃はほぼ一撃必殺なので、すべて避けるか同じように零落白夜を発動しているこちらの強攻撃で打ち落とすとした。

斬り合い、防ぎ合い、お互いの動きを牽制し、そして最後に千尋を切り捨てた吉佳は、今は千尋に膝枕をしていた。

『……兄さん。兄さんは覚えてないと思うけど……私の夢は変わってないんだよ?』

ほんの十秒ほどの短い回想。吉佳が笑い、千尋に抱きついている。

『お兄ちゃん。私、大きくなったらお兄ちゃんのお嫁さんになる!』

それに千尋は苦笑して、吉佳の頭を撫でる。

『じゃあ、兄さんより強くなったらな?』

『う……頑張る!』

そんな、幼少期の一コマ。

『……兄さん。私、強くなったよ? 料理も上手にできるし、掃除も洗濯もできるよ?』

吉佳は、千尋の髪を撫でながら話しかける。

シールドエネルギーを一気に削られて気絶した千尋はそれを聞いてはいないが、それに構うこともなく。

さらりと千尋の前髪を掻き分け、杏佳はにこりと笑顔になった。

学園を卒業した杏佳は、代表候補生の座を蹴り、IF関係の研究所で働いている。

千尋に勝利した杏佳は、事実としてIF操縦者としての最高峰に居るが、本人はそんなことはどうでもいいと切り捨てて、未だに千尋と一緒に暮らしている。

……ただ、その関係は今まで通りの物とは少し変わっているようだったが。

『……兄さん。千尋兄さん！朝だよ、起きて！』

『む……』

もぞり……と千尋は身動きし、自分の体を揺する杏佳に視線を向けた。

『おはよう、千尋兄さん』

『……ああ』

ジャージ姿で布団から這い出す千尋に、杏佳はしょうがないなあと言っような視線を向ける。

『……飯はできてるから、一緒に食べようね』

『……ああ』

まだ少し寝ぼけている千尋は、素直に言葉を返す。
そしてゆっくりと立ち上がり、吉佳に続いて自分の部屋のドアを開けた。

そして、吉佳に向けて一言。

『おはよう、吉佳』

吉佳は千尋の言葉に、にっこりと笑って返した。

「……………これで終わりだ。どう見ても熟年夫婦だよな」

「……………ぐぶっ……………吉佳が一夏をモデルにしてるからって……………脳内変換しすぎたわ……………」

どさっ、と倒れる音がして、ついに最後まで残っていた鈴が倒れてしまった。

ちなみに。ラルちゃんとのほほんは途中で俺のベッドに侵入して寝息をたて始めていた。

「……………ところで、何でこのルートのことを知ってたの？」

あ、シャルが復活した。自分の血は自分で片付けようとポケットからティッシュを出している。

ありがたいな。血の匂いの中でも寝れないことは無いけど、あんまり良いもんじゃないからな。

……………で、俺が知ってる理由だっけ。

「製作者の意向により、テストプレイヤーは俺がやったからコマンドとかルートとかは大体知ってる」

「こんなところにまで関わってるの!?! 一夏って何者!?!」

転生チートな一般人。ただし異常に眠たがり。

……とは答えられないよなあ……。

「化物じゃね? 知らないけど」

「知らないのに自分で自分を化物扱いしちゃうの!?!」

面倒だからな。

……さてと。いい感じに疲れてきたし………寝るか。

電源を落とし、ソフトを取り出した後のゲーム機を屍のようになっている持ち主の上にそっと置いておく。

ソフトはケースにしまってから元々置いてあった所に戻す。

それからさっさと布団に入って、中に入っていた抱き枕を抱き締めながら寝る。

……ちよっとむーむー言っていたような気もするが、きつと気のせいだろう。

side 更識 簪

一夏が眠ってから、私はむくりと起き上がる。それをきっかけに、本部長も篝も起き上がる。

「……一夏は寝たみたいね」
「そのようだな」

筭と本部長はそう言いながら窓を開け、それから鼻血の後始末を始めた。

カーペットの両端に移動し、同時に片手をカーペットに叩き付ける。するとなぜかカーペットから血の塊が跳ね上がり、粉々に碎かれながら窓の外に飛び出していった。

「え、ちょ………どういう原理！？ どうなってるのそれ！？」

小声で叫びながらシャルロットがツッコミを入れる。

「あれは愛情が具現化したものだから、体内に戻すのは流石にできないけどこうやって操るくらいは………ね？」

「『ね？』じゃないよ！？ 普通無理だよ！？ と言うか人間だったら無理じゃないと色々不味いよ！？」

「大丈夫よ。愛と気合いと愛情とラブでなんとかなるわ」

「そのうち三つは同じだから！ 実質二つだから！」

「じゃあ追加でアモールと意気を」

「それでも二つだよ！？」

……… 大変そうだなあ。

そう思いながら、私は一夏の寝顔を枕元で眺める。一夏が抱き締めているのは……… 本音らしい。そう言えば、先にベッドに入ってた………。

「……… 本音は……… いいなあ………」

一夏の背中にはラウラがくっついていてる。なんだかラウラは、いつも一番目ではなく二番目の位置にいるような気がする。

すやすやと眠る一夏を見てみると、なんだか私も眠くなってくる。

私はディスプレイを外して一夏の枕元に置かせてもらい、ぼんやりと一夏を見つめながらゆっくりと眠りに落ちていく。

そうしていると、肩になにか布がかけられた。多分、かけてくれたのは本部長だと思う。

誰かに頭を優しく撫でられながら、私は薄く開けていた目を閉じた。

タッグマッチ、お相手は？

キャノンボール・ファストから少しして、専用機持ちのレベルアップを図るといふ狙いで全学年合同のタッグマッチをやるという発表があった。

「……今回は絶対に、負けてやんないわよ？」

こきこき、と肩を鳴らしている鈴。その背後には炎が見えるほどにやる気に溢れている。

「……ふう。それはこちらの台詞だ。首を洗って待っている」

今度は目を閉じてゆっくりと呼吸を繰り返していたのちゃんが、ゆっくりと目を開く。

何故か異様に張りつめた雰囲気を持っており、迂闊に触れたら切り裂かれてしまいそうだ。

「わたくしのこともお忘れなきよう。挙げ足を掬われますわよ？」

セシリーが胸の前で組んだ手を解き、鋭い視線を向ける。

「ふん。ならば掬う手ごと踏み潰してやる」

ピリピリとした空気を発散させながら、ラルちゃんが進み出る。右目の眼帯は外され、金の瞳が露になっている。

「……私だって……負けないから……っ！」

かんちゃんは可愛いなあ……。

「一夏。号令はお願いね？」

シャルも参戦し、なんだか更に空気が剣呑になっていく。

「……………それじゃあ、さっさと始めようか」

俺の言葉と同時に、全員が身構える。

両足を前後に開き、腰だめに構えるもの。拳を作り、前に突き出すもの。両足を肩幅に、手を振り上げるものと構えは様々だが、どれも共通する物がある。

それは、勝ちたいという思い。勝利への執念と言い換えてもいいそれが、この場にいる六人の少女の目に渦巻いている。

「み、皆さんいったい何をしてるんですかあ!？」

どうやらこの空気に気付いて来たらしい真耶先生があげた、悲鳴のような言葉。それが引き金となり、無慈悲なる勝負が始まった。

「セーのー!」

「……………最初はグー!じゃんけんポン!!……………」

何故か真耶先生が頭からずっこけた。だが、ののちゃん達はそんなことを気にする事もなく勝負を続行する。

そう、戦いはまだ始まったばかり。六人の少女達によるじゃんけん

は、まだ終わらない。

side 篠ノ之 篇

全員が手を振り上げ、そしてそれぞれがバラバラに手を変えながら振り下ろしていく。

じゃんけんで一番厄介な相手は鈴。次いでシャルロット、ラウラ、セシリアが入り、最後に簪が来る。

未来予知レベルの勘で手を変える鈴と、異様な幸運を持ち合わせるシャルロットの二人はまず落としておきたい。しかし、周りの者にとっては私も相当の敵になるらしいので、協力は不可能だろう。

ならば私は周りを利用し、その上で勝ってみせよう。

そして全員に勝利し、大手を振って一夏とタツグを組む。

一夏はそれを了解しているし、周りもこのじゃんけんの勝ち負けに従うと思うので大丈夫なはずだ。

もし破ったら、次回のじゃんけんで決まったことに口を出されてしまう可能性がある。それを理解していない者はじゃんけんに参加していない。

グーからチョキへ。そしてチョキからパー……と見せてグーへ。周りの手を見ながら私も手を変えていく。

私達の中でこのスローの世界に入れないものはいないため、じゃんけんの時にも試合の時にも有効活用している。

……だが、こういつた思考と理論に関することでは、セシリアが私達の中では最高峰だ。

セシリアの戦闘・小規模戦術理論は凄まじい。中から大規模理論を得意とする簪とは即応性の部分で大きく差をつけている。

ある程度大きく、予想のうちの出来事に強い、艦隊司令官のような性質を持つのが簪ならば、セシリアはその場で戦況を判断する部長、といった所だ。

ラウラと私は似ている。違うところと言えば、ラウラは私達の中でも群を抜く動体視力をフルに使ってその場に合わせて手を変えるが、私は気配で相手の手を読んで、それをある程度の指針として手を変える。

言ってみればラウラは近接兵で、私は弓兵といった所だろう。

……千冬さん？ 完全版の巨神兵か何かではないか？

一度目のストロークが終わり、全員が全員の手を確認する。

鈴はチヨキ。シャルロットもチヨキ。セシリアはパー。ラウラはグー。簪がチヨキで、私がパー。

結果があいこだったので、もう一度全員が手を振り上げる。

「……………あいこでしょっ！」「……………」

また、全員の手が異様な速度で形を変える。速度を上げすぎて手に絡み付く空気が重いが、どうということはない。

グー、パー、グー、チヨキ、パー、グー、チヨキ……………。次々に変わる手は、またあいこを示す。

私達は、決着がつくまでひたすらじゃんけんを続けるのだった。

184回のあいこの結果、誰もが一瞬意識を外した瞬間について手を変えた簪が一夏と組むことになった。

余り物となってしまうた私達は私達どうして組もうとするが……やはり、奇数人であるために一人余ってしまう。

鈴はいつものようにセシリアと組み、シャルロットはラウラと組む。私とシャルロットが組んでもよかったのだが、その場合はラウラは恐らく更識生徒会長と組むことになると言つことが容易に想像できたため、シャルロットと組むことに。

こうなったら、恐らく私は一夏曰くの猫座の生徒会長改め更識生徒会長と組むことになるのだろうな。

……まあ、どの程度強いのかは知らないが、ラウラとかなりいい勝負をしたと言っていたから……かなり強いのだろうな。

それでは私はIS訓練でもしていようか。時間はまだあるしな。

インタビュー、面倒臭い

じゃんけんバトルによってタッグパートナーを決めた次の日の二時限目の休み時間のこと。一年一組に新聞部の眉剃我まゆそり鳴子かなりこさんがやって来た。なんだか五月蠅そうな名前だが、きつとまた間違っているんだろうしなにも言わないでおく。

「やつほー、織斑くん。篠ノ之さん」

「……………ふにい……………なに？」

「ああまつたく一夏は……………失礼、なんででしょうか？」

「織斑くんは相変わらず寝てるわね……………。簡単に言くと、私の姉が出版社で働いてるんだけど、」

「申し訳ありませんが、インタビューはお断りいたします」

「内容は合ってるけど最後まで言わせてほしかったかなあ……………ちなみに、こんな雑誌なただけどね？」

そう言つて祭木さんが取り出したのは、俺の人生の中でも俺が読むことはないだろう種類の本ベストエイトに入っている、ティーンエイジャー向けのモデル雑誌だった。

……………たとえ俺が女だったとしても読まないと予想される本を取り出されても、正直に言つて反応に困る。

「織斑くんはどう？ モデルとかやってみない？」

「や」

「一文字つて……………そこをなんとかならないかなあ……………？」

「やだ」

「有名ホテルのディナー招待券とかもらえるよ？」

「いやだ」

四回目を言ったらノイズイハーメルンで操って辞めさせよう。周りも巻き込まれるけど、そつちは直ぐに解除させれば良いんだし。そう思いながらじつとりと眺めると、巻紙さんは苦笑いを浮かべながらこりこりと頬を掻いた。

「あははは……そんなに嫌？」

「や」

ぴつちりしたスーツとか嫌いなんだよね。この改造しまくった制服（かなりゆったりしている。サイズがひとつ大きいだけでも言う）くらいがちょうどいい。

「……正直に言つて、高級ホテルとか全く魅力を感じない。五反田食堂でみんな食べる食事の方が好み」

「ならば今度食べに行こう。……楯無さんはどうしますか？」

「ふふふ……ばれちゃあしょうがないわね。私も行かせてもらおうわ」
「！」

扉の影に隠れていたたつちゃんは、のちゃんの気配察知能力によって隠行を見破られてしまったが、さっさと出てきて高らかに参加を表明した。

「あ、私も良いかな？」

「いーよー」

ちやつかりと参加したがった真狂まぐるまいさんにもOKを出し、その場はお開きに。

……そう言えば、鈴とかセシリーみたいな代表候補生はモデルとか

もやってるらしい。今度見せてもらったりとかもできるかね？

「え？ あたしが出てる雑誌を見てみたい？」

「うん。駄目？」

「いや別に駄目じゃないけど……………何て言っか、急に言われるとちよっと恥ずかしいわね……………」

そう言っただけに頬を朱に染めながら、鈴は鞆から雑誌を取り出す。どうやら今日はなぜか持ち合わせがあったらしい。

差し出された雑誌を受け取り、鈴がモデルをやっているところのページまでを適当に読み飛ばす。正直に言っただけ、中国語だからなにが書いてあるのか一切わからなくてちよっと困る。

それでも適当に読み飛ばし、ようやく鈴が写っている写真を見つけた。

……………どうやら、鈴の写真には大きく分けて二種類のコンセプトがあるらしい。

一つはショートパンツやらウィンドブレイカーやらを着ている元気を前面に押し出した写真。そしてもう一つはそれとは真逆に、落ち着き払ったクールさを前面に押し出した写真だ。

ただ、これは両方鈴であるが、これだけが鈴かと言えばちよっとばかり足りない。

元気で活動的な鈴。思慮深く、落ち着いている鈴。大切なもののために熱くなる鈴。友情を大切にして、その中ではしゃぐ子供っぽい

皆行こうよ、五反田食堂

約束通りに五反田食堂に行く。ただし俺はののちゃんに背負われて頭の九割以上が寝ている状態だが。

最大限小さくなっている（できるだけ小さくなってる、ってことね。だいたい88センチくらい）ので運ぶのは楽だろうが、それでも20キロくらいはあるだろうから重いんじゃないかと思っている。

ちなみに、服装は全員私服。俺は変型版シルバースキンを着ている。形は、ゆったりとしたトレーナーとズボン。寝やすい寝やすい。

「……ふふふ……役得だ」

「帰りに一夏をおんぶする人を決めるじゃんけんしましょ。箒は行きに運んだから帰りは自重して」

「ああ、構わないとも。十分と言える程度には堪能したことだしな」
「……いいなあ……箒は……」

「お肌がつやつやしていますわね。これも一夏さん効果でしょうか？」

「ストレスにはよく効きそうだね。胃痛的な意味で」
「……すう……すう……」

「……楯無お姉さんのことも忘れないでね？」

「寝ているボーデヴィツヒさんの写真って撮ってもいいのかしら？
新聞部のドイツの娘に本国から圧力がかかってるらしいし……
人助け人助け……パシヤリと」

こらこらそこのIS学園のパパラッチ。許可なく写真とか撮って、訴えられたら負けるぞ？

まあ、俺のが撮られなければ別にいいけど。

ガラガラガラ……と五反田食堂の扉を開けると、そこではいつもの通りに弾のお祖父さんの爺さんが鍋を振るっていた。

鍋を振り続けたその筋肉はきれいに引き締まり、炎の前にずっと晒され続けて浅黒く焼けている。

座席はおよそ半分くらいが埋まっていて、その間を笑顔を浮かべた弾が動き回り、料理やら水やらを運んでいた。

「いらつしゃい……一夏は相変わらずだな？」

「貫徹しようとしてる一夏なんて見かけたら多分あたし自分の正気を疑うわ」

「あっはっは……俺もだ」

そんな聞きようによっては失礼なことを言いつつ、弾は俺達を空いている席に案内した。

「それじゃあ、用があつたら呼んでくれ」

そう言つて弾は厨房の方に引っ込んでいった。

「……蘭か？ 今すぐおめかしして店に来るといいことあるぜ？」

「……そうそう。早くな〜」

そんな声が聞こえたが、まあ、いいや。

とりあえず俺は五反田食堂名物の業火野菜炒め定食にしようか。

「あたしは五目炒め定食つと」

「それでは私は焼き魚定食にしよう」

「……どんな物が全然わかりませんわ……」

「僕のおすすめは業火野菜炒めかな。美味しいよ?」

「焼き肉定食も中々だ。まあ、個人個人で感想は異なるだろうが…」

「この料理は基本的に美味しいけどな」。

「……それはそうと、シャルやラルちゃんはここにはあまり接点がない筈なのに、妙に即決するな? 結構何度も来てたりするのかな?」

「まあ、月に2〜3回は来るな。そろそろ常連扱いしてもいいんじゃないか?」

「そんなに来てたのか。IS学園の食堂の料理も美味しいけど、この料理も美味いからなあ……」。

「……一夏つてば……嬉しそうね」

「美味しいご飯は睡眠の次の皆の次の楽しいことの次に好きだから」

「あら、結構上位」

「ちなみにその次は嫌いな相手を罵倒すること。ただ、ここから先は自分から進んでやろうとは思わないけど」

例えば、俺が来た時には既にそこにいたマゾカをわざわざ馬鹿にしようとはしない。

マゾカは色々と驚いたような顔をしている。弾とは少しばかり因縁があるはずだが、弾もマゾカもそれを表に出すことは無い。

「……まあ、マゾカは弾の顔を知らないだけかも知れないが、弾はマゾカの顔を知っているはずだ。」

「何度も空中でぶつかりあってたし、その時に顔くらいは見えていたはずだ。」

……弾だったら、顔が見えていなくとも気配やら雰囲気やらで個人の特定くらいは簡単にやりそうだけだ。

「いやいや。いくらなんでも一瞬見ただけの相手とか初対面の相手の特定は……」

「できないの？」

「……名前はわからないが、できるぞ」

初対面の相手の名前がわかったら、いくら弾でも驚きだよ。

多分マゾカの名前とかもわかってないだろうし、その事情とかもわからないはず。

わかってても客として店に来た場合はちゃんと客として扱うだろうし、どれだけ腸が煮えくり返っていてもそれを表に出すことは無いと思う。

俺の親友は、たまにこっちが心配になるくらいに内心を隠したりするのが上手いから……俺がこうして見に来たりする。

でも、結局隠し事が上手いことには変わりなく、俺にはガス抜きくらいしかできないんだけどな。

「はいお待ち。……それで、そちらのお二方のご注文は？」

弾は営業用の笑顔を浮かべ、たちちゃんと幕張さんの二人に向けた。

「……私、一夏と同じの……」

「あ、じゃあ私も！」

「え……じゃあ私もそれに」

「毎度！」

かんちゃんとなつちゃんの姉妹と、まろやん升隙さんの注文を受け、弾はま

たカウンターに引っ込んでいった。

五反田食堂、蘭ちゃん登場

弾が蘭ちゃんに電話を掛けてから約十分。ずいぶんめかしこんだ蘭ちゃんがエプロンをつけて現れた。

なんというか、よそ行きの服にエプロンって言うのはなかなか見ない格好だが、蘭ちゃんくらい可愛いとそれでも似合ってしまうから不思議だ。

「い……いらつしやいませ、一夏さん」

「やつほー蘭ちゃん」

もきゅもきゅと野菜炒めを食べながら、蘭ちゃんに向かって片手を上げることで挨拶をする。

久しぶりってほど久し振りでもないし、挨拶は簡単に。

「ん〜？ なになに織斑くん、この可愛い娘？ ひよつとして彼女とか？」

「九月四日の全校集会終了間際のたっちゃんみたいになりたくなければ黙れ」

「一夏普通に脅迫しちゃった!？」

「いったいその日に何があったんですか!？ って言うか何をしましたんですか!？ そしてどうなったんですか!？」

シャルと蘭ちゃんのダブルツツコミ。息のあったツツコミは見ていてなんだか楽しくなってくる。

あまり関係はないが、蘭ちゃんは目の前で何度も鈴や弾が俺に『あーん』で食べさせているところを見ているため、そういったことには耐性がある。

それどころか蘭ちゃん自身が俺に『あーん』で食べさせたことも、俺に『あーん』で食べさせてもらったこともある。

毎回毎回初々しい反応が帰ってきてくれるから、本当に飽きない。やっぱりかんちゃんと似てる。

きつと蘭ちゃんはISを動かす時には感覚でやっちゃうタイプだろう。なんとなくだがそう思った。

「あ……あははは……ちょっとそれは嫌かなあ……なんて……」

「……お……お姉ちゃん？　なんだか目が虚ろだよ……？」

「あははははは……だいじょうぶよかんざしちゃん……おねえちゃんはまだだいじょうぶよ……あはははははははははははは……」

「……………」

大丈夫ではないように見える。ただし原因は俺なんだけど。

「世の中には知らない方が良いことってのがあるんだよ。胃痛的な意味でも他の意味でも」

「胃痛の方には全力で同意しようかな。たまにキリキリ来るもん」

あら、シャルつてば胃痛持ち？　それは大変だ。今度俺が胃に優しい食事でも作ってやるう。

ちなみにこの胃に優しい料理は、酒を飲みすぎたちー姉さんや自作のゼリー飯ばかり食べていたせいで固形物を受け付けなくなつた束姉さんも絶賛していた。

まあ、束姉さんの方はその後にしつかりご飯を食べるように教育したけど。いくらなんでもそこまで行くのは不味いからね。

俺が言つて良い台詞じゃないって？　俺は良いんだ。魚雷……じゃ
ない、そこまで行く前に食べてるから。

「……そう言えば、最近何食べた？　キャノンボール・ファストの

時は忙しくてあんまり見てあげられなかったけど……」

「……水？」

「他には？」

「……そうそう、豆腐ハンバーグを食べた。カロリー控えめのやつ」

「いつ？」

「………昨日の昼？」

色んな所から食べ物突き出された。弾もそれを聞いていたらしく、厨房で巖さんに追加注文をしている。

「………食べ」

「頼んだっけ？」

「あそこの客からだ」

示された方を見てみると、マゾカが俺に憐れみの目を向けていた。お前って俺を殺したいんじゃないじゃなかったか？

………まあ、食っけど。

ののちゃんたちから差し出されているのを食べ、新しく出てきたのを食べようとすると、なぜかそれは蘭ちゃんの手の中に。

「は、はいー夏さん。あーん」

………何故に？

………まあ、いいか。

「あむ」

もぎゅもぎゅ………。

おいしつ。

そのまま新しく来た分が無くなるまで蘭ちゃんに『あーん』で食べさせてもらった俺は、じゃんけんの勝者であるシャルの背中で寝けている。

マクロスさんは蘭ちゃんに食べさせてもらったり、口許を拭いてもらったりしていた俺を見て色々と囁し立てたため、暫くの間黙ってもらうことになった。今はたっちゃんの背中ですらごめんなさいを繰り返している。

……ひぎいって声を聞いたのは、昔ちー姉さんが束姉さんにアイアンクロー（格闘タイプ）その他で上げさせていたのを聞いて以来だ。ちなみに、その時束姉さんが悦んでいたことは言うまでもない。束姉さんって相手は選ぶけど大体のことはできちゃう超ハイレベルな変態だからな。セシリーと同じくらい変態なのかもしれない。

……いや、それは無いか。……無いよな？ ……無いよね？
……無いといいなあ……。

現実逃避ということも含めて、ポケットの中の蘭ちゃんの学園の学園祭の招待券に意識を向ける。

ニヤニヤと笑っている弾と、チエシャ猫のような笑顔を浮かべていた蓮さんと、いつものように豪快に笑う敵さんに見守られ、蘭ちゃんは俺にこのチケットを渡してきた。

よかったら来てください、と言っていたが、あれは多分かなり本気で来てほしいんだらうな……。と思い、行くことにした。

原作では当日に束姉さん絡みで何かあったような気がするが、取り調べとかはサテライト30で作った分身に任せてやればいい。そうすればちゃんと時間通りに蘭ちゃんと学園祭を回れるし、取り調べも受けられる。

……取り調べとか面倒臭い、IS委員会と俺んところに来る実行部隊と世界中の政府関係者にゾナハをばらまいてやればボイコットできんじやないかと思ったりなんてしてないよ！

……なんかいま一瞬束姉さんっぽくなった。ちー姉さんに怒られる。

……ああ、怒られて暴行を受けるのは束姉さんだ。束姉さんは人間かどうかが怪しくなるくらい頑丈だから、多分大丈夫だとは思っけど。

IS魔改装、誤字にあらす

side セシリア・オルコット

わたくしは思う。わたくしには、ミサイルビットは合っていないのではないかと。

ミサイルを使う時なんてまず無いし、ミサイルを使うよりも一発でも多くレーザーを撃った方が効率的だと思うことも多々。

それに、ミサイルは遅いしわたくしの方で軌道を変えることもできないから使えたとしても牽制程度。鈴さんや篤さんだけでなく、ラウラさん、シャルロットさん、簪さんにはすぐさま叩き落とされ、その爆煙がむしろこちらの邪魔になってしまう。

ミサイルを使うのならば、もっと数を増やしてでなければ効果が相当薄くなってしまふ。

「……と言つことで、ミサイルビットをシールドビットに変えてくださいな」

わたくしは現在、本国のIS整備部門担当者に国際回線で電話を掛けています。

元々この機体、つまりブルーティアーズは、BT兵器の実働データのサンプルを取るためにわたくしに預けられた物。例えばこれが実弾兵器を送れといった内容ならば突っぱねることも可能でしょうが、今回わたくしが要求しているのは実弾兵器であるミサイルビットを、BT兵器であるシールドビットに改装すると言つもの。早々拒否されることは無いはずですよ。

『なぜシールドビットなのですか？ 通常のレーザービットでも問』

題は無いように思われますが」

「シールドビットはBTエネルギーによるシールドを張る装備です。それをミサイルビットと同じように腰元に常備しておけば、最後の切り札と言う面では最高の結果を出せると思われれます。レーザービットではそうはいきません」

それに、BTエネルギーシールドはシールドとして発現していても元はBTエネルギー。シールドそのものを變形させ、近距離用の武器として扱うことも可能なはず。

そして恐らく、今のわたくしにはそれが実際にできてしまう。

『しかし』

「ああもう。それでは言い方を変えますわ」

わたくしはいつまでもうだうだと無益に言葉を続ける整備部門担当者に、さっさと腹を決めるようにと言葉を紡ぐ。イメージは、わたくしの事をひたすら虐め抜いた、乱暴で鬼畜な一夏様。

息を吐いて、吸って、

「あなた方が亡国企業にシールドビット付のサイレント・ゼフィルスを奪われたお陰で、こちらに凄まじい被害が来ているのです。あなた方の尻拭いくらいは自分でやってくださいな。わたくしもあなた方の拭き残しがついた汚い尻を磨いてやるなんて面倒なことはお断りしたいのですが、それをやらなければわたくし達に被害が来ますのでやっているのです。自分達で失態を拭えないって言うなら、せめて便宜の一つや二つははかりなさいな。それすらもできない……なんて自らの無能をひけらかすようなことは、ま・さ・か、いたしませんわよね？」

言外に『サイレント・ゼフィルスを奪われたという失態を隠せなんて命令は受けてないから、シールドビットの二つ三つを送ってくれなければぶちまけますわよ?』と言っているに等しい言葉を吐く。

脅迫? いいえ。これはあくまでもただの『お願い』ですわ。

ただ、向こうの方では完全に絶句していますが……まあ、気にしない方向で行きましょうか。

「……それで、お返事は?」

わたくしは見事にミサイルビットをシールドビットに変えることに成功いたしました。

しかし、このころからわたくしは本国で『女王様』という渾名をつけられることになってしまいました。

……嫌ですね。わたくしは一夏様のペットになることを心から望んでいる、ただの白豚なのですが……。

side 凰 鈴音

「衝撃砲は両方通常型の貫通衝撃砲で、双天牙月は刀刃仕様にして、腕部衝撃砲は外して高電圧縛鎖ボルト・チェーンをつけて。それから追加スラスタで速くなくていいから転回能力を上げられる奴を一つに、脚部の隠

し武器を解禁させてね。衝撃砲についてはこっちでどうにでもするわ。三日で仕上げてよ。仕上がった甲龍に乗って使い心地を確かめなくっちゃいけないんだから」

「なっ……そんな、三日なんて無理です！」

「……あ？ 今なんつった？」

「それに脚部のブレードの解禁は少し時間がかかりますし、腕部の衝撃砲を外して高電圧縛鎖を取り付けるというのも許可をとってからじゃないと」

「おい」

「ヒッ！」

むこうでグダグダしている馬鹿に、たった一言だけ呟いた。

それだけで相手は小さく悲鳴をあげて黙り込む。そんな相手に、私はさらに言葉を続ける。

「聞こえなかった？ あたしは『やれ』って言ったのよ。申請なんてこの内容なら普通に通るわ。結果が出る前に作り始めれば間に合うでしょう？ 個人で作る分には軍は口を出してはこれないわ。例えばそれが実際に使われることになっても、結果がついてくればいいのよ。……だから、やれ。三度は言わないわよ？」

ブツンツ！と通信を切り、あたしは衝撃砲【龍砲】の最大出力の砲撃を行う。

圧縮され、左右の衝撃の弾丸が共鳴して威力が上がった衝撃砲は、アリーナの床に綺麗な穴を開けた。

……威力の拡散しない、いい砲撃ね。

あたしはそれにやや満足し、頷く。

……前回……キャノンボール・ファストではうやむやになっちゃっ
たけど……今回はそうは行かないわよ……？

ねえ、一夏？

IS魔改装、こつちも!?

side シャルロット・デユノア

……なんだかよくわからないけど、デユノアから様々な装備が送られてきている。一夏の指示かどうかは知らないけど、送られてくる武器の内容は凄まじいの一言。

…… たまにネタとしか思えないようなものもあるけど、そのあたりは気にしない方向で。

送られてきた装備をあげていくと……対レーザー用の盾。キャノンボール・ファストでも使った振動ナイフの強化版(【GK-06】)っていう名前で、なぜか一角獣の画像がついている)。25連ミサイルポッド。携行型88ミリ口径ガトリング砲が2つと、その弾が500000発くらい。新型の8連装パイルバンカー(しかも最後には杭が飛ぶようになっていて威力も割り増しされている。名前は【ラギアント・ジ・ゼモルク】)。レーザー砲とレーザー用の弾丸パック(一つで56発撃てるらしい)が20。6連装ショットガン(名前は【君の熱いショットガン】)が2つと、その弾が斉射18回分。小さいのに半径30メートルに爆炎と衝撃をばらまくことができるグレネードが3ダース。高速機動用の新型補助ハイパーセンサー。小型の追加スラスター(ちっちゃくたっていちにんまえと書いてある)五基。ワイヤーブレード四本。などなど……本当に多岐にわたる。

どうやらデユノアはISを三世代機にするのではなく、二世代機の性能を上げてそこに三世代の武器を詰め込むことによって、擬似的な三世代機を作り上げてしまったらしい。

……そんな発想が出てくるほどあの父親は頭が柔らかくはないから、きつとこれも一夏が何かやったんだらうなあ……。

そう思いながら思考操作式のワイヤーブレードを試しに振り回し、その使い心地を確かめる。

……うん、中々いいかな。でも、精密に動かしながら戦闘をちやんと続けるのは二本が限界かな？

大雑把でいいなら全部動かしながらも大丈夫だと思うけど、それだと多分僕自身にはわからない隙とかができちゃってそうだし……
…便利なんだけど、扱いに困るなあ……。

「いや、初めて使ったにしてはかなりの物だぞ」

「そ、そうかな？」

「ああ。数カ月前の私と同等かそれ以上だ」

「そんなに!？」

それって世界の代表候補生が中距離のメイン武器として活用できるレベルってこと!？　そして今のラウラはそれを遙かに越える技術を持つってって解釈しちゃっていいのかな？

「ああ。昔の私は未熟に過ぎたからな。今でも成熟したとは言いがたいが、それでも数カ月前の私自身と戦えば余裕をもって勝つことができるだらうよ」

「ラウラ凄っ!？　普通あそこまで強くなったら後は第二形態移行とか新装備とかそういうのを使わないと一気に強くはなれないと思うんだけど!？」

「私にとっては実に衝撃的な事があったぞ？　鈴とセシリアに敗北し、一夏とシャルロットに敗北し、あれだけ数を揃えたにも関わらず福音を落とせず、サイレント・ゼフィルスには荷物ごと逃げられてしまった。……これだけのことがあれば、よっぽどことがない

限りは自分がまだまだ弱いと。そして、まだまだ強くなることのできると思つのは当然だろう?」

ラウラはなんだか獰猛な獣や猛禽を思わせる笑みを浮かべた。正直に言つて、かなり怖い。

「……………ちょうどいい。私とシャルロットのコンビ結成記念に、お互いの力量を知るための模擬戦をしないか?」

ラウラはシュヴァルツェア・レーゲンを展開して言う。僕はとりあえず広げていた武装と弾を全て収納し、ラファール・リヴァイヴ・カスタム?（いつの間にかさらに改造されて驚いた。なんか拡張領域がさらに倍近くなつてたし……………）を展開する。

武器はとりあえず山のように送られてきた中から使いやすそうなものを適当に選んで装備している。

……………そう言えば、ラウラと一対一で模擬戦をするのって初めてかもしれない。

そう思いながら、周りに人がいないことを確認してから、キーン!と軽い音をさせてコインを上弾き飛ばす。

アリーナのバリアに直撃しない程度に力を抑えて弾かれたコインはゆっくりと重力に引かれて落ちてくる。そしてそれがゆっくりと見えているうちに、僕とラウラは戦闘準備を整える。

3……………2……………1……………

コインがアリーナの床に叩きつけられると同時に、僕とラウラは動き始めるのだった。

……ふと思った。今の私にマルチ・ロックオン・システムは本当に必要なのだろうか？ と。

マルチ・ロックオン・システムは確かに便利。けれど、後から操作して軌道を変えたり、相手の迎撃をかわしたりするにはマニュアルでの操作が一番いい。

最近は一夏を相手にミサイルのマニュアル操作をしながら近接戦闘をこなせるようになってきたから……そうやってみるのもいいかなあ……？

……そうそう、一夏と言えば、シロを調整し直した。

燃費はそこそこ考えられているけど、攻撃も防御も一切考えていない速度特化のシロをさらに速度に特化させたような状態になったから、戦闘に耐えられるくらいの状態に戻した。

お陰でシロは最高速度と加速力は若干落ちたけど、それを上回る燃費と攻撃、防御、機動力を手に入れることに成功した。

……それが無くても、一夏だったらみんなに勝てると思うけど。

……そうだ。ちょうどいいし、一夏からもらったミサイルを打鉄式に組み込んでおこう。これで少しは一夏に近付ける……と思うし。

……頑張ろう。優勝のためにも、私と一夏のためにも。

……優勝すると、食堂のデザート無料券がもらえるらしいし。

外伝 予知夢？ 簪編

時間的にはそんなに離れていないはずなのに、どうしてか妙に久し振りの気がするこの薄ぼんやりとした夢。今回出てくるのは、定期的にかんちゃんだろう。

向こうの世界のかんちゃんは、確か一夏に憧れのヒーローっぽい所を見出だして、それからすぐに告白に踏み切ったかなりアクティブな性格の内気さんだったような………なんだこの矛盾。

………まあ、いいか。そんな内気キャラが居てもいいだろ。にんげんだもの。

そう思いながら、どうやら学園の屋上で昼寝中という状態らしい一夏と、その隣にちょこんと座っているこっちのかんちゃんをかんちゃんの後ろから眺めてみる。後ろ姿しか見えないのに、百面相をしているのが手に取るようにわかってしまう。

………こっちの世界でも、やっぱりかんちゃんはかんちゃんだなあ………可愛い可愛い。

………お？ なんかかんちゃんの顔がどんどん一夏に近付いて………。

「………簪？ なにやってんだ？」

「ふええっ!？」

………接触寸前で一夏が起きてしまった。………まったく。本当に空気の読めない男だな一夏は。

そうじゃなかったら三巻の時点ですでに誰かとくっついてそうだけだ。

「え……えと……そのっ……」

顔を真っ赤にしてわたわたと慌てているかんちゃんを、一夏は不思議そうな顔で見つめる。鈍いなあ……。

「……パパは本当に鈍いなあ」

「うおうびつくりした！百秋……ってことは……」

「またお邪魔してみた。はいおみやげ」

そう言いながらいつものように青い犬耳（垂れてるタイプ）を一夏に装着させる。尻尾も自動展開され、夢の中限定だがぱたぱた動いたりしゅんと垂れたりもする。

「かんちゃんも。パパとお揃いだよ？」

「え……え？……ええ？」

なんだかよくわかっていない風のかんちゃんに、一夏とお揃いの青い犬耳を装着させる。……うん。似合ってる似合ってる。

「お……やっぱり可愛いな」

「かわっ！？」

一夏のその言葉を聞いたかんちゃんは、顔を真っ赤にして俯いてしまった。……世界が変わっても、やっぱりかんちゃんは可愛いねえ……。

「え……えっと……か……可愛いって……」

「簪は可愛いよ。その耳も似合ってるし」

「！？」

ぼふ、と頭に手を置かれ、そして優しくゆっくりと撫でられて、かんちゃんはまだ顔を真っ赤にして俯いてしまう。

しかし、かんちゃんの腰のあたりに自動で展開されている青い毛の尻尾は千切れそうなほど激しく振られ、その内心がとても嬉しいのだとすぐにわかる。

一夏もそれに気付いているらしく、さらに優しく微笑んでかんちゃんを撫でている。

……なんとなく仲間外れにされている気がしたので、一夏の制服の袖口を引っ張ってみる。

「ああ、悪いな百秋」

一夏はそう言っただけで俺の頭を撫でる。なんだかこの天然ジゴロは、ほとんど人の頭を撫でるのが上手くなっていくな。

自分の尻尾がぱたぱたと振られているのを自覚しながら、俺はそんなことを考えた。

きつと一夏は、起きたらもういつも通りの生活に戻るんだろう。

初めの頃みたいに慌てることもなく、俺が向こうに行った時みたいに騒ぐこともなく……。

……なんとなくだが、ちょっと悔しいような気がするの……
……なんでかねえ……？

頭を撫でているうちに寝てしまった百秋の体を引き寄せ、そして簪の事も同時に抱き寄せる。

「ふええっ!? あ、ち、近い……っ!」

「まあまあ気にすんなって。一緒に寝るの初めてじゃないんだしさ」

一昨日の夜は簪と一緒に整備室に泊まり込んで一夜を明かしたし、昨日は徹夜しようとして二人揃って失敗しちゃったしな。起きた時に俺の部屋じゃなくって驚いたぜ。

「そ……そう……だけど……っ」

「まあ、何て言っても一緒に寝るんだけどな」

「!?!」

腕の中でぱたぱた暴れる簪と、おとなしく胸のあたりに顔を埋めたまま眠っている百秋を抱え、ここは俺の部屋だとイメージする。すると、流石夢の中。移動した感覚もなにもなかったのに、俺の家の俺の部屋に居た。

簪は急に変わった周りの風景に驚いていたが、俺はそれには構わず布団に簪と百秋を寝かせる。

二人に背中を向けて着替え始めると、小さく驚いたような簪の声が聞こえたが、気にしないでさっさと着替えを終わらせる。

寝間着には千冬姉と同じようにジャージを使っていて、これがまた寝心地がいい。千冬姉がよくこれで寝ていたわけもわかる。

俺が着替えを終わらせて振り向くと、簪もどうやったのかパジャマに着替え終わっていて、俺のベッドに頭まで潜り込んでいた。

それでも指先は出ているし、頭のとっぺんは隠れていないからそこ

にしていることはよくわかるんだが。

「それじゃあ、寝るか」

布団に潜り込んだ簪の隣に入り、百秋と簪を同時に抱き締める。

簪はずっと顔を真っ赤にしていたけど……大丈夫なのか？

……そう言えば、楯無さんもこの時には顔を赤くしてたような気がするな？ 似た物姉妹ってことか。

そう言えば、あったなあ

ぼーっと寝ていたら、なぜかふと少し前のことを思い出した。今の今まで忘れてたんだが、思い出したんだし実行しようか。確か、調理室と言うか厨房と言うか、そんな場所を使うこともできたはずだし、さっさと終わらせちゃおうかな。

……料理を作るのは久し振りだけど、まあ、なんとかなるだろ。多分。

とりあえず、何度か失敗しても大丈夫なように材料は多目に用意しておこう。

ちなみに、作るのはクッキーだ。カロリー控えめなやつ。バターを使わないで作ればカロリーは結構抑えられるから、そうやって作るつもり。

俺にはよくわからないが、なんでか女つてのは基本的にカロリーとかそう言うのに偏執的なほど拘るからな。そうしといた方がいいだろう。

……さて、それじゃあまずは買い物から始めようか。アレルギーとかは……まあ、平気なはず。前にクッキー食べてるところは見たことがあるし。

何を作るうか？アーモンドもいいし、メイプルもなかなか。ココアや抹茶も作ってみよう。ざらめを乗っけてみたりするのもいいかもしれない。夢は広がるな。

朝早くに枕元で携帯が震える。どうやら電話がかかってきたらしい。画面を見てみると、そこには『鈴』の文字。こんな朝っぱらからいつたいなんなんだろうな？

そう思いながら俺は震え続ける携帯電話の通話ボタンを押し、耳に当てる。

「もしもし？」

『だ……だあん……ひっぐ……えぐ……』

「何があつた」

鈴がマジ泣きとか、よっぱどのがあつたとしか思えないんだが……。
とりあえずえぐえぐとしゃくりあげる鈴を宥め、どうにか話ができるくらいにまで落ち着かせる。

「……それで、何があつたんだ？」

そう聞いた途端に鈴の声の震えがぶり返す。しかし今度は何を言っているかわからないということではなく、しっかりと聞き取れるくらいの震えだ。

『一夏が……いぢかがあ……』

「……一夏が？」

「……………こんな朝から起きてるのお……………」

……とりあえず、割と本気で頬をつねってみた。割と本気で痛かった。

……次に、足の親指の爪の付け根をかなり本気で押してみた。かなり本気で痛かった。

最後に、机の角を足の小指で蹴り飛ばしてみた。机もかなり動いたが、足の小指の爪は想像以上に痛かった。

それからもう一度携帯電話を耳に当てて、鈴に言う。

「お前疲れてるんだよ」

『あ、やっぱり？ そうよね〜！一夏がこんな朝早くから起きてるなんて』

急に電話の向こうで扉が乱暴に開かれたような音がした。そして、ここ最近でよく知るようになった声が早口で捲し立てる。

『り、鈴っ！一夏が、あの一夏がこんな時間に菓子を作っ……っ！』

『あはははは、変なことを言うのね箒は。もしかして熱でもあるの？』

『違う！私は本当に』

『違うわいわ。あれは疲れていて見てしまった幻覚なの……そうに違いないの……箒も、熱があるのよ……』

『っ』

『……ねえ……………箒は、疲れてるのよねえ……………？』

……こっちは聞いてるだけだが、それでもなんかおどろおどろしい

雰囲気伝わってくるぞ……。ぶつちやけ、超怖い。

しかし、ここで再び電話の向こうでドアが開く音。それと同時にまた一夏の報告。

……これは、本格的に不味いことになったな。もしかしたら今日で世界が滅ぶのかもしれない。一夏が約束したわけでもなく起きているなんて……。

そこまで考えて、ふと思いついた。もしかしたら、誰かに菓子を作って渡す約束でもしていたのかもしれない、と。

一夏は基本的に約束は守るタイプ……と言っか、守れそうな約束しからないタイプだ。

そしてそれと同時に、家族や自分にとって近い相手には底抜けに優しい。つまり、千冬さんや他の誰かに菓子を食べさせたいと思ったりとか、そういう約束をしていたのなら……。

「鈴！おい鈴！」

『っ！？ な、なによ弾。まさか弾まで一夏が起きてたなんて妄言を……』

「誰か一夏に菓子を作ってもらうとか、そうでなくてもお礼をするとかなにかあげるとか渡すものがあるとか言われた奴はいないか！？」

俺がそこまで言うと、鈴もどういふことを理解したらしく、そこにいる一夏に近い人間に話を聞いていく。

『ねえ箒！一夏からなにかをもらうとか、お礼をするとか言われてない？』

『いや、言われていないが……』

『シャルロットは！？ セシリアは！？ ラウラは！？ 簪は！？』
『僕は言われてないけど……』
『わたくしも知りませんわね』
『私も知らん』
『……知らない』

しかしどうやらそこにいる人間には該当者がいないらしく、全員が不思議そうに答えを返してくる。
となると、一夏に直接聞くのが一番手っ取り早いな。

「鈴」

『わかってる。一夏に直接聞いてくるわ』

俺達以心伝心だな。多分親友より進んだ関係になることはないと思うが。

side 織斑 一夏

クッキーを焼き上げ、いくつか味見をしてからその焼きたてのクッキーをいくつかに分けて包む。

これを誰に渡すのかと言うと、真耶先生に渡すつもりだ。

なぜ真耶先生に渡すのかと言うと、セシリーとの決闘（笑）の時に『今度クッキーでも〜』と思ったのをすっかり忘れていたから今作っているだけ。つまり、真耶先生は俺がクッキーを作っていることも渡そうと思っていたことも知らない。ただの俺の自己満足だ。

勿論真耶先生の分だけではなく、ちー姉さんの分や鈴達に分。そして東姉さんや弾や蘭ちゃん分も一緒に作っている。みんなと一緒に美味しく食べればハッピーだよな。

そう考えながら、俺は一人一人の分として個別に取った袋にリボンを巻く。

喜んでくれるといいなあ……………。

タッグトーナメント、開始……せず。

もうすぐトーナメントがあるが、それはまだ少しばかり未来の話。今は作りたてのクッキーを持って職員室に向かっているところだ。職員室には真耶先生だけではなく、他の先生方もいるだろうからそこにもクッキーを渡しておいて、それから鈴達に会ったらその都度渡していくと言つ予定を立てている。

コンコンと職員室のドアを叩くと、中から声が聞こえてくる。どうやら目当ての人はこの中にいるようだ。

「失礼します」

かららら……と軽い音を立てて職員室に入り、真耶先生の前に立つ。

「？もしかして、私になにか用ですか？」

「はい。これどうぞ」

そう言つて渡すのはクッキーを包んだ袋。なぜか真耶先生はそれを両手で受け取つて、呆然と俺の顔と自分の手の中のクッキーの包みの間で視線で往復させる。

「え……えっと……これって……」

「クッキーです。そこそこ自信作です。要らなかつたら捨ててください」

それだけ言つてさっさと退散する。ちー姉さんは放課後じゃないと受け取ってくれなさそうだし、後回し後回し。

「ちみやああああ!!」

なんだか職員室から真耶先生の悲鳴が聞こえたような気がしたけど、きつと気のせいだろう。

……あ。他の先生達にクッキー渡してくるの忘れた。仕方無し、もう一回行くかあ。

俺はくるりと今歩いて来た道を引き返し始める。

……やれやれ。

なぜか俺がいなくなっていた数分にも満たない時間で、真耶先生に渡しておいたクッキーは無くなってしまっていた。

どうやら他の先生方に奪われてしまったらしく、真耶先生は半泣きになってしまっている。

そして真耶先生の周りにいる先生方の口元にはクッキーかなにかの食べかすがついており、何があつたのかは一目瞭然だ。

「……はい、真耶先生。本当は他の先生方の分なんですけど、なんだかもう食べちゃってみたいなんで」

「うゝ……ありがとうございます……」

真耶先生はクッキーを奪われたことを思い出したのか、半ば涙目の目をさらに潤ませて俺からクッキーの包み（二つ目。先生方の分のまとめだから前のよりもかなり多い）を受け取った。

「」「」「あああつ!!」「」「」

そんな声が周りの先生方の方から聞こえたが、俺は一切気にしない。

「それじゃあ、皆さんで仲良く食べてくださいね？」

俺はそう言つて、今度こそ職員室を後にした。

「ぴゃあああああつー!!」

……あーあ。俺しーらない。真耶先生も可哀想に。

……また今度、二人だけになったときにも新しいのを渡してあげよつと。……じゃないとあまりに不憫だ。

教室に入ったら、何故かいきなりののちゃん達に詰め寄られてしまった。

どうやらいつも眠つてばかりの俺が早起きしたのがなにかの病気のように思われているらしく、妙に体の心配をされてしまった。ちよつとよかつたのでその時にクッキーを渡してしまう。なんでかぼかーんとしていたが、すぐにみんな笑顔で受け取ってくれた。

ただ、クッキーを食べた直後にシャルとセシリーがorzになった。

「ま……負けた……」

「壁が……壁が高すぎますわ……」

そんなことをぶつぶつ呟いていたもんだから、理由はなんとなくわかつたが……俺としてはあまりそういうことは気にしない。

飯がいくら美味くても、一緒にいて楽しくないやつと付き合いおつとは思わないし、シャル達だったらむしろこつちから一緒にいてほしいとお願ひしたいくらいだしね。

……あ、HRが始まる時間だ。早く座っておかないとちー姉さんに出席簿使用逆水平チョップとか食らっちゃう。

「馬鹿者。誰がそんな真似をするか」

あ、ちー姉さんだ。おはようちー姉さん。

仕事中は織斑先生って呼んだ方がいいんだろうけど、頭の中だからセーフだよな？

……よし、セーフだセーフ。俺が決めた結構前に決めた。頭の外で呼ぶときは織斑先生と呼べばいいだろ。

俺としてはちー姉さんはちー姉さんだし、呼び方一つで変わるような関係じゃないし。

昼に一組に来た鈴とかんちゃんにクッキーを渡す。なんでかぼかんとしていたが、素直に受け取ってくれた。

鈴の好みは知っているので喜んでもらえると思ってたんだが……一年で好みが変わったのか？

だとしたら、ちょっとばかり記憶に修正を入れなくっちゃならないんだが……。

そう思っていたら、鈴は包みを開けて固めのクッキーをかじった。

「……美味しい……」

……どうやら、修正は必要ないらしい。よかったよかった。わざわざ覚え直すのって、実は結構手間だからな。

ちなみにかんちゃんの方は適当に詰め合わせた。何が好きかとかをよく知らないから仕方ないだろ？

タッグトーナメント、始まるよー

時は流れて……とか言ってみたのはいいけど、実際は精々数日くらいしか過ぎてないんだけど……まあ、その辺りは一切気にしない方向で。

何が言いたいのかと言うと、もうすぐ原作で言う束姉さんの襲撃……じゃない。タッグトーナメントが始まるってことだ。

それに合わせて俺とかんちゃんはタッグ技（マッスル・ドッキングとかそういうものではないことをここに記録しておく。そういうのもネタでやったけど、それはツープラトンで別カテゴリー）を練習していたし、かんちゃんも新（？）兵器を用意している。

なぜ新（？）なのかは、実際に使用しているところを見れば理解できるだろう。

……まあとにかく、始まるわけだ。

ちなみに、たっちゃんが考案した賭け……じゃない。優勝ペア予想応援・食券争奪戦のオッズは、本命がたっちゃんとのちゃんペア……ではなく、なぜか俺とかんちゃんペア。対抗が二年のピアノ・ルビーさんと三年のダラシ・ナイシーさん……名前のことは気にしないで。多分間違ってるから。

「……フォルテ・サファイアさんと……ダリル・ケイシーさん……だよ？」

「ありがとかんちゃん」

……何で俺はあんな変な間違いをした？ 確かに音楽記号だとフォルテの逆はピアノだけだよ。

……話を戻そう。三番人気はセシリーと鈴のペア。四番がラルちゃん
とシャルのペアで、その次がにたちゃんとあのちゃんのペアだ。
……原作はもうほとんど信じてないけど、ここまで変わるとも
うなんか面白くなってくる。

原因はなんだろうな？ 全校生徒の前でアイアンクローで気絶させ
ちゃったことか？

……まあ、なんでもいいけどさ。

俺も賭けた。俺くらいしか賭ける奴はいないだろうと思ったが……
シャルと鈴も同じように賭けていて驚いた。

俺と違って原作知識が無いのに『大会中止で決着つかず』に賭ける
なんて……鈴の勘とシャルの幸運は凄まじいな。

……束姉さんの新作が来てるのかって？ 来てる来てる。現在はI
S学園上空で五体が大人しく体育座りで出待ちしている。

約一体はなんだか待ちきれなさそうにわくわくしてるが、あれって
本当に中身が無いのか？

もしかしたら遠隔操作で束姉さんが操ってるのかもしれないが、そ
れにしては妙だしなあ……。

本当にかなり人間臭い。前回のアレはどうだか知らないが、もしか
したらISのコアの人格ってのは束姉さんの方でかなり自由が利く
んじゃないか？

そうじゃなかったらぷちか達の性格の起点を俺と同じ『眠たがり』
になんてできないだろうし。

……まあ、例えそうだったとしてもどうすることもできないんだけ
どわ。

できることと言えば、ぷちたばねーさんを抱き締めつつ問い詰める
とか、ぷちたばねーさんを膝にのせて頭を撫でつつ問い詰めるとか、

ヘルメスドライブで束姉さんのところに転移して直接問い詰めるとか、そのくらいのことしかできやしない。

「と言うわけで束姉さん。キリキリ吐くがいい」

「いつくんの手だあゝ……はふう……えへへえ……」

「……むう」

そんなわけでぶちたばねーさんの頭を撫でながら優しく問い詰めていたら、かんちゃんが不機嫌になってしまった。年頃の娘さんはよくわからない。

だが、不機嫌になりながらも擦り寄ってくるかんちゃんが何を欲しがっているかはわかるので、久々にサテライト30の出番だ。

とりあえずかんちゃんの頭をなでりなでり。たつちゃんの髪よりちよつとだけ柔らかい髪に指を通して、ゆっくりのんびりなでりなでり。

それと同時にぶちたばねーさんの髪もなでりなでり。ちつちやいせいか束姉さん本人より髪が柔らかい。

「んゝ……」

「……んう……」

なんと言うか、二人とも可愛いねえ。束姉さんも、あんまりこういう事件とかを振り撒かなければもつとちー姉さんに好かれてもおかしくないのねえ。ちー姉さんって実はかわいい物好きだし。

くいくい、とズボンを引つ張られているのに気が付いて下を見てみると、ぶちーねえさんがよじよじと俺の足に登ろうと頑張っているのが見えた。

……おや？ 一つの間にもぶちーねえさんが？

そう思いはしたが、気にしないでぶちーねえさんをぶちたばねーさんの隣に並ぶように座らせて一緒に撫でる。ちー姉さんはこうやって頭を撫でさせてくれたりはしないからなあ……。代わりに撫でてくれるけど。

その分俺はぶちーねえさんを撫で、ぶちたばねーさんを撫で、そしてかんちゃんを撫でる。

……あ、束姉さんに何を企んでるのか聞くのを忘れた。

……まあ、いいか。束姉さんが何を企んでるのかは知らないけど、多分悪いことじゃあないし。

享乐的で嘘つきで、人間としてぶっ壊れていて天才過ぎるのが一周半して基本的に馬鹿で、何を考えているかわからなくても……ののちゃんやちー姉さんに向ける愛情は本物だと信じているから。

……信じただけかもしれないって言うのが自分でも嫌になるけど。

「大丈夫う……いつくんだったら大丈夫だよお……」

そんなことを考えていたらなんだか束姉さんからそんな声が。

まあ、気休めくらいにはなったかねえ……。

タッグトーナメント、はい中止

ぷちたばねーさんとぷちーねえさん、かんちゃんの三人を撫でていると、急にどーん！と言う轟音が響き、目の前に全身鎧のISが降ってきた。

その形は黒いマネキンに似ているが、左腕だけは前の奴と同じようにかかりの太さがある。

その上、砲口は四つになり、それはまるで地獄に繋がっているかのようだった。

遠距離攻撃用と思われる左腕に対して、右腕は肘から先が巨大なブレードになっていて、格闘性能の点では前の物に比べて随分と向上しているようだ。

「東姉さん？　なんか来たよ？」

「……………うに……………」

ああ、ダメだこりゃ。完全にだらけモードに入ってる。

「……………(汗)」

ああほら落ちてきた方もどうすればいいのかわからなくて流れるはずのない冷や汗流してるし、もう少しちゃんと……………無理か。東姉さん本体だったらともかく、ぷちたばねーさんだもんな。悪いんだけど、もう少し待っててくれよ？

そんな感じの視線を落ちてきたISに向けると、そのISは素直にピットの端っこで体育座りをした。どうやら本格的に待つ姿勢らしい。

……なんと言うか、予想外に素直な子だな。束姉さんの作品らしい
と言えはらしいんだが。

side 鳳 鈴音

いきなり天井を破って降ってきた見覚えがなくもないISに、埃殺
(誤字にあらず)の代わりに圧縮重複衝撃砲を連射する。

全て楯で防がれてしまっているけれど、その間にセシリアが凝縮レ
ーザーの準備をしているのできつと大丈夫。

確かにこの楯は気持ち悪いくらいに硬いけど、セシリアのレーザー
はその楯をきれいに避けながら本体に突き刺さるだろう。それで大
体のISは戦闘不能になるはずだ。

……千冬さんの仕事を減らすためにも、ISのコアは粉々になるま
で破壊しといた方がいいわよね？これが篠ノ之博士の新作だつて
言うんなら、きつと世界に認知されているコアのどれとも違つはず
だから。

とりあえず、今の状況なら正当防衛になるはずだ。もしかしたら過
剩防衛つて本国の上の方が言ってくるかもしれないけど、いつも言
っている通りにバレなければ問題ないし、バレたとしても「過剰防
衛になる前に戦闘をやめろ」という命令が無かったもので、現場の判
断で破壊しました。そして現場の判断はあたしに任されています」
とでも言つとけばいいわ。

それでも騒いだら……そうね。篠ノ之博士に協力を依頼してスキ
ヤンダルてもぶちまけましようかしら。

そうすれば騒いでいた五月蠅い口も閉じるでしょうし、一夏から離れないでも済む。あたしにとっては一石二鳥ね。

……自作のぶちか人形（大中小極小四段重ね。ただし大サイズで30センチくらい）でなんとか協力をお願いできないかしら……？

『いいよー！』

どこからか篠ノ之博士の声が聞こえた。さっきからセシリアにプライベート・チャネルを送っても全然通じない中で普通にプライベート・チャネルが通じているってことは、やっぱりこれは篠ノ之博士の差し金らしい。

まあ、協力してくれるんだったら………安い買い物だったと思わなくちゃ。ぶちか人形はまた作ればいいわ。

そうしていると、目の前で何枚も重ねられている楯から、ビギキッ！という輝の入る音が聞こえた。どうやら一枚目の楯はそろそろ限界みたいね。

「……で、そろそろいけんじゃないの？ こっちは多分一枚目の楯を破壊される直前に熱線とか撃たれる気がするから早くしてほしいんだけど？」

「行くだけならばいつでも行けましたわよ？ ただ、時間をかければかけるほど威力は上がりますが」

「じゃあ」

ぞくう！と背筋に走った嫌な予感に従い、瞬時加速で高速上昇。その直後に楯を貫通するように熱線があたしのいた所を吹き飛ばした。どうやら威力は随分と上がっているらしい。

「セシリアー！」

「わかっていきますわ！」

凝縮レーザーが奔り、楯を力カツと避けて上から黒いISを貫こうとする。

しかしその黒いISは、体を奇妙にくねらせてセシリアのレーザーを避けた。

「避けたわ！次！」

「あれを避けたんですの！？」

セシリアは驚愕しながらも次の弾を作るためにビットやライフルから何十発も連射する。

その隙を相手が見逃すはずもなく、黒いISは楯ごとセシリアに突撃していく。

その間にあたしが入って黒いISを押し留め、楯を払って振るわれた右の巨大なブレードと双天牙月が火花を散らす。

しかしそれも一瞬。このままでは押し負けると理解したあたしは、すぐさま双天牙月を柄を中心に回転させて黒いISのブレードを受け流す。

流されながらも次々にブレードを振り、あたしを倒そうと躍起になっている黒いISに、あたしはひたすらその攻撃を流すことで対応する。

……………けれど、それもそろそろ終わることになりそうだ。

双天牙月で流すと同時に双天牙月から手を離し、右のブレードの付け根と、ブレードに流されてかあたしの近くに来ていた左腕の手首あたりの部分を掴む。

これで筭みたいに全身からビーム出すとか、一夏みたいに空中にミサイル出してどっかとか、ラインアイからビームとかされない限

りはまず攻撃は当たらない。

そのままあたしは人間で言えば顎のあたりに膝蹴りを打ち込む。見事に体を反り返らせた黒いISの背中に、青い光球が突き刺さった。

その光球は、黒いISのエネルギーシールドを簡単に貫き、装甲を撃ち抜き、そして見事にコアに食い込んだ。

「……溜め時間が三秒もなかったにしては、随分と威力高くない？」

「三秒ではありませんわ。それはさつき一度外した方です」

「はあ!？」

話を聞いてみると、セシリアは地面の中でBTエネルギーのスフィアを作って保持していたらしい。つまりあれは一度外しはしたが、それそのものが困だったと言うわけだ。

「そもそもレーザーが進行方向以外から見えると言うことは、それだけ大気中でエネルギーが散ってしまっていると言うことです。漏れ出るエネルギーを最低にして球体を作れば、誰にも見えず、そしていつまでもエネルギーを保持することができると言うことですわ」

「……空中でそれやったら機雷がわりになりそうね」

「わたくしも考えましたが、レーザーを束ね、凝縮し、完全制御状態のまま空中にスフィアを作るにはまだ実力が足りず……8発分を42箇所に置くのが精一杯なのですわ」

あたしはそれでも十分使い物にはなると思うけどね。

……あたしも衝撃砲で撃った衝撃の速度を変えられればなあ……そうすれば重複衝撃砲がもつと簡単になるし、威力も上がるのに。

あたしはそんなことを考えながら、黒いISからレーザーの熱で溶けてしまったISCコアを引きずり出した。

……一応、千冬さんに渡しておきましょつか。

タッグトーナメント、中止だよ？

「……おい、東姉さん？」

「……………うにい……………」

ぷちたばねーさんのほっぺをむにむにと引っ張ってみたり、頭を気持ち強めに撫で回したり、色々なことをやってみたんだかいまだにぷちたばねーさんはぽけーつとしている。ぷちーねえさんとかんちやんも同じようになってるんだが……………もしかしたら俺はナデホでも持っているんじゃないだろうか。

……………解説しとこうか。ナデホとは、撫でるとポツと惚れられる……………のではなく、撫でられるとなんとなくほっとしてしまい、とても落ち着くと言うものだ。ナデホの類似品だが、こちらは割と現実世界でも限定的だが持っている人もいる。例えば、俺の前世のばあちゃんとかは持っていた。撫でるのが凄まじく上手で、いつも気付いたら撫でてもらいながら寝てたなあ……………。懐かしい話だ。

ちなみにこの世界でも鈴と弾とののちゃん、それとシャルとかんちやんとちー姉さんと東姉さんが持っているのを確認している。蘭ちゃんは昔弾のナデホにやられてほっとしてから少し性格とかが丸くなったとか。ナデホすげえな。

そこで、体育座りで俺達のことをじっと見つめている黒いISを呼んでみた。

「……………」

結構素直に寄ってきたので、なんとなく頭を撫でてみる。

……よしよし……と。

side ラウラ・ボーデヴィツヒ

突然に天井を破って落ちてきた黒いISを、とりあえず敵性だと判断して殲滅することにした。

「そう言うわけだ。とりあえず殲滅だ」

「と……とりあえず殲滅するのはまずいよ!? もしも味方だったりしたらどうするのさ!？」

「シャルロット。戦場では流れ弾と言うものが存在してだな……」

「なに言ってるのラウラ!? 怖いってば! なにが怖いってラウラが言つと冗談に聞こえないのがすごい怖い!」

「……冗談……?」

「きょとんとしてるラウラは可愛いんだけど言ってることは無茶苦茶だ!？」

「だがなあ……ほら、見てみる」

私が指差した方向には、私達に巨大な左腕の掌にある四つの砲口を向けている黒いISがいた。

「シャルロット。お前はあれが味方などの友好的な相手に見えるのか?」

「……………ちょっと……………無理かな」

シャルロットがそう答えた瞬間に、黒いISの掌からかなりの高熱を思わせる赤混じりの白い熱線が放出された。

「……………さて、それではとりあえず殲滅と行こうか」

「……………うん、そうだね」

今度は流石にシャルロットもしっかりと頷き、その両手に武器を展開した。

だが、展開した武器はどうやらいつも使っているそれとは違つらしく、どれもこれも見慣れない形をしていた。

「シャルロット？ その武器は……………」

「これ？ ちょっと色々あってね。僕に会社から送られてきたやつの中で僕に合ったやつを選んで使うことにしたんだ」

道理で見たことのない武装ばかりな訳だ。まさかデュノアの新作とはな……………。

最近のデュノアはIS事業からは半ば撤退し、ISそのものではなくISの武器製造に力をいれていると聞く。

それらの武器は性能が高く、今までデュノアが売りに出してきたそれに比べて格段に上昇していたために誰かから技術を買ったのではないかという話まであるほどだ。

そんなデュノアの最新の武器。現在のIS乗りなら欲しいと思わない方が珍しいだろう。

「まあ、この話はまた今度ね」

「ああ。今はこの黒いISを潰す方が先だな」

私とシャルロットは狭いピットの中を飛び回り、黒いISに狙いをつけさせないまま前から後ろから上から右から左から攻撃を加えていく。

黒いISはこの状況を打開するべく接近しようとしたり、私たちを狙い撃とうとしているが、その度に逆側にいるもう一人に出鼻を挫かれて動きを止められる。

……さて、それでは早めに終わらせて周り状況確認と行こうか。このくらいならば鈴やセシリアの方がよほど恐ろしい。一夏となど比べるまでもない。どれほど固くても、どれだけ威力があっても、ただそれだけなら裏をかいて騙し討ちをして一撃だけでも食らわせてしまえばそれで終わる。

相手は固いだけで不死身でも壊れないわけでも一夏でも教官でもない。ならばいくらかでも勝つ方法はある。

……そう、例えばこんなことかな。

AICを黒いISの足先に一瞬だけかけて動きを抑制し、その隙に私とシャルロットが左右から黒いISの手を片方ずつ掴む。

そのまま私達は黒いISの背中に移動し、両腕を引っ張りながら同時に黒いISの背中を蹴り飛ばした。

ISは、絶対防御で守られている。それはほぼ全て（一夏のシロはそれすら機動に回してしまうことがあるため、全てとは言えない）のISに共通することだ。

しかしその絶対防御も完璧ではなく、大威力の攻撃を当てれば貫通させることもできるし、そうでなくともとある種類の攻撃にはほぼ無力と言ってもいい代物であったりもする。

それを証明するかのように、今まさに黒いISの両腕が肩からへし折れ、引き千切られようとしている。

この技はこうして肩の関節に負荷をかけ、あわよくば肩をへし折るための技だ。

ただし、練習では私とシャルロットのどちらかの出力が強くて両腕を引き千切ることができなかったのだが、それでも片腕は確実に奪えたために実戦で実行した。

まさか最良の結果である『両腕を引き千切る』ことができるとはあまり思っていなかったのだが……運がよかったな。

バギーン！という音をたてて、両腕を失った黒いISを私とシャルロットの二人で踏みつけるようにして床に叩きつける。特殊合金製の床に叩きつけられ、黒いISの頭の部分がひしゃげる。

「……うん。この技は人相手にはまず使っちゃダメだね」

「そうだな。使うならば正当防衛あるいは一夏を助けるためでなければ私もあまり使いたくはない」

そう言いながら、私は左右のプラズマエッジを伸ばして黒いISを貫く。シャルロットも人間が乗っていない機体には容赦をせず、追撃でショットガンを連射して両足を可能な限り潰しにかかっている。

「コアは、私のプラズマエッジで貫いてしまった」

「そうなの？ ……って、そんなわけないか。………わかった、そういうことにしとく」

「感謝する。シャルロット」

それではこのコアは、誰にもわからないように教官に渡しておかなければな。

タッグトーナメント、中止だったば

なでりなでりと黒いISを撫でてみたんだが、なんでか空気がさらに緊迫感を無くしてしまった。

……いや、なんでかというのは間違いだな。流石にこれは原因わかるし。

黒いISは俺に撫でられてなんだか空気が緩んでいるし、ぶちたばねーさんとぶちーねえさんは言わずもがな。かんちゃんもとろーんと目を緩めているからツッコミがない。

そんな状態になってしまったのは、きつと俺がこうして撫でているからなんだろう。ナデホは練習すれば誰でも……とは言わないでもできるようになるから俺ができてもおかしくはないんだが、やっぱり俺はナデホする側じゃなくてナデホされる側だと思っただよな。うん。

……間違ってないよな？

「……………」

「はいはい、束姉さんとちー姉さんが起きるまでは撫でといてやるよ」

黒いISとの戦闘は、まだ先のことになりそうだ。

……やれやれ。随分と原作から外れたものだ。大筋はともかく、細かい筋はもうあてにならないな。

……その方が楽しそうだからいいけどさ。

ところで、他の皆は大丈夫かね？ ダルイさんとフォクシーさんは

自力で何とかするだろうし、それ以前に割とどうでもいいけど、のちゃん達は心配だ。

怪我してたりとかしてないかな？ してないといいなあ……………。

side 篠ノ之 篤

「……………えっと……………篤ちゃん？ 質問があるんだけど……………いい？」

「？ はい、なんですか？」

私が視線を向ける先では、楯無さんが口許をひきつらせたまま私に問いかけている。

ぱくぱくと何度か口を開閉して、それからもう一度口を開いた。

「……………私の出番は？」

「ごちそうさまでした」

「全部食べられちゃってる!？」

ちなみに、私の足元には黒いISだったものの破片とコアが散らばっている。そのうちコアは勝手に紅椿の中に入ってきたが、どうやら悪いようにはしないようなので放置している。

紅椿の強化に役立つために姉さんが送り込んできたのかどうかは知らないが、とりあえず姉さんがやることなら最終的に悪い方には行かないだろう。

ちなみに、私がこの黒いISを壊した方法は不意討ちだ。落ちてきたところをすぐさま空裂を使った新技で切り捨てた。

そのやり方は、空裂を振ると出る帯状のエネルギーを圧縮し、刀身に纏わせたまま相手を斬りつけると言うもの。
圧縮したまま放てば遠距離攻撃にもなり、更に捻りを加えて突けばドリルのようにもなるといふ使い勝手のいい技だ。

ちなみに雨月でも同じような事ができ、通常は何発も出てくるエネルギー弾を纏めあげて威力を上げたり、自動で持っていかれるエネルギーを割り増しして威力を上げたり、同じように剣に纏わりつかせて近距離でのほぼ一撃必殺（殺さないぞ？ ただの比喻だ）の攻撃へと変えたり、そんなことが紅椿にはできてしまう。

……そして一番恐ろしいのは、それらのことで威力を底上げするためにエネルギーを過剰に送り込む行為に上限が存在しないということ。それはつまり、絢爛舞踏で生み出したエネルギーを全て一本の刀身に込めて斬撃を行うことができるということだ。

全身の展開装甲から真紅の光刃を生やし、両手に深紅のエネルギーを纏う双剣を持ち、真紅のエネルギーの尾を引きながら剣を振るう。まさしく【絢爛舞踏】だな。ここまで考えてこの名をつけたのならば、恐れ入る。

……まあ、確実にそこまで考えられているのだろうが。流石は姉さんだ。

『えっへん！すごいでしょー？ 東さんは頑張ったのだ！誉めてくれてもいいんだよ？』

とりあえず今度会った時に頭を撫でておこう。よしよし、と。

『わーいー！』

喜んでくれて何よりです。

……さて、それじゃあこの残骸は楯無さんに任せて、私はのんびりと休むことにしようか。

エネルギーを操作し、応用する技は使うと中々に疲れる。穿千の高威力圧縮エネルギー砲の応用技まで使うことにならなくてよかった。あれは本当に疲れるから、連発すると一夏のように眠ってしまう可能性が高いからな。

今でも結構辛いのに、そこにあの疲労が来ては色々と不味い。

紅椿を解除し、壊れていないベンチに腰掛ける。

恐らく一夏のところにも同じものが行っているだろうが、私に倒せたのならば心配はいらないだろう。

むしろ相手の方を心配するべきだな。はっはっはっは。

……ふぁ……。

「ちよ、ちよつと篝ちゃん？　なんで眠たそうなの！？　一夏君のことはどうするの！？」

「……一夏なら大丈夫でしょう。今も一夏の気配が二つ感じられますし、ぶちか的な姉さんとぶちか的な千冬さんの気配が一つずつ。それに簪の気配もしつかりと感じ取れます。恐らくこれはリラックス状態ですし、戦闘はもう終了しているか、もしくは始めから敵が来ていなかったと言う可能性もあります」

「なんでそこまでわかるの！？　普通は無理よ！？」

「嫌ですね楯無さん。一般的とか普通なんて言葉は、所詮他人が積み重ねてきた行動の大多数のことを言うのです。その大多数の中に私はいなかったというだけの話ではありませんか」

……それにしても、なんだか私もよく舌が回るようになってきたな。それに、気配一つで相手の状態などを把握することもできるようになってきた。

これならば、いつでも一夏が寝たいと思っている時に一夏の所に行つて抱き枕になることができる！

そうと決まれば私は眠るとしよう。一夏が眠りたい時にいつでも一緒に眠ることができるようにせねば！

「ちよつと箸ちゃん！？ 本当に寝ちゃうの！？」

そう叫ぶ楯無^{シールド}さんをスルーして、私はベンチに横になった。

こうなればタッグトーナメントは中止だろうし、面倒なところが終わるまで眠っていよう。

ターゲットナメント、なくなりました

はっ！とぶちたばねーさんとぶちーねえさんが正気に戻り、てててててっ！と走ってピットから逃げ出してから30秒。かんちゃんを復活させて黒いISを撫でるのをやめ、そして簡単に状況を説明してから黒いISに向き合う。

……うん、何て言うか、本当に待っていてくれてありがとう。

「……つまり、私達はあの黒いISを倒せばいいの……？」

「そういうことだね」

かんちゃんがおおよその話を理解したところで、俺とかんちゃんは黒いISに顔を向ける。

黒いISはそんな俺達の視線を真正面から受け止め、そして俺達をそのラインアイで見詰め返している。

そこにはさっきまでのような緩んだ空気は存在せず、俺達に敵対するという断固たる意思が存在していた。

「……一夏」

「ん。行くっか」

かんちゃんはISを展開し、IS用の雑刀を展開する。

それと同時に俺も雪片式型を展開して、黒いISに向けて構える。

……さて、戦闘開始だ。

一夏に頭を撫でてもらっている間に現れていた黒いIS。少し前までの私だったら逃げていてもおかしくなかったそれを目の前にして、私は別段恐怖を感じてはいなかった。

正確に言うと、怖くはあった。けれど、所詮はこの程度と笑い飛ばせてしまう程度の恐怖しか感じなかった。

なぜなら、私の隣には、世界の誰より頼りになる、私の大好きな人が居るからだ。

一夏が隣にいてくれるなら、私は本部長のように空間を飛び越え、何人も同時に存在し、世界をねじ曲げることだってやってみせる。

……流石に、ちょっと人間離れしちゃっているという自覚はある。けれどこのくらいできないと、きつと一夏についていけなくなる日が来ると思うから、後悔はしていないしする気もない。

私は【夢現】を構え、黒いISに向き合う。その腕のブレードや砲口はやっぱり怖いけど……一夏と一緒にだから、頑張れる。

ゴッ！と言う音と共に黒いISの太い方の腕から熱線が放たれる。私達はそれを短距離瞬時加速で回避し、すぐに私達に都合のいい場所にステージを変える。

狭いピットの中では、シロの超高速機動も私のミサイルも使えない。あまりに狭すぎて自爆してしまうからだ。

今の私達が使える武器は、近接用の雪片と夢現。それから跳弾の心配が無いエネルギー系の射撃武器の荷電粒子砲と、けして多くはない。だからこそそのピットからアーリーナのフィールドへの移動だ。

一夏の持つブレードが白く輝き、アリーナのシールドを切り裂く。切り裂かれ、口を開いたシールドを通り抜けてアリーナに入る。私達が続いてあの黒いISが飛び込んできて、ようやく私はまともに戦うことができるようになった。

「じゃあ、パーティーを始めようか」

「うん！」

そして私達が呼び出すのは、何度か一夏も使ったことがある悪夢のような武装。私と一夏が同時に呼び出したその名前は

「『ジエノサイドサーカス！』」

刹那。無数のミサイルの弾幕が黒いISに降り注ぎ、その動きを強制的に縫い止める。

黒いISはシールドユニットを使ってミサイルの雨を防いでいるけれど、ジエノサイドサーカスの前では耐え抜くことはあまり意味がない。

なぜなら、ジエノサイドサーカスの弾数は文字通りの無限。いくらシールドユニットを使って耐え、エネルギーが多く、効率がよかつたとしても 無限の弾幕の前ではいつかその数に溺れてしまう。

そうならないためには弾幕を避けて私達に攻撃を加えるか、私達ごととミサイルを纏めて攻撃するか、尻尾を巻いて逃げるかしか無い。けれどあの黒いISは、耐える道を選んだ。つまり、この勝負はもう詰んでいるも同然だ。

ジャミングのお陰でミサイルの照準はつけづらかったが、ここまで多ければそんなのはほとんど関係ない。文字通りの絨毯爆撃で、アリーナの床や壁ごと壊れるまで撃ち続けられそれで終わる。

……なんだか、ちょっと一夏に染まってきちゃってるのかな……？
そうだとすると……嬉しいけれど、やっぱりちょっと恥ずかしい。
一夏色に染まるなんて……ま、まだ私には早いと……っ！

「かんちゃん？ 顔が真っ赤だけどうかした？」

「別に……なんでもない……。……私は一夏のこと……す、好
きっていうのを……再確認してただけ、だから……」

……ああ、なんだか顔が凄く熱い。きつと、一夏の言った通りに真
っ赤に染まっているんだと思う。

爆煙と爆炎と爆風と衝撃とに包まれながら、私はそんなことを考
える。もうちょっとロマンチックなところがよかった……と思わな
いでもないけれど、一夏だから仕方ない。

私はそつと一夏に寄り添ってみる。一夏は雪片式型を持っていない
左手で、私の頭を撫でてくれた。

……ちよつとごつごつしていたけれど、十分優しい撫で方に、私は
なんだかほつとした。

……ほう……。

side ダリル・ケイシー

「なあ、フォルテ」

「なんスか、先輩」

「……もしかして俺達、かなり蔑ろにされてねーか？」
「……そっすね。頑張ってみても出番はこれだけっすしね」
「……しっかりコアを壊さないように、頑張ったのになぁ……」
「……仕方ねっすよダリル先輩。うちらまだキャラがしっかり
固定されていないんすから」
「……メタ発言だぞ〜……」
「……たまにはこんな愚痴も言いたくなるのが人間っすよ」

……はぁ……。やれやれ。

ターゲットナメント、なくなりました(後書き)

ダリルさんとフォルテさんの一人称は気にしないでください。公式で出たら変えます。

戦闘後には、睡眠タイム

戦闘が終わった後には、皆で一応身体検査をしてから解放される。取り調べは明日になるらしいが、明日は蘭ちゃんの所の学園祭なんだよなあ……………どうすつか。

……………よし、サテライト30で分身しよう。あれはもう一人の自分を作る能力だから取り調べも受けられるし、蘭ちゃんの所の学園祭にも行ける。大丈夫……………夫……………大……………じよ……………すか……………。

side シャルロット・デュノア

一夏が猫耳を着けていたので、僕も猫耳をつけてみた。流石に一夏の耳みたいにぴこぴこ動いたりはしないけれど、それでも結構細かく作り込まれているから見苦しくは……………無いよね？

「ふふふふ……………シャルロット？　そういう格好をするなら誇りなさい？　じゃないと恥ずかしいだけよ？　楽しみなさいな」

「う……………うん……………って鈴！？　なんで鈴も猫耳！？」

「あたしがつけたかったからよ。文句ある？　あってもよっぽど重要な理由がなければ無視するけど」

「ええ……………」

いつの間にか僕の隣に佇んでいた鈴も、なぜか頭に黒い猫耳がくっ

ついていた。そして鈴は、すやすやと眠っている一夏の隣に潜り込んでいった。

そしてそのすぐ後に、その布団からぴよこりと顔だけ出して僕に言う。

「ほら、シャルロットも入ったら？ 多分途中で千冬さんに放り出されると思っけど」

「なんでそれがわかってるのに一夏の布団に入るの!？」

「あたしが一夏を愛しているからよ。……ラウラは直接ここに来るけどね」

「いつもいつの間にかいなくなっていていつの間にか帰ってくると思っ
てたら、いつもいつも一夏のところに来てたの!？ 狡いや!!」
「いいからシャルロットも早く入りなさいよ。ラウラはもう来てる
わよ?」

「早っ!？」

「……もちろん」

「わたくしたちも」

「いるぞ?」

「なんで!？ さっきまで一夏の布団の膨らみって一人分だけだった
よね!？ いったいいつから……いや、どうやって入ったのさ!？」

僕の素朴な質問に、なぜかそれぞれ犬やら猫やら兎やらといった動物の耳をつけている皆は、寝間着のまま僕に言った。

「愛だ」

「愛……」

「愛ですわ」

「当然、愛よ」

「……く……」

……ラウラは寝ていて答えは返って来なかったけれど、起きていたらきつとみんなと同じことを言ったに違いない。

なんだか力が抜けちゃった僕は、ごそごそと一夏の布団に潜り込む。一夏のベッドは大きいから、僕達が全員入ってもまだ余裕がある。

……たくさんの人が入っているベッドの中は、なんだかぼかぼかしていて眠くなってくる。ラウラじゃないけど、すぐに寝ちゃいそう
だ。

近くにいた誰かを抱き締めて、僕は目を閉じる。多分これは、セシリアかなあ……？

……おやすみなさい。みんな。

……く……。

side 織斑 千冬

……恐らく束の仕業であろう襲撃事件の後始末のうち、今のうちに見えるものはできる限り終わらせてから寮長室に戻る。

一夏分が足りないが、それは明日の取り調べで膝の上に座らせながらの取り調べで補給できるだろうから……それまでの我慢だ。

……ふと気付いたとき、私の手は一夏の部屋のドアを開こうとしていた。どうやら気付かないうちに一夏を求めてこんなところに来てしまっていたらしい。

私は扉から手を離し、後ろ髪を引かれるような気分でその場を後に

した。

一夏と寝ることができないのは痛い、それでもどうにかして我慢しなければならぬ。

私が一夏にここまで甘いと言うことが委員会に知られれば、一夏の取り調べは私ではなく別の誰かがすることになってしまう。それでは取り調べの記録を改竄したり、一夏を効率よく守ることができなくなってしまう。

そうなのは困るのだ。私は一夏を護りたい。あらゆる害から。私の手の届く限り。

……だから今は、我慢だ。

私は私にそう言い聞かせ、深く大きく深呼吸をする。

……さあ、寮長室に戻ろう。そして明日の取り調べのことを考えながら、早く眠るとしよう。

そう考えていた矢先に、私は一夏と同じ布団で寝ている。

だが、私が我慢できずに一夏の部屋に行き、小娘共を干切っては投げ干切っては投げして一夏を独占したわけではない。私の部屋のベッドの中で、一夏がすやすやと眠っていただけだ。私は悪くない。

勿論一夏は抱いて寝た。一夏分を補給するのは現時点ではかなり優先すべき出来事だったし、そうでなくても一夏分があればあるほといいいものだ。

一夏がそこで寝ているのに、一夏を抱き締めないと言うのはもはやそれは罪だ。私が決めたそう決めた。

だが、私はなんとわれようと誰彼構わず一夏を抱き締めさせはし

ない。

理不尽？ だからどうかしたか？ 一夏は私のものだ。誰にもやらん。

……いや、一夏が認めた相手ならば話は別だが……とりあえず、まだ一夏は私のものだ。

私は一夏の頭を撫で、優しく抱き締める。

……お休み。一夏。

取り調べと、学園祭

目を開いて二秒で鈴。一秒目は眩しくてよく見えず、二秒目で目が明かりに慣れてきて鈴が見える。間違っつてない間違っつてない。

……えーつと……確か今日はIS学園の取り調べと、蘭ちゃんのこところの学園祭だな。とりあえずシルバースキンを着て行こう。マジ力があそこに居たから、もしかしたら殺しに来るかもしれないし。まあ、本当はそんなのが無くて平気なんだが、そこは前にも言った通り生身でそれはマズいからカモフラージュはしとかないと。……手遅れだつて？ そうかもしれないが、気にしない。

さてと。それじゃあ俺はさっさと行こうかね。真耶先生に呼ばれて取り調べを受けるのは、ちー姉さんの所にいる俺でいいだろ。シルバーカーテンで姿を隠し、シロとクロをステルスモードに切り替え、エアライナーで作った道をモーターギアを片足に二組ずつ使ったスカイウォーカーモードで駆け抜ける。

モーターギアのスカイウォーカーモードなら普通に空を飛ぶこともできなくはないが、やっぱり地面の上を走る方が速い。だからこそエアライナーだ。エアライナーで空中に足場を作つてやれば、モーターギアは空を飛ぶの約二倍くらいは速くなる。

……物理法則を考えれば二倍程度だとむしろ足りないような気がしなくもないが、まあ、便利だからいいだろう。

よし。それじゃあ窓を開けて、エアライナーを引いて、行ってきまーす。

目が覚めて二秒でちー姉さん。ついさっき……と言っても正確には俺の部屋から出ていった俺が起きたのより少し早いんだけど、ついさっき出ていった俺とは別の俺だ。

ちー姉さんは随分疲れているらしく、俺が起きているのにまだ眠っている。

……こうしていると、まだちー姉さんが家によく居た頃を思い出す。俺は眠いのを我慢して、毎日朝昼晩と食事を作ってたっけな。

……ああ、懐かしい。実に懐かしい。あの頃はまだ社会のことをあんまり考えずに動けたのになあ……。今じゃあ俺もちー姉さんも自由に動けやしない。

……やれやれ。困ったもんだ。

だが今はそんなことは考えず、ちー姉さんの髪を梳く。なんだか弛んでいた頬がさらに弛み、俺を抱き締める腕の力が増した。

ここ最近は何々あって疲れていたんじゃないかと思ってたんだが、妙につやつやしている。昨日の午後はなんだか少し肌がかさかさしていたような気がしたんだが、まるでそれが気のせいだったかのようだ。

今はさっき言った通りになんだかつやつやしているから別にいいけど、ちょっと心配だったんだよね。ちー姉さんって理性的に無茶しちゃうタイプだから。

無茶だとわかってて無茶しちゃうちー姉さんって、見てるとちょっと怖かったりするんだよ。

……お、ちー姉さんが目を覚ます。

ゆっくりと目を開くと、私のことをほっそりとした目で見つめている一夏が私の腕の中に居た。
とりあえず一夏を抱き締め、頬擦りし、その香りを胸一杯に……
おや、なぜか鉄の匂いが混ざって……。

「ちー姉さん。鼻から赤いの出てるから。鼻血が出てるから」
「む、そうか」

……やれやれ。急速に新鮮な一夏分を吸収しすぎたせいで愛が滲み出してしまった。
ぺろりと溢れた愛情を舐め取り、それからまた一夏を抱き締める。

「……ちー姉さん。ちょっと……苦しいかも」
「ああ、すまない」

腕の力を抜くと、一夏は私の首元に顔を埋める。
それから私の頭を抱き締めるようにして、私の耳元で囁いた。

「おやすみ。ちー姉さん」
「ああ。お休み」

そう言つと一夏はゆっくりと寝息を立て始めた。どつやらすぐに眠りに落ちてしまったらしい。
私はそんな可愛らしい一夏を抱き締め、ゆっくりと頭を、背中を撫

でる。

………ん？ なにか忘れているような………？

私は寝起きのせいか、それとも一夏を抱き締めているせいか、奇妙なほど鈍い頭をできるだけ回転させて思い出そうとする。

………そうだ。今日は取り調べがあるのだったな。昨日の夜は一夏と一緒に眠れるとは思っていなかったため、今日の取り調べで膝の上に一夏を乗せて………等と言うことを考えながら部屋に戻ってきたんだった。

………だが、今の私はその程度では満足しない。膝に乗せたら常に一夏の腹を直接私の手でじゅくりたつぶりねつぶりと撫で回し、眠りそうになったら耳に息を吹きかけたり、耳朶を甘噛みしたりして起こしてやるう。

多少腹を撫でている手が上向きや下向きに『滑る』ことや、なかなか起きない場合には首筋や耳を私の舌で擦って起こすこともあるだろうが、まあ、いいだろう。

………いやいや、これはセクハラではない。尋問だ。取り調べだ。

一夏にとっては寝れないというのはきついことのはずだが、こちらも仕事だし、一夏をIS管理委員会の屑共から守るためにもしっかりとした調書を作らねばならないからな。

………誰にも見られることはないし、時間もたつぶりあるからと言って、一夏を食べる気は無い。一夏は基本的にそういった欲求が薄いし、二年ほど前に一夏を風呂に連れ込んだ時にも大した反応は返ってこなかったからな………悔しいことに。

だから今も一夏にセクハラ紛いのことをしても一夏はくすぐったがるだけだろうし、問題はない。

つまり、これは正当だ！

………とは、言わない。いくら暴走気味とは言え、私は理性はあるからな。

………たまに理性を振り切っつていつの間にか手や体が動いている時もあるが、その辺りはあまり気にしなくても大丈夫だろう。

とりあえず、こうして気持ち良さそうに寝ているところ悪いが、――夏には一度起きてもらおうとするか……。

学園祭、こじになるよね

蘭ちゃんの通う……………なに学園だっけ？ 聖クロニカ学園だっけ？ 忘れたけど。

……………ついに人名やIS名だけじゃなく、学園名まで覚えられなくなっただか？

……………IS学園。藍越学園。そういう訳じゃあないらしい。普通に覚えてなかっただけか。

……………とにかく、蘭ちゃんのいる学園に到着した。途中でIS用のライフルの弾とかが飛んでくる……………なんてことはなく、実に平和だった。

ただ、人の視線が突き刺さってくる。まあ、想定範囲内だな。シルバースキンって帽子をかぶって顔を隠していると普通に怪しいし、シルバーカーテンを解除してすぐだといきなり現れたようにしか見えないもんな。

そこで、さっさとシルバースキンの帽子を脱いで顔をさらす。別にそれで困ることは……………いや無くはないけど無いと言うことにして、それからポケットから出したヘルメスドライブを使って蘭ちゃんを探す。

ついでに眉間にライフル弾が飛んできたのでヘルメスドライブで叩き落とし、モーターギアをお返しに飛ばしておく。まったくマゾカは。予想通りにならなくて良いところばかり予想通りにしやがって。

……………あ、蘭ちゃん発見。ここは……………生徒会室かね？ 三階だけど。

流石にこれだけの人目のある中での転移は不味いので、歩いていくことにしよう。

……それも、学園祭が始まってからのことだけど。それまではのんびり待っていようかね。

side 五反田 蘭

なんだか学園中がどたばたと騒がしい。毎年学園祭の時期はこんな風だけど、どうしてか今日はいつもより騒がしいような気がする。ふと窓の外を見てみると、校門のところの人に人がずいぶんと集まっている。いったいどうしたんだろう……？

「五反田さん！ニュースニュース！」

急に扉を開いて現れたのは、私と同じ生徒会役員の一人で、私の友達だった。

いったい何がニュースなんだろう……？　と思っていたら、その娘はある種信じられないような話を始めた。

「今校門の所に銀色のコートを着た男の人が来てるんだけどさ！なんとそれがあの織斑一夏なんだよ！」

……え？

呆然としている私を置いて、その娘は話を続ける。

「どうも誰かに呼ばれたみたいなんだけどね？ チケットを確認しに行ったシスターが言うにはちゃんとチケット持ってみたいで、誰が呼んだのか話題に……五反田さん？」

名前を呼ばれて思考の渦から抜け出す。

……とりあえず、一夏さん。来るの早すぎです。

私は頭を抱えてしまう。これじゃあどう考えても目立っちゃう……こ、恋人とか思われちゃうかも……。

……既成事実って言葉はいい言葉だってお兄も言ってたけど……いいかも。

そうと決まったら迎えに……ああでも生徒会の仕事がまだ終わっていない……一夏さんは鈴さんや箒さんみたいにしっかりした人が好みだと思っし……ああでもこうしている間にも一夏さんに声をかける人がいるかもしれないし……いやいや一夏さんがついていく筈が無いって言うことはわかるんだけどそれでも心配で……。

……よし。できる限り早く仕事を終わらせて、そしてすぐに一夏さんを迎えに行こう。そうすれば一夏さんに声をかける人を駆逐することが……いやいや何を考えているの蘭！駆逐しちゃう駄目ですよ！ただ一夏さんは私の者（誤字にあらず）だっで見せつけるだけなんだから！とりあえず手を……いやいや手を繋ぐくらいじゃまだまだインパクトに欠けるから、とりあえず腕を組むくらいはしないと！それからクレープを食べたり学園中を二人で歩いて回って一夏さんにあーんで食べさせて一夏さんにあーんで食べさせてもらってちよつと失敗してほっぺにくっついたクリームを指で取ってもらって……一夏さんが舐めるの？ それとも私が舐めるの？ 舐めるって……一夏さんの指を？ ……いいわね。このくらいしないと鈴さんや箒さん達には届かないと思うし……今はとりあえず仕事よ仕

校門が見えてきた。それと同時に一夏さんと、シスターが数人見える。

「なぜ早く来てはいけないのですか？ そんなルールはどこにも無いはずですが」

「敷地内に部外者が入ることは禁止されて」

「ここはあなた達の学校の敷地内ではなく。校外です。郊外であると言うことは、貴女方の決めた校則はこちら側には関係の無いことであり、私がどこに立っていても文句を言う権利は貴女方にはありません。私は通行の邪魔になりましたか？ 生徒や職員に被害がありましたか？ 今の貴女方は、家の前にバス停があつてそのバスのクラクションが五月蠅いからとバスの運転手に殴りかかるような方と変わりありません」

「し、しかし、」

「しかしなんですか？ 男の癖に生意気だとしても？ それとも教師の面子や下らない個人のプライドで引くに引けないとか？ そんなものはさつさと捨てるべきだと思いますが？ 教師としては、間違つたことをしたならすぐにそれを認め、そして次の機会に活かすと言つことを大切な生徒達に教えなければならぬのでは無いでしょうか？」

「う……」

「……一夏さんだなあ……そう言えば昔もこうやっているんな人を言いくるめたりしてたっけ……」。

私も何度かこうやって正論で押し込まれて、詭弁と屁理屈を所々に混ぜ込まれてもそこを論破できずにさらに押し込まれて、そして最後にちよつと誉められたり持ち上げられたりしてうやむやにされちゃつた人を見たことがあるし……」。

「……まあ、貴女は『怪しい人影がある』とか言う報告を確認しに来たんでしょう？　そしてその場所に俺がいて、色々話を聞こうとしたと」

「……はい」

「職務に真面目なのは良いことですが、猪突猛進は駄目です。もっと周りを見て、状況をしつかり確認してからやるようにしましょうね。何度も言いますが、職務に真面目なのは良いことです。私は色々言いましたが、貴女も貴方なりに生徒達のことを考えていたんですよね？　それは実に正しいことです」

「……はい」

あ、一夏さんが纏めに入った。こうして『最低でも自分は悪くなく、そして相手は正義感からのちよつとした暴走をしましたたために情状酌量の余地あり』で終わらせるつもりなのかな？

まあ、一夏さんらしいよね。いつもはあんなに可愛いのに、決める時は決める一夏さん……ああ、かっこいい……！

「……わあ……なんか織斑一夏って想像以上にかっこいい……」

うんうん！一夏さんはかっこいいよね！

頭を下げたシスターにひらひらと片手を振って別れを告げた一夏さんは、またのんびりと校門に寄りかかって帽子をかぶり、腕を組んで固まってしまった。

……それじゃあ、もうすぐ学園祭も始まるし……誰かが一夏さんに声をかける前に私から行かないと。

取り調べ、いやこれただの……

くすぐったくて目を覚ましたら、どうしてかちー姉さんに抱えられて取調室にいた。

なぜわかったかと言うと、前にもここには来たことがあるからだ。具体的にはちー姉さんのお仕置きの後とか、ちよつと前のキャノンボール・ファストの後とかで。

毎回あまりいい思いでは無いのでこの場所はあんまり好きじゃないんだが、まあ、あれだけのことがあったんだから仕方無いか。

……ところで、なんでちー姉さんの手が俺の服の中に入ってるんだ？ すべすべしてるしあつたかいからまあ悪くはないけど、これって取り調べだろ？

「ああそつだ。ほら一夏。知っていることをみんな話せ」

そう言ったちー姉さんの左手はペンを持って調書を取ろうとしているから、多分これはちー姉さんの趣味か新感覚の調書の取り方なんだろう。どっちかは知らないけど。

そう考えていたら、急にちー姉さんの右手が動いて俺の腹を撫で回した。ちよつとくすぐりたい。

「話せって言われても……急に来た黒いESにかんちゃんと一緒にミサイルを浴びせかけたくらいしか……」

「よしよし、いい子が一夏。その少し前はどつだ？」

するり、とちー姉さんの手が滑り、指先が臍を軽くつついて行った。

ちー姉さんはなんでかいつも、俺の腹を撫でる時はこうして臍にちよくちよくちよっかいを出していく。どうしてだろうな？

「んっ……その前は……ぷちーねえさんとぷちたばねーさんを撫でてて……そしてかんちゃんも……あうっ!？」

なんだかちー姉さんの指に怒られた。臍に結構強く爪を押し付けられたし、俺の自前の耳を軽くかじられた。

それから噛まれた耳をちー姉さんに舐められる。その音はすごく近くて、なんだか音が直接脳まで響いているみたいだった。

「そうかそうか。それが一番始めの状態だな？ あの時は妙に気分が高揚して気持ちよかったのだが、まさか一夏の仕業だったとは

……………」
「……怒ってる?」

そう聞いてみると、ちー姉さんは俺の腹を優しく擦った。どうやら怒ってはいないらしい。

「さあ、続きを話せ。その後は、どうやってアリーナの中での黒いISにミサイルを浴びせたんだ?」

……あの、ちー姉さん? もしかして、ちー姉さんは俺で楽しんでない? なんだか腹にあった手が少しずつ胸に近付いてきてるし……。

かぶ、と噛みつかれた。どうやらこの事は気にしてはいけないことだったらしい。痛くはないが、噛み痕に這うちー姉さんの舌とか何度も落ちてくる唇とかがくすぐりたい。

そのくすぐりたいのを我慢して、俺はちー姉さんの問いに答えようと口を開く。

「アリーナのバリアは零落白夜で切り開いて、俺達を狙っていたあの黒いISを誘き寄せて……」

「それから飽和攻撃を食らわせた、と。なるほどな」

そう言っただけ姉さんは調書を取っていた右手も俺に回して抱き締める。ってかこれもう確実に調書を取るのが目的じゃないよな？

調書から手離しちゃったし。

……だが悔しいことに、俺の体は動かない。ちー姉さんに色々……

……色々……々々？ されたお陰でかなり疲れてる。そう言っただけは普通ベッドの上とかそう言っただけじゃないのか？

……まあ、ちー姉さんに常識は通用しないってことだな。うん。

かり、と耳を噛まれた。結構強く噛まれたが、痛くはない。普通の人間だったら結構痛がりそうだ。

「勝手に人を常識外れの人外にするな。馬鹿者……お仕置きだ」

にゆるん、と口の中にちー姉さんの右手の指が入ってきた。ちー姉さんの人差し指と中指は、俺の舌を好き勝手に弄んでいる。

喋ろうにも喋れない。呼吸は鼻でできるからまだいいとしても、取り調べで喋れなくするのは色々本末転倒じゃ……？

……ああ、そうか。ちー姉さんの狙いは始めからこうして『今回の無茶に関するお仕置き』をすることだったか。趣味がずいぶん混ざっているようにも思えるが、ちー姉さんだし仕方無い。理性的に一番やばい所だけは避けてくるのがちー姉さんだからなあ……。

口の中で蠢く指が舌を絡め取り、ちー姉さんの指の太さの分だけ開いている口から唾液が溢れる。

しかしその唾液は顎から滴となって滴り落ちる寸前に、ちー姉さん

に舐めとられてしまう。

……ちー姉さん？ 理性とか倫理観とかをどこに置き忘れてきたの？

「小さい私を撫でて撫でて撫でて撫でて撫でて撫でて私を焦らして焦らして焦らして焦らして焦らして焦らして焦らして我慢を効かなくしたのは、他ならぬ一夏だろう？」

自業自得だったらしい。あーあ。

もしかしたら、俺はこのままこの場所でちー姉さんに美味しく頂かれてしまうのかもしれない。胸を弄っていた左手がまた少しずつ下に行ってるから、なんとなくそんな気がする。

……この世界の初めては、理性の箍が外れたちー姉さんか……。まあ、一応想定範囲内だな。無いと思ってたんだけど。

どちらかと言うと、束姉さんの方が我慢が効かないと思ってたんだけど、どうやら近い分ちー姉さんの方が先に限界を迎えてしまったようだ。

もうこれは笑うしかないな。あっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは。

……っつて、おーいちー姉さん？ 流石に学園内で生徒と教師がそれは不味いって。しかもここ取調室でカメラとか回ってるんだから。

「手は回してあるから安心しろ」

わぁ用意周到。計画的犯行だねえ。

いつもなら俺と一緒にいる鈴やののちゃん達も今なら自分の取り調

べで忙しいし、邪魔するものは誰もいない。その上この部屋は使用目的から完全防音。それをなんとかするためにカメラが回っていたんだが、こちらでもシャットアウト。

極めつけに俺はちー姉さんに色々されていて、もう何をされても逃げられないと。

……いや、逃げようとすればできないことはないんだが、ちー姉さんに怪我させたりそれに近いことをするほど嫌じゃないから精神的にあんまり抵抗する気にもなれない。

………これでIS学園を退学になり、ちー姉さんもクビになったら

………どうしようかねえ………？

学園祭、楽しく回ろう

シスターを適当に言いくるめて少しして、蘭ちゃんがかなり近くにいるのがわかった。目だけを動かして蘭ちゃんに視線を向けてみると、そこにはやっぱり蘭ちゃんの姿が。

だが、その姿は残念なことに俺を囲む生徒達の輪からそこそこ離れている。俺に近付いて来てはいるが、これは俺から近付いていった方がかなり早いな。

モーターギアを回して、とんと跳ねる。すると俺の体は軽々と浮き上がり、生徒の輪を飛び越えて蘭ちゃんの目の前に着地することができた。

俺は帽子を脱いで、蘭ちゃんに笑いかける。

「来たよ。蘭ちゃん」

「はい！ありがとうございます、一夏さん！」

蘭ちゃんは笑顔で頭を下げるが、どうもその笑顔は余所行きの物のような気配だ。別にいいけどね。

シルバースキンの手袋を外し、蘭ちゃんの頭を撫でてみる。すると仮面が取れたと言うべきか、鍍金が剥げたと言うべきか、見慣れた蘭ちゃんの顔になる。

まあ、蘭ちゃんは基本的に俺の前だと笑ってるか慌てるか恥ずかしがってるか照れてるか……あと怒ったり混乱したりすることもあったな。とにかくそんな年相応の可愛らしいところを見せてくれるのが俺の一番よく知っている蘭ちゃんだからな。

「……あ……あの五反田さんが……」
「……笑っ……た……?」

蘭ちゃんは学校ではどんなキャラだったんだろうか。凄く気になる。まあ、蘭ちゃんがどんなキャラを作っていたとしても、俺にはあまり関係ないから別にいいけどね。

「あ……あの……」

急に話しかけられて少し驚いたり驚かなかったりしたが、とりあえず声の聞こえた方に顔を向ける。

どこかで聞いたことがある気がしたから視線を向けたんだが、聞き覚えがなかったら完全に無視してたかもしれないな。

……どこで聞いたんだっけ？ 結構最近のような気がするんだけど……。

……ああそうだ。確か夏祭りで蘭ちゃんと一緒にいた生徒会の一人だ。今の今まで忘れてたけど。

「えっと……織斑一夏さん……ですよね？」

「そうだけどどうかした？」

俺がそう聞いてみると、なぜかその女の子は怯んでしまった。今はそんな怖い顔をしてた覚えはないんだけど……。蘭ちゃんを撫でながら待っていると、その女の子はなんでかこんなことを聞いてきた。

「あの……蘭とはどんな関係なんですか……?」

……面白そうな答えを返すんだったら迷わず『色々《・・》あったんだよ』って言うてるんだろうけど、今回は別に面白い答えを求められてる訳じゃあ無いからなあ……。

ここは普通に『友人の妹』って答えを

「……大切な人だよ。少なくとも俺にとってはね」

あつれえ口が勝手に事態を面白くなりそうな方向に転がしちゃった。まあ、確かに間違いではない。確かに蘭ちゃんは大切な娘（恋愛的な意味は皆無。主に親友の妹とかそうついた意味）だし、蘭ちゃんがどう思ってるかは知らないから『少なくとも俺にとっては』という言葉がついてもおかしいところは一つもない。

……なのに、どうして聞き耳をたてていた奴等は顔を真っ赤にしたり崩れ落ちたりしてるんだ？

「……い……一夏さん……？ 恥ずかしくないんですか？」

「好きな相手に好きと言い、大切な相手にお前は大切だと言つのに何を恥じる必要がある？ 好きな相手に好きと伝えることもできないなんて、そんな息苦しい人生は嫌だね」

「なんだか一夏さんがかつこいいこと言ってる！？」

「会長がツツコミ！？」

なんだかカオスなことになってきてるなあ。面白いからいいけど。

俺は蘭ちゃんの手を引いて、色々と話をしている間に学園祭が始まったのを確認して校門を潜る。

聖マリアン又女学園は女子校だけあって、出ている店も大抵クレ

ープやたい焼きなどのお菓子系統ばかり。一部でたこ焼きを売っていた所もあったが、甘いものばかり食べていてしょっぱいものが食べなくなったらしい女の子達がちょこちょこ並んでは買っている。

ちなみに俺は弁当を持参していたりする。昼に長くなりそうな食堂やらカフェやらの列には並びたくないから、作って持ってきた。

量はそこそこだが、味は………。IS学園の味に慣れているちー姉さんが無言でおかわりを催促するくらい。結構自信作だったりする。

一見すると持っていないように見えるが、実は一番外側のシルバースキンの内側にアンダーグラウンドサーチライトの入り口を作ったそこに保管している。こうすれば持ち運びも楽々。凄いな千の顔を持つ英雄。

同じようにしてシロの掌にアンダーグラウンドサーチライトの入り口を作って暗器使いの真似を試みたり、犯罪に使おうとすれば窃盗強盗誘拐拉致監禁等々使い道は様々だ。

まあ、俺は主に手荷物の持ち運びと静かで安全な寝る場所を確保するためにばかり使っているが。

この中から取り出したと見せかけて千の顔を持つ英雄でリアルタイムで作ることもできる。

………今はそんなことはどうでもいいな。それじゃあ、事件も何もない学園祭を楽しもうか。

学園祭、楽しいねえ（前書き）

取り調べ？ 全面カットしましたが……なにか？

学園祭、楽しいねえ

蘭ちゃんと手を繋いで聖マリアンヌ女学園を歩く。蘭ちゃんはなんだからいつも以上にご機嫌だ。

俺の奢りでクレープを食べたり、テニスボールをラケットで打つて的に当てる射的を楽しんだりしている蘭ちゃんは、見ていて何となく微笑ましい。

……俺？ 俺がやるのは不味いだろ。確実に荒らしになるだろうし。やる以上は加減はしないし、加減しなかったらまず荒らしちゃうし。射的とか的当てとかさういった系統の事だったらほぼ確実にそうなるからな。

……加減しろと？ そんな無茶な。

そんな風に俺は一步下がって蘭ちゃんを眺めていたんだが、蘭ちゃんに手を引かれて学園祭を回っているうちになぜか俺を一步下がって眺めている集団ができてしまった。

別に言いがかりをつけられたりはされていないから構わないんだが、やっぱりあまり好ましいとは思えないな。

それに、なんでか俺が蘭ちゃんの彼氏だとかさういった噂が流れてしまっているし、そろそろやめさせた方が……と言うか、巻いた方がいいかもしれない。

「……？ 一夏さん？ どうかしたんですか？」

俺の空気が少し変わったのを敏感に感じ取ったのか、蘭ちゃんが不思議そうな顔で俺のことを見上げてくる。

そんな蘭ちゃんの頭を撫でて、俺は答える。

「なに。ちよつと巻こうと思ってな。今の時間で人が少ないところ
と言えばここって所はある？」

「え、えつと………屋上とか、時計塔の最上階とか……？」

なるほど。人は少なさそうだ。

そうと決まれば話は早い。蘭ちゃんをひょいっとお姫様だっこして、
モーターギアを回して文字通り飛ぶ。

校則では『敷地内では走らないこと』と言うのががあるが、飛んでい
るから問題ない。実際に俺は走ってないし、校則で縛ることはでき
ないだろう。

それに、ISも使っていないから法律的にも問題ない。千の顔を持
つ英雄を禁止する法律なんて無いし。

「え、ええええつ！？ と、飛んで………っ！？」

「しつかり掴まってなよ蘭ちゃん。じゃないと落ちるよ？」

そう言うと蘭ちゃんは俺の首にしっかりと手を回し、そして顔を真
つ赤にしながら俺の胸に額を押し付けた。

顔どころか耳や首まで真っ赤になっている蘭ちゃんは、やっぱりか
なり大人しかった。

人のいない時計塔の上で弁当箱を開く。近くには大きな鐘や歯車が
あったりするが、そんなことは別に気にはならない。

埃はネギま世界のアーティファクト『オソウジディスク』で纏めて
掃いたから全く無いし、歯車とかに差されていた機械油が滴ってで

きたと思われる床のの染みなんかはマットを敷いて服が汚れないようにした。

俺と蘭ちゃんはそのマットの上に座り、いつもならまず見ることはないだろう景色を眺めながら俺が持ってきた弁当に箸をつける。

……一応言っておくと、箸はちゃんと二人分用意した。だからお約束の『あーん』はやっていない。

なんだか蘭ちゃんが残念そうな顔をしているのは、きっと気のせいじゃない。

まあ、それでも俺はあえてなにもしないだけださ。面倒だし。

あらかじめ弁当と一緒に用意しておいた小皿と箸を取り出し、蘭ちゃんに手渡す。

俺も同じものを持って二人で弁当箱を挟み、欲しいものを互いに欲しいだけ小皿に取る。

「簡単なものの寄せ集めで悪いね」

「いえ！すつごく美味しいです！」

「喜んでくれてなによりだよ」

自分が作った料理を美味しくそうに食べてくれる相手がいるっていうのは、いいことだね。ちー姉さんや鈴達にも、また食べてもらいたいなあ……。

「……ほんと、美味しいです！」

蘭ちゃんはにこにこ笑いながら弁当箱から取った唐揚げを食べている。前ののちゃんが作ってくれた唐揚げの改造版だけど、気に入ってくれたみたいでよかったよかった。ご飯と一緒に食べると美味

いよね。

もぐもぐとすっかり何度も噛んで、とても美味しそうに食べてくれる。まったく、こんなに美味しそうに食べてくれると、作った者としてはかなり嬉しいねえ……。

「まあ、唐揚げ以外にもいっぱい食べな。まだまだたくさんあるからな」

「はい！」

蘭ちゃんはそう言ってもきゅもきゅと食べる速度を上げる。けれどその箸捌きは見事なもので、こぼしたりとかそういったことは一切無い。流石は定食屋の娘ってことで……いいのかな？

……………ん？ 誰か来るな。ここの教師かな？ ここに来る時にシルバースキンは使ってたけど、シルバーカーテンは使ってなかったし。バテても仕方無いっちゃ仕方無い。

……………それじゃあちよつといたずらしようか。俺は寝るのが大好きだけど、人をからかったりするのも好きだからな。

弁当箱から卵焼きを取って、蘭ちゃんの口に運んでみる。蘭ちゃんは顔を真っ赤にして恥ずかしがっていて……うん、可愛いね。

「あ、あの……一夏さん……？」

「あーん」

「恥ずかしいですよお……」

「いいから。はい、あーん」

外の誰かが扉の影から俺と蘭ちゃんを見ていることには気付いていたが、それに見せ付けるようにして……ぱくつと食べさせる。

扉の向こうで誰かさん達が声無き悲鳴を上げたようだが、俺はそれを無視して蘭ちゃんに食べさせたはいいが口に入りきらずに箸に残

ってしまったところを食べる。

「　　ッ!?!?!?」

するとなぜか蘭ちゃんかなりびっくりしてしまっている。何があつたんだろっとな?

シルバースキンの中のアンダーグラウンドサーチライトから、麦茶の入った水筒を取り出して蘭ちゃんの口許まで運んであげる。すると蘭ちゃんはすぐにその水筒のコップに口をつけて、一気に麦茶を飲み干した。

……さてさて。どんな噂が立つのか……蘭ちゃんには悪いけど、ちよつと楽しみかな?

学園祭、おしまい

色々と蘭ちゃんをからかったりしながら学園祭を回り、明日からはかなり蘭ちゃんのイメージが変わるだろうな〜と思いつつもそんなことは表に出さないようにしておいた。その方が面白そうだったしね。

それと、俺は結局色々な所で荒らしのようなことをやってしまった。蘭ちゃんに誘われたり、呼び子をしていた生徒達に『是非!』と言われてしまったので参加したんだが……やっぱりやめとくべきだった。

テニスだったはずがテニス又になってしまったり、輪ゴム鉄砲を無意識に強化してしまい、威力その他が酷いことになったまま射的を楽しんだり、なぜかまたついて回るようになった中の数名が俺と蘭ちゃんの顔を見ただけで妙に恥ずかしそうに顔を赤くしていたりしたが……きつと俺の悪戯とは関係無い。

まあ、色々あったが楽しかった。やっぱり聖マリアンヌ女学園はI S学園とはずいぶん違ったが、これはこれで面白い。

ただ、不純異性交遊だのなんだのと言われるのが鬱陶しかったな。手を繋いで歩いてただけだったのに、なんでこれが不純異性交遊になるのかわからない。これが不純異性交遊だって言うんなら、純異性交遊ってのはどんなものを教えてもらいたいもんだ。

……教えてもらったとして、それを実行するかどうかはまた別の話だけ。完全に実行したら多分人間は滅びるだろうし。

「今日は、来てくださってありがとうございます」

蘭ちゃんが俺にぺこりと頭を下げた。

「いやいや。楽しかったし来れてよかったよ」

俺はそんな蘭ちゃんの頭を撫でて、楽しんだことを告げる。特に意味がある訳じゃないが、俺は頭を撫でられるのは好きだが撫でるのも嫌いではないと言うだけのことだ。

蘭ちゃんの柔らかい髪を撫でる。蘭ちゃんの髪はまるで流れる水の中に指を入れているようなしなやかさと柔らかさを持っていた。

……やっぱり、蘭ちゃんの髪は気持ちがいいね。

「あ………」

すっ、と蘭ちゃんの頭から手をどかすと、蘭ちゃんが残念そうな物欲しそうな声をあげる。なんと言うか、かなり可愛らしい。

「まあ、また今度ね」

「……はい」

蘭ちゃんは寂しそうに笑顔を浮かべ、それからちよつと恥ずかしそうに俯いた。

「あ……あの………」

「ん？」

もじもじと指を動かしながら言葉を選んでいる蘭ちゃんは、弾が見たら笑いながら俺に推してくることが簡単に予想できるくらい可愛らしかった。どうしてこの世界の妹キャラは（原作のマゾ力は除くとして）みんな可愛いんだろ？ かんちゃんしかり、蘭ちゃんしかり、ののちゃんしかり……。

暫く待つっていると、蘭ちゃんは何かを決心したらしく俺の顔を下から見上げる。

それから俺の右手を取って下に引つ張り、自分も背伸びをして

俺の頬に、柔らかいものが当たった。

蘭ちゃんは顔を真っ赤にしてしまったが、俺としてはなんと言うか……かんちゃんに続いて蘭ちゃんも大胆になったなあ……と思うばかり。弾や蓮さんに伝えたら赤飯でも炊きそうだ。

「そつ……その、ま、ま……またっ！」

蘭ちゃんはそれだけ言い残して、学校の中に走り込んでいってしまった。

……色々言われると思うけど、頑張れ蘭ちゃん。俺はそんなちよつと隙の多い蘭ちゃんを応援してる。

……それにしても、あれ以降はマゾカやちよるータムの襲撃は無かったな。シルバースキンを着てたのが無駄になったが……まあ、平和なのが一番か。

俺はてくてくと歩いてES学園に向かう。ちー姉さんに取り調べ（あくまでも取り調べということしておく）を受けている俺には悪いが、休むのは暫く後になりそうだ。

お土産とかも買っていかなくちやならないし。マフィンとかそういうのでいいよな。

いや、自分で作るか。それじゃあ材料は……千の顔を持つ英雄で作ればいいか。粉は空中に撒いて火をつければ凄い爆発を起こすから武器だし、砂糖や塩は大きな結晶にして指弾にすれば痛いから武

器。その他果物も秒速200mでぶつけりや痛い。武器武器。

……屁理屈だと言うかもしれないが、その屁理屈が通っちゃってるんだから仕方無い。千の顔を持つ英雄は本当に便利だな。

side 五反田 蘭

生徒会室に戻った私は、凄まじい勢いで襲いかかってくる質問の嵐を

「はいそれじゃあ質問あるなら仕事を片付けてからね。次はこれをお願い」

「くう……やったら正直に答えるのね!？」

「もちろん。でも、あんまり踏みいった質問には答えないわよ?」

「言質は取ったからね!」

こうやって受け流していた。

ちなみに今のところ聞かれたことは、一夏さんとの関係(恋人ではないと答えておいた)、一夏さんの好みのタイプ(一夏さん流の殺す笑みで見つめ続けたら泣きながら撤回してきたので答えていない)、好きな食べ物(基本的に何でも美味しく食べる。けどこれといった好きなものは知らない)、生年月日(プライベートな情報だから答えていない。星座や血液型も同じく)、知り合った方法(兄の学園祭に行った時に一緒に)。

……ほんと、こういうときの皆って押しが強くて困るね。

……つまり、私もようやくお兄と同じ‘常識外れ’の域になったんだね。

お兄は超高水準の万能型。篤さんは気配察知特化型。鈴さんは勘に特化しすぎてて、シャルロットさんは幸運特化。ラウラさんは高水準万能型。セシリアさんは頭脳特化で簪さんは大局を見ることに長ける。

……じゃあ、私はどうなんだろう？

そう思いながら仕事と後始末を片付けて、時々仕事を一区切り分終わらせて質問に来る娘達を適当にあしらう。

……まあ、いいや。また今度考えよう。

用事ができた、面倒臭そう

俺はIS学園の俺の部屋に戻る。するとそこには疲れきったような顔をした俺が居たが、仕方無いとスルーした。

ちー姉さんにあんなことまでされて、しかも逃げられないってのはきつかったろうな。

内容？ 色々不味いから秘密だ。ちー姉さんの名誉のためにも、俺の心の安寧のためにも……………うん。

俺も疲れたのでそろそろ寝ようかと思っていたんだが、急にシロにプライベート・チャネルの通信が入った。

相手は誰だと思いつつ見てみると、『さいれんと ぜふいるす』からの通信だと空中投影型パネルに出ていた。なんだ、マゾカか。

「……………コノ電話ハ 現在 使ワレテオリマセン。モウ一度 番号ヲ 才確カメニナツテ 才掛ケ直シクダサイ」

『む……………間違えたか……………』

ぷつつ、とプライベート・チャネルが切れる音がして、マゾカからの声が届かなくなった。

……………なんか、悪いことしたかな〜と黙っていると、もう一度シロにプライベート・チャネルが来る。やはり送信者は『さいれんと ぜふいるす』。つまりはマゾカだ。

『はいはいこちら織斑一夏』

『私だ』

『綿試さん？ 知らない名前ですねえ』

『ふざけるな！私だ！織斑マゾカだ！』

自称でマゾカ使っちゃったよこの娘さん。楽しすぎるんだが。

『ああ、なんだマゾカか。ちよろータムは元気？』

『ああ。今日も元気に叫んでいる』

まあ、知ってるけど。それ俺だし。

『ところで何の用だ？ 俺はこれから泥のように寝る予定だったんだが』

『ああ、そうだった。まともな方法でお前に連絡を取れるのが私だけだったから私が言うのだが……：すぐに私達のいるホテルに来てくれないか？ スコールが話し合いと観察と人間性を見ついでに高級ダイナーを奢ってくれるそうだ』

『思いつきり狙いをぶちまけてるんだが、良いのか？』

『構わないそうだ。どうせお前が相手ならバレるだろうと言っていたしな』

……俺ってどこまで化物扱いされてるんだろうな？ 俺はただ寝ただけなんだが……。

まあ、やるうとすればわからないとは言わないが、ルリヲヘッドを被せるとか、いどのえにつきを使っている状態で相手の名前を（鬼神の童謡でカンニングしながら）呼ぶとか、そんなことをしなくちゃいけないからあんまりやりたくない。

『めんどいから行きたくないんだけど』

『来たら直接ちよろータムを好きだけからかっていいそうだし』
『行く。どこのホテルだっけ？』

聞いてみるとそこは新聞部二年の升寿司ますずしさんのお姉さんとやらが俺達にインタビューの報酬として渡すつもりだったらしいチケットのホテルだった。行く気は欠片もなかったけど、一応パンフレットは見といたからそのくらいはわかる。

「わかった、それじゃあ五分ちよつとで行くから待っていてくれ」

「私達はホテルの前にいる。ISで来るのは構わないが、飛び越していつてくれるなよ」

それだけ残してマゾカからのプライベート・チャンネルは切れる。

さてと。寝巻きに着替えるのは後だ。そこそこまともなスーツに着替えるか。

side ちよろータム

「いい加減にしるゴルァ！誰がちよろータムだ！なんでここで私なんだよ！？普通に考えてここはMだろうがああっ！！」

「いい加減にするのはお前だちよろータム。周りからの視線が突き刺さっているのがわからないのかちよろータム。だからお前はちよろータムなのだちよろータム。わかったかちよろータム。こんなに視線が突き刺さっているにも気付けないようでは戦闘員を廃業した方がいいのではないかと思うのだが、ちよろータムはどう思う？

と言うか、ちよろータムは本当は気付いていて叫んでいたんだろっ？ 周囲からの視線が槍のように突き刺さってくるのが嬉しくてたまらないのだろう？ 流星はちよろータム。エムさんと呼ばれるだけのことはあるな。どうしたちよろータム。それともエムさんと

呼ばれた方が興奮するか？ そのようだな。頬が朱色に染まっているぞエムさん。だが今度からはちよろータムだ。わざわざわたしがちよろータムを喜ばせてやる意味がわからないからな。ちよろータムはちよろータムらしく、ちよろちよろと地を這い回っている。この淫猥ちよろータムが。飼い毒蜘蛛に手を噛まれて死ぬ」

「そうだそうだー」

「うるっせえんだよてめえらは！なんでお前らそんなに息が合っているんだよ！？ 双子か！」

ちよろータムはだんだんと地団駄を踏み、マゾカと一夏の二人を指差しながら怒鳴りつける。

指差された二人は不思議そうに顔を見合わせ、口を揃えて言った。

「「相手がちよろータムだからな」」

「理由になってねえんだよおおおおっ！！！」

「はいはい。マドカもあまりこの娘をからかわないの」

「……チッ」

「す……すこおるう……」

スコールはしくしくと泣きながら胸元に顔を埋めてくるちよろータムの頭を優しく撫で、それから僅かに緩んだ顔を引き締め……ようとして失敗し、その失敗に気付いていて無視しながらマゾカに顔を向ける。

「……それで、彼はなんて言っていたの？」

「……ISを使うのかあの空飛ぶ鎧を使うのかは知らんが、五分で来るそうだ」

「……そう」

「そうだよ」

……ん？ とおかしいと言うことに気付いたのはほぼ同時。すぐさまその声の聞こえた方向に目をやると、そこには真っ黒いスーツに身を包んだ一夏が立っていた。

「いつの間に……」

「さっき掛け合いましたのに気付いてなかったんだな？」

からからと笑う一夏に、マゾカが眉を潜めて問う。

「五分後に来ると言う話だったが……」

「ああ、俺は五分前行動主義者なんだ。時によって主義がころころ変わるけど」

そんなことを楽しそうにのたまう一夏だったが、その場にいる見知らぬ女に気付くと、何かを奥深くに隠している束のような笑顔を浮かべて言った。

ファントム・タスク

「一応、初めまして。亡国機業のスコーンさん」

「美味しそうな名前ね。でも私のことは違う名前で呼んでくれると嬉しいわ。織斑一夏くん」

「じゃあ大雨さん」

「……それでいいわ」

なんとも締まらないこの出会いが、亡国機業のスコールと、後に人外筆頭と恐れられる織斑一夏の出会いだった。

黒い話と、美味しい飯

大雨さんに連れられ、マゾカに手を引かれ、ちよろータムに後ろから睨み付けられながらホテルの展望レストランへ。一応この為だけにスーツを来てきたわけだし、食べるんだったら美味しいものを食べたいよな。

あと、どうやら俺達は家族連れか俺のハーレム状態の二択に見えるらしく、微笑ましく眺められるか射殺すような目で見られるかで少し面倒だと思った。

まあ、悪意まみれの目を向けられるのは慣れてるし、別にいいけど。

「……なあ。さっきからお前を睨み付けていた奴等が急に喉を抑えて苦しみ始めたのだが」

「急にゾナハったりしたんじゃないの？ ドイツではラルちゃんのにISに妙な改造をしたり、ちー姉さんを真似するシステムを研究していたところに『苦しめ〜苦しめ〜』と呪いを送ったら全員ゾナハつたらしいし」

「あら、あれの原因は一夏くんだったの？」

「呪ったら『偶然』ゾナハがそこで蔓延しただけだよ。俺は悪くないし、何も知らない」

そう、全ては『偶然』だ。例え銀の煙がその研究所を被うのが見られていようが、それと同じものが寮の俺の部屋から飛び出していくところを見られていようが、俺は知らないしやってない。だから関係ない。

「……そういうことしておくわ」

「賢明な判断だと思うよ」

そんな風にくだらな話をしている間にレストランに………と思っ
たら、着いたのはなんだか奇妙なほど高そうな服屋だった。どうや
らここでマゾカとちよろータムの服を買うらしい。

先に買っとけと思わなくもないが、どうやら俺がマゾカとちよろー
タムに似合いそうな服を選ばなくちゃいけないらしい。

……中身はともかく、外身はかなり良いんだから適当でもいいと思
うんだけど？

「まあまあ。そう言わないで選んであげて？ 意外かもしれないけ
ど、この子達は結構楽しみに」

「してねえ！絶対にしてねえ！」

「顔が赤いぞ、ちよろータム」

「目が腐ってんじゃないかねえのかてめえ」

ぎゃんぎゃんと騒いでいる仲のいい二人に合った服を適当に見繕う。
わざわざ俺が作る気にはならないし、適当にそこらにあるのでいい
だろ。最大限ぶっちゃけると面倒だし。

まあ、食うのに邪魔にならない程度に洒落てる奴で、値段的にも手
頃な奴を………これとこれでいいや。

適当に見ていた中であつた黒いドレスと藍色のドレスを選んで大雨
さんに渡す。大雨さんは自分のを持ってるだろうし、とりあえず大
雨さんの物欲しげな目は軽くスルー！

………って、なんで俺はこいつらの服を選んでやってるんだ？ 俺が
選んでやる必要は全く無いだろうに。

……まあ、いいか。

「そう言えば、今フランスとイタリアが何か企んでるらしいわよ？ 私達に秘密裏に接触しようとして来たもの」

「ああ、一応知ってる。のちゃんの身柄の話だろ？ 一応潰しておいたはずだけど」

「やっぱりね。急にキャンセルされたから結構驚いてたのよ？」

「あつそ。ところで、そんな話をここでしていいのか？」

「大丈夫よ。問題ないわ」

そう言われると問題があるように聞こえてしまう俺がいる。

まあ、実際には問題ないんだろうし、問題があつたとしても無くなるけど。正確には無くすけど。

「ちなみに、俺のところに攻めて来るんだつたら対応の準備をしないと無様に惨めに敗北して生き恥を曝す……ことすらできずにちー姉さん達に拷問紛いの事をされてから束姉さんの発明品で頭の中の情報だけ引っこ抜いてコンクリ詰めになされて魚の餌にされると思っから」

「……肝に命じておくわ。まだ私は死にたくはないし、あの娘も死なせたくないもの」

大雨さんは反応を苦笑いに止めたが、内側ではどうやら更なる戦力増強をすることを決めたらしい。

まったく、弾に比べてなんとわかりやすいことか。これで組織の偉いさんだつて言うんだから、世も末だよな。世紀末まではあと90年くらいあるけど。

「……着替えが終わつたみたいよ？」

「そつだな」

試着室から出てきたマゾカとちよろータムは、俺が選んだドレスを見事に着こなしていた。

これが鈴とかののちゃんとかだったら素直に誉めるところだが……
…相手がマゾカとちよろータムじゃなあ……。

まあ、一応元がいいから似合わないわけじゃないし、誉めてやってもいいんだが……ちよろータムは色々騒ぎそつだから無視しよう。

「似合ってると思うぞ」

「そつか」

「おいおいエム。顔がにやけて」

からかいの言葉を受けたマゾカがちよろータムの足を払い、肩から頭の上を通して顎と膝の少し上を掴んだ。

そしてそのまま、ちよろータムの体を頭の上で弓なりに反らす。

そつ、その技こそとある王朝に代々伝わる伝統の技。

「タワー・ブリッジ！」

「おげえええつ!?!」

ミシミシギシギシとちよろータムの背骨が悲鳴を上げる。まったくこの二人は……。

「本当に仲がいいな」

「ええ。そつね」

どうやら大雨さんも俺と同じ意見だったようで、そんな二人の掛け合いを暖かい目で見守っている。

……そろそろ食べに行かないか？ これでも結構気を張ってるから

疲れるし、腹も減るんだが……。

そう思ってみたんだが、大雨さんからはなんの反応も返ってこない。そう言えば、読心術は固有スキルだったな。あまりにも当然のように使われていたから忘れかけてたよ。

「そろそろ行かないか？」

「そうね。行きましようか……ああ、代金はいつもの所にね」

「はい、ミス・ミューゼル」

ようやくが。

「ぎゃああああ!!?」

「鳴け!喚け!貴様の悲鳴は実に心地いい!!」

……そろそろふざけてないで止めるべきか、それとも未来の敵がここで消えてくれることを期待して止めないでおくか……。

……まあ、一応止めておくべきか。これでもこれから一緒に食事するわけだし。

ゴキッ!!

「いっ!?!」

……少しばかり遅かったか。まあ、冥福くらいは祈ってやるよ。

漸く本番、高級ディナー

ホテルで通されたのは明らかにVIPな席。景色は綺麗だしサービスマンも行き届いている。行き届きすぎて、もはや鬱陶しいくらいだ。庶民的な俺には合わないな。多分今回が最後でもう二度と来ない。

……まあ、料理には一切問題は無い。それは確かだ。

「……あまり楽しくは無さそうね？ そんなに私達との食事は楽しくない？」

「いや、堅っ苦しいのは苦手だからここには多分もう来ないなと」

なんでか大雨さんの内側の顔がひきつった。失礼なことを言ってるのはわかってはいるが、仕方ないだろう。これが俺の本心だ。

まあ、前述の通り料理に文句はない。これは完全に俺の気分の問題だ。直せと言われても多分無理だ。やる気も起きないし。

それに、大雨さんにも悪いところは無い。原因は完全に俺にあるし、そもそも俺には文句はない。

もきゅもきゅと出された料理を食べ、その合間に時折談笑する。そう言うのも悪くはないが、なんと言うか……性に合わない。

ついでにここで驚いたのは意外や意外、ちよろータムがテーブルマナーを一通り身に付けていた事だ。

あまりにも意外すぎてマゾカにちよろータムは頭でもぶつけてきたのかと聞いてしまった。ちょっと酷かったと思わなくもない。

……いつもののがあれだから仕方無いと思ってくれると俺はちょっと喜んだり。

「……ところで、織斑一夏」

「なんだ？ 織斑マゾカ」

「お前のISはどんな機体なのだ？ 最初は衝撃砲とレーザーを減衰させる特殊武装を使った中距離戦。次は剣と唯一仕様を使った高速戦闘。さらにその次はミサイルを雨のように降らせ、荷電粒子砲で隙をつく遠距離型。しかもどれもかなりの高水準で纏まっている」

「どうやら俺のIS……つまりシロは、随分化物のような性能だと思われるれているらしい。実にその通りだが、心外だ。」

「実際はただひたすら速く、それだけを目指して作られたというあまりにも尖りすぎた機体性能なんだが……まあ、戦い方からはわからないよな。」

「隠す気は全く無いって言うのに、いつの間にかこうして内容が謎に包まれてしまっている。」

「……なんとなく中二心が刺激される響きだよな。謎に包まれた白の剣士。それを扱えるのは俺だけで……まったく。実に馬鹿馬鹿しい。俺が言うのもあれだが、厨臭いったらありゃしない。」

「細かいことは秘密にしとくけど、シロを最大限に使いこなそうとしたら近接型になる。元々速度関係に気違いじみてるほど特化した機体だからな」

「……そう言えば、それもだ。あの装甲の無い状態がお前の切り札だろう？」

「……実はまだ上があるって言ったらどうする？」

「……笑えない冗談だ」

「マジなんだか、冗談ってことにしておこうか。油断させるには色々」

話しすぎたが、もともとこいつらはもう戦闘時には油断してくれないだろうし、別にいいや。
俺は困らないし。

「とにかく、シロの製作においてもっとも重要視されたのは速度系統だな。それに合わせて機動力やらP I Cやらもずいぶん強化されてるんだと」

「……………それであの凄まじいまでの加速と機動か。なるほど……………」

こんな場所だつて言うのに、色気の無い話だなあ……………。

ちよろータムはちよろータムで不機嫌そうな顔を上手く隠しきれずにほんの少しだけ出して無言で食事しているし、大雨さんは大雨さんでそんなちよろータムを眺めてにこにこしたり、マゾカを見てにこにこしたりと忙しそうだ。

あの笑顔の裏に何を隠しているのかは知らないが、よっぽどチートじゃないと俺を殺すのは難しいぞ？

……………まあ、異世界からの転生者が相手だつたらちよつとした能力だけで死ねるけど。

食事の最後に出てきたデザートを食べ、この奇妙な晩餐会はお開きになる。

俺と大雨さん達は敵対組織の人間だつて言うのに、かなりゆつたりとした時間を過ごすことができた。

「今日は楽しかったわ。またいつか会いましょうね？」

「できればお互いに立場を気にしないで会うことができる時期がいね」

大雨さんは裏に何が隠れているかわからない暗殺者の笑みを浮かべ、俺も同じように笑顔を浮かべてそれを受け流す。

「……………次は殺す」

「やれるならやってみろ、ちよろータム」

「私をその名前で呼ぶなっつっつてんだろっが！」

ちよろータムはやっぱりちよろータムで、殺意が丸出しだ。

だからその殺意の矛先を言葉で鈍らせながら反応を楽しむ。やっぱりからかうのはうってつけの相手だ。

「五反田食堂のおすすめメニューを教えてください」

「……………気に入ったのか？」

「ああ。あそこの食事は実に美味しい。さあ、早く教えろ」

……………まったく。空気を読めない奴だな。シリアスはあんまり得意じゃないから構わないが。

「とりあえず業火野菜炒めだな。後は本人の味覚がわからないからすすめられない」

「そうか」

マゾカはちょっと残念そうだが、俺の好みとマゾカの好みが一致しているとは限らないから仕方無い。

……………さてと。帰るかね。

大雨さんとちよろータムとマゾカの三人に背を向けて歩き出す。そこそこ離れたら一度全身をシルバーカーテンで被って発信器やら盗

聴器やらをいかれさせてからヘルメスドライブを使って転移するつもりだ。

……まあ、ついていないと思うが、一応な。

中止と言ったな。あれは嘘だ(前書き)

……とりあえず、一月が終わるまでは外伝と異伝と過去話で繋いでいこうと思います。

二月になっても新刊が出ないと……本格的に更新が止まるかもしれません。

中止と言ったな。あれは嘘だ

「……………と言っわけで、中止になっちゃったタッグトーナメントを開催したいと思います！」

……………なにが『と言っわけ』なのかはわからないが、たっちゃんの号令で一度中止になったはずのそれがまた始まることになってしまった。

どうやったのか俺とかんちゃんのジェノサイドサーカスでかなりの割合の床が吹き飛んでいたのを修復し、何度も何度も何度も何度も流れミサイルの爆風と衝撃に曝されてズタズタになったアリーナのシールドバリア発生装置を綺麗に修理し、ちー姉さんや真耶先生を始めとする教師陣に許可を取り、上手くこれから先の予定を組み直してしまった。すごいなたっちゃん。なにがたっちゃんをそこまで駆り立てるのは知らないが、面倒なことをしてくれたもんだと心の底から思う。

まあ、やるからには頑張るけど。かんちゃんもやる気だし、面倒だけど仕方がない。

……………ちなみに、俺はジェノサイドサーカスを使用禁止になった。そろそろそうなるんじゃないかと思ってたが、予想以上に早かったな。

束姉さんの襲撃が無ければ、タッグトーナメント一回戦までは使えたと思うんだが……………まあ、いいや。禁止されたのは俺だけでかんちゃんは禁止されてないし、非公式の戦闘では使えるし。

……………念押しはしたから大丈夫。「俺は『禁止なんだな?』と何度

もしたから問題ない。そして、中止になったらなっただでそれも俺にとっては問題じゃない。寝る時間が増えるし。

「が……頑張ろうね……！」

「そうだね、かんちゃん」

……でも、かんちゃんはやる気満々だなあ……。

一回戦の相手はののちゃんとたっちゃんの二人組。対戦表を見るとそうなっている。

たっちゃんはIS戦闘があまり強くないようなイメージがあるけど、ののちゃんは確実に強敵だ。とは言えたっちゃんも放っておいていいほど弱い訳じゃないし、困るよなあ……。

ここはかんちゃんにたっちゃんの相手をしてもらって、俺が（似非ライオットを使わない）全速力でののちゃんを叩いた後に、かんちゃんと二人でたっちゃんを叩くか、もしくはその逆をするしかないな。

やるとしたらかんちゃんはどっちがいいんだろうか？

「お姉ちゃんがいい……対等の位置に立てる、チャンスだから……」

「いいよー」

それじゃあ俺はののちゃんを相手しないとな。あの無限エネルギーを0にするには零落白夜か弑の太刀が必要だから、シールドエネルギーはそれ以外では減らせないなあ……。

……全身からビームとかされたら、こっちは斬空閃式の太刀か斬魔

剣式の太刀等の飛び道具を使うしか無くなるんだが……まあ、その時はその時だ。そうなった時に考えよう。

そうして俺とかんちゃんは一リーナに向かって飛んでいく。のちやん達はもう来ている筈だし、入ったらすぐに戦闘開始かね？

side 篠ノ之 篇

楯無さんの体が、私の腕の中で震えている。その姿はいつもの飄々としたものでも悪巧みをしている時のものでもなく、年端もいかぬ幼子がお化けが出るぞと脅かされて怖がっているのと同じように、心の底から恐怖している姿だった。

顔は青ざめ、カチカチと歯がぶつかり合う音を立てている。

……まあ、無理もない。いつもおちゃらけているように見えるこの人は、あの時に一夏に強烈なトラウマを植え付けられているのだから。

そのせいで今も、アイコンクローをする形で眼前に右手を翳されるとガタガタと震え、ただただ『ごめんなさい』という言葉を繰り返すようになってしまっている。

むしろそれを簪の前では見せないようにしていたと言う所には尊敬の念を抱いてしまう。妹にカツコ悪いところを見せまいとするシスコンと言うものは凄まじいな。

……姉さんもきつと同じなのだろうな。姉さんは駄目な所も結構見せてくれるが、一番おかしな所は意識的に見せまいとしているようだし。

そんな楯無さんの体を抱き締め、優しく頭を撫でる。

「……大丈夫です。楯無さん……大丈夫ですから……」

実際、一夏は殺しに来たりはしないだろうし、残りのシールドエネルギーが1の状態で零落白夜を使って来ることもしないだろう。

絶対防御の操縦者生命危険域に入って気絶させるようなこともないだろうし、禁止されたジェノサイドサーカスと言うミサイルの雨を降らすこともしない筈だ。

その事は楯無さんもわかっているのだろう。しかし、それでも楯無さんの体の震えは止まらない。

「確かに一夏は強いです。私達では本気を出した一夏が相手なら、その影を認識することすらできずに敗北を喫するでしょう。……」

「……そんなことは、楯無さんだってわかっていたことでしょう?」

楯無さんはなにも言わない。しかし、私の話を聞いているのはわかるため、私は楯無さんを撫でながら言葉を続ける。

「……そして、それをわかっているながらも一夏と戦い、トラウマを乗り越えたいと願い、この大会を復活させたのは……他でもない楯無さんです」

……ほんの少しずつだが、楯無さんの震えが収まってきた。

いまだにカチカチと歯が合わさる音は聞こえるし、体の震えも止まっていない。

しかしそれでも少しずつ震えは小さくなっていく。

「……一夏の恐怖を乗り越えて、簪となんら隠すことなく話をするのでしょっ?」

「……………ええ」

すつ、と、楯無さんの体が私から離れていく。その体はまだ僅かに震えているし、その顔にはいつもの笑顔は浮かんでいない。

しかし、その目にはしっかりとした闘志が芽生えているのが見てとれた。

「……………ありがとうね。篝ちゃん」

「いえ、構いませんよ。女性の胸は抱き締めている相手の涙を隠すためにあるそうですから」

……………一夏と姉さんが作ったらしいゲームの言葉だな。

そう言ってみると、楯無さんはいつもととは遠いが笑顔とわかる表情を浮かべ、ISスーツに包まれた自分の胸を指差した。

「それじゃあ、篝ちゃんも辛くなったら泣いてみる?」

「そうですね。タイミングが合ったらお願いしましょうか」

私達は声をあげて笑った。

……………それでは、行こうか。

タッグマッチ、一回戦

アリーナに飛び出した俺とかんちゃんは、どうやら作戦通りに行くのは難しいようだと言つことを瞬時に悟った。

それと言つのも、たちちゃんは明らかに俺の事を狙っているからだ。

『……仕方ないから、かんちゃんのは今度の週一バトルでお願いできる？ かんちゃんのことを見ていないたちちゃんを倒しても意味ないだろ？』

『……………うん』

かんちゃんは一応うなずいてくれたが、やっぱりどこか不機嫌そうだった。

まあ、確かに俺の週一訓練にあわせて訓練をしていると、なかなかたちちゃんと都合が合うときは無いよな。

……それに、たちちゃん自身もこういうときじゃないと本気で戦ってくれなさそうだし。

本気でたちちゃんが戦ったら殲滅力はかなり高かったはずだし、油断はできないな。

『……………じゃあ、頑張ろう……………？』

『そつだね』

私は、お姉ちゃんと並び立てるようになりたかった。だからこのトーナメントは、私とお姉ちゃんがどれだけ離れてしまったのか、もしくはどれだけ近付いたのかを確かめるのにちょうどいい舞台だと思っていた。

……けれど、お姉ちゃんが見ているのは一夏だった。私もここにいるのに、一夏しか見ていないと言うことが明らかにわかる。

……考えてみると、お姉ちゃんは一夏に何度も負けている。あの全校朝礼の時もそうだし、その後にあっという間に生徒会室での話し合いでもそうだったと本音が言っていた。

……それを考えるとそれも仕方無いような気がするけど……それでもお姉ちゃんには私を見ていて欲しかった。

………今回は、お姉ちゃんの好きにさせてあげる。
だけど、次は私の番だからね？

『………瞑想は終わったか？』
『うん。ありがとう………簪』

私の考え事が終わったのを見計らって、簪が話しかけてきた。今のうちに私を攻撃することもできたはずなのに、簪は本当に優しいね。

『なに、気にするな同志』
『………うん』

私と簪はくすりと笑い合い、ほぼ同時に武装を展開した。

簪は見慣れた二振りの赤い刃の日本刀、雨月と空裂を。私は金属質な光沢を持つ薙刀、夢現を。それぞれ展開し、お互いに向けて構え

る。

『……加減はしないぞ？ 簪』

『……必要以上にしたら……怒る』

『……ふむ。簪に怒られるのは嫌だな。善処しよう』

そして私と箒はまた少しだけ笑いあって、すぐに互いに動き始めた。

箒は全身の展開装甲から真つ赤なエネルギーブレードを何十本も生やし、そのブレードの峰側からエネルギーを噴き出しての部分瞬時加速なんて言う離れ業を見せてきた。

当然雨月と空裂にもエネルギーが纏わりついていて、一撃食らったら連続して攻撃を食らってあっという間にシールドエネルギーを削りきられて落とされてしまいそう。

当たらなければどうということはないけれど、箒と紅椿が相手となるとその当たらないということが非常に難しい。

打鉄式式と紅椿の性能差は相当なもの。技術と経験で上回るうにも最近の密度の高い戦闘訓練と実戦でその差はかなり埋まってしまっている。

……でも、私にだって意地がある。負けたくないし、一夏にかっこ悪いところは見られたくない。

機体の性能の差が戦力の決定的な差になることもあるけれど、それはあんまりにも互いの性能に差がありすぎた時くらいにしか適用されない。頑張ればひっくり返せることだってある。

きつと今の私と箒の差はそのくらいだ。……正確には、紅椿と打鉄式式の差と言うべきだけど……何とかなる。

お姉ちゃんと戦いたかったという思いはまだ残っている。けれど、箒はそんな思いに囚われていても勝てるほど甘い相手じゃない。

今は箒だけを見て、箒を倒すことだけを考えなくちゃ……。……
そうじゃないと、箒に勝てるはずがないから……。……。

『……行くよ?』

『ああ。来い!』

私と箒は、再び高速で機動を始めた。

……この戦い……負けられない!

side 更識 楯無

目の前には、私にトラウマを植え付けた恐怖の対象。織斑一夏くんがいる。

正直、怖くて怖くて仕方がない。それなのに、私は今……笑っている。

体はいまだに少し震えていて、声をあげたら簡単に震えていることがばれてしまいそうだ。

「平気か? 今にも死にそうな顔をしてるが?」

私は答えない。答えられない。答えたら、怖がっていることがわかってしまうだろうから。

一夏くんはこういうことには妙に鋭い。相手の気持ちを簡単に読み取り、そしてそこに漬け込むことに関しては恐ろしいほどに長けている。

「それがわかってるんだったら、わざわざ隠すことも無いと思うんだけど？」

「ッ！？」

思考を読まれていたことに驚き、一瞬思考が止まってしまふ。

そして気が付いた時には目の前に雪片式型の白刃が迫っていた。

全速力で下に瞬時加速をする。髪が何本かと肩の辺りの装甲が少し持っついていかれたけど、シールドエネルギーはあまり減ってはいない。これが額に直撃していたらかなり変わっていたのだろうけど、今は避けることができた。

息を大きく吸って、それからまた大きく吐く。武器を呼び出して、一夏くんに向けて構える。

肌がピリピリする。こんなに怖い戦いは、更識の家で受けた実戦訓練以来だ。

あの時は潜り抜けられたから、今の私はここにいる。なら、こんどだってきつとなんとかなる。

全身から溢れさせるように水を纏い、いつもより少しだけ引き締まった表情の一夏くんを睨み付ける。

……越えさせてもらっわよ！一夏くん！

一回戦、その最中

side 篠ノ之 篤

簪の行動は予測するのが難しい。行動とは、攻撃、防御、回避、機動など、全てを合わせたその事だ。

それと言つのも、簪の操縦方法があまりに独特ゆえにそうになってしまっているのだが。

簪は、特撮やアニメといった物が好きだ。特に仮面ライダーや戦隊物のような、わかりやすいヒーローがわかりやすい敵役と戦い、人々の平和やヒロインを護っていくような話が好きらしい。

そして簪はそこで止まることはなく、そのヒーローに憧れた。そしてその憧れはISの機体制御にも現れている。

……勿論完全にそのままということはなく、ISで使うにふさわしいように改造が多々行われ、実戦で使いながら観客に‘魅せる’こともできるような動きに変わっている。

ここで恐ろしいのは、簪はそれらのことを意識することなく行っているということだ。

簪は実家ですっかりとした訓練を受けている。その成果は簪の身体に染み付いていて、意識しなくても簪は染み付いた技術を振るうことができてしまう。

……そう。私と同じように。

「ハッ！」

「せっ！」

ギヤリインツ！と金属音が弾ける。私の左の空裂と、簪の操る夢現
が衝突した。

それと同時に右の雨月の先端から、刺突と同時に圧縮した攻性エネルギーギアを放出する。しかしそれは、起点である雨月の横腹を簪の夢現の柄に弾かれて明後日の方向に飛んでいく。

長柄物とはこれだから厄介だ。こちらは一度振り下ろせば、一度停止してから振り上げるといふ行程を踏まなければ次の攻撃には移れない。二刀を扱う私でも、時間差を作ることによってその隙を埋めてはいるが、隙ができることは変わらない。

その点薙刀や槍、大刀、棍といった長柄物は、振り下ろした刃とは持ち手を中心とした逆の部分に石突があり、そこでも攻撃することができる。

その上長ければ間合いも広がるし、回転の中心から離れば離れるほど先端は速度を増す。

その分懐に入られると扱いの難度が凄まじく上がるが、私の得物を考えるとそこまで深く潜り込むなら一度武器を捨て、そして装甲から生える真紅のエネルギーブレードで戦う方が良いだろう。

空裂からエネルギーの帯を撃ち出す。相手を攻撃しながらの目眩ましになるし、私からも見えなくなるが、気配を読むことができれば大したことはない。

簪の逃げた方向に瞬時加速。帯を基準線とした垂直下方に足裏からエネルギードリルを出して突貫する。

しかしそれは簪の撃った荷電粒子砲で威力を削られ、夢現をドリルの回転と同じ方向に回しながら方向を変えさせることで受け流された。

そして受け流した簪は、ドリルの裏側にいる私に荷電粒子砲を連発し、シールドエネルギーを削っていく。

「……………だが、私の紅椿の唯一仕様は【絢爛舞踏】。この能力は、1対100のエネルギー増幅。紅椿の使用できるエネルギーであれば、ほぼ無制限にエネルギーを増幅することができる。」

つまり、シールドエネルギーをいくら削られようと、一撃で丸ごと持っていかれない限りは残ったエネルギーを増幅して回復することができると言うわけだ。

簪はその事を知っていてなお、私に向かってくる。現状で私を落とすことができるのは、一夏と千冬さんくらいなものだと言うのも知っているはずなのに。

「……………なあ、簪」

「……………なに……………？」

攻撃の手を止めて、簪に問いかける。すると簪も空中に止まり、私の言葉に返してくる。

「なぜお前は私と戦っている？ 勝ちたいのならば、楯無さんとお前が戦い、私と一夏が戦えばよかったのではないか？」

すると簪は少しだけ不機嫌そうな顔になって、こう言った。

「……………私はね。一夏のことを好き」

……………告白か？ なぜ私に？

そんな私の疑問をおいてけぼりにして、簪は顔を朱に染めながら言葉が続けた。

「……でも、お姉ちゃんのことも好きなんだ。二人とも大切で……二人とも、そばにいてほしい」

もちろん、篝達も、と簪は言う。嬉しいことを言ってくれるな。

「……でも、お姉ちゃんは一夏になんだか苦手意識があるみたいで……今回それを克服しようとしているように見えたから……」
「だから、楯無さんに一夏の相手をさせて、私をこうして食い止めていると」

簪は少し後ろめたそうにしながら頷く。まあ、確かにこれは受け取り方によつては『お前は眼中に無い』と言っているようにも取られる可能性があるからな。

まあ、私はそうは取らないわけだが……少し悪戯を試みるのも面白い。

「まあ、私は構わんぞ？ 一夏と千冬さんと姉さん以外が相手なら負ける気はしないし、簪がこうしている間も勝率がじりじり上がっていることを考えれば文句は無い」

「……本当に……そう思ってる……？」

まさか。こんなこと冗談にもならないさ。

だが、それはけして嘘ではない。本当だとも言えないが、私がこうしている間にも色々とできることがある。

にこりと笑いかけると、簪は訝しげな表情を浮かべる。

そして次の瞬間に、うつすらと自分を取り巻く薄紅色のエネルギーの流れに気付いて目を見開く。

すぐさま回避しようとスラスターに火をいれるが

「遅い！」

エネルギーの檻の一部に私からエネルギーを流し込み、触れている簷の脚部装甲を削り取った。

……ちなみにこの技は、蜘蛛の巣が朝露に濡れているのを見た事から思い付き、エネルギー操作の訓練として行ってきた。『エネルギーそのものに送電線のような役割を持たせて狙ったところに攻性エネルギーを送る』技である。

欠点は、私はあまり移動することができなくなる事と、準備ができるまでに時間がかかること。しかしそれさえクリアしてしまえば、この技はアリーナ内で行われる戦闘行為において多大なアドバンテージを与えてくれる。

そしてタッグ、あるいは複数人の戦いであれば、それを通して味方にエネルギーを送り込むことも可能だ。

………まあ、実はシールドエネルギーを削りきる以外にも勝利できる方法があるからこれはあまり使えないんだが……拠点防衛には最適だ。

動きを強制的に止められた簷に、ゆっくりと近付いていく。エネルギーの糸が途切れないような速度で、ゆっくりと。

荷電粒子砲が何度も飛んでくるが、エネルギーを纏わりつかせた空裂と雨月で全て切り払う。

千切れそうになったエネルギーは背中 of 展開装甲から蜘蛛の糸のように張り巡らせたエネルギーに繋げ、状態を維持する。

荷電粒子砲に攻撃し、破壊する。薙刀の柄を、集束させたエネルギーの刃で切り落とし、攻撃手段を奪っていく。

……さあ、これで終わりだ。

「……違うよ、箒」

ぽつり、と、箒が呟いた。

それと同時に、私の背筋を圧倒的な悪寒が走り抜ける。

「……確かに私の武器は奪われた……。夢現も、春雷も……」

箒の言葉を見殺して空中を漂うエネルギーの檻にさらにエネルギーを与え、ISやそれ専用の機材でもなければ感知することもできないような薄い膜を壁に変える。

それが終わったときに私の目に映っていたものは、視界の9割以上が巨大なミサイルという悪夢の再来だった。

「……それでも……私にはまだ、一夏からもらったこれが残ってる」
……なるほど。今回は箒が使ってきたか。

エネルギーの繭に護られながら、私は今回の勝負はまず勝てないと言ったことを悟ったのだった。

………やれやれ。また勝てなかったか。
だが、次は勝つ！

一回戦、その過程

たっちゃんはけして俺に近付こうとしないまま、俺を攻撃していた。水でできた触手を何本も張り巡らせて俺の動きを制限し、その触手から枝分かれするように生やした触手を鞭のように振るって攻撃してきた。

雪片式型を使って触手を叩き斬ってもまた新しい触手が後から後から湧き出して俺の邪魔をする。

……こういうのに捕まると、なんか色々ありそうな気がするんだよな。束姉さんの自作らしい小説に色々書いてあった。

その内容は秘匿させてもらうが、とりあえず千の顔を持つ英雄を使えば大体のことはできなくもないと言っておく。ついでに、できるからといってやる気があるかどうかは別だと言うことも。

久し振りに左手の衝撃砲の出番。回転をかけて貫通力を増してやると、触手を2〜3本ほどまとめて引きちぎることができた。

しかし、自分の防御はしっかりしているらしく、たっちゃん自身には届かない。見事にガトリングランス【蒼流旋】と肩のあたりに常駐している水の鎧に飲まれてしまう。

そしてその間もたっちゃんによる触手の攻撃は続く。上から下から右から左から前から後ろから何本も何本も何本も。

一本一本は弱々しいからたいしたことはないが、ここまで集まると面倒臭い。人海戦術つてのは本当に面倒だ。

……触手だけど。にゆるにゆると蠢く透明な触手だけど。

……さて、話はいきなり変わるが、ISのシールドバリアを抜く

方法はいくつかある。

まずは零落白夜。俺とちー姉さんの固有技能みたいなもんだな。そして神鳴流の式の太刀。ただしこれはミスるとシールドバリアどころか絶対防御まで無視して操縦者のみにダメージを与えてしまうことがある。

この二つは真似しようと思ってもなかなか真似できない。この世界の人間にはまず不可能だと思ってもらっていい。

ここから先はこの世界の一般的(?)な人間でもできるシールドバリアを抜く方法だ。

三つ目はご存知間接技。なぜならISのシールドバリアは体の外側にしか存在しないから。その上絶対防御も効果が薄い。

ただし、これで与えられるダメージはほとんど操縦者に与えられるダメージ。機体やシールドバリアにはあまり影響は無い。

それから絞め技。ゆっくりと圧迫される系統の攻撃には弱かったりする。ヘッドロック等は結構痛いらしい。

そして最後に、少し違うがシールドバリアの効果の軽減と言う点では十分な効果を持っている技術として、ゼロ距離からの純粹物理攻撃……所謂【寸勁】の、相手との距離がゼロにして攻撃するバージョンがある。想像しにくかったら『羅漢破裏剣掌』でも想像してくれると助かる。

何でいきなりこんな話をするかと言うと……今まさに使ってしまうおうかどうするかを考えているからだったりする。

流石の俺でもものちゃんからずっとエネルギーを供給されながら動き回るたっちゃんの相手をまともにしようとは思わない。

とりあえずシールドバリアをすり抜けながらも絶対防御は発動する

ように寸勁方式を取るか、もしくは零距离で右の衝撃砲を叩き込んでやろうかと思っただけだ。

そこまでの道は荷電粒子砲の出力を上げて、30発分のエネルギーを一発に押し込んで撃ってやれば作れないことは無いはずだ。

たとえそれで作れなかったとしても、千の顔を持つ英雄を使えば荷電粒子砲はいくらでも作ることができるし、何度も何度も繰り返せばいつか穴ができるだろう。そして高速接近からの零距离衝撃砲を撃ち込んで、それでも駄目なら零落白夜で滅多切りにすれば流石に終わる……と思う。

……それでも終わらなかつたら、バスターバロン+シルバースキン+シルバースキン+シルバースキン・アナザータイプ+サテライト30+ブレイズ・オブ・グロウリー+ソードサムライXに、機動力強化用としてモーターギアをつけたまま戦闘を行うことも辞さないつもりだ。

……さてと。それじゃあチート全開する前にやるだけやってみようか。

結果 結構簡単にできた。チート全開はしなくても済んだ。よかつたよかつた。

……けど、予想以上にこぎつた。たっちゃんも強くなってるって事か。これは他のみんなも相当強くなってることを覚悟しとかなないと。

……で、たっちゃんはなんでこんな満ち足りた顔で気絶してるんだらうか？ なんと言うか、乗り越えられなかった壁をついに乗り越えられた時の鈴みたいなお顔をしている。

鈴が乗り越えたのは物理法則の壁だったけど、たっちゃんはいった

い何を乗り越えたのか……気にならないと言えば嘘になるが、わざわざ聞く気にはならないな。こういうのは本人だけが知っていればそれでいいものらしいし。

……かんちゃんの方はどうなったかね？

一回戦、その顛末

気絶したたつちゃんを場外まで運んでから戻ってくると、かんちゃんとののちゃんのバトルも佳境に入っていた。

具体的にどう佳境かというと、かんちゃんのジェノサイドサーカス使用無限ミサイル弾幕とののちゃんの絢爛舞踏使用無限攻性エネルギービーム弾幕の競り合いになっていた。

……… なんと言うか、ののちゃんもかなりチート臭くなってきたよな。この状態のののちゃんを落とすには、エネルギーの供給が追い付かないほどの速度で攻撃を打ち込むか、あるいは一撃で全部削ぎ落とすかのどちらかしかないだろう。

卑怯な手を使うんだったら、束姉さんみたいに遠隔操作でISを強制的に停止させるとか、整備をわざと失敗させるとか……… 事前に薬を盛って戦わずに勝つとか？

……… 試合にならないからやらないけど、手段としては有効だよな。やらないけど。

『手伝おうか？』

『……… いい』

手伝いがいるかと聞いてみたがかんちゃんは俺の予想を外していらないと答えた。

かんちゃんがそう言うんだったら、俺は端からかんちゃんの頑張りをしっかりと見ておこうかな。

そう思った俺は、被害の薄そうな端っこに行っただかんちゃんとののちゃんのぶつかり合いを眺める。

こうしている間にも流れ弾がこちらに来ていて少し危ないので、雪

片式型は右手から、ソードサムライXは左手から離さない。流れ弾はミサイルもエネルギービームも纏めて切り払う。
まあ、シールドエネルギー節約の意味も込めて、雪片式型に零落白夜は発動させてないけど。必要ないし。

頑張れかんちゃん。頑張れののちゃん。俺は二人とも応援してるよ？

side 更識 簪

……………一夏に応援された気がした。なんだかすつごく頑張れる気がしたから、頑張ってみようと思う。

ジェノサイドサーカスの弾幕の密度をさらに上げる。どうせ今までと同じ密度じゃあ箒には届かないし、仮に届いたとしてもすぐに回復されてしまっただけだろうから。

それとほぼ同時に箒のエネルギーの弾幕も密度を上げてジェノサイドサーカスを撃ち落とす。箒の方はこれで限界……………だったら嬉しかったんだけど、箒のことだしきつときつとまだまだ上がある。

……………なんでそう言い切れるのかはとっても簡単。だって私達は、一夏のこと大好きだから。

愛情を体にたっぷりと取り込んだ私達に、できないことなんてあんまりない。本部長や支部長がその体現者だ。

私は……………まだまだその高みまでは登れていない。けれど、それでも私は一夏のこと大好きだから……………負けたくないし、負けられない。

……けど、戦況が膠着しているのも事実。このままじゃあ勝負がつかないし、ついたとしても私か篝のどちらかにかなりのダメージが残されるだろう。

それどころかこのトーナメントが中止になる恐れもある。私も篝も流れ弾は極力抑えているけれど、これだけ量が多ければ『全体から見れば僅かな量』であるはずの流れ弾もかなり多くなってしまふ。大半は一夏が落としてくれているようだけど、アリーナのシールドバリア付近で爆発したミサイルだっていくつもある。

……どうしよう……？

side 篠ノ之 篝

簪の使うミサイルの弾幕に空裂と展開装甲からのレーザーを当てて落としたながら、現状がいかにもまずい状況かを考える。

簪はじり貧だとも考えているのかもしれないが、実際はそうではない。

確かに紅椿は『エネルギー切れ』とはほぼ無縁だ。しかしそれは紅椿がエネルギー切れとは無縁なのであって、私自身の体力や精神力が無限であると言うわけではない。

現に今も終わりの見えないマラソンによって精神的に相当疲れているし、体力はまだ余裕があるとはいえ、ISを使っても疲れるときは疲れる。

理由はわからないが、今はまだ一夏が参加していないからこうして拮抗してられるが、一夏が本格的に参戦してきたら……動けない

私は一方的に零落白夜の光刃に切り刻まれて果てるだろう。

そうなる前に勝負を決めなければならぬ。一夏と戦って勝てる気はあまりしないが、簪を相手にした時の勝率は七割以上。

ここで二割を相手に奪われては泣くに泣けないので、最後の時まで気を抜くことはしない。

……しかし、場が硬直してしまっているのもまた事実。根比べも良いが、どうにかして場を動かさないことには……。

……。

「簪。一つ提案があるのだが……聞いてくれるか？」

「……なに？」

簪はミサイル弾幕を、私はエネルギーレーザーの雨を止める。これでようやく少し気を抜ける。

「わかっているだろうが、このままでは一進一退どころか完全に場が固まって勝負がつかないだろう？ だから、一つ賭けをしよう」

「……内容による」

その答えに少し笑ってしまう。まあ確かに、内容を聞いてから決めるべきだな。間違っていない。

「簡単な話だ。私は絢爛舞踏を使わない。簪はジェノサイドサーカスを使わない。それ以外はすべて解禁の全力勝負をしよう」

「……それは、私との勝負の間だけ……だよな？」

「一夏を相手にそれは『死ぬ』と言われているようにしか受け取れないのだが」

「……死なないと……いいね？」
「本当にな」

これはけして冗談ではないから笑えない。一夏を相手に本気でいかないと言つのは、自殺以外の何物でもない。

簪は解除していた両手両足の装甲を展開し直し、しまっていた薙刀と荷電粒子砲を取り出した。

「……その話、のつた……。ちょうど、ここにコインがあるから……地面に落ちたら開始……」
「ありがたい」

キーン！と弾かれたコインはゆっくりと上昇し、そしてゆっくりと落ちていく。

私も簪もまだ構えていないが、神経だけは異常なほどに張りつめている。

ピリピリとした空気が肌を刺す。シールドバリアと絶対防御で守られているにも関わらず、簪からの観察と警戒の視線が痛い。

……まあ、私からも同じ物が行っているので人のことは言えないが……。

さらに世界が減速する。観客も、空気の流れも、コインの落下も、一夏も簪も私すらも遅くなる。

エネルギーの供給が無い場合の紅椿は、燃費の悪すぎる高機動ISだ。だから展開装甲は使う気はあまり無いし、雨月と空裂のエネルギー攻撃と穿千はもつての他だ。

つまり私の武器は直刀二本となるのだが……かまわない。私はこちらの方が慣れている。

コインが地面に落下したことをハイパーセンサーが伝え、私と簪は同時に加速した。

私は真正面から。簪も真正面から。互いに武器を構え、自分の間合いに入った瞬間に切りつける。

武器同士がぶつかり合って火花を散らす。片手で受けていたら恐らく武器を吹き飛ばされていただろうと思える衝撃に、私の顔が歪む。だがその隙に簪は、私に向かって踏み込みながら腕の下から通した荷電粒子砲を撃ち放つ。

避けることは不可能と判断した私は、簪の薙刀を空裂で払い、雨月に集束したエネルギーを撃ち込まんとする。

赤と白。二色の光に包まれた私と簪。その勝負の結果は……………。

side 織斑 一夏

気絶してしまっているかんちゃんとののちゃんを抱えて保健室へ。どちらも終わりの無いマラソンレースで相当精神的に疲れていたらしく、なかなか起きようとしなない。

……………結果は、俺とかんちゃん組の勝ち。かんちゃんとののちゃんの勝負は、両者ほぼ同時にエネルギー切れで引き分けに終わった。

……………二回戦かぁ……………相手は誰になることやら。

一回戦、第二試合

side 凰 鈴音

簪と箒の真っ正面からのぶつかりあい。あんなものを見せつけられ
たら、あたしだって血が騒ぐ。

あたしは元々熱血バトルとか大好きな方だし、根本の性分は猪だし
ね。

相手は二年生のフォルテ・サファイアと、三年生のダリル・ケイシ
ー。敬称略。シャルロットとラウラの二人はシャルロットのラッキ
ーパワーでシード権を獲得していて、あたし達と先輩方が戦って勝
った方と戦うことになっている。
そしてそこで勝った方が一夏と戦うわけだ。

……とりあえず言っておくと、あたしは基本的に負けず嫌いだ。今
さら言うまでもないことかもしれないが、事実そうなのだからしか
たない。

どんなことでも負けたくない。ISの戦闘でもそうだし、恋に関し
てもそう。

負けを認めない訳じゃない。悪いところを直すかそれを埋められる
だけの長所を作るためにも、負けを認めることは必要だから。

ただ、負けっぱなしは好きじゃない。それだけのことだ。

勝つためにあたしは色々やって来た。鍛えたり、IS動かしたり、
相手の練習のビデオ見たり、セシリアとのコンビネーションの練習
をしたり……思い付くことは大体やってきた。

流石に一夏もやらないような卑怯極まりないことはやっていないけ

れど、結構ギリギリなことはやっている。一応合法だけど。

「一夏みたいな『誰も考え付かないようなこと』はできないけれど、『考えてもままずできないこと』だったら大抵できる。私の一夏に対する愛の力舐めんな。」

まあ、通用するかしんないかはやってみないとわからないけど……なんとかなるわよ。そんな気がするわ。

……問題は、負けないのはそこまで難しくはなさそうだけど、勝つのは結構骨が折れるような気がするのよね。面倒だけど。

「……鈴さん？ あの方々に勝てるイメージはおありですか？」

「無くはないわよ。結構難しいような気がするだけで」

「……そうですか。それはなかなか手間取りそうですわね」

セシリアはあたしの言っている意味をしっかりと正しく受け取ったようで、思考の海に自らを沈めていく。

真面目な時のセシリアはかなり頼りになる。いつもはそれを大貧民とかパズルとかじゃんけんとかにしか使わないからあんまり凄くは見えないけど、それはあたしが言えることじゃないしね。あたしもババ抜きとか籤とかそういうのにしか使わないし。

「……なぜか一夏さんが持っていたあの方々の戦闘記録を見せていただきましたが……あの防御力は厄介すぎますわ」

ポツリと呟いたセシリアの言葉を聞いて、一夏がなぜか持っていた『黒いISとあの二人の戦闘記録』のことを思い出した。

あの二人のコンビネーションによって、あの黒いISは見事に封殺されていた。

攻撃はほとんど当たらない。当たっても上手く逸らされて全然効か

ない。速くはないけど追い付けないし、攻撃には威力がないけど積み重なれば倒れるのはこちら。

……まったく。年の功って言うのは厄介ね。

「……本人達の前で言うてはなりませんわよ？」

「……いくらあたしでも言うていい事と悪いことの区別くらいはつくわよ。確かにいつも空気を読まないのはあたしだけとさあ……」
「わかっていますわ。ほほほほ……」

セシリアはそう笑うけど、セシリアの目がすごい速度で上下左右関係なく泳ぎまくっていた。いつもはあんなに嘘が上手いことから考えると、多分緊張をほぐすためにわざとかなり大袈裟にしてるんでしょうね。

そんなセシリアの優しさを受け、ちょっとだけ笑ってしまう。……きつと、あたしとセシリアだったら大体のことはできるわよね？

ただし、一夏・千冬さん・弾とのガチバトルだけは勘弁ね？ 色んな意味で勝てる気が全然しないわ。

「まあ、爆雷式レーザーファイアをいくつかばらまきながら堅実に行きますわよ？」

「そうね。結局のところそれが一番確実なのかもね」

あたしとセシリアが並んでISを展開する。あたしは甲龍シエンロンを。セシリアは蒼隼ブルー・ティアーズを。

そしてそのままカタパルトに乗って、アリーナの上空に飛び出す。

簀と箒があれだけ暴れ、ミサイルとエネルギービームをばらまき、破壊しつくしたはずのアリーナは既に綺麗になっている。一夏が一

分でやってくれたらしいけど、いったいどうやって何をしたのかはわかっていない。

機械類をイカれさせる一夏の出した霧に包まれ、一分後に霧が晴れたと思っただけ既に直っていた上に一夏もそこにはいなかったと言っただけだからびっくりだ。

まあ、一夏だったらなにやってもおかしくないわね。服の下からあり得ないくらい大きな剣出しても納得できる自信があるわ。

そんなアリーナの空に浮いていたのは、あたし達以外にはもう二人だけ。それがあたし達の対戦相手。

「やーっと来たか。先輩を待たせるとはふてえ奴等だ」

「へ？ 全然太くないっスよ？ むしろ腹回りなんてダリル先輩の方が」

色黒の方の相手、ケイシー先輩がもう一人の方、サファイア先輩の口を片手で掴んで言葉を遮る。あれはかなり痛いわね。

「……………おい、フォルテ？ 俺の聞き間違いだよなあ？ ………………誰の腰回りが太いつて？」

『ダリル先輩っス！』

口を封じられているにも関わらず、サファイア先輩はケイシー先輩の事をすっごいムカつく感じで指差した。しかもわざわざご丁寧にオープン・チャネルで周りに聞こえるように大声で。

……………そう言えば、ああいう人を『勇者』って言うんだっけ？

あたし達は目の前で『ギャアアダリル先輩に襲われるー犯されるー！』「てめえフォルテ！本気でやるぞあ、あん！？」とか言い合っている仲のいい先輩後輩を眺めながら、この二人の危険度をつり

上げる。

こんなコントみたいなことをやりながらもあたし達のことをしっかりと観察し続けている相手に対して警戒を解くなんて事は、臆病で気弱でか弱いあたしにはできるはずもない。

「……………鈴さん？ そんな下らない冗談は」

『黙れ白豚』

「あはうあ！？」

ちよつと罵倒してみたら、セシリアは急に頬を朱に染めて体をくねらせた。まさかこいつ……………一夏だけじゃなくてあたし達にまでM属性を發揮できるようになっちゃったわけ？

「ええ、そうですわ」

まさかの肯定の返事が返ってきてしまった。しかもあたしは声に出していなかったというのに。

ああ怖い。一夏はよく簡単に心を読ませようとするわね。あたしは一夏といつものメンバーとそこにちよつとのプラスアルファを加えた相手以外だったら勘弁してほしいわね。

……………さてと。あつちの方も仲良しの喧嘩が終わったみたいだし、そろそろ始めるとしましょうか。

第二試合の、見物人

side シャルロット・デュノア

二回戦、鈴とセシリアが先輩達と戦っているんだけど……。

「……接戦って言うかなんと言うか……」

「……このままではいつ勝負がつくかどうかかわからんな」

「うん、ほんとにね」

まさか、こんなに強い人達が居たなんて……ビックリするよ。

「……いや、強いつて言うよりも上手いつて言う方が合ってるかな？ 個人個人の強さはそこまですでもないけど、長所を組み合わせること『鉄壁』とも言える守備を見せている。」

けれどそれは鈴とセシリアも負けてはいない。けどこちらは鉄壁と言うより攻性防壁つて言った方が合ってるような気がする。

セシリアが機雷のようにレーザーのスフィアをばら撒き、小規模ながら圧縮したレーザーを使って牽制している間に、鈴がちよこちよここと相手にちよっかいを出している。

わざと隙を作ったり、わざとに見えない隙を作ったりしている鈴に対して、先輩方はまったくその誘いに乗ろうとはしない。

そのくせ鈴が本当に作ってしまったらしい隙には見事に反応し、その度にセシリアがあらかじめ見えないようにばらまいてあったらしいレーザースフィアやセシリアが直接撃ったレーザーに邪魔されずうまく攻撃できないでいる。

……まったく、本当に相手にすると厄介なんだね。年の功……っ

て言うほど年の差は無いけど、それでもかなり勝つのは難しそうだ。
……ラウラのAICが効いてくれればそこま困ることも無いんだけど、それを鈴みたいなお勤とか、算みたいなお配と何かを企んでいる意識の流れとか、簪とセシリアみたいに予測とか、一夏みたいになんとなくで避けられたりする可能性だって無いわけじゃないし。

……うーん……難しいなあ。

「……なあ、シャルロット」

「ん？ どうしたのさ？」

「……もしかしてお前は、鈴達が人間としての常識の域にあると思っていないか？」

「やだなあ、そんなこと」

……。

「……ない……よ？」

「それにしては随分と長い空白だったな？」

「な、なんのこと？ 僕ぜんぜんわからないよ？」

そうさ、鈴やセシリア達が常識の中で生きてるわけ無いじゃないか！常識だよ？ 常識！いつたいあのとときの僕はどこの世界で生きていたんだろっね？ ちよつと気になるなあ！あははははは！

「……」

「見ないでっ！こんな僕のことを見ないでええっ！」

ラウラの視線が僕に突き刺さり、僕はごろごろとピットの床を転げ回るのだった。

シャルロットが慌てているような気配を発しながら……恐らくころごろとピットの床を転げ回っているのを感じとりながら、試合の終わった私は一夏の使っていたピットで鈴達の戦いを眺めていた。どちらも決め手に欠けるその勝負は、なんとなくさつきまで私と簪が演じていた終わりのない弾幕勝負を思い出させた。流石に私と簪ほど周囲に被害を出してはいないが、それでも勝負がなかなかつきそうにないという点は共通している。

……もしかしたら、本当に勝敗は決まらないかもしれないな。中々無いが引き分けということもあるらしいし……また中止等ということも無いとは言い切れない。

そんなことを考えている間に、随分と戦況が動いたようだ。

鈴とセシリアは、上手いこと先輩二人を分断することに成功したらしい。先輩二人からは僅かな感嘆の意思と、戦いを楽しむ思いが感じられる。

その他にも僅かに困ったような気配がするが、恐らく分断された後の事はあまり考えられていなかったのだろう。精々が『可能な限り迅速に合流し、コンビネーションを相手に合わせて修正しながら戦闘を続行』くらいだろう。

……だが、先輩達は個人での強さもかなりのものらしく、単独行動となってもその防御能力と機動の鋭さ・精密さは失われていない。……まったく。私が言える台詞では無いかもしれないが、こうい

手合いは相手にするとなると実に厄介だ。

もし私が戦うとしたら、とりあえず片方を集中して狙って叩き潰し、それからもう片方というようにやることになるだろう。

……まあ、よっぽどのが無い限りはわざわざ戦う気は無いのだが。

空中に投影されている画面を見て、このまま行くと仮定するならば、鈴とセシリアが勝利するだろうと予想する。

二人組の時は綻びをお互いにカバーすることができていた先輩達だったが、一人になるとその穴を埋める相手がなくなるためにかなり脆くなるようだった。

確かにこれなら楯無さんがIS学園最強と言われていたのかもわかる。個人戦最強は楯無さんだろう。

……一夏？ 一夏は最早個‘人’ではないだろう。私達も……一夏の事は言えないかもしれないが。

先輩達は鈴とセシリアにじりじりと押され始め、ついにそのシールドエネルギーの残量が0になる。

これで一回戦は終了だが……何故だろう、この大会はくだぐだになって終わってしまう気がするのだが。

……まあ、いいか。すでに私は敗退した身だし、何があるかと驚きはしない。

例え千冬さんが暮桜を使って参戦してこようが、姉さんがISを六個軍団ほど送り込んで世界を相手に宣戦布告しようが、一夏が急に棄権しようが驚かぞ。

一つ洒落にならないのがあった？ 気にするな。どうせ現実にはならん。

二回戦、……………え？

二回戦は、つい30分ほど前に勝ち上がったばかりの鈴とセシリー対、シード権を得ていたシャルとラルちゃんの戦闘になる。鈴達は二連戦と言うことになるが……………まあ、平気だろ。そう言いきれぬ理由は簡単。だってそのシャルとラルちゃんが、俺の部屋で寝てるんだから。

「ちゃんと棄権してきたから大丈夫……………」

シャルはそう言っところりと転がり、隣で寝ていたラルちゃんを抱き締めた。

「……………んう……………」

「……………く……………」

抱き締めたシャルも抱き締められたラルちゃんも、とても幸せそうな表情を浮かべて眠っている。やっぱり睡眠は世界を平和にする一番簡単な方法だと思ふ。

……………それじゃあ、俺も寝ようかな。かんちゃんと俺も棄権してきたし。ののちゃんの相手が疲れたのかかんちゃんは今もふらふらしてて眠そうだし、俺も疲れたからもう寝たい。

優勝は鈴とセシリーで決定だな。それ以外全員棄権しちゃってるわけだし……………ふあ……………。

もそもそと布団に入り、手近にあった抱き枕を抱き締める。多分シ

ヤルかな？

俺に続いて入ってきたかんちゃん俺の背中に額を当てて夢の世界に行っただし、シャルとラルちゃんはとっくに夢の中。そうになったら俺が寝るのにどんな言い訳が必要だ？

答えは一つ。『必要ない』だ。

と言っわけで、お休み。

side 鳳 鈴音

……なんか、納得いかない。

トーナメントで一応優勝したあたしは、心のなかでそう思っていた。

優勝したのは嬉しい。でも、戦うはずだった三チームのうちまとも
に戦ったのが一チームだけってのはなんか納得できない。

しかも棄権した全員が一夏と一緒に寝てるっていうのもまた気に食
わない。

……ああ妬ましい妬ましい。嫉みがましいパルパルパルパル……

……。

「鈴さん？ 目が恐ろしいですよ？」

「だから何よ？」

「ですから、そのイライラをどうぞわたくしに思いきりぶつけてく
ださい」

「黙れ食肉用養殖豚。屠殺するぞ」

隣でぞくぞくぞくう……と体を震わせているセシリアを軽く流して、あたしは遅々として進まない上にグダグダの表彰式をぼんやりとして過ごすのだった。

……ほんと、早く終わらないかしら。いろんな意味で。

一夏の部屋ではいつものメンバーが勢揃いしていた。

あたし達との勝負をすっぱかしたシャルロットとラウラ。一夏と簪のコンビに敗れた筈。この部屋の主である一夏と、筈との戦闘でかなり疲れていただろう簪。

そして、山のようなぶちか達。

……うん、ここはきっと天国ね。そうに違いはないわ。

床に転がり落ちているぶちか達を布団にして眠る。本当はベッドの上で寝ていたのだろうけど、下にいる一夏達が身動きする度にぼろぼろとこぼれ落ちている。

……あ、ぶちふゆさんも落ちてきた。

床にはぶちかが落ちても痛くないようにかなり柔らかなマットがしかれていて、ぶちか達はもふんっ！とマットの毛に埋まる。

その上にまた別のぶちかが降ってきて重なり、重ねぶちかとなっているところもある。

あたしと同じようにセシリアもぶちか布団に潜り込み、燕ぶちかを抱き締める。

その上に今度はハムスターぶちか（ジャンガリアンだと思う。多分だけど）が降ってきて、セシリアは嬉しい悲鳴を小声で上げてからぱたりと倒れた。

……あたしも寝ましようか。今日は寝るにはいい日だしね。

「……貴様ら、面白いことをしているじゃないか」

……一瞬で最悪の日和になったわ。まさかいきなり千冬さんが現れるなんて……厄日以外のなんでもないわね。あたしはまだ死にたくないのよ。

「……安心しろ鳳。確かに今のお前はぶちかに埋もれ囲まれていて羨ましく、妬ましく、殺した……げふんげふん……替わってほしいと思っではいるが……」

やばいかなり本気で命の危機だ。けどどう頑張ったところであたしが千冬さんから逃げられるわけもなく、あつという間に捕まって無音でお仕置きされてしまうだろう。

逃げられない以上、あたしは千冬さんの決定に従うしかなく、少しだけ怯えながら千冬さんを眺めていた。

……あれ？　なんだか千冬さんがあたしの怖がつてる顔を見てゾクゾクしてるように見えるんだけど……冗談よね？

「ゾクゾクしているように見えるなら、お前の目は異常だ。安心しろ」

「安心していいのか悪いのかわからないんですが……」

「安心しろ」

「はい」

……なんとなく言うか、一夏の背中をふみふみして悦に浸っていたのを見てからずっと思ってたんだけど……千冬さんって実はすっぴいだよ……よね？

「デユノアの尻を食用に追いかけて回していたお前には言われたくはないがな」

「食用じゃありません。観賞用と娯楽用です」

「もっと酷いわ馬鹿者」

あたしの頭をぺしんと軽く叩いてから、千冬さんは一夏のいるベッドに向かっていった。

……どうやらあたしは生きて帰ることができそうだし、それならばちかのほっぺとかお腹とかの感触を感じながら寝るとしましょうか。

一回戦、……………え？（後書き）

次から超外伝及び異伝となります。

異伝では、（基本的には）一夏が様々な世界に跳んで惰眠を貪る話になるでしょう。

今のところ、草案に東方、ゼロ魔、ソードアートオンラインを考え
ております。

……見たいのがあったら、ぜひアンケート風に言ってみたり「こういうのもいいんじゃないか」と言うような感想を送っていただければ、反映されるかもしれませぬ。

超外伝、親子(?) 戦闘 開幕編(前書き)

しばらく超外伝が続き、それから異伝に入ります。

超外伝、親子(?) 戦闘 開幕編

目が覚めると目の前に俺。つまりはそういうことなんだろうと納得してみた。

まあ、実際この世界には何度も来てるわけだし、今さら慌てたりはしないって。

それは目の前の俺も同じようで、目覚めてすぐに焦点を俺に合わせ、て頭を撫でた。

「おはよう、パパ」

「おはよう、百秋」

「お休み、パパ」

「寝るな、百秋」

原作一夏にむにと頬をつままれて起こされる。そしてそのまま一緒に着替えることに。

「……ん？ その手首のってもしかして……」

「？ ……ああ、シロね」

こっちの一夏の視線がシロに向いていることに気づいて、多分こっちの一夏の考えてる通りなんだろうと思いつつ言葉を返す。

「多分パパの考えてる通り、シロは俺用のISだよ？ メイドイン大天災さんの特別製」

「百秋……お前、ISを動かせるのか!？」

「うん。びっくりした?」

にぱつと笑いかけてみると、こっちの一夏はかなり驚いたという顔をしながら何度も首を縦に振っている。

……それはそうとして、今はいったいどの辺りの時期なんだろうか？ たっちゃんが同居してないし、原作でシャルからプレゼントされたはずのホワイトゴルドの腕時計も無いから六巻まではいってないと思うけど、こっちの一夏のISの名前が【白式・雪羅】になってるから三巻以降の話だろうし……。

……直接聞いた方が早いな。

「そう言えば、今日って何月？」

「ん？ ああ……八月の……」

把握。四巻だ。四巻は夏休み中の話だったからこれであってるはず。つまり、いくらでも寝られるってことでファイナルアンサー？

「着替えたんだから寝ようとするな。飯食べにいくぞ」

「……ん」

……ちなみに、金は自腹だ。未来の一夏や束姉さんに貰ったと言って使っている。

……… 実際は千の顔を持つ英雄で偽造してるんだが。便利便利。マジで反則ぎみに使い勝手がいい。

「ほら、行くぞ」

俺は一夏に手を引かれて食堂に向かう。……やっぱりまだちょっと眠いな。

……ふぁ………。

色々あつて、食事の後に一夏と模擬戦をすることになった。観客は一夏ラバーズとこつちの世界のちー姉さん。つまり千冬さん。ついでに真耶先生の七人だ。

この模擬戦は完全に秘匿された状態で行い、この場にいる者以外には知られることはまず無いそうだ。

展開するのはシロ。その内側にクロをさらに展開し、ISスーツの代わりにする。

目の前に浮かぶ一夏は【白式・雪羅】を展開し、雪片式型を構えている。

真剣な顔をしている一夏はかなりかつこいい。みんなが惚れる理由もわからなくはないかな。俺に惚れる理由はわからないけど。

……まあ、いいや。今はなんだかワクワクしてる風な一夏とのバトルにある程度集中しとかないと。

「それでは始める」

「はい」

千冬さんの号令に従って動き始める。取り敢えず突っ込んできた一夏を避けて後ろから荷電粒子砲をどーん。

そう思ったんだが見事に零落白夜のシールドで防がれた。その上左手の【雪羅】から荷電粒子砲の光が見える。

そこで荷電粒子砲同士を真っ正面から撃ち合い、互いに互いの撃つたエネルギー砲を撃ち落とした。

……シロには照準機能はついてないが、撃つだけなら大体の検討は

つけられる。俺にはそれで十分だ。わざわざしっかりと狙って撃つことなんかまず無いし、散弾は元々数をばらまいてなんぼの武器だし。そう言うわけで荷電粒子砲を散弾に切り替え、カチカチカチと連射しながら逃げる。零落白夜の理不尽さは俺もよく知っているからな。そう簡単に食らってやる訳にはいくまいよ。

まあ、荷電粒子砲は直接は効果がないとはいえ、それでも弾幕で視界を塞いで目眩ましくらいにはなる。目が見えてない状態だったら後はそこにつけこんでやればいい。

……例えば、荷電粒子砲の中に白く輝くだけの鉄鋼弾を混ぜて撃つとか、銃が主要武器だと勘違いした一夏が接近してきた所でカウンターの斬艦剣でずんばらり、とか。

ちなみに、白く光る鉄鋼弾はもう装填済み。あとは適当に撃つてれば……

「がっ!？」

……ほら、出た。

side 一夏Another

防げるはずだった弾丸が、白式のシールドエネルギーを一気に削る。全身にぶち当たった散弾が、俺の体に衝撃を伝える。

「パパ？ 俺はパパの手札はちゃんとわかってるんだよ？ 対抗策

の一つや二つや三つや四つや五つくらい用意してて当たり前でしょ？」

「そんなに用意できてんのかよ！」

「……ただし、おかーさんには通用しないのばかりだけど。何回やっても何回やってもおかーさんが倒せないよ？」

「どんだけ強いんだよその人!？」

いやその対抗策の内容は聞いてないけど！

そう思っていると、百秋は不思議そうに首をかしげた。

「……あれ？ パパは俺のおかーさんが誰だか聞いてないの？」

「ああ、聞いてないけど……」

『言つなよ？ 百秋』

「はい」

「ここまで聞かせといてそれは酷くないか!？」

『黙れ』

「はい」

な、なんで千冬姉はこんなプレッシャーをかけてくるんだ!？ 超怖いぞ!？

「…… パパは本当に唐変木なんだね」

「だからなんでだよ!？ いつもいつもそう言われてるんだがワケわかんないぞ!？」

「……… わけがわかっていないから………」

《、パパは唐変木で朴念人なんだよ」

百秋がそう言うと、それを聞いていたんだろう全員の声が聞こえた。

『その通り』

理不尽だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2808u/>

IS～ほんとはただ寝たいだけ～

2011年12月20日23時55分発行